東京帝國大學講師文學士大瀬甚太郎君
高等師範學校助教授　中谷延治君　合著

（近刊）
定價金八拾五錢
郵税金八錢

教授法の沿革變遷を知らざるものは適法の教授を爲すこと能はず。
教授法の沿革變遷を知らざるものは教授法を發見すること能はず。
教授法の沿革變遷を知らざるものは先人の失敗を繰返すに止まる。
教授法の沿革變遷は教授法研究の第一着歩として研究すべきもの。
教授法の沿革變遷は各府縣師範學校の必須教科に加へらるゝもの。
教授法の沿革變遷は教員檢定受驗問題として最重要の位置を占む。
教授法の沿革變遷は今後の夏期講習及各種講習會の必須科目なり。

●發行所

東京市本郷區森川町一番地
育成會
（電話本局二四一四番）

●育成會發行圖書大賣捌所

（東京）東京堂　北隆館　東海信文社

●關西大賣捌所

大阪市東區備後町 吉岡平助　盛文館　其他全國各地に在り

第三 フーイエー氏 **國家教育論** 久津見息忠君解説
定價金四十錢 郵税金四錢

第四 バーカー氏 **統合教授の學** 市川源三君解説
定價金四十五錢 郵税金六錢

第五 ナトルプ氏 **へるばるとぺすたろち** 中谷延次君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

第六 コンペーレ氏 **兒童智德發育論** 篠田利英君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

第九 ナトルプ氏 **社會的教育學** 大瀬甚太郎君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

第十 ラウリー氏 **教育學** 黒田定治君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

第十一 デウリング氏 **系統的教育學** 吉田熊次君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

第十二 ラィン氏 **系統的教育學** 波多野貞之助君解説
定價金四十五錢 郵税金四錢

教育学書解説

菊版二千余頁
分冊十二冊合本
定價金五圓
郵税金四拾八錢

教科書として參考書として受驗用として自修用として如何に本會解說が世を利し學界を稗益せしかは今更敢て喋々せざる所殊に教育學書の如きは既に各地師範學校教科用參考用として採用せられ未だ期年ならずして數版を重ぬるに至る是れ其材料を精選せると其叙述の平易流暢なると其批評の適確妥當なることに歸因せずんばあらず世の此任に當る人希くば一本を供へ以て講學の資とせられよ其要目左の如し

第一
シユライエルマツヘル氏 教育學
大瀨甚太郎君解說
定價金五十錢
郵税金四錢

第二
ヰルマン氏 教化學
熊谷五郎君解說
定價金五十錢
郵税金六錢

第七
フレーベル氏 教育論
東基吉君解說
定價金四十錢
郵税金四錢

第八
ベルゲマン氏 社會的教育學及進化的倫理學
吉田熊次君解說
定價金六十錢　郵税金六錢

菊版二千余頁
分冊十二冊合本
定價金五圓
郵稅金四拾八錢

兒童心理學あり教育適用心理學あり普通心理學あり比較心理學あり精神病理學あり生理的心理學あり經驗的心理學あり實驗的心理學あり箇人的心理學あり社會的心理學あり實にあらゆる學說は皆此中に藏めてもらさず而して詳密なる傳記あり適確なる批評あり叙述親切にして明確材料豐富にして多趣教育者も經世家も學者も母親も看過すべからざるは此書也

第一 サレー氏 **兒童心理學**
黒田定治君解說
定價金五十錢
郵稅金六錢

第二 リボー氏 **感情及注意之心理**
市川源三君解說
定價金四十五錢
郵稅金四錢

第七 キュルペ氏 **心理學**
市川源三君解說
定價金四十五錢
郵稅金四錢

第八 ビチー氏 **人格變換論**
速水滉君解說
定價金四十錢
郵稅金四錢

第三 ミユイアヘツド氏 **倫理學** 桑木嚴翼君解說
定價金四十五錢 郵稅金四錢

第四 パウルゼン氏 **倫理學** 蟹江義丸君解說
定價金四十五錢 郵稅金四錢

第五 アリストートル氏 **倫理學** 桑木嚴翼君解說
定價金五十錢 郵稅金六錢

第六 フイヒテ氏 **倫理學** 深作安文君解說
定價金四十五錢 郵稅金四錢

第九 マツケンジー氏 **倫理學** 雀部顯宜君解說
定價金五十錢 郵稅金六錢

第十 グリーン氏 **倫理學** 西晉一郎君解說
定價金四十五錢 郵稅金四錢

第十一 パウム氏 **倫理學原理** 藤井建治郎君解說
定價金四十五錢 郵稅金四錢

第十二 ヴント氏 **倫理學** 蟹江義丸君解說
定價金四十五錢 郵稅金六錢

菊版二千餘頁
分册十二册
定價金五圓
郵税金四拾八錢

凡ての研究中倫理學程困難なるはなし是れ問題の複雜多様なると學派の見る所千狀萬態なるを以てなり本會こゝに見る處あり上は**希臘**より下は**現代**に至るまで**必讀不可缺**もの十有二を撰び**斯學專門**の**名士**に請ひて**詳密懇切**に解說をなし以て世の**須要**に應ぜんとす蓋し**本書**の**特徵**とする所は**學說**の**奧妙精緻**なるは勿論**著書**の**傳記**及**其學說**の**批評**をも加へ殊に**言文一致体**を以て**平易**に**流暢**に叙述しあれば**初學者**と雖も**趣味津々**たるの間に**蘊奧**を叩くを得べし是れ**本書**の**名**を**擅**にする**所以也**

第一 ヂユヰー氏 **倫理學綱要**
中島德藏君解說
定價金五十錢 郵税金六錢

第二 スチーブン氏 **倫理學**
綱島榮一郎君解說
定價金四十五錢 郵税金四錢

第七 ミユステルベルヒ氏 **道德之起原**
中島泰藏君解說
定價金三十五錢 郵税金四錢

第八 カント氏 **倫理學**
蟹江義丸君解說
定價金四十五錢 郵税金四錢

明治三十四年八月十七日印刷
明治三十四年八月二十日發行

全部定價 上製 金拾四圓
　　　　 並製 金拾貳圓五拾錢
第二卷定價 上製 金壹圓七拾錢
　　　　　 並製 金壹圓五拾五錢

編纂者 井上哲次郎
　　　　蟹江義丸

發行者 石川榮司
東京市本郷區森川町一番地

印刷者 佐久間衡治
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所 育成會
東京市本郷區森川町一番地

印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

書東里外集後

是東里先生與佐野子弟書牘及雜文也。皆通俗文字。易讀且解。蓋先生忠厚之意。藹然言表。使人理義之心。油然興起。是大裨乎世敎矣。吾友服君甫庵。集而刻之。以公諸世。而其意有在焉。爾方今五胡猖獗。海内多事。士之趨時者。率出於詭激。至於性命仁義之學。視以爲芻狗。其所以人膾炙呼號當世者。適足以煽亂耳。服君有慨乎是。故取時人所棄。獨奮而爲之。非其誠出於人。孰能及此。服君世業醫。其術固仁於一鄕。今斯集也。關於世道人心。則又將以醫天下也歟。元治甲子夏六月。佐野富陵里胥關根思問撰。

日本倫理彙編卷之二終

瞻望して、いまだ嘗て堂に升らず。耄廢迷惑して、地に入べし。併しながら、諸君に奉告する所のものは、大抵先正の遺意也。講習の功に於て、小補なくんばあらじ。老生が不肖を見て、其言をあはせて廢棄すべからず。諸君猶强年。斯學に於て、人一己百の功を用ふといふとも、歳月餘りあるべし。勉めざるべけんや。天地萬物唯一身也。諸君の德成らば、即若思が德成るなり。草葉のかげに於て、喜悦雀躍可レ仕候。至祝々々。

十一月廿九日　　東里

柳圃君

東里外集終

里を離れて、父母親族の歡樂を忘れて、一向に他郷の地に安心するものあり。是を弱喪といふ。莊子に見えたり。此弱喪の人は、他人の物語、故郷は樂ある所と聞て歸りたき心はあれども、元來故郷の歡樂を知ること誠一眞切ならざる故に、寒暑を畏れ風雨を厭ひて、發足してもはか〲しく步行もせず、大かたは酒肆淫房に流連沈溺して、多くの日數を費し、其迷亂の果には、傍蹊曲徑に困窮死亡して、父母親族をして悲傷號泣せしむ。是何の心ぞや。今右の事を以て斯學に比すれば、天地萬物唯一身の境界は、眞の故郷也。位なくして貴く、祿なくして富み、仰て愧ず、伏して怍ず、心廣く體胖なり。富貴も淫すること能はず。貧賤も移すこと能はず。威武も屈すること能はず。夷狄患難、入るとして自得せざることなし。天下の至樂也。此郷里に歸り此眞樂を得んと思ふ心誠一眞切ならば、道中の艱難辛苦心を動すに足らず。何の退屈する事あらん。凡他郷の聲色紛華、何の羨むことのあらんや。只是吾儕此境界を見得すること分明ならず。半は信じ半は疑ひ、或は勤め或は惰り、一日暴めて十日寒する如くにして成功あらんことを欲するは、種せずして秋を待なり。是衆人の醉生夢死して他郷異域の悪鬼となるゆゑんなり。彼弱喪の人に異なることなきにあらずや。此患を免れんと欲せば、何を以てせんや。斯學に倦ことなからんのみ。倦ことなきの至りは、誠一眞切なり。誠一眞切なれば、怠倦ことなし。怠倦ことなければ、愈誠一眞切なり。工夫茲に於て、獨木橋をわたるが如し。左右皆深淵也。進むべくして退くべからず。是古の人、戰々兢々として敢て一念の間雜なきゆゑんなり。若思斯學に於て、全く見ることなきにはあらず。只是いまだ己に有すること能はず。其門外に在て

客となる義にて候得共、宿すと云ほどのことならん。此文同じく主二於一家一とよみたきものに御座候。主二於一家一とよむは、註解の辭にて、よみ來りたるものと見え申候。乍レ然宿二於一一といへば、只一宿也。再宿を信とす。主の字は、宿にも信にも、又久しく延留するにも通じて、ひろき辭となるなり。下文遽伯玉司城貞子の上には、於字なし。是は上文に於の字を用て、其義を詳にして、下文は上の例を照して見るべきが故に省略したる文法なるべし。是只愚意のまゝに申進候。舊説は覺レ不レ申候。

九月廿五日　　東里

柳圃君

來喩諄々、席を同して語るがごとし。憂深く情切にして、志氣奮發、人をして興起せしむるものあり。天の將に大任を是人に降んとするや、必先其心志を苦しめ、其筋骨を勞して、其體膚を餓し、心を動し性を忍て、其能はざる所を增益せしむ。いはゆる汝を成るに玉にする也。伏て望らくは、此所に於て目を明し膽を張り、精神を振起して、天意を奉承すべし。徒に放過すべからず。吾志の誠一眞切ならざるを御見得被レ成候は良知也。此良知を致して、吾志をして必誠一必眞切ならしむべし。譬へば羈客の鄕里に歸るが如し。父母に見え妻子に逢て歡樂せんと思ふ心誠一眞切なるがゆゑに、千里を遠とせず、寒暑を畏れず、風雨を厭はず、道路の景にも貪着する心なく、只一日もはやく鄕里へ歸着せんと思ふ心さかんにして、少も退屈することはなき也。又一種の人あり。幼年より鄕

譬ば四方援なき地に於て、大敵にとり圍まれたるが如し。智謀も才智も用ひ樣なければ、前後左右を顧ず、無二無三に其大敵を擊破りて、自ら全せんと思より外の方便はなきなり。今日も此通りに工夫をなし、明日も此通りに工夫をなし、聲色の上にもかくの如く、名利の上にもかくのごとく、貧賤にも退屈せず、患難にも退屈せず、疾痛死亡にも退屈せず、時となく所となく、只此大魔を降伏するを以て務とせざるはなし。力を用るの久して、彼おとろへて我盛なるに至ては、吾本心周流和暢して、人欲私意客氣俗習隱伏する所なし。或は微き萌動するものありといふとも、紅爐上一點の雪ならん。古語に、君子有ㇾ初有ㇾ終とは、身を終るまで退屈せざるをいふなり。百敗志不ㇾ撓とは、漢の高帝戰陣に退屈せずして、四百年の基業を立て得たるを稱美したる語也。老拙が七仆八興の言は、此方の俚言にて候へども、是またよく退屈せずして成功に至ることをいひて、此學に助あるの語なり。其理の極を以ていへば、天地の道至誠無息、是天地の退屈せざるなり。聖人の心純亦不ㇾ已、是聖人の退屈せざるなり。無ㇾ他の義、其廣大深遠なること、かくのごとし。吾輩幼より老に至まで、論語を讀む事數十遍にして、此義を察することは能はず。是誠に程子の所謂、讀了後又只是等人、便是不㆓曾讀㆒也。老拙退屈の病殊に甚しく、不ㇾ堪㆓苦痛㆒候間、同志の爲に憂ることかくの如し。伏て望らくは、人を以て言を廢する事なかれ。諸君え奉ㇾ告度義、此說を第一と存候間、不ㇾ及㆓別簡㆒候。御會同の節、御傳達被ㇾ下、有病苦の藥有、御惠被ㇾ下候樣に、被㆓仰入㆒可ㇾ被ㇾ下候。

一、主㆓於子路妻兄㆒。於の字あると無とに付ての御疑、察入申候。主の字は、彼を主人として我れ

自責之御説、誠意憤發、御懇志察入申候。老拙が憂、全く御同意に御座候。標本之義致ニ承知一候。御發明之處、親切に奉レ存候。拔本之意、一言に可レ斷樣無ニ御座一、費ニ思慮一申候。乍レ然、此間工夫の大病をたしかに見屆候間、左に奉レ告候。此病を除去るは、本を拔の意に遠からざる樣に被レ存候。是は雅語を以て談説致候ては、意思達しがたく候。至極鄙俚の語にて申入候。子路問レ政云々。請レ益。曰無レ倦。此無レ倦の二字、吾儕草々に看過して、聖言の精妙を察すること能はざるもの、數十年也。謹て按に、倦は退屈する也。凡事に於て力を用ひ身を勞して、精神乏しくて、休息せんことを欲するは、疲の字にあたる。草臥たる也。草臥は智愚賢不肖、何れも可レ有事也。惡べからず。故に何事に於ても草臥たる時は、隨分休息して精力を養ひ、精力整て後、又其事を勉むべし。退屈は是と各別也。力を用る事もなく、身を勞する事もなく、精神の乏しき事もなけれども、とかく其事をいやに思ひ、あくび多く出て、吾が私意の好む事のみをなして、氣を伸度思ふなり。是則良心の蟊賊學問の大魔なり。右二ッの者、甚相似たる樣にして、其實大に相異なることかくのごとし。學者分辨明白にして、毫釐の差ひなからん事を欲すべし。此大魔を降伏すること能はずんば、小善ありといふとも、車薪杯水、勞して功なきこと也。其由て來る所を尋ね求れば、只吾が志の誠一眞切ならざる所より出たり。此故に、學者の務は、只吾志誠一眞切なるか、誠一眞切ならざるかと吟味省察して、一息の間斷なかるべし。此患を免るゝの道、只此一方のみなり。智謀を用ゆべき樣もなし。才略を用ゆべき樣もなし。只是無二無三に此退屈の念を攻撃裁斷して、吾が良心の本然に復するのみなり。

一○桃野ゟの一封被遣被下、落手いたし、忝奉存候。又返書遣申候。御届被成可被下候。

一○御工夫の意思被仰下、致承知候。御見得の品に於て誠一眞切に御力を被用候迄に御座候。老拙方ゟ奉告事は、去年以來足下并桃野への書中に於て、大かた餘蘊なく申盡候。尚又反復して御考可被成候。聖人の學は五經、四書、及陽明傳習錄、文錄にて致全備候。他に求むべからず。右の内にて要を求め、又要中に於て至要を求めば、何の足ざるとのあらん。吾儕向來多岐に迷惑せしとは、此所に於て定見なき故也。

一○足下親の命に從て繼室のよし、亦禮の宜也。聖人の學克己復禮のみ也。苟禮に於て失ふ所なくんば、何の罪のあらん。苟禮に於て違ふ所あらば、鰥居獨處すといふとも、罪を逃るゝ所なけん。人子の事親や、禮の中正を精察して是に從ふべし。事爲の末に拘泥して、悦びを失べからず。向者僕足下のためにいふ所のもの、今皆記せず。定ていまだ盡ざる所あらん。

右の外、委細に得賢意可申事も有之候へ共、老拙事小事變御座候て、合原宅を離れ、本月上旬ゟ市中に致寓居候。近日に地を擇び候て、僑庵を移し可申候。此儀に付、人事紛々不得間隙、此御報致延引、且草々中殘候。乍然少も御氣遣可被下事にては無御座候。只通例の俗事にて候。追々可得御意候。恐惶謹言。

八月廿三日　　東里

柳圃君足下

忝、此方にても本望の至、大慶仕候段、呉々も申上候樣にと申候。此以後又時節を以て御出可レ被レ下旨、被二仰下一、忝千萬願望無二此上一候へ共、老身衰微かくの通に御座候へば、此願望は及難き事に御座候。乍レ然又此邊御遊覽の序を以て、合原倉田方え御光臨被レ下、芳子を御覽被レ成被レ下候はゞ、老身事草葉の蔭にて大悅可レ仕候。柳圃金東へも、御對面之節、傳語ども被二仰通一被レ下候由、忝奉レ存候。此間兩所よりの書狀も相屆、近來の便承り申候。此方へ來遊は、いまだ決定の事相知不レ申候。兩所への返書、金東へむけて遣し申候。乍二御世話一御屆被レ成可レ被レ下候。いまだ殘暑甚御座候。御自愛御暮可レ被レ成候。この邊今年の秋成は、近年に無レ之豐實の沙汰に御座候。御地も定て同事にて可レ有二御座一と、御同意目出度奉レ存候。餘事萬々期二後音一、申殘候。御家內皆々樣へ、尙又宜御心得被二仰入一可レ被レ下候。芳子も同事に申上候。恐惶謹言。

八月十六日　　中根孫平

出井雷澤樣

尙々、板野彥右衞門へ御傳書、致二承知一候。是は本國豆州へ參り候て、致二延留一罷在、冬中には歸り可レ申候。其節御傳書可二申聞一候。以上。

貴札忝致二拜見一候。段々涼氣に罷成候。御地は尙更と奉レ察候。先以御家內御揃彌御平安被レ成二御座一、珍重奉レ存候。此方老拙幷親屬、皆々無事に罷在候。賢意安思召可レ被レ下候。芳子幷合原家內へ御加筆の趣爲二申聞一候へば、忝奉レ存候段、尙又宜申上候樣にと、皆々申候。

勿欲速焉。勿助長焉。勿如猫犬自逐其尾而旋轉焉。

五月廿七日出の貴札、七月初相屆、忝致拜見候。貴報早速可仕の所、前書を出し候間、延引いたし罷在、大延引に相成候。いまだ殘暑甚敷候得共、御家內幷御親族樣方御揃、彌御堅勝に被成御座、珍重奉存候。先以先頃は、江戸へ御着船の節、白木や松屋兩隱居御出府、且又江戸表御懇友、一所に連て御留に付、思召の外緩々と江戸に御延留被成候由、御尤に奉存候。幸の時節にて、御親友方御同遊被成、各別の御樂み奉察候。依之五月上旬に御歸鄉被成候由、未甚暑に不至內、御道中彌御平安、御歸着被成、重疊目出度奉存候。於御地、御家內皆々樣初め御親家御親友皆々樣、久々にて御對顏被成、御互に御喜悅の御樣子、致遠察、御同意に珍重奉存候。當地山野の氣色、皆々樣へ御物語被成候趣共被仰下、殊に老身初合原倉田淺野方迄、被入御念御禮御挨拶被仰下、何れも痛入忝奉存候。老拙傳語共、逐一被仰達候趣委細被仰下候通、致承知、御世話千萬忝奉存候。此方相替儀無御座、合原倉田淺野家內皆々無事に罷在候。老身衰微御覽の通にては御座候へ共、暑中さしての困苦も御座なく、打過申候。芳子事別て被懸御心候て被仰下、忝奉存候。夏中より彌全快仕候て、只今にては平常の通、少しも氣遣敷義無御座候。乍慮外御安心可被下候。御禮何分にも宜申上候樣にと申候。粂門家內老母以下閏衞門夫婦倉田夫婦へ、別て被入御念候御加筆、何れも忝奉存候段、よく／＼御禮申上度旨申候。御歸帆の節日より、よく船中思召に叶候段、委細に被仰聞、合原淺野倉田方へわけて御挨拶の趣爲申聞候へば、何れも

一。大川金東御會同の節、御發明の說話、御書中に被二仰聞一可レ被レ下候。恐惶頓首。

六月七日　　東　里

柳　圃　君　足　下

一筆致二啓上一候。暑氣甚敷御座候へ共、御地無二御別條一、御家內御揃被レ成、彌御平安に被レ成二御座一候哉、承り度奉レ存候。此方老拙幷親族、無事に罷在候。乍二慮外一御安心可レ被レ下候。何れも同事に宜申上候樣にと申候。此間桃野より細書疑問到來、篤學の意味書中に拜見、御同意珍重奉レ存候。老拙近來の心事、返書に相認遣申候。御屆被レ成可レ被レ下候。且御一所に御覽被レ成候て、御判斷御教示可レ被レ下候。依レ之足下えの書中は、草々致二省略一候。一二尊初め皆々樣へ宜被二仰達一可レ被レ下候。尙萬々期二後信一候。恐惶頓首。

六月廿三日　　東　里

柳　圃　君　足　下

尙々前書に申遣候笑の字の說も、姑く標を治る論にて、未だ本を拔くの義に及ばず候。此間本を拔の意を見當り候樣に御座候得共、初見覺束なく御座候間、いまだ敢て申語られず候。他日彌信じ得て疑なく候はゞ、委曲に可二奉告一候。

一。七仆八興の義、老身日々存當り申候。足下には如何御座候哉、承り度奉レ存候。桃野えの書中、左の三言を主として申遣候。御熟思可レ被レ成候。

面の節承り置不申、殘念奉存候。其内御閑暇の時分、御書中に御教示可被下候。以上。

五月十五日

東　里

雷　澤　君　足　下

前月廿一日の貴札相屆、忝致拜見候。寒氣甚敷御座候得ども、御揃御平安被成御座候由、目出度奉存候。此方皆々無事に罷在候。御安心可被下候。何れも宜申上候樣にと申候。

一。桃野學問長進の樣子被仰聞、御同意致大慶候。時々御會合被成候て、講習切望可被成と御興味致遠察候。

一。省身自責の思召、御尤に奉存候。御誠篤の御志、察入申候。俄に御答の趣も無御座候間、聊左の通り自身の事を申進候。

一。老拙近來は、一つの笑の字を去るの工夫に於て力を用ひ申候。足下にも試みに御勉御覽可被成候。此笑の字は、夫子莞爾而笑、夫子樂然後笑、人不厭其笑などいふ笑字にては無之候。別に一種の笑字、人不知而己獨知の地に在て、大罪極惡の本根となるものを指て云。唐詩に所謂君王帶笑看といふ笑字是なり。誠實に御省察被成候はゞ、相見可申候。眞によく此笑字を除き去らば、怠惰放肆の日に去て、聖域の道路廓然として障碍なかるべし。悔誕生笑の字を注すること妙なり。御考可被成候。

る所なければ、心はひろく氣はのびて、少も不足も無レ之候へば、此上にていかほどそしり笑とも、毛頭心にかゝることなく、各別の樂みおもひやられ候。義と名とは玉と石となり。取違ひなき樣に擇びわかつべき事に候。

一。聖人の學問は、善をなして惡を去るのみなり。善にてもしかたあしければ、善けがれて惡となれるなり。第一言語の上にて見るべく候。譬いかほどの善事をいふとも、いひかたあしければ、善言けがれて惡言となり、人も信ぜず、自分にもこゝろわるし。然る故に物いふ事を大切に愼むべし。至極尤なることをいふとも、かるはづみにいひはらふべからず。せわしなくいひとるべからず。氣儘にいひはるべからず。此三つことばの病なり。いかなる人にも有レ之かと被レ存候。かるはづみとせわしなきと氣儘なるは、惡心なり。惡心口にあらはれて、ことばのけがれとなり候間、ことばに罪は無レ之候へども、いひぶりあしきゆゑに、うとましき惡言と聞申候。たとへば精白の飯に砂をまぜたるが如し。飯に罪は無レ之候へども、交り物あしく候間、うるさき惡食となり申候。老拙事此病甚く、近頃迄療治の筋相知れ不レ申候處、此間に至り、人に笑はれ恥入候て、やう〳〵に心付申候。夫より以來は、第一に只此病の療治に打かゝり、他意なき樣にと勤申候。段々快く覺申候へ共、幼年より久しき迷ひにて御座候間、やゝもすればとりはづし有レ之候。此惡を恥にくむ事身にあまり候間、何分にも力を盡し、餘命の內本望に叶ひ候樣に可レ仕候。貴公御身の上には、かやうなる病少も見え不レ申、御羨しく奉レ存候。何とぞ學び樣も可レ有レ之候哉、心得樣も可レ有レ之候哉。先日貴

み候とも、ながれゆきたる水の歸りこぬやうに候へば、せんかたもなき事に御座候。但し聖人後悔なし。たとへ過わりとも、すみやかに改られ候へば、後悔になるべき過殘り不ㇾ申、賢人以下は其輕重は有べく候へ共、後悔なき人は有ず。然れども聖人の學を勤る人は、私にかち、過を改め、德を養ひ、天地萬物一體の道理を信じ得るに及ては、夜のあけたるごとく、重荷をおろしたるごとく、盲人の目のあきたるごとく、さぞ心よくうれしく、傷悲も前非も後悔も殘念も、昨夜の夢なり昨日の風雨なり、何の憂ひ悲しむ事あらんや。わかき人兼て此意味を知り候はゞ、末頼しく、學問に退屈なく、精出で可ㇾ申候所、教る人も學ぶ人も、只文字のさたばかりにて、心の安堵を求る事を知らず、空しく光陰を送り、此世を夢の如くにて過去り候事、尙又悲しきものに御座候。老拙事も、近年まで此學問を知らずして、むだに月日を過し來り候。何とぞ餘命之內、此悲をこと〳〵はらし申度き願のみにて御座候。

一。名を好む心は、學問の大魔なり。早く名を棄て實を勤むべし。老拙幼年より名を好むの病深く、近年以來殊の外うるさく覺候へ共、療治の力弱く御座候哉、いまだいえきり不ㇾ申候。名を惜むと申候へば、よき事に聞え候へども、聖人の學者は義を惜み候間、名には頓着不ㇾ致候。名をおしむ心有ㇾ之候へば、事ごとに外聞をかざりて、眞實の心なく、世上のうはさを恐れて、氣遣ひ多し。果には只名のために義をすつるかたに成りゆき申候。たとへ大高名ありとも、義を失ひては、恥しく口惜しく、日夜に心のはらしやうもあるまじく候へば、羨しからぬ事に御座候。只義に於てかけた

日本倫理彙編

一。孟子首章之儀、致承知候。造端は發端とすといふ程の意也。但すといふ辭、爲の字を用たるは、廣き辭にて、輕し。造といふ時は、新に建立するの義にて、重き語也。託始は、託の字請託の託字也。あてはめて賴む意也。義利之辯は、孟子の大主意也。此大主意末篇迄無相違明白にあれがしと、義利の辯を首章としたるは、末迄も貫きて此理を失わざる樣にとあてはめてたのむ意あるなり。是只記者之微意を擧て一書の體を論ずる也。義利の辯に至ては、孟子の精神にて、十分に御省察可被成候。

一。雷澤桃野大川、御別條無御座候由、宜御心得被成可被下候。

一。合原方皆々宜得賢意候樣にと申候。尙萬々期後信候。頓首。

五月十一日　東里

柳圃君

御別れ申候以後、別て長日物靜に、むかし物語にても書しるし、御慰に御目にかけ申度候へ共、いまだ存付候事も無御座、只老拙之身の上に付、此間わたらしき意味有之候故、心得違にては無御座候哉、無覺束奉存候。あらあら左に申上候。思召之旨御示し可被下候。

一。世上かなしき事多き中に、幼年より學文の志なくして過多く、老境に至りてすこし物の道理を聞につけて、昔の過をおもひつらね、後悔限りなきは、かなしき事の第一なるべく候。古歌に「さきだたぬ、悔のやちたび、かなしきは、ながるゝ水の、かへりこぬなり」。いかほどに悲しくなや

書狀出し候へども、いまだ御歸着之便承り不申候。御對面之御序に、宜御心得被成可被下候。雷澤御物語りにて、御地の風景尚又耳目に接候樣に覺申候。殊に往年貴鄉沿地の遊觀、夏木陰之中にて、即此節之事に有之候へば、別ての舊懷、短札之能盡す所にあらず候。老身事愈從離群索居、山水田野之間に散漫して、殘生を養ひ申迄に御座候。尙萬々期後音申殘候。恐惶頓首。

四月廿七日　　東　里

柳圃君足下

尙々陽明書之事、其後何之御沙汰も無御座候間、此方より御尋も不申候。足下にも陽明之學を信ぜられ候事、昔年之通にては無之樣に致遠察候。若果して陽明を以て是にあらずとせば、更に是なるものを得て、心を專らにし志を致し、人一己百の力を盡し汲々孳々として斃れて而して後已むべし。旣に此れを爲す。又彼を爲す。徘徊顧望しつゝ日を曠し時を失ひ、無窮の悔を貽すべからず。歲月流るゝがごとく、大陽再び來らず。此生能幾何ぞや。豈萬物の靈を以て、冲天の翼を屈して、鷄鶩と群をなすに忍んや。念之々々當有盡意無窮。老姉以下芳子迄、何れも宜申上候樣にと申候

前月晦日之貴札恭致拜見候。段々寒氣に罷成候へ共、御地無御別條御揃、彌御平安被成御座候由、珍重奉存候。此方相揃無事に罷在候。乍慮外御安心可被下候。如仰當地松魚最中にて、御嘗中出候。

一。先月十四日に御歸宅被レ成候由、於二江戸一御緣家御別條なく、御内室樣御堅固に御座被レ成、二郎御息災に御成長可レ被レ成と、珍重奉レ存候。御書通之御序に宜被二仰進一可レ被レ下候。御身上之御吉左右御聞被レ成候はゞ、嘸々御悅ひ奉レ察候。此御祝儀も宜奉レ願候。

一。前書相屆申候哉。船路悠遠、難レ量奉レ存候。此方之義、前書中有增得二御意一候間、此度は早々御報まで如レ斯御座候。尙又御連札之御禮、別紙に申上候。恐惶頓首。

四月廿三日　東　里

柳　圃　君

尙々、女兄も宜申上度旨申候。御加筆之御禮も宜申上候樣にと申付候。芳子事日夜膝下に罷在、其御地の御噂のみ申出候て、御なつかしく奉レ存候樣子に相見申候。最早言語より平生之歌曲に至る迄、盡く當地之俗に習ひ申候。孟母三遷之敎、御尤なる義、別て存付申候。以上。

本月五日之貴札相屆、忝致二拜見一候。先以御地無二御別條一御揃、御平安被レ成二御座一、珍重奉レ存候。且又先達て被二仰聞一候公訴之義も、御内々にて相濟申候由、御安心目出度奉レ賀候。此方老身其外皆々無事に罷在候。御安心可レ被レ下候。桃野よりの一封被レ遣被レ下、落手、忝奉レ存候。南遊延引之由申來、大に致二失望一候。先達て正月廿四日の貴札相屆、忝拜見したし候。雷澤よりの壹封被レ遣被レ下、落手、忝奉レ存候。先月末不二存寄一、雷澤預二御出一、久々にて得二御意一、御地の舊事ども承之、致二大慶一候。乍レ併何之嘉興も無二御座一、草々御別申候て、殘念不二大形一。芳子別ての事に御座候。別後

といへども、此事は必あるべし。論語に孔子の事を記して、嘗獨立、鯉趨而過レ庭といひ、他日又獨立云々といふごときは、聖人の靜立と見へたり。二の獨の字を以て想ひやるべし。

二月十九日　　東　里

桃野君。坰圃君。

前月廿四日の御細翰相屆、忝致二拜見一候。如レ仰追日冷氣に罷成候へ共、御兩親樣初皆々樣御揃被レ成、彌御平安に御暮被レ爲レ成候由、目出度珍重に奉レ存候。此地相變義無二御座一、老拙幷芳子、其外親族無事に罷在候。乍二慮外一御安心可レ被レ下候。此方親家の有增、幷姪女緣組迄相調候段。前書照月院迄申遣候段、御聞被レ成御悅被レ下候由、忝奉レ存候。如レ命先々一と通りは大安堵仕候。併事變紛々、其中にに極て處置仕がたき事ども有レ之候て、辛勞の兆相見申候故、舊の勸にて、草庵を營み、休息の處相定め申筈に御座候。來月中には出來可レ仕候。追ては芳子も又私方え一所になり可レ申勢に見申候。委曲の備筆頭に難レ盡候。旅衣、ほしてかわける、程もなし、なほふる里の、雨にぬれつヽ　此語にて萬端御高察可レ被レ下候。

一○蚊帳被レ遣被レ下落手仕候。早速相屆、時節の間に合忝大慶仕候。

一○御身上の義も、委細被二仰下一致二承知一、御同意大慶不レ可レ過レ之奉レ存候。此上猶吏諸事無二間隙一御守り可レ被レ成候。何れともに孝友之筋にさへ相違無二御座一候はゝ、時々宜く御任せ可レ被レ成候。追々御吉左右とも承二相待一候。

し。米を舂もの杵を失て一粒〳〵に擣剥するが如し。是世儒の學支離決裂牽滞紛擾して、終に成功なきゆゑんなり。

明道曰。仁者以㆓天地万物㆒爲㆓一體㆒と。是學て至る所の地位を以ていふなり。天地萬物唯一身は、右の語と本末の差別あり。禮運曰。人者天地の心なり。愚謂く、人果して天地の心ならば、天地は人の身也。聖人より愚人に至るまで、本來かくの如し。學によるにあらず。且又唯一身の義より推て見れば、天地萬物唯一物也。格物は只此一物を格すのみなり。譬ば大木のごとし。其枝葉花實百千萬億といふとも、只是一木也。故に唯一の根を養へば、其百千万億の枝葉花實、盡く盛長せざることなし。是至簡至易の妙法にして、格物の大全也。學者茲に於て見得分明ならば、一書を讀ず一友に交はらず、たとへ深山幽谷海島無人の地に窮居する共、學日々に進て德日々に新ならん。此説前條を反復して、また以て加ることなし。老拙に在て過分の狂言といへども、格致の工夫に於て小補なしと云べからず。老拙近來靜坐を勤候に付、靜立をも致候。古來靜立といふ名目は聞及ばず候へ共、愚意を以て作爲いたし候。靜坐は時を待ち所を擇ぶ事も有ㇾ之候へども、靜立は其差別なく、内にありても外へ出ても、道路を往來するにも、心まかせになるべし。殊に山に登り水に臨む時などは、別ての佳興也。且又靜立は全身を通用するが故に、勉强の氣味も少く、心氣從容として血脉周流し、拘局凝滞の思ひなし。德を養ひ生を養ふに於て、大に益あるべし。立こと久しても、疲れを覺ときは或は暫く物に腰をかけ、或は數歩の所を周旋して和氣を發達すべし。いまだ古人の説を聞ず

一。去年南京人八丈島より江戸えの願書の寫、御慰に致ㇾ進上ㇾ候。舟人賈竪の書札にて御座候へば、中々大方の文辭には比しがたく御座候。併賤人の分限にて此程に御座候へば、士君子の風雅定て觀を驚す事にて可ㇾ有ㇾ之候。以上。

正月五日　　東里

子直足下

御別偏下問の趣、委曲致ニ承知一候。俗人の學を以ていはゞ、讀書を第一義として、字々句々分明に解釋するを成功とすべし。聖學の成功は、是より大なるものあり。經傳の中、斯學の大頭腦を指して示したる所は、讀み易く解しやすく、明々白々として、青天白日の如し。註釋を用ず思慮を勞せずして通曉すべし。只是を擇て反復玩味せば、足ざることなかるべし。無益の文字に於て、讀み難きをよみ、解しがたきを解せんと欲して、精神を費し、光陰を失べからず。大頭腦を見得ざるに及ては五經四書といへども月をさす指の如し。月を見るものは、指を忘て可也。文義に牽制せられて、其本に迷ものは、指を以て月とするなり。象山先生曰。學者も本あらば、六經皆我が註脚也。致眞知は斯學の大頭腦なり。眞知の本體は天地萬物唯一身なり。此本體を提撕すれば、格物の功其中にあり。是則一以貫ㇾ之なり。譬ば米を舂もの唯杵一つに力を用て、億万の粒米盡く精白となるが如し。故に王子晩年の敎、唯致眞知といふのみにして、格物に及ばず。いかんとなれば、此本體を提撕するよを知らずして、更に格物を以て事とするものは、木の根なきがごとく、水の源なきがごと

第に相賴可ㇾ申候。是又門弟當座の挨拶にては有ㇾ之間敷候。成程南郭の意と見申候。先年鳩巢も此說有ㇾ之候。兎角聖像讃は後學の不ㇾ可ㇾ致者也。中庸の語に祖二述堯舜一、憲二章文武一、上律二天時一、下襲二水土一といふ四句を以て、讃語に致し候はゞ、可ㇾ爲二相應一旨、鳩巢物語有ㇾ之候。扨又孔聖讃は、古人の作聖賢像讃に見へたりの內にて擇取り候義も可ㇾ宜候。

一。聖像を設置候は、聖人を尊親する心より起候へば、非禮を以て出納可ㇾ致樣は無ㇾ之候。孔聖は萬世帝王の師に御座候得ば、庶人の家にて意に任せ拜し候ては、褻瀆の罪有ㇾ之、非禮勿論に候。況や平生の書圖のごとく、玩好にはなり不ㇾ申候。至極に禮を以て聖人を尊奉する心に候はゞ、敬して遠るに如はなく候。先祖ゟ傳來候はゞ、家廟に藏置、神主を守の意にて奉守可ㇾ致候。只今新に設置候事は、子孫え累を貽す道理にて候。萬一不肖の子孫有て、達摩布袋の像と一樣に致候はゞ、是今日聖人を尊ぶ心ありといへども、不ㇾ知三所二以尊一ㇾ聖といふべく候間、此間當地の友人の內、江戶にて文王の像を見かけ候間、求め可ㇾ申と語り申候に付、右の通り申聞候て、制し申候。貴兄へも此序申進候。

一。先年世說の義、一口に說破いたし候へ共、此間にては、當地の書會世說を第一に致し申候。至極有用の書にて有ㇾ之候處、先年は不ㇾ存候て、蒙求同事に覺申候。蒙求は誠に小兒の學問にて候。韻語にて記憶に便なるまでに御座候。造語鄙拙にて、文理を成さぬ所も有ㇾ之候。中々世說と同日には申がたく候。

須藤理右衛門樣人々御中

尙々春寒、御地は別て奉ㇾ察候。御自愛御防可ㇾ被ㇾ成候。桃野雷澤への書狀、御使り次第御屆可ㇾ被ㇾ下候。雷澤への書狀、去々年の末より外便にて遣候處、道中にて間違申候哉、相屆申さず候樣子に御座候。相屆候ても甚遲く參着いたし候。夫故外便りを賴み不ㇾ申候間、専ら足下え可ㇾ奉ㇾ賴候。よき御序次第御屆可ㇾ被ㇾ下候。

一。大川君爾御別條なく御重年被ㇾ成候哉。御保養宜御心得被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候。

一。寶龍寺和尙、兩三年以來且方と出入有ㇾ之、去秋中湛院、江戸芝邊に隱居被ㇾ成候由、雷澤より爲二御知一被ㇾ入申候。如何の過失にて御座候哉。定て法中評み可ㇾ申事故に、雷澤方も委曲の沙汰は無ㇾ之と奉ㇾ察候。老拙芳子多年御恩を受申候間、此便を承り候に、驚嘆不二大形一候。

一。老生今年七十、望外の歲月と存候。乍ㇾ然自省の精神氣血を考へ度り候へば、決て今年限りの生命と被ㇾ存候間、去冬東岸の地を擇び墓石を建て申候て、天命を相待居申候、何ぞ記錄の物も有ㇾ之候はゞ、遣可ㇾ申候へ共、何も無二御座一候間、遣不ㇾ申候。傳習錄の跋、兼て遣可ㇾ申候と存候へども、是も亦無益の諍論と心付候間、去年中丙丁に付申候。大人歌一首、是又取るに足らざる鄙言に候へども、いまだ焚るに忍ばず、几上に有ㇾ之候間、此便りに遣申候。御慰み御覽可ㇾ被ㇾ成候。以上。

聖像讃の義、舊冬南郭門弟へ心安者致二出府一候間、南郭へ賴申度旨申遣候所、右の門弟申候は、前々より聖像讃は辭退致し候て只今迄終に著述無ㇾ之候間、申通候儀無用に可ㇾ被ㇾ成候。外の書字は序次

望らくは、今日より只古人の志を立て、俗習の淺陋を一洗し、聖人の實學を御勤被ㇾ成まじく候哉。さして身を苦み心を勞する事も無ㇾ之、甚簡易直截にして、萬物の多き、万事の繁き、萬方の遠き、萬世の久しき、一以貫ㇾ之道理有ㇾ之候。老拙此理を身に得たる事は無ㇾ之候得共、一兩年以來日暮道遠く、身困み心憂て、眞實に古人の書を讀候て、この理を見得する事明白に御座候。乍ㇾ併與に可ㇾ語人も無ㇾ之、只心に存候て日を送り申候。夫故先書にも申進候通り、足下の御出を望み申事切に御座候。願くは春氣和暖になり候はゞ、思召立、御光臨可ㇾ被ㇾ成候。私宅になりとも、別宅になりとも、御自由にいたし可ㇾ申候間、五十日程御留宿の思召にて御出可ㇾ被ㇾ成候。彌左樣に御座候はゞ、老拙事大かた語り盡し可ㇾ申候。江戸の便りも毎日有ㇾ之候間、江戸醫師の藥取寄、御服用被ㇾ成候事もなりやすく御座候。江戸より浦賀迄は、往來ともに海船自由に御座候。江戸にも浦賀にも、手寄御座候間、如何樣にも謀り可ㇾ申候。只今は閑暇の御境界に御座候由被㆓仰下㆒候に付、加樣に申進候。老拙事は、一日の命有ㇾ之候はゞ、一日の學問勤候て、死而後已可ㇾ申と奉ㇾ存候。只此一つの愚見を同志に傳達致し度は、是を婚姻に譬れば老拙は媒妁にて御座候。

改歲御慶目出度申納候。二尊初皆々樣御揃、彌御平安御重歲可ㇾ被ㇾ成、目出度奉ㇾ存候。此方老拙幷皆々無事致㆓加年㆒候。御安心可ㇾ被ㇾ下候。老姉以下合原家内幷芳子、何れも同事に右御慶申上候。圓次右衞門も宜申上候樣にと申候。尙萬々永日可ㇾ得㆓賢意㆒候。恐惶謹言。正月五日。

中根孫平若思

改歳御祝儀無二盡期一申納候。先以御揃被レ成御平安、御迎春可レ被レ成と、目出度奉レ存候。此方相變義無二御座一、老拙幷芳子、無事加年いたし候。御安心可レ被レ下候。右御祝詞得二貴意一申度、草々如斯御座候。芳子も、同事に申上候。萬々永日可レ得二貴意一候。恐惶謹言。正月五日。

柳國君足下　　東　里

尙々寒氣甚御座候。御地は尙更と奉レ察候。萬々御自愛可レ被レ成候。

一。舊臘十九日の貴翰、本月末に相屆、忝致二拜見一候。先以無二御別條一御座候由、珍重奉レ存候。乍二略義一御返書不レ及二別簡一候。去秋中御歸郷以後、御病症種々御難義被レ成候へ共、其後大かた御快御座候由、被二仰聞一、新年に至り、彌御全癒被レ成候段、承度奉レ存候。大抵病を治るの道、藥石の功飮食男女の愼は第一の事に候へ共、其根本を不レ得して、末流の所へ力を用ひ候ては、甚勞して功少く候。根本は吾心體にて候。吾心體光明正大に候へば、藥石の功も成り易く、飮食男女等の欲も克去り、養生の大全と可レ申候。迂濶の論と可二思召一候へども、老生眞實忠愛の心より申進候間、試に御勉可レ被レ成候。泰山より重き性命にて候へば、十分の精神を用て御保養可レ被レ成候。御病身に付、御家事の義、太郎御長成迄に、令弟茂助殿え御寄屬被レ成候由、御尤の御事、御安心奉レ察候。此上は世外に優游し、讀書を以て娯と可レ被レ成旨、誠に塵外の高致、衆人の志羨所に御座候。乍レ然四十一の御齡と被二仰聞一候へば、春秋の富血氣の強、今より以後學問の成功如何程も成就可レ致候所、只讀書を慰み被レ成候て、空く光陰を過し、身心におゐて少の益も無レ之候て、甚惜むべき事に御座候。

幷芳子無事致二加年一候。右御祝儀乍、草々如レ斯御座候。萬々永日可レ得二賢意一候。恐惶謹言。

正月三日　　中根孫平若思

須藤茂助樣　人々御中

尙々、舊臘十二日の貴札相屆、忝致二拜見一候。嚴寒彌無二御別條一御座候由、珍重奉レ存候。爲二歲抄一御祝儀金二百疋被レ懸二御意一、遠境每度被二思召付一、忝奉レ存候。當時歲晩之求責を免れ候而致二大悅一候。

一。其後御學問之御便り不レ承候。無二間斷一御讀書も被レ成候哉。御家業御事多可レ有二御座一候へ共、間隙の時分は御看書御勤可レ被レ成候。何とぞ通鑑綱目全編讀過可レ被レ成候。左樣無レ之候而は、學問の實功知れがたく、自然と世俗の鄙陋に陷り申候。近世の文人不レ辨二菽麥一。温公通鑑を貴びて、綱目を輕じ候事、大方の論にては無レ之候。古今の精義綱目に集り申候。老拙事も、今程は幼年始て書をよみ申候時の意味に復歸致し、綱目を第一にと存候。六十にして六十化すと申候間、段々化々して異樣なるものに成可レ申と存候。所存の外初に復し、悅び申候。

一。南郭手迹御待遠に可レ有二御座一候。ひたもの催促致し候得ども、埒明き不レ申候。わざと持重いたし候哉。但し惡筆故憚り候て、果し不レ申候哉、難レ量候。何れともに、彼が手迹さして奇物にては無レ之候間、深く御望被レ成間敷候。萬一出來致し候はゞ、遣し可レ申候。大かた老拙推量の通りと奉レ存候。俗情の陋劣、大抵此樣に御座候。已上。

一。出る月を待べし、散る花を追となかれ。

一。忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

延享四年正月廿四日

元日

何となく、心のどけき、日かげにぞ、春きにけりと、思ひ知らるゝ。

下毛の諸友にわかれける時よめる。

專にしき、たちわかれつゝ、たゞ衣、いくたび袖の、ぬれんとすらん。
もろともに、はねうちかわし、とぶ鳫の、ひとつ別るゝ、ねをのみぞなく。
出ていなば、此山のはに、すむ月を、ふりさけ見ても、こひしかるべき。
ちり殘る、花は見つゝも、おもひいでよ、なれにし春の、むかしがたりを。
千とせへて、歸りきぬとも、もみおせぬ、松としきかば、うれしからまし。

桃野に答る狀の末に。

數ならぬ、身となおもひそ、かぎりなき、よろづの物は、心なりけり。
すてゝ行、道やあるべき、野も山も、みなあめつちの、へだてなき世を。

書牘

改歲の御祝儀、御同意目出度申納候。御家內御揃、彌御平安御超歲可被成と、珍重奉存候。老拙

惑矣。吾懼ニ學之日遠ヲ於レ仁也。於レ是乎言。丁巳冬中根若思書レ于ニ下毛之泥月菴一。

壁書

一。父母をいとをしみ、兄弟にむつまじきは、身を脩る本なり。本かたければ末しげし。

一。老を敬ひ幼をいつくしみ、有德を貴び無能をあはれむ。

一。忠臣は國ある事を知て家ある事を知らず。孝子は親あることを知ておのれあることを知らず。

一。先祖の祭を愼み子孫の敎を忽にせず。

一。辭はゆるくして誠ならむ事を願ひ、行は敏くして厚からむことを欲す。

一。善を見ては法とし、不善を見てはいましめとす。

一。怒に難を思へば悔にいたらず、欲に義を思へば恥をとらず。

一。儉より奢に移る事は易く、奢より儉に入ることはかたし。

一。樵父は山に登り、漁父は海に浮ぶ。人各その業を樂むべし。

一。人の過をいはず、我功にほこらず。

一。病は口より入るもの多し、禍は口より出るもの少からず。

一。施して報を願はず、受て恩を忘れず。

一。他山の石は玉をみがくべし、憂患のことは心をみがくべし。

一。水を飮て樂むものあり、錦を衣て憂るものあり。

亂困苦する事、眞に猫犬の自其尾を逐て旋轉するが如し。豈以て萬物の靈とするに足んや。其哀むべきよ、いづれか是より甚しからん。錮蔽之言、已むよとを得ざるのみ。凡百の君子、以て孟以て涙とするとなかれ。人を以て言を廢るとなかれ。寶暦壬午季春。中根若思。

學則

聖人之學。爲仁而已矣。仁者。天地萬物一體之心也。而義禮智信皆在其中矣。蓋天下之物。其差等雖無窮。然莫弗得天地之性。以爲其性。得天地之氣。以爲其氣。此之謂一體。是故。自我父子兄弟。以至於天下後世之人。皆吾骨肉也。日月雨露山川草木鳥獸魚鼈。無一物而非我也。則吾不忍之心。自不能已矣。是故。己欲立而立人。己欲達而達人。己所不欲。無施諸人。人之善惡。若己有之。先天下之憂而憂。後天下之樂而樂。是之謂仁。是之謂天地萬物一體之心。其自然有厚薄者。義也。猶影之參差。非日月之所私焉。禮。其節文也。智。其明覺也。信。其眞實也。是心之德。其盛若此。但爲人欲所蔽。而不知其所謂一體者安在也。營々汲々。唯一己之名利是圖。甚者。視其一家骨肉之親。無異於仇讎。況他人乎。鳥獸草木乎。然而。心之本體。則自若也。其感於物也。輒戚々焉。如猶孺子之入井。聞觳觫之牛之類。是已。況於吾父子兄弟。其能恝然乎。譬如雖雲霧四塞。然日月之明。則無以異。纔有罅隙。輒能照焉。聖人之學。豈有他哉。勝夫人欲。以盡是心而已矣。蓋合內外。以平物我而已矣。此之謂爲仁。此之謂好學。於戲。其廣大而簡易。若是矣。彼以文辭爲學者。陋矣。求義於外。

日本倫理彙編

前聖之言かくの如く夫れ粲然として明なれば、程子王子の説も何の疑ふべきとの有ん。明道曰。仁者天地萬物を以て一體とす。己れに非ざるとなし。天地も己なり。萬物も己れなり。天は己が高きなり、地は己が厚きなり、日月は己が明なるなり、四時は己が變化なり、鬼神は己が測るべからざるなり、學者誠に其心を存し其氣を定め、人我の見を去り、意必の私に勝て、眞誠に之を體察せば、天地萬物吾に於て毫末の間隔なきを見て、聖賢の吾を欺くにあらざるとを信得すべし。況や陰陽五行の人にあるもの、天地四時とともに往來變化して、曾て内外彼此の別なし。喜怒哀樂、視聽言動、天地萬物に於て一毫の間隙あれば、斬が如く刺が如く、疾痛惻怛忍ぶべからず。一體にあらずんば、豈かくの如くならんや。是を以て古の聖賢、人飢溺のごとく、一夫も獲ざれば己推して是を溝中に納るが如く、天下之憂に先だちて憂へ、汲々遑々として席を煖むるに暇あらず。故にこの紛冗を求て、以て自ら勞苦するに非ず。只是萬物もと吾が一體なれば、生民の困苦荼毒、いづれか疾痛の吾が身に切なるものにあらざらん。吾身の疾痛をしらざる者は、是非の心なきものなり。程子は學て至る所を以て云なり。禮と泰誓とは聖愚の同く然る所を指て云なり。夫れ天地萬物もと一體なれば、天地萬物もと一物なり。所謂格物は、此一物を格すのみ。此一物を格すとは、其本然に復るのみ。聖人之學、其廣大にして簡易なるとかくの如し。明道之を宋に唱ひ、陽明之を明に和し、天下萬世に示すに宇宙の大全を以てす。其盛德大惠、民得て稱する事なし。吾儕小人凡近陋劣、反復沈痼、此説を聞と云ふとも、井蛙の海を知らざるが如し。臭蟲の冰を疑ふが如し。其一體の中に於て、迷

東里外集

下毛　服部政世集

一體之訓

一體之訓、其由て來こと久し。後儒之新意に非ず。近世以來其說明にして且備れり。亦加ふべからず。今其始を原て以て同志に告ること左の如し。泰誓に曰。惟天地は萬物の父母、惟人は萬物の靈なり。夫れ天地果して萬物の父母ならば、萬物は乃ち天地の子なり。子と父母と一體ならざるもの有んや。禮に曰。人者天地の德也。又云。人者天地の心也。人果して天地の心ならば、天地は乃人の身なり。身と心と一體ならざるもの有んや。心と德と一體ならざるもの有んや。萬物の區にして以て別れたるは、一身の中に於て耳目口鼻首足肩背各其分ち有が如し。或は貴して上にあり。或は賤して下にあり、或は遠く或は近く、或は大或は小、其差等節目得て混同すべからず。然れども精神周流し、脈絡貫通し、疾痛歡樂感觸神應ぜざることなし。是故に上なる者下を愛し、下なる者上を敬し。遠きを忘れず、近きを忽にせず、大に事へ小を字ひ、相助け相安じ、樂むに天下を以し、憂るに天下を以す。是堯舜之治體にして、聖樂の大本大源なり。吾儕こゝに於て心を專にし志を致して、講究體認することを務ずして。末を逐ひ流に隨て、滔々として反らず、日を曠し時を失ひ、遂に以て此の生を虛くするに至る。其以て然る所の者は何ぞや。一體の中に於て自異にして、各其藩籬を高くする故なり。其れかくの如くなれば、人は只是一團の血肉のみ。豈以て天地の心とするに足んや。

日本倫理彙編

東里外集叙

君子之學。善變爲レ貴。變而又變。終歸レ于ニ大中至正一。吾觀ニ東里先生一。殆善變者乎。先生出ニ入乎ニ儒釋一。彫ニ琢乎ニ文章一。晩歸レ于ニ王氏之學一。惜其中壽。而後見下至レ於ニ良知一而止上。使ニ其不レ死數年一。則吾知。其變不レ止レ於レ此也。先生居ニ佐野一久。故鄕人信ニ先生一尤篤。嘗刻ニ其遺稿一。吾友服部甫庵。又取ニ其斷簡零牘一。彙爲ニ外集一。是其積年收ニ拾所レ得。其志亦勤矣。甫庵徵ニ予言一。予惟。先生之德之文。先儒於ニ遺稿之集一。既備論レ之矣。予又何言。但覩ニ斯編取レ輯。皆平生齊楚之語。比ニ諸遺稿之端晃黼黻者一。則其眞又益見矣。故其寸鐵入レ人。或有ニ過レ彼者一。甫庵收拾之功。亦非ニ少補一也。朱子論ニ陸子靜一謂。其精神有ニ動レ人處一。先生亦然。要レ之出レ於ニ躬行心得一者。其言語自別。嗚呼。使ニ先生不レ死數年一。則其變化又何如哉。予喜ニ甫庵之勤一也。聊爲言レ之。

元治甲子秋九月　　館林松島枕石撰

東里外集目次

儒者之所希也。其文之醇深温雅。雄健有餘。而精義不乏。貫天人以爲學。羅古今以爲資實術。出內官尚方之膳。羅水陸之珍。以供易牙之烹飪。而天下之至味具焉。其高出時流。卓然傳於後。而近世能文士。太田錦城佐藤一齋等。擒揚先生之文。不容口。非天下之至文。而名家之評論。豈若是乎。余之祖子直從先生遊。固稱高足弟子。嘗得其文數卷。開雕傳於世。舊板漫漶。殆不可讀。故重用之。而聊論其文如此。

天保九年四月下澣　　下毛後學　須藤子寬識

東里遺稿終

然先生懿行。良可欽尙。柴栗山。予嘗嚴事。私心所不能契。而須藤氏祖孫篤於師弟之誼。又犂然有感乎中。故不辭而綴詹言也若此。

天保戊戌壯月下浣　紫溟古賀煜識

東里遺稿跋

史遷云。擇其言之尤雅者。至哉言乎。夫文章之品。莫如大雅。雖然。非徒剪除俗調以爲雅也。非刋落枝詞以爲工也。必也才雄則識高。資深而養厚。貫天人以爲學。綜古今以鑄辭。乃能超然大雅。異於世之作者。若否。則鄙近而已。淺俗而已矣。明嘉隆之間。李于鱗王元美諸公。務倡古文辭。字々句々。蹈襲秦漢。剽剝左國之文。鈎章棘句。纖佻譎怪。有一二之君子。欲以淸眞矯之。而其摸擬之陋。支離漫衍。殆不可救藥矣。我邦享保之際。東都有一霸儒。主盟騷壇。務倡李王之文。以淺陋之說。驚攪於世之學者。而辭之蕪陋。固不免文妖之目焉。能不爲時習之所漸。而其文雅馴舂容。能宗歐蘇之風者。其唯東里先生乎。先生始爲浮屠氏之徒。一日讀孟子。至養浩然之氣章曰。道在是矣。翻然改悔。盡屛棄其所學。而以古之聖賢爲準的。躬行實踐。立志確苦。不恥於古之賢士。且其學。則邃於經。淹於史。而於天下有字之書。無不披覽。且其文之雅而工。能得歐蘇之意。豈非奇偉卓犖之人。能若是乎。先生及物徂徠室鳩巢之門。於一家之學。大有所裨益。晚年攻王陽明良知之學。得知行合一之理。欲直遡於洙泗之淵源。其學之駁雜。雖不合於古之聖賢。然其信道之篤。立志之確實。近世

議論雄快。而矩度森嚴。漢後之人。無此議論。又無此筆力。實秦漢之文也。下野眞壁藤氏之御園。偶有先生書稿刻板焉。多年不摺。世無知者。頃予門人青山士道遠藤修卿輩。與其族仲友謀之。因摺數十本。再公之於世。請予曾所作後序。然序中間有觸世忌諱者。不欲汎視於他人。故不敢應其請。別附其後畢之。先生以明和二年乙酉二月七日沒。予以是歲三月朔生。先生之沒。距予之生二十四日。而予曾序先生集。今又跋其集。是奇緣也。世之無古學者。既不足知先生。其知先生者。蓋自予與奚。享和元年辛酉三月二十五日。多稼居士加賀大田元貞才佐父。書其書後。庶修其傳。

書東里文集後

嘗原於眞誠。則不事華藻。而人自聽信。發於矜持修飾。則極其圓活之妙。而益來惜致。惟文亦然。果本於大倫至情。則讀之自有不盡之味。斯謂文正軌。如東里先生文集。其庶幾乎。先生詩於制行。不甚尚文藻。晩歲又以所作不滿意而棄之。故存者甚尠。然舉皆清雅可誦。而精力所注。寂在新瓦一篇。纏綿懇惻之情。藹然在目。蓋其長厚之心。實根乎天植。翔擯辭之明暢。又足以道達底蘊乎。晩近文風之壞。集之鋟壽公世者累々。大都還於斡旋頓挫之末。務悅人心目。而誠意索然。讀未竟卷。使人悲臥。爾時乃有如斯集者出。抑亦橫流之砥柱。歲寒之松與柏也。下毛眞藤子直師先生。輯先生遺稿。令可傳。考數殊勤。子直既沒。厥孫子寬。介遠藤生。索跋尾于予。々生之晩也。不逮見先生。且編首有鴻碩柴栗山序。予何必作。

係之以銘。其銘曰。有德行者。必拙辭章。有文才者。行義必涼。文行兼備。唯有先生。先生之文。森嚴而婉。先生之行。淸苦而謹。要其文行。霜天一隼。遺化所存。使人自振。嗚呼先生之德其亦遠矣乎。文政七年甲午冬十月。加賀大田元貞才佐撰。

題跋東里遺稿後

文巧麗者易。而古雅者難。學博洽者易。而簡約者難。行寬縱者易。而確苦者難。雅者。文之極也。約者。學之至也。確者。行之最也。雖然。雅之失也晦。約之失也窄。確之失也刻。若夫古雅而不晦。則深於文者也。簡約而不窄。則深於學者也。確苦而不刻。則深於行者也。今之學者。文貴乎麗。而失於靡。甚至浮華空疎。無復矩矱。學尙乎博。而失於雜。甚至繁蕪叢脞。無復統紀。行貴乎寬。而失於肆。甚至放蕩疎脫。無復名檢。或有意于矯之。鉤章棘句。以爲古也。而不知其晦。隳學師心。以爲約也。而不知其窄。絕物封己。以爲確也。而不知其刻。此三者。其事相反。而其失則一也。蓋性寬縱者。其學必蕪雜。故發諸文辭。則散漫無度。性過刻者。其學必簡徑。故發諸詞章。則窘縮不暢。宜哉。得其中之難也。能兼三難。而奄有之者。特有故隱君子東里先生焉耳。先生之學。能自博。而入約。故其約也簡當。先生之文。能自巧。而入雅。故其雅也古奥。先生之行。能自寬。而入確。故其確也淸苦。是其所以爲一世偉人也。若夫學行姑置焉。如文之古雅。何容易。韓柳之文獨步後世者。不在其巧麗。而在其古雅也。歐蘇諸公。典麗則有。而古味漓焉。何況其下乎。先生之文。其古奥者。如管廟碑。

先生也。先生在佐野。學以講道子弟。德以陶鎔鄉里。是以其流風餘俗如此其美焉。有文翁。而蜀人崇文。有常袞。而閩人習學。先生之於佐野。亦猶文翁常袞之於蜀閩乎。先生伊豆人。姓中根。名若思。字敬父。東里其號也。幼而爲僧。長而歸儒。問文於物徂徠。受學於室鳩巢。皆不可其意。晩歸王氏良知之學。而純如也。先生爲人。高潔清苦。或耕于野。或漁于海。或鬻于市。食己之力。不屑受人之一錢。布衣粗食。穀蒲之安。其所居。結茅於水竹之間。環堵容膝。處之曠然。講學之暇。酌酒咏詩。酣暢竟日。蕭散可愛。然其自律也嚴。故眠食出入皆有矩矱。其待人也寬。故容而不拒。交無畛畦。內乎忠恕。外乎義方。每出入人家。見者肅然改容。然能誨人。諄々深切。誘之於善。唯恐不及。是故。人畏其方正。而亦愛其忠厚矣。育其幼弱。撫字懇到。過其所生。爲之作新瓦一編。其文簡。而其旨遠。至誠惻怛之意。溢乎存歿之間。讀者爲之垂涙。到其它文。皆高古爾雅。宏傑瑰麗。卓然作一家言。先生晏年。學益明。德益高。同貧富。一壽夭。心無外膠。泊然不動。天地萬物。視爲一體。是故。堙厄窮迫。甘受安行。不改其業。先生既不遇於世。其居屢遷。突不黔。席不煖。特在佐野也最久矣。是故。其功德所在。亦以佐野爲最矣。到今佐野人嘗讀書者。皆聞先生之風以興起者也。先生未移浦賀。寄其伯姉而沒焉。實明和二年也。先生沒後六十年矣。佐野人恐其流風餘敎久而湮滅。欲相與藏金買石。建其故居溪山。頌其功德。報之寵靈。且以範後生矣。乃作來屬予以文。予欽先生之文行久矣。於是乎按其狀。擇其大者。錄之以明景仰之意。且

也。下毛之俗。家貧者。擧レ子過二二三人一。則拉レ之。習以成レ風。而不三以爲二異。先生深惡レ之。欲下題二孟母之圖一。屬二諸寺觀一。普諭中之。或曰。不レ如下觀音大士。爲二愚夫愚婦一所二歸向一。依レ之作レ說之爲も易レ諭也。先生以爲レ然。略題下其意觀音抱レ兒圖上。欲三以開諭一。而不レ果。先生多病。欲下依二親戚一以養ち老。長姊在二浦賀一。亦召レ之。先生將レ去。爲二門人一講二論語一。或爲二先生之貧一。謀二之門人一。厚贈二其行一。先生聞レ之。但受二紙扇一。而凡金帛。皆斥不レ納。及レ去無レ可三以爲二盤費一。乞二貸人一而後能發。先生已歸二浦賀一。而游二觀海濱一。飲レ酒詠二和歌一樂焉。時先生年已六十有九。盡廢二經史百家之學一。而唱二王氏致良知之學一。作二大人歌一。又作二人說一。以明二天地萬物一體之義一。明和二年乙酉二月七日。以レ疾卒二于浦賀一。享年七十有二。葬二于海關東顯正寺內先妣之塋一。先生無二妻子一。臨レ終以二門人藤梓一爲二後奉レ祀。所レ撰新瓦一編之外。家無二遺書一。温懼二其德業久而湮晦一也。謹具下所二聞見一行事狀上如レ此。明和三年丙戌仲夏。門人下毛須藤温謹狀。

東里先生功德碣

山有レ玉而木草潤。淵有レ龍而水不レ涸。國有二賢者一而風尙美。是故。觀二枝葉之鬱一焉。則知二寶藏之所レ生矣。觀二雲雨之起一焉。則知二靈恠之所レ潛矣。觀二流風餘俗之隆一焉。則知二賢者之所レ化矣。若夫山童壤朽。則豈玉之所レ殖乎。淵涸水竭。則豈龍之所レ蟄乎。風俗卑陋。則豈君子之所レ過乎。語曰。君子居レ之。何陋之有。豈不レ信乎。下野西偏。爲二安蘇郡一。佐野在焉。其土磽确。而其邑囂爾。然其俗敦篤。人尙二節概一。其中有二彬々乎趣レ學者一焉。是豈非二賢者餘化一乎。賢者謂レ誰。故隱君子東里

乃取所作文章懸投之爐中燒之。藤公譜聞此事大奇之。延請先生往寓之。室鳩巢亦聞其賢欲引致門下。先生素慕其學委質師事。從之加賀數年。享保戊戌自加賀還。居于東都八町堀。無知者。又去如鎌倉居于鶴岡廟側。與其弟叔德共鬻木屐以衣食。適有同居者病。貧無供藥餌。先生書典賣綿繡衣服以資之。亡幾又去遊于東都。僑居辨慶橋講書。先生爲人高潔。不爲利回不爲義攻。故從遊者皆憚之資用乏。則綿絲繡針鬻諸市。又傳竹皮履。人目之曰皮履先生。一日或遺王陽明全書。先生未慢之。假臥讀之。至致知格物知行合一之説。釋然改容曰。所謂孔門傳受之心法。盡在此書矣。何讀之晩也。自是入王學。又移寄門人金信甫寓居于傳馬坊。坊長高木甚好學。親遇甚厚。乃講書于高木氏。其後移居于深川八幡廟前。享保末適遷于下毛植野。講傳習錄于金信甫家。聞者滿室。溫不肯亦幸備與聞焉。先生教人。先實後名。能近譬喩。使人易曉也。曰。讀書者當先觀其大者。譬諸遊觀大都者。但觀其閭閻闠闤之區區。而未嘗觀城郭宮室之壯麗。則謂之能遊大都可乎。又曰。其志道者。誰肯求食。苟得則食。何暇待徊留念。先生母夫人。老在相模浦賀。以故歸省浦賀。館戶埏擬間。浦賀子弟又迎之。乃結廬郡社之側。日講學以誘子弟。邑里向化。延享丙寅如上毛下仁田。寄于高克明家。三月面還。移居天間。其弟叔德。貧而失業。不能鞠其女。乃屬諸西家之婦。而來謀先生。即令速取來。十一月叔德以女芳子來。因託先生而還。時芳子甫三歲。先生日憐之。撫育無不至矣。人皆難之。明年丁卯。作新瓦。所爲芳子

別錄終

東里先生行狀

先生姓中根氏。諱若思。字敬父。號二東里一。伊豆下田人。幼喪レ父。事レ母孝謹。母夫人命レ入二鄕禪寺一爲レ僧。常好二華音一。正德中聞下洛有中善二華音一者上。往見レ之。（平城明德川。先生爲レ僧。往二宇治黄檗山一。師二事悅山一。晝夜精研。唯在レ得二眞面目一。先生讀レ書不レ苟。如有レ不レ通。雖レ歷レ年之久一。必記在レ臆。觸レ事發明。嘗苦二婆子燒菴之則難一レ會。後一日得二其解一。每レ遇二好レ禪者一。爲言レ之。聞者莫レ不二歎服一。）華音者曰。東都有二物徂徠者一。以二博學文章一誘二後進一。且華音自負。我固不レ如也。師鄕去二東都一又不レ遠。就レ彼而學。不二亦便一乎。先生於レ是不レ脫鞋。直赴二東都一。謁二徂徠許一。通レ謁。徂徠見而異レ之。屬二之所レ善寺僧寓居一。先生嘗爲レ文。徂徠半讀而舍レ之。心未二之善一也。謂曰。苟欲レ學レ文。則莫レ若レ讀二左氏及史漢一。先生退取二左氏一。伏而讀レ之。爲二一序一示レ之。徂徠見而善レ之。題二其後一曰。非二復昔日阿蒙一也。後又爲二一傳一示レ之。徂徠大嗟賞。相二顧坐客一曰。如レ是而後可レ稱レ學二左氏一也。由レ是名聲大聞二都下一。與二安藤東壁太宰德夫之徒一。日以二文章一相頡頏。一日先生有レ疾。偃二臥佛殿後房一。將レ養。偶取二几上之書一。信レ手翻レ之。孟子浩然氣章也。反復讀レ之。慨然歎曰。道廣大簡易如レ是。而何茫乎從二浮圖氏之虛誕一。以誤二此生一乎。於レ是始有二還俗志一。然亦未二顯言一レ之。但見二親友一。語輒及レ此。後遂歸レ鄕。請二母夫人一。不レ可。伯父某君頗知レ學。曰。以レ子舍爲レ僧。是棄レ之也。彼今欲二還俗一。是更擧二一子一也。宜下速聽上レ之。夫人以爲レ然。先生大喜。乃又詣二東都一。寺主亦聞レ之。謂曰。聞上座有二還俗之意一。僧人歸レ俗。長二髮人家一。動受二人怪侮一。宜下且在二弊寺一。俟二髮長之後一。隨レ意西東可上也。遂留養二髮寺中一。徂徠聞レ之不レ悅。先生亦稍厭二徂徠之學一。

新。及ニ其克有ㇾ終。然後是聖神。

夫人者天地之心也。故天地者人之身也。萬物備焉。謂ニ之大人一。今之君子。豈無ニ其說一。吾未ニ之聞一。故作ニ此歌一。以請ニ問之一。

其二 四言

天地之心。廓然大公。日月光明。萬物合同。無ㇾ內無ㇾ外。無ㇾ始無ㇾ終。欣合和樂。洩洩融融。何時非ㇾ仁。何處非ㇾ中。勿ㇾ忘勿ㇾ助。勿ニ自相攻一。

人說

吾聞ㇾ之。人者天地之心也。故天地者人之身也。萬物備焉。無ㇾ內無ㇾ外。無ㇾ始無ㇾ終。何時非ㇾ仁。何處非ㇾ中。欣合和暢。浩浩悠悠。此謂ニ宇宙一。宇宙即是人。人即是宇宙。人之大全也。嗟乎宇宙不ニ曾限ニ隔人一。人自限ニ隔宇宙一。謂ニ之小人一。學問之道無ㇾ他。撤ニ其藩籬一而已。知松菴主書ニ此于ㇾ壁。以告ニ同志一。

書ニ傳習錄後一

盡信ㇾ書。則不ㇾ如ㇾ無ㇾ書。如ニ斯錄一讀。性之本體。無ㇾ善無ㇾ惡。又謂。無ㇾ善無ㇾ惡是心之體之類。皆告子之意也。孟子之所ニ嘗闢一也。陽明嘗以ㇾ此爲ㇾ教乎。若果以ㇾ此爲ㇾ教。則學者將ㇾ去ニ其善一。以復ㇾ於ㇾ性。是寂滅也。陽明曰。天命之性。粹然至善者。心之本體也。其所ニ以承ニ孟子一者。是而已矣。豈更立ニ異說一。自相矛盾。以啓ニ天下後世之惑一哉。讀者宜ニ明辨ㇾ之。

夫疾痛慘怛。未嘗不呼父母也。故小辨之怨。親親也。親親仁也。其詩曰。相彼投兔。尚或先之。行有死人。尚或墐之。君子秉心。維其忍之。心之憂矣。涕既隕之。豈不悲哉。若吾所聞。則又甚焉。其民成俗。莫以爲異。視其所生。不啻草芥。既疾痛之。又慘怛之。曾虎狼之不若也。如之何其不怨焉。而未能怨。纔能呱呱。吾甚閔之。雖則閔之。未有以保之也。夫佛憐衆生。如母懷子。其脩德也。以慈爲綱。六度爲目。故世有慈母抱子象。實觀世音也。往往建祠而供養之。將以使人起孝思慈也。余乃效之。新畫其象。祠則仍舊。於是叙其所由。申之以偈。將刻諸石。以貽來者。而未暇也。姑書其略於象側。而藏諸祠。祠曰福聚院。屬寶龍寺。在下毛州三顏山西。偈曰。

父母愛子。無以尚之。服膺寘懷。且喜且悲。造次顛沛。念茲在茲。蠢彼鳥獸。猶能如斯。汝胡不爾。胡不是思。于嗟正士。敎汝以慈。

大人歌　五言

吾聞之先覺。不言久書紳。天地與萬物。渾然惟一人。陰陽爲呼吸。四時是屈伸。分野但虛名。全體靡不均。羲皇未興時。文質已彬彬。中原逐鹿日。岳牧猶同寅。周公不嘗富。顏子胡爲貧。大鵬即蜩鷽。朝菌亦大椿。君子語大者。莫之能具陳。嗟氓之蚩蚩。不知是其身。其身各自私。眇然如輕塵。忿爭析秋毫。禮讓望北辰。吾將若之何。惟在強爲仁。爲仁豈有佗。明德以親民。親民以明德。德明民乃親。民親德益明。猶齒之於脣。勿忘勿助長。日新又日

唯利是圖。不敢怠遑、老而後成、於是乎、居敢使衆。通財天下、坐致千金、錦其衣、玉其食、非潤屋與、古之君子。德盛業廣。百世之下、稱之不衰。非潤身與。人十能之。已則千之、其用力何如也、彼營營者。豈爲貳哉、一日暴之、十日寒之。而欲如此。夫何能爲。君既聰明。而又好學、譬如未貧。而加以勉、他日之富、不可量也、而吾所望猶在茲者、何也。學如不及、猶恐失之。以吾觀之。豈徒千之、雖億萬之可也。

理平

享保九年夏五月、賜州人理平地于城東、以旌其忠、初理平食于吏家。元祿間其主死。主母貞昔年五十餘、理平哀其無告也、欲謀以養之。會州下火。其家與財無子遺矣。理平不得已。乃託貞君於其族屬之在下總者、而己爲人奴、以其給遺貞君、貞君喜其志。視之如子。不樂遠在下總、而還。於是、理平結廬官倉旁、以事貞君、不復遠行。爲官倉傭。以供衣食。無事。未嘗離貞君側、奉養備至。蓋使貞君自忘其窮。優游卒歲者。二十有六年于今矣。官倉吏聞而賢之、尊具其事、以白于朝。故有是命。

儒子曰。吾聞之、性相近也。其相遠者。學之弊也。蓋古之學。將以成德。百行出焉。故學殖也、不學將落、今則不然。爲人而已。何德之能成。詩不云乎。燕婉之求、得此戚施。不若性之、吾於理平。以其不學、爲善學矣。

題婦女身觀世音圖

也。以レ善爲レ惡。仁爲二不仁一。則謂二之何一。曰有レ諸。曰。有二亂臣賊子一。不レ懼二春秋一。而通鑑綱目是懼。懼則惡レ之。乃相語曰。其論慘刻。將レ無二全人一。則使二學者。是非相攻。而害上仁焉。是已。夫全人猶二成人一也。生民以來。其能幾何。若二臧紇之知。公綽之廉。子路之勇。冉求之藝一。文レ之以二禮樂一。乃庶幾乎。及二其至一也。惟聖人。然後可二以踐一上形。綱目之論。不二亦宜一乎。況貶二其惡一。而褒二其善一。寬裕温柔。唯理是從。可レ謂レ仁矣。而謂二之慘刻一。無下乃甚レ於三高與二望夷一之事。將上不レ足レ爲。蓋無レ佗焉。爲二楊雄一悲耳。雄之文章。彼宗二師之一。劇秦美新。乃典二謨之一。而賊雄者其綱目乎。彼焉不レ悲。然雄也幸而早死。鰒魚之餘其末レ臭也。世祖之師。無レ如二之何一。自レ漢至レ宋。浮名赫赫。何悲之有。昔者孔子謂二趙盾賢一。而又賊之視。雄於レ盾。則昭昭也。聖人之道。是レ是非レ非。而天下平。綱目亦然。非二慘刻一也。不レ然。春秋何作。詩不二必刪一。禮樂刑政。將二安用一上之。德雖レ盛乎。功雖レ高乎。亦匏瓜哉。主人笑曰。子豈醉邪。何其譁也。月出皎兮。人皆見レ之。唯無レ目者。乃不レ能レ見。可二與爭一乎。其浮雲哉。吾爲レ之風曰。吁彼蠢蠢者。朝不レ及レ夕。其能從レ龍。客説。既醉而退。壬子秋也。

千之説

友人林君更二名千之一。余所レ擇也。君喜曰。美哉。汲汲如也。其學之則乎。余曰然。富潤レ屋德潤レ身。豈偶然哉。夫爲レ富者。莫レ如二商賈一。而吾與レ君。且莫レ見レ之。其事雖レ小。可二以語一上大。蓋聚二錙銖一。以成二巨萬一。不二亦難一乎。蚤作夜思。任重忍難。暴二露于一上路。食レ甘不レ旨。聞レ樂不レ樂。營營孳孳。

南歸歌

雁北飛兮我南歸。懷佳人兮心傷悲。酒雖甘兮無能爲。

文

黃花園記

草木之華。皆可愛也。古之君子。唯其所遇。而詠歎之。自詩三百。至於辭賦。不其然乎。近世以來。或愛焉。或不焉。雖其所愛。猶擇以遷也。然後。艶麗馨香初專寵焉。其尤者。爲鞠爲蘭。爲海棠。爲牡丹。而好古者。則自若也。詩不云乎。淑人君子其儀一兮。非唯華也。人亦有之。古之民四。士尚志。農務本。工利用。商通財。亦唯其所遇。必不得已。而後或遷。遷則安之。豈在此變彼。朝是夕非。唯利是視。如个之人乎哉。懷高士毅。其園數畝。鞠有黃華。是以爲娛。家世務農。是以厚生。此其所遇既若。而人又能讀書。以知好古。豈屑與个之人伍乎哉。士毅嘗饗諸友於家。余與焉。主人采鞠以爲豆實。酒酣余與士毅語如此。乃呼其園爲黃華。士毅因之。然後已六七年矣。今茲秋。士毅觀鞠於園也。慨然懷舊。乃謂余曰。吾園之名有自來矣。願敘其事。而爲之記。使我子孫莫敢忘焉。士毅名弘。號蘇川。世下毛人。其鄉曰赤阪。赤阪之渠。是爲鞠水。鞠水悠悠。沃士如脊。亦所以名其園也。

秋夜記

主人翫月。因與客飲。酒酣。客歎曰。孰謂趙高佞乎。主人曰。何也。曰。指鹿爲馬。猶其類

帳中酒已罄。君王涕如ㇾ雨。漢軍皆楚歌。妾將ニ抜ㇾ劍舞一。

雜詩。二首。

朝發ニ雲夢澤一。夕出ニ玉門關一。安馳如ニ是馬一。與ㇾ爾倶游觀。
唯有ニ楊子宅一。曾無ニ作賦才一。季路纔一宿。歸去不ニ復來一。

古意

別後蕭條雪始飛。知君相思涙沾ㇾ衣。妾心正似ニ清江水一。流入ニ滄溟一不ニ復歸一。

元日

五更晴雲映ニ翠巒一。新年佳氣雪中存。春盤盡是故人贈。無ㇾ限東風不ニ復寒一。

除夜

人間歳暮惜ニ餘光一。爆竹聲聲空斷腸。今夜含ㇾ情眠不ㇾ得。明朝應ニ復醉中忘一。

冬望

孤村雪霽夕陽遙。千里寒光接ニ九霄一。旅雁不ㇾ知何處宿。大江西去更蕭條。

雪

纔見古人乘ㇾ興來。孤舟歸去恨難ㇾ裁。山陰一夜家家夢。都是北風聲裡回。

送ニ信甫之ㇾ京

客路春寒不ㇾ易ㇾ行。馬蹄幾日到ニ京城一。西山積雪南浦雨。總是老親別後情。

心新望ニ白毫光一。諸天況是皆青眼。相憶無レ端向ニ道場一。

早朝

金闕晴雲昨夜霽。星迎ニ天仗一讓ニ遠暉一。曉鐘聲動催ニ銀燭一。初日影旋映ニ紫微一。萬國衣冠皆北向。六軍車騎已南歸。聖顏有レ喜祈恩厚。五色綵綸下ニ禁闈一。

高子啓將レ來。而未レ果。余年六十。見レ賀以レ詩。故有ニ此作一。不ニ唯以謝一レ之。

漁村西望白雲孤。濁酒何年與レ爾俱。結レ宇蓬蒿惟寂寞。杖レ鄉道路更崎嶇。德音新唱陽春曲。綵筆遙投明月珠。聞道時時乘レ興去。小舟不レ敢向ニ江湖一。

子直成レ室

主人三畝宅。新共ニ菊花一開。若使ニ陶潛在一。應ニ先送一レ酒來。

九日贈ニ滕伯梓一。

客舍黃花酒。不レ見ニ以消一レ憂。何如歸ニ故鄉一。與ニ家人一相酬。

遠望

南天白雲去。北辰鳥飛還。中央數十度。唯有ニ芙蓉山一。

范蠡

人謂ニ鴟夷子一。一心爲レ越謀。誰知會稽時。已思ニ五湖舟一。

虞姬怨

賜一。庶幾遂愛レ日。令二老親復一レ陽。縱見二上林華一。勿レ忘二曠野霜一。

新瓦附錄終

別錄　二十首

門人　上毛　須藤溫校

贈二須藤子直一。

澗水清且深。潺潺淩二青岑一。中有二雙鴛鴦一。相隨發二好音一。時啄二蓴與一レ芹。不三復思二高林一。高林誠可レ樂。奮レ翅一登臨。米實餘二廿囊一。翠葉多二美陰一。但恐罹二矰弋一。別離更傷レ心。何如已旋歸。優游自浮沈。

同二諸友一泛二安蘇沼一。

池頭楊柳多。風動未レ成レ波。四野青山色。孤舟白雪歌。鳥依二深樹一囀。魚傍二綠蘋一過。斜日不二相待一。無レ如二此恨何一。

艸廬成、龜峰禪師賜レ詩。和以謝レ之。

茅屋已成秋色新。黃花紅葉可レ忘レ貧。雲連二山徑一少二行客一。月滿二林間一多二故人一。象外交友隨二惠遠一。石頭趺坐憶二能仁一。望中千里虎溪水。流二入柴門一洗二俗塵一。

艸廬成。大法禪師賜レ詩。和以謝レ之。

老去幽居始有レ常。閑來自覺日漸長。路通二金界一紅塵絕。地接二花宮一碧水芳。客夢忽回二清磬韻一。禪

舟子。以君以臣。操其授几。如子如臣。沒世不忘。至緊采衛。日薦月祀。號爲天神。無人不膂。廟國弗投。立廟作寢。奕奕布列。松柏垂蔭。梅華如雪。使神所愛。勿翦勿折。彼昏不知。以己觀賢。忘德偸寵。謂神亦然。欲樹之威。抵碩其寃。其寃孔碩。不膂左遷。維二三子。寔在天明。事神以禮。克敬克誠。仰贊洪輝。永存風聲。曉爾來世。熟思茲銘。

謁菅相公祠詩。

衡茅露爲苔。蟋蟀鳴爲聞居。幽棲眞與歎。田野誰相知。開軒戀前脩。曳杖望廣畦。廣畦坦且靜。中有菅公祠。鬱鬱松垂蔭。森森梅交枝。就階脩禮容。憑軒想昔時。昔時何罔極。紛紜亂是非。鷺齊欲俱啤。林昏鴟鴞飛。休勳淪西海。遺愛泣群黎。况復流離子。感物心傷悲。仰歎杜華營。俯惜道草萋。風颯颯廿棠。天寒挾縞衣。悵々不能去。含情涕漣洏。聊和巴人曲。以比祝史辭。詣嫌情未已。徘徊報晩暉。

送芳子歸相模詩。幷序。

芳子與余寓於下巳。語在新五。寛延庚午秋。其伯母自鄕里召之。將厚養之。明年春。芳子年八歲。亦欲往焉。遂與其父俱行。余喜芳子之得其所也。欲其克有終也。故作斯詩以覩之

莫春春服成。游子方翱翔。况乃與乃父。攜手歸故鄕。芳草萋以綠。鶬鶊鳴路傍。伯氏既仁厚。故舊亦温良。爾將承其德。永繫于苞桑。此行尤可樂。別離曷足傷。但母之不存。豈不斷中

下。雖レ有ニ讒慝一。將レ無ニ能爲一。不レ虞未レ幾。衆口囂囂。使ニ公西遷一也。然後公之德。可ニ得而觀一焉。何則。吞舟之魚。非ニ溝瀆所一レ容也。棟梁之材。非ニ部婁所一レ有也。騏驥固不下可中以與ニ罷驢一爲上レ駟焉。鳳皇固不下可中以與ニ雞鶩一同上レ群焉。君子固不下可中以與ニ細人一共上事焉。則公之不レ遇レ天也。彼蠢蝡者。焉能使レ之。公固欲レ退。踰レ月三請。非ニ知レ天者一。能如レ是乎。夫唯知レ天。是以弗レ怨。夫唯欲レ退。是以安レ之。但樂レ之。則未也。何以知レ之。誦ニ公之詩一。觀ニ公之禮一。而知ニ其能弗一レ怨也。思ニ其所一レ學。視ニ其所一レ尙。而知ニ其未一レ能レ樂也。自ニ公薨一後。京師屢災。讒人多死。蓋天動レ威以討ニ有罪一。爾而好レ事者。莫ニ之能辨一。乃謂。公爲レ厲以報レ怨焉。朝廷爲レ之建レ祠。然後止也。無ニ乃比ニ諸貝霄一乎。於レ是造ニ怨言一設ニ鬼事一。修ニ怪語一以附ニ會之一。其賊レ德也。奚翅讒口。凡百君子。蓋攻ニ其非一八百年矣。而未レ能レ勝也。今於ニ公之事一。擇ニ其尤大者一。而討ニ論之一。因ニ野史所一レ書。而折ニ衷之一。所ニ以左ニ憚君子一也。下毛之野有ニ公祠一焉。屬ニ天明鄕一。其承レ祭者。松村廣休。出井從陽。松村師文等。實能知レ公。而尊ニ奉之一。乃欲下頌ニ其德一。刻ニ之于一レ石。以諭ニ鄕人一。施中及無窮上也。屬レ予代レ之。辭。不レ許。乃敢然也。銘曰。

旻天靡レ常。作レ威作レ福。夢夢游衍。昭昭來復。儆レ予臨レ女。前倚後伏。非心淫志。進退維谷。今此下民。曾不ニ是虞一。且信且疑。若レ有若レ無。違レ命悖レ德。自速ニ其辜一。遂逢ニ彼怒一。瞻望號呼。維聖及賢。順レ之樂レ之。與倶周旋、莫ニ敢差池一。朝坐ニ廟堂一。夕臥ニ茅茨一。不ニ以レ彼喜一。不ニ以レ此悲一。公之未レ喪。乃伊乃周。執レ圭鳴レ玉。誰知ニ其憂一。遭ニ世罔一レ極。特舟西流。奉ニ命海隅一。不レ怨不レ尤。漁人

將唯賢嬬是賴。亦豈易得哉。僕携芳子以遊清野。西指芙蓉。而告之先人所居。因懷羈旅之悲焉。又圖芳子弱喪而未自知也。乃作歌曰。幸清野兮展袂待。望西山兮悲故鄉。嗟桑與梓兮在彼陽。悠悠昊天兮傷心懷。乃命芳子誦之。他日其思親也。將有以知此情而三復之矣。初芳子之生也。家弟年五十。僕加之三。而皆無嗣。其骨肉之餘。獨芳子在。僕欲玉之。所以作新瓦也。僕死之後。足下將思僕之故。而愍芳子。豈以其遠。而外之哉。庶幾告之以新瓦及此書。所謂韙之以淑。愼其身。使僕無罪焉。嗟乎。結綠縣黎。胡可及也。苟碔石武夫是慮焉。則足下之惠也。僕將拜謝於地下矣。今茲己巳。芳子六歲。子啓其識之。中根若思頓首。

菅神廟碑

夫他山之石。可以攻玉。鳥喙之毒。可以愈疾。佞子之患。可以觀德。何則。彫琢不至。爭尹不全。酬殺不備。瑞釋不除。縲絏不及。至誠不著。是故。獯鬻使豳。大王以興。四國流言。姬公益尊。陳蔡圍解。尼父彌高。若損而益之。抑而揚之。去而就之。天之所以表章其德。而耀諸萬世者。於是乎爲無憾焉。而知天者。有以順之。故古公亶父。來朝走馬。有以安之。故公孫碩膚赤舃。几几有以樂之。故七日絕糧。弦歌不衰。豈翅動心忍性。以弗怨焉乎哉。吾故有丞相菅公。雖未之逮。亦其細也。何以徵之。公諱道眞。字三天。穗日之胤也。昌泰中以儒雅謹愼。爲上及上皇所寵信。其登泰階也。亢首跂踵。聚精會神。穆穆在上。明明在

眺三顏。以節其勞。豈不樂哉。昔者余之寓於江都也。名其所居。曰知松菴。其在鎌倉也。亦如之。寬保壬戌秋。自鎌倉來。居於植野。亦如之。及自植野遷于斯盧。欲更名之。既而又思其所以名。而愛敬之。故不更也。今茲芳子六歲。余慮其遂有行而忘斯盧也。故略記其朝夕所見。以附新瓦之末焉。寬延己巳秋九月。主人中根若思撰。

與高子啓書

子啓足下。前每賜書。求僕所著。而僕未有以應之。經三四年。然後纔進新瓦一本。今進銘及歌各一篇。豈足以適盛情哉。將正諸有道。以貽芳子也。請歷敍其所由。以竭鄙懷。足下熟察之。僕使芳子讀論語及歸去來辭。不敬隱几而歌。顧謂僕曰。君好讀書。將以何爲。僕不能對。乃爲之辭曰。余之讀書也。鹵莽滅裂。曾不成章。聊以爲娛。宜乎其無益也。雖然。亦有一焉。自知而已。自知其愚也。自知其不肖也。夫唯愚。是以自智。夫唯不肖。是以自賢。其保首領以至于今者。無他焉。自知其愚也。故不敢驕。自知其不肖也。故不敢慢。守分從宜。無復營營。或鬻於市。或耕於野。或漁於海。雖未之能樂。亦有以堪其憂矣。苟非讀書。安能如此。使余誠善讀書。則豈止知此哉。於是乎思。惟載籍所有。而詠歎之。因以爲銘。其辭曰。郁郁斯文。如草如木。無細無大。衍曼簡牘。或美或惡。或歌或哭。執圭銜璧。歸馬逐鹿。誰謂世殊。百王在目。誰謂地遠。萬里可掬。嘉賓良朋。實盈我屋。於乎小子。云何不讀。此乃勸芳子讀書爾。其能讀書乎。凡百君子。是師是友。其不能乎。

新瓦附錄

門人下毛須藤温校

知松菴記

下毛之西偏。爲安蘇郡。天明鄕在焉。天明之南。有寶龍寺。背市向野。土厚水深。雖則近市。亦不囂塵。其東南隅。最爲爽塏。知松菴在焉。乃余所居也。延享丙寅秋。諸友作之。是歲冬家弟叔德。女芳子。自相模來。因與余居焉。明年余撰新瓦。以貽芳子。初諸友之將作斯廬也。余與松村周行。周旋鄕內。而擇地焉。又與鄕人謀。然後知此爲最也。遂經營之。不日而成。東西三步。南北二步半。茅茨采椽。甃爲土階。蓽門西出。竹籬四周。除地其內。丈有二尺。以種菜蔬。以暴衣衾。前曰植野。右曰赤阪。民居佛寺。田園丘泉。間以林藪。限以川澤。芙蓉之山。見於其間。春夏繚繞。若有若無。秋冬鮮明。三峰可數。夕陽尤奇。吾不能殫形焉。左則原野。廣運數百頃。黍稷秔粱。麻紵菽麥。吐華垂穎。盈疇掩畔。田父野人。及其婦子。或歌或語。比其乘屋入室也。烏鵲夕集。狐兎晝遊。飄風暴雨。嚴霜積雪。於茲爲盛。使我動心變色。不敢東面。亦奇觀也。東偏之山。數峰參差。衆樹蓊鬱。日月出焉。風雲興焉。是曰三顏。雖不甚高。亦爲名山。前人詠之。三顏之陽。榛藪交錯。煙靄繽紛。旋麓而北。循野而西。余未之詳。斯廬所見。則如此耳。南有物焉。如煙非煙。如雲非雲。徘徊乎莽蒼之曲。隱見乎叢林之間。余嘗怪之。以問於人。對曰。舟也。乃知其有水也。然後。吾所以游日者。莫不備矣。於是乎。與二三君子。會于斯廬。讀書論文。無有晝夜。西望芙蓉。東

下從焉。嗟乎。仲之孝也。不ㇾ踐ㇾ迹。不ㇾ阿ㇾ世。變而通ㇾ之。非二能權者一。未ㇾ易ㇾ及也。

樵者利ㇾ山。魚者便ㇾ水。冬裘夏葛。男唯女兪。易ㇾ此必亂。王公自稱二孤寡不穀一。謙二它人一則僭。陽虎曰。爲ㇾ富不ㇾ仁矣。爲ㇾ仁不ㇾ富矣。此好言也。亦莠言也。公甫文伯死。其母不ㇾ哭焉。疑二其好上内也。論者謂。此賢母也。不ㇾ然。必妬妻也。它如好ㇾ賢之與ㇾ悅ㇾ色同ㇾ辭。習ㇾ儀之與ㇾ善ㇾ於ㇾ禮齊ㇾ名。或美或惡。存ㇾ乎ㇾ人焉。是故。孝子不三自言二其勞一也。忠臣不三自言二其功一也。慈父不三自言二其恩一也。

新瓦終

余欲遺道川先生書曰、若思白、虔阪公執事。欽其德音。賜教實多。若思不佞、斯之未能聞。但獨於市、女耕於野。不敢與士君子齒者、十二年於今矣。況敢狂言、以犯執事之威嚴。雖然、疾痛慘怛。未嘗不呼父母也。執事豈非民之父母哉。願矜其情、不罪其罪、而熟察之。若思聞之、丈夫生而願其有室、女子生而願其有家。此親之所以憂也。夫親憂之、子敢忽然。詩曰、求我庶士、迨其吉兮。可以見其憂矣。若思將以姉之女嫁焉。其未笄也、家貧親病、殆無以鞠之。將屬諸人、以爲後圖。若思不可。乃謂女曰。唯君子能憂人之憂。如已有之。細人不能也。女懼。欲待其人、而後往焉。執事聞之、乃命若思、獻諸藪公。公善遇之。施及其親。是若思雖窮居草莽、然未嘗不被二公之澤也。敢忘其德。今此女也。既以君子爲君女。見其事上也、見其臨下也、見其與賓客言也。皆將國家之憂是憂。而有以解焉。庶其波及、已以慰老親乎。待之十餘年。猶未有家、而年三十矣。君子將聽諸無聲、視諸無形。而爲之慘然也。况其親乎。夫藪公之德。可謂厚矣。若思豈不望其有終哉。又豈不望執事贊襄以卒大惠哉。若思老矣。不得復就下風、而承後命。故敢獻書。以布腹心。唯執事圖之。又與女書、以觀其志。女固止之。故不果也。女名仲。合原勝房之子也。性孝友。以余此舉、爲不已知、乃復書曰、我家多難、老母及弟、實集于蓼。吾所以得救其急者。君之賜也。若使我嫁。將唯人是從。雖欲如此。豈可得乎。是使親得以自爲也。是於親之憂。損其一。而益其十也。何以嫁爲。余未肯從。欲微勸之。乃詢諸周。然後。知其不可以不

遊于斯。何利之有。君子曰。倡而言之。異哉。神信然乎。其將振然矣。

享保辛亥。余在江都。江都油坊。有隱君子。賣卜以食。自號無我。余愛敬之。問姓名。不對。余乃稱之曰司馬子。無我笑曰。子則誰也。其賈生乎。因相親也。明年壬子。暮春之初。余與無我遊於東郊。是日也。霖雨新晴。桃李方華。觀者往往宴于樹下。余謂無我曰。不亦樂乎。乃作詩曰。東野之華。谷風其馥。此有飲酒。彼有食肉。既飽既醉。使我心樂。無我笑曰。彼自樂之。我何與焉。余曰。子以無我爲號。何也。曰。夫子絕四。其一乃無我也。吾將學焉。曰。然則。何以笑我詩乎。夫唯無我也。故無非我也。彼亦我也。此亦我也。彼之所無。此則有之。此之所無。彼則有之。無不足也。烏有餘也。富貴貧賤。壽夭禍福。死生榮辱。於是乎齊矣。孝親敬長。恤民愛物。皆自愛也。攻昧取亂。禁暴遏虐。皆自治也。由此觀之。則彼之樂。豈非我之樂哉。無我歎曰。大哉言乎。自非聖人。其誰能之。曰。何必聖人。雖吾儕乎。亦可勉也。譬如美玉。其小大輕重不同。而其爲寶。則一也。請問其方。曰。難言也。固問之。乃曰。其謙乎。言謙則順。事謙則審。容謙則恭。色謙則和。言順事審信也。容恭色和禮也。信禮爲始。義以節之。勇以守之。寬以居之。德莫美焉。以此事君。以此事父。以此富貴。以此貧賤。以此生。以此死。凡所以者。莫非此也。謂之仁焉。謙之終也。謙能成仁。仁又能謙。謙仁相因。如環無端。然則。雖有我。亦何能。爲是無我也。故天益之。人好之。鬼神福之。可不勉乎。無我說。更號謙齋。而請記於余。辭。固請。乃記之。此其大略也。

治之無效。是以益貧。至賣田以給湯藥。佐與乃為人挫鍼治髮。以本養之。如事老親。如保幼兒。久而益篤。伊平太閔其勞苦也。乃謂之曰。余之未死。爾之力也。德莫厚焉。然而。余疾不可為也。而爾尚壯。雖更適人。不亦可乎。爾其圖之。佐與泣曰。不可。若君之病終不可諱。吾將終身守其居焉。况忍以勞苦棄君哉。伊平太又欲浴奧州巖城之溫泉。以治其疾。而無財以治裝也。佐與借錢於人。得三百文。乃使工作車。工知其志也。為求美材以作之。卒而不受其直。於是佐與使伊平太寢於車。而躬自挽之。欲以適巖城。有二子。皆幼。佐與懷其一。而携其一。則力不足以行車也。請路人助之。又見巨室。輙踵其門。而借役焉。然後能行。乞食於路。路人憐之。助挽其車者衆也。遂得至于巖城。伊平太浴溫泉一月餘。疾愈大半。乃與妻子俱步還吉沼。實享保十九年秋七月也。州法。出其境者。必告諸官。得報而後行。佐與弗知也。及自巖城反。里長以其犯法告吏。吏素聞其賢也。不忍責之。吏具其事。以言于官。官命贖其所賣田。以賜之。且復之終身。

雪婦者。江都漁人之妻也。美而仁。其夫死。人將嬲之。懼。乃食地黃以土酥汁。髮暴白如雪然。人畏之。

元文初。江都橋坊借越。年十五六。美而善歌。富人之子適其家者。相屬於路。一少年尤愛之。數適焉。後惜其費。而不敢也。間一年復適焉。越問之曰。何其濶也。對曰。治業焉爾。曰。何以復來。曰。夢神告余曰。橘園之遊。將利於汝。余敢不勉。極歡而去。越笑曰。神過矣。夫

咨汝芳子。先考亦羇旅。若思不詳其所自出也。家乘所書。則唯其遺言。先妣記之。以語若思爾。考姓中根氏。名重勝。字子義。號武濱。三河人也。延寶間遊于伊津。因家焉。其鄉曰下田。南至于海。海濱淸幽。島嶼可觀。是爲武濱。考樂之。因以爲號焉。正德三年癸巳冬十一月二十九日。以疾卒。年六十七。葬于鄉北本覺寺旁。男子五人。所存唯二。若思及汝父也。一女名克。適合原勝房。勝房江都人也。居於相模。相模之南。有浦賀邑。海關在焉。勝房乃其小吏也。終于浦賀。先妣姓淺野氏。江都人也。若思既失業。不能事。託諸勝房。元文三年戊午夏四月十八日。卒于浦賀。年七十一。葬于關之東顯正寺。又其東。乃鴨居郵也。汝父名孔昭。字叔德。號鴨居。生于下田。家于浦賀。生一男。名淸吉。移于鴨居。生一女。其一乃汝也。汝姊名參。參及淸吉。皆蚤夭。汝母姓齋藤氏。鴨居人也。汝外祖妣。姓前田氏。卒于鴨居。其墓所在。曰不入斗。在鴨居西二里。乃其生處也。汝母及兄。葬于先妣之塋。汝姊墓。在鴨居西德寺。若思字敬父。號東里。下田人也。汝初名珵。及至於斯。吾更之曰芳子。芳之爲物可愛也。子之言嗣也。所以祝汝也。

正德辛卯秋。余適京師。因寓於攝州中山之東。其鄉有寺。曰徧照院。有僧六人。相與采菌于野。多得之。亨而食之。甚美。明日先食者死。背陷而紫。後食者三人。相繼皆死。亦如之。其幼者年十一。曰露身。有嘔飮其湯。疾幾死。

佐與者。常州水戶城東。吉沼邑人。伊平太之妻也。伊平大貧。與妻並耕。後得惡疾。而不能行。

養者親之存也。南山是望。飄風是聞。以相歡也。之烈烈之發發。以為樂也。今則已矣。豈不悲哉。夫孝子之歡、莫大於事親。其悲、莫甚於失親。既有此悲矣。然後思其所嘗歡焉。如之何其不滋甚嗟乎。方有此歡者。不可以不愛日也。其第六章曰。

南山律律。飄風弗弗。民莫不穀。我獨不卒。

有始有卒為穀。乃養生喪死無憾也。夫民不皆穀。而云爾者。豈思古乎。是人也。有始而已。雖欲其卒、不可得矣。天也。若夫衆人、無始無卒。雖或有始。而不能卒。雖或能卒、亦未足以補其始之闕焉。人也。天人之分、君子擇焉。吾又聞之。善事父母為孝。夫謂之善事焉。則可以見其所及者廣且大、非唯於父母之躬言之也。天子之於天下、非此不平。諸侯之於國、非此不治。其教人也、此以貫之。蓋君不君、非孝也。父不父。非孝也。兄不兄。弟不弟。夫不夫。婦不婦。凡非禮非義者。皆非孝也。何以言之。有一於此。則父母不悅。父母不悅。可謂之善事焉乎。是故。在彼無惡。在此無射。諸子百氏。君子小人。中國夷狄。皆以為上。而無間然者。唯孝為然。善之善者也。美之會也。德之宗也。依乎宗。則不亂矣。取乎會。則無闕矣。觀乎著。則不昧矣。汝其勉之。嗚呼、我之與汝語也。日暮途遠。唯恐失之。故於其言、曾不顧弱之不逮也。他日將為汝笑。而掩面於地下。吾於是乎。且懼且喜。其懼者、吾有罪焉。其喜者。汝頗啓明。將能讀書稽古。以察我之非焉。然後、吾言可得而笑也。

至。

我生之初。唯親是賴。親之衰也。唯我是賴。我以親存。親以我終。是我與親相爲命也。親日衰。我日壯。親不自憂其日衰之憂。而樂我日壯之樂。我敢不憂親之憂。而自樂其樂乎。是以。孝子無獨樂焉。有獨憂焉。夫舜之憂。親不與焉。所謂獨也。天下之物。無以解之。及與親偕。而後能樂其樂也。將以忘天下。天下猶可忘。而况其餘乎。作此詩者。親不在焉。亦獨也。故自以爲無父何怙。無母何恃。出入惸惸。是爲鮮民。鮮民無樂。不如死也。極言其憂耳。嗟乎。不能憂此憂。安能樂此樂。其所樂者。皆可憂也。其所憂者。不足憂也。憂孰甚焉。

其第四章曰。

父兮生我。母兮鞠我。拊我畜我。長我育我。顧我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。

生我鞠我爲綱。自拊我至於腹我爲目。目下有目。綱上有綱。綱無始。目無終。非昊天無以稱焉。此章之義。縝密宏博。實爲罔極。請擧其一。以爲準焉。夫親之拊我也。或笑焉。或泣焉。或歎息焉。皆有其容。有其色。有其聲。有其所由然。淵淵而湊。源源而來。靜言思之。懷抱之樂。膝下之驩。其宛然也。餘皆類此。故古人謂。親既沒者。若誦是詩。而不流涕。非人子也。豈不然乎。其第五章曰。

南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。

告汝芳子。吾每讀詩至蓼莪篇。未嘗不潸焉出涕也。竊自謂。如王偉元。亦猶是乎。既而考其所以然。則雲壤耳。蓋偉元之不得事其親也。與作此詩者同情。而又甚焉。雖然。天實爲之。謂之何哉。我則異於是。雖得事親。而不事焉。高舉遠遊。以失時矣。及讀書考文。以知其過。而欲改之。則親不在矣。於是乎泣。無以自慰。豈得與王比乎哉。吾將使汝三復是詩。以爲則焉。庶無與我同乎。夫事親。雖男女異宜。然其欲無父母詒罹。而已無悔焉。則同也。其第一章曰。

蓼蓼者莪。匪莪伊蒿。哀哀父母。生我劬勞。

孝子之詩。是篇爲最。是篇之莪。是章爲要。夫舜之孝。天下大之。而舜自視欲然。所以爲舜也。作此詩者。其庶幾乎。比之於莪。實其蓼蓼者也。而自以爲蒿。亦舜之心哉。蓋有是心。斯有是言。故曰。哀哀父母。生我劬勞。且讚親之德。以昊天罔極。然後。萬世莫以尙焉。而凡事親者。皆受其賜矣。舜爲至孝。是人次之。其第二章曰。

蓼蓼者莪。匪莪伊蔚。哀哀父母。生我勞瘁。

夫親之憂子也。日新月長。子之幼也。血氣未定。師傅未訓。聞見未多。猶有望焉。及其壯也。將唯其疾之憂。若猶未也。其何望乎。身既衰矣。子又如是。將以憂終。豈得不勞瘁乎哉。蔚大於蒿。勞瘁甚於劬勞。蒿爲幼弱。蔚爲壯大。可以見其辯矣。其第三章。曰

缾之罄矣。維罍之恥。鮮民之生。不如死之久矣。無父何怙。無母何恃。出則銜恤。入則靡

者。姑以所聞。有五人焉。井上通內史桃。其三人。則吾忘之矣。今欲以汝六之。豈不難哉。吾舍其易。而難是圖。所以敬汝也。人之言曰。婦人女子。抱見爲多。焉用讀書。吾敢以此待汝乎。夫載籍極博。害讀害否。譬諸木焉。詩書爲根。論語孝經爲幹。左傳國語史記漢書。其枝葉華實也。是爲綱領。不可不讀也。其餘不必讀焉。不必不讀焉。以成德者上也。以知恥者次也。以爲娛者。又其次也。吾豈責汝以其上者哉。雖然。以爲娛之至。可以知恥。知恥之至。可以成德。吾豈不望諸汝哉。吾聞之。牝雞無晨。陰不侵陽。女之節也。無非無儀。唯酒食是議。婦之分也。安分守節。謂之懿德。昭之脩之。是爲善讀書矣。

咨汝芳子。君子之愛子也。敎之以義方。弗納於邪。邪之所自。或在於親。可不愼與。今世之人。大氐不敎子。其敎子者。則已甚矣。往往責駑駘以千里。不死則病矣。況無諸己。而求諸子。强聒不舍。繼之以怒。是犯義易方也。將何以敎之。然而。不納於邪者鮮矣。

夫人品不齊。上下差池。其上者。不待敎也。其下者。不可敎也。唯中人。不可不敎也。且以文王之子言之。武王周公爲上。非敎而然也。管蔡爲下。非不敎而然也。其餘則若而人。是敎而然也。不敎豈能然乎。是爲中人。中人又有差。上下亦然。譬諸草木。區以別矣。而文王之敎之也。如時雨化之。故被其澤。或多或少。或淺或深。皆自取之爾。安得而齊之哉。由此觀之。武王周公。雖無文王。猶興者也。若管蔡。則雖有文王。亦無如之何矣。凡敎子者。可以見其則也。詩曰。儀刑文王。萬邦作孚。汝其識之。

愛嬰兒者。大氏不名其物。或爲之貌。或爲之聲。以開喻之。不然則重言之。手曰手手。乳曰乳乳。寢曰寢寢。起曰起起之類。是已。若夫謂鼓墳墳。重言其聲也。謂食甘甘。重言其味也。謂溺津津。重言其貌也。凡如此類。皆將審其實以誨之。豈所苟哉。是謂幼幼。若嬰兒惡之。則不然也。嬰兒化之。故其所言。乃其所聞。今汝不謂溺津津。而謂之小便。如成人然。則嫗之與汝言也。可以見矣。其驗三也。我之使汝父迎汝也。欲其速行。故言汝之窮苦。如親見之。汝父未之必信。及至於西家。而後願我言。則如合符節。其驗四也。嫗之蚩蚩。莫非嫗也。以此知彼。何難之有。詩不云乎。他人有心。予忖度之。況嫗之心。我固有之。因忖度之。是執柯以伐柯也。夫豈遠哉。其驗五也。推此五驗。以考其實。而比諸眞。不亦宜乎。始吾不欲言之。難彰其惡也。雖然。是之不言。汝之患不著。汝之患不著。汝父之所以憂汝者。不可得而見焉。則難責汝以孝。亦將惟庸罔念。又安知其憂且危。而不忘哉。若乃因斯言。宿怨於西家。則非吾所以言之意也。戒之愼之。況嫗之鞅鞅。吾與汝父爲有責焉。豈得專歸咎於彼乎。汝之所遇命也。其所不遇亦命也。不知命。無以爲君子也。

咨汝芳子。吾欲汝之讀書也。苟不讀書。無以爲娛。無以爲娛。求之不已。能無過乎。且吾所以語汝者。亦唯讀書而後可考也。不然。非徒無以爲娛。又將不自知其初矣。今之婦人。雖或讀書。然其書皆國字方言。非吾所謂書也。於讀之乎何有。吾未見其眞能讀書

人迎汝。而賜汝飲食者。此豈汝之所敢望哉。比相模時。實爲天淵。汝於是乎氣盛志佚。漸以驕恣。欲行遠也。欲升高也。於衣有所恥焉。於食有所擇焉。亂我籩豆。遷我書策。毀我縹瓷。拔我錦葵。使我不遑跪處。吾雖爲之艴然作色。而不恤焉。提我耳。彈我鼻。視我如偶人然。汝之未及誨也如此。若欲待其可誨而後誨之。則吾與汝父。墓之木拱矣。其爲憂也。何啻饑寒。吾故曰。大於前日哉。汝能讀書以考吾言。然後思汝父之德。則將知其眞。昊天罔極。雖百汝身。然未足以報之矣。汝其念哉。毋貌貌爾。毋訑訑爾。愼而德。祗而載。勿從非彝以辱吾言哉。及爲人婦也。順而舅姑。敬而所天。宜而室家。使而子孫有所衿式。則汝父之憂。可得而解焉。然後。於其德纔爲無違。此汝之孝也。

咨汝芳子。吾聞之。君子樂不忘憂。安不忘危。是以能安且樂。小人反是。吾將以君子期汝。汝亦不以自期乎。日汝父之來與我謀也。離汝四十里。又無汝外祖母之保護汝也。則嫗何憚。而不逞其虐乎。此乃委汝於狼也。夫嫗陰虐汝。而陽愛汝。故雖汝父數適西家。然未必知其詳也。而我奚以察之於四十里之外。如視諸掌哉。苟無以爲驗。汝將謂。我誣人。而不之信。故極言之。汝之初至於斯也。吾欲察西家之事故。問汝嫗何爲。汝乃瞋目切齒。以爲其怒己狀。且目指其頂及手足曰。此嫗所拳。此嫗所爪。吾熟視之。其瘢痕猶有存者。其驗一也。孩提之時。記性未定。其於前事。甚喜者記。甚怒者記。甚懼者記。不然則否。今汝所記。於嫗爲多。且戲汝曰嫗來嫗來。則變色矣。無乃以甚畏其虐之故乎。其驗二也。夫

悸也。故明指之。而詳言之。不唯爲汝父解嘲焉。亦將使汝深考其德。而篤信之。庶乎雖有讒人。亦無如汝何矣。

咨汝芳子。今春以來。汝已親我如父矣。而我未能愛汝如子也。爲有媿焉。何以知之。鄉也。吾觀汝之與汝父寢。雖夜寒衣薄。而未嘗啼。及與我寢。則雖暖亦啼。何也。蓋汝父豈不欲輾轉反側以適已哉。恐其動汝。是以不敢。待汝自動。然後從之。我則不然。雖强勉爲之。而弗能久矣。此其所以異也。又汝父未嘗怒汝。汝之有過也。厲其聲正其色。以警焉爾。故叱汝不及懼。笞汝不及痛。是教汝也。夫善教子者。寛裕溫柔。施之有漸。自細至大。自淺入深。始於胎教。終於順命。不嫌等焉。汝父不學無術。其安聞之。然而。吾見其能矣。可以望其來也。若我怒汝。則自中心達於面目。叱汝必懼。笞汝必痛。西家之事其可爲也。吾其媿之。夫唯媿之。是以弗爲也。雖則弗爲也。然其所以爲者存焉。無乃與汝父霄壤乎。我猶然矣。疏於我者可知也。嗚呼。汝之無聊。誰將與儔。既不知母。又無兄弟。且不得丕見父。而唯我是賴。詩曰。民莫不穀。我獨何害。其汝之謂乎。

咨汝芳子。我亦羈旅。餬口四方。於今十年。未必不凍餒以死也。而迎汝者。欲使汝父姑紓汝死。然後漸爲之計爾。安能終究汝乎。是汝父之憂未弭也。而其憂大於前日哉。何以言之。汝既親我。又無疾病。笑言啞啞。色容日盛。且諸君子之臨吾廬者。閔汝幼客於斯也。有賜汝衣帶者。有賜汝書圖者。有賜汝菓子若木偶者。有願汝拊汝。視汝如子者。有數使

以不早還相模。雖欲暫留以待汝親我。豈可得乎。其將行也。與汝菓子而別。且誡汝曰。唯伯父之命是從。亦可悲也。而汝未有悲色。不知其遠行也。及至日暮而後思之。乃泣曰。君不在君不在。吾雖爲之悲。抱汝負汝。强笑多言。以慰諭汝。然未能止其泣也。汝非唯於汝父爲然。凡愛汝者。汝亦愛之。其來也喜。其去也悲。由此觀之。自汝外祖母之終也。汝父恐嫗之將虐汝。故不敢離西家。及其來與我謀。則無若之何。而汝之所以泣者。豈唯如此哉。於斯之時。西家之人。皆將助嫗爲虐。豈有慰汝如我者哉。若使汝稟氣甚薄乎。死矣。或如成人。戀戀戚戚。以盡心焉。亦死矣。或使汝父迎汝少安。亦死矣。吾每念此。未嘗不寒心也。汝父亦能寬裕。含詬包荒。以小不忍爲傷勇焉。故雖至於此極。亦未必如吾所慮也。不然。安能堪其憂。而活汝於將死乎。是時也。有謂汝父不慈而惡諸我者。不亦異乎。夫慈之義大矣。固非汝父之所能盡也。然父子之愛天性也。其誰無之。今世之人所以失之者三焉。貧也。窮也。貪也。貪者易之。窮者忘之。貧者忍之。於是乎有飮藥以自敗其胎者。有憂多費而不擧子者。有男則擧之女則否者。有鬻嬰兒而衣食之者。有棄嬰兒於道路以自逸者。斯數者。豈人之所爲哉。非唯人不爲。雖鳥獸乎亦不爲也。夫貧者吾不論也。貪而不忍。窮而無忘。是謂守節。守節爲士。唯士也。可與言慈已。吾聞其語矣。未見其事也。今於汝父纔見之矣。豈不足以爲偉哉。而謂之不慈。則吾不信也。若使汝父每事如此。其誰間之。曾是不意。所以受其名也。詩曰。采葑采菲。無以下體。汝父有焉。吾懼衆口之罔

汝乎見之。是以不忍復與汝別。將賣什器以鞠汝。猶恐終無以完汝也。冬十一月。來謀諸我。我恐虎之將害汝也。未及聞其詳。乃讓汝父以不與汝偕來。曰此投肉於虎。而冀其不食也。豈可得乎。於是使汝父速還迎汝。然後計日以待。是時也。天將雨雪。寒威可畏。吾又謂汝不能來。其必死矣。借使不死。能無病乎。則雖欲來不可得矣。天之未汝亡也。雪不果下。寒威忽減。道路無害。故汝父得邁達于西家。及汝之未死而救之矣。然而。汝困憊已甚。泄利數日。張如鼓。頭生瘡。衣帶枕席。一浸成水。病益纏纏。雖見父來。而不能起。又不敢言。唯目逆之。汝父既更汝衣。又以身煖汝。抱以還家。鞠之如初。且使飲藥。經二三日。而後汝纔言且笑。然泄利未已。食飲尚少。不可以風。故汝父欲暫家居以待汝全愈。且以自休。然後發焉。既而又謂。囊中之錢纔足以治裝。若曠日以費之。不可往矣。天雖寒乎。路雖遠乎。安得已焉。且汝之在西家也。奚翅天寒。然汝已得不死。況在我懷抱乎。我之適市也。奚翅路遠。然吾未嘗以自休。況與汝俱往乎。遂發。擐汝於襁褓。日行十里。不能十里。如其費何。東有啓明。西有長庚。大明南至。厲風北來。是月甲寅。二十三日宿于戸塚。汝猶泄利。乙卯宿于江都。汝始善食。丙辰宿于杉戸。泄利乃愈。丁巳至于知松菴。是歲汝父年五十。當此祈寒沍辰之間。跋涉往來百二十里。而其窮苦又如是。雖云慣鍊。吾未嘗不爲之惴惴也。昔汝芳子。汝之初至於斯也。雖與汝父俱。然以憚我。故未嘗見齒。終日塊然。坐於一處。而無爲矣。見者或謂。此將死。不能長矣。吾與汝父。亦以爲憂。然汝父又將從事焉。不可

日本倫理彙編

也。是何故哉。饑不必得食。渴不必得飲。誰携之使行。誰定之使寐。口未能辯。心未能
慮。自投而泣。恐其將見怒於狠也。不敢出聲。怫鬱泣血如幽囚。然又有群兒侮之。唾其
面紾其臂。擢其髮爪其膚使其號泣。以爲嬉戲。而狠不禁焉。豈徒不禁焉。又從而笑之。見
其父來。僞愛兒。抱之撫之。使笑且言。欲以欺其父。不亦狡乎。夫飢者易爲食。渴者易
爲飲。今此兒也。唯狠之虐是畏。敢望其慈。故纔見抱。載笑載言。悲夫。父見兒之德也。泫然
涕下。豈不察其所由哉。不敢言耳。且欲以慰兒。故笑而見之。兒亦見父顏。如解倒懸。
見齒而笑。乃言曰。君來君來。其喜愈甚。而愈可悲也。於是。父寘兒于懷。與之飲食。從其
所欲。使極歡焉。然後去。其將去也。慮兒之弗許。故不敢告以實。予之菓子若木偶。以
怡悅之。然後紿曰。如厠。或曰如鄰。兒則許之。而未能請其早還也。笑而送之。父之去也。
纔出其門。則木偶及菓子。盡爲群兒所奪。而不能與爭也。呼父而啼。啼極而寐。寤則復啼。吾
與汝父。不忍聞其聲也。遷坐而食。猶未能飽。況其父乎。彼度兒之將如此也。豈不膓
回魂飛哉。然不得淹留以順適之。蓋其所事急於此也。於是。父子不相見。或二三日。或五六
日。數月之間。大氐如是。而皆病矣。自此以往。吾不得而知焉。夫汝之於嫗也。亦此類耳。然
而未至於此極者。以汝外祖母在其隣也。此雖不得養汝。然未嘗斯須忘汝也。苟得甘
脆。輙以賜汝。汝之啼也。趨而視之。且數饋嫗魚及菜菓。以致敬焉。嫗甚憚之。是以。不敢輕
汝而肆其虐。汝父賴之。去年丙寅秋九月。汝外祖母亦沒矣。則汝父無以爲助焉。江都之事。將於

母擁生汝。未及舉汝而[illegible]世矣。則愛汝憂汝者。唯汝父與汝外祖母也。我之愛汝。雖不如汝父亦嘗與汝父同憂焉。然相去四十里。徒憂汝耳。於汝何益哉。汝父雖愛汝。而汝之鞠。則不如汝母也。惜其不如汝母也。是以愛汝益深。憂汝益深。故凡所以鞠汝者。莫不至矣。則雖汝母亦無以加焉。其所闕者乳耳。家貧。不得為汝買乳婢。則乞乳於人之婦焉。汝之啼也。抱而就之。然汝未能多飲。纔飽則已。少焉復饑。饑則復啼。汝父安得不數往而乞焉。乍往乍還。日夜不輟。如此者數月。終為其人所厭矣。於它婦也亦如之。不得已。乃代乳以糜。豈不悲哉。然汝父躬自為之。能不失宜。多寡有節。與之以時。故汝雖不得乳。亦未嘗特且無病矣。是汝父能應其變以完汝也。夫親之於子也。父生之。母鞠之。若汝父。非唯生汝。而又鞠焉。此乃兼父母之德。而其勞苦又如是。汝豈忍忘之哉。

者汝芳子。養者汝父之鞠汝也。不唯鞠汝。亦不可以不自食焉。苟不自食焉。無以鞠汝。故託汝於西家之媼。而從事於市。將多得錢。以與其人。而使厚養汝。且以自食焉。亦不得已耳。於是竭心戮力。任重忍耻。日行數里。營營汲汲。莫或遑處。然錢不可多得。而所以與媼者。或未備也。吾雖遺之錢。猶未足以補其闕也。則欲使媼不觖望。而還怒於汝。其可得乎。此汝父之憂。所以愈深也。吾明告汝。昔者吾與汝父。寓於江都。其隣之婦。貪而虐人。皆惡之。竊號為狼。狼嘗養人之兒。以受其直。直之未入也。愛兒如子。既得其直。則如棄焉。此其所以為狼也。兒纔二歲。其始至也。豐頰善笑。甚可愛也。未幾。其憔悴不忍見

右新瓦一篇。附錄詩文五篇。先生所自錄以授芳子也。不敢妄易置。盡從原本。續附錄詩文二十九篇。則今温所輯錄也。其二十六篇。則皆東都下毛之所作也。大人歌二首。人說。則最後在于浦賀所作也。先生嘗遺温書曰。賤軀老疾交集。凡百好事皆以廢。唯好學之志日益壯矣。死而後已。夫往時所作之文章。皆浮華之言。恐誤己誤人。今悉棄之。机上獨餘大人歌耳。因贈相視。蓋先生竭一生之力。窮王氏之蘊奧。以作此歌。其文簡。其旨遠。正大公平。簡易明直。最修身之要言。不易多得者云。明和丙戌秋七月中元日。須藤温謹識。

目錄畢

此書余幸藏舊刻之佳本。故今止摹刻而已。其功德碣以下跋文三篇。則新刻而收之卷尾。

服部政世識

新瓦

門人下毛須藤温校

延享三年丙寅。予居于下毛知松菴。是歲冬。家弟叔德。以其幼女芳子。至自相模。因屬芳子於予而還。明年丁卯夏。芳子纔四歲。未可誨也。而予老矣。故叙所聞以爲一編。畫鳥獸於端。飾以朱綠。名曰新瓦。乃使芳子弄之。庶乎遂能讀之。以私淑也。不然凡百君子。將或以此誨芳子焉。則予雖死亦不朽矣。其辭曰。

咨汝芳子。汝相模人也。何爲遠來。居於下毛。此汝父不能庇汝。以爲我艱。其薄才拙謀。誠可笑也。雖然。以汝觀之。其哀哀者。孰大於是。吾將語之。往年甲子春。二月二十四日。汝

講學作文。彬彬皆有法。竊意。有遺賢知文者。指導之矣。不則。雖以子直昆季篤志明敏。而其中有未遽易與聞者也。將歸。子直出新瓦者一編曰。是吾師東里中根先生之文。先生行已精幹刻苦。至興居飮食之微。皆有定準不苟。其待人豁然寬恕。心不粗置藩籬。雖憸人凶毒嘗擠之害惡地者。苟能革面而來。則前日之一二。未嘗毫宿於其心。必懇懇誘之於善不舍也。故其高潔雖可憚。然久後小人女子亦知信愛之焉。作文不留意。又不自收拾。故隨卽散失。其自錄留家者。獨此編而已。此其鞠育弟之女芳子本末自述者也。余聞而悅然自失曰。嗚今之時安得若人哉。而讀其文。雅馴古勍。有左氏國語之遺。而運諸己。能反覆自盡。大異於世所謂古文辭。剽奇字。行險句。虛驕薄險。悍然不朽自處者之爲也。其鞠育幼子。忠恕慈厚。纖悉必至。雖慈母保姆之心求體察。亦有未能盡者。而又諄諄引之於道也。此皆可貴已。豈非倫理之變盡其道。而文又能道之耶。是不可不傳也。既後子直又輯錄他文詩數十編附之。問序余。余知先生非一日。故樂爲之言也。凡先生流離困敗。有以自立。不改其樂焉者。益有得於王陽明。天地萬物一躰之學也。而大人歌。人說。卽其晩年自得者云。其他德業。子直狀備矣。嗚呼先生。可謂弘毅君子哉。明和八年辛卯十一月。讚岐柴邦彥撰。

東里先生遺文目錄

東里遺稿序

東里先生既逝。門人須藤子直。集其平生文詩。題曰東里遺稿。刻而藏之。爾後三十餘年。四方人士聞先生之風。乞遺稿者漸衆。子直之孫伸友。與其友子類修謀。欲再刻以廣其傳。乞跋於錦城太田氏。跋成而不刻。及子直之孫子寬。病原刻之漫漶磨滅不可讀也。亦欲重刊之。乞古賀學士之文。以叙其由。既亦不果刻。予也闇劣。不足以知君子。然先生之德。夙所欽慕。每聞其有藏寸簡尺牘者。不憚遠邇。徵就而抄之。如是者凡數十年。得其雜文和歌。及書牘數十篇。乃彙爲一卷。觀其言。皆醇々然。誨人之切者也。是可以與遺稿並觀矣。尺牘中多言及芳子者。又有交游死生聚散之感。亦可以與遺稿互相證矣。不可不傳也。邑宰柏塢君須藤氏之宗也。予乃告之曰。東里先生隱君子也。一生韜光自晦。獨以其久於吾鄉也。鄉人深知之。今也世遠書殘。則雖吾鄉。亦寥々希知焉。先生之言。皆出於至誠惻怛。頑石亦爲之點頭。其益於世道人心。豈少小乎哉。請重鋟遺稿。以成仲友子寬之志。且附以僕多年所得。子其有意乎。柏塢君悅。遂與梓謀。且署其事於卷端。以授剞劂氏云。文久三年癸亥正月。服部政世謹撰。

序

倫理之正。變處之書。其道不謬於聖人。而又能自道以文爲者。而後可以羽翼六藝。以裁于後世矣。若夫外此。抽黃騁白。崇虛言飾無實。其言雖華。其事雖奇。何益于人心。而安在所謂不朽者乎哉。壬午冬。余講易于佐野柳圃。樂其風俗淳朴。敦于禮讓。又異藤子直昆季三數子。

レ及二檢見一ものにて候。甚相違の處ばかり見廻り候て、事すみ可レ申候。當年稼よく候とても、はや御年貢を高く取り候へば、百姓まめしげなく候故、精出し不レ申候間、よき儘にして、先百姓にも利を得させ申度候。三年ばかりも富せ候て。諸敎法を急度立申度候。夫迄はそろ〳〵とおしへ申ばかりにて、急に責不レ申、二年目などに百姓も利有を知り、上へ强て御取は無レ之筋は、仁德の旨をとくとのみこみ申たる時に、あらましの法をほどこし、其法の益有ることをあらまし存知候上にて、又篤と法度をたつべし。

執齋先生雜著卷之四畢

納めかたは同じ程に成り、刑人も出來可ㇾ申候。先百姓も克肥申候て、社倉など民間にて出し合せ候程に成り候へば、上々に不時の御物入もなく、飢饉の御手當も入不ㇾ申候て、目に見へぬ御勝手も可ㇾ有候、唯よく百姓の勝手よき樣に仕り、心を歸し申候て、上をうやまひ親をしたしみ、上の御恩を難ㇾ有奉ㇾ存候上には、君民一體に成り候事にて候。只其才ある人を被ㇾ仰ㇾ付農をすゝめこやしをよくさせ、水道をよくなをし候はゞ、損亡すくなくとり實多く可ㇾ罷成ㇾ候。其時は毛付も自然に上げ候とても、痛み申まじく、よろこびて受可ㇾ申候。今御取毛を上げ候も、五年後にわけ候もおなじ御事に御坐候。公儀に有ㇾ之も民間に有ㇾ之も、これまた同じ事に御坐候。只稼よく出來、ひけめ少く成候樣にいたし度候。檢見時に不ㇾ及とも、常に實儀なる手代を撰び、廻り役として、其村々の古老の實儀なるものを所々にて召連、平生に廻り見申、堤の損じ池水入樋の類、田地の作り方のよしあし、經界をやぶり人の田地へ作りこみ申候類、わらし置候處、或は鬼神の宮など作り候事、水かゝり水はき、惣じて溝洫の事など見廻り、老人など難儀いたし候哉、牛馬の遣ひたをしに成り候事、新開並に荒おこしの樣子、平生見廻り申候者を申附候て、檢見の時は人を多くは廻し不ㇾ申候樣に仕たく候。惣じて御代官所の御もの成高は、御さづかり處をおしなべて、幾つと御勘定仕立申候事に候。然ば百姓の手前へ免を上げ不ㇾ申候ても、全躰の出來能候へは、免のさがり申所さがり不ㇾ申候。善き所は一倍よく成り候故、公儀への高は必免高く、一二損の御德は可ㇾ有候。下々も免高くはかり申にては無ㇾ之故、富み可ㇾ申候。日比によく見廻り置き候へば、檢見の時分も大かた日比の樣子にて不

木を植へてよろしき地などには、木を仕立させ、其地々々にて相應の事をはからふべし。是又有才の人、其地の百姓の古老を用ひて相談し、相はからひ、夫々に利をあたへ、半分宛の利にてもあたふべし。たとへば木を植てよろしき處十萬坪ある處は、一万坪づゝ木をうへ、十年目にふさがれば、前のかたより年々枝を打て、よきはうちて御拂にも、又薪にも、是を以て百姓と半分わけにし、十一年目より切て、拂てよきは拂など、兎角能功者成者に相談して用ふべし。或は紙草或は燒炭或は漆、相應に仕立べし。

代官檢見の事。　代官手代たるもの多くむさぼり申候ゆへ、殊の外郷村騷しく難儀仕候事にて、御代官中も大かた推量も可ㇾ有候へども、盜み不ㇾ申樣にいたし候事、剛明の人ならでは成り不ㇾ申候。是にはいたし方有べき事に御座候。關東は斗代のもり大かた定り有ㇾ之候へば、檢見を出しㇾ不申候はゞ一けんなどは多あがり可ㇾ申候。檢見前に觸を廻し、御年貢前より定り候盛の通りを上納可ㇾ仕存候はゞ、毛見遣し申間敷候まゝ、勝手次第苅取可ㇾ申候。もし定免にては難義可ㇾ仕と存候處へは、廻り可ㇾ申候と申聞せ候はゞ、十に七八までは定の通り上納可ㇾ申候。毛見を受候へば、必大分のもの入も有ㇾ之、其上天氣よき時分に勝手次第に苅る所に、遙に益ある事に候ゆへ、一損斗の事にては、百姓のためもよろしく候。偖その殘りの免を願候かたへばかりは、御代官自分に手代を引連行所々へ手分をして手代を遣はし、晩にはその御代官の旅宿へ歸り候樣にいたし候はゞ、手代の貪りも成り申間敷候。百姓より取毛をあげ候はゞ、必定未進に成候て、さわがしきのみならず、上への

よく成り、御物成も多く仕り出し可ㇾ申候。勸ㇾ農の箇條左にしるす。

第一に溝洫をよくさらゆべし。

夫覺水用とは田地の食物なり。水かゝりは口喉なり。惡水はきは田地の便道也。溝洫のよろしからざる處も、吾一人の事にあらず。そのうへ性の無狀なる儘に、誰一人頭取てさらえんとするものなき故に、惡水はき場埋まりて、有れどもさらゆるものなし。第一に御代官の人是を見分して、一郷に命じてさらへしむれば、日損には水かゝりよく、水損にははき場よく、常には順路にして損亡少なく出來かたよし。

覺上の事、里遠き處はこやしすくなきゆへ、出來わしく、ほしか油精など用ゆ。百姓不勝手にては其力なき故に、出來様わしゝ。然るに百姓すこしく勝手よく候へば、的を射碁をうち鞠を蹴りなどして、もの入多く、または堂宮の建立、伊勢講日待などに多く費し、飲食に用ひてこやしの方に不ㇾ用。されば逆其もの入を上へ御取り上げ可ㇾ被ㇾ成事にもあらざれば、御取上の方は前法の通にして、百姓のうちにて金銀並に米をかけ合せ、夫を負來るものにからせて、是をこやしの代にさせ、作物のかたへ用ひさせ、飢饉の年は是を社倉に用ひしむべし。さて五年切に遊び事建立事日待伊勢講など停止に被ㇾ仰付、其他の老年有ㇾ心ものをゑらびて、五長を立、また廿五人の惣頭を立て候て、教法をおこし、此度の大意の書などの類にて、愚痴なるものにはおろかに教へ導くべし。ケ様の事兎角その人ならではなり難し。口傳あるべし。

社事重御座候故、社僧は其役人に申附、役人替り候ても、その料は可レ被ニ差置一事、御尤に御座候。左も無レ之、寺社先代僧より事起りて、料の附候も有レ之、亦は方々に有レ之社など、神名帳の外に出候も、前々より料付候分は、たとひ御宗祖より被レ附候料にて候とも、その僧等不屆にて罪に被レ處候分は、破却候て、地を可レ被ニ召上一候事、其前本寺々々へ御觸候て、末寺々々隨分吟味可レ仕候。若其住持不屆にて、公邊に罷成候事、追院以上の罪過をおかし候ば、寺地及其料可レ有ニ召上一旨被ニ仰渡一度候。私領等にて寄附の本主有レ之候はゞ、その本主へ御かへし可レ有レ之候事。

爲レ之者疾。

農人の時を奪ひて歩役に遣ひ候事は、唐とはちがひ日本にては甚すくなく候へ共、此筋の事外々殊の外多く御坐候。惣じて百姓は富み候へ共おごり申候。貧ければ難儀仕候故に、富せ候て敎申候へば、二ツの者のやまひ無ニ御坐一候。詩に農の事は不レ可レ緩と御坐候へば、晝夜いそがはしくあらせ申度候。上方筋は農人耕作に精を出し申候故、地力を一盃に作り、田地のもてなしよろしく候。關東は元來人物風俗ぶしやうにて、大かゝりなることを好み、實儀にこまやかなる事を嫌ひ申候故に、田し地のもてなしも疎末に御坐候。然れども是れは風化の遲くひらけたるにて、又御代長久のしるにて、珍重なる也。故に上方西國向は、百姓の知さとくてあしき事。又佞多く、その外工み深ければ、常には無事なる樣にても、治敎施しがたし。關東はおろかにて手强候故、仕置なし難く見へ申候へども、少々德ある人克くおしへ候へば、たしかに早く治り候て、以レ漸すゝめ候へば、土地も

幸レ位之徒。御家人輕重に不レ依、無德にて祿位を汚し申候は、皆幸位にて御坐候へ共、先祖より君民に功德ありて被二召出一候ものは、大躰の過は御免可レ被レ遊候事、御仁德本二感心一候。大法にそむきたる人は、是以御仕置有レ之事に候。輕き族は身上被二召放一彼新開の地へ被レ遣、その處にて相應の役義可レ被二仰付一哉。若また年を經て過を改め、身持よろしく成り候時は、追て可二召反一歟。

御女中樣方。重き御方樣がた數ケ所の外は、上々御臺所御儉約のうちは、三分の一ばかり御減少可レ被レ遊候哉。

能役者より御取立のもの、當分は半減に被二仰付一、あとは一代切に可レ被二仰付一候か。其身は迷惑可レ仕候へ共、天下の大分にては不レ苦御事に御坐候。前々より役者にて御奉公仕來候ものは、其通りたるべく候はんか。これ又新開地へ可レ被レ遣哉。

儒醫、その外藝術を以て被二召出一候もの、其子父の業を相應に相つとめ候半は、無二相違一可レ被二仰付一候半か。若家業不案内のものは、半地に被二抑付一、廿歳以上のもの五年内兩度御吟味にて、家業修行仕、そのしるし有レ之候はゞ、本地可レ仰レ下候。無レ左候はゞ、可レ被二召放一候乎。御代々すゝめ有レ之候ものは、各別に被レ遊方可レ有二御座一哉之事。

寺社料。諸大名并御旗本は、御先祖皆一命を以て御奉公有レ之、家を起したる御方々にても、子孫斷絶か、或は惡行有レ之候へば御知行やしき迄被二召放一候處、寺社は其僧別當の者不義有レ之、御仕置被二仰付一候ものも、寺の料は本寺へ被レ下候事はいかゞと奉レ存候。尤由緒有レ之寺社等は、其寺

内年老人品を見立て、五人組を立て候て、組頭となし、夫々のその一類のもの、又は闕所の銀にて具を與へて業に附かしむべし。または遠島のうちよりも、御免にてこの所へ被レ入ものもあるべし。或は入墨などをして其處へ送り、江戸中へは入墨のものに宿をかし候事御法度被二仰付一、もし江戸住仕候はゞ死罪たるべし、また乞食村のものにても、望候ものにはあたへて作らしめ、乞食を免かれ常民になるべきは赦すべし。其處の代官は別に御撰可レ有事。さて江戸中比丘尼立遊女など、并抱へ持居申候ものまで、一所に追遣し、妻に望み候ものには、赦してあたへ、農業につくべし。江戸にて小女を買とり、遊女比丘尼に仕立候事、堅く御停止可レ被レ遊か。號令の詞あるべし。若し法をおかし候はゞ、沒收して、かの新開へ可レ遣事。

諸村法度、出家いたす事、心任せにならぬすぢの事。六十六部、順禮、山上まいり、建立諸勸進、この類のうちにて法の立樣あるべし。

右の通に被二仰付一候はゞ、相催し新開不レ被二仰付一候とも、年々萬石に五七十石も作り出し可レ申候。且また民も利心相爭杯も有二御坐一間じく候。只新田被二仰付一候樣に法度成り候はゞ、世上一統に利欲に相うつり可レ申哉と奉レ存候。萬民上恩に感じ利心少く成り候へば、多く出し候ても、安心仕候。利心に罷成、上も利を御好と存候て、無レ所レ戴候へば、少分の事をも苦しみ候て、いろ〳〵申立、騷動仕候。箇樣の儀は兎角御代官その人にて無二御坐一候へば、難レ成事に奉レ存候。

食レ之者寡。

りて大かた成就といひたて、其開を渡世にするもの有り。又實になるべき所なれども、京大阪のものに請負せて取らるゝ事を嫌ひて、いろ／＼に邪魔をして成らせぬやうにするも多し。もしまたしゐてなして害生ずるもあることなり。先天下へ號令して、村々の百姓その村々にて新田並に荒れ興しをして、外の害になるまじき處あらば、一反にても一町にても、其百姓の力にかなふべき程おこしひらき度存候はゞ、代官へ願置て、見分の上被さるべし。尤三年は作りとり、夫より十年迄は年貢を輕くして取るべし。若是迄も百姓自分に作り出し候田地御年貢をはからず候事有レ之候はゞ、隱田にて候故、御大法有レ之候へ共、當年までの分は御免被レ遊、當年きりに持高町歩をかき附、實義を申たて、さし出しをして、御年貢を受べし。相應に本田より輕く年貢を可レ被二仰付一候。若なを隱し置き候はゞ、來年内檢地被レ仰付候て、隱田の徒は本田ともに召し上らるべしと、能く實儀を申聞せ、得心せしむべし。

田畑ともに難レ成、荒野或は山などにて、草場の妨是なき所々、其所に相應の木をうへさせ可レ申。是も民へその六分を被レ下、上へ四分を召しあげらるべし。漆かみ草その外民の利なるべきもの相應にうへしむべし。

曠遠の地に數萬石新開あるべき方を見立候て、江戸中無宿の徒、並に國々追放あるべきもの、並に博奕うち三笠附などいたし候族博もの〻類を其處へ被レ遣、其處の竹木を被レ下、自分の家作を仕り、住居候て新開仕、渡世可レ仕候。土地により或は三年五年七年のうち無年貢たるべし。そのもの共の

生レ之者衆。

生レ之者とは、百姓農人のこと也。農人は夫は穀を生じ婦は布を織て、生民を養ふ者也。後世國家太平年久して文華日々に開け、人民上下となく奢侈に至りぬれば、町人多くなりて百姓寡くなり、本を務る者日々減ず。又僧徒多くなりて、手を束ねて衣食をつひやす。是を以て生レ之者すくなくなりぬ。是亦自然の勢ひ也。然るに當御代諸事質朴に御返し被レ遊ぬれば、當分市町は衰微の樣なれども、町人は少にして百姓は多ければ、天下を一視すれば富盛と云ふべし。然るに町人利を失ひたる斗にて、農人益を得ることなければ、又これを生ずる者多くはなるべからず。農人多くなりても可レ作田地なければ、却て此人を養ふこと不レ能べし。今土地あり、民多くなりて、五穀を作り出すこと多き謀、下文に見ゆ。

新田並に荒れ興し。夫去年如きの風水損は、幾年にも稀なるべし。たとひ豐年にても、廣き天下の事、何かたぞに少々の水損なきこと不レ能して、荒地は年々これありて、新田は出來ざれば、百姓の手前にては、少々宛も廣め候ても、公儀の御高は年々減少たるべし。然れども、古田の妨に可レ成處は、元より手をも附べからず。可レ成處にしてならざるは、甚子細ある事なり。その村々のもの欲心にて、なるべき所をならざると言立る有り。又已に請負せて半はさせ候て、いろ〳〵の邪魔をなしてやめさせ、また外のものに請負せては、其利を見るもあり。又決定あるまじき處をなるべしと言たてゝ、人をあやつるものあり。世上に山仕といふもの、そのならざるを知ながら、先取かゝ

應に被レ下、講師軍師へも又一等を減じて被レ下、諸師己下惣師役へも御祝儀何にても相應に被レ下、御歸候て已後御吸もの御酒被レ下也。

生レ財有ニ大道一説

大學曰。生レ財有ニ大道一

生民の道、上一人より下万民に至るまで、衣食住の三ッ、一ッ缺ても生を保つと不レ能して、天下に君たる人これを制せざれば、民欲にふけりて相爭故に、君まづこれをゆたかにして、天下を養ふの備とす。故に平天下の事業唯生財に在リ　是皆賢愚ともに知れる所也。然れども此大道によらずしてこれを生ぜんとすれば、必德を外にして財を内にすれば、爭奪を敎ゆる者也。故に上下交征レ利して國危きと、古今其あと歴然たり。紂は鹿臺の錢巨橋の粟ありて亡び、武王は散レ之て興り玉ふ。大道と云ふ字よく〳〵可レ見。下文四ヶ條の外にて求めて生ぜんと欲するは、皆小道也。たとへば道路の如し。定りたる本道をゆけば、小兒も怪我なく行、荆棘の小徑を行けば、丈夫も害にあふとあり。誰にても大道のよきことを知ると云へども、華侈に多く用ひて不足なれば、此大道の外を求めて、樣々の事をなす。是亡國の道なり。財は天地の生氣也。人子を生む時は身より乳出て養レ之、人間あれば又草木鳥魚を生じて養レ之。自然の利也。故に利に心なくしても、人事をよくつとむれば、必衣食に事缺となし。強て求め急ぎて生ぜんとすれば、又必是をうしなふ。唯自然の天理に從ふべし。

れを聞、讀書、躾方、手習、武藝まで一通りは見るべし。講釋の節は、講師上坐たるべし。講終て講師は其位にかへるべし。若殿入學のとき表へ御迎ひに出、着坐の時は下段の上坐に座すべし。

講師幾人。更番に相つとむ。右副奉行の支配たるべし。但若殿御入學の節は、表まで御迎ひに出て、御着坐候時は、下段の末に坐すべし。

讀書師幾人。躾方。手蹟。算學。軍の師。弓の師。鎗の師。劍の師。馬の師。右文學の師は左のかた、武藝の師は右の方にむかひ坐すべし。

孝經壹卷。書法の人書寫几にすへて持參、別當取てすゝめて敎也。

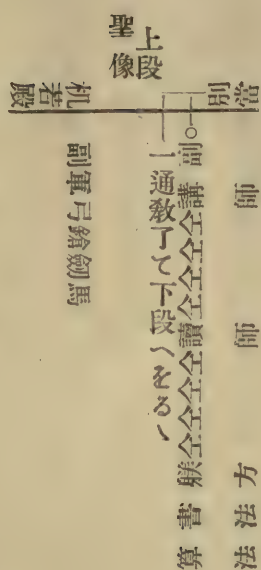
上段
聖像

別當　　師　　師　　方法法

副。講△△△讀△△△躾　書　算

一通敎了て下段へをる丶

机
若殿

副軍弓鎗劍馬

禮了て若殿上段を御下り、正面に南面ましく\て禮を御受、御末子は別當の向少し上へ御着坐、南面にて少しすぢかひ、講師軍師正面へ出て敬禮、その外は一同に御禮、別當へは時服、副へも相

學校を建るには古法を用ひてたがひなきを欲といへども、事にて三代の禮といへども、次第に備りぬれば、今人情のいまだおもむかざるよに、周の禮法にしたがはんとせば、必虚器となるべし。只主意をよくぞんじて、漸を以て備はらしむべし。故に校舍の圖も、ただ簡便にしたがひて、必古法によらず。まづたくかゝりやすと心得べし。五六年も經て、人情も深くなりなば、唐の才ある人にはかり、江次第延喜式等の書にかんがへて、全式とすべし。（此書は、大學衍義補、二程全書、三學五雜組の類、其外にても可ニ相考一なり。）

學校惣奉行壹人、分國にては主人の一族か、または、家老大名分の歷々、年德ありて、偏屈に無レ之人、少々文才もある人をえらぶべし。格式をおもくして、その家の老中の次坐とすべし。是重職なるとは、いふに不レ及といへども、この記の末まで讀て見は、その大切なる事をまた見るべし。その職は先主人の宗子庶子まで、入學の時先着座して學號などを拜させ申、孝經の一卷を奉るべし。この時は對坐にてすゝめ奉り、一二行も文字素讀を教奉りて退くべし。其は入學の式にしるす。併諸々の教讀の役人を支配して、諸事さし圖仕、學徒の勤かたまで、その人品を心付て見たく、相應の目利を仕り置、段々御人えらびの御用相應に考をしるし置、折々は老中相議の節、並に國君の御前へも被ニ召出一樣子御聞可レ被レ成時、前存申上可レ然候へば、國家政治の根本に取り申人品にて、兩院別當の□にてしるべし。

副奉行二人。奉行二人、これまた惣奉行の手替りとも心得べし。惣奉行の意を受て是を施し廣む。是も又若老中の次坐たるべし。右三人は番に學校に出て、下段の上坐に坐して、講のときは元よりこ

さし出申樣に被㆓仰渡㆒候はゞ、自然に稽古可㆑熟候。此すぢ御了簡可㆑被㆑成候。

問。老養社倉の儀いかゞ。もし社倉未㆑成内に飢饉など候はゞ、いかゞ可㆑仕哉。　曰。至極の御了簡に御坐候。此段別書に書付候ゆへ、今略候。

問。銅鐵金銀を異國へ渡し申事は、捨申同前に候。いかゞ候はんや。　曰。吾國のうちにて東國のものを西國へつかはし候も、日本より唐へ遣し候も、天より見れば同じ事に候。大やうに御覽可㆑被㆑成候。去ながら無用の異國ものを日本へ買入申事、とかくいらざる事に候。況大切の金銀を他へ遣し申候をや。金銀並木草もみな〳〵大地より生じ候ものにて候へば、年々用ひ候ても不㆑苦事に候。去ながら毎年生じ候菜菓にても、無用の奢に捨候事は、天物をそこのふにて候。まして百年に成就仕大木を、無用に用候事は、隨分仕まじき事に候。又千年に成就可㆑仕金銀は、一しほ大切に可㆑用事に候。唐へ遣し候も、日本にてすたり申候同事に候。況銅佛などに仕候事、至極の無用と存候。箔にて捨り申候も、金屛風第一と存候。次に佛にて候。外には夫程すたり申事は無㆑之候。昔奈良大佛の箔無㆑之に付、吉野の金を堀申べしと申候處、藏王のおしまれ候とて、其後奧州より出候て、夫にて箔をおし申候よし。只今は大佛の箔百度にても、箔に事を欠申事無㆓御坐㆒候へ共、金子不足と世上に申候は、遣ひ足り不㆑申と申事に候。金不足に成り候へば、もの安く成候て、又つり合申ものに候。金多く候へば物高くなり中世上の勢にて候。

學校說

召上、寺院或祭所などは、その徳ある名僧などに御座候はゞ、本寺宗旨にかまひなく被レ下候て可レ然候。そのうちは相應の僧徒を被二差置一寺役等爲二相勤一可レ然候。いか様共可レ成候。若本寺の住持不行跡に候はゞ、これまた此僧を以相考可レ被レ處候哉。銅像消佛など私に建立、停止仕度候。無レ據事に候はゞ、相願候ての上の事に仕度候。

問。領分其自由過候て、家中すり切申候間、公義へ申上、場處を替て築候て可レ然と申候もの御坐候。如何思召候哉。　云。此說尤見る處有る論にて候へ共、迚もならぬ論と存候。見る處ありとても、ならぬ事を被レ論候はば、無益の事に候。唯今その人へ如何様ともと御頼候ても、地かへはせられまじく候。然らば無用の事にて候。この儀なき事にては無二御坐一候へ共、其段は別の議論に可レ被レ成候。

領分米遣にせよと申人御坐候。是亦いかゞ可レ仕哉。　云。これまた大形前の論にひとしかるべし。成程米遣にいたし度事に候へ共。これ又大底の人の仕形にては難レ成事に候。惣じて左様の論は見る處有る論と聞へ候得共、打くづしてしなをし申論にて候。先今の通りにて直し申様に仕度候。今の通りにても成程なるべき事に候。

代官役申付置候者共、隨分不案内に候。その役目の義克く爲レ知申度候。いかゞいたさせ可レ申哉。　云。　夫は御尤に御坐候。成程可レ成事に候。御代官衆には、定て五七人宛も手代可レ有候間、その五人七人の手代に、銘々に存寄をかゝせ候て、夫を吟味いたし、かやうに仕可レ然と、存寄書付各

日本倫理彙編

佛者にて候へば、今程はいかゞ可ㇾ有哉と存候。これも所置可ㇾ有哉。曰。如ㇾ仰に候へども、數百年來の習はしに候へば、憚ながら大君樣の思召にても急には成り申間敷候。まして一國のちからにては、人心變じ申とはなるべからず候。卒爾に御いとひ候はゞ、大害生候。却てまた彼が勢の助けに可㆓罷成㆒候。佛とても、異國の賢者にて候へば、惡をせよと敎たる法にても無㆓御座㆒候。みな〳〵後の蔽にて候。然ば夫々の宗旨の法、夫々の祖師の通りに成り候へば、先は珍重に存候。去ながら唯今は人々の子弟を善きにつけあしきにつけ、出家いたさせ申候。これはいかゞに候。度牒の法を以て、その身信仰にて、一途に思ひ入れ候ものは、其村其町或はその親類の連名の願にて、公書を給り、御ゆるし候はゞ、不義の僧徒は出來仕間敷候。兎角何の道にても、今迄の事に手を付申事は不ㇾ可ㇾ然候。この已後の道を塞ぎ候へば、年月を經るに隨て改り可ㇾ申候。夫先祖代々の死生の間より成り立仕、或は御家に功あり、或は德ありて、數萬石の地を被ㇾ下候ものにても、不義などこれあり候へば、地所幷屋舖をも被㆓召上㆒候處、寺の如きは、其僧大惡逆を仕ても、寺地も地所も其儘被㆓指置㆒或は本寺へ被ㇾ下候。是は數代の功臣よりも惡僧を御信仰被ㇾ成候樣に候。是また風俗の衰へにて、僧徒の惡をすゝむる類と存候。只今もし不律の僧有ㇾ之候はゞ、本寺より吟味のうへに、追放いたし候はゞ、その通りに候。若惡事發見、或は公事に罷成候て、公儀の法に所せらるゝ時は、寺料寺地を被㆓召上㆒候間、左樣に相心得、末寺々々を克く吟味可ㇾ仕旨、被㆓仰渡㆒可ㇾ然候。或る本寺又は大地にて、左樣に難ㇾ成地などは、また法を立、公儀へ被㆓召上㆒候て、そのうち無用の地は上へ被㆓

仕て罷在人々も、支度仕候時分に、地をとりあげられ候へば、當分の居所をうしなひ申候。歎き甚しく候へども、その旨を申上る人も無二御座一候と相見へ候。申上候はゞ、當國の君並貴公などの思召にては、早速御宥免可レ有候へども、申兼候は、畢竟首尾あしく可レ成やとはかり申にて可レ有レ之候。一分の首尾あしき分にて、生死にも身上にもかゝり不レ申候は、明白の事に候。燒け申たる憂と御考合可レ被レ成候。然れども申兼て、もしも首尾あしくやなんど恐れ候はゞ、是にて首尾の損じに可レ成やと下々の存候處、意外ながら君臣の御心中に不レ絶候物有レ之かと存候。克く眞知に御自反可レ被レ成候。御自反の上にての處置は有べく候。干羽の舞は平城の圍をとくべからずとやらん承り候。この方の心中無欲になり申迄、盜を其儘捨置候ては、生民の難儀にて候。御心を改られ候て、偖その處置は可レ有事に候へ共、御心改り不レ申候ては、腐ものより虫のわく如くにて候。虫を去りても、跡よりわき出申候。先其腐候根本を去り候心を主にして、さてその虫をも取て捨可レ申候。うちの腐をさり候迄、虫をその儘置候との事にては無二御座一候。されども主意を御立なくては、無用の事に候故、孔子も主意斗を被レ仰候。これ等の處よく御辨惑可レ被レ成候。役人の賄賂も同前にて候。太守様幷御家老中も、御欲心すくなく候故か。さして刑罰を行候とも見へ不レ申候へ共、漸々に盜もやみ申様に相見へ、大悅不レ少候。此上只克く御自反可レ被レ遊候。

佛法甚盛に御座候て、寺々あまり多く御座候。仍レ之制しがたく、僧徒日々不行跡に御座候。會津の中將殿の時、日本の高にて八分一ほど佛者の有なりと被レ仰たるよしに候。夫より日々に加はり候

り度候。若被二仰付一候はゞ、とくと前後の御はからひ可レ有事に候。

學問所の師、夫々の達人數多入申候。尤上にも可レ有候へども、廣く民間に求可レ申事候。夫ともに畢竟領内に罷在候者は、みな〳〵手前のものに候へば、態々呼出し不レ申候ても、何時にても入用の時呼び申候へば、悦來り申候。其儘さし置候半と申候へと、一段廣き事を申もの御座候。いかゞ思召候哉。　答。成程廣き御了簡と相聞へ申候へども、畢竟才德を御好無レ之かと被レ存候。惣じて年貢運上の金銀の類も、御國中に有レ之候へば、穴がち御手前へ御取り上無レ之候ても、御入用の時御とり上候へば、同事に候へども、夫は當分御入用に無レ之候とても、御あつめ被レ成候へば、才德の人をも御このみ候はゞ、定て召寄られ候にて可レ有候。万事此類と存候。

問。役人の者にては、賄賂難レ止し。下々にては盗賊火附の類も止み不レ申候。いかゞ可レ仕候哉。

答。子が不欲ならば、賞すといふとも盗むまじく候。民は君の鑑にて候。君の心の姿民の上にあらはると思召、御自反肝要に候。そのうへ唯今までのならはし甚あしく候故、例令君臣の心に少しも利心なくとも、急には改がたかるべし。まして少しも利心御座候へば、其儘民の行に顯るゝにて御座候。火を附て人の難儀を幸として、わづかの財寶を盗み候事は、上たる人の至極にくみ思召候事に候へ共、大火の後萬民難儀仕候時節に、御用地など御取上被レ成候。これ已後の火變の用意と申事に候へば、是は御尤に御座候。萬々一も序に個樣の御用になどゝ存候心、毛髮程も有レ之候へば、火附候ものも同意の事、天心の見る所にて候。燒のこり候わづかのぬりこめなどに、先さしかけにても

御實心未レ到候故と本レ存候。中に立ち候役人の不ニ申出一候も、至極尤に御座候。當分座上の御囃相手などは、いか樣に申上候ても不レ苦候へども、役人と立たる人には、先一通りを吟味仕、尤なる筋に候へば可レ被ニ申上一候。無ニ左樣一事は、卒爾難ニ申上一可レ被レ存候。然れば大分の當御用を抱へ候て、下地の急用をさへ取扱かね居申處へ、亦々其大分の詮議は難レ成候はん。不ニ取次一候事無ニ餘儀一候。是非天下のはかりごとを被ニ聞召一度思ひ候はゞ、別にその役人を御たて被レ成候て、其人に御申附可レ被レ成候。中にて滯り候由、御聞候ても御吟味なされがたきと被レ仰候其良知に御考可レ被レ成候。こなたにも被レ仰がたき者有ニ御座一候。その役人を御立候へば、其役人も申出ものなきを氣の毒に可レ存候。又貴公にも御吟味被レ成がたき御心無レ之候。兎角良知に御自反可レ被レ成候。去ながら聖人さへ昔も個樣の事に御わくみ候故、諫鼓を置き、謗木をたて、色々と被レ成候。王陽明潁州の奉行に御成候時、はじめて府を御ひらき候日、箱二つを門中に置て、下々の存寄を書つけ、この箱に入候へとて、一つの箱には求ニ通一民情一と書、いまひとつの箱に願レ聞ニ己過一と被ニ書付一候。日本にても、板倉周防守殿、京都諸司代のときには、訴狀願書等を持參仕候もの、急度さし上申事は無ニ御座一、錠おろしたる箱を出し置候て、書附を入候程の口をわけ置、夫ようりうち入れ歸り候。每晩其方の役人を置候て、御前にてひらかせ、一々御覽候て、被レ爲ニ沙汰一候也。備前故少將殿も、箱を被レ置候よし、又酒井勘解由殿なども、次の間に被レ置候事也。とてもの事に離れ切たる社などの邊に置候ても可レ然か。夫はとくと御了簡可レ被レ成候。兎角かやうの事にてよくよく通じ申候。夫共にそのすぢの役人有

品々の內の學にても、少も高慢等の心有レ之候へば、五倫をやぶり申候。其段は師たる者可ニ存知一事。教刑。是又可ニ相考一。教法を破候もの、その度數次第に輕重あるべし。五度三度はいけんを加へ候へども不レ改ものは、學問所を出し、重て來學不レ叶事に候へば、一生すたり申事に候。克く可ニ相考一候事。攝州平野鄕人學問所をたて、講學仕候に付、風俗改り候事眼前の事に候。鄕中の民より合社倉米をも拵、學問所の費用をも蓄置候事、段々丁寧に備り申候。可レ被ニ相尋一候也、總じて政治の事は、國家の威光にて如何にも治り候へども、少しゆるみ候へば、其儘元のものに成り申候。王道にて敎化を施し候へば、うち捨置候ても不變に候。かの威光のみにて治り申候は。その治れると申からが、誠のものにて無ニ御座一候。此儀は議論多き事に御座候。克御考可レ被レ成候。

委細承り屆御尤候。學校を建候て人を敎候事、第一に御座候へ共、夫共に孝悌をすゝめ申候事に候。當然孝悌をすゝめ中度存候故、領分の者に孝子等を申出候へと、申觸候へ共、未はか〲敷出不レ申候。いかゞ可レ仕哉。　答。御君臣共に當時個樣の思召寄、希代の御事候。恐悅々々。乍レ去外に御好み被レ成候事程、御好み厚く成候はゞ、追々出來可レ申候。餘の事の思召立候事は、殊の外御實心を御用被レ成候。此筋への御心の被レ用樣、夫程御親切に相見へ不レ申候間、末々の感通すくなく候かと被レ存候。兎角に自反被レ成、御覽可レ被レ成候。　曰。下情感通申候故、末々の者迄政事の儀をも無ニ遠慮一可ニ申出一旨申付候へども、不ニ申出一候。少くは申出候ものもあるよしに候へ共、中に立候役人、取上げ不レ申樣に聞及候。されど吟味も難レ仕候。この段いかゞ可レ仕候哉。　答。これ又

被二仰付一候ても、不レ存事は難レ成事に候。一通は存知可レ然候。其内其筋器用にて克鍛練仕候ものは、其筋の御用に可二相立一候へば、珍重の事に候。

弓馬。躾方。劒鎗。何れも必銘人に成り候樣にとの事にて無二御座一候。一通り存知可レ然候。其上器用にて銘人に成候は、一段の事に候。右の術何れも秘事仕候事に候共、奥へ入候て其筋十分究可レ申と存候者へは、其流義の通りに可レ仕候。國主より一家中へ被レ教候事に候へば、秘事は無用に候間、一通の事は相傳仕、稽古可レ爲レ致候。誓書も無用に候。唯其師へ禮を行、帳面にしるし、師弟の約可レ然候。若其道進達仕、奥儀を承に付誓書を仕候事は、師の家法次第にて候。夫共に曲藝の誓書に、神明を輕々しく書入候事、後世の風俗に候へども、無二勿躰一候間、神號血判は無用に可レ仕候。但弓馬鎗劒の術は、大躰は四書の講書も相濟候上にて可レ教なり。小兒には先不レ可レ使レ學候。小兒の內個樣の藝を學び候へば、心騷ぎ候て、後々は讀書などをいやがり申者に候。素讀抔すみ、文字を見ろに苦勞ならぬ程に成て教可レ申候。夫共に身の養生程に可レ使レ學なり。これ等好事にて候故、人もほめ自も喜申候故、心のすさみ申を不レ覺ものに候。

軍學。是又城取、軍伍、軍器、其外この筋の內人々嗜仕、御用の筋に可二相成一儀は、秘事仕候事堅無用候。是又勝負の利より、家々の傳來の事は、前條同斷に候。

律學。是また官家の人は一通可レ存事に候。此筋器用の者は猶以取立候へば、末々御用にも可二相立一候。右各其師をえらび可レ被二差置一候。右は藝術所業にて候。先第一に五倫の事を主に可レ仕候。此

軍學、鎗劍の術、水利地方の類の藝稽古いたさせ可ㇾ申候。一人に右の品々不ㇾ殘學ばせ候樣にと申事にては無ㇾ之候。右の内その小兒の好み候事、又其筋の器用なるものに、夫々の事を爲ㇾ學可ㇾ申候。講書手習は何れにしても少しなくては不ㇾ叶事に候。十分に仕候事は、其人々の好み候生質次第に候。此段學問處、奉行と可ㇾ被ㇾ相談ㇾ候。其小兒成人に付、夫々の筋へ可ㇾ被ㇾ召仕ㇾ候。若遊ばせ置て成長の後、一事の御用にも不ㇾ相違ㇾ、手跡讀書など、一圓無案内に候はゞ、前々の格式の通に、番入等被ㇾ仰付ㇾ間敷候。左樣に相心得候て末子までもさし出し可ㇾ申候。尤千石以上の者といふとも、部屋住の事に候へば、學問處への往來は一僕にて可ㇾ罷出ㇾ候。だて小袖等かたく無用、小身のもの共は、尤可ㇾ爲ㇾ綿服ㇾ候。若又手前にて師を取遣し候か、又夫々の師を招申度存候者は、勝手次第に候。夫共に其子細と其師の姓名とを書付、學問處奉行まで可ㇾ相屆ㇾ候。或は病氣などにて入學延引の者は、又其品を書付可ㇾ差出ㇾ候。尤成長の者にても、部屋住の者は右同斷に候。何百石以下の者どもには、筆紙等の料可ㇾ被ㇾ下候。教法等の事は、講師に可ㇾ被ㇾ命候。尤奉行の人、其旨を心得指圖可ㇾ仕候也。

條目

讀書。講書。手習。異樣の唐流は無用に候。用に立候樣に可ㇾ仕候。夫共筆法望の者は格別に候間、所存に可ㇾ任候。

地方。是又一通りの學問にて候へども、人毎に不ㇾ存候ゆへ、其身領分の事も、不案内の御代官役

ら入らざる講師を大身にも難レ申付、また格式をもすゝめがたく候、また大德の人有レ之候はゞ、急度召抱候品も可レ有レ之候へ共、それも相見へ不レ申候。いかゞ仕可レ然哉。　答。御尤ニ候。尤道德ある人を重く召出され、種々指圖ニ候事、肝要に候へ共、夫は多くも有べからず候。夫とも先御身が所レ知を相應に御學可レ被レ成候。さて講師は、唐とても必重候へども有まじく候。元來御家にて休々たる大官大祿の歷々も有レ之候へば、夫々學校奉行に被二仰付一候て、書は講師に御よませ可レ然存候。しかれば文字一通り讀はかりにても、とし若にても、祿輕く位ひきくても不レ苦候。此奉行たる人、年德ある人を御撰び可レ然候。其外にも、夫々御家中にも彼是相見へ申候。さて大人に講釋を承り候へと被二仰附一候分にては、中々この已後とても出席多かるまじく候。夫共に人の敬て慕ひ申程の人ならば、其噂も可レ有候へども、夫程の人も又不レ多候。唯少年の人を被二仰付一出席候樣に可レ被二仰付一候。其法命ぜらるべき旨、家中の面々近年風俗よろしからず候事、國君御身の御誤りと被二思召一候に付、此度御改可レ被レ遊と思召候。仍レ之御自身にも專學致に御心をよせられ、若殿方にも師範誰々を被二仰付一候事に候。何れもその段相心得、五倫の實を聖經の書に學可レ申候。大人に罷成御奉公に罷出候者は、隙も少く私用も可レ多候故、急度罷出候樣にとは不二仰付一候間、面々於二宿處一も心掛、少も隙に罷在候時に、罷出學び候樣にと被二思召一候。家中諸士の子供は、常々隙に罷在候を、大かた遊び事にのみかけ置て、學問などは爲レ致候樣子など不二相見一候。向後八歲以上の子供は、學問處へ差出し、孝弟を本として、五倫に厚候樣に可レ仕候。且また讀書、學問、並手習、算數、躾かた、弓馬、

はゞ、必定及二難儀一可レ申候ゆへ、その時は盜人火付等の類も出來可レ申候。其上近年豐年うちつゞき申候故、難儀至極とも相見へ不レ申候へ共、一旦飢きんなど有レ之候はゞ、國々の城主にも貯へ御坐なく候へば、當國はゆたかに御坐可レ有候へ共、外の並にて存候へば、大國の御すくひは、また大分の事にて候へば、いかゞと被レ存候。民の善にうつるべきものは、少々の御費をなされ候ても、善に移らせ申度事に御坐候。又その仕方も可レ有事に候。

敎化の事別て御尤に奉レ存候。此段主人も甚苦勞に被レ存候故、學問所など申附、儒者を召抱、講書をいたさせ、家中の面々出席仕候樣に、內々支配のもの共より爲二申渡一候へども、色々の申分どもにて、出席の徒も無二御坐一候。仍レ之敎化難レ行候。家中さへ如レ斯候へば、町人百姓まで及び申事甚難く御坐候。いかゞ可レ仕哉。貴老の御了簡承たく候。樣子次第可二申付一候。　答。成程近年御家中の學問御世話に被レ遊候事ども見及、奉二感心一候。その講談めされ候儒者衆は、大切の役儀に御坐候。子細は君の敎化をのべ被レ申候事に御坐候へば、御名代に候。然らば三貴の內責て二貴有レ之人を被レ命可レ然候處、三貴の內一貴たしかに有レ之人も見へ不レ申候。三貴とは德一、位一、年一にて候。老輩の人三人も相見へ申候。格式は儒者とて輕く被二召仕一候。德の沙汰も不レ承候。外はとし若き人にて御坐候。責て文才經理か、または大祿にても有レ之候へば、尤に御坐候。いづれもさしてすぐれたる事相見へ不レ申候へば、御家中衆の服せられざるも理かと存候。そのうへむかしの學問講釋ばかりにては無二御坐一候。克く御勸辨なされ候て、被二仰付一可レ然存候。　曰。御尤に候。去なが

小兒迄でさへ是を聞覺候て、風俗をやぶりこふすにしに成り申候。一切停止にいたさせ申度候。或に縫方、ぐしつけかた、また孝行者の沙汰、日用の事、年代記、屋鋪の應付など、凡て個樣の類は、隨分うらせ申度、又物もらひの祭文など、小歌の類も、又處々にて心中橫死の沙汰、不義の媒なる事をうたひおとき候事、これまた停止仕度事に候。

淫書、淫畫、淫器、婦具、唯いま風俗畫と申もの、多くは狂言芝居の者の仕候事、男女淫亂の形象を畫、また假名本も多くはその事にて御坐候。此類且又淫器も品多く有ㇾ之候。かるたの類、有いづれもかたく停止仕り度候。

右何れも人心をやぶり風俗を損じ申事に候へども、目に見へたる惡事もなく候故、人心のいつとなくやぶれ候事、人々不ㇾ心付ㇾ候。されど主人のものをかすめ、引負をいたし、主命をそこなひ候に至り候も、皆個樣の內よりやしなはれ候故にて御座候。是等數多の害を除きさらざれば、民の善心をやしなひ立て申べき道ふさがり候て、治平にいたる事は決定有るべからず候。され共これはその害本を論じたるにて候。大本とは申がたく候。大本は民の困窮と敎化との上に有るべく候。克く御心をひそめらるべく候。

民の困窮大本なりと被ㇾ申候事、至極御尤に御坐候。去ながら五六十年前より困窮々々と每ㇾ人に申候へ共、さらに困窮の樣子も相見へ不ㇾ申候へば、只今は此儀は心安く存候。いかゞ。　答。思召御尤に存候。拙者とても左樣に存罷在候。しかしながら、前の數々の事にて世を渡り候者を、急度やめさせ候

候時は、必奉行處へ訴、仕組を段々申上る事に候。然る時は在來候實事の外は、かたく無用に仕候て、淨留理坐歌舞妓ともに、珍敷事一圓停止仕度候。下々はか樣の事にて昔もの語をも存候處、古きもの語をもいろ〳〵に作りかへ珍しく仕候より、非義無道の媒と成、事實をとりうしなひ申事候斯のごとくに候へば、是も褒風のうちにては一助たるべく候。これらの事も、俄に停止候て、その職のもの渡世をうしなひ申候へば、夫等は元來放埓ものに候へば、落付たる所業は不レ仕候へば、盜賊となり可レ申候。人心改り申迄は、先是等は御免も可レ然候。數年の後は所置可レ有レ之候。

開帳百日廻向。先御無用に候。無レ據被レ許候とも、靈寶などいつはりの物を正し候て、廣めしむべし。又その場所に不義の見せもの、幷に僞りの見せもの等、克く吟味の上に可二差置一候。佛信仰にて來候者は尤に候。いろ〳〵の見物等は同じくば無用に御坐候。

建立の諸勸進。處々佛をこしらへ、或ははくしろ、或は釣鐘を鑄候。又は天蓋を寄進仕など、色々の儀を申立、又は其等の建立とて、晝夜にかぎらず、男女打交り、町々を小歌などの樣に、いろ〳〵のふしを付候て、うたひありき候。又寺にて寄進とて、若き男女など念佛など唱申候。向後坊主の外はかたく停止可レ然候。數十毎年こしらへ、秩父など納め申候。彼秩父にては大分うち込有レ之、こまり申候由にて、金箔銅等大分のすたりにて候。この六部經納の者別て停止仕度事に候。

よみうり、うたひうり。只今町中を草紙をよみ、或は小歌をうたひ候て、うりありき候もの、幾人と申數もなく多く御坐候。多くは心中横死のさた、淫亂不義の事のみ候て、人心をうごかし申候。

の事を改め候了簡を仕べく候、その間は有來候遊女を以て渡世を仕べし、外へ出相應の商賣願に存候はゞ、いか樣とも朝廷より可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候旨を申渡し、さてかの女衒のものかたく停止に被ㇾ仰付、其後若背ㇾ法候て女子を買入候はゞ、其女子は吟味の上に公儀へ被ㇾ召上、御家中の輕き輩下女所望のものに、普代に被ㇾ下可ㇾ然候。尤右の女を取次賣候もの、幷に遊女屋とは、巨魁は死罪流罪、次は黥追放、または黥のみ。この吟味は年々七八月より末、人別張を吟味にて、遊女他へ請出し候か、または死候は、その月日を書付、張面を消し可ㇾ申候。若しいつはりかすめ候はゞ、その數によりて、右五人組の頭は死罪、殘四軒も連坐、黥或流罪、品によるべし。その闕處の物はらひ候金子、幷に道具にても、このうちの化に服し、商賣致候者へ褒美被ㇾ下、或は遊女かた付候爲に被ㇾ下候て、可ㇾ令ㇾ安堵ㇾ候はんか。諸方道中筋へも申付、女衒のもの女子を買取往來仕候者は、其宿に其女子ともに留め置、代官へ訴來可ㇾ申候。その女子は其邊の富しものゝうち、望のものへ被ㇾ下候か、又は親里へ被ㇾ下候か、品によるべし。且又定たる遊女町の外、御停止の地に遊女有ㇾ之候はゞ、是またその遊女の親元へ被ㇾ下、遊女屋は如ㇾ前にて可ㇾ然候。何かたにても、何度にても、遊女を被ㇾ召上、親里へ被ㇾ下可ㇾ然候。親も無ㇾ之ものに候はゞ、定りたる遊女町へ可ㇾ被ㇾ下候。小比丘尼も同前に候。この儀も貴處にて各同斷

芝居。これまた有來候分は難ㇾ相止ㇾ候、新規に出來不ㇾ仕樣に御手あて肝要に候。さて狂言にも、古風なる盛衰記太平記など有來候事を其儘に仕組可ㇾ仕候旨申渡度候。京都などにては、狂言を作り申

おなじく花美を被レ成候はゞ、天より御改可レ被レ成候。左候へば國家の大亂にて候。この御こゝろづき國家大平の御瑞相と目出度奉レ存候。偖風俗とは上の風にて、下の俗となる事にて候。大守樣幷貴公の御風正しく候はゞ、いつとなく改り可レ申候。この筋は君臣ともにことの外苦勞被レ遊候と相見へ、近頃は段々と改り申樣に相見へ、感心仕御事に候。此上は段々改り可レ申候。御いそぎ候はゞ却て害有べく候。御こゝろ靜に可レ被レ成候。乍レ去其風俗の破れ候本に御心を可レ被レ附候。數十年來の蔽に候へば、唯今の敗に御かまひ候ては、刑人も出來候て中々改り申間敷候。くづれ候本をふさぎて置候へば、次第に改り可レ申候。風俗のやぶれ候本と被レ存候箇條を御考のため、書付入二御覽一候。

遊女町。元來無用に候へども、有り來候事御止め候事は、難二相成一可レ有候。唯不レ得レ已の意をうしなはれざること肝要に候。然ばこの上は處々盛に成り不レ申、この已後自然に相止み申樣に仕度候。

只今女衒と申候て在々處々を回り、女子を見立買とり賣申もの御座候。か程の事にて、女奉公人拂底に相成り、士庶人共に事缺申候。今迄の遊女は其まゝ被二指置一。この後少女を買とり遊女に仕立申事かたく御停止可レ致候。此女子もみな朝廷の赤子にて御座候處、夫を畜生に仕立申事、國君の不レ忍事に御座候。今より御手當可レ被レ成候はゞ、其法遊女町にて卅軒有レ之候はゞ、六つに分、五軒づゝに長を立て、その內の遊女の員數を帳面にしるし、並に少女のいまだ遊女にも出不レ申者をも又書留候て、この後一人も買取申間敷候、この商賣畜生の所業也、汝等斯の如き事仕來ると雖ども、同敷人間ならずや、飢寒にせまるにもあらず、何とぞして人間になり候へ、しからば此後段々こ

上の人の武威にて候。謙讓厚き人には、如何程無法ものにても、慮外を仕りさやあてを仕る心は、おこらぬものにて候、夫にさへ慮外を仕掛申ものは、誠の狐狼にて、頁知に御自反可レ被レ成候。朝鮮人は、千里を隔てゝ日本の武國へ渡り候にさへ、皆々丸腰にて候へ共、日本の武士朝鮮人をころしもふしたる事もなく候。二腰を挾みて我國のうちをありく武士にも、ころされたるもののなきにあらず候。刀をさゝぬとさすとは、土地と時代の風に候へば、今士たるものゝ丸腰にて往來仕候事は、時風を破りたる曲ものにて候故、輕きものにても咎にあひ可レ申候。されど刀を指たるとて、人を切候ものは、又赦されまじく候。此故に當時の武士の刀をわするゝ事は無㆓御座㆒候。昔梶原源太は、遊女のまとに刀を忘れ候て、よみかわせし和歌も御座候。よからぬ事はいふに不レ及候へども、今の忘れぬ武士の源太より勇氣のすたれたるにもあるまじく候。忘れたるとて、源太が一分のすたりたるとも不レ申候。か程の事は時代の風にて候。唯放心をおさめて、性根を存する事は、時代にも土地にもよるべから候。

一。世なみとは申ながら、當國ことさら華美にて、是より風俗も甚あしく成り行候故、主人もことの外苦勞に仕候へども、大國故か改りがたく候て、氣の毒にぞんじ候。いかゞ可レ仕候哉。

云。天地の四時にても、世上の花咲候時分、我一人冬の樣にて暮し可レ申共不レ被レ申候。道理に叶ひたる事は、その儀可レ被㆓指置㆒候。無用の華美は、隨分御はぶき可レ然候、さて世の花美も、大かた至極に至りしと見へ申候。此時御心附候て御改候は、一段御尤の御仕置にて候。此義御ぬかり候て

りたるものにて候へば、本源は土地も時代もかまひなきものにて候。事業の上には、處の相違勿論に御座候。拙者底の存寄は、證にも成まじく候へば、互の講學にて候間、覺悟申候程のことは、御相談可ㇾ申候間、可ㇾ被㆓仰聞㆒候。

一。此論畢竟天下を一家と見て、人我の隔をやぶり候事、第一の主意と見へ申候。御尤至極にて御坐候。去ながら聖德成就の時はさゝはりも有まじく候へ共、拙者など人のゆるし申迄は、先土地の風に從ひまうさねばならぬ事に候。御覽の通大國の仕置を承り居候へば、無德とて今さら斷も不ㇾ被ㇾ申候。たとひ斷を申ても、外に聖賢の人も無ㇾ之候へば、とかく行はれがたく候。日本の風にも候へば、武威の他國よりをとり候やうなるは、主人の奉公にもあしく、口おしく存候。此人我の隔はいかゞ可ㇾ仕哉。承度候。

答曰。夫は日本の風にては無㆓御座㆒候。貴公の風にて候。貴公の御心中勝心御座候故、御思召かと存候。唐にても、左樣の心より爭奪やみ不ㇾ申候ゆへ、そこを歎きたる論にて候。德聖人ならでも、克禮讓を行ひたる人、日本にも多く候。必ず爭ひ勝を手柄と存候は、匹夫の事にて候。同氣なる人は、手柄ともほめ可ㇾ申候へども、禮を好む人は、苦々しく可ㇾ存候。貴公のその勝心を引用ひて、禮讓の人にをとりたるを御尋候て、少も行はれがたき事もなく、御主人への御忠義も、なるほど立可ㇾ申候。一旦人に爭ひ勝候樣なる事は、世のあらそひを好む人はほめ可ㇾ申候へども、終には御國のためあしかるべく候へば、必〳〵御用心可ㇾ被ㇾ成候。たゞ禮讓厚きうちに、人のおかしがたきが、

にして、其郷の民父母をしたふが如にして、其流を汲む者は、又かの忠孝の德敬信の實を一念感通の良知に試みざることなければ、先師の治蹟從て知べし。是先師の學老佛覇功の徧蔽に落ず、內外支離の作爲に渉らずして、誠に本邦の王文成公、夫此人に非ずして誰ぞや。惜哉。再三傳に及ては、大義未そむかずと云へども、本旨漸失ひぬれば、良知を談ずる者は聖敎を外にして二氏の空寂に流れんとし、治術を講ずるものは事業に局して覇功に落んとす。甚き者は先師の學は王氏にあらずと云へば、二夫子の微意も將に亦泯滅せんとす。豈いたましからずや。これを以身の不肖を忘れて、ひそかに大學古本に訓釋し、又此論に注解して、共に國字を以これを書し、これを兒輩に授けて、知行合一の訓心業不二の良知にそむかざらしめんと欲すと云。享保六年辛丑四月三日。

坂本寒源論外傳

或問て曰。聖道を論ずる事一心の微より天下の大なるに至るまで、一としてのこる處なく候へば、拙者底の文盲なるもの迄、聖人の道を白日の如くに辯へ候事、誠に王子の御蔭と難ㇾ有奉ㇾ存候。去ながら、水土のかはり時代のちがひにて、唯今日本にてはか樣にはなりがたき事もあるべきかとも存候。御敎示に預り度候。答曰。よき御不審にて候。不ㇾ信人は、是は唐の事にて、今時日本にてはならぬ事と、一向に打捨申候が多く候。又信仰の人は、なるならぬ事辨へなく、唯尤とばかり承り置候。是も用にたらぬ處におなじ事に候。唐は大國ゆへ、おなじ唐の內にても、水土のかはり甚敷候。時代の違は、日本とおなじ月日にて候へば、ならぬ事のみにて有べく候。去ながら此論は本源を語

執齋先生雜著卷之四

拔本塞源論私抄序

學は心學也。致良知其功也。良知の學政と通ず。夫良知の妙內外二事なく、彼我別人なし。此故に明德を萬民應接の事業に明にすれば、天下則平かにして、天地も己が心裏に位す。人民を一念精微の誠に親めば、明德則天下に明にして、万物もとより各其所を得る也。明德以其本體を立て、親民以其大用を達す。これを致良知と云。若夫明德を以經濟法令の外とする者は、明德の量を不﹅知者也。老佛の學是也。政事を以誠意正心の外に修する者は、亦是親民の仁を不﹅知者也。覇功の徒是也。宋の數君子其偏廢の蔽を察して、德を精微の內に明かにし、業を法令の末に講じて、內外各功を用て道の全きを盡さんとす。誠に似たり。されど內外を二つにして、生意自然の感通に本づかざれば、亦不﹅復聖學之本旨。明の陽明王文成公ひとりこゝに見ることありて、孟子良知の說をかりて、大學格致の功をかゝげ、大學を古本に復して後儒の誤りをたゞし、拔本塞源の論を述て王道の眞をあらはせり。實に萬世聖學の恢復也。其門人德洪汝中のともがら。皆能其旨を得たりと云へども、再傳の後終に其統を失ふ。吾江西の中江先師、遺經によりて其緒を接ぎ、致良知の學を本邦百年の後に興起し、訓詁詞章の陋を改めり。從學の徒孝弟忠義の德良知に發し、忠信愛敬の實感通に出ざることなし。されど其時を得玉はざるを以て、治平の效を一世に見ずと云へども、其沒已に八十年

丞繼ニ箕裘ヲ就レ師明レ經。退居授レ徒。最善ニ和歌ヲ淵ニ源衣櫻ニ晩謂ヲ醫司ニ民命ヲ庸術奚施。遂捐ニ故業ヲ。唯國雅是唱　弟子日進。享保十年乙巳二月二十三日病卒。年七十九。臨レ絶賦レ歌。鐫在ニ碑傍ニ無レ嗣。養女名ニ菅野ヲ風韻大レ父ニ于レ是囑レ女曰。碑字必請ニ希賢ニ賢偶從ニ東武ニ來。問ニ其家ヲ女告ニ遺命ヲ賢心雖ニ已許ヲ之。以ニ世系疑ヲ未レ果ニ還レ武。去歲復來。女亦亡矣。因憶。賢甫成童。從ニ事函丈ニ既長。雖レ常ニ師四方ヲ未ニ嘗忘ニ敎育之恩ヲ也。乃悲ニ湮滅無ヲ議。且懼レ倍ニ已許之心ヲ。重就ニ碑陰ヲ勒ニ其梗槩ヲ云。

享保二十年乙卯六月。三輪希賢誌。

執齋先生雜著卷之三終

洽。草具相對。不三必事二肥鮮一。士之或窮而不レ能レ存者。各因二其才一。推而就レ俸者。二十餘人。或有二特恩一。乃賑二族人故舊及家童一。以廣二其惠一矣。嘗憂二岩松氏家系放失無一レ徵也。致レ力彈レ精。探求多方。卒得二其遺乘一。輯以爲レ編。題曰二岩松家系附錄一。至下有歷二上覽一崇二褒稱一者上。君之行宜。可二以概見一矣。今茲享保十九年甲寅四月二日卒。壽六十有六。葬二于武州豐島郡蘘荷谷林泉禪寺先塋之側一。佛氏謚曰二知鏡院殿有山威德居士一。君娶二西郡氏一。生二二女一。皆先卒。養子忠淸。時爲二內官一。又賜レ着二布衣一。未又擧二一子一。名忠男。既勝レ冠。孫男某。尙幼。三輪希賢謹誌。

書二篆字論語後一

浪華森本氏。長二筆法一。兼好二古篆一。凡諸家論二篆法一書。無レ不二旁通而盡窮一レ之矣。嘗疑。論語之書所レ記隸體。考二之古篆一。有二異同一也。於レ是盡還二之古篆一。以成レ書焉。證以二許氏說文一。其某字篆作レ某。某字篆從レ某之類。不二一而足一。享保甲寅歲。偶來二武府一。未二數月一。就而學レ之者。貴賤緇素頗多矣。僕得レ見二其書於海上氏之机上一。尋相二見其人一。一面如二舊識一。乃請三鄙言於二其書一。僕辭以二不文一。而不レ許。退而思レ之。論語之書。漢唐而來。字義難レ解。而存二之疑一者。間亦有レ之。顧由二此書一推レ之也。則安知レ不レ有下得二其當一而審二其義一者上乎。然則。此書之出。豈爲レ無レ補二於校讎一也。但憾僕未レ暇二深覈一レ之耳。姑書レ之以塞二其責一云。享保甲寅冬十月。執齋希賢誌。

醉露英覺菅雄墓誌

君姓河瀨。諱菅雄。菴號二的堂一。號二醉露一。京師人也。其先奉二仕侯國一。至二父立一業レ醫。君少小英敏。

事業。綽乎有餘也。徒譬之曰設豈繁伯氏之意也乎。享保十七年壬子。執齋三輪希賢序。

祈水文

維享保十七年。歲次壬子。七月八日。洛陽老書生三輪希賢。敢昭告于井泉神。夫天一生水。地六成之。以生育萬物。猶父生兒母成之。出乳以育之也。慈婦賢母。而盡不能不然者。以親愛之實。根於天地也已。故人非水火不生活。昏暮敲人之門戶。求水火。無不與之者矣。他人猶如之。況於父母乎。況於天地乎。今茲希賢將移明倫精舍於睦見之宅。地內堀井求泉。意此地所出之水。素帶鹽鐵之臭味。不堪調食止渴。況能製藥劑乎。僅足以洗汚濯穢已。是豈水性而如此乎。淸濁所以使然耳。故幸鑿得淸冽冷水者。或千百一二有焉。因謀之井工。曰是眞水脈。塞泉可必得矣。然而是亦非工射利之常言。固不足以取信也。恭惟。神之顧之也。賜以淸冽甘泉。大旱酷暑無竭。以供精舍之生徒。施及鄉黨士女。則當以占此道興起。謹以洗糈酒者祇祈。尙神其顧之。希賢敬白。

大久保源忠喬朝臣墓誌

君諱忠喬。姓源。氏岩松。稱半五郎。後改源次郎。號堂呼月。寬文九年己酉七月十二日生。上野國新田郡田島鄉滿次郎秀純第二子也。大久保氏藤原忠宜養以爲子。遂冒其姓氏。乃繼其家。寶永丁亥。命爲小十人頭爲其隊甲。實俸二百石。職俸一百石。享保丁未。爲御廣敷御用人。職俸六百石。賜着布衣。君爲人儉而惠。果而寬。好學而略涉子史。兼好和歌。每逢洗沐。乃邀賓友。笑語歡

以道相訊如足下者。信朱學門中大勇。而可謂能學朱者矣。慚愧何盡。在昔朱文公不信陸之學。而與之交厚。其知有道。而不知有我也。實大賢心也。今足下所問。亦實新安之心。而僕惟耻非青田之學萬々。又何以當之。僕今所信則新建。新建學取之陸居多。其全書雖所希有。足下之博。意既一涉獵之。假令偶未經目。傳習文錄具在。試一取讀之。足下之明。目擊間當瞭然也。至誠之心修之身。又豈一日之所盡乎。僕元不文。近年在武陵。所友多武人俗吏。多不文。然古曰。人皆可以爲堯舜。然則不文固無害可爲堯舜也。故解新建四言教以國字。姑以授窮鄕晩進來訪者。今雖未脫藁。寫一本往之林氏。意以之進足下。教導餘暇。一覽賜是正。何幸若之。僕明春亦幸有登京師約。人事雖難豫期。若得如意。則面語盡之。伏乞心亮。希賢頓首再拜。

享保十三戊申夏四月廿日。執齋三輪希賢。

古本大學講義序

常陽繁伯氏。深信陽明先王之學。爲其門人講古本大學。仍以國字記其說。遠寄之予。以請是正。予雖未有接其人。而扣其所得。然其說之明當。其工之的切。世所未見。則心交固有如舊識。□可辭也。其一二或不盡者。敢加損校定以還焉。予嘗竊作此解。而未脫藁。今得此書。使門人講求於此。不亦幸乎。剞劂氏柳枝軒。請梓之。夫筆之書。以爲一文字。誠非先生之心。而況梓之梓乎。以故不可也。然而多邦有志之徒。苦古本之無說。而此書之謄寫也。强之數矣。終命之梓。以公吾黨。庶幾讀者。由是以知古本之不可改。而工夫之有統紀焉。則施之心術。措之

實之於常省子及先生門人泉仲愛。加世季弘。中村叔貫。在備州必取正於斯而止焉。乃與其家所藏合而錄之。名曰藤樹先生全書。此書成時。先生長子宜伯。次子仲樹。其既卒。季子常省獨存在江府。季誠以此編寄之。幷請之序。時遇江府大火。而其書亦罹災。不亦傷乎哉。季誠於是又採輯稿。再成編。而得復全焉。于時常省子亦既下世。則徒藏之家。多經歲月矣。近頃聞僕嘗文成公之道。篤信先生之學。徽寄此編。求之序。僕固雖信其學。非有分寸所得者。則何以加鄙言於君子之書爲乎。仍固辭之。而季誠猶求之不已。僕又惟之。小人鄙言。固雖不可以汚君子之書。而季誠實大功於先生之書。則又不可沒之。而有後之序此書者。因以爲案。則亦僕大幸矣。於是述其概序以贈之云爾。享保第十乙巳四月望後學洛陽三輪希賢九拜謹書。

答鈴木貞齋書

奉復鈴木貞齋先生案下。永論。雖未接芝眉。雷名轟耳。去春在京師。林生傳以足下言。不堪感謝。而淹留暫時。無由得一面。遺恨不可言。忽蒙下問。何幸々々。往復數回。不堪欣慰。後學各立門戶。恃己好爭者。無求道之志。而逞勝心也。僕三十年前。始讀新建書。覺有少所益。而後只管信之如神明。今僕年已六十。而萬無一得。雖然。於求德于己。而不責道于人之志。則三十年來如一日。每求助於君子。相共成之外。無他心矣。如朱學徒。雖其舊好如兄弟人。棄不顧如敝屣者有焉。顧僕實敝屣。其不顧也宜矣。我從而得自省而警惕。則棄我者愛我者。仍之僕則不忍棄之。却敬之。以故每得全交。而不失其爲故者。實此學幸也。後世學風如是。中而

症。然而其知下尊ニ信自己一不ニ親切一云々上者。即是良知而已。只管存養。知下尊ニ信自己一不ニ親切一云云上之良知。久久不レ怠。則終得レ有ニ親切着實之秋一。然其欲下知ニ良知一覺中親切上。是乃效驗耳。則非ニ良知一。非ニ親切一也。但知下得非ニ良知一者上。是良知。覺下得非ニ親切一者上。是親切。是故。常々知レ非ニ良知一。常々覺レ非ニ親切一。是乃存養之功。更思レ之。享保六年辛丑四月七日。

藤樹先生全書序

藤樹先生全書若干卷。吾友江西岡田季誠所レ輯也。先生嘗講ニ學於江西小川一。時季誠之父仲實從ニ師事之一。季誠生在ニ先生既沒後一。而仲實卒亦在ニ其幼時一。然而季誠能續ニ其志一。從ニ先生季子常省軒季重子一。得レ聞ニ其道一。信レ之篤。懷レ之深矣。嗚呼。先生生レ於ニ江西一。長レ於ニ豫州一。後復歸ニ江西一。養レ母終焉。其學初尊ニ信朱子一。潛ニ心於集註章句一。至下合ニ大全一而講中誦之上也。然猶憂レ無レ所レ得ニ諸其心一也。一日探ニ書肆一。遇ニ陽明全書始入ニ本邦一。及ニ一見一。數年之疑難渙然氷釋。與如ニ大寐得一レ醒矣。仍欲レ獲ニ此書一。而家實貧困。無レ可ニ以宛ニ書價一。乃脫ニ所レ帶大刀一而充レ之。手親携レ笈歸焉。詳覽熟讀。殆忘ニ寢食一。於レ是從下事致ニ良知一之訓上數年矣。超然默會。沛然融釋。得レ接ニ其心傳於ニ本邦百餘年後一也。然後以導ニ後學一。無レ不ニ感發而興起一矣。惜哉越ニ不惑一僅一年。而沒焉。則未レ見四大行三於ニ當時一也。其著述書贈答文固不レ少。而國傳家藏。未下有中輯ニ集之一者上。若ニ其翁問答。鑑草。大學中庸秘解。論語要語解。及鄉黨解。孝經啓蒙。醫筌。春風等諸篇一。則固雖二既印三行於ニ書肆一。或不レ成レ編。未レ定レ書。而不レ見ニ其全一矣。聞下其餘有中殘篇遺文散在ニ諸家一者上。則雖ニ片言隻字一。季誠必無レ不ニ求而獲ニ之。其或涉ニ疑貳一者。必遺

拙庵今井君墓誌

今井君姓源。諱正路。稱久右衛門。拙庵其號。武州江戸產也。其先甲斐人。父正方娶淺井氏生四男。君其季也。幼而穎敏。甫九歲。受業於見道先生堀子。先生器之。及弱冠其學幾成。而先生奄逝無子。君時二十有二歲。爲主喪事。服闋仕式部少輔堀公。居六年。因病辭祿。遊歷以養。得少愈。來京師。博訪有德知名之士。切實講磨。惟道之求。既歸。復仕飛驒守堀公。頗得優遇。未期月。舊疾再發以終。予時年三十有五歲。享保二年丁酉五月十五日也。葬於武州四谷成覺寺先塋之側。僚友從學者。井自求。湯守靜。能尙絅。山去留。藤保政。田綱養。林咬菜。林鳳吹。桑思玄等。相共哀斯人而蚤沒日無嗣。欲爲建碑。而請言於予。予意。君之於堀公仕前後纔七年。而中間辭祿。而居者實五年。然公眷遇之如此。僚友思慕之又如此。則君之取信於人。固有素矣。夫予與之友。雖未久。道合如舊識。今聞其訃。不忍辭。爲一哭而誌其概云。享保二年丁酉七月五日　三輪希賢誌。

答原田平八疑問

疑問一篇。親切著實。足以見好學之深。何幸如之。所喩平日之動靜云爲。共是本體之作用也。私意一萌。則眞知便知之者。固然矣。然是常々存養得眞知不息者。而方始便能知之耳。不然。私意之萌於倏忽之間者。眞知亦焉能知之。而每覺之於意遂事成之後。而常有不及事之悔。豈有能使克治之以復其本體之效乎。且當信自己。不能親切。而每搖奪於萬境者。亦一病爾

道レ之以レ政說。謹應二松平源君之命一。

政有レ本。身之謂也。身有レ主。心之謂也。行レ於レ身得レ於レ心。乃德之謂也。故爲レ政以レ德。如三衆星共二北辰一矣。苟無二其主本一。特欲下以二法令一持二國家一。以二刑罰一立中政號上。其亦非二先王大學之道一也。夫子言。人君修レ德帥レ民。以レ禮治レ國。則民德歸レ厚。不レ知二其日至一於レ善。其或反レ之。以二法制一維二持國家一。而不レ從者罰レ之。則民畏二其刑一。雖レ免レ爲レ惡。非二素感慨起一。無レ恥レ於二惡心一。而無レ至レ於二善道一也。然是亦以二政法正。刑罰中者一言レ之焉耳。若夫苛政濫刑。滅レ國失レ身。又何足レ論レ之。在昔舜命二二十有二人一。猶考レ績黜二陟之一。明二于五刑一。助二五敎一。則是用二政刑一者。而稱二之無爲治一者。特孳々乎爲レ善。少不レ有レ意レ於二政刑一也。是其所三以恭レ己正南面。篤恭而天下平一矣。後之人君。潛三心於二先王大學之敎一。知二國必本一レ身。身必由一レ心。以三不レ忍レ人心一。行二不レ忍レ人政一。是非二道レ之以レ德者一邪。其或方レ命斁レ倫。侮レ聖悖レ德。以爲二民害國蠹一者。放流而迸レ之。竄殛以誅レ之。而亦猶以俟レ道行レ之。則其誰謂二以レ刑齊一レ之乎。聖人之意。蓋欲レ知レ本也。故答二哀公一。則曰。取レ人以レ身。修レ身以レ仁。答二季康子一。則曰。子帥以レ正。孰敢不レ正。凡論語中。無三一及二法令說一。而惟顏子心正身修。故告レ之始以二四代之禮樂一。是可三以見二其意一矣。雖レ然。孟子有レ言。發レ政施レ仁。又曰。有二仁心仁聞一。而民不レ被二其澤一。不レ可レ法レ於二後世一者。不レ行二先王之道一也。嗚呼君德之仁。不レ由レ政。其何以施二之民一。而民被二其澤一乎哉。只當下先格二君心之非一。拔二其本一塞二其源一。以道中天下之民上。是可レ謂レ得二此章之旨一爾。寶永四年丁亥八月廿五日三輪希賢謹書。

事。魂勞於外矣。雖臨一事好惡之微、喜怒毎相繼也。況於死生禍福、切於身者乎。夫存心、則以明覺爲自然、物來自順應。何所用意也。石井信行退隱于勢、以書請名其菴。且記其說。予嘗名信行之菴以實、今也名之以存乎。蓋實也者心之體也。存也者實之功也。實誠也。誠者天之道也。存之者人之道也。或困而存之、或勉而存之、或無所存而存。而其成功則一也。存也其爲聖之工乎。孟子曰、人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之。君子存之。又曰。君子所以異於人者、以其存心也。存其可易而見乎。寶永乙酉夏至日。三輪希賢記。

勞謙記（受松平源君之命而作之）

大矣哉。謙之爲道也。人之所好、天地之所益、鬼神之所福。宜乎其能光而有終也。夫謙之已難矣。而勞謙尤爲難矣。其已勞且有功、而不德焉、不伐焉者。其心奈何。蓋君子常見天道無窮。實知己德之不及。故乾々惕々、孳々勉々、惟有間斷之憂。豈暇以一功一勞伐于人。故周公有大勳勞於天下、猶思之、夜以繼日。舜之孝、曰、於我何哉。文王之忠。曰、臣罪當誅。然則。舜文不自知其忠孝。而周公亦不自知其勞。是其所以能謙而亦不知爲謙也。若夫自大己之功勞、而人姑爲之退託者。其不亦難乎。以此觀之。謙也者心之謙也。非事之謙。心之謙、誠焉而王。出乎自然、而無矯者。事之謙、僞焉而霸。出乎按排、而有限者。故曰。夫學遜志務。時敏厥修乃來。雖然。有而如亡。盈而如虛。顏子獨當之。可易而見乎。故曰。亡而爲有。虛而爲盈。難乎有恒矣。不可不察。作勞謙說。寶永四丁亥八月十五日。三輪希賢。

抑自取耳。祿雖未必貪。而念慮之間。未能無意。則莫顯於幽者。不得自蔽。如人之毀己。雖不甚慍。其聞譽或喜之。則汲々于名者。我未能自遏。至若立異好奇。排朱張王。則不然矣。信王固深。尊朱亦不淺。何者。文公古昔之賢。而文成公亦古昔之賢。賢而不尊信。則其誰尊信之。雖然。其所以爲說四子六經之訓。古今人物之評。政事巨細之態。心術本末之功。則或取之朱子。或取之王子。不以王而苟同。不以朱而必排。故伯夷伊尹不同道。而同爲聖。晦庵陽明不同學。而同爲賢。司馬溫公嘗作非孟。而譏孟子。當時雖伊川之謹嚴。與之友善。未聞其絕交也。故聖人之道。人倫而已。朱子於人倫厚矣。王子亦於人倫厚矣。我豈以爲賢而不尊信也。又若老佛氏違世絕類游于方外。如薰蕕氷炭。相反而不可相容也。今之儒者。其於人倫。以爲厚乎。薄乎。事親則不順。事君則憂失之。交友則惡不同於己者。苦口强辯。斥爲異端。雖朱子在天之靈。豈能喜之。吾懲如此不爲焉耳。非復立異好奇。操戈入室者也。先正有言。君子於毀譽之來。非不敢動而已。愛以爲切磋之地。我將效焉。而子乃呶々爲辯。何其勞也。雖然。我有憂焉。寺人詩曰。捷々幡々。謀欲譖言。豈不爾愛。既其女遷。其於女遷。則我偏愛之。元祿十六年七月希賢書於東武日本橋寓舍。

存菴記

君子可以存心於己。而不可用意於物也。心存於己。則神肥於內。德全於我矣。雖處天下万機之變。常有餘裕也。故其於死生禍福之間。一如煙雲度大空。意用於物。則氣躁於

從予而遊者來告曰。先生何然泄々也。或貴先生曰。放言狂行。貪衒求名。立異好奇。排朱張王。或指之君長。或極之朋友。曰。道不同。不相爲謀。絕交可也。先生何不辯之也。予哂不答。馮几眠。數日又來言曰。如是乎。先生之不及事也。先生之惡聲日益盛。弟子雖闢之。奈衆口何。先生何不早辯之。予亦哂而不答。馮几眠。又數日來辭曰。有是哉。先生之昏且惰也。弟子於先生盡矣。其有譏先生之道者。即爲闢之。闢之不適。則加以怒。有非先生之行者。即爲辯之。辯之不服。則繼以爭。孜々勉々。極言盡知。防而未能。以是强先生。而先生不能之辯。乃過我而無禮。請勿復敢見矣。予諾之曰。甚哉吾子之愛我也。而是細人之愛耳。非君子之愛也。居我語汝。在昔或問文中子曰。如何而止謗。文中子曰。勿辯。予謂。是猶雖以爲君子之言。其爲止譏而勿辯。以不言諭之也。非君子之心。夫以言而爭。我未見其能終勝之者。以身而守。我亦未見其能終譏之者。大人豈有意於勝人。惟其自正而物自正而已。故君子實以爲己。不慮以爲人。何其辯爲。孟子不言乎。有人於此。其待我以橫逆。則君子必自反也。我必不仁也。必無禮也。此物奚宜至哉。其自反而仁矣。自反而有禮矣。其橫逆由是。君子必自反。我必不忠。夫內省不疚。何復辯之。若其有不仁不忠於己。則亦何借辯於口舌。自欺欺人。而爲哉。是故揚雄作解嘲。而不能免投閣之恥。韓愈作進學解。而論者有求進之譏者。豈以有其實之不可揜歟。若予者。雖不敢望乎君子。而亦不以小人自欺。則凡處事物之變。必自反而內省。而口卒不能則先王之法。而身卒不能踐前賢之迹。放言狂行之譏。

故心雖レ明而行非者。非二本心一。二氏之流是矣。業雖レ大而心邪者。非二聖業一。五伯功利之徒是矣。吾聖人之道則不レ然。心跡不レ二。事理同一。無二知行先後之可一レ分也矣。川井寔容從レ予遊。于レ今三年。正是聖法之第一考。雖レ然除下其間經二大故一罹中疾病上。約得二十有五六月一。夫大故疾病。雖レ無レ非二進學之地一。初學於二經業一。不レ可二遽責一レ成。則姑就二所レ得十五六月者一考焉。吾子心有二其十五六月之進一乎。業有二其十五六月之進一乎。心業未レ見二其有一レ進。則學二吾聖人之道一。而降二彼老佛伯功之徒一。亦既遠矣。而謂二之何學一耶。予曩接レ子未レ久。愛レ子未レ深。而望レ子未レ大。則責レ子亦未レ切。今也接レ子已久。愛レ子日深。而望レ子日大。則責レ子亦日加レ切矣。故放言詈語。苦口發レ之。子其勿レ訝。子心無二忠信實憤一。故數變而不二堅固一。子氣虛而餒。故務每不レ及レ事。子身慵而不レ困。故躰動不レ恪。此三者則其大根。凡百病所二由生一也。於レ此不二痛切省察。勇猛克治一。則何以足レ塞二兄弟師友厚望一。而彼黜斥之法者。將二亦及一矣。是以既而論レ之。而又重以二此文一者。欲下一摑一頓。存二血痕一以備中他日之韋弦上也。初予於レ子。常貸二寬恕一者。非レ以二子無一レ過。但恥二予身不一レ及耳。而乃辜二負於附託之任一。是亦予之一大罪也。吾兒今年方二歲。而今日偶足レ觸レ經。予切加二夏楚一。因思二歲之兒。縱令有二罪過一。亦何足レ爲レ慮。而不三敢少宥二者。愛レ之深。望レ之厚。而不レ暇レ耻二身之不一レ及也。而獨於二吾子一。何然愛望有レ所レ私耶。是亦可レ耻之尤甚者矣。故書以警二吾子一。兼謝下辜二負於附託之任一之大罪上云爾。元祿壬午九月初五日。

答二門人一

之學。存此實發此實推此實充此實無一事而非存實充實之事無一時而非推實發實之時。然後誠立明通。雖愚必明。雖柔必強矣。吾子勿疑。夫道一而已。嗚呼。予也亦天下無實之士也。而以教吾子。宜吾子無得也。信有於是有者曰。今而後眞知一實之外無物。一心之外無學也。弟子雖不敏。請事斯語矣。予曰。可也。遂名其齋曰實。又記其言并以送之云。元祿十五壬午年五月十五日。

責善文。與田井定容文之五。

在昔陳了翁作責善文。今效之。然彼以自責。我以責人。君子小人用意之相反。一何如是也。雖然。是亦朋友相交之道。勿甚罪之

典稱。三歲考績。三考黜陟幽明。夫聖人在上。猶日月在天。無所而不照斷矣。表正而影直。源潔而流淸。故不動而變。無爲而成。是其所以篤恭而天下平也。子曰。舜何爲哉。恭己正南面而已矣。其能如此。而尚有三歲之考。三考之黜陟者。是乃所以爲無爲也。譬彼日月之運。三旬一月。三月一時。生者生焉。謝者謝焉。統宗會元。終而還始。是豈有意有爲而然者哉。是知。所謂無爲者。非亦虛無頑空。無所謀爲之謂。惟其無所案排作爲之謂也。禹治水。八年於外。三過其門而不入。是豈無事。只行其所無事耳。天子之於天下如是。則諸侯之於國。大夫之於家。士之於學。師之於弟子。無往而不然也。故記曰。比年入學。中年考校。又曰。三年視敬業樂群。謹守此法。是亦吾人盡述職之事也。夫學問雖有心業之殊。其實則一也。

實齋記。梅庵。

宇宙間一實而已。天地之所以廣大。日月之所以光明。四時之所以往來。陰陽之所以晦明。乃至山高海深。龍興雲。虎生風。鳶戾于天。魚躍于淵。其所以然者。皆無非此實之用也。故一寸之萌。而爲凌空之材。一滴之涓。而爲漸天之波者。有實以繼之也。苟爲無本。木倒水涸也。可立而待也。人之所以爲人者亦然。故親親實親之。敬長實敬之。仁民愛物。則實仁愛之。善吾實好焉。惡吾實惡焉。夏葛冬縕。渴飲飢食。凡百行亦皆無非此實之所爲也。故曰。不誠無物。中世來。霸術之盛行也。尊王室誅不義。救生民於塗炭。而使後人免於左衽被髮之俗者。是其賜非少。而聖人之門。五尺之童子。猶辱稱之哉。夫五伯之事功。仁則仁矣。義則義矣。而其實則無有也。故五伯之仁義。君子不以爲仁義。不誠無物。不信乎。聖人與天地合其德。日月合其明。四時合其序。鬼神合其吉凶者。其實也。賢之所希於聖。士之所希於賢。亦希此實耳。實者何。心之謂也。古人曰。備衆理而應万事。非實而何。故學心即學實。若夫不求於心。而從事物之理於外者。可以爲聖賢之學乎哉。予唱是言比年。而其實則未有之得焉。常以爲憂。勢人石井信行。一旦聞是言。欲與予同此憂。遊學數年。今也將歸鄉。請言於予曰。弟子性柔弱。雖聞先生之訓。未嘗有得於其實矣。願垂一言以砭焉。遍書齋。以爲終身之戒。予聞之曰。吾子倘何出是言也。何吾子見實之淺也。一實立。而萬惡斯消矣。況柔弱乎。且夫剛乎柔强乎弱者。對症之藥耳。當有時而變。難常繼也。豈是以爲終身之戒。故君子

也。居士娶羽野氏、生五男三女。嫡子及幼女先卒。餘皆無恙。其子維亨。以遺言葬於黑田山雲岬寺。旣又欲別建碑於谷山常昌禪寺先塋之次。狀其平生諸德行、請言於予。予於居士無半面之識者。其亦何言哉。雖然甞聞之。以言教人者。而從而無實。以身先之者。心感而有繼。今也維亨忠孝篤敬之實。愼終追遠之意。繼守實素無墮。則居士之能以身先之者。予豈得以無半面之識而不敢言之。遂銘。元祿十五年三輪希賢

送中村恒亨叙[illegible]

先民有言。道之在人心、如白日、如大路。夫万善無非一心之用、而好惡之情、善惡之實。十手指焉。十目視焉。宜哉近且易也。自孟子沒而後。諸儒泛然不復務本、寘道於陳編之間、講學於事物之末、不反求諸身心、則生貴之偏。人欲之蔽。終不能以除之、而其傳也、適足以長傲也。其詳也。適足以飾非也。紛々之論於是乎興。各立門戶以相攪。號言學聖人、而不老佛若矣。不亦傷乎。當此時、雖有豪傑卓越之士、明智高才之徒、其何以辨是與非。而決其所適從、以是觀之。向所謂如白日而大路者。是邪非邪。余亦甚惑焉。雖然道無今古、心無彼我。則何遠且難之有矣。而十手指十目視者。又嚴々乎遂無別于今古、則其近且易者。豈待求之佗乎。如夫播白日於尺寸、異大路於東西者。焉能有所取諸予言哉。予憂於斯尚矣。今於恒亨叛省。亦稱此言、以勉其專力於根本。聞子嚮有谷先生者、博古君子也、子若過之、幸以余言正之。元祿辛巳五月廿八日。

殊衣服。或異言語。亦無往而不在。則世豈必乏於良才。上之人苟好而求之。則將出以爲之用。而彼愚不肖者。將亦化爲賢智矣。而今無有。然則美玉將疑於珷玞。而夜光終比於魚目也。

元祿十四辛巳春二月。

執齋日用心法序

人有天然自有之中焉。心之謂也。故執心則中斯存。大本立矣。而達道亦行。子曰。仁遠乎哉。我欲仁。斯仁至矣。信哉。故堯舜之傳。孔孟之敎。必執以爲之要也。予神山下書齋。扁爲執。竊取諸斯。以自警。且記工夫之條目。日用行儀於冊。就而爲之說。書以國字。名曰執齋日用心法。願不負初心爾。元祿十五歲次壬午四月廿六日。

西江一水居士碑

居士姓源。氏田井。諱家芳。號玄妙。西江一水其法名。而佐々木盛綱之裔也。十二世之祖忠信。居備前兒島之田井浦。因以爲氏。忠信之子賴高徙居丹波船井郡木崎莊。丹波有田井者。賴高爲始。而今木崎田井城云者。乃其故地也。其孫遷今林鄉。又遷園部邑。高祖諱常昌。任肥前守。曾祖諱賴綱。任大隅守。祖九郎右衛門家吉。父九郎兵衛家貞。皆不仕。至居士。以善醫仕邑大守小出君。居士性謹厚貞直。慷慨果敢。修己有法。接人以忠。內無色之荒。外有望之儼。終身言無不信。故言將來多有驗。一日謂其人曰。今時氣方不平。恐有變。不數日。邑大火。人以爲神。而居士又曰。今變氣尙在吾宅。吾身必當之。果疾不起。卒。壽五十有八矣。元祿十三年庚辰九月十三日

潰冒威尊之責於輿。道利人之誠。則君豈敢并沒之哉。若君不沒之。則其得輕忽之責。亦足下所不得已也。且泉而千。青之不盡。亦是吾所不得已也。嗚呼世事不可豫期焉。日月不可暫止焉。是則足下所嘗常言也。足下其遠遊。館滯則於養生甚之嗣也。盛夏暑甚。伏願爲道保愛幸甚。元祿十三年辰六月。三輪善希賢拜。

養嶋石記

南攝隱士。愛小石數年。而貿一怪石矣。綠色而半片峭立。巔有白文弦月。皆天質也。辛巳春因小倉氏示之井山子。請之名及記。井山子辭以不好怪物。既思之曰。君子之於物。無物而不可。小人之於物。無物而可。然則非物之不可也。人之取物。方有可不可也。於是名之以養嶋。其取諸李白之詩也。遂記以所感曰。夫昔人之愛物。非徒愛。必有所以愛之矣。故或以棋述高趣。或以酒發狂志。淵明愛菊。取諸隱逸也。茂叔愛蓮。取諸君子也。若夫珍禽奇獸之喪人志。華麗淫巧之蕩君心。則亡國喪家所由也。故君子爲之戒矣。今夫石之爲物也。堅確潤澤。不假文飾。入水不腐。投火不滅。王公見之不以爲賤。細民用之不以爲奢。用之不盡。捨之不費。原始而不見其所生。反終而無知其所窮。無地而不有。無人而不用。小大各適其用。而自然者也。隱士之愛。其亦有所取諸斯歟。而若此石者。又億兆中所希有。則自然且奇者也。嗚呼。石之無情且也。有苟好而求之者。則有此自然且奇者出焉。況人之有心。何翅如石之在地面已。大而賢智。小而愚不肖。上則王公卿相。下則農工商賈。遠至九夷八蠻之外。或

久從師者。不能安心寧居以終業。則已立之基。漸成之勢。將復頽敗矣。豈不傷乎。善聞其言。意謂。吾雖非任其職養其祿者。道業之興復。民人之美利。則實學者之通憂也。况於其有已立之基。漸成之勢者乎。况於居其鄉敎其子弟者乎。於是謀之於同志。欲募金錢益書價置學田。而同志中無有力者。今所募圓金僅二十顆。未足以充數人之口食。縱復募之。不過加三五金。而同志之膏血將先竭矣。而善與衆違。搢紳先生之門。無可藉以進。而亦不敢輙有意於求。則徒竭同志之膏血。而夫已立之基。漸成之勢。將幷失之也。不亦傷乎哉。欽聞水戶侯源君。天下之親。天下之賢。天下之老。而天下之英君也。嘗建楠公之墓碑於南攝。表其賢。躬埋歷任之衣冠於西山。晦其德。是皆向所謂助而成焉。譴而戒焉者邪。而其餘所不能窺測者。凡下豈得而言之也。若足下學識古今。文超當世。昔歲應君之禮入其網。夫足下而得斯君事之。君亦得若足下者臣之。實百歲之一遇也。而又何相遇之遲矣。善之與足下。才學固雖懸絕。於好古信道。則亦可以爲不辱于足下之友。故自少辱交。常蒙不鄙。是以不顧傍人之誹議。直述胸中所蓄。尙足下以前所述。恭達尊聽。伏惟君若聽之。則不過廢一朝之享。而善之所憂。將悉解矣。善之所憂。足下之所憂。而足下之所憂。則亦君之所憂也。何則。善之所憂。天下之公憂也。而非一人之私憂也。夫君一顧。而一鄉之善政復矣。豈特一鄉而已。雖天下之善政。亦可由興也。然則。天下學業之興廢。在君一顧。而豈謂君而憚爲之也乎。惟恐。足下其有輕瀆冒威尊之責。而善亦獲布衣遠汗君聽之罪矣。然以欲道業興復。不暇顧爾。設使足下得

通儒稱於天下。而。從事於章句幾十年矣。字解句釋。論蠶絲拔牛毛。自以爲頗得雲谷讀書之法矣。及退省其私。則無有分寸之所得。於是竊謂。如文公之學。其道大其業廣。非吾才所能勝。而雖思孟周程。亦未必如此學焉。乃歸鄉里自養。閒苟有能成一德者。則不辨朱王。不擇老佛。必執弟子之禮。往相見。以爲吾進學之助矣。而未得君子者而見之。則皇々望々。如亡子於道路。而猶未休。不亦宜乎。比年來讀王夫子之書。似知有自得易簡之學者。及其考諸朱說。雖未嘗不同。以其說之廣大。而未見其要領耳。然後自章句集註。至語類文集。於凡文公之書。吾亦取其二三策而已矣。豈獨朱子之書。雖王夫子之書。亦取二三策而已矣。豈獨王夫子周程孔孟之書。吾心自得外。姑舍而閣焉。則吾才之痴。於是乎如有少所勝矣。未敢必以朱說爲不可捨之也。豈以爲不善變邪。若夫世之以朱王爲如水火如薰蕕。而役々于同異之辨。無所止者。其亦可謂不知言矣。請試一讀其書。則概自可見乎。靜安於是爲予讀其書。初也以其說爲是非不尊中也。疑而未信。及其反復潛玩。則自悟是孔孟之正脉。而尊信之如神明蓍龜。終盡變舊學。而淳如也。而后語予曰。吾亦誤。久游多徑而今得因王子遡洙泗正流者。子之賜也。請自今而後。同志一意。以成此道矣。留又歲餘。相共規責輔翼。進德修業。勵行謹言　講習討論。雖成殊塗。其歸未嘗不同。應事接物。雖成百慮。其致未嘗不一。會合日繁。而交情益親矣。茲年四月告歸曰。吾歸播後。使播之士。同志此道者。偏入自得易簡之法矣。予聞之。愀然憂吾學之失助。亦悠然喜此道之遠及於西播。序其本末以贈

止。是而已矣。子曰、仁者樂山。又曰、譬如爲山。雖覆一簣、進吾往也。子之名築。子之所好山。子之所以爲號者歟。子之所以爲信而求波波而不止者、則仁也。築而不止、高山可成。學而不厭。仁道可得矣。夫樂山趣也。仁者之氣象也。予其名之以樂山乎。有子曰。孝弟爲仁之本。孝弟也者。子之誠之最大者也。丁丑六年春

送魚住靜安序

魚住丈靜安。遊學於京師之明年。聞予潛心於王文成公之書。慨然歎且戒曰。甚哉索居之無益於學也。十年前嘗與予同遊於佐藤氏之門。知孔孟之學專在宋夫子之書。尊之如神明。信之如蓍龜矣。見或少涉他說者。則非斥詆訶。以爲總科格。歸正於宋說而務已焉。居三歲。子游東武。吾亦歸西播。意謂將回倒闢劉補羽翼孔道。張皇朱學矣。而吾子則徐進而速退。朝行而夕藏。席不暖突不黔。皇々望々。如求亡子於道路。至歸舊里倍師説。淫異學。終以入幽谷。其不亦爲不善變邪。予對之曰。夫學有三貴焉。其寡過矣乎。志貴高遠。不貴卑近。道貴自得。不貴從言。學貴易簡。不貴煩瑣。周程朱王。皆古之賢聖也。吾豈敢輕取捨之乎。然若其所志。則宗聖公有言。所願則學孔子。是所以貴高遠不貴卑近也。又嘗自言吾知言。而其言曰。吾於武成取二三策而已矣。夫孟子之時。去聖人不遠。而未及秦焚焉。則武成孔子所親刪定。而二三策之餘。豈皆虛說妄見哉。雖然盡信之。亦不如無書也矣。是其所以貴自得。不貴從言也。亦所以貴易簡不貴煩瑣也。古之志道如此。而吾何爲獨不然。予嘗欲以

公道。則未有不擧國投賊者。是豈君子小人之易察哉。雖然。聞之者自顧曰。彼之於我。如此親厚。如此忠信。其於他人。亦能如此也否。而推之天下。察之衆人。然後有知爲君子爲小人之實。而不迷。則公道亦明行矣。傳曰。人無知其子之惡。無知其苗之碩。信也哉。不虛則塞。不實則失。故虛實察人之鑑衡也。丁丑四月甲子。

祭山口先生文

元祿丁丑六月五日。洛陽三輪希賢。聞山口先生之訃。以長道不能奔而執紼。依便奉香燭於山口先生之靈前。嗚呼。先生寬厚而有才。溫柔而有度。好學下問。篤信好道。事君以敬。犯而不辱。御下以惠。罰而不怨。居官十數年。上任下懷。先生之外。吾未見斯人。茲歲五月六日永逝。痛哉哀哉。乙亥在東武。聞大澤氏之赴。丙子尋聞礒村氏之訃。皆先生之心友也。今先生復逝。天何奪賢。如斯其急。同志深契。已矣已矣。薄奠將誠。尙來格。

樂山樓記

人不可以無職。職不可以無事。職也事也。道之所存也。廢職敗事。吾未見其爲道矣。今之學者異於是焉。自搢紳至市井。苟挿書從師。則以職事爲俗務。每欲于四民之外。謂之異端亦可也耳。友人里村昌築。世以聯歌爲天下之宗師。而數世不墜其業。今也昌築。事父母奉師長。孳々於箕裘之業。而兼好學。予常共講論。知其志意所尙。平居登樓讀書。此樓也東北納高山。亦其所好也。一日請予樓之名及記。予對之云。學問之道豈有他。知其趣而務之不

天地有形外。思入風雲變態中。何其得之之深也。推周子之傳此道於程子、程子之獲此道周子。何授何學。而如是之深。或問周子、聖可學乎。曰可。有要乎。曰有。一爲要。一者無欲。無欲則明通公溥。又論養心之道曰、寡欲而至於無。程子自言、獵今無此好。周子曰、何言之易也。此心潜隱而不見耳。後十二年田間見獵之。果知其未也。必非是識言者乎。傳不德直不往者乎。亦非是私欲消盡。天理流行者乎。亦非是理會之氣象乎。亦非是古聖賢相傳之學脈、而其所得之由乎。予往年遊東武。名其舍爲光霽。今年僑居肥西南隅。又名其東窓以霽月。竊希因其趣而不忘其得之之道也。丁丑四月日。

君子小人辨

慮以俟其來、實以守其定、察人之[illegible]也。不慮以俟、無爲明之慮。不實以守、無得明之由。其蔽不明。豈能辨是非、而察君子與小人哉。子言。君子周而不比。比而不周。泰而不驕。小人反之。此言豈難曉。而君子小人之辨、察甚難。然周與比、和與同、泰與驕、面目相似。而腹心則大異矣。今有親厚予、吾之君子曰。我之於予、非比非同非驕。惟周和泰。而其所以親厚者。果能周和泰也。吾何以察之。知其實爲君子親厚予、吾之小人曰。我於予、非比非同非驕。是周和泰。而其所以親厚者、果能周和泰也。吾何以察之。知其實爲小人。君子小人。天下之公名也。黜陟賞罰、天下之公道也。故君臣縉士、議言行、論之術。言其所惡君子曰。彼小人也。所爲雖成善、而非實。吾雖未得爲君子、所陳即君子說也。人君未察其實、徒聞公名而驟施

諫爭說

事レ君以レ忠。忠者何。中心之謂也。故有レ犯而無レ隱。進思レ盡レ忠。退思レ補レ過。陳レ善閉レ邪。務引二其君一。以當レ道志レ仁而已。是猶忠臣之諫節也。比干之於レ紂。知レ不レ可レ諫。而諫レ之而爲レ仁。伊尹之於二太甲一。知レ可レ諫。而諫レ之。而爲レ忠。百里奚之於二虞公一。知レ不レ可レ諫。而去レ之。爲レ智。蓋其設レ心也一也。其以二時不一レ同位不レ齊。而其處レ事或異耳。比干上也。伊尹次也。百里奚又其次也。至二知レ可レ諫而不レ諫。吾君不レ能者一。則諂諛之殘賊。不レ可レ謂二之忠一而已。又不レ可二以レ臣目一レ之矣。夫君而不レ可レ諫者。桀與レ紂也。臣而不レ能レ救者。諂與レ賊也。仕士之心。寧以二諂賊一自居。豈忍以二桀紂一視二其君一乎哉。君有レ過當レ諫。諫不レ聽當レ去。不レ可レ去當レ死矣。諫。大伊尹小伊尹。去。大百里奚小百里奚。死。大比干小比干也。嗚呼。君而能聽。大舜小舜也。能拒。大桀小桀也。語曰。好察二邇言一。史曰。知足二以拒一レ諫。予故曰。小舜小桀也。元祿七年甲戌正月六日。

弄月窩記。

士之欲下遡二於前代一而得中統於今世上者。無三先覺之爲二之依歸一。則要因二古聖賢相傳之學脈一。而察下其所二以得一レ之之道如何上而已矣。古昔周子得下絕學於遺經一。深入二無極之眞一。曾窓前草不レ除去。問レ之則曰。與二自家之意思一一般。黃氏稱レ之曰。胸中洒落。如二光風霽月一。人品氣象。想二像之千里之外。百歲之後一。使下人若甲浴二溫泉一而風乙春塘丙融平和泰平樂。其風采氣象。以爲二如何一。斯道也明道大程夫子學レ之。常尋二孔顏樂處何事一。其至二學成道熟一。得二吟風弄月之趣一而歸。自覺レ有下吾與レ點之氣象上。其詩曰。道通二

異己之所未見聞者非異其異也。天地之大爐洪鑄不一。豈以己之所未見聞者而限於天地之大乎。不思之甚矣。謾然。蕣爲神不生茄實。則豈可謂之常哉。已謂之變。則天地之氣亦變也。天地之變也。果而祥乎。果而妖乎。然非前知之君子其誰能識之。元祿壬申十二月二十一日。

呈松崎助作惟章書

三輪善藏呈松惟章尊兄之執右。舊年雖嘗得拜謁以遭有東上之行不能復接風光。幸今當來斯。果知素名之不誣。足下教誨之功。猶未期月而子弟之向風者不可勝數也。高風感朝。進篤動野修德而格非。讀書而解理。知與行相因。名與實共到。足下之忠。足下之德。豈有間然哉。然同僚之任。正知不可措口。則子之所未信者亦不可得而不言之矣。頃日聞足下之門者數輩。讀書於君前而明辯評之。無少僻窗矣。竊言善導之教。果而如此也。及聞子弟之年未至志學則未嘗不少致意於其間也。若讀書者師之所不得已。而非弟子之所勤而學矣。況又未至弱冠者乎。直恐其終成口耳之陋而悖爲己之實德矣。且人以此本之。親以此稱之。則已焉得不以此加人乎。及已以此加人。犯上之大者而非堯舜之道也遠矣。竊望足下教授之際。讀書之間。必嚴必戒。如所以如俗說而曉之者。若溫公之言使之知徐行後長之義。則後來所到。豈如一講書之詳而已哉。意不可謂明者而有此失乎。唯喜得英才而偶然過之耳。好察邇言而不遑不問足下之所固能。裁取之幸甚。元祿六年夏四月日。

不動。而止水而動搖。則何以察其渣滓而去之。故彼欲檢人欲而去之者。當無事靜坐。收其心而不放。養其性而不鑿。則此心澄然。渣滓遂渾化。建立大法。經綸大經。可以爲致知力行之地。而聖可學也矣。大哉濂溪翁明道公。溥常主靜。其所得於此者深焉。是乃靜坐之效。所以廣大也。而初學不可不用也。蓋靜坐也。非釣名聲獲利祿之捷徑。唯窮理正心修身治國之基本而已。程子嘆善學者。良有以矣。其餘則平之論備焉。故不贅于此云。元祿壬申八月二十八日光霽齋書。

某州某郡茄子發雞冠花解。

某州某郡藝茄子一畝。及茄花時。盡發雞冠花。黃色而大半寸餘也。而幹枝葉剌則茄子也。終畝皆然。無一如茄子花者。予在佐藤先生所。聞其說。因心疑之。不知所解也。退思之。笑曰。嗚呼。如此者何足恠也。古昔或疑。有人身而虎皮者而問程子。程子曰。是人而感虎氣者也。是亦茄子而感雞冠氣者也。張子曰。天地之始。固未嘗先有人。則人固有化而生者矣。蓋天地之氣生之也。蘇子亦曰。物之異常物者。其取天地之氣常多。竊思天地之始。不應備萬物而一時開闢。惟漸次生々。而至無盡爾。夫人面而魚身者。人謂之人魚。不以爲異也。人面而獸身者。人謂之猩々。而不以爲異也。其所以不爲異者何也。此物雖不常有。聞之熟也。然則。人身而使虎皮者。有嘗出。而常有。則人加之以名。而亦不以爲異焉。今亦使茄子之開雞冠花者。有出于往昔。而常出。則人亦加之以名。而不以爲異也。必矣。然則。人之所以爲異者。

有得君長之引待則亦來遊焉。或四方之輻湊。天下之壯觀也。故其欲來斯者、或父母老而不順。師友戒而不從。今玉田氏之來東武也。非違遊從師也。其歸西播也。非終業懷親也。非先所謂不順從父師者矣。凡學之道。審不如親炙。而孝子之情。不可得而留。予也同學者。而臨別不堪綢繆之情、而猶恐不能措口焉。夫過者覩獨而察可待友改。書者易靜而讀、可閑居而得。嗚呼。予出入孝悌之餘。讀書功不可廢。而至氣稟之偏。習染之俗。平日行事之過、則又愼勿忘。先生之望之云。元祿壬申十一月二十五日。

靜坐說

中川平作靜坐論。予謂其文不盡意。仍作其說曰。凡靜坐云者。以寧靜安坐而得名。非閉室止事。兀然塊坐。如坐禪入定之類。故無事而坐、皆謂之靜坐可也。稽之上古。舜之雞鳴而起。孳々爲善。是也。求之中葉。夫子之燕居。申申容々。是也。然是又聖賢之常事。不特以是目之耳。近世諸儒。見其名出于關閩之間。而未窮其所由。終不明二字之義。而以意按排。則失之益遠矣。自世不貫民不育。人心之習。日馳於外物。遊於實地。又不得不以是爲課而教學者焉。蓋聖賢汲々接引之心也。抑當靜坐也。思念之萌者。固當克去之。如善心之發。豈使之強無想。益窮之。徹底而後止。故横渠言。思之用力在靜坐。朱子亦言。靜坐不成瞌睡。可以見其旨矣。至於靜坐得效。則人有動靜兩端。當其動時。雖聖人亦不得斂手。當其靜時。西馳東走。心意散亂。則此心已放而不收。豈以窮方理而應萬事哉。譬諸流水。水之爲物。不可

氏言ニ心性一。非レ學乎。而邪者也。曰。然則。吾子所レ謂統眞正者。六經而足乎。曰。羲農之世。無ニ六經四子一而足乎。曰。堯舜之時無ニ四子一。曰。濂洛關閩之書而足乎。曰。孔孟又不レ讀ニ濂洛關閩之書一。曰。可レ得レ聞乎。曰。古之設ニ學校一也。敎レ人以ニ灑掃應對進退之節。禮樂射御書數之文。與ニ窮理正心修己治人之道一。而其治在レ書。其節在レ禮。其律在ニ春秋一。決ニ疑事一是易。正ニ性情一是詩。和ニ神人一是樂。求ニ其道於ニ大學一。講ニ其理於ニ論語一。察ニ其變於ニ孟子一。歸ニ其極於ニ中庸一。而其階梯則濂洛關閩之書也。然後。遷固范陳之史。以觀ニ治亂興亡一。韓柳歐蘇之文。以傳ニ後世一焉。凡天門。地理。師兵。戰陳。夷狄之情狀。吏事操決。靡レ不ニ盡窮知一。而後德明民新。天地位焉。萬物育焉。於レ是道得ニ其統一。儒得ニ其眞一。學得ニ其正一矣。非レ若下彼授レ之以レ政而不レ達。使ニ四方一不上レ能ニ專對一也。或喟然嘆曰。善哉言也。雖レ然。如レ此。天地量王佐才。非下初學所上レ可ニ遽得一。願聞ニ其要之約一。曰。初學入德之門。無レ如ニ大學一。未レ有下能通ニ大學一。而不レ通ニ論孟一者上。論孟已治。則六經可ニ不レ治而明一矣。而濂洛關閩之書。亦在ニ其中一也。若夫遷固范陳之史。韓柳歐蘇之文。則雖レ不ニ必讀一。亦以明新位育可ニ必致一。統眞正可ニ必得一矣。元祿四年正月下浣。

送ニ玉田新平歸ニ播州一序

東武者。列國之所レ朝。諸士之所レ會也。故行旅出ニ斯路一。農夫耕ニ斯野一。商賈藏ニ斯市一。求レ仕者來レ斯。術レ名者來レ斯。馳レ馬者。試レ劒者。善レ射者。妙レ書者。敎者。學者。老者。若者。巨匠奇工。歌舞傀儡。苟名レ於ニ一藝一者。無レ不ニ盡來ニ斯地一矣。若夫憂レ世哀レ時君子。有レ欲下察ニ士風之俗一。觀中四國之光上。而

之德焉。嗚呼。足下欲從先生可謂好學之厚矣。而先生之導足下。豈有遺法哉。然所以成就之者。又非一日之力而已。予爲恐其久而或少衰也。足下察於此。而乾々不息焉。則向上所到。未嘗測矣。是庶幾以爲予之後乎云。

郤穉禪師之脫辭

釋徒穉禪師請予講中庸。予知其有意於嘗正道。而爲剖析之。務斥佛氏之悖性命之理。而棄日用之常矣。庶幾乎其有悟舊習之非。而歸吾道之正焉耳。講畢。惠我以筆墨及詩一絕。情意甚厚。予謂。子思子之作中庸也。正憂異端之害道學。是已。則凡爲吾學者。固雖非所宜爲浮圖講說。然或知其非而散於儒焉。不亦美事乎。是予所以應其請也。而師終不能脫出陷溺之窟。則所惠筆墨。受之尤無說矣。以故直郤之。而述所懷焉。勿訝。元祿庚午十月四日。執

日。予讀席雖入浮屠衆不拒之。予意謂。彼固非我徒。以倫理觀正教。實吾聖人之罪人也。然吾朝尊信其道。上自王公下至士庶。莫不奉其教者。然則。非我輩之力所能排也。熊澤先生嘗務排之。天下浮屠惡之。訴幕府而退之。終使先生不得行其政道矣。而佛教愈盛行。蓋先生不計力而激之也。非浮屠之罪。先生。王公大人以其勞成而退聖道。匹夫之力無奈之何也。故予則不拒之。冀彼知其非而來歸於儒焉。故非經書未嘗與之講矣。執齋先生之論。與予所見頗。因附愚見於此。然求郤其筆墨。則予不敢從所見有異。蓋人嘗之所不得止歟。

道儒學

或問道。曰。無非道。由統爲難。問儒。曰。無非儒。得眞爲難。問學。曰。無非學。由正爲難。曰。何也。曰。老子談道德。非道乎。而異者也。揚墨學仁義。非儒乎。而差者也。佛

信而明辨一乎哉。已巳二月二十五日。呈二佐藤先生机右一。

講二小學一

元祿三年正月六日。奉二佐藤先生之命一。講二小學於京師之邸舍一。以爲小學之書。雖下子朱子爲二童蒙一輯上レ之。而自二天下無一レ道。吾人皆常不下及レ時講上レ之也。故無二大學之基本一。而扞格不レ勝之患。往々皆然焉。然則。過レ時而學者。亦不レ可レ不三從二事於斯一。而從二事於一レ斯者。又不レ可レ不レ講レ於二此書一矣。斯知百二倍其功一。有レ不レ成者。未レ有レ之也。故嚴立二課程期約一。三十有五日。不レ容二敢一日之懈怠一也。仍書以爲二警戒一云。

答二山田住一信

貞一謹拜復。山田住信丈之案下。足下起居萬福。喜無レ盡。貞一幸如レ常。不レ勞二憂念一。所レ來一文。欲レ使二善閱一レ之。甚荷二不鄙一。短才何敢當レ之。然原情難レ謝。忽忘下無二忌憚一之罪上。慢論二其一二一。別紙錄レ之去。有レ不レ合者一。請復見二敎且示一。晩來曲二駕於茅舍一。堪レ喜。頓首再拜。軏按。貞一者執齋先生初名歟。

贈二犬飼平七郎一

元祿三年春。偶訪レ於二山田氏之亭一。言論終日。向二夕陽一坐闌。犬飼子謂レ予曰。學之道。只在二知與一レ行。而爲レ之之功。又效二先覺所一レ爲而已。茲有二中村惕齋先生者一。卜二居於伏巷一。甞不レ應二權門之徵一。銖視二軒冕一。塵視二富貴一。實當世之隱君子矣。所レ謂先覺者。非二先生一而何人哉。今吾欲下從二先生一而學上也。予曰。足下志レ道之深。無二亦以加一レ之矣。則予之言。豈足二以爲一レ贈乎。然而。又不二敢累二邇言一。必察二

異者、亦非前日之說物格知至之章句。曰物格知至則知止矣。意誠以下。得所止之序也。夫綱領之效如此。而圖則以條目之工夫當綱領之效。是乃其所以不合也。然以細字知止則無不在。能得則無不得觀之。未曾爲誤。但物格知至。而所止。則修身以上工夫。皆無不在己矣。而不謂齊家以下者。則雖非不知所止。而有於己不交涉者焉。我已得所止。則齊家以下工夫。無不得所止矣。而不謂修身以上者。誠意正心。雖得所止。又但其序耳。至齊家則。明德已明。而新民之首也。故雖未至平天下之事。不爲之得矣。故判然屬修身以上知止。屬齊家以下能得。然恐不得無疑。故圖下或言貫在。或言求以止之。或言得其所止也。見爲後世慮深矣。然固有此意。而非章句之正意。答吳晦叔知行書。舉天地萬物之理云々。知而行之者。實與此章圖意蓋如此。敬義先生有見於此。故卷首載以備考證。其意如此。伏乞敎誨。元祿元年十二月十六日。

淺答

朱子曰。豈有讀聖人之書。爲市井之行。這箇窮得個甚底道理。

講答。學者修己治人之道。自鄉人以至聖人之方也。故大學之敎。必以明德新民爲規模。以至善爲標的矣。豈偏賤卑狹之士。所能及哉。是則尚志學者。不可不致思矣。而今之學者。身爲商賈之行。而不能改者。合面莫論。雖願治之君志學之士。爲名務爲利進。是乃所謂市井之行而已矣。然而。學聖人之書。其所學得者。果而何也哉。然則。文公之此言。學者可不嘗

爲二レ眞一。今學レ焉者。往々皆朱子之徒也。然以爲レ邪者。向所レ謂服二堯之服一。誦二堯之言一。而不レ堯者也。吾其見下與レ人居上。行必廉潔。言必忠信。吾其見レ行レ路。足容必重。手容必恭。凡自レ打レ水炊レ米。至二野遊山行一。必服二朝服一。一視不二妄看一。一語不二妄發一。可レ謂二篤行之人一也。從顧二其實一。則未二少有一矣。問二之一事一。惺々惟言二世事非一レ所二吾知一焉。於二人情一已不レ通。況治二天下一。而可レ爲乎哉。然則。其行之廉潔。其言之忠信者。果色莊乎。果而巧言令色乎。務而悅レ人者也。然其所レ務。亦未レ持レ久焉。宜至レ老。氣力已衰。如何持得。嘗聞二年彌高而德彌邵者一。未レ聞二年彌高而德彌衰者一。是其行レ朱而不レ朱者。而吾所二以務辨一レ之也。嗚呼聖人惡二似而非者一。良有レ以也。子曰。鄕原德之賊也。可レ不レ念哉。

貞享五年辰三月十一日。

知上

程子曰。如二今人說二力行一。是淺近之事。惟知爲レ上。信哉言也。上自二老莊一。下及二陸王一。非二大有一レ異レ於二聖賢之行一。然以爲レ異而排二斥之一者。所レ見處不レ同也。夫力易二強有一レ功。心難二強有一レ智。有レ功者氣也。有レ智者心也。氣則有レ時而衰。心則無二時而衰一。取下有二時而衰一者上。捨下無二時而衰一者上。愚哉。然知而不レ爲。不二眞知一。只學レ之也。有レ序。故大學之修レ身。以レ誠レ意爲レ首。正レ心亦次レ之。是皆知之謂也。若捨レ彼取レ之。則非二程子意一。

呈二佐藤先生一

闇齋著啓發集所レ載圖意與二章句一異之說。前日已知二其非一。今復味レ之。此圖可也。其以爲下與二章句一

題水仙。

夜寂蘂珠宮殿内。黄冠綠袖獨翛然。金盤高捧承朝露。自是地行花裏仙。

答小田日新軒問學

吾學從來無異同。事親則孝事君忠。何求日用彝倫外。明善誠心是聖功。

首尾吟

休爲他人論是非。是非向外我先非。我非焉能使人是。休爲他人論是非。

[illegible]曰。此詩高見卓然。殆不減王文成公。

送三宅輯明東歸。

爲客往年去武州。去時自恨去人愁。相關今日送君去。却信送憂勝去憂。

昔嘗別輯明於武州品川。故云爾。

邪正說

或謂予曰。以道爲己之任者。於邪正之分。不可不識矣。故孟子辨之。程朱闢之。而後正邪之分已判然矣。然子常務辨者。何也。恐似其說之費。曰服桀之服。誦桀之言。而不桀者。未有之矣。誦堯之言。服堯之服。而不堯者。或有之。如夫老佛楊墨莊列陸王之徒者。乃所謂邪也。古人已排之。近時學朱子者。亦見有邪異怪誕之徒。古昔有學仁義而逆仁義者。今也有行朱不朱者也。儒發晦菴道學之端。而吾本邦經學之盛也。粲然矣。然後。雖草野賤稱。無不知宋儒

慰二牧口持敬思一レ鄕

出レ鄕兩月闊二風光一。家有二老親一天一方。無レ限烟波君勿レ望。相思秋雨斷二愁腸一。

奉レ贈二東溟禪師勢州之行一

君之二西海一我之レ東。兩地相望月在レ空。骨肉元非二萍水合一。別離有レ數意忡忡。（予時有二上州溫泉之行一。故云レ爾）

元祿六年夏。在二厩橋之館一。侍二佐藤先生一游二橋山一。談及下舊年南游而乘二竹兜子一之事上。

西南春晚有二高志一。東北夏雲無二詠詩一。長谷寺前乘レ籠日。厩橋城外駕レ鴇時。

和二或韻一。

春老山櫻漸十分。池塘日暮酒猶醺。鳥歸雲盡四明下。青眼對レ花忘二世紛一。

讀二大學一。

孔言曾意三王道。程扱朱輯萬世規。聖敎不レ求二民彝外一。明新善盡自窮レ知。

和下松惟章嘉二予蒙新祿一見上レ寄

雪花落處野梅新。和氣偏臻四海濱。恩澤振窮同二造化一。不才自耻素餐人。

三晴吟。（元祿八乙亥。廿七歲辭レ祿退二菊坂一。作二三晴一。躑躅蘘菊。有二三晴記一）

辭レ祿偶成詩一章。偸レ閑取レ適閱二風光一。淵明徑裏孤松老。茂叔窻前万艸長。非レ市非レ山人寂寞。欲レ晴欲レ雨客彷徨。移レ家自愛三晴內。躑躅含レ紅向二夕陽一。

記レ古知レ名何足レ云。存レ心養レ性豈可レ忘。勿レ擲聖學生前事。一日傑差非ニ至剛一。

懷レ鄉。

故園萬里東。茫々望無レ窮。紅添梅花雨。白知柳絮風。陽炎盈ニ草野一。落日入ニ山中一。瘦馬追ニ春色一。黃昏皈路空。

悼ニ加藤長八郎一

居易夢レ感天挺才。文章氣節出ニ塵埃一。斯人茲來斯人去。二十三年命矣哉。其母嘗夢ニ樂天一。故云レ爾。

寄ニ京師故人一

別離日々望ニ京師一。獨立春風强賦レ詩。允得祇園淸水裏。野梅花落鳥鳴時。

寄ニ山田仕信一

十日逢關分レ手後。時光契闊渡ニ三春一。相望千里白雲下。何處好風吹ニ故人一。

三月游ニ道灌山一

道灌相レ宅一丘荒。徒有ニ空名一身受レ殘。不レ識當時築成處。却令ニ游士一爲中遊歎上。

東叡見レ花思レ京

曳レ杖尋レ花到ニ赤城一。鳥啼日暖晚湖淸。白櫻似レ有ニ還レ鄉約一。亦是皇州叡嶽名。

旅懷

七月出ニ皇京一。故鄉非レ易レ忘。山雲抱レ幽石。江浪暎ニ秋陽一。

執齋先生雜著卷之三

詩

江村晩望

三月東風面。雲晴向二夕陽一。閑行靑野遠。吟眸綠江長。烏鵲飛南去。雁鴻啼扎翔。鐘聲何處寺。村里暫彷徨。

與二牧口持敬一來二武州一。道寄レ之。

海東百里程。豈欲二遠遊行一。家有二老親在一。淸貧因二此生一。

高間玄張墓

工夫到處得レ正斃。二十六年生死安。欲三對レ君壽二舊盟事一。綠苔地上鳥聲殘。

讀レ詩有レ感。二首

古編三百不レ難レ思。才子六朝始弄レ奇。孝孺惟知前聖意。變風又變終無レ詩。

和歌萬葉短長詞。亦是朝庭里巷詩。日本國風漏二删手一。古今任他紀貫之。

慢興

黃鳥聲々簷外暮。杏花陰裏獨倚レ欄。光風霽月滿二天地一。洒落自知茂叔看。

菊坂幽齋春半過。松風入レ夢雨沾レ衣。曉鐘聲裏思レ鄕切。栖鵲冥鴻啼又飛。

寄二小野吉智一

餘年を終なむと思ひて、妻子の家にある限りを携て、都に上り住けるに、又六子二女、その妻其夫、そのむまごまで、數あまたになりぬれど、皆苦しみ煩はしきこともあらずなど語ぶきて、都あづま難波わたりの親しき限り、例の題を用ひて、唐の大和のことのはを盡して、祝章あまたつもり來ぬるも、いやましに空おそろしく、惜み來る人といへど、一日を延ることとあたはざるは、目の前のことなるを、益もなき身に、しひて長生をもとめはべらむは、いと愚なる事なれど、親しき人々の集りことぶき給はれるに、もとりたることと言ひ出むも、愛敬をやぶるに似はべれば、人なみに祝ひごと云むと思へど、この道の志をかたりあふなかに、さばかり厭ふべきにもあらねば、

　　まれと聞し、よはひになりぬ、なしといふ、
　　　かずにもやがて、いらむとすらむ、

と口すさび侍りぬ。又かの御題をものし侍らむも、いかゞと思ひて、

　　かぎりなき、道は思はて、わが宿の、
　　　松に千とせを、ちぎりけるかな、

とずむじて、諸君の盛意にこたへ、又わが此祝章にあへる罪を謝し侍るといふことしかり。元文三年春三月十五日。執齋希賢拜書。

執齋先生雜著卷之二終

壽の賀あること久し。思ふに其身に德有り國にいさほし有て世に仰がるゝ人は、在位の君子より一時の賢達、皆其齡を壽ぶきとして千歲を契るは、もとより天道のゆるせる處なるべし。さる德もなくいさほしもあらねど、世の覺へいとめでたく、子孫の眉目となれる人など、ひそかに其家に壽ぶきせんも、至れるにはあらねど、子弟の愛敬を遂しむる道なれば、是又人情のやみ難き處ならむ。前の二のものもあらで、徒に犬馬の年のみ累ねたらむは、かへりて耻多き道にして、老て不レ死を賊とすとこそ、聖も戒め給ひたるなれば、如何ぞ宴設け娛しみ祝ひて耻思はざるべけむや。やつがり吾嬬に歸り仕侍りて、享保三年戊戌五十なりけるとし、都にとゞまれる子弟難波にすめる心友など、うちつどひてやごとなき御方に申て、庭松契久と云ふ題給はりて、遙にことぶきし、又あづまに從へる子弟より、したしく相交れる人々、うちより祝し給はれるは、誠によろこびに、いと耻多きわざにのみ覺へ侍るまゝに、其御題によりて、

みさほなき、身をば千とせの、たぐひとは、契るも庭の、松にはづかし、

とよみてこたへ侍りし。かくて十年過て享保十三年戊申六十の賀ことに祝ひなむとて、前のことぶきせる人の、殊更にしたしきより、新知の同志うち添ひて、詩を賦し歌をよみ、筵を開き觴を飛ばして、賀せられけるなむ、いとゞ罪ふかくおぼへ侍りければ、

契るから、耻多からし、長き世を、かはらぬ宿の、松のみさほに、

とよみて、しばらくこれを謝し侍りぬ。猶ながらへて、今年七十とさへなりければ、古鄕に歸りて

しり、病狂喪心の人も、其名をよべば又我たることを覺ゆ。醉中夢裏といへども、己が名を聞ば必應之。功あるものは名を以て稱し、罪ある者は名を以て罰す。名それ重むぜざるべけむや。然るに名は實の賓也。其實なくていたづらに其名あるものは、必久しきこと不能して、禍却て從之。故に聲聞實に過ぐるは、君子これを恥づ。苟も其實なくして徒に其名有もの、豈久しくして禍なかるべけむや。舊識何某其君の公子の爲に予に其諱を徵して曰。吾邦君の家世々祐の字を冠して諱とす。吾子我公子の爲に其吉なるものをえらべと。僕謹而これに獻ずるに之の字を以し奉る。これを易大有の上九にとる。繫辭云。祐者助也。天の所助者順也。人之所助者信也。履信思乎順。又以尙賢也。是以自天祐之。吉无不利也と。夫人にして天の祐を得る、天下の吉これに過るものあらむや。然るに其祐をのみ求めて、信順尙賢のみちを以てせざるは、飽むことを欲して食を賤するが如し。何ぞ得べけむや。順とは天道にたがはずすなはなるをいふ。信とは心の誠を行ふて僞なきをいふ。かく天にたがはず心の誠を行ふて、尙みづからよしと思はず、克賢なる人をたふとぶ。人の子たり人の君たるの道、これに過ることあらむや。公子にこれを以て名とし給へば、能この實を修めて怠り給はざるべし。然らば人誰か敬ひ服し奉らざるべけむや。天何ぞこれを助け給はざるべけむや。其吉にして无不利、周易豈我を欺むや。享保甲寅春分日。執齋三輪希賢謹誌。

古稀の賀に答へ侍る歌並序

要もひとへに我身心の物を格すにあるのみ。是赤子天性の本心を失はずして、もとの大人に至らしめむとなるべし。然るに大人の道は、己を正しうして物正しきもの也。もしこれをわが心に於てせずして、徒に外物をたゞさむとせば、夫子未レ出レ於レ正の戒有て、己が道行はれがたかるべし。是わがむかし誤て、今悔はべる處也。故に今この說をのべて、併て反觀の一助に備ふといふことしかり。執齋書。

藺相如贊 時翁年六十六

夫單騎にして三軍にあたる者は、以て大勇とするにたらず。唯よく己が不レ縮をかへりみて、褐夫をも恐るゝ者、以て大勇とすべし。藺相如和璧を虎狼の秦に完して歸る。其勇固に盛なり。然るに當時猶荆軻秦武陽なきにあらず。廉將軍いやしみて口舌の士として、面のあたり是を耻しめむことを求て、相如每におそれてこれを避ること怯夫のごとく、頗無道に報るの意なし。これ唯國あるを知て自らの仇を忘る。實に君子の風あり。故に終によく頗をして感じて肉袒して謝せしむるに至る。これ豈荆秦が徒の能する所ならむや。されど跨下を出たる韓信もあれば、氣質の得たる所以て南方の强とすべし。但始趙王に說に、曲れることの我に在彼にあるを以てするを見れば、實に曾子の道を聞るものゝ如し。嗚呼相如もまた一世の大勇なるかな。享保十九甲寅春分日。執齋希賢謹誌。

諱說

人の心肝に銘じて甚切なるもの、名より切なるはなし。孩笑提挈の兒も、其名を呼べば己たる事を

喪と云。今の世俗にいへる精進日也。夫かく重き禮也といへども、生をそこなひ身を破るの大不孝を恐るゝまゝに、病あるにあたりては、喪中といへども酒をのみ肉を食ことをゆるす。故に老たる人は其年に應じて禮を定め、八十九十の老に及びぬれば、唯喪服の身にあるのみにして、肉食飲酒は常の如し。是本を忘るゝにあらず。天生の命を破らむことを恐るゝがため也。夫年に富めるものゝ一とせ二年も、老たる人の一日二日も、父母より受たるかぎりを盡さぬは同じき不孝なれば、老ぬる人は一日をも重くおしみて、天然を盡すべき事也。さてかの終身の喪といふ。其月其日の事にして、月毎の其日といふにあらず。夫も父母兄姉或は重き恩ある人の外は爲べからず。父母の外には重き悲しみなければなり。今世俗の精進といふは、肉をたつばかりにして、酒をのみ美味をくらひ、遊び樂しむことは、常に異ることとなし。其義いかにぞや。毎月精進することは、佛經にもこれなき事也。年忌をとぶろふことは七年にとゞまれる事、佛の敎也。十三年はえとのかへるとしなれば其理あるべし。昔櫻町の中納言云々、さて精進といふ文字、疏食の事となりぬるは、いつの世よりぞや。佛の敎六波羅密の内に、精進はらみつといふは、勇猛精進とて、志のたゆみなく精してすゝむをいふなるべし。されど是は我しらぬ道なれば、其道にくはしき人に問ひ定むべし。

渡邊某命名說（翁年六十九）

元文（二年）丁巳の夏、渡邊某はじめて一男を擧して其名を予に乞ふ。予是に名づくるに正を以す。正は天地の中にして、大人の本也。夫子曰。人之生也直しと。直即正也。故に蒙養必正を以して、學問の

於二森父子一半面の識なしといへども、其書により其心を推すに、是によりたがふことあらむや。思ふに後の此書に續む筆あらば、必翁父子の傳作りて委しく記しとゞめ、後の世に傳へらむと言むも愚なるべし。嗚呼此書民間の事とのみ思ふべからず。凡人君も又この記をよみて感ぜる處あらば、比屋可レ封の美をなして、太平實に致し給はざらむや。雪翁俗稱某、諱某、當國何郡何村の何職をつとむ。其子守命俗稱與一郎、父の職をつぐ。今無レ恙。共に藤樹先生の道を私に淑すといふ。享保十六年辛亥三月。執齋希賢筆を臨臍室の南窓の下にとる。

居喪論　恐未レ脱レ藁者

人の父母に別れし時は、饘食も咽に下らざれば、したしき者しゐすゝめて、孝子もあながちには辭せず。粥やうのものを啜りて生を養ふ。是命を殞すの不孝に陷らむことを恐るゝが爲なり。日數遠ざかるに從ひて、わするゝことは無れども、其悲しみいつとなくゆるみて、祖括の日の心にはあらず。これその勢ほひの當然、もとよりさありぬべし。されど生れ出たる時みとせが程懷のうちにありしいつくしみになぞらへて、喪に居ることも又みとせを限りとす。是聖のみこゝろといへど、人々のうけ備へたる良知の姿也。世降り人うすくなりゆき、さる心もなく、愚なる者には聖の心をのりとして其禮をさだめ、人々皆是によりて彼良知の本然に復らしむるもの也。かく喪に居るの禮を盡しても猶忘れがたきの盡ぬ誠をもて終りし月日にあたれば、かの喪をなしたるあまりの誠をもて、前の喪に居れる時の如く、衣服をもかざらず、遊びをもやめ、肉食飲酒の類ひをも止む。これを終身の

會津孝子傳は、當國の森宗翁あらはせる所。寬永の末年に起りて享保五年に至るまで、百十九人。翁卒して其子守命續で記す所五十有一人。都て一百七十人をえたり。翁先に自これに序して其多きを述たり。誠にしかり誠にしかり。然りといへども廿餘万石の地、寬永近しといへども八十年にわたれり。人々親あり、人々子あり、人々性有て、人々忠孝を具し侍れば、是のみをもて多しといふに足らむや。然りといへどその記せる處、多くは至貧極難の逆境に處してよく孝心を遂げ操を失はざる者なれば、一人として後世の人の克なし得べき所にあらず。是を以て思ひ見れば、世の中の父母に□兄弟田をあらそひなどして罪を得たるもの多き國は、やゝ孝有と擧めわたるものといふとも、此國のなべての民にもたぐふべけむや。是偏に土津靈神のよく孝弟を本とし給へる風化の及べる處。敬ひ尊とまざらむや。かくて今の會侯のよく靈神の御志を繼せ給へる、守命が克翁の事を述る、上好む處あれば下必甚しきこと有のしるし、國をあつめ世を累ぬともたぐひ有べけむや。一年その國宰西郷某この記を送り、予に是を校正して序つくりねと求め給ふ。思ふに是多くは民間の事也といへども、皆忠孝の善人にして、翁父子の忠孝も又淺からぬを、我不孝の筆を加えて汚し侍らむこと、誠に天畏しくとのみ、かたく辭して侍りけれど、あまたゝび求めてゆるされざりければ、やむことを得侍らで、やゝ其てにをはのたがへるに似たる處を校正して、始て其責を塞ぎ侍る。嗚呼此書なかりせば、多くの孝子の實行世に傳ることかたくして、靈神の德化のあまねく蒼生に及べることを知ざる者も猶有べし。然れば森父子の忠孝誠に大ならずや。予

れぬ。二孝子共に折々父が方に行て仕へ養へり。後繼母二子をつれて其家を出、行がたを知ず。二子これを聞て、往て父をむかへ、二子が方に往來せしめて、孝養至らぬくまなし。其往來必二子相送迎ふ。長はわが妻にも常に戒しめて、共に孝養せり。寛文辛亥疫氣盛行。その病急に腹をいたみてもだへ死す。父もまたこれに染り、或人鰻鱺を烹て喰へば疫忽に癒ゆといふ。兄弟即尋めぐるといへども、不ㇾ得して日暮ぬ。力及ばで家に歸り、常の如く流水をくみて置るが、夜に入りて水のさはぐ音しけるを、あやしみて見れば、鰻鱺の大なるを得たり。兄弟天の惠といたゞき拜みて、速に烹てあたへぬれば、疫立どころに癒ぬ。人皆孝感の致す所といふ。其殘りを乞ひて食する者、皆ともに癒ることを得たり。後二年、父の天年終。年七十九。二子悲痛節をこえたり。いま年老てまた今市に歸りすむ。弟長よく姉につかふる事、始の父につかへしが如し。常に妻と子とに戒めて、孝養己に均しからしむ。いまが爲ㇾ人和順にして、詞少く欲薄くして、よしなくては人の贈るをも辭して受ず。郡山の大守本多能州史君常にあまねうし給ひて、豐に贈れり。京田舍の人の大和路を行けば、常に此里を過て、いまが織たる布を求め得て、家づとゝし、又其貌を圖して歸るも多し。長はわが妻をもいましめて、常に折々その父母を歸省せしめぬ。元祿十一年藤井懶齋翁其事を記せり。其時いま七十五長七十一にして恙なし。今年辛亥に皆烏有となる。郷人其家に碑せむとして、遠く言を予に徴す。よりて藤井子の傳をつみて、其概をのぶといふ。

會津孝子傳序

かくの如きこと能はざれば、發する處孝悌忠信を盡すことあたはず。其不孝悌不忠信なる所、これ惡意念の委也。此惡意念かの本心の光明を埋みて照さゞらしむ。故に學者工夫その意念の正しからざるにあたりて、彼良知に自反し、此惡念をたゞし去て、かの善をなすは、事物正に歸して良知始て其至りにいたることを得。是學者用力の實地也。

よしをとり、あしをかりなば、ふしの間に、
まよふなにはの、夢もさめまし。

右は難波の管氏によみて送り侍りし陽明先生四言敎の歌なり。大槪某の求によりて、更に是が說をつくり、合せて贈り侍ることとしかり。執齋希賢草。

孝女於以麻碑

大和國葛城下郡布施の鄕今市村、農民の二孝子、姉名いま弟名長。幼にして母におくれ、父後の妻を娶りて又二子をうむ。兄弟よく父母につかふと雖、繼母父ともにこれをにくみ、以麻を出して辨の莊にうる。時に年十三。長は大阪へやりて人の奴とす。其後父母後の二子をひきゐて、大阪天滿にうつりすむ。いま長其主人にいとまこひて、折々來りて父をみる。後いま辨の莊を去りて、竹の內に來りつかふ。主人いまが父をしたふ志を見て、つかへをゆるし、我家の傍にやどして、よくはぐゝめり。いまよろこび、よるひる布を織りて、其價を父に贈りぬ。長も年たけて仕をゆるされ、桶をゆひて產とす。妻持たれど、これも得る處の錢を父に贈りて、みづから夫婦はやゝうゑをまぬか

よしあしのはや、みだれそむらむ。

知レ善知レ惡是良知

意念の動く處善惡の二ありといへども、其本體の靈明は常に照々たり。其靈明人意にわたらず、自然より發見して、よく其善惡をてらすを、良知と云。かの天神の光明なり。此光明君たるに發すれば仁となり、臣たるに發すれば敬となり、父たるに發すれば慈となり、子たるに發すれば孝となる。天人この光明なきものあらずといへども、常に意念妄動の内にうづまれて、光り顯れ難し。故に君臣にありては不仁不敬をなし、父子にありては不慈不孝をなす。人よく此良知に自反して、その光明を事物感應の間にいたらしむれば、妄動止みて事物感應みな本心の作用となる。故に曰、自反は致良知の機なり。これ格物の準則にして、聖賢の主本なり。

よしあしの、影はまがはじ、難波江や、
そこすみわたる、水のかゞみに。

爲レ善去レ惡是格物

格はたゞすなり。正といはずして格といふは、一毫も心にかゝることなく、十分の正に歸する意也。物とは人倫日用細大の事良知の照す所にして、意念のすがた也。人の本心父兄に對して動きいづるや、よく孝悌にして、本心の自然を失なはざるは、天神自然の光明なり。よくかくの如くなれば、事物も本然の則をうしなはず。これ善意念の姿にて、這念即本心也。聖人の自然也。されども人々

これを用ひば必治することを得べし。天下の爲に人を得るの仁たるを知らば、政をするに於て何かあらむ。人牧其これを思ひ給へかし。享保六年秋。執齋希賢誌。

四言教のことがき幷歌

無レ善無レ惡心之體

人の心の未レ動や、善とよみすべきものもなく、惡と惜むべきこともなし。一つの明のみ。さればよく善惡をうつしてたがふことなし。鏡の内外妍媸なければ、妍媸に從ふてよく其影をうつしてたがはざるが如し。これも又一つの明のみ。この明をさして至善といふ。天神の人にやどりまします本體にして、天下自然なり。

行舟や、何かさはらむ、よしもなく、
わしもなにはの、みづのこゝろに。

有レ善有レ惡意之動

天地生々の主宰人に宿りて心となる。故に心は活物にして常に照々たり。其物に感じて動く、これを意といふ。動く時は人氣これが主となる。故に善ともなり惡ともなる也。自然の生意より發して形氣にわたらざるは仁なり。是を善と名づく。形氣より出て自然の本體に背けば、これを惡といふ。一人の私なり。

ろことなく、そよぐ浪速の、浦風に、

むるの道、水理地□の事に至る迄、其法をおしへず其方をこゝろみずして是に命ずるも、又かの醫を知ざる者に生命をゆだぬるが如し。況や其過あるに及てこれを刑せむは、おとしあなを造りて是を入るゝにひとし。豈夫人君の心ならんや。若夫民を治むるの法を定めて、如ㇾ斯治めよといふとも、其身才德あらざる者は、行ふことあたはじ。譬へばもの書ことあたはざる者によき寫本をあたへて、如ㇾ斯寫し出せよといふが如し。いかで書得ることを得むや。故に一邑を治めしむるにも、必先其才德をえらびて其人に命ぜば、勞せずして功有るべし。故に有司を先ずるの敎有り。されば孔門の弟子顏子、仲弓、子路、子貢の賢なるも、必國を治め政をすることを問ひ、定公、哀公の庸なる、衞靈、齊景の無道なるも、必政を問へり。今諸國の君又は家の老職も、國政は秘することとのみ心得て、君子にとふこともなく、古訓に考ることも有ずば、よく其治敎をなすことを得むや。されば今の風俗のうちにて學校を興さむに、大人を敎えむとせば、必扞格不ㇾ勝の患あらむ。只小兒を敎ふるの才を擇びて、これを校中に置、その小兒の才をみて是をなさしめば、五年には必小變し、十年には一變して、大國といふとも風俗を移易ふべし。されどこれを敎るののりは、一言の克盡す所に非ず。其旨を不ㇾ知ものにつかさどらしめて、ひとへに其成功をのみせめば、必大に國躰を損する所有む。只よく訓蒙の意を得てこれを施さば、古風を今に復さざらむや。是を以て前の京尹紀伊守意を受る所有て、これを京師にはじめむとして、天下の不幸におひて事やみぬ。今成功にのみ眼をつけて、其これをなす所以をもとめずば、百年をふるとも改るべからず。七年の病に三年の灸も、

おなじく大湖には明致堂をたつ。奥州の仙臺肥前の佐賀にも、聖堂及學校をたつ。紀伊國にも又近き比學舍をたてゝ、教を施し給ふとかや。是等は皆邦君郡主の設け也。士庶の學を好むもの、其徳人を服するに足れるもの、又皆ひそかに學舍をたて、其徒をいざなふ。京師堀川に松永某春秋館をたつ。後光明院の朝達二叡聞一ければ、宸翰を給はりて今に其家にあり。藤樹先生の門人岡山氏も亦學校を建て、四十餘年尙廢せず。岡山の歿已に三十年。其家相つゞきて學を講じ、其道を信ずるものすくなからず。就中江州小川に、藤樹先生の隱れ住給ふ處にて、其書院今に存す。方五六里の間に、其化を慕ふもの父母を思ふが如し。先生去たるより七十餘年、面を知れる人だになけれど、愚夫愚婦までもしたがふ故に、校舍の廢せむことをうれひて、營理をなすことあまたゝびにして、これを守る。只地の僻なるをもて、人の爰に講ずるなき事をかなしむのみ。大阪天滿に素績といへる盲人、是も藤樹の門人にて、有馬町といふ所に校舍を立てゝ、その道を講ず。其跡もまた五十年にあまりて猶たへず。近年攝州平野の郷人相ともにはかりて校舍を建、名儒を招して學を講ず。名づけて含翠堂といへり。其郷人孝悌實行の徒多し。施を好み饑を救ふて、近郷の規となる。講學の効誠にむなしからず。四海の廣き、夫豈これにとゞまらむや。只わが見聞の及びしをしるすのみ。抑中世已來士農既に別れしより、教を施すも又次第あり。農は士におさめらるれば、教の急は士をはじめとす。たとへば醫をなさしめむと思へば、必病症方術の道を敎ゆべし。是を學ざる者に病を治せしめむとするは、誠に危きことならずや。今人倫孝悌の道をはじめとし、陰陽を燮理し國家を治

ざる明證也。故に兵亂の後、民の疵だに未ゞ癒に先學校を建て、實に風化の本也といへり。されば其敎ちかき漢唐の習を捨て、遠く堯舜の昔にかへり、人倫にもとづきて才德をなさしめり。其意訓蒙の篇にしるして、拔本の論に詳也。學者こゝに考へずばあるべからず。されば本朝の遠きむかし、朝廷の學はいふに及ばず。源平藤橘おの〳〵私の學校をたて、姓を別ちて是を敎へり。此外菅家の讃岐に御坐せしにも、小野の篁の足利におはせしにも、共に聖堂を建學校をまうけり。清原の賴業大江の匡房、またおもふに各學校あるべし。其後年を經ること久しくしては、敎化くづれて其政修らざりけるに、我東照神君一統のゝち、明君の相つぎて起りまし〳〵けるより、治澤日々にあまねくして、民草恩露にうるほへること今に百年、はじめ林氏をして忍岡の塾を主らしめ給ふといへども、亂後いまだ久しからざれば、尙大ひならざりしを、會津の中將源公甚これをうれひおぼして、京師と江戸兩所に學校を建、壹萬石をわかちて給せむことをねがひしかど、時のいまだ至らざるをしろしめして、大君の淳和奬學兩院の別當にておはします御名分をもとゝして、上書を作りて御身をばはなたずして時を待給ふうちに、病み且終らむとし給ひければ、彼上書を燒せ給ひて、死はおしみもおぼさで、此ことのならざりしを悲しみ給へりしとかや。其後は常憲大君聖堂を昌平坂に建立まし〳〵て、聖學大に盛なり。これに先だちおくれて、校舍を建て敎を施せる人亦少からず。備前閑谷の校は、其規模大に備れり。城下にも又學校ありて、庶人迄も學ぶことを得たり。陸奥會津にも又校堂二つをもうけて、同じく敎を施し給ふ。和州郡山には益習館をたて、上州厩橋には好古堂を建、

たる意實に以て如何とかする。雖レ然予前に稱する處は、惟士心憤發の景象のみ。夫この憤ありて、學を好て養レ之、禮樂を以て文レ之。是を成人と云るのみ。曰、然則學レ之の道如何。曰、曾子いへり。吾嘗聞二大勇於夫子一矣。自反而不レ縮、雖二褐寬博一吾不レ惴焉。自反縮。雖二千万人一吾往矣と。内誠實を存養して、外精神の透徹せむことを欲せば、自己の良知に自反して、これを事物感應の間に致すべし。これを學の道といふ。是を浩然の氣を養ふといふ。享保六年四月十三日。執齋希賢誌。

治教論

治教は人君の大事、二つのもの相因て、ともに一日もかくべからざる急務也。上古伏羲は教をすゝめ、黃帝は井地を正し、堯舜の水をおさめて五穀をうへしめ、司徒典樂を置て教をつかさどらしめ給ふより、世々其道によらざるはなし。周に至て校制大に備りぬれば、人として學ばざるはなかりしも、學其道を失へるより、記誦詞章の陋にあらざれば、虛無寂滅の悖れるに流る。是を以て亂世相つゞき、民其澤にうるほはざる事久し。宋の程朱子起れるより、道理やゝひらけて、民亦其化を蒙るといへども、猶大に行はれぬる跡をみず。明の陽明王公亂世の末に出給ひて、致良知の旨を發明し、上下はじめて一新せり。こゝに於て其住給ふ所、地として安からざるはなく、民として服せざるはなし。わづかに居れる所にも、必學校を建、征して勝てば、又必學校を立つ。故に兩廣百年のうれひ、明朝を終る迄再び興ることなし。是謀策の人にまされるにあらず。實に教化の致す所、爭ふべから

とす。故に利の爲に勇まず、害の爲に不レ怖、万死に出入すれども一塵も不レ動、わが徳を明らかにして、寂然の欲少無ニ偏倚一。これを天下の大本と云。密室に肱を曲れども一心常に活し、わが民を親て感通の妙毫も不ニ乖戻一。是を天下の達道と云。夭壽を以て其心を不レ貳ば、命の己に在るもの立ことを得て妄動なし。是を至善に止まると云。是千聖の學脉なり。これに過るを狂といふ。これに不レ及者は硜々然たる小人而已。若夫似せて世を欺く者は、是を郷原と云。假て國を持つ者は、これを覇者といふ。これ皆似て非なる者にして、聖人の所レ惡なり。子貢問曰。何如斯可レ謂ニ之士一矣。子曰。行レ己有レ耻。使ニ四方一不レ辱ニ君命一。可レ謂レ士矣。子張問曰。士如何斯可レ謂ニ之達一矣。子曰。夫達也者。質直而好レ義と。其門人の所レ說に至ても、曾子曰。士不レ可ニ以不ニ弘毅一。任重而道遠。仁以爲ニ己任一。不ニ亦重一乎。死而後已。不ニ亦遠一乎。子張曰。士見レ危致レ命。見レ得思レ義。祭思レ敬。喪思レ哀。其可而已と。惣じて世々の賢達、士心の慣より其才徳を不レ成はなし。然るを吾子今以功利の妄言とする、又不レ誤乎。曰。然らば子路の問レ士に答て、切々偲々怡々たるを以てするものは何ぞや。曰。子路は暴虎馮河の勇、常に人を兼て其死然を不レ得の慮無ことと有不レ能。故に夫子のこれに示し給ふこと、毎にこれを退けて、其瑟何於ニ丘之門一との給に至るは、血氣の鄙を退けて、これを仁義の室に進め給ふ者也。故に好レ勇而不レ好レ學。其敝也亂。君子有レ勇而無レ義爲レ亂の言、皆子路の爲に示し給ふ。夫子路の勇は、孔門三千の中ともに可レ比なくして、曾子も畏れ給ひぬれば、庸人の爲に慮るべき所にあらず。されど猶今の成人を論じて、見レ利思レ義見レ危授レ命との給へば、其惓々

ふ者也。然るに士心なし。故に盗を愛るの間に答て曰。子之不欲ならば、これを賞すといへども不レ竊と。是これを退けて、憤を發せしむる者也。顏淵は庶人也。然るに士心立て其德成る。以て王者を可レ佐。故に是をすゝめて、敎るに天下の政を以てす。其意可レ觀所也。曰。しからば則、憤の景象は如何。曰。近世一老武人の辭世に曰。「口惜や、疊のうへの、のたれ死、目出た過たる、御世に生れて。」是憤の景象なり。或人驚て曰。これ軍國の殘士、功利を重むずるの妄言のみ。人々にして如レ斯ならば、作レ亂近からざらむや。夫身體髮膚これを父母に受。不レ敢毀傷をこそ孝と聞け。豈以て聖學とせむやと。衣を振て立つ。予曰。居我語レ汝。孟子不レ云や。志士は在ニ溝壑ーとを不レ忘。勇士は喪ニ其元ーことを不レ忘。孔子も取レ之と。是其士心を稱するものに非ずや。それわが首を我物とせず、常に溝壑にたふれ死するを心とするは、天下第一の無分別者也。而るに孔孟の取給ふことは、其意定て所レ在あらむ。夫革嚢に盛たる血を萬代の寶と思ひ、死しては大葬を得、以ニ棺槨ー爛骨を保むと思ふは、生前に富貴安佚の樂を願ふよりも甚しき人欲ならずや。夫學は人欲を去より大なるはなし。士心立て衆欲消す。其故士心を立るの人欲を去るに於ること、豈以聖人の道とせざらむや。故に子曰。士而懷レ居。不レ足ニ以爲ー士矣。又曰。士志ニ於道ー。而耻ニ惡衣惡食ー者。未レ足ニ與議ー也と。又曰。志士仁人無ニ求レ生以害ーレ仁。有ニ殺レ身以成ーレ仁と。夫仁の人に於る、顏子仲弓も不レ能レ當所にして、志士却て備これに死することを得るものは、其能身を殺して仁をなすか爲ならずや。是故に、苟も其事に臨ては生を捨て義をとり、其道を聞ことを得れば、夕に死するをも可也

レ賤の稱なり。卿大夫は貴位也。其位を去れば、其人は士なり。農工商賈は賤業なり。其業を除けば、其人は士なり。故に士心ありて居ニ貴位一者、これを不與と云て、克太平を興す。士心立て居ニ賤業一者、これを逸民といふて、克其事に不レ局。故に富貴も不レ能レ淫は、貴人の士心也。貧賤も不レ能レ移は、賤者の士心也。それ是を大丈夫といふ。のべて言レ之ば、四時無ニ間斷一は天の憤也。生々不レ息は地の憤なり。仁義忠信時として無レ不ニ感通一は人の憤也。故に其所レ學は常に士心の憤發にあり。夫天子は天下也。諸侯は國也。大夫は家也。士は身也。故に曰。天子より以て庶人に至るまで、壹に是皆以レ修レ身爲レ本と。本は根なり。根の生意是を士心といふ。根の生意幹を生ず。孝悌の發見以て可レ齊レ家。幹能枝を抽づ。慈愛の及ぶ、以て國を治むべし。枝より葉花を發す。恩澤の施こし、以て天下を平にすべし。而其本根は只士心に在り。是を以て成周の代、八歳より十五に至るまで、天子も庶人も同じく小學に入れて學ばしむる事は、其無レ位を以て也。曰。上には公卿大夫の職なく、下には農工商賈の業なくば、唯是遊民のみ。其所レ事は何ぞや。曰。其志を高尚にす。仁に非れば不レ居。義に非れば不レ由。居レ仁由レ義、大人の事備れり。曰。然らば則、何を以て之を憤と云。曰。憤は人の誠意精神也。夫性は天受の德。誰かこれを不レ具。但し誠意うちに守らざれば、精神外に耗散す。雖レ有ニ德性一、活發流行すること不レ能して、氣餒て用絶ゆ。譬ば人參の藥草たる、元氣を助るの能は其性也。されど雨に腐し風にさらさば、誠實守らず精神散じて、朝鮮の名種も不レ如ニ沙參一。故に夫子自稱して曰。發レ憤忘レ食と。人を敎て曰。不レ憤不レ啓と。季康子は大夫にして、國政に從

中にも五條の殿は、いとけなかりし時より見馴奉りたれば、一きはすぐれたる樣に思ひ奉るも、いとおかし。

高き名を、雲井にわけて、久かたの、
つきの桂を、今宵かざせる。

かくて事終りぬれば、別殿にうつりもうけ給ふ。下々にも御酒給り、えひをつくしてかへる。月いたくふけぬれど、曇りなくさへまさるも、誠に御神もうけ引給ふらむとぞ覺ゆる。此殿ことし十五になり給ふ。わきてうつくしげなるかすきひたひの際も、くもりなき月にみへわたりたる、かのかゝやく日の宮とやらむも、くらべぐるしからむやは。天神五になり給ひしときの御歌とて、

うつくしや、べにゝも似たる、梅の花、
あこが顏にも、付たくぞある。

と聞へしをおもひ出て、

十あまり、これもいつゝの、うつくしき、
かほぞかゝやく、月のひかりに。

希賢　上

士心論　年五十四

或問曰。爲ㇾ學の道如何。曰。士心を立。曰。何を士心といふ。曰。愼これ也。曰。學は天子より庶人に至るまで、皆是に從ふべくして、君子獨以ㇾ士いふものは何ぞや。曰。士は人也。無ㇾ位して不

左右の幣ふり、數多たびかたぶきてぬかづき、西の方の疊にうつり、東面して座し給ふ。次に高辻の秀才おなじく居たちつかふまつり、又東の方の疊に座し相向ひ給ふ。史二人神前の方の一段ひくき所に、左右に相別れて座す。事しづまり座定りぬれば、二人の史柳葉に硯のせ、左右の前に置て、問者墨すり流し、策問書給へば、有司すゝみてらむ箱にうけとり、かへりて右のかたの有司にさづく。右の有司また之を秀才の前に置く。秀才とりあげて打ずし、懷におさめ、懷よりたゝうがみとりて、又のどやかに墨すり、思ふが程もなきに、はや書つらね給ふ。その理のよしあしは知らねど、斯いち早き業、世に類ひ多からむやは。件の有司またらむ箱に受て立歸り、左の有司にわたす。有司又是を問者の前に備ふ。問者頭をたれてこれを考へ、又二度前の如くして終りぬれば、秀才當座のからうた速に作り出て、御社に納めおはしますさま、さも有べし。又南の疊にうつりて、御拜四度有て、もとの疊にかへり給ふ。ふたりの秀才相つゞきてことおはりぬ。誠にかくいみじき禮法の、此御家にのみ殘り行はれ給ふこと、菅神の御德の大なるによれり。昔菅家の此御試におたりおはしましたる比とかや。御母君、久堅の月の桂も折るばかりといさめ給ひしを、よくおぼへ奉行給て、今の世までもたふとばれ給へる、いともかしこき御事ならずや。かの唐の孟子の母の敎へによりて、聖にならべる德をなして、人のくにまでもうやまはれおはするにもひとしからむか。

家のかぜ、吹もかしこし、八百とせの、
後もおりくる、月のかつらに。

はむとゝへるは、君に仕へていとまなきもの、農工商賈の忙しくて文みる暇なき者のあたはざる處也。故に業をすて官を辭せざれば、其道を究むること能はず。是却て聖賢にくむ所の遊民なり。天下の達學にあらず。此人欲を去りて天理を存するの學は、紛冗躁卒のうち生死急難の間といへども、所として行はれずといふことなし。是即聖賢相傳の心法、天下の達道達德達學なり。元祿十二年己卯臘月朔日。三輪希賢書。

北野獻策記（元祿十五年壬午）（年三十四在上加茂）

いづれの御時にか始りけむ。群臣に策本らしめて、文章の道に才秀たる人をぬきむで給ふ中に、菅、江、清の家ことにこれを以てすゝめりとかや。今は其御政も修らずなりにたれど、猶菅原の流のみその事を失はずして、遠祖の御廟にして其禮を行ひ給ひぬ。上よりも道しる人を問者として、大内記少納言など奉行せしめ給ふ。ことし元祿壬午の冬十二月十六日、高辻、五條、唐橋、三たりの菅原秀才、文章得業生より出て、獻策の試にあたらせまします。束帶清らにつくろひ、長柄のみず高く生せ供奉の士大夫の出立いと花やかなり。立賣一條の大路を過て、聖廟の御前に至り給へば、御先立の人、目も春の松たてば拝いかめしうのゝしる。南門の外より歩になり給ひ、手あらひ口すゝぎ、沓の音しづやかに、御裾ながく引、御階のぼり給ふさま、又下﨟にておはせど、賤しからぬしちに生いで給ふ。誠にさらなり。東坊城何某朝臣、清岡長時朝臣、問者として先立給ふ。次にみたりの秀才つゝきてすゝみ、殿前の東の廣前に北面して座し給ふ。何某朝臣正面の南の疊にうつり、

る迄、皆この工夫なり。其心既に邪あらば、なす所の事道にかなひぬとも、是即邪事と知るべし。親に事ふる者、この三欲をさらずして、此心をもて孝をなさば、其事舜の如くなり共、是即不孝の子也。かの三欲をもて君に仕へば、其事文王の如くなり共、即不忠の臣也。夫舜文王の事有るは、舜文王の心有るによれり。舜文王の心をわが心に求めずして、舜文王の業に外にしたがはゞ、鳥を書て飛ざるをうらみ、狗をきざみて走らざるをうれふるが如くならむ。舜文王の君父につかへ給ふ御心に成りて見ば、其事はかはりありとも、豈不孝不忠の行ひあらむや。たま〳〵あたらざることあり共、遠かるまじ。然ども常に心中に工夫を用ひざる人、にはかに顧ること一過すとも、此心の中あながち彼三欲ありとは思はざることあらむ。克々深く根をさぐりてみるべし。凡一言一動、皆々此三欲なきことなし。當分は目にみへぬに似たれども、此隱微のうちに潛み隱れて、万惡の病根となれり。是をたゞずして、事々物々の理にかなはむことを求るは、瘧をやむもの丶如し。其寒さにあたりて、衣を重ぬる事多しといへ共、其病の治せずば、暖なることを得ることなかるべし。其發らざる程は、無病の人の如しといへ共、其病猶內に有れば、又發りて病しむるに似たり。寒きには必衣を重ぬることと自然の道理といへども、病の狂せるものは衣の及ばざる處あり。かつ其行跡に至りては、聖人にも皆々かはりあり。堯の授禪あり。湯武の放伐あり。泰伯の父を去れるもあり。何れに從はむ。夏殷周禮を異にす。聖人だに如レ斯。況や賢者已下をや。論孟大中の書能々讀みるべし。事々物々の上の工夫とみゆるも、其事々物々にて以上の工夫をなせる也。夫事々物々の理をき

て、知をきはめむとて、事々物々にて道理を尋るは、暗夜に燈なくして物を探るが如し。知れる處似たりといへども、終に自得の學に非ずして、却て人我の隔出來り、人欲の私勢ほひを得、按排措置して意必固我をなす。故にもの學ぶ諸生は、大やう常人よりは劣り、是を教る師は、諸生より又ひがめる方多し。如何となれば、三欲の大敵をさらずして知る處多ければ、其知る處己が欲を助けて、自高ぶり人を輕しむ。行ふ所人に勝れるものあれば、其行ふ所又己が欲を助けて、自高ぶり人を輕しむ。譬へば食は民命を救ひて、一日も是なければ死すといへども、食に傷れし人は、食毒を去り傷れを補はずして、是に食をすゝむれば、却りて病をたすけて、民命將に盡むとするが如し。是を以て朋友の交全からず、親戚の愛うとくなりぬ。世に不孝なる儒者有るも、是によれるならむ。書曰、志自滿れば九族も離るとはこれなり。斯の如く親そむき衆けなるゝものを獨夫といふ也。故に學問の入口一度たがへば、其道に入事あたはざるのみにあらず、却て惡を長ずるの階となる。つゝしまざるべけむや。其間たまたま生質よき人、此學をなして道に進める如くなりといへども、彼覇者の趣をまぬかれずして、本心の德生ずること難く、終に聖賢の域に入ることなし。

一。故に聖賢天道の學に志有む人は、事無時は或は靜座して本心を養ひ、或は書を讀て古昔を考へ、事有時は其事の理否其處置の善惡をはわながちに擇ぶべからず。唯其ことにあたる時我の邪正を尋ね、かの三欲有りやと顧み、天理自然の本心に立復りて事にむかふべし。凡靜座より書をよむに至

となり、存養克己の工夫足らざれば、其放てる心またおさまること不能して、終に桀紂となる也。故に程子曰、聖賢千言万語、只是已放たる心を收めて身に入り來らしむといへり。有難きこと也。堯舜禹湯の執中は前にのべぬ。猶唐虞夏殷君臣相誡るのこと、書經に考へみるべし。其後周の文王の緝煕に敬し玉へる、武王の器物に銘し玉へる、周公の一善を得ては坐して以て朝をまち玉へる、孔子の仁を說恕を說玉へる、顏子の克己或は膺に服て失はざる、曾子の三省三貴、子思の戒謹恐懼、孟子の求放心達良知、程子の主一、すべて道統傳來の學術、皆々此一道にもるゝことなし。

一。夫本心收りて方寸の內にあること、或は日々に一度收り、或は月々に一度収るは、子路子貢諸子の學也。三月の久しき收り居るといへども、或は一念すこしく放れ出むとするは顏子なり。常にその內にのみ居て少しく動くことなきは聖人也。こゝに至りては、この心性のまに／＼にして、德明らかにかたよることなく隔なく、道すぢを過たずして、天と均しくしたがふ處なし。孔子曰、吾道一以貫之と。是則聖學の正脉、中庸の第一義なり。これにもとれる者を惡人と云、これを知らざる者を愚人といふ。これにたがひて道を立る者を異端といひ、外面にのみ似せて實心同じからざるものを覇者と云。

一。今聖賢の心術を學ばずして、其なせる事業をのみ見て、事々物々にて是を尋究め、知を盡せりと思ひ、其知る處をまね行ひて、よくこれを行ふと思ふ。是自は聖學也と思ふらめど、即覇者のしわざなり。能しりよく行ふといへども、天道にあらず。又義襲てこれを取のみ。夫己に此心法無し

いふ。此趣を知ざる人は、生質よきこと諸葛孔明、司馬温公の類の如しといへ共、天下の書を讀しること東坡、永叔の類の如しといへども　皆これを無學の人といふなり。

一。それ斯の如く德ありて、これを失へることは、何由ぞといへば、人の此身あるより父子兄弟といへども、各己を愛するの情起りぬ。己を愛すれば人にうとし。己を愛して人に疎ければ、必へだつ。此へだてを名付て人欲の私と云。此人欲の私あれば、かの本心に備はれる道理を破りて、性を塞ち、本心の光をおほひて、明德をくらまし、本心所を失ひて中に非ず。自欺て實にあらず。人我を隔て、仁にあらず。行ふべきすぢをたがへて道にあらず。斯本心を損ふ所、其品多しといへども、皆これ人欲の私より起らずといふことなし。かの人欲の動て本心を害するも、又其品多し。中にも大敵となれる巨魁三あり。色欲、利欲、名聞なり。

一。此人欲の私起り出て心を害すること、いかなる故ぞと尋ぬれば、此身に主人有り、名づけて心といふ。常に方寸の内に居て、萬事に主宰たるもの也。然るに此心一度放れて其位に居らざるより、かの三欲の大敵起りて隙をうかゞひ、この心の德を害す。故に學ぶ者其放心を求て本の方寸の内に納れば、三欲の大敵より諸の私勢ひを失ひ、其光明天性の如し。譬へは太陽一たび出て雪霜忽消が如し。孟子の學問の道無」他其放心を求るといへる、是也。然るに一たびはこれを求むといへども、常にこれをとるの工夫間斷あれば、則ほろび失て、方寸又空しくなり大敵再盛なり。これ本心人欲互に敵味方となりて勝負を相なす。存養克己の工夫多ければ、本心收り人欲亡びて、終に聖賢

らざることなし。されば此心をもて父母につかうまつれば是を孝と云、君に事つれば忠といふ。夫婦の間にありては別といふ。長幼に施せば序と云。朋友に交はれば信といふ。而その孝は四のもの本也。四の物はみな孝の及べる所也。夫人の由て生るゝ所は父母なり。由て生るゝゆへのものは天也。父母は一人の天にして、天は萬民の父母也。故に仁人の天につかふるは父母に事ふまつるが如く、父母につかふまつるは天につかうまつるが如しと云り。凡この五のもの、應ずる所によりて其名を異にすといへども、ひとしく此心の發見流行にあらずといふことなし。

一。此心獨聖賢のみ然るに非ず。愚夫愚婦といへども皆有レ之。唯その存すると失ふとに有のみ。故に孟子も、君子はこれを存し庶民はこれを去るとの玉へり。彼堯舜禹湯の聖も、これを失はむことを恐れて執中のいましめ有り。孔子の操則存舍則亡との玉ひしも、其間斷あらむことをいましめ給へる也。是のみならず、世々の聖賢の學、皆是に出ることなし。然るに彼愚夫愚婦のこれを失へるといへども、同じく天より受得たる本心なれば、其心の光終に消ずして、事に觸ものに從ひて、より〳〵顯れざることなし。かの齊王のこくそくの牛をかなしみ孺子の井に入るを見る人皆悲しみの心顯はるゝが如く、人の此心有ること、書を讀て得る所にも非ず、師に傳はりて然るにもあらず、人と生れぬるものゝ同じく傳はれる處也。これを名付て良知と云。孟子曰、人の學びざる所にして知るものは良知也、他なしこれを天下に達するのみと。孔子のわが欲せざる所は人に施すことなかれと敎へ玉へる恕は、即この良知を達するの法にして、仁を求むるの要道也。これを名づけて學問と

或なき様にと奉ぃ存候。

一。陰陽の氣天地の間に薰陶して、そのこりかたまれる、萬物となれば、人の身元より天の身也。人の心も天の心なり。人の道も亦天の道也。天と人と隔なし。天また人なり。故に天の聰明は我民の聰明により、天の明威は我民の明威によれり。是をもて天とひとしき人を聖人といひ、天の如くならざれども天をわすれざる者を有志の人とす。天にたがひて知ざる者を愚といひ、天に違ふて恐れざるものを悪人と云。

一。いにしへは此天を學ぶ人を儒者と云て、克その事を成就せる人有ば、廟堂の高きはいふに及ばず、農工商賈の賤きに在りといへども、人是を敬ひ君これを用ひ、家にのりとし國を治めしめり。其人のなせることといへる詞をしるして人の鑑とす。五經四書これなり。故に志有る人は、必其書をもてあそぶ。是則儒者の事業なり。いつの世よりか誤りて、其書を翫び是をさしはさむものを名づけて儒者といへは、かへりて賤き業となりて、武人俗吏の類ひにもけをさるゝは、淺ましきことに非ずや。

一。夫人の心もと天の心なれば、萬事萬物の理もこのうちより出ざるなし。されば此心の天より受來れる全體を性といひ、其一點の昧なきより明德といふ。少しき偏倚なきより中といひ、少き僞なきより誠と云。是に從ひておのづから條路あるより道といひ。人我のへだて無して自から生意惻怛あるより仁と云。性、明德、中、誠、道、仁、その名替るといへども、ひとしく人の心をいふにあ

むとしては則くらひ、寢むとしては則いぬるが如くに候。夫聖人に志して、聖人に至ること、如ㇾ斯やすき事にして、古來至るもの丶すくなきは、如何となれば、唯其志の誠に立と不ㇾ立との間にて御座候。志の立とは、譬ば猫の鼠をねらふが如く、一念も外にうつることなく、純一無僞なる心になりたるを可ㇾ申候。今我黨の學問も、此志なきにてはなく候へ共、しかと誠に立ことなき故に、或はやみ、忽思ひ忽わするる。是其立ざる處にて候。故に聖人とならむと思入たる一念を押立て、凡この志の邪魔をなすことあれば、則絶切て捨、立歸りて此志の甲斐なきことを責べし。譬へば寶を好む欲心出來る時は、立歸りて我志をせめて曰、我日頃聖人とならむと思ひつめたるにあらずや、其志誠ならば、何ぞ如ㇾ斯の欲心出來らんや、この欲心を以て、何とて聖人に至らむやと、かやうに志を引立候はゞ、其欲やみ易かるべく候。色を好む心出來るにも、又志をせめ、怠りの心生ずるにも、又志をせめ、怒の心起るにも、また志をせめ、時々刻々起居動靜皆如ㇾ斯せば、少は人欲に遠かりて、志立やすかるべく候。古人立志の說如ㇾ斯に候。此趣無ㇾ間斷ㇾ御工夫御用候はゞ、御見所出來可ㇾ申候。外に向て道理を尋て一生學ても、自得の時節は有まじく候。此所大事の場にて御座候。一步も謬り候へば、末は千里の遠くなり可ㇾ申候。拙者義去年以來閑居獨省仕候處、十年來の學にて少も益なく候に付、此學術に心を寄候へば、少々所得ある樣に存候。乍ㇾ去未ㇾ旋と成就も不ㇾ致候を、卒爾に人に說語り候も、罪多き事に候へ共、見所御尋の上、先年申上候誤共、千萬悔しく奉ㇾ存候に付、荒々書附申上候。本よりわが爲の學心中の工夫にて御座候へば、必卒爾成人に御かたり□□他岐の

來書に、尊體御宿痾追ㇾ日御快御壯健に御入被ㇾ遊候に付、學業御精被ㇾ出候、當分御上達の御覺も無ㇾ御座ㇾ候へ共、是非共御成就可ㇾ被ㇾ成思召詰候由、珍重珍重、何の幸かこれにしかむ。就は拙者存寄も御座候はゞ申上候樣に蒙ㇾ仰、仍ㇾ之當分の工夫あらあら書付掛ㇾ御目ㇾ申候。

一。前年貴面に申上候儀、今以省み申候處、盡く外に向て道理を求む。是皆理屈のみにて、日用に於て一として無ㇾ益。是に似て非なることゝゝ、誠に大罪のがるゝ處なく候。先是非とも御學問御成就可ㇾ被ㇾ成思召詰候事、凡學は凡人の聖人になることにて候へば、其成就は聖人に至る事に御座候。然ば其聖人は如何なる者ぞと御考可ㇾ被ㇾ遊候。よく物を覺たるにもあらず。藝術多きにも非ず。書をよみ知たるにもあらず。位の高きにもあらず。祿多きにもあらず。唯この心中毫末も私欲なく、誠一枚にして、父子君臣五倫皆よくとゝのほる人にて御座候。今いか程賤しき田夫野人にても、主人によく奉公をつとめ、父母に能孝を盡し、兄弟夫婦の間よく、年寄をうやまひ、我身欲少くして、誠一枚なるを善人といふことと、皆〻存居申候。然ば人〻皆聖人の下地は有ㇾ之候へ共、只私欲におかされ、心のすなほを失ふによりて、惡人となる事に候。故に此私欲を去る事のみ、聖人に至る學問にて御座候。是を以てみれば、彼外に向て求る學問にては、いづれの世に我心の人欲を去りて聖人に至り可ㇾ申哉。克々御省み御考可ㇾ被ㇾ遊候。外に向ふの學をなして聖人に至らむと求るは、彼の木によりて魚を求むるが如くなるべく候。其聖人は學問の成就にて候へば、必聖人にならむと思召つめ候は、志にて候。其志まことに立候へば、聖人となることも又安かるべく候。譬へば食は

やは。されど世のならはし終を送る日だに、聖の御のりの如くせむことは、厭ひあやしむばかりなれば、今にありては更になし申べくもあらで、唯心ばかりのかなしみをしるしとゞめ侍ることしかり。

こゆるぎの、いそがぬ年は、積りきて、なき人の世ぞ、遠ざかりゆく。

三十あまり、六とせ越ぬる、とし波の、けふ立かへり、ぬるゝ袖かな。

殘しおく、身をばかたみと、おもはずば、さても惜しまむ、わがいのちかは。

ふたをやも、今は世になき、玉くしげ、殘るこのみに、何をおほはむ。

かくて後、この文をよみ侍るたびに、必泪こぼれ侍れど、さらに實の心にもあらぬをかなしみて、

みるたびに、泪ばかりぞ、ますかゞみ、曇りはてたる、身をいかにせむ。

正德四年甲午九月　　希賢

答二酒井彈正一書　時年三十一。

らず。父の身まからせ給へるいまはの際に外に出て狂ひありきけるを、從者共尋ねありきて、やう〳〵つれ歸り、御枕もとにとゞめ置けるに、さらに悲しさもあらで、心とゞまらざりけらし。なでふかゝるきはにさることやあらむと、いかりまし〳〵けるを、なき御跡の御いましめにて、夫よりは物をものたまはず。母君の今はのきはにも、さりとも思はで狂ひ遊びければ、見るも目くるめかし立さりねなどの玉ひしぞ、今の御形見とはなりける。かゝるきはにてだにかゝるふるまひなれば、尋常の不孝なりけむ事はかぞへも盡さゞるべし。されば稚き時は必父母をしたふならひなる、なべての人の本性にももとり果たる心の程、いかゞはせむ。かゝる心の底にだにも、たらちねの淺からぬ御教訓や猶殘り留りけむ、十七八の時より文よむ事を好みて、河瀨佐藤などの何々先生につかへて物學びつれど、おとなになるに從ひて、たゞ日々に餘り有むかたにのみ心すゝみて、わがたらざる筋に露ばかりも辨へず。今に至りて、廿あまりこゝらの歲をさへつもりぬ。今早子共數多もちて、敎えむとすれど、身にしらぬ孝の道のをしへは、さらに聞入るべくもあらず。これより思ひつゞくれば、父におくれし秋の夕べの露は、今はたこゝろをうるほし、母に別れし春のあしたの雨は、ふたゝび袂をひたせど、今更せむかたもなし。身をおゞにすれども及べきにあらで、わが天地の罪人なることはしりぬ。かの喪にこもりし程は、聖の御敎はいふにや及ぶ、世のならはしの五旬のいもゐだにも、疎かなりし事のくやしさを思ふに、生るにつかうまつる事こと今更くゆるも及ぶまじかりければ。せめて後の悲しみにをらむことは、とても後のわざなれば、すこしく補ふべからざらむ

など、こと／＼に禮の容に背かむことをなむ禁しめ玉ふ。ひとゝせ因幡堂といふ所へなるかみおちたる事ありしに、父母のすみ玉へる家よりははづか二三町ばかりも隔たらざりしかば、その響の恐しかりしこと譬へむかたなし。折ふし文函ものすとて、家のかた隅のくらき方に行て、たづさへ歸らむとせし程なりければ、取落して泣てけり。奴婢どもかき抱かむとせしを、母君ひとり憐みもやらで、かへりていたく禁めて、士たるものゝ子の、かゝる事に恐れて、もの打落し泣出べきやうやあると、身をつみて怒らせ玉へるかなしさに、なるかみの恐れはいづちいにけむともしらず。其頃我につけ置れし小童膽ふときものにて、先よりかみなるごとに、いざ玉へ鳴かみを見つけてむとて、させる戸をもあけて空を守りつるにつれて、我も必出にける程に、今に至る迄、いかばかり烈しきなる神にも、おそるゝことすくなし。又病篤くおはせし頃、御側ちかく召て、我今心地死ぬべく覺へぬ。我もし死しなば、いましの心はいかゞ有むと戯むれ玉ふに、君もし身まからせ給はゞ、我身いかゞし侍らむと答しかば、さればこそとよ、それは其身の爲の悲しみにこそあれ、唯何となくかなしからむといはむこそあらまほしけれと教玉ひける。かく病篤かりける折にも、をしへの方にのみ御心をもちひ玉ひける有難さよ。かゝること數へ出れば、袂にかゝる白露は、中／＼數にもあらざるべし。嚴父慈母のかくをしへ育て玉ひけるにも、いかばかりひがめる方に生れ出にけん。更に心にもとゞめず。父母の御かたはらには、片時も馴れむつまず。家を走り出ては、石うちいさかひし、すまひとり、もの盜みなど、ありとあらゆる惡事をのみ事として、聊も其教にはしたがひまつ

執齋先生雜著卷之二

ほぞか美（先生四十六歳在二京師北野一）

臍をかみほぞをかむ。かまむとすれど及ばず。としをふること四紀にして、身の老ぬること五十にちかし。（寛文九年己酉翁生二京師一）五十にして猶父母を慕ふは、至孝の人のことゝいへども、夫もおさなくてしたへる、衆人にひとしき心を失はざるのみなれば、幼時に父母をしたふは、よの常の人といへど、ひじり賢がみ心にもおさ〳〵おとらざるかた有てしかるらむ。我十あまり一とせにして母に後れ、（延寶七年己未丁二内艱一）又一とせをへだてゝ父をうしなひ、（天和元年辛酉丁二外艱一）今不惑を越ぬること六とせになりぬ。思へば遙なる哉。今にわりてたらちねを慕ふこゝろなきは、愚なる人なみ〳〵なれば、罪を「　　　　」ふべし。つら〳〵と思ひかへすに、父の御膝のもとにわりし頃、大かたのいつくしみは、おもふに心の暇なし。手習もの學びなど庭訓もまた疎そかならず。その病に臥たりし時は、藥をものし針さし灸すへなど、何くれの心用ひに夜をだに安くふし玉ふほどなく、外に出玉ふにも必携玉ふは、しばしが程も惡きに習はしめじとやおぼされけるならむ。母のいまそかりし日には、まして稚かりければ、ひとつの味ひを得ては是をあたへざらむことを恐れ、一の衣有ればこれを着せざらむことをうれひ玉ふ。されど是は世の人の同じき心なれば、さらにも言ず。ゐたちすゝみ退くのふしも、夫はうつしだちよ、是はいぬつくばひよ

民を道びき玉ふぞ、この章の旨を得るといへるものならむか。

執齋先生雜著卷之一畢

らぬよは、皆我御徳の至らざるなりとのみ心得給ひ、其御心にて、國民の安からむはいかゞすべきと思ひをめぐらし、人に忍びざる御心より人にしのびざる政を施こし玉はゞ、是を道びくに徳を以てすと云ふにかなひ玉はむか。斯の如くなれども、猶是にそむきて民の憂國の禍をなす者あらば、止む事を得ずしてあつるにいたき刑罰をもてせむこと、刑をもて齊ふるといふには非ざるべし。されど猶あはれみて是を行ふは、君子の仁心なるべからむ。もしそれ吾此位に居て此政を爲す、かくてぞ國も安く民も穩ならめ、もしこれに背くものあらば、やがて刑すべければ、なてふ是を犯す者有べきと、政刑をたのみて世を治るの道足れりと思ひらむは、いと愚なることと也けむかし。桀紂の世にも、民に恥せよとは敎えねども、其君の德にこそならへ。其敎には從はぬものなるとぞ。此章は只其本を論じて、いさゝかも政刑をたのむ心あるは聖の道にあらずといへるなるべし。今士大夫の家も、そのあるじ厚き誠あれば、つかうるやつこまでも、いましめざるによく　　はらわしきものは、奴婢を罰て、常にいましめの詞多しといへども、おさ〳〵しき事を見ず。國も又このためしなるべし。故に論語の内、哀公政を問ふに子の答玉ふより、門人の政を問ふに至るまで、其こたへ皆身を修るの道をのみ述玉ひて、國天下の政に及べることなし。ひとり顏子にのみは、心正しく身修れる人なりければ、はじめて治國の條目ををしへ玉へるなるべし。されど仁心仁聞ありて民の澤を蒙らざるは、先王の政を不レ行ともいひ、又發レ政行レ仁ともいへれば、政によらずしては、君の仁を天下に施し玉ふべき道なからむ。たゞ先君の心の非を正して、本をたて主をさだめて、萬の

以てみるべし。損益は時に順ふの道也。變化流行の天道に、不易の法と云ことはなし。時に順て易るが不易の常道と知るべし。此事下にて論ずべし。

惟顔子嘗聞レ之。以下欠文

道レ之以レ政說 寛永四年丁亥八月。在二京師一應二篠山侯命一作。時年三十九。

政にもとあり。身の謂なり。身に主あり。心の謂なり。身に行ひて心に得るは德の謂なり。されば政をするに德をもてすれば、衆星の北辰にむかふがごとしとかや。其主本なくて、法令をもて國をたもち、刑罰をたのみて政をたてむと思へるは、先王大學の道にあらずかし。抑夫子のこの敎を垂給ふことは、國に君たる人德を修て民に先だち、禮讓を以て國を治れば、民の德も厚に歸して、日々に正しくなる。法令を出し禁制を定めて天下の民を率ひ、その背けるものは是を刑すれば、民其罪なはれむことを恐れて、惡をするにしばしまぬかるといへども、もとより感心興起する處なければ、惡に恥る心なく、善に至る道なしと也。然るに是猶政正しく刑罰あたれるをいへるなるべし。彼邪政濫刑の國を失ひ身を亡すは、よしあしをいはむ限にもあらず。昔舜二十有二人に命ぜる、猶績を考へて黜涉を行ひ、五刑を明にして五敎をたすけ給へば、政を制し刑を定め給はざるにあらず。然るにこれを無爲の治といふものは、いさゝかも政刑をたのむ御心なき故なるべし。これをや己を恭して正しく南面し、篤恭にして天下平といへるならむ。されば人君先王の大學の道に心をひそめ國の必身に本づき、身の必心に寄ることをしりて、其德を修め玉ひ、民の安からず國のおだやかな

天運を不ㇾ知なり。ここにて覇者へ流るゝ也。先王の見事なる仁義禮文を借て、忠心はかつて無れども、これにて世を治めなす。これ管晏及漢唐の主也。故に其功は莫大なりとほめ給へども、其道は五尺の童も鄙しめるは、忠の一字なきを以てなり。周亞夫漢家造創の時に當て、老子を學て、よく一世の業を始めしも、自然と此變通の道に暗に合たる故、よく厥功有たる也。老子も此忠の字は見付たる處あるに似たり。大道すたれて仁義ありなど云しも此氣味か。然るに天地の全體を不ㇾ知、總じて老子ばかりに非ず。佛氏莊子も皆聖人の道の中の一色を見て夫を主とするほどに、全體に於てあわぬ處あり。

亦私意妄爲而已。

右の段々の見處なれば、此四字をまぬかるるものなし。

史記始皇本紀二十六年云。方今水德之始。改年始朝賀皆自十月朔。

夫子生周之末。靈王二十一年。魯襄公二十二年。(公羊二十一年)

順ㇾ天應ㇾ時之治。

照應上文。猶ㇾ言風氣之宜云々。

百王不ㇾ易之大法。

百王不易の法と云ものはなし。五倫五常は大經常道也。法は時に因て易る者也。不易の法あらば、古聖人が孔子を待て更尚の道をなさむや。夫子の言曰。殷因夏之禮。所損益可ㇾ知云々。これを

ずる者は、必一年草にて久を持ことなし。松などは久しく不レ生して在二地中一。故に持レ生ことと亦久し。元來忠の時に當て、是を早く發せむ早く見せむと思ふ心あれば、早忠に非ず。此時は只隨分人に知られぬやうに〳〵と、なるほど潛まるがよし。乾の初九の潛龍勿レ用を工夫とする也。尺蠖も只屈むを工夫とす。未レ屈して早伸むと求れば、其のぶること幾ばくもなし。隨分屈々かゞみ詰りて、屈み處なくなれば、自然にのびねばならぬ。是可レ信の天の時也。潛龍もひたもの潛み〳〵て、潛處無なりて自然に見はるゝは見龍なり。こゝが大事のことなり。さて其花のひらく時なれば、もはや衰への始と知るべし。爰にて謹て世間の華美につれて忠質をわするゝときは、早亡ぶと可レ知。時節夫になる時は、やはり文にするが自然の道也。この節無理に質にするも、亦非レ道といへども、本を失はぬ處あり。俗情につれて、吾不レ劣〳〵と争ふて文をするは、必滅亡の期近づくと知るべし。乾の九三、終日乾々の敬はこの事也。然るに文になるも自然の道なれば、聖人といへども、この衰ふる機を如何せむや。是を以て變通の道ありて、滅亡に至らしめぬ處あり。これ故に忠質文更尙と云ことあり。彼花の散りたる後は、其實をよく取て可レ藝也。然れば世上文に過るの至りには、又忠を第一の心とする也。それも亦術あるべし。天地四時の運にて可レ見。係辭に變通莫レ大レ乎二四時一と云、變通配二四時一と云、變通者趣レ時と云、又通二其變一、使二民不一レ倦、易窮則變、々則通、々則久、是以自レ天祐レ之、吉無レ不レ利と云こと、これ變通の道にて、天下の常久を致すこと也。此時に當りては、服色をかへ徽號を改め、天下人民の耳目を一洗して、いつまでも此見事なる花を其まゝ置たきと思ふは、

陽氣始る處に於てせずして、極陰の月を取れるは、天地自然の道に非ず。只の義の無といふばかりにてはなき也。四月をも春とは取られず、十月をも春とはせられず。只十一月より三月迄の内なり。此事春秋の書にて、春王正月の下の大議論なり。諸說區々なれども皆あしし。陽明文集に正說あり。可レ考。

忠質文。

是又上文の意と同じこと也。忠は中心なれば、只わが心中一盃、自知たるばかりにて、少も人に顯はれぬこと也。人を愛するには、只吾心にて愛し思ふ計にて、其心を顯はし見することはなき也。質は其心中を物にあらはせるとも、文ることなき也。文はこれをかざるなり。これ大分のかはりの樣なれども、皆一つこと也。忠は質の種、質は文の根なり。只其顯はるゝと隱るゝと也。中に在るを忠といひ、形をなすを質と云、光輝あるを文と云。故に質なき文は文にあらず、忠なき質は質に非ずして、忠は始終無二間斷一也。忠の絕るは其物の終る也。故に無レ誠無レ物と云、誠は物の終始といへり。譬ば草木の種の如し。是を地中に下すとき、未レ生二萌芽一は、何の草何の木たることを不レ知。されども自らは各其種の性を具て不レ可レ掩。これ忠也。已に發生して、これは何草これは何の木と見分くべきやうにあらはれたるは質也。是忠が變じて質になりたるには非ず。忠の見れたる者也。其木其草枝葉發達して、自然に時を得て花咲き色々の美をみするは文也。これも質の變じたるには非ず。質の美發達して可レ觀也。枝葉より花まで、皆忠の中に有ること也。然るに一日二日にて生

に出て、邵子の皇極經世書に備れり。論語八佾の集註にもこれを說り。然れども皆天地人の始の義をとる樣にばかり心得たるやうにて、此三統の外は不ﾚ可ﾚ用。實理見がたし。只義を取たる斗ならば、秦の亥を用ゆるも、水德にて周の火德に代りたるなれば、曾てわけなきにはあらず。丘瓊山何の義ぞと譏れるも、實理をしりたる論にあらず。今按ずるに、子に建すの月は、一陽來復の候にして、陽氣の始て地中に復したる處。是が即天地始生する也。開闢の時に天が子と云時節にひらけたると云計りには非ず。陽は天也。一陽來復は天の始て生ずるに非ずや。然ば霜月極月正月三ヶ月を春とす。陽の始て復するより發生するまでを春とみたる者。此月を以て歲首とす。義可ﾚ然こと也。丑の月を用るは、既に復せる一氣を養ふてそだてたる也。母の德也。地の德也。天に對するは地なり。天の一氣降るは陽、それを受てやしなひ立るは地也。是地の丑に開くる也。この時は十二月正月二月三ヶ月を春と取る。丑の月を歲首とする所、不ﾆ亦可ﾆ乎。寅は陽氣成就して地上にあらはるゝ始なり。天地位を定て後生ずる處は人也。是亦開闢の時ばかりに非ず。是によれば正二三月を春とす。見(あらは)れるより終る迄なり。人の始て生る處を以て歲首とす。是その正月也。これ天地陽氣の始るに就て、或は復來を始と取り、或は完成を始と取り、或は發生を始と取る。皆是天地の發生の生意を用て歲首とす。天地人の義に取るとばかりにては無理なり。生意の始を始と不ﾚ立して、何を用て始とせむや。書經に三正迭用とあれば、夏の世から能其事が知れたれ。其以前は記錄無れば知れぬ也。知れねども、其前は子を以て正とし、又其前は丑を用ひたる成べし。是にてみれは。秦の亥を用たるは、

出べき様はなきに、唯利に目をかけ、目前の身の先なることを見て治體を知ぬものは、繁昌して土地の開くるを功と思ふより、新地を建立し新田をひらく。是天の時を不ㇾ知して先開ㇾ人なり。故に新地迄置べき人なくして、不繁昌によりて或は遊女をあつめ戯場を設けて人を聚む。善惡を不ㇾ擇して人を宿し旅人をとむるによりて、惡類盗賊の隠家となりゆく也。其所賑しくなるとはみゆれども一國の費になり、兼て風化を敗り、家を亡身を滅す者、幾といふことを知ず。新田も又然り。山中避地迄をさがして利を目前に求れば、たとへば新田一万石を建立すれば、水を引などに付て本國の害をなすこと多し、偶出來立ても、禽獸の害不ㇾ免して、成就し難きもの也。元來國中には、左樣に無用の地有がよき也。人多くなり、居所廣まりて、山中迄も人家出來行ば、人力も糞も出來る。其時彼地を開けば、自然に成就して、禽獸の害も遠ざかる。是自然の道なり。こゝにては、井田も何も心まかせになる也。今にても早二三万石の高地にては、人をも不ㇾ害一夫を不ㇾ刑して、井田を試る仕樣あるべし。七年の内には、必井地成就すべし。然れども、其人にあらねばならぬこと也。夫子も有ㇾ國有ㇾ家者、不ㇾ患ㇾ寡而患ㇾ不ㇾ均、不ㇾ患ㇾ貧而患ㇾ不ㇾ安ともあり。（論語季氏編）只能天時に從順することを可ㇾ知なり。

三王迭興

堯舜の治は善といへども、今世より知難こと多して、不ㇾ能ㇾ行。三王より後の政は、法にならぬ也。然れば、只三王を手本にすることと也。三重は謂ㇾ議ㇾ禮制ㇾ度考ㇾ文也（中庸）。子丑寅のことは、前漢の律暦志

語本ニ詩大雅烝民篇一。

出類之才。

孟子公孫丑上編云。出レ於ニ其類一拔レ乎ニ其萃一と。是亦自然の理也。今日子孫相續する處にてみれば、庸人も能君長として維持すること有といへども、開闢の時にてみれば、有德の人ならでは人が歸伏せず。小兒の交遊にも、少にても器量あるもの其中の大將をする也。禽獸も其中に勝れたるものが首をするとみゆ。盜賊の類乞食の類まで、少もすぐれたるものに人が從ふ。是にて想見るべし。とかく出類の才ならでは、君長の役目はならぬ也。其人君の役目は、爭奪をやめ、生養を遂しめ、倫理を明らかにせしむることなり。庸人にて可レ能乎。

人道立。

次第を以て云へば、天を先にすべきに、先人道をいふことは、政道の善惡にて天地もかはる。中庸に致ニ中和一の效を、天地萬物の化育に歸せること可レ見。

二帝……不ニ先レ天以開一レ人。

是本周易乾文言傳の語。是が今日政治の要。爲ニ人君一者の不レ可レ不レ知ことなるを、少志有人もこれを不レ知故に、行れぬこと多きぞ。先天とは、譬へば夏の時に當て冬の衣服を着る樣なるもの也。其時節ならぬことは、善事も行れず役に立ざるもの也、譬ば國中に人多くなりて、居所つまりぬれば、是地を開き居室民戶を作り廣むべき時節の至れる也。此時にして村里を作れば繁昌して、惡黨の類

の老先生に、此事を氣の毒に思ひて尋たりければ、老先生曰、病ありて大酒を好むこと實に不ㇾ宜ことなれども、其人にては實にいたましきこと也といへり。其故を問へば云。先生の幼き時此兒の器量あるをみて、是を其父にもらふ人ありて、父これを許し契約せり。此兒長じて窮理學の門に入り、他姓を冒すの非義なることを聞て、父の命に不ㇾ從。其父甚かたき人にて、色々とすゝむれども、直辭して從はず。夫の約せし人も、家少々衰たるによりてこれを變ずると思ひて、強く責恨ける故、其父せまりて遂に自殺せり。此兒長じて其學才も甚進みて門人も多く、盛に其學を唱へり、其人始は酒を不ㇾ好が、年をふるに隨て前事を思出れば、吾故に父自殺せると思はれて胸痛きゆへ、其憂を消さむとて醉に及ぶほど飲たるより、後に大酒となれると云り。孟子に云る非ㇾ自ㇾ殺ㇾ之一間而已に似たり。是皆學際の所ㇾ致也。謹むべきことゝなり。かくいへば養子にゆくことをよきことゝ心得るは甚不可也。先他名は冒さず、本名にて身を立ること、常道にて輕からぬこと也。姓を不ㇾ變と思ふの堅固なるは、義以爲ㇾ質也。この上に無ㇾ據子細ありて、君父の命もあるは、不義とは云べからず。只その命に從ふべし。其上は禮以行遜以出の旨を能々思ふべし。兎にも角にも本心良知に自反して、利害名聞等のいやしき心より出るや否を詳察して、知る所に從てこれを行ふべし。

伊川先生春秋傳序講義

天之生民。

伊川政道を論ぜむとて、天之生民より說出せり。人作私意を不ㇾ用、天道の自然を云むとなるべし。

て離別すべし、知行は不レ殘其入聟に賜り、武具馬具の外婦人の進退すべき家財のみを女子に得さすべしとの趣なり。亦其法の弊も可レ有なれども、先法の正しきと聞ゆ。その男も妻の恩にて此家を得たりと云卑心あらば、もとより接脚夫たるを免れず。さありとて妻を愛する意なく、或は不容儀を嫌ひ、又外の色にふける類は、其法令あるべきことと也。已むことを不レ得程の事あらば、斷を云て身を引べし。只隨分愛して、他より迎たるにまさりて惠むべきことと也。其上數百年來この養子多くなりて、吾先祖より他姓にて嗣來れり。其本實不分明類多し。然れば今の世にては、子なき者は殊更に其德行をえらびて其家を嗣しむべきことと、天理の當然なり。孟子曰。老二吾之老一而及二人之老一幼二吾之幼一而及二人之幼一と。以レ是見レ之ば、元來人間は皆一なる故に、四海皆兄弟ともいへり。血脈なにほどに重くとも、天理にかゆべきやうなき故に、血脈にても五世にして斬。是軀殼は百年の小天地なり。天地は萬世不易の大父母なるを思ふべし。桀紂はまさしく禹湯の正脈なれども、天に背ける故に放誅にあへり。もし其時桀紂が父君子にて存生ならば、桀紂を押込賢者を子として、是に天下を讓らるべし。然らば天下も平に、桀紂も放誅をまぬかれて命を終ることもあらむ。かくの如くになる勢なれば、こゝが天運にて、不レ及二是非一ことと也。人力の及ぶ所に非る者也。近頃或窮理學の先生、朋友の内子多くして他家へ養子に遣せる者あり。彼先生其非義を鳴して交を絕り。誠に守正の意とみへたり。其先生ある諸侯の家へ出てつかふ。其諸侯の家二代まで皆他家より來り嗣玉ふ家也。これに仕へらるゝは何とぞ故ありての事にや。又同派の先生大酒を好て病るあり。或人其先輩

とにや。云。これが學者の工夫なり。是於ㇾ義無ㇾ害して、我によき子孫あるを捨て、財寶を受て他人を子とし、或は他家へ遣し他名を續しむるに、皆其位をむさぼり富を募ひ、又は色にめづるなり。この類のこと露ばかりもあれば、舜の御心を學ぶものに非ず。如ㇾ此のいやしき心なく、堯の一に天心に從はせ給ふ御心にてこれをなさば、いるゝ人も交る人も誠の學者といふべし。堯舜の事蹟をかりて私欲を肆にし、禮義の名を云たてゝ我慢を行ふも同じこと也。たとへ實子ありとも、この先祖より受來れる大切の家を敗るべき者ならば、他人にても賢德ある者に讓りて實子を捨ることも、千萬に一もあるまじき事にもあらず。况や實子無して、或は同姓の內又同性にもこれ無く、異姓より迎るもあるべし。末世の氣運にや。近世の諸侯實子にて相續あるは十家に三人とは不ㇾ見。况御旗本の多き諸士の無ㇾ數民庶の無ㇾ限に於てをや。これを遣す人も、吾家餘子の多くして、別に家業の建べきなければ、他の子無方へ客として遣はし、其器量相應に其家を續しむこと、天理の至極なるべし。若其家に女ありて、それに婿嫁して配すること、もとより不ㇾ苦ことなり、即舜の行ひも是なり。もし夫として其家を受ることを、妻の蔭によりて家を持など云卑心あれば、男子の道に非ず。女も是元來吾家なり抔と云心あれば、大なるひがこと也。他家へ往たらむよりは、外より來りたる夫の蔭にて、我父の家名をも不ㇾ斷絕、一家並に普代の老少をはごくむは、全この夫の蔭也。女にて家を建ることを不ㇾ能を、此夫にて家脈を存す。尋常の夫よりわきて大切にすべき事也。或大國の家法に右の趣を述て、如ㇾ此なるべきを我家也などゝ思て、婦人の法に背き怠りたる振舞あらば、一類の中へ遣し

日本倫理彙編

の諸侯にさへかの如きことあれば、其時の士庶に禮にそむけるも多かるべけれども、孔子の御議論にみへず。門人の說もなし。舜の心法天下を富りとせず、二女に從媒なくてその事に處し給ふ所を以て万世學者の規矩とすべきこと也。さて今の世周の盛禮はさて置、夏殷の如きの禮とても未レ及レ行時に當て、假に周の盛禮を以これをせめ、養子を非義なりとて人の家を斷絕せしめむこと、却てこれぞ大なる不義なるべき。士庶の輕き身にて、我無レ子とて其家を捨て、相續を不レ求して死する者を有レ志ニ義理一者也とてこれを稱せば、一萬石も領する大名も、我子なし養子は不義なりとて其家脉を斷捨て、先祖以來の功臣其國の庶民までを難義さする道あらんや。一萬石は輕きこと、義理は甚重きなどと云人あり。然らば十萬石百萬石も同然、天下の主も同じことなるべし。此義行はるべけむや。

或云。夫故に養子としてこれに名字をつがしめず、唯其人にゆづれば、二ながら全きと云るあり。これ猶以筋もなき論なり。今一萬石の大名義理を行ふとて、子なきに他名を以讓らむと云人あらば、上大君あり老中諸役人まで許容し命じ給はんや。下家中の諸士も、此家の名號をすてゝ他名を稱せむと云人を願ふて立て、これをつがしむべけむや。唐堯虞舜を別姓なりと思へる人あり。不レ然。是は龜井鈴木など云る如くに、其國居ましたる地によりて其世の名とせる也。さればこそ堯典を虞書に入たれども、姓を混じたりとは云ず。今日にても上より法令出たらば、其代は堅くこれを守るべき事勿論なり。今世一同にこれなきことを、周の世の法にてそれが義理なりとて、それに違ふものを不義也と云は、我慢の私意より出たる僻言也。云。然らば養子入聟娶ニ同姓一こと、何れも不レ苦こ

といふは、天の子なるゆへなり。血脈は他性にても天と同德なるを以てなり。君にひとしき有德の人をは、必其君の子ならでも是を君子と云は。君の德あるを以稱レ之者なり。舜は血脈の實父は瞽瞍なれども、堯の養子となり、且入聟也。故に舜も父として三年の喪をなし給へり。堯舜共に顓頊昌意に出給へは、又同性なり。今世の窮理を以てこれを論ぜば、舜は入聟也、養子也。同性なり。然も姉妹を合せて娶り、誠に父母の不得心ならんとて、沙法なしに婚禮して、後は婦氏の家へ入給ふこと、一として義理らしきことなし。俗情よりいへば、瞽瞍夫婦の怒氣が殺むと企しも尤なること也。祭り給ふに至ては、定て瞽瞍へも至極厚き御事なるべけれども去に不レ及こと故か。書經に舜格ニ文祖ーと云て、文祖は堯の廟也と云り。是堯を父とし給ふに非ずして何ぞや。夫今世の他名をつぐとて非義なりといふも、多くは本性を不レ論、指當りたる稱號のこと也。鈴木三郎龜井六郎兄弟なれども、其所レ居の在名を以分ち稱するまでにて、兄弟他氏になりたるといふにも非ず。此類も多きことなり。故に別氏にても必婚姻もすべからざるもあるべし。たゞ能其實を考へて、我心自知る所の真心に顧みて行ふべきことなり。堯舜の例ありとて、心任せに他性にうつり、姉妹を合せめとることに非ず。無レ子を不孝也とて、當然父母のきらふ者を娶りて、これを知せざるは、不孝の大罪たるべし。舜の所レ爲ニ万世之法ーは、この所には非ず。人喜レ之、好色富貴不レ足レ解レ憂云々の御本心の真知を法とすべきなり。禹の舜に於るも此意なるべし。故に不レ娶レ姓、不レ娶ニ同姓ーは周の盛禮にて、孔子の從給ふる大法なれども、昭公を不義人也とはの給はず。却て禮を知とこたへ給ふ。周代

未レ考。

一。馬の勝負を見る役人を階下と云こと、古昔武德殿の階下に左右の大將陣を構へたることありて、それを階下と云し故ならむか。未レ考。定家卿この階下を役せられしこと有とて、詠歌などもありと云り。此役は武官にて大將の役なれば、有まじき事なり。題もたしかならぬこと也。但競馬を題によめるを引合せていふか。若又加茂行幸などの供奉にて臨時に役せられしか。未レ考。五番目より假殿の前の鉾を一番二番にふせる也。

養子辨を辨ず

近世窮理の學徒養子の辨を主張し、養子辨證と云書を梓にし、禁レ之こと甚嚴なり。固より周の正禮とみへたり。吾國上代此辨甚嚴にして、異性亂二血脈一とは堅くならぬ樣に立たることゝみゆ。これ亦周の盛禮の行はれたる時のこと也。これに次て入聟及娶二同姓一ことをも同じくこれを議して、共にこれを密夫に比するもの有。もと其聖法を守る所は誠に稱すべきが如くなり。然るに是皆其本を揆ずして末を齊ふするの論なり。本とは何ぞ。天理の本心也。末とは何ぞ。人情格法なり。孟子に舜法を天下に爲して可レ傳二後世一と。中庸に仲尼祖二述堯舜一と云り。これ天理の本心につきて云。法は格法の謂にあらず。請以二堯舜一論レ之。堯有二九男一。これには天下を讓給はずして、舜を揚てこれにゆづり給へり。これ一に天の與る處に從て。これを與させ給ふものなり。夫家をあたへてこれを續しむるは、子にあらずして何ぞ。今の養子と云は吾家をゆづる故なり。夫天にひとしき聖德の君を天子

馬を入るゝ時鉦を打畢て太鼓を打。是は後世のとり違なるべし。鼓にて始め鉦にて畢る筈歟。打レ之者は素襖を着して從レ之。

一。埒の北より赤十人馬上にて九折をのりてさがる。これを俗に埒見せと云。此乘形は古き馬禮なれども、競馬には無ことゝ也とも云り。馬場の南より東へ乘ぬきて、寺院の前に馬を立る。

一。第一番はならべ馳す。諸司代の馬を赤のりて南より北へ馳通る。通り過て跡より黑追てかけ通る。鉦を打て馬を入れ、馳畢て太鼓をうつ。

一。乘尻鞭を持て馬を打て半過るとき、鞭にてあとを指し、又向を指ことあり。是は階下の方へ乘過たるを、鞭を揚て見する心歟。又勝を顔へ示す心とも云。御所の屋の何本目の柱をさすと云習あるよし。勝たる者のりぬきて、馬場の後より其方の階下へ行時、これに絹を賜ふ。鞭にかけて戴く所作有レ之。さて兩人同道にて御假屋の前へ行て拜して退く。

一。其次に鉦を打、黑の方埒の西の方より乘出し、南より乘入て場の內の東の方をのる。とかく負たる方の馬を先へ入て、敵の方を乘る也。これを走り馬と云。其次に赤東より南の口へ乘入、少下りて埒の內の西の方を乘る。是を追馬と云。左右ともに輪をのる。段々に長く乘ること七遍。これを七遍がへしと云。古禮には無ことゝも云り。七遍めに南の方より引ちがへて、黑は西赤は東へ入替る。この所を巴を乘るなど云所作有レ之。此所にて黑は黑だけ先へすゝみ、赤は馬だけあとに出故に、勝負の木の所にて馬だけおくれたるは持なり。畢て大鼓をうつ。其勝たる方の大鼓を打歟。

一。每年五月朔日競馬の足揃あり。競馬十番二十匹の馬の遲速を考へてつかはしむる下見也。神宮役人御所の屋に列坐して見え各着ニ淨衣一。乘尻馬を馳る者を云は若き輩也。淨衣二襲ねにてのる也。先一匹づゝかけを乘り過但し障泥なし。是を素驅と云。馬の名を記し置て、其わしの遲速を見て一二三を付、何れの馬と何れの馬と對と定めて、其通りにつがひて驅す。勝負を論ぜず。是を足揃と云。五月五日馬場の東の方に明神の御假屋有レ之。西向也。左右に鉾を三本づゝ六本立る也。其南に疊を設けて、神主束帶にて着坐。其次に役人列坐。其北に楓の木有。これを勝負の木といふ。此所にて勝負を決す。其向ふ北に東向に諸司代棧敷をうつ。其向に傳奏の棧敷あり。

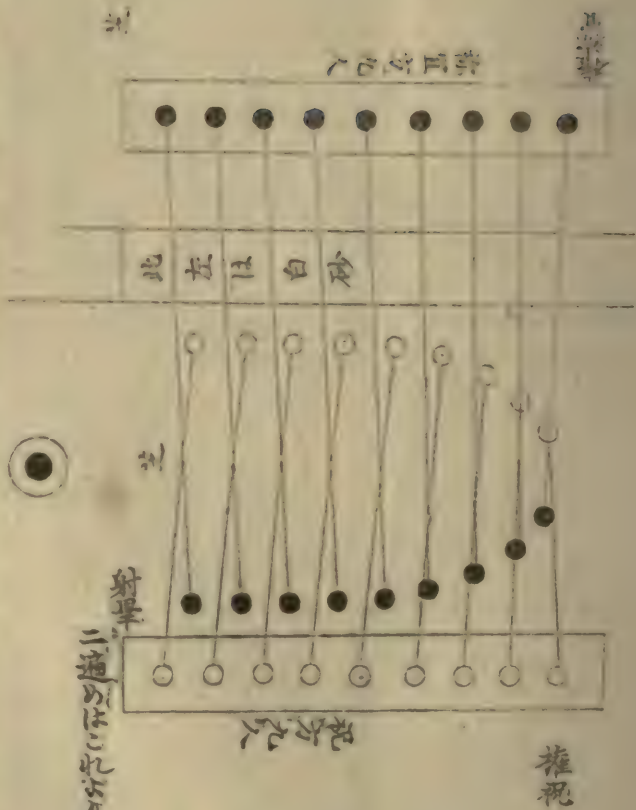
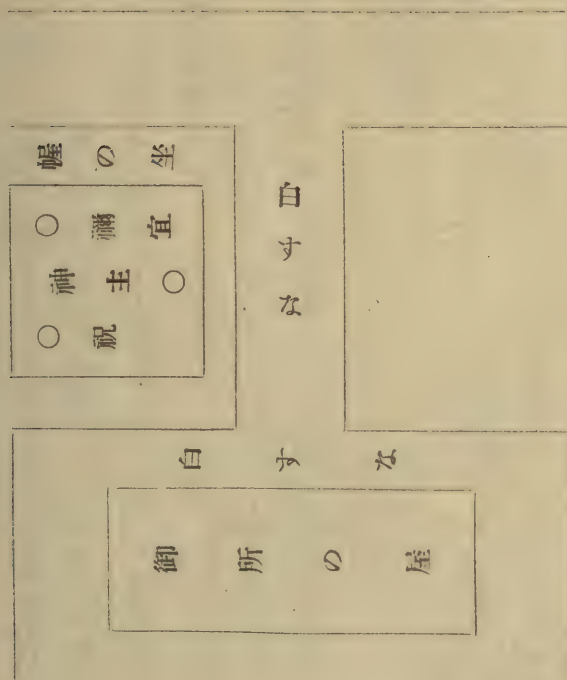
一。乘尻の裝束は樂人の裝束を用ゆといへども、左に非ず。古朝廷にてありし時は、左右の近衞の府生將曹のりたる也。延喜式にある近衞の禮服にて、裲襠と云もの也。されど府生將曹などは賤官なれば、織物を着ことはならず。今の蠻畵の織物を用ることは、樂人の裝束による歟。尻さやの大刀を帶、埒の內にて左の方は左近衞にて赤裝束にてのり、右の方は右近衞にて黑裝束にてのる。

一。廳の屋といふ所にて神主上坐に東向に坐す。其左第一坐は赤き裝束にて、階下の役人南向に坐し、赤十人同列に坐す。其右は黑階下の人第一坐に着て、黑十人列座して北に向ふ。

一。役人神主假屋の出るとき、赤の階下の役赤十人を召連、本社の前に出、御札の屋といふ所に着坐して、奉幣これを土俗幣振と云。畢て階下の人其幣を神前へすゝむ。其次に黑亦如レ是。

一。階下の役人黑きは埒の西の庭へのぼり、赤は東の庭へのぼる。其臺の上に大皷と鉦とをつる。

但古法は各四矢を持、相向ふ者偶進し、互に一矢づゝ四度に發つ。肩を脱ぐも、古法は袍ばかりを去る。肩を露さず。此歩射の矢の持樣も、當時の射法の如し。是も古の法は弓を前に横たへ、矢を其上にさしたがへに、十文字にして持とかや。

競馬の事

次に禰宜祝皆如レ前互に交り進て、列をなして立、如レ圖。
立畢て西南の方より射始む。肩をぬぎ弓を張て一矢を發して立、次第に各射ること如レ此して、東南に至て終り、又東南より重て一矢を發し、次第を以て西南の射始めたる所に至て終る。射畢るとき各肩を納て坐にかへることもとの如にして献あり。献畢て又交り進て立射ること如レ前。禮畢て退散。

上賀茂歩射の次第（委係ゝ在上加茂三記）

毎年正月十六日行レ之て、申の刻過より始て及レ夜畢。古昔武徳殿にて行はれし遺法と言傳ふ。於二加茂一は神事となりて不レ絶と云々。然るに延喜式、江家次第、西宮記等に載る所とは、儀節相違多しとかや。扨歩射は古昔は叡覧もありし觀徳の法なる故に、専禮義を重じて中るを必とはせざる故實とかや。

一、的の大さ七八尺許（定て遺法なるべし）竹を以て壁下地の如くあみて、紙にて張、餅米をすりて塗レ之、墨にて星をつくる（注三加茂にて正の星といふもの調進。）但し古法は星ばかりを付て外輪なしと云り。甲乙の年にて的の立所かはり有。

神主（三位）一人、正ノ禰宜一人、正ノ祝一人。

右三人各束帯して幄の坐に南に向て坐す（各圓坐也）。權ノ禰宜以下九人の禰宜、皆束帯して東の方の畳に西向に坐す。權ノ祝以下九人の祝、各束帯して神道の西の畳に東向に坐す。都て二十一人也。

但し圓坐並に畳は、古昔朝廷にては、各敷皮なるべき歟。未レ考。

坐定りて神主幄を出、纓を巻て、弓矢（二本）を持、幄の前に立、次に正ノ禰宜、次に正ノ祝、又如レ前。

次に權ノ禰宜又立て纓を巻、弓矢（二本）を持。（東の方より進み、神主の前を過て西し、正ノ祝の次に立。）

次に權ノ祝亦立て、纓を巻、弓矢二本を以て、西の方より進み、神主の前を過て東し、正ノ禰宜の次に立。

の庭に持來て受しめける也。今も其かたに從ひ、此度は大橋九郎右衞門指圖をなして、救ひ惠みけるとなり。然るに或日一人のやもめ烏目十錢を紙に包みて持來り、これを其施し給ふ中に加え惠みとし給はれといふ。人々ははか〴〵しくもあらぬことゝ思ひながら、奇特の事と言てさたしけり。かくて其名を問へば、なつといひて何の町の與兵衞といへるが家の片隅をかりて綿くることを業とするやもめ也。いかなるものにやと尋ねければ、これがありさまいと貧しきを見て、彼數の札をあたへぬれば、辭して云。我貧しといへど、近き里によしみの者ありて、一人の食は給し侍れば、飢に及ぶべきにあらず。今の時にあたりて、命に換る計の重き米錢をば、有るが上に受はべることは、恐しく侍る。外の人にわたへ給へがしと□けると聞へ侍りければ、人々泪を流して感じあひて、かの大なる札に記し、何がし十金など書付はりたる傍に貼つけて、其志を表しける。是によりて、多の金を出せる者也とも、聊も惜しと思ふ心あらば、此やもめにははるかに劣たるなるべしと、互に義心を興しけるとかや。抑此里の仁なる、斯あさましきやもめ迄も、かゝる誠の志をあらはしける。誠にかの屋を比べて封ずべきと言るも、かゝる事なるべし。心學好めるしるし嗚呼大ならずや。予往來の間民の采色有るをみて、腸をも斷ばかりなる中に、かゝる仁惠の行ひあるを見侍りて、又大に樂しむことあり。故に合せ記して誠齋が餘徳を稱し、一鄉諸君の仁德をあらはし、長く此鄉の後人に告て、其子孫も又各其志を繼しめむことを欲し、且又ひろく一世に傳えて、仁心を興起せしめむことを希ふことしかり。享保十八年癸丑正月謹記。

めてこれに似たる事なかるべし。但願は講談の君子よく本とする所を失はずして、校中の式は訓蒙大意の旨に隨ひ、廣く諭俗の四條を讀聞せ、時の宜しきをはかりて導びかば、鶏の刀も豈牛をさくべからざらむや。今年西の國々蝗蟲の災甚うして、餓死の者多かりければ、攝河の邊り迄、米價しきりに沸として、細民日々に餓死に臨めり。初め此校の起りける頃、此國饑餓して細民くるしめること有しに、志深き輩相謀りて募り出せる米貳百餘石をもて救ひ恵みけるにぞ、死せる者壹人もなかりき。事終りてこの後猶またかゝる事もやあらむと、誠齋をはじめ志深き人々又相つのりて出合せる銀に、息を加えて貸し殖しければ十數年を經て又百金に近くなりぬ。されど米價殊更貴かりければ、買得たる米僅に六十石計なるを以て、早くうへぬべきものを先救ひけるまゝに、細民の安むじ歡べること誠に堯舜の治を今に見る如し。斯て日數ふるまゝに、貯へたる米さやゝ盡ぬべくなりぬ。さらばとて又其家の有無に從ひ、各出し合せ賑粥の場に札をはり、誰某は幾金何某は幾石など書あらはして積み集めぬれば、千人にあまれる窮民を二百日計もすくふべき程の貯も出來ぬ。されば近き里々の富て貧を併せ呑たりし豪家も、恥らひて是に習へる者、日あらざるに數多出來にけるとかや。斯て其施せるあらましを聞侍るに、郷人の住るやどりはいと狹くて、さる事もなし難しとて、大念佛寺といへる寺の庭をかりて、そこにてあたふべき旨をかねて觸させ、井上左兵衛正信中村彦兵衛兩人里の中を走りめぐり、人の裏々を借りて獨住けるやもめやもを癈疾の類のもの迄殘なく尋問て、乏しく饑るものに米いくら錢幾等と云限を定めて、ひとり／＼に札を得させ、日毎にか

相共に進て曰。誠齋既に沒し、萬年先生もまた卒し給へば、諸生よる所なきに苦しみ、大内氏のこゝに遊べるに請ひ、又仁齋先生の門人某氏を華府にむかへて、折々講を聽侍れど、きく人猶まち〱にして一なり難し。先生ために一言を記して、一定の法を遺し給へと。予これに應えて曰。夫道に一定の法なくして、法に一定の道あり。よく一定の道を修るを、こゝに一定の法とすべし。昔堯舜の學をたて師をたてて敎を垂給るや、ひとへに百姓のしたしまず五品のしたがはざるをうれひ給へるによれるのみ。是これを一定の道といふ。人性氣質ひとしからず。趣向も又殊なれば、各其見る所を是也と思へるも、勢ひの當然にして、しゐて同じうすべからず。豈一定の法をもうくることをえむや。但願くは諸君こゝに省み思ひ、富み貴きは賤しく貧しきに下りいつくしみ、まづしくいやしきは富み貴きをしたしみいたゞき、相共に進ては公の賦役をつゝしみ重むじ、退ては自の業をよく勤め、父母妻子を敬ひ養はゞ、其說所異也とも、共に堯舜の民たるべし。況やこれより進むで、學を明にし德をつみ、廟堂の才を成むことは、もとより諸君に望む處なり。若この旨にもとりて、富み貴きは貧しく賤しきを凌ぎ、才能すぐれたるものは愚かに拙なきをあなどり、又いやしく貧しくして富み貴きをおろそかにし、才能勝れたる人を厭ひにくめるあらば、其說所同じきも、異端邪說の類ひならずとせむや。必おのれを是として人を非とし、己に同じきをよろこび己に異なるを惡み、父兄に和順ならず朋友に相爭ひ、佛を好み事を起して風俗をみだる者あらば、誠に堯舜の罪人なるべし。近世學を好める中に、猶此風あるをみる事あり。故に諸君のために唱へて爰に至る。いまし

は道の味ひなり。虚明は心相也。其に真知の景象なり。其景象によりて本體を求るものは可也。景象を以本躰とするものは、影をとらへて形とするもの也。其失なふことや遠し。故に真知にもとずかずして淡然を求る者は、必虚無に歸す。其終り爵樂をいやしみ仁義をなみするに至る。真知にかへりみずして虚明を悟るものは、必空寂に落。其終り父母を離れ妻孥を捨るに及ぶ。この二のものは人道にあらず。以家國天下を治むべからず。こゝに於て毫もたがふことあれば、必終るに千里を以す。慎まざるべけむや。然といへども、真知のくらむことは毎々人欲これをおほふによれり。夫人欲の起り出るや、飲食男女その大ひなるものにして毀譽得喪これが最たり。其等の境に臨むより凡一切の世味に於て淡然たること、凡て風雲の大空をわたるが如く、これをみるは則真知をやしなふの方也。夫又愛に事とすること無るべけむや。

大ぞらを、わたる浮雲、なにか世の、
ひとの心に、しばしとまれる

享保丙午林鐘中旬　　執齋希賢書

合聚堂記　時年六十五、在二平野一作、

攝州原野の莊（今稱二郷町一）合聚堂は、過し丁酉の年、亡友土橋誠齋同邑の豪數人と相謀て設たる所の精舍なり。事は宗論の記に備れり。去年壬子の冬、予浪華に遊びて、又この堂にのぼる。精舍の學生新舊數十人、合して講を乞ふ。予學而の一篇をかりて、道に入の實地をのぶ。生皆憤を發し、

日本倫理彙編

は、既に書肆に印行すといへども、或は未定の書、或は不成の編にして、いまだ其全書をみず。其餘殘編遺文の所々に散在するを聞ては、季誠必もとめてこれを獲ずといふことなし。或は疑はしきものは則これを江西常省子に正し、或は先生の門人泉仲愛、加世季弘、中村叔貫の備州に在るに送り正して其家の納めたる處と合せ正し、是を錄し、名づけて藤樹全書とす。此書のなれる時、先生の長子宜伯及二子仲樹ともに卒して、季子常省軒季重ひとり江府にあり。依てこれをおくり正して其序を請ふ。其頃江府大に火ありて、その書もまた灰燼となれり。又痛ましからずや。季誠また其草稿をあつめて　終に編をなし、再び全きことをえたり。于ゝ時常省軒子もまた既に卒せられければ、空しく家に藏して年月を經たり。近年予が文成公の道を信じてひそかに先生を慕ふことを聞て、其全書をよせてこれが序を求む。予もとより其道を信じ其學をしたふといへども、寸分の得る所あるものに非ざれば、如何ぞ鄙言を君子の書に加ふることを得むや。仍てかたく辭することあまたゝび。季誠尙これをもとめて止ず。予又退ておもふ。予が鄙言元より君子の言を汚すべからずといへども、季誠の誠實大功は、また是を空しくするに忍びざれば、後のこの書に序せむ人の案にもやならむと、しばらく其始終をしるしておくり侍ることとしかり。享保七年壬寅十月中旬。執齊三輪希賢謹書。

淡齋記　年五十八。

荒木の何某、致良知の訓を予に學びて、以其身をかへりみ、喜怒を愼み嗜欲をはぶき、數年にして淡然虛明の意にみることあり。依て其廬に名づくるに淡を以し、來て其方を請。余曰善哉。夫淡然

末吉宗倅　同德廣　奥野宗舜　同祐可　同淸順　同莊三郎　末吉藤右衞門　前田新八郎　岡又兵衞　吉井與惣兵衞　三上淸右衞門　中瀨九兵衞　近郷より來り候　松永十兵衞　墨屋金次郎

右の者共出席仕候。享保五年子五月日。

藤樹先生全書序　年五十四

藤樹先生全書若干卷は、我友江西の岡田季誠のあつめし所なり。先生道を江西の小川に講じ給ひし時、季誠の父仲實從て師としつかふ。季誠の生る先生既に沒せるの後にして、父仲實にも又幼年にて離るゝといへども、先生の三男江西常省子に親炙して、其道を聞事を得て、是を信ずること厚く、したふこと深し。嗚呼先生江西に生れ、豫州に長じ、又江西に歸りて、母をやしなふて終れり。其はじめ朱子を篤信して心を集註にひそめ、大全を合て是を暗誦す。然ども未心に得る處なきを以て、疑ひ止むこと能はず。廣く書肆をさぐりて陽明全書のはじめて本邦に渡りぬるをえたり。詳覽熟讀して數年の疑惑盡く解釋す。こゝに於て聖門階梯の適路を陽明夫子致良知の學に得て、其敎に從ふこと數年。翕然として默會し、其心傳を本邦百年の後に接せり。蓋先生德崇く學正しうして、實に本邦道學の淵源たり。かくて是を以て當世に敎へ給ふに、靡然として其風を慕ひ其德を崇み、興起服從せずといふことなし。惜哉其不惑を越ぬるのみにして卒し給へば、大にそのかみに行はるゝことを見ざることを。されば先生のあらはせる書かくれる文元より多しといへ共、家々に納め國々に傳えて、これを集輯する人なし。かの翁問答、鑑草、大學中庸の解、孝經啓蒙、醫筌、春風などの書

候。米高合百廿餘石にて、貧人千二百人、壹人も不ㇾ及ニ餓死一、其上七郎兵衛方へ日頃出入仕候者には、七郎兵衛方にて別にとらせ、施行場へは出し不ㇾ申候。尤乞食穢多村の者は一人もませ不ㇾ申候。是より大和筋も相應に救ㇾ餓申事、皆原野より始り申候。其後鄉中の者共相談仕、重て又飢饉も候はゞ、財寶つゞき申間敷候間、令ニ餓死一事無ニ本意一候間、さま〳〵金銀を聚置、用意可ㇾ仕旨示合せて、每年かけ合せ置申候。唯金銀子三貫目餘に罷成候。當分は鄉中の貧者には、利息輕く仕、貸申候故、年々多く成申候つもりに御座候。

一。享保二酉年同志井上佐兵衛不勝手に罷成、身躰を仕舞申候。家居は鄉中にて二三番の住居にて候を其身ひつそく仕候へば、大家は入用も無ㇾ之候。幸講習の寄合所に差出し可ㇾ申候とて、朋友の中へかし申候。尤器物其外他客杯には臥具等も皆々かし申候程の用意も有ㇾ之。三五七十の日皆々會合仕候。自今不ㇾ絕相講申候。其後同志の者申候は、當分は寄合候へ共、佐兵衛義いつ迄もひつそく仕候てはすまぬ者に御座候間、別に學問所建立可ㇾ仕存立、夫より每年銀子を出し合せ申候て、只今銀子壹貫五百匁積り有ㇾ之候。

右學問所出銀幷に出席申候同志姓名

土橋七郎兵衛　同九郎右衛門　成安源右衛門　末吉原次郎　德田四郎右衛門　井上佐兵衛　間源之進

右七人出銀仕候

戌の年於二其宅一一月に三夜の會を始、鄉中の子弟二三輩を聚て講習仕候へ共、鄉中悉く一向宗にて、偏に佛を信じ申に付、勢難レ繼、中絕仕候。乍去右七郎兵衞父母夫婦四人者捨不レ申、日々打寄講習仕罷在候。正德四年同鄉成安源右衞門と申者志を發し、相共に往來仕講習いたし候。夫より數輩興起之者有レ之、一月六會宛廻りくに寄合講習仕、或は京大坂の學師を招待仕、無二間斷一學び申候。如幽方にても、右の外に一月三會宛大學を講じ申候。其後如幽に相果申候。尤一鄉皆一向宗故、自前に火葬ばかりにて、土葬は堅く禁じ申事候。乍レ去七郎兵衞實心をもて色々と盡し候へば、僧徒も相感じ土葬に仕候。夫より原野鄉學徒追々土葬仕候事、此者之家始にて御坐候。

一。先年原野大水にて、木わた迄も腐申候。原野鄉は綿所にて候故、輕き老女杯皆綿をとり木綿を織る樣の事にて渡世仕候處、米高直になり、わたの所作は無レ之、人々及二饑餓一候。惣じて和州筋迄右の通にて御座候。右七郎兵衞幷井上作兵衞と申者兩人申合せ、一鄉の饑を救可レ申旨相談を定め施申候。塲所無二御座一候に付、其鄉中大念佛寺と申大寺御座候をかりて可レ仕と存、右の寺僧に相談仕候へば、此儀代官所へ伺可レ申事に候へば、寺僧の願に仕可二申上一旨を申處、同志之者申には、此大美を自立候て、功を寺僧に歸することゝ、無二本意一之由申候へば、兩人は、唯饑を救ふの本意さへ達候へば、誰の願にても不レ苦候、功を爭ふは心實の救にて無レ之事に候へば、一刻も早く埒明候方可レ然と申、僧心次第に願申候故、右僧の願にて公邊早速埒明申候。一在所の身上よろしき者を勸めて、有分量相應に心持次第金銀を出させ申候。其年十一月より翌年三月迄、毎日錢と米とにて施し申

日本倫理彙編

の工夫の通りにては、しかと分れ申間敷と存候。草を刈去と拔との說の如くにて、言論にてはよくすみ申候へども、唯今さしあたりて我心より發し申候私己にあたりて、この樣にするは克己の趣ぞ、かくの如くするは克伐不行の趣と申事、判然と有まじきか。實に克己の趣にても、一度にて根の拔るものにては有まじく候へ共、行方の趣ちがひ申事候。拙者存寄は面談に可ㇾ得㆓御意㆒候。何のむつかしくもなき事にて、よくすみ申事に候。夫を用ひ申事の難きは、私己厚きと薄きとの違ひにて候へども、工夫の趣は氣象もとよりはるかに違ひ申候。一冊の末に御書候不審、なるほど右之工夫にては明白なるまじく候。是も拙者存寄にては、不審もなくすみ申候歟と存候。乍ㇾ去其克己の合點はよくすみ申候へども、一二の己私にも克得不ㇾ申候ゆへ、是も空言と御耻敷候。とかく重て貴面に拙者存寄可ㇾ得㆓御意㆒候。貴樣御心得の上にて、先樣へ御語可ㇾ被ㇾ成候。書面にてはふと意思のちがひ出來候へば、却て大に害も有べきかと存、書付不ㇾ申候。書は不ㇾ盡ㇾ言と古人も被ㇾ仰候。面談なるべきに書中にて申候事は如何と存、貴面を待申候。其上にて又々御不審も候はゞ、幾度も御吟味可ㇾ被ㇾ成候。則一冊返進仕候。かへす〳〵此所に御不審の立申候は、實に御用之所に御心付候人と、當世には希有之御方、珍重〳〵に存候。隨分切磋可ㇾ被ㇾ成候。以上。享保二丁酉正月日。執齋。

原野學問所之事（享保庚子作。時年五十二。）

原野鄕百姓三上如幽と申者、夫婦共に禪學を仕、數年坐禪等仕候。養子七郎兵衛を京都へ學問に爲ㇾ上、數年にて罷歸、兩親へ儒學をすゝめ申候に付、如幽夫婦も少々志を發し申候。依ㇾ之十七年以前

事に哉。

一〇二先生祠堂記に、周茂叔をも道統の人と朱子の御書被ㇾ成候。大學中庸の序には、二程に御つけ被ㇾ成候。大學の書に無ㇾ功とて、道をつゞるまじき事如何。孟子易の書に無ㇾ功候へ共、知ㇾ易は孟子にしくはなしといひ、大學の書にも孟子の功はさのみ見へ不ㇾ申候。其道同事といはゞ、周子の道も同事なるべく候。如何。

右いづれも少々存寄は有之候へ共、しかと不ㇾ仕候。自分の存寄は貴面に可ㇾ得㆓御意㆒候。先輩衆の明說も候はゞ、御聞せ可ㇾ被ㇾ下候。此外にも少々疑の不審有ㇾ之候。賴入候。以上。享保二酉三月日。時年四十九。

同二

克己と克伐怨欲不行の工夫、氣象の異同御見せ、致㆓熟覽㆒候。雖人にて候哉不ㇾ存候へ共、當世の學者か樣の實工に御心被ㇾ用候事、感心不ㇾ少候。御益友と存候。是程までに了簡御附候事、珍重に存候。乍ㇾ去拙者被々存寄候とは、少々相違有ㇾ之候。朝から克と申候事、先輩の說の由、最快事に候。乍ㇾおそれ〓存養の地にて、克己の當工にては有まじき歟。其上原憲は元より朝より克たる人なるべく候。出合がしらに無法におし付る工夫と申にては有まじき歟。よし朝より克たる人にても、其内に克己の工とはちがひたることと有べく候。只今一事の私己を目前にとり出して、それを克ちて御覽可ㇾ被ㇾ成候。如ㇾ此するは克己の工夫、如ㇾ斯するは不行の趣といふ事、はきと分れ申候哉。此壹冊

一本には周禮云々の箇條の前に

一。八歳より十五迄小學に入る事は明白に御坐候。十五大學に入候ては何年學び候て、校を出候事は何哉に候や。是には段々不審有レ之候。

の一箇條あり。

ゆへ先達衆の說承度存候。

一。周禮大司徒にて德行藝の三物にて敎候事明文有レ之候。則朱先生小學の書にも御のせ被レ成候。三物の內、德第一、行第二にて候。藝は最末の事ゆへに、行德の不法には八刑を用ひ申候。無藝とて刑することは不レ承候。然るに小學にては藝を敎へ大學に道理を敎ゆると御覽候て、此序にも重き德行を拾て輕き藝のみ御載候事、如何候哉。

一。大學校中にて窮理正心脩己治人の道と候へば、名目は相聞申候。其務むる事は何を仕事に候哉。小學の藝は跡有レ之候へば、よく見へ申候。大學にては講釋を承事に候哉。靜坐を仕る事に候哉。終日の所作承度候。

一。小學にて三物を敎候事は古來明文有レ之候。大學にて窮理正心脩己治人の業を敎候と申事は、出處何に出候哉。證文承度候。朱子大賢の事に候へば、無二異論一候へども、こゝは古法を被レ仰たる事にて候へば、其證據可レ有と存候。

一。大學の書は十五以上成人の學ぶ所に候へば、人々の必可レ學事にて候はんや。天下國家を治る事に候へば、其任なき人は學ぶまじき事に候哉。學ぶまじきならば、格物致知誠意正心は無くも苦しからざる人も可レ有哉。人每に學ぶべきことにて候はゞ、天子ばかりは衆子をも被レ入候へども、公卿以下は嫡子計凡民は俊才の外は一人も入申まじき法有レ之候はいかゞ。この書は古學校の法をしるしたる書にて候へば、周の盛なる時さへ學ばざる道を、後世に衆人の學ぶことはなりがたかるべき

が苦みにひとし。性沈默にして少しも才智をあらはさず。自守ることは勇嚴にして、人に交ることは謙虛なり。鄕里の子弟には大學論語を講じてこれを誘ふ。たゞ朱說に從て自己の意をのべず。遠方の學徒來りて見へむと求れば、虛名を耻て人を誤らむことを恐れ、自先覺の地に居ることとなし。故に人の來り訪ふには、貴賤となく必これを門にむかへり。言語かりにも俗人のわきまへ難きことを言ず。書文も亦然り、世の學者これを愚蒙なりとそしれど、自居ること自若たり。これ皆資質に出て勤苦の意なし。故に老年に至りて益壯健なり。一日病してそゞろごとあり。然るに其いふ所皆道學の談にして、昔の師に侍せるの辭のみ。子弟これをとへば曰「吾先生の來訪を謝すと思へり」と。斯の如きこと三日にして醒、また平生にたがふことなし。後二日寢所に入、眠るが如くにして逝す。享年八十五。正德甲午十二月廿八日なり。翁嘗て宇佐崎の河野氏によりて予に通ず。此頃そゞろ言いへるを聞て思へり、翁の學敬ふにたらずと。後に其始終をとひて、そゞろ言によりて翁は實の君子なることを知り、一たび相見へざりしことを悔いぬ。其門人爲に碑を建むとて予に記をこふ。予また敢て辭せず。かなにて其大槪を記し、これを石にえらしむ。思へり、愚俗の人も能見ておこるものあらば、是もまた翁の素志ならむか。猶くはしく其行實たづねて可なり。其子二人。長某、次某、今共に其業を守れり。洛陽三輪善藏誌レ之。

答二河崎氏一書

朱文公が大學序中の不審數條書付遣し候。御尋可レ被レ下候。少々存寄も有レ之候得共、不レ判。然る

春秋の衣、毎日毎年そなへ奉らで有べきや。いかばかり寳を用ひて祭り奉ればとて、生ける朝夕の孝養のほどを費すべけむや。皆父母に孝なき心より、父母在さずとおもひて、かく疎そかなるなり。死せるにつかうまつる、生るにつかうまつる如く、なきにつかうまつる心あらば、一日も廟なきには忍びざるべし。然あれど、財の有無地の廣狹にしたがひてつくるべきとなり。寳あり地廣しとて猥に大にきよらを盡すべき事ならず。又まづしくて我地もなく、家借りて世渡るものは、祠堂作らむとおもへりとても、難かるべし。やつこあまためしつかふ人は、家なくても少は廣き所借るちからも有れば、其家の不浄ならずみゆる一間をしつらひ、天井なくば天井をはり、ありとも清からずばあらため、壁の上ぬり、疊の表かへ、はり付こしばりなどいさぎよく改め、是ぞ祠堂とこゝろへ、其内に佛壇のやうなるものすへ置、中に神主を置奉らば、同じ心なるべし。其廣さは、二疊三疊敷より七八疊に至るも、過たりとせず。今其圖を下にあらはし侍る。よく〳〵考て、我ちからのおよばむほどをはかり、奢らずしてよろしきを得むほどにいとなむべし。

猪兵衞翁碑　正德四年甲午。在京師北野。年四十六。

翁氏は巽、名は令信、俗稱才次郎、號共休。後に今の稱に改む。播州繼村の農にして、家も富り。わかくして醫を京都に學ぶ。時に熊澤息游先生に從ひて聖學を聞、志を篤ふし思を潛め、偏に師訓を守りて、其行聊たがふことなし。壯年以來家產零落して、殘る所纔に五六十畝。屋宇もまた風雨をふせぐのみ。されど貧窶を以て心を動かさず。醫を業として產を助く。其病人の苦みをみることわ

な守のうちに、儒を好める人、禮文を考へ祠堂作りて、四時忌日の祭をとり行はるゝ、あまたありし。されどおほひ〳〵のはからひにて、和漢の宜きをくみてなさゞれば、定まれるのりなし。下樣に至りては、禮に志有ひと、神主作り祠堂をたてゝ祭れるも、又定る制なければ、皆其心〳〵に隨ひてなしはべり。天子諸侯のやむごとなき御禮、我いまだ學ばねば、敢ていふべきに非ず。士大夫の間の禮、朱文公の家禮などに考、闕をあらはにして、道しらむ人のたゞさむことをねがふのみ。祭の儀式は、藤井氏のあらはせる二禮童覽くはしければ、更にいふに及ばず。たとひ庶人の賤しきとて、人と生れぬるもの、禮なからむ。されば禮は庶人に下らずと文にみへ侍るは、これぞ庶人の禮よと定め備ざることを云り。されば事ある時は、士の禮をかりておこなふとかや。今命士以上の、常にも宮をことにせる人の死したるが、佛壇とてはづかの箱やうのものに先佛をすへ置、其かたすみに是は父母のなき名なりとて、紙牌はその紙にかゝせ、佛にすえし祭りの飯ばかりをそなへ、偕むかへ纔よにわざして、本を報ずと思へる、かなしき事になむ。たとひ命士以上庶人迄の人、父母存生にも宮をことゝせざるものも、其神を安むじ奉らむに、いやしくも力ある人の、祠堂しつらはむを、僭せりとはいふべからず。士常の祿あれども、高下一ならず。庶人もとより貧富ひとしからねば、一例の制に從ひがたし。今貧賤なるもの、其父母年よりて、世の營もえせずあらむに、其子たる者、家まづしとて養はざらむや。ところ狹しとて逐出さむや。然るに神となれるにも、主を置て祀るほどの事をえせず、四時忌日の祭すゆること能はずといはゞ、我は信ぜず。父母いまさば、朝夕の食

にいましめよ。

一。我過あらむ時に、打わすれてあらば、汝等外より心をつけて、これはいかにとゝへ。もしおほひかくさば、汝等をあざむく也。汝等を欺にあらず、自欺也。自欺にあらず、天をあざむく也。人として天を欺は、大なる罪なり。御罰をのがれまじき罪なり。

祠堂考

君子作㆓宮室㆒先㆓祠堂㆒と禮記にみへたり。夫祠堂は廟の遺制なり。命士以上生て父子宮をことにすれば、既に神となれるになどか廟なからむ。此禮もろこしのみ然るにあらず。吾日のもとのいにしへ、天照太神の御廟を五十鈴川のほとりに作り奉りしより、世々の帝の御廟つくり奉り玉はざることなく、中にも應神仁德の二帝は、聖德まし〳〵て中興の君なればとて、國家の大禮つげ奉り給はざること無かりしとかや。折々の御祭今に絶せず。まことにやむごとなき事どもなり。ひとり大君のみにもあらず。藤原のうぢの神を春日にまつり、君よりも折〳〵の禮幣を賜り、その朝家にいさほし有しを、末の世迄もあらはし給ふ。あり難きおほむ政なり。然るに世降り禮おとろへぬれば、天子のかしこきも、御廟つくりて四時の祭あることを聞ず。まして公卿大夫より士庶人のいやしきに至るまで、其禮をなせるやはある。此禮や本を報ずるの大なるものにして、人の道の缺べからざる、是よりおもきことなかるべし。此禮のすたれたること、佛道の盛なるより、世の人其說に習熟して、たゞ僧をだに供養すればよしと思ひて、人の心日々に澆くなりゆくより、かくなれる也。近頃諸國

其さわぎ少し。夫にてもさはぐ事あるは、神に向ひ奉るの實孝敬の心なき故なり。かへりみて自せむべし。

一。汝等二親に晨省する時に、これ役めなりと思ひてなせども、心のうちいそがはしくて、しみ〲となきは、是いつはり也。夜中の機嫌をも問むとおもふ前に、先心をしづめて、とくと思案して來りていかにと尋ぬべし。毎日の事なれば、わするる事もあるべし。少しもくるしからず。忘れぬふりをするは、親をいつはり欺くなり。思ひ出たる時に改め來りて、今日はいまだ御禮も不レ申とて、しみ〲と禮をすべし。それも其思ひ出たる時、今日の忘れたる心は何故ぞと、よく思ひかへして、其くゆる心にて改れば誠也。兄に禮するも、弟にものいふも、皆同じこと也。母の親などは、猶々したしみよりて、しみ〲と禮すべし。祠を拜する時も、もとより忙はしからぬやうにそのまへに心をしづめて、偖はむかひ奉るべし。その次は先聖をおがみ奉るも、猶以我今日人のまねをして禽獸をまぬかるゝも、此御恩なりと、しみ〲と思ひて拜し奉るべし。

一。我日々外に出る時、まづ我子の外へ出るとて、われに暇も乞はて心よくはあらじなれば、祠堂へ參りてしみ〲と御暇乞をして出べし。文にそなへて責をふさぐの心なれば、心の底に實なし。これ神を欺くなり。御罰もおそろし。若打わすれて、うか〲と出むとせば、汝等外より心をつけて、いかにとせめば是大なる汝等が孝行也。門を出る時には、必大賓の如くせよと、仲弓にさへいましめ給へば、我等ごときはいよ〲つゝしむべきこと也。汝等もこの心にて、兄弟たがひ

顧諟編

自警、以て諸兒輩に示す。夫善を責る事は、朋友の道にして、父子の間の道にあらず。されどそれはたがひに怨怒る事あれば、恩をそこなふを以てなり。われみづから責と思へども、我心の不ㇾ及所は、あやまちやぶること多からむ。汝等が見てせむるに非れば、改ることあらざるべし。われもとより責を汝等に望む。何ぞ怒り怨むることあらん。汝等もまたがひに自責むとおもふ心ならば、兄弟相共に心を盡くして相責とも、何のうらみいかることあらん。然ればかへりて過を見のがしにして心にあざけることあらば、親に於ては不孝となり、兄弟にては不友となるべし。されどそのあしきと思ひぬることも、いかり腹立心あらん時は、しばらくまちあはせて、我心のどやかになりたる時、しづかに責むべし。我腹立の勢ひより人をとがむれば、必氣のぼり言葉あらけく、自の心をそこなふものなり。こゝを先自せめて、人をせむべし。奴婢などはもとより志も無ものなれば、過あるも相應也。あはれみ思ふて、にくむことなかれ。これも彼がいかりの心とけたらん時に戒むと云人あれど、それは私言也。是も又わが怒の心にて責ると勿れ。我原意に成たる時に、のどかにせむべし。先にも腹あしくみゆることあれば、是猶我心の底に怒あるならむと、もとめて彼が不感を以て砥として、我心をみがくべし。

一。毎日朝起出て、手あらひ掃除して、祠にむかひ奉る時、心ざは〱しきは、原旦未起の時の心のなごり也。蓐中にて心をしづめて静に起出、思慮を妄に動せしめずして、祠にむかひ奉れば、

正つらは、楠判官正成の長子なり。後醍醐帝正成を攝津につかはし、尊氏を湊河にさゝえしむ。正成この軍の利なからむことを諫め奉りしかど、牝鷄晨に鳴て、其言聽れざりしかば、兵庫に行とて正行の十三歳なりけるを、櫻井の驛までぐして、これより故郷に歸れ、われうち死せば、天がしたはやがて尊氏のものとなるべし、汝いかにもしておとなになりて、朝敵をほろぼすべし、これに過る孝にあらじと、懇に戒めて別れけり。正行よく遺戒をまもり、おさなきあそびにも、賊をうつのわざをして心たけくいさみしとかや。かくて廿五になりける年、あまたの敵を四條繩手にておひしりぞけむとて、とてもこれまでとや思ひけむ、なにとなく御暇乞に參りしに、帝今はの門出とも知しめさで辨の内侍といふ女官を賜はりけるに、

とても世に、ながらふべくも、あらぬ身の、
かりの契を、いかでむすばむ、

と聞て出にけるが、此役にぞ死にける。

伴直家主

安房の國奏して申さく。當國安房の郡、伴のあたひやかぬし、父母につかへて常に孝なり。父母終りにければ、口に濃き味ひをたちて、久しく歎き居たりしが、猶したはしさのあまりにや、父母の姿をつくり、堂を建て、これをあがめ、四時の供養をこたらず、誠に生るにつかふるが如しとなん。勅して位二階をすゝめ、ながく年貢所當をゆるして、かねて門閭にもあらはさせ給ふ。

りけむ。やがて將軍に參りて、このよしを陳て、かく告奉りしを、いさゝか忠ありとし給はゞ、父が罪ゆるし給はれと、泪を流して申ければ、將軍もともに袖をぬらし給ひ、汝がこの忠、われ子孫に至る迄わすれじ、父がこと心にかけざれと、やがて三浦蘆名等を誅して、石堂をばとはれず。其後賴房みづから死して父が罪を贖はむことを請ふ。あなかしこ、あるべくもなしとて、ゆるされず。世の中靜りて後に、石堂は父子ともに恙なきことをえたり。

本間資忠

正慶の亂れに、赤坂の城攻むとて、鎌倉より八萬のつはもののぼりける中に、本間父子もありけり。既に天王寺につきてたむろし、赤坂へはあさてばかりよすべしとなむふれける。こゝに資貞いかゞ思ひけむ。人見四郎と云者とたゞ二騎ぬけがけして死にけり。其子資忠これをきゝて、やがて赤坂へおもむきけるが、石の鳥居を過るとて、

まてしばし、子を思ふ道に、迷ふらむ、

むつのちまたの、みちしるべせむ、

とよみて、ゆびくひきり、その血して石の鳥居に書つけ、相模の國の住人、本間九郎資貞が子、源内兵衞資忠、年十八、父がかばねを枕として、おなじく戰場に死し畢ぬと云て、馬引よせてうちのり、赤坂に馳行、なのりし、心ゆくばかり戰ひ、父が死せし所にて、をなじさまに死にけり。

楠正行

ぐして、見のもとへ文やるとて、

しなのなる、木曾路にかけし、丸木ばし、
ふみみし時は、あやうかりしを、

と書てつかはしければ、兒かへし、

信濃のなる、そのはらにしも、やどらねど、
みなはゝきゞと、おもふばかりぞ。

隨身公助

きむすけは、東三條太政大臣の御鷹飼の隨身武則が子なり。常に父に孝なり。右近の馬場の賭弓、公助わろくつかうまつりたりとて、父怒りて、はれなる所にて、杖をもて擊けり。されどにげのくこともせて、しばしがほどうたれてけり。人々、かてにげざりしといへば、公助父老て氣はげし。もしにげなば、必逐はなむ。をひて倒れなどし侍らば、きはめて悲しかるべきわざなれば、心ゆくばかりうたれて侍るなりと申き。聞人いみじき孝子也といひ傳ふるほとに、世のおぼへもこれよりぞいで來りにける。

大藏右馬頭賴房

よりふさは、石堂入道が子なり。入道三浦盧名二階堂等と倶に尊氏にそむき、あすなむ本意逐むとさだめて、賴房には語りける。賴房誠を盡くしてさま〲にいさむれど、聞も容ず。せむかたや無

はてなきものは、泪なりけり、

藤原長親

長親は、かの尹の大納言師賢卿の孫なり。南朝につかへて右近の大將に至れり。よく父の志を繼て、操いとたゞしくなむおはしける。時の大儒にて、耕雲山人明魏とかやいひしひとなり。新葉集に妙光寺の內大臣身まがりて三年の服いまだはてざるに、又後村上院の素服をたまはりて、思ひつゞけられける。

三とせまで、ほさぬ泪の、ふぢ衣、
こはまたいかに、ぬるゝたもとぞ、

といへるにも、其よく終を愼めるとの知られて、まことにあはれふかし、

信州の孝兒

信濃國のなにがしとかや、京にのぼりし比、ある女をおもひ、ぐして下りけり。此女京におもふ人ありて、文通はずなるを、男ほの聞て隙をうかゞひ、文どもあまたもとめてければ、をのれはえよまざりければ、わがはやうもたりし子の、戶がくし山に手習てありけるをよびて、よませけり。見これをひらきて見れば、よの常の文にもあらず。ありのまゝに讀なば、まゝ母必うしなはれて、父の心もまたやすからじとおもひしほどに、文の詞をかへて、常のことに讀みなしけり。さて父の意もとけて、母もよく過を改めけるとなむ。されば女もうれしさの餘り、いたひけしたるものども取

も高く純孝なりし人の、不幸にして世を早うし給ひけるぞ、後の世までの恨なるべし、今に至るまで世の人ひとりとさへぞたふとみわへりける。

日野阿新丸

後醍醐の帝高時を誅じ給はむの謀に、日野中納言資朝卿あづかれり。高時ふかく恨みまいらせ、まづ此卿をとらへて佐渡の國に流し、本間山城の入道がもとにてうしなひてけり。資朝の子阿新、時に十三歳なりけるが、御母に暇こひたゞひとりしらぬ海山をこえて、はるけき佐渡の島にわたりて、入道にふかくたのまれけれど、情なくてわはせざりけり。うらめしの事や、なでうかくてありはつべきとて、夜にまぎれてかの館にしのび入り、資朝を斬たりし本間三郎をば刺殺して、壁ひと重は出たれど、堀ありて越べきやうなし。堤に竹あり。これにのぼりたれば、たはみてむかふの岸につきぬ。それより濱邊に出て、舟をえてぞ京にかへられける。孝の心の淺からざりければ、いとおさなくてだに、かくゆゝしきたけきわざをして、父の仇をむくひられける。

藤原道信

道信は、左近の中將にて、九條大相國爲光公の子なり。正暦三年父身まかり給ふ。道信かなしみにたへず。月日經るまゝにいよ〳〵せち也。されど其比のならはしに、父の喪はむかはり月にしてやめば、獨うんでともえせで心より外に服をぬぐとて、なく〳〵思ひつゞけられける。

かぎりあれば、けふぬぎすてつ、藤衣、

日本倫理彙編

式部大輔たかちか朝臣は、大江の匡衡の子、母は赤染の右衛門なり。たかちかおもき病にいねてたのみ少かりければ、赤染その思ひに堪ず、住吉にまうでゝ命にかはらむ事をいのりて、御幣のしでに

かはらむと、いのるいのちは、おしからで、
さてもわかれん、事ぞかなしき、

と書つけて奉りしを、うけひき給ふにや、擧周病おこたりぬ。赤染ふかくよろこびて、わが命の終るをまちゐける。たかちか聞て大に驚きなげき、われも又住よしにまうで、さきにわが命たすけさせ給ふは、誠にありがたけれど、母のいのちにかへては、死せるにおとり侍らむ、たゞ願はくば、母ながらへてわがやまひははじめの如くならんと、深く禱りこひて京に歸りけり。されど其身も病ず、母もつゝがなし。親子孝慈のやごとなきを、御神もまことに哀ませ給ふにやと、人皆申き。

小松内大臣

内府重盛は、入道相國淸盛の長子也。淸盛おごり極りて、君をありとも思はざりけるに、よく誠を盡して諫めたまへりしかば、其惡をほしいまゝにもえせざりけり。或時いきどほりの餘に、帝をおそひ奉らんとて、みづから戎衣を着てひしめきあへりしに、やがて何となく直衣うち着て、父の御前に參り給ひしにぞ、顏うちあかみてさらぬていにもてなしけり。なをよろひの袖のひたゞれの隙よりあらはるゝが、重盛にみへむことのいみじさに、ひたすら引かくされけるぞあやしき。かく德

執齋先生雜著卷之一

十二孝子

藤井翁のしるせる本朝孝子傳よりとり出し、其詞をつゞめ、菅相公をくはへ、屏風一双に繪と詞書とを押べしとて書つけたる也。詞書は押小路亞相公御なをしありて、中院前内府通茂公にもみせ奉りぬ。

相丞菅公

菅丞相、諱は道眞、菅原是善ノ御子也。おさなくてよりさえすぐれさせ給ひ、秀才よりおこりて右大臣にあがり、太政大臣の贈をかうぶらせ給ふ。其おさなかりける時に、御母君

　久かたの、月のかつらも、おるばかり、

　家の風をも、ふかせてしがな、

とよみてまいらせ給ひけるが、其歌に應たがはせ給はで、大なるひかりを末の世までもかゞやかし、天滿宮と號して聖廟とあがめられ給ふ。ありがたき御事になむ。かの身をたて道を行ひ、名を後世にあげて、父母をあらはすは、孝の終りなりといへるも、この御神の德ぞまことによくかなはせ給ふ。

大江擧周

卷之四

卷之三

執齋雜著目錄

卷之一

卷之二

そことなく、そよぐ難波の、うら風に、よしあしの葉や、みだれそむらむ。

知善知惡是良知。

よしあしの、かげもまがはず、なには江や、そこ澄わたる、水のかゞみは。

爲善去惡是格物。

よしをとり、あしをかりなば、ふしの間に、迷ふなにはの、ゆめも覺まし。

右は難波の菅氏によみて遣しける歌也。

あふげ人、ふたつのみかど、三代のきみ、四言もおなじ、道の教を。

てにつける、ひとりのみおを、そのまゝに、述し四言の、教にたがふな。

四言教講義 終

の法をうしなふことは、師たる者大道をしらず、我流をたてむとするの鄙心あるゆえなり。予本より大道をしれる者にあらざれば、我執名聞もとよりすくなからじ。されど道統正を失ひ、學脈絶て、學術のそむけるは、いはゆる一亂の基なる事を憂ふるを以て、同志の來りて相問者あるに及ては、俄に非分の罪を忘れて、我おもふ所を述て、一體の誠をつくさむと欲する我王文成公の御敎に從て、堯舜の道に入むとおもふ人は、此四言の此一句を初入門の誓約と心得、齋戒沐浴して之を受、其善をなし其惡を去、堯舜の徒となるに當りては、身命を捨るは本望なりと心得て、自其本心に誓ふべし。於レ茲丈夫に性根をすえて、志を立得定る時は、世上一切の利害名聞得喪の類は、誠に浮雲の大空をわたるを見るがごとくにて、心の動かざるに至るべし。是をわが本心をたつると云。我本心は即天心なり。何ぞ天に繼の道にあらずと云はむ。故に此學に入よりはや惡人忽善人と成の證據明白也。是堯舜道統の正傳にて、孔孟の學脉なる事、何の疑ひあらむや。よく〳〵尊信敬受し奉るべきことなり。

享保第十二丁未年九月下旬　三輪希賢謹誌

詠二四言敎一。　希賢

無レ善無レ惡心之體。

行舟の、なにかさはらむ、よしもなく、あしも南仁波の、水のこゝろに。

有レ善有レ惡意之動。

し。是をよくしれる我心をもちながら、我兄弟我朋友え愛敬眞實すくなきは、何故ぞや。又かく人の惡のみをとがめて、わが身を見ゆるすことは、わしきとにくみ見る眼を持て、我身をも人のかくわしく思ふとしらぬは、是れ又何のゆえぞ。事〳〵に疑ひを生じて是を聽は、感發して道の信生じ受用に力を得べし。よく〳〵自反あるべき事也

問。格物の條を入門として自習ふべしと云るは如何。

答。人はじめあらざる事なし。よく終あることすくなし。故に終をその始につゝしむ事、こと〳〵皆しかり。況人間第一等の學に入のはじめをおろそかにして、何をつゝしむ事かあらむ。故に入門のはじめをよくつゝしみて學ぶべき事也。惡人を變じて善人となし、禍を轉じて福とし、亂を治めて治とし、子孫萬世長久をなすの道なれば、まことに愼むべきこと、類もあるべからず。雖レ有事、天下に是に過ることとなかるべし。輕々しく思ふべからず。故に古人來り學ぶの禮ありて、往て敎ゆるの道なし。それ鎗劍弓馬の曲藝だに、はじめて門に入ときは、誓書血判して是を行ふことあり。是かならず我意をたてんとの私心にあらず。ひとへに其道を信じて、我心に學ばしめむとなるべし。聖人の道に左やうの事あらぬとて、輕〳〵しくおもふべけむや。故に昔の學に入ものは、必先聖をまつりて、音樂饗聽の禮を以て入學せり。後世とても、齋戒して束脩己上を行ふこととなれば、かろくおもふべき事にあらず。かほどに始をよくつゝしみてだに、猶その終ある事すくなし。況始より實なき人、よく〳〵其終をたもつ事あらむや。今師弟子の禮そなはりぬるも、敎導規矩なく指引そ

もおこすべく、一念惡にむかへば、天下をもくつがへすべし。かゝる大事のものを持て、手置の仕様をも知らざるは、いかにぞや。さてかく妙なるこゝろゆえに、上は君父の御心をも察し知り、中は兄弟朋友の心をもくみしり、下は子臣民庶の情をも考へはかるに、大やうたがふ事なし。路人を一目に見ても、其心をおしはからざる事なし。是ほど天下千萬人の心をしり、萬古のいにしへ千里の外國人の評判までをする妙なる心を持て、我胸中に在るわが心を知人なし。是外人はしりやすくて、我心のしり難きにはあらず。外人を察する事は、明者といへどもたがひあるべし。自知ことは、細微までも盡さゞる事なし。然れば只自らかへり見るとかへり見ざるとに依る也。是一不審あるべき所なり。さてよく自反して、我心を見るに及ては、心元來一也といへども、わかれて二ッとなる。一ッは道心也。是天より受たる性のまゝの眞心也。その明をさして眞知と云。今一ッは人心也。是はこの肉躰より出たる所の氣也。その氣のまゝに動くを人欲といふ。其知慮千萬といへども、此二ッより外はなし。平生自反してこの二ッのものをよく辨へ、其人心の欲を去て、かの道心の性に一にするを、惟精惟一と云。是堯舜禹相傳の妙訣にして、湯文周孔嫡々相傳し給へる道統の正脈也。即四言にいへる爲レ善去レ惡是格物の敎也。よく〳〵尊信して、これを拜受せざるべけむや。猶また一疑有。我うみたる子我に不孝に、わが養ふ奴婢われに不忠ならば、我必ず惡み怒るべし。是をよくしれるわが心を持ながら、われをうめる父母我をやしなへる君に不孝不忠なるは、何ゆえぞや。わがつらなれる兄弟。我交る朋友の、我に愛敬なくわれに信なくば、われかならずうらみおもふべ

答。日頃におこらぬ疑僞に生ずべきやうなし。何がならうたがはむとたくむもよろしからず。先よくかへりみおもふべし。我形を父母に受、性を天に得て、かく人と生れながら、其形をふむ事をもえせず、其性を知る事をもわたはず、人倫は如何様の物といふ事も辨へずして、朝夕只財を爭ひ利を貪り、情欲をたのしみとし、飲食衣服玩好をのみ事として、道あることをしらざるは、鳥獸にいかばかりのたがひぞと尋ね見よ。是世の人並也といはゞ、さらば其耻しらずの人でなしよ、鳥獸同前などいはんに、是世の人並也とてやすむじ受べきや。命をかけてもいかり思はんや。こゝにおいて少も憤なからんは、誠に耻しらずの人でなしにて、禽獸同前なるべし。常人のかくいはんは、目違ひもあるべし、わろ口もあるべし。世々の聖賢みなかくいへり。何ぞ是に怒を生ぜざるや。若是をいかりて口惜とおもはゞ、其人欲を去て本然の天理にかへるの外、何を以て其耻をすゝがむ。この憤の一念、はや竟録の心也。しかるに、人欲を去と一口にいへば、甚やすきに似たれども、其實をつとむるに至ては、かろき一つの人欲も、たやすくは去がたし。こゝに於ていかゞせんとおもはゞ、是疑のはじめにあらずや。かくうたがひをおこさば、猶又問べきことあり。夫善人となるも惡人となるも、皆この心といふ事は、心の妙元來形躰方所なく、運轉流行する故也。それ人のからだは甚疾き足といへども、垣一重さきへはゆかれず。甚明なる目といへども、垣一重外は見へず。是形なるが故也。心は此の身の内に在ながら、唐天竺の事をもしり、往昔後代へもかよふ。故に身は禁錮し止むべし。心はとらへつなぐべからず。かく妙なる物ゆえに、一念善に向へば、萬代までの治を

正統の人には說べき事なし。愚を明かにして異端を正統にすることそ、眞の學術なるべけれ。異端の徒自悟りて正統に歸すべきならば、敎は無用の事なるべし。人每に無病ならば、醫も藥もいらぬものなり。道を聞むと望む者あらば、いかやうの愚人惡人異端の邪類にても、隨分きかせたきは、我聖門の敎なり。是よりの外、穢多乞食の人倫に齡せぬものといへども、捨べきにあらず。これらをも化して、堯舜の民たらしむべし。これををしへ有て類なしと云ふ也。夫穢多乞食も、人を殺し火を放ちて人の物を盜とらむと云心少もおこれば、是即桀紂が心なり。この者とても、是を惡也と知たる頁知は、堯舜にかはる事なければ、其頁知に從て其惡念をひるがへさば、則堯舜の民たるなり。獸の皮を剝、人に食を乞て世をわたるは、彼等が職分也。淵明も乞食せられしとて、賢者たるに害なし。樊噲は屠者より起りて、功臣たるに異論なければ、是を惡なりともいふ可らず。是人皆堯舜となるべきにあらずや。上は人君より下は士庶人、此外穢多乞食にいたるまで、みな人也。上は聖人より下は凡人、此外異端邪類まで、皆人也。人の眞の人になる道を、堯舜の道といふ。大道は白日大路のごとしといふは是也。只いさゝかも五倫にあぐむ心起れば、老師宿儒も即異端也。一念父母をしたひ孺子の井に入をあはれむ心おこれば、出家沙門も即堯舜の心なり。只此本心の頁を失はず、それに背かぬやうに養ひたつる事、大學の明德を明かにする道にして、四言の大旨也。

問。疑を感發の本といへる事、さも有べし。今我試にうたがひを生ぜんと思ふに、疑心おこらず。何をとらへて疑ふべき手がゝりなし。如何せば可ならむ。

得むや。我本心を失ふことは、人欲の妨故也。故に人欲を去て天理にかへるを學と云ふ。其人欲を去て天理にかへる道を述たる四書六經なれば、仰ぎ尊びて暫らくも身を去るまじきものなり。然るに我心の實を失ひて四書六經の文義をのみ見るを道と覺たるは、折紙の目錄を太刀馬也とをもふにひとし。糟粕といふは、酒をつくるに麴をかもして、もろみといふ物になし、それをしぼりて酒をとりたる、その滓をいふ事也。四書六經の實をよくしぼりとりたるかすとは、かすともいふべし。その酒ともに粕と思ひて捨るは異端也。今の人の四書六經を說は、其酒をよくしぼりとりて用ゆる事なければ、糟粕といへるも、よく當れるなるべし。書をよむのみを學といはゞ、書をよむいとまなき者は、學は一生の内にならぬ事なり。其四書六經の實なる我心にをいて修する時は、書をよまぬときも、その實我心に在。その心あれば、少の隙をも他に用ひずして、四書六經に考へて間斷なかるべし。さありとて、此學は書を見るに及ばぬなどいひて、書を捨る者は、亦異端也。よく平に考へて、かへり見つとむべし。

問。いへる所の如くなれば、誠に有がたき事に心えはべる。然ども、惡人の聖人となると云、異端邪惡の徒も堯舜となるといへるは、かの煩惱即菩提の類にて、陽儒陰佛の說と聞え侍る。朱學の徒は、佛者などは講席えも入れず、嚴に我道を守るに、それも堯舜となるべしといへるは、心得難し。

答。教は元來惡人愚人異端邪類の爲に設けたる者也。如何となれば、賢人君子には教なくても可也。

闇して寸の隙もなし。下々にて農工商賈の、各其業を勉むる者抔は、嘗てならぬ事也。よし少く隙ある者も、一日の内一時宛毎日講義を聞、書を學ぶ事はあたはざる事也。孟子も天下に生じやすき物といへども、一日あたゝめて十日ひやしては、生ずる事なしと云り。一日の内の一時は、十二分の一なれば、十日のひやしよりは甚し。況隔日五六日の一會にて、何の事かなるべき。しかれば、惟遊民の隨分無病にて富る者ならでは、成べき事にあらず。いつの世に、天下の事理に通ずること、表裡内外透徹して、一旦豁然貫通の地に至る者あらむや。しかれば人々堯舜となる學にあらず。此四言の敎の如く、爲レ善去レ惡を格物と心得て、平生受用する時は、吐握の勞ある諸役人より、農工商賈の隙なき者も、各々の業をつとめながら、聖人となるの望はなるべき事也。扨少も隙ある時々は、師を尋ね書をよみ、講會切瑳して、日ごろの工夫をたゞすべし。是平生受用の總勘定と心得べし。是即行有二餘力一ば以て學レ文の旨也。かくの如くする時は、老少男女、智愚貴賤、有レ才無レ才、有レ病無レ病、異端邪説の徒に至るまで、皆化して堯舜の道に入べきは、獨り此學の効に非ずや。

問。しからば、古聖人の説たまへる四書六經は、みな無用の物にて、書は古人の糟粕など云る論、あたれりとするか。

答。それは道しらぬ人の偏見なり。夫四書六經は皆眞知のすがたにて、我心の名目注釋也。六經四書の實は我心に在り。わが心の形象名目は六經四書に在也。故に我本心を失ひたる人は、其形象名目を六經四書に尋ねて、已が眞知に照し、合せて是を取返さずんば、何によりて其本にかへる事を

答。人みな堯舜となるは孟子に出たりと雖ども、是伊尹の語に本づけり。夫聖人と云ことを如何心得られたるにや。聖人になるといふは、善人になると云事也。善人の至極を聖人と云。堯舜其人也。およそ人心皆聖人也。故に聖人のなし給ひたる事を惡きと思ふものは一人もなし。是我本心にかなふ故也。桀紂と云は、大惡人の事也。我本心元來惡なし。故に桀紂に劣ぬ惡をする者も、桀紂なりといはるゝ事を耻いかる。是よき證據なり。故にたとひ惡人にても、聖學に志出來て、其良知に從ひて、一念ひるがへせば、其當下即善人となる。此善即堯舜の善に異なる事なし。是堯舜となるにあらずや。今善人なりとても、一念惡を生ずれば、其當下即惡人なり。此惡即桀紂が惡にひとし。是桀紂にあらずや。當世の氣質は變化ならぬなどいへる妄說、不ㇾ辨して明かなるべし。故に惡を去て善をする堯舜の嫡傳といふ也。今惡人の善人となるべき道、此四言の外何かあらむ。しかるに此善念時々間斷なければ、眞の堯舜なるべけれども、わとより人慾にふさがれて、またもとの惡人となる故に、平生心を内にむけて、此心中の堯舜を取にがさぬやうにとて、自反愼獨の敎あることなり。

問。世上格物の說を、大學の正意にあらずしてわしきといへるはいかゝ。

答。其說の是非は文成公の論に委しけれ共、不信者は請がはねば、しひていひ難し。假令朱說よきにもせよ、天下の達學に非ざる事をいはむ。世上に格物窮理とて、物しりになれば、後には心明かに成て、聖賢に至るといふ事、尤もなる樣なれ共、國政に與かる大名より、總じての役人の歷々は、

して和順の氣象なく、えて物をそこなふことすくなからず。しかも一々小學の法にたがはぬやうには、とてもなし得ざれば、只外を似する事と成て、內に生意なく、末は覇者となり、或は鄕愿となる。是は狷者の資質にて、己が見たる所を是として、中に及ばざるもの也。又一ツは、其人發明にして、程朱の語をよく吟味し、隱微の極致を穿鑿し、理のみ高尙になれども、元來內にむかふの心なき故、日用心意の工夫なく、人の非を見る事のみおほくして、人と和せず。是狂者の資質にて、をのれが見たる處を是として、中に過たるもの也。此ころは大ていよき學者なれども、共に中庸道統の學にあらず。これ皆始の志、我心の善をなし惡を去の基なくして、理を外に窮むる者故に、聖賢の書を說所はくはしといへども、自なし覺へたる事あらずして、皆空言となれり。此二ツの學者に國政を任せなば、一偏に落て其害必定也。かならず始にはかりて、一生を誤る事なかれ。唯眞の聖學といふは、惡人の善人となるの道を云。惡人の善人となるといふは、耳目のよくなるにもあらず。手足のよくなるにもあらず。たゞ此心のよくなる事也。心よくなる時は、手足の働きも義にたがはず、耳目の用も道にそむく事なし。是を人皆堯舜に至るの道とす。其人皆堯舜となるの道、此四言を外にして、何を以て是を得むや。

問。人皆堯舜となると云事、孟子に出たりといへども、心得がたき事なり。孔子七十人の弟子、皆大賢にて、心を專にして信じ學びたまへども、一人も聖人となれるをきかず。いま赤凡夫の堯舜となると云は、誠しからず。近世孟子を譏る學者あるも、ことはりと聞え侍る。

く飲ても厭事なし。茶をすゝむるも又しかり。今の教ゆるものはこれに異り。下地の心を石のごとくにすくめて、是に聖賢格法の梯を請て、生ぜぬ時はいかりて其人のとがとし、交をたちてにくむことは讎敵のごとし。是これを悪に驅りて善をなさしめむとする也。いづくんぞ得べけんや。唯よく疑の生ずるを待て是を解ときは、必感ぜずといふ事なし。その感ぜしむるは、信ぜしめむがため也。信ぜしむるは不厭して受用せしめむが為也。故に人のいひふるさぬ言をたてゝこれを導くは、師家の教の術なり。

問。今の世にては、學問なき人は、却てよく國家をも治めて、人よく服す。學問せる人は、多くは理屈はかりで、人と中悪く、人の服せざる類、見及びたり。今此四言の教、堯舜以來嫡々の道統といへるは、人もよく心服し、天下の平なるべき證據ある事にや。

答。それまでの學問は、何の為といふ事を能々辨ふべし。今いへるところの學問は、誠の聖學にあらず。誠のものにあらぬ學は、するほどあしくて、人と中悪く、衆の服せざることあるべき事也。如何となれば、詩を作り文を書き唐の事おほく覺えたるのみを學問なりと云は、一向の文盲也。すこしも目の明たる人は、物しりの智恵者となるを學問と心得、格物〳〵と云て、唐の昔のことを多く考へ究めて、今日の用にたてむとす。是は少まされるに似たれども、聖學にあらず。後世の至極よきと云學流二つあり。一ツはその生れ付律義にて、日用の行ひ第一也と云、あしき事もせず、禮義正しく、小學の法にしたがはぬやうにとたしなみ、自らつとめて人をも導びく。しかれども、固滯に

は、堯舜精一の教にて事たれるを、孔子又大學を述たまひ、大學にて事たれるを、子思亦中庸を說たまふ。總じて人の耳なれたる事は、常に成てめづらしげなければ、人の感發をおこす事なし。故に如ㇾ此色々の立言ある事也。是その不足を補ふにはあらず。皆人意を新にして、感心を發せしめむと也。故に敎言種々にかわれども、其主意とする所は、聊かたがふ事なし。若主意にかわる事あれば同言を用ゆるも異端也。たとへば平生このむ所の飮食も、日々これにむかへば必厭ふもの也。その時は、日比このまぬ味にても、珍らしくすゝむれば、氣改りて胸中口裏も快なるが如し。故に調する所の味は時々に變ずれども、人に食をすゝめて身躰を養はしめむとするの意は、いさゝかかはる事なし。さてそのすゝむる所の物は、五味の食物の外に出ず。若し常をいとひて烏喙をすゝめむとするは異端なり。謹てこゝろむる事なかれ。總じて敎の道、人これを信ぜざればすゝまず。感ぜざれば信ぜず。故に敎ゆる者は、人の感心を生ずるを主とす。感をおこすの本は疑にあり。それこの四言は、うばかゝも能々聞得る事にて、講釋にも及ばざることなれども、下地にうたがひなき者のために是を語れば、馬の耳に風を成て、その益なし。この故に、敎を施さむには、先其疑ひをおこさしむべし。譬へば嘉種ありても、石の如くに堅まりたる土に蒔ときは、生ずる事なきが如し。故にたやすく是を蒔ことなく、先土を堀返して是をやはらげ、こやしをよくして土氣を動かし、生意を催さしむべし。かくて猶可ㇾ生時節を待て是を蒔ときは、その生ずる事すみやかにして、成長も又盛大也。人に酒を勸むるにも、まづよき肴をあたへて、酒意を催さしめて後に盃をめぐらす時は、多

本根なくて、徒に法制號令のみを頼みて、國家を治めむとする者は、三代の仁政を行ふといへども、みな借物にて、是を覇術と云。又終に治るべからず。學ぶ者こゝにおゐて心をたて、善は性命にかへても必是をなさむ、惡は骨を粉にすともかならずこれを去んとおもひ入て、三四分の善を務てこれをなし、三四分の惡をつとめて是を去ほどの力あれば、一二分の善は骨をらずして成、一二分の惡は始より生ずる事あるべからず。しかれば、思の外はかの行事也。唯其心の信ずる所にあり。よく〳〵かへりみ考へて、他岐の迷を生ずべからず。

四言教講義或問。

或問て云。四言の教を心法の大規矩といへるはいかゞ。

答て云。是大學の格致誠正の語に釋を加へて述たまひたるものなれば、即大學の教也。大學は程子も孔子の遺書入德の門と云、朱子も亦大學は聖門の規也といへり。眞西山は堯典を大學の祖なりともいへり。しかれば四言教の大規矩なる事、何のうたがふべき事あらむ。

問、然らば天下のあまねくしりたる大學の書にて事たれるものなるに、何の不審有て釋をくはへて、何に事歎て四言を述、蛇に足を添へられたるならむ。

答て云。王子大學の書の事足ぬとてこれを増たまへるにはあらず。夫學をするの道は大學にて事歎ことなきことは、天下にしらざる人なし。されど其義を誤り解して、格物を天下の事物の理に窮めいたる事と心得、一生をあやまる故に、是に釋をくわへて正意を述たまへるもの也。それ道學の初

に五音なきを耳の至善とす。口も又味なきは、口の本躰なり。夫只五味なし。故によく五味をわかちてたがふ事なし。若一味もあれば、五味ともにたがふ。故に五味無を口の至善とす。心に善惡なきは、心の本躰なり。夫只善惡なし。故によく善惡を辨へて、各あやまる事なし。若有レ之時は、善惡ともにたがふ。故に善惡なきを心の至善とす。故に至善は心の本躰なりともいへり。書曰。無レ爲レ好。無レ爲レ惡。順二王之路一。又曰。有二其善一。亡二其善一。語曰。無レ適無レ莫。義之與從。又曰。吾無レ可無二不可一と。伯夷柳下惠の如きは、猶可不可有。是隘と不レ恭をまぬかれずして君子の不レ由ところなり。

およそ人の學をする、常に此四言を服膺して、一日に一善を成ば、一月に三十の善成て三十惡滅ず。一年に三百六十の善成て、三百六十の惡滅ず。一人如レ此すれば、千萬人皆かくのごとし。一國の民一年に一善をなせば、萬人の村は一万の善生じて、一萬惡滅ず。十萬人の國は、十萬の善生じて、十萬の惡滅ず。天下に至つては、幾億兆といふ數をしらず。是に反して、善ほろび惡生ずるも、又しかり。然れば、天下の善日々に多くなりて、惡日々に減ずるの外、何か太平をいたすべきの道あらむや。いかばかり訟獄多き國なりとも、萬人の邑、一年に一萬の訟はあるべからず。しかれば使レ無レ訟の政、豈この外にあらんや。この誘導をなすは、人君の此學を用ひたまふの一念に在り。是即堯舜天下を率に仁を以てするの道、篤恭して天下平なるの治、是之を無爲の化といふ。人皆堯舜となるべきの實學也。これを本を知といふ。凡天下の法制號令は、皆此本をたすくるの具なり。この

むとす。是常人の情態なり。然るに終におほふことあたはざれば、また何の益かあらむや。故に戒懼の功懈らずして、獨をつゝしむ。是先聖の學脈なり。故に此句を設けて力を用ゆるの地を示す。たとひ一念の場をとりはづして、事業の著にあらはれたるも、此一念の場へ引かへして、初念の所に立かへり、悔悟し改むれば、誠意の工夫なり。もし格法を事業の上にのみつとめて、かの一念の所より起さゞれば、覇者にあらざれば郷愿となりて、聖門正統の學にあらず。却て德の賊となる。一念の界、つゝしまずむば有べからず。これ人心生々の初一念の工夫にして、三達德の仁なり。これ古本大學に誠意の傳を經文に引きつゞけたる所也。必誤るとなかれ。

無善無惡心之體。

人心善惡の二途ありといへども、それは動き出る時の事なり。動くは氣によるが故なり。その動かざるときは、一の明のみ。鏡のいまだ開かざる時は妍媸なきが如し。然るに其寫さゞる時も、萬象なきにあらず。向ふものゝ心うつす心にて見れば、則象ありて、鏡は本のかゞみなり。うつさぬ心にて見れば、則象なくして、鏡の内象なくんばあらず。これ鏡に動靜なくして、向ふものゝ心に動靜あり。此鏡人の人たる本躰なり。この源をしらずして、善なりと思ふは、其善は氣質の善にして、天理の本躰にあらず、惡もまたしかり。此所謂心之躰は、即人心にやどりまします天神なり。此光明、人の意念にわたらず、自然に是非を照らす。是を良知といふ。夫耳に五音なきは、耳の本躰なり。夫只五音なし。故によく五音を聞てたがふことなし。若常に一音もあれば、五音皆たがふ。故

己がぬすみをなす上にて善惡を定むる故に、天然自然の良知をふさぐ。つゝしみかへり見て、混雜せしむべからず。此心躰自然の良知より出たる善を、至善と云。眞知と云も是也。是三達德の内の知也。心をこの至善にすへ定めて、此知にて見たる所の善は、必是をなし、此知にて見たる所の惡は、必是を去るべきなり。然るに、吾元よりしり得たる善をも、いまだ是をなさず、知得たる惡をも、いまだ是を去らざる者は、たとひいかばかりの善を知り惡をしりたりとも、何ぞ是をなし是をさらむや。故に知を致す事は物を格すに在といふ。

有善有惡意之動。

事物なりとして格すは、何を格す事ぞ。良知なりとして致すは、如何なる知をいたす事ぞ。此所をよく／＼かへり見るべし。天下の事々物々の理を外に窮たりとも、わが心のおこる所誠ならずは、窮得て却て害あるべし。天下の事々物々こと／＼く知得たりとも、吾心をしらずば、亦害あるべし。しかれば、格といふも、わが意の在ところの物をたゞす事、致といふも、吾か意におゐて致すこと也。人心元來至善にして、無善无惡といへども、血氣の生々時として止る事なければ、必動かずといふ事なし。そのうごくを意といふ。其動く所千緒萬端、是を物といふて、皆意のある所なり。意のあるところかく千緒万端といへども、つゞまる所善惡の二途にもるゝ事なし。只自反の功間斷あれば、過惡を念慮の間に分つことあたはずして、長じて後事業にあらはれて、その害あるに至ては、良知に照してはづかしくなれど、如何ともすべからざれば、俄に驚て、其不善を揜ふて其害をあらはさ

知善知惡是良知。

學ぶ者、格物の段におゐて覺悟を定めて、善は性命にかへてなさむ、惡は骨を粉にすとも去むと、十分におもひ入たる上は、十の内七八まではすゝむべし。然れども其しれる所、必良知より出るにあらざれば、其善也とおもふことに惡なる事ありて、其惡なりと思ふ事に惡ならざるもあるべし。故に此一句をのべたまへり。夫知は心の光也。善惡を照すこと、白日の黑白をわかつが如く也。しかれども、氣質の偏によりてさま〴〵のたがひある事をまぬかれず。そのさま〴〵のたがひとは、心は一也といへども、剛柔善惡の下地の氣質のよりて照すところ一樣ならず。良知は本躰のまゝにして人爲にわたらざるもの也。此外識知あり。俗知世知あり。姦知邪知あり。孺子の井に入を見て怵惕惻隱するがごときは、人爲にわたらず、天命の性より直に發出するもの也。是を良知といふ。識知は見聞より出て、私知按排を以て辨へたるもの也。是もまた良知の外にあらずと雖ども、人爲にわたりて自然の明覺にあらず。故に銘々の仕方に落て、氣質より善惡をさだむ。但良知より出れば、見聞も良知也。見聞に落れば良知も識知となる也。俗知世知といふは、是亦良知の外にあらずといへども、世におもねり時にあはせ、利害得喪のはかりごとにのみ明かなるもの也。是に熟すれば、機變の術巧者に成りて、耻を忘れ誠をうしなひ、良知發見の道をふさぐ。いましめて近づくことなかれ。姦智邪智といふは、人を惡におとしいれ、僞詐變幻いたらざる事なきもの、盜賊の知なり。右いづれも、心の光明也といへども、下地の氣質によりて、盜人はよく人を欺き詐るを知有として、

善にてよめば、其用廣ふして、俗儒記聞の陋にながれず。兵を學ぶに其意の惡を去て、その善にて學べば、其備固して知術權謀の姦にいたらず。凡天下の事大小みな如ㇾ此ならざるはなし。故に常々我心元來邪惡なき本體をよく〳〵かへりみおぼえて、一言一行までもその本體のまゝの善心起り出れば、尊信して當下に是をなし、もし本體にそむきて惡き心おこり出れば、耻悔て當下に是をさる。是即一事かくのごとくすれば、一事聖人の地にすゝみ、一刻如ㇾ此すれば、一刻聖人の地にいたる。是即人皆以堯舜となるべきの道、皇天の御心にして、聖人道統の學術也。何の疑ふべき事かあらん。其善をなしその惡を去にあたりては、性命をもかへりみるべからず。是を身を殺して仁をなすといふ。是を生を捨て義を取といふ。これをしるを止ることを知といふ。是を得るを道を聞と云て、夕に死するをも可也とよろこぶ。如ㇾ此丈夫に志をたてゝ、自をのれが本心に誓ふを、門に入のはじめとす。故に此格物の段を、三達德の內の勇とす。さて是を勤るに至りては、をのれが分際をはかりて、力の及ぶ所をなすべし。もし及ばざるをしゐてつとむるは、助長と云て、却て害ある也。但は力のおよぶほどの事をよく勉めよといふ事なり。身にも應ぜぬ聖賢の行ひを外に似するは、皆名聞よりおこるもの也。力を出してつとめもせずして、是は及ぬといはゞ、いつの世に道にいたる事あらむや。とにかくに終にその位までも至らんとは期しおもふべし。およばじとして捨るは、自暴自棄也。又初學のほどは、或は誤り或はわすれて、墮落すること有べし。必とがむることなかれ。七度たほれば八度起て、終に過なきの地に至るべし。是藤樹先生の敎也。

うに心をたてゝいかやうに勤むべきよぞといふ事を、よく〳〵おもひめぐらすべし。それ學問は、惡人をまぬかれて善人とならむと欲するが爲ならずや。善人の至極は堯舜にもすゝむべし。惡人の至極は桀紂にも階るべし。其の界は一念の間に在。善人にならむと願はゞ善をなすべし。惡人を免かれなんとならば惡を去べし。惡を去るは不正をたゞすと云、善をなすを正しきにかへると云。不正を去て正にかへる、これを物を格すと云。是聖門最初の手を下すの實功にして、聖となるに至るまでも、外に待ことなきものなり。故に大學八條目の第一に在なり。人此所におゐて丈夫に心を立さだめざれば、萬事皆成事なし。室をつくるに基なきがごとし。本經四言の序におゐては、人心發見のもとより語る。故に此句四言の終に在といへども、今受用工夫の次第を示さんとて、逆に此句より說起す。前後にかゝはらず。物とは事也。凡我意にうつり來る事、一身より天下に至るまで、皆事也。其事の惡は、わが心の嫌ふ所なり。これ本體元來惡なき故也。故に務て是を去べし。其事の善は、善心の好む所。是本體元來善なる故也。故に必是をなすべし。それ物を格すといふ事、世間外人は物をたゞすにあらず。たゞわが心の物をたゞすなり。然るに身のうへに顯れたる物にて是をたゞすことは、猶いまだ其要を得たりとせず。故に末は必僞に流る。小人閑居して不善を爲といへる是也。それ身に顯はるゝ善惡は、みな心より出れば、先一念のおこる所いかむを察すべし。故に自反して愼獨の功をたつといふ。父兄につかふるに、其意の惡を去て其善にてつかふるを孝とす。君上につかふるに、其意の惡を去てその善にてつかふるを忠信といふ。善をよむに、其意の惡を去て其

是人々力をもちゆるの場、學問の肝要なり。

知㆑善知㆑惡是良知。

惡念おこるといへども、本體の良知は未㆓嘗亡㆒。此故に善惡をしらずといふ事なし。良とはこしらへたる事なく直にすら〳〵と出る事也。其おもひはからざれども自然にしるものを良知といふ。是人々力を用るの規矩なり。

爲㆑善去㆑惡是格物。

意の在ところを物と云。天下の事々物々は皆此意に在。その意の善をなし其意の惡を去を格㆑物と云。人々力を用ゆるの實功也。

右を四言の教といふ。凡天下の理は、心にそなはりて意にうごき、良知にてしり、其物を格す。故に致知格物は誠意の工夫也。格物のはじめに、先志を立て是をたゞすべし。夫誠意の工夫は仁也。致知の工夫は知なり。格物の工夫は勇也。此三ツの工夫によりて三德成就し、本心の正しきにかへる。その行㆑之所以のものは一の志也。志は心のさしゆくところ、人の誠也。其初志を立ること勇猛ならずんば、事々能その終を遂ることを得んや。故に下には格物の段より逆に講㆑之。

主意工夫。

爲㆑善去㆑惡是格物。

およそ門に入の始、先心を平にして人の學をするは何の爲ぞ、學をするとは何をする事ぞ、いかや

四言教講義

執齋　三輪希賢著

四言教

此四言の教は、陽明王文成公始て門に入人に授けたまひたる定法にて、人々受用すべき心法の大規矩也。其本は大學の身を修る工夫にして、古聖人の天に繼てその道を直に人に示給ひし嫡々相承の道統の要文、人皆學て堯舜となるべき大典也。これを外にして道をたつるを異端といふ。是を似せて效をとるを覇術と云。これにそむくを惡と云。これをしらざるを愚といふ。故におよそ聖人の道を學ばむとおもふ人は、必齋戒沐浴して、敬で是を受、起居動靜無㆓間斷㆒これを服膺すべきところなり。

字義。

無善無惡心之體。

心は善も惡もなし。故に善惡の名付べきなし。これ心は體にて、至善をなすもの也。人々力を用て至るべき所の目當也。

有善有惡意之動

心一たび本體よりうごけば善となり、形氣より動けば惡となる。うごくによりて善惡はわかるゝ也。

はり、荷漕こと務むといへども、道路をたがへば、往んと欲る所に至ることあたはず。然りといへども、誠實生々の志にもとづかざれば、三の物皆虚名也。故に所ニ以行フ之の者は一也と云ふ。此一ッの志あるときは、自能道を尋ね術を問てその業をつとむ。故に終にそのゆかんと欲る所の地に至る。故に學は此一ッの志をたつるの工夫也。今伊勢の神廟に詣づる小童、伊勢は何方なるも、その東西をだにしらざれども、志一たび實にこれにむかふ時は、數百里の遠き國より、路料をも携ずして、其家を出風雨をおかし、山海を越るに、路人もこれをたすけ、舟子もこれをわたして、終に能詣づることをえてかへる。かくのごとき者、年ごとに幾百人と云數をしらず。伊勢詣の童の道路に餓死せしためしもなし。是知慮分別の及ぶ所にあらず。人心感發の妙、神も幽にこれをたすくることあるものゝごとし。是らは必眞志の發見にあらずといへども、皆よくその念を遂ることを得。况や固有の本心をもとむるをや。此四言の教は、人心本體の誠實にもとづきて、その學脉を正し、學術を示し、學業を勵しむ。上は王公より下は庶人に至るまで、常にこれを受用する時は、その分際に應じてその德をなして、天の福をえざることなし、故に此四言に和解して其旨を述、猶又他岐の迷ひなからしめんと、首にこれをのすることとしかり。

四言教講義序

人心誠實の生意感發して指之所のもの、これを志と云。學はこれを成の道也。本心のさしゆく所、その大路五つあり。父子の間に感ずれば親となり、君臣の間に感ずれば義となる。夫婦兄弟朋友の別序信皆同じ。此外井に入孺子觳觫の牛にいたるまで、感ずるとして通ぜざる事なし。是即良知の本體なり。其遇ところによりて各其名ありて、放ちて六合にわたるといへども、これを巻ば密中にかくれて、その靈妙聲もなく臭もなし。若夫形氣の嗜好は、これを人欲と云。志に似て志にあらず。此人欲常に本心の明をおほふ故に、五路ふさがりて人道殆す。學者於ㇾ是本心誠實の良知に自反し、其志を責てこれを立るときは、人欲の蔽やぶれて、本體の明發見せざることなし。學は效なり覺なり。效は覺のつとめ、覺は效のしるし、元より二ッなし。而其目三ッ有。一に云學脈。聖人の天に繼給へる道統の心法也。即仁德也。是に悖れば、天に背きて異端に陷いる。二に云學術。六經四書にとける所の教誨也。即知德也。是に從はざれば、その脈を得ることなし。三に云學業。その教誨に從て修する所の實功也。即勇德也。これを務めざれば、その志を成ことあたはず。三ッのものその實は一也。自然の條理よりこれを脈と云。天命の性なり。師の教よりこれを術と云。率ㇾ性の道なり。學者の務めよりこれを業と云。自明にするの功修ㇾ道の教也。脈はたとへば往んと欲る所の道路のごとし。術は陸は輿を用ひ海は舟を用ゆるが如し。業は輿はこれを荷ひ舟はこれを漕が如し。荷ふことなく漕ことなければ、輿舟も益なし。輿舟を用ひざれば、海陸ゆくことあたはず。輿舟そな

わかつものは一條々々の趣をよくしりて眞に至らん事を願ふのみ。

元祿十五年壬午五月五日　　神山執齋主人書

もあらず。自然にうる所なり。しかるに汝が欲する所の物は多しといへども、飽かずしてくらひ、汝が嫌ふものは寡しといへども厭ふ。是汝が形氣血肉によりて本心の中をおほふなり。夫事物に於て中をとるは子莫なり、子莫も又古の賢士。何ぞ人の甚しきが如くならん。只其中を天授の心に求めずして事物の上にはかるを以て、一偏に落在する也。夫頂きを摩て踵にいたるは、事の過るなり。一毛を拔て利二天下一もせざるは事の不レ及也。二つのものゝ間に於て中を取るものは事の中にして心の中にあらず。心の中にあらざれば又是一をとるものなり。若夫心を以て求レ之は一介不三以與二人も中なり。豈一毛をもぬかんや。骨を肉にして君父に奉るも中なり。況や頂を摩て踵に至るまで何のおしむ處あらんや。是則本心天理のやむことを不レ能に出て、事物比較の上より來らざればなり。是則聖學相傳の旨訣萬世不易の心法なり。夫中を執るの工夫間斷なければ眞心常に存して不レ放也。故一毫人欲の雜則たゝ。故に精一の功可レ擴。精一の工夫必不レ辨ばかの人欲の雜を去て中信にとるべし。精は辨也。とる事間斷なければ分毫かならず照して精可レ至。精必至れば一塵必不レ存して執るよ可レ固。とることかたく精至れば中和致して己が天地位、是位し己が万物こゝに於て育す。これを以て天下に臨めば天下治り、以レ是後世に引ば萬世其澤を受く。篤恭して天下平。豈夫虛語ならんや。

以上の工夫は當所によりて名を異にすといへども、その實は十個只一個の工夫のみ。十條を通貫し會得すれば一事にえても九事その内にあり。十條の別にかゝはりて支離破裂すべからず。十條に

愚なる事ならずや。中の發して和となる事は假令ば木の幹發して枝となるが如し。木の枝其後外に出るといへども其内必幹より生ず。これ中の顯はれたるものなり。故に幹によりて枝をかたるはちかし。枝をもて幹とするはあやまれり。心を以て中を論ずるは可なり。事物を以て心を求むるは人に遠し。今時學者此學をしらざるより事物の善惡をえらび人の善惡を論ずる事は過不及なきの中を得たるに似たりといへども中を己が身に求ずして執レ之の功をあやまれるが故に人心日々に危して道心終に光なし。夫中は人々已に備へたる德なり。只是をとれるのみ。工夫の肝要なり。中を事物の末に見るより是を取らんとするに躰なくして工夫安堵の所なし。心を以て中とすれば是をとるに實ありて工夫道あるなり。心をとることといかん。常に自省て日常にこゝにあり。獨をつゝしみ心を求めてこれを戒謹恐懼して、少しき間斷あらざれば中を取る事漸を以てその功を見るべし。然りといへども中の本躰至精至微精一の功密ならざれば中を取らんと欲すといへども日をうることかたかるべし。故惟精惟一允執二厥中一といへり。或云。書に考へ物にはかりてこそ所謂中もしるべけれ、若たゞ空にその心を守らば中の中たる何を以てしらんやと。この說似たりといへども嘗て心術に力を用ひざるもの道理を相議していへるなり。暫吾子が爲に心則中にて事物に考へ書にたづぬるにも及ばざるの證據をいはん。今食を喰ふに甚多きは過たりといはん。甚少きは不レ足といはん。汝斯の如くなれば人も又かくのごとし。是多寡事に有。中は汝が心に有り。汝が心ひとりしかるに非ず。天下の心皆然り。事々みな如レ此。是心即中なる明證なり。書に考るにもあらず。事物に尋ぬるに

より脚下に至るまでりん〳〵乎としてすこしき偏倚なし。是を以て一身検束して万事あたる。たとへば天の南北極貫て地をしめ萬物を載せてゆるがざるが如し。若元氣少しくたゆまば山崩れ河かはくべし。故に開闢より滅息にいたるまで此中少しく間斷すれば、必人極たゝず。故に常に是を取るをもていましめとす。子曰。人の生るや直し。是をなみして生るは、幸にしてまぬかるゝと。直ければ幹立て一身おさまる。不レ直ば幹倒る。身も又死すべし。人君皇極をたつれば、四海治る。天君人極を立れば一身おさまる。子曰。敬以直レ内。敬は即執の謂。つゝしめば則直し。とれば則中なり。夫直は人の本にして中の姿なり。是もまた執中の工なり。夫聖賢不爲萬修信言非語これに本づかざることなし。故に上古聖神道統傳來必是を以て心法とす。其經に顯はれたるは堯舜禹相傳の旨訣必是を以て訓戒の工夫とせり。その功は則精一なり。されば子思後人の中を以て人心の德とすることをしらずして事物過不及の末に求めてかれ本体をうしなひ見解にのみとゞまらんことを恐れ給ひ、常に中庸を述べて喜怒愛樂の未發を中といふと說て、その本心の實体を示し給ふ。かの事物の理も猶是を外に求めずして其中の發して節にあたるを和といふとのたまへり。夫事物の中も、中にあらずといふとなければども、本心全体の處にあらざれば中を以て名づけがたし。故只是を和といひて中といはず。其うへ此中の字を說んとて始に天命性道教を說たまふ。是を以てこれを見れば中は天の命にして人の性となるものなり。道はその中に從ふなり。教は中を修ぶなり。かく明らかなる心法を以てこれを事物の末に求め過不及の事に中をえらぶ。是燒光を捨て明を燈火に求むるが如し。

りよく行ふとも心中涌出の味なくして外に假の蔽あり。是則義外の説なり。甚苦しみて終に成就なかるべし。且一の字を以て專行の守りのみとするも又味なし。書曰。眷ニ求一德一。俾レ作ニ神主一。惟尹躬暨湯。咸有ニ一德一。又曰。天佑ニ一德一。又曰。民歸レ于ニ一德一。又曰。德惟一。動罔レ不レ吉。德惟二三。動罔レ不レ凶（咸有一德）と。一は天理なり。二三なるものは欲これに雜れば也。又曰。一心一德。（泰誓）皆是純一の德をいへる也。文王の純亦不レ止は天道に純なる事をいへば道心惟一の謂にして人欲の交雜なきなり。夫子の一以貫レ之もまた又是無二一の謂中庸に所謂所ニ以行レ之者一は是五道三德に對すといへども其實は誠をいへるは亦是純一無雜の謂にあらずや。孟子の所謂道一而已。周子の所謂一無欲。程子所謂涵ニ養吾一一。皆純一無雜の謂なり。凡聖賢傳授の法一心の字を以てする事、皆如レ斯にして堯舜禹相傳の旨、ひとり行半片の守りをのみいはんや。夫心純一無雜なれば行ひの守りは其中にありていふにたらざるなり。

允執ニ厥中一。允は信なり無假の謂。執は守りて不レ失なり。厥は物をさしていふ。論語には其に作る。同じ義なり。是本心固有の中を指出していふなり。中は不レ偏不レ倚無ニ過不及一の名、則上文所謂道心の質、一の躰なり。一身の幹五性の本人心の表德號なり。不レ偏不レ倚より中といひ、受て生ずるより性といひ、知覺運動より心といひてその實則これ一事なり。故に上帝降す處の中といひ又は天然自有の中ともいへり。故に心をとるは中をとるなり。性を定るなり。幹をたつるなり。中の名によりて事物に向ひて所謂無ニ過不及一處を尋ぬるあし。中即人極なり。たてば則天に繼ぐべし。頭上

れを一つにするを精といふ。精のなりたるを一といふ。精は一のはじめ一は精の終りなり。精や一や亦一物なり。夫精は米偏のいひえらびおりて委しくするをいふ。文字從レ米從レ青。米を以て譬れば鑿みて潔白にして青光あるなり。凡至て白きは青みて見ゆる者なり。天の蒼く水の紺みなこれなり。少しもうろみくもりのなきなり。一とは二の對二無れば則一なり。即道心の眞中なり。純一無雜の謂也。夫人内外動靜皆道心なるは、これ一なり。人欲少も交雜すれば二三なり。道心の微なるは人欲の交雜を以てなり。道心の惟一にならんと思ふものは其交雜する人欲をえらび出し除き去りて精レ之にある也。疎より精に入り、巨より細に入、去レ殺去レ雜皆以レ淺、論揀少しき間斷なければ潔白青光の地に至りて惟精の功始てしるしあり。傳習錄にもこのたとへあり。惟一にあらざれば、惟精の功止む。惟精惟一、允執二其中一かの人欲をさりて道心にかへる皆一道なり。聖賢元より二語なし。人欲を去るは惟精なり。道心にかへるは惟一なり。而中を執其至善なり。克レ己は惟精。復レ禮は惟一。仁義にいたるは執レ中なり。學者よく味ふべし。朱文公惟精を知に屬し、惟一を行に屬し、知先行後相進て執レ中といへり。大に支離分裂す。すべて學術の差謬これらの處より來る。惟精惟一は知行を論せず、只心の人欲を去て天理に純一になる工夫なり。一心天理に純ならば知行豈いふに足らんや。夫知は内に明らかにして行は外に顯はる。心は内外なくして知行をつらぬく。知行各用功の支離ならんよりは何ぞ一心を以て學ぶの易簡直切なるにしかんや。況や知行を以てまなぶものは必或は不是、心を以て學ぶ者は知行必無二不是一をや。かの説の如くなれば、たとひよくし

道心の本躰をうしなへるを人心といふ。人心の正を得るを道心といふ。故に聖人には人心なし。王子も程子の說に從へり。程子の意は人心は人欲なり。故危し。朱子の意は心欲なれば危はいふに足らず。人心は形氣の私より生ずれば聖人といへども有てたゞ其道心主となるを以て人心に流れずと也。朱子文集の內一說程子にもしたがへる說あり。然ども是只程子によりて說けるのみにて此本文の定說とはしたまはず。其書朱書節要に載せて李退溪その意を註せり。朱子の意蓋思へり。覺二飢渴一知二寒熱一者を人心とし仁義四端の發を道心とすと。夫四端の愛惡樂形氣にあらずして何ぞや。渴して飮み飢て食ひ夏葛し冬かはごろもす。是を仁義の外に求めんや。若形氣を外にして所謂道心なるものあらば夫もまた人倫日用の學にあらず。一種空妙の杳冥昏默たるものにして異端見性成佛の宗旨なり。儒者の尊信する處にあらず。覇者のかれるは仁義も僞りなり。聖人のする處は薑を不レ撤して食し給ふも道心なり。孟子曰。道二。仁與二不仁一而已と。道心にあらざれば必人欲、人欲にあらざればかならず道心なり。もし夫道心にあらず人欲にあらずしていはゆる人心は果して何ぞや。且夫人欲なれば危はいふに足らずといへる意もおだやかならず。朱子嘗於二巧言令色之章一註して曰。聖人辭不二切迫一と。予於二危字一亦言レ之。何ぞ彼に明かにしてこれにくらきや。且つ字義はともあれ只自己分上の實功につきて益あるをとらば、他岐のまよひなくして聖人の意得べし。

惟精惟一。惟は語の詞にして又無レ外の意有あり。精は功夫なり。一は主意なり。一を以て主意として務るなれば是又工夫なり。聖學無レ他。唯一物已。一のつとめを精といふ。精の極を一といふ。こ

動するものなり。是を人心といへば、彼本幹の天理をうしなひ安し。血肉軀殼耳目口鼻の爲に運はれば、終に其の欲に落るなり。心もと一なり。只うごくに血肉を以てするを人心といふ。故に夫子曰。人心は人欲なり。動くに人を以てするもの必皆あしくとはいふべからざるが如しといへども、夫既に天理より發せざれば則これ人欲なり。その流れいまだ遠からざれどもあやうきなり。

道心惟微。道は天理の本心の本幹なり。即中なり。即一なるものなり。故に血肉軀殼の欲にながれずして本性の自然より悠然として發出し動くに天を以てするものなり。四端の正真知の發なり。人の人たる所以なり。道心といふは人心に對していふ。其實は道即心の本幹なり。然れども人此身あればかならず自私する處ありて道とひとつなりがたし。是を以て道に志なきものは常に軀殼より念を起し其道心あらはれがたし。故に微なりと。夫善を見ては必これをよみし惡を見ては必惡む之は是道心の發見軀殼によらざるものなり。我身にいたりては善にはうとし惡には近きは軀殼に從ふて自私するものなり。故に人至愚といへども人を責むる事の必明らかなるは天下の眼を以て公に見ればなり。至明といへども己をはかるとの必くらきは一人の身を以て自ら私すればなり。故に人心道心たがひに消長を相爲す。道心專一なれば人心消し、人心盛なれば道心微なり。道心微にしてかへる事を知らざれば其終禽獸を去ると不遠なり。人心の危きに道心本幹をうしなへばなり。道心の微なるは人心の事を用ゆればなり。聖人人心を去るを惟精といひその道に復するを惟一といふなり。二事あるにあらず。朱子の曰。心の虛靈知覺　　。此說のごとくなれば是則人二心有るにあらずや。夫

べからず。必これを良知にとひ孝悌にもとづけ志にせめ氣象に考へてさはる處なくせまる處なく恥る處なく疑ふ所なくして後に思レ之。然後その心に生じて其事に害あらず、其政にそこなひあるべからず。此三ヶ條においてゆるかせなる所あれば、上文數件の工夫無用の表題となりて一場の話説のみ。則内外を一つにして表裏を合せ衆人より以聖人に至り一身より以天下に施すべきの要道なり。かりにもゆるかせにすべからず。曾子云、君子所レ貴レ於レ道者三、云々とは、是を以てなり。夫かくの如く條目を立てことごとくこれに考るは、迂遠なるに似たり。これ必ことごとくすべしといふにもあらず。此十條譬へば輪にせる縄をとくが如く一所あぐれば殘る九つのものみな從て擧るなり。各そのあたる處ありて工みかくべからずといへども、實は一事にうればみな得ざる處なきなり。

十。執　中。

大禹謨曰。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執二厥中一。これ舜天下を禹にゆづり給はんとて堯より傳はり給ひし允執二厥中一句を釋して相傳の藝とし給ふなり。しかりしよりこのかた湯の中を執れる文王の小心翼々武王の敬怠に勝も皆執の字の功にあらざるとなし。夫孔夫子の操れば存すと述給ふも、堯舜を祖述せるなり。顏曾思孟の相傳はれる周程王子の往聖をつげる皆この趣にあらずといふとなし。故に大禹謨に載する處の詞を再釋して執中の功を忘れざらんことをこひねがふのみ。（顏曾思孟傳來の意は執齋の記是を詳にす。故にこゝに贅せず。）

人心惟危。人とは血肉軀殼の形躰耳目口鼻四肢百骸の欲をいふ。心はおのれに得る處の天理知覺運

果して異ならんか。孟子仁義を説孔子仁のみを説けん。孟子の仁果して孔子の仁に異なるか。不」思の甚しきなり。

九　言行念慮妄にすべからず。

言は心の聲なり。行は心の跡也。思慮は心の動なり。此三つのものは人の必あるものにして其事眞と妄との二つあり。是を此處につゝしむ。則是立志、養氣、内省、致知の條目なり。夫無妄は天理の實然心の本眞なり。人欲氣質のおほはれよりその本幹を失すれば則妄をなす事あり。夫人志立て孝悌に純一なるもの本より此病なしといへども其聖人にあらざるよりはこの志間斷ある事をまぬかれずして少しき間斷あれば邪妄投」間乘」虚じて入る事あり。其時外にしては言行内にしては念慮に至るまで此病を受けずといふ事なし。なほ此本より本心にかへり求めて志をせめ、恥以はげまし、氣を養ひ眞知を致す。各其他頭につきて是が工夫をなせば邪妄退去す。されど本幹つがざれば、則或はこれを忘れ安ふして、等閑に過す事あり。故に此三つの條目を以て節次進步の處とす。是格物の工夫にして夫子の所謂九」思之」則これ上文述る處の數件の實工なり。一言妄に發すべからず。必これを眞知にとひ是を孝悌に本づけ是を志にせめ是を氣象に考へて、さはる所なく恥るところなくせまる所なく疑ふ處なくして後に出」之」然して後言天下に充て口の過なかるべし。一行妄になすべからず。必是を眞知にとひ孝悌に本づけ志にせめ氣象に考へて、障る處なくせまる處なく恥る處なく疑ふ處なくして後に行」之。然して後行ひ天下にみちて、うらみ惜むとなかるべし。一念妄に思ふ

と違と是を學といふなり。それかへれる後其至れる處をみれば本躰良知の外一物を設くる處なし。豈性分の外毫末を加へんや。是仲尼の甚しき事をなしたまはざる處なり。王先生此道の廢墜をなげき給ひて二度致良知の學を唱へ給ふなり。それ說は大學にはじまりて其義は論孟に備れり。王先生はじめて此說をたて給ふに非ず。今の學者王子平日の訓朱子に異なるを憎みて其本の寄る處を考へず、孔子孟子の大道までをそしれる、夫何のこゝろぞや。よし孔孟王子皆非也とも、自己良知の發見を如何ぞや。良知の說をそしるものは、自天眞をたつものにして自暴自棄の大賊なり。若夫良知より學びずんば、爲る跡みな善なりとも吾性本然の統躰に於ては必一重を隔つる處あり。是則霸者のこれをうるものにして誠意の自然にあらざるべし。其上良知を本とせずして所謂善なるものは、夫何をいはんや。夫霸者の行ふ處も仁義也。只是を外にとりて良知自然の心中より來らざるを以て是を假といひ、仲尼の門五尺の童も稱する事をはづ。其意見るべし。學者この致良知の學聖人の正脉たると見るべきなり。今世或人この說をそしるものあり。孟子は良知良能をかね是を說けり。王子はひとり良知をあぐ。これ孟子の良知に異なり。予甚だ其說に服せず。是良知にくらき而已ならず良能をもしらずといふべし。知能一事の趣は前にのぶれば、爰に贅せず。孟子嘗ていへり。徐行て長者に後るゝを弟といふ、堯舜の道は孝悌のみと。孝と悌といづれか重き。然るにひとり悌をいふて孝を兼ぬれば知を擧て能其中にあらざらんや。孝悌は二事にして猶これを兼ぬべければ、知能本より一致なる、何ぞ兼ざるべけんや。王先生の良知孟子に異なりといはゞ孟子の所謂弟は堯舜の悌に

只これのみ。○道在近。而求於遠。事在於易。而求於難。人々親其親長其長而天下平也……親々長々は良知にして、孩提の童もよくしりよく行ふ所なり。致達すれは天下平なり。夫天下平にいたるはその功大ひなり。しかるに只此良知を達するのみ。これ事物に究格して後これをしるか。抑一念良知のしる處か。○無為其所不為。無欲其所不欲。如是而已矣。そのせざる處は良知なり。其無欲無為達之致之也。其不為不欲處ある、これを事物の間に究格して後しる歟。抑一念良知の知る處か。而これのみといへる豈夫外に求るをまたんや。○徐行後長者。謂之弟。疾行先長者。謂之不弟。夫徐行。豈人所不能哉。所不為也。堯舜之道、孝弟而已矣。孝悌の心は良知なり。致達せざれば只徐行の事にとゞまる。是事物に究格して後是をしるか。抑一念良知の間にしる所か。○こくそくの牛を哀むは良知の徴なり。これを民に及すは致達の功なり。○吾老を老とし吾幼を幼とするは良知なり。推し思て四海に及し天下を保つは致達の功なり。夫性善は良知の躰良知は性善の發見。人性必善、故に其知必良也。良知に本づかざるは性善をしらざるものなり。これ少しく疑ふべきことなくして孟子一生の學術これに外なることなし。○王子曰。所惡於上良知なり。無使下致知也と。此意見るべし。其良知の說は性善養氣よりは過超せる處あり。孟子性善を述べて夫道は一のみ世子勿疑といへる見るべし。孟子聖學の正脉たる處正にこゝにあり。今それ良知の微なる事は火の始てもへ泉の始て達する也。擴充は則致達の功なり。堯舜の性のまゝにして天下に大なり。湯武の反へるは、能致し克達して、後良知の本躰にかへるなり。致

べき親の孝すべき有學無學によらず皆是をしる。是人の人たる良知にして、天下の同情我心のおなじく然るもの也。これにそむくものを人の性にたがふといひ、禍必其身に及ぶ。これ愚夫愚婦といへども同じく備へたる證據にあらずや。是を外にして彼の事々物々に學ぶもの自は知を極めたりといふとも、各々見を異にし師を同じうして學ぶ者といへども道とする處必異同あり。是何ぞ堯舜も人に同じきの道ならん。これみな良知を主として是を致達せず知解見識を以て道理を事物に察するのあやまりなり。我所謂良知のごときこれをいたしこれを達せば天下後世何れに施してさゝへる處あらんや。是程たしかなるものを盗を子とするの誤りあらんといふは其おろかなる事元來己が身のうちに在る我良知をさへかくおろかにわきまへずして天下の理を極めんと思ふ。笑ふべきの甚しきなり。夫孔子の大學の致知をはじめ論語に載する處を見るに其甚切にして明らかなるものをいへば。仁を學ぶの道終身までおこなふべきの一言只己が不㆑欲處は是を己に考て知るか事物に究めてしるかもし一念良知の發見して自然にしる處か。これ則良知なり。人に施すことなきは、これ致すにあらずや。是を天下に達するにあらずや。是より以往おして知るべし。孟子七篇の要文も又皆かくの如し。

○求㆓放心㆒。　心は良心なり。良心は良知の躰良知は良心の用。良知の存せるは良心なり。良心の發は良知なり。これ事物に考へて後存するか。抑是を一念良知の間に求めて存するか。○人皆有㆑所㆑不㆑忍。達㆓之於㆓其所㆑忍仁也。　人皆人に忍びざる心あり。是良知なり。達㆓之於㆓所㆑忍者は致知なり。是事物に考へて後知るか。一念良知の間に知る處か。仁義勝て用ゆべからざるに至るも、

るべしと。答て曰。是良知といふものをしらざるの言なり。大學致知の二字にもまたくらし。大學の知の字則良知なり。もし良知ならずば致て何にかせん。故に内省の工夫をおもしとし、志を立るをはじめとす。氣に乘じ二物に對すれば、良知何れの所より光を顯はさんや。唯内にかへりみれば、人欲拘蔽の間といへども良知の眞其本體甚明らかなり。今の學者心學にくらくして、只物に考へずしてたゞ外に出るをのみ良知なりとおもへり。甚おろかなり。たゞ外に出るにも人欲より生ずるもあり、天理より生ずるもあり。こゝに於て内省の工夫なくんば何をもて良知を見ることわらんや。然るに其の本體の端的をいへばかの孺子の井に入るを見て惻隱の心發するが如く何の考へ慮る事なくして與に發するものを云なり。是人の學びて後得たるにもあらず。元來そなへたる證據をいへるなり。孟子の所ㇾ不ㇾ學而知ㇾ者良知也といへる、この意なり。其實は學んで知るも良知なり。其知に至ては一なり。學びて知れるは良知にあらずと思へるは、甚惑なり。仁義の良心といへるも、學びて仁義にいたれる心も、皆良心なり。能く考ふべし。古訓に考へて善惡を別ち事物に學びて理非を辨へるとも、良知の別ち辨るなり。是を知らずして意念のほしひまゝに發するをも、良知なりと心得ぬれば、よろしきなり。致ㇾ良知ㇾ違することをおやぶむこと是心學疎かにして我心即天理なるの實體を見得ざるのあやまりなり。其うへ今の所ㇾ謂事物に極め古訓に考るは却て氣を性とし盜を子とするの病をまぬかれず。如何となれば今朱子を學ぶもの十人あれば十品にちがふと見るべし。然ばかの學んで知るといへるも、學みにならず。我所ㇾ謂良知は善を以て好ㇾ之惡を以て惡ㇾ之、君の忠す

といふ。即ち明德を明かにするなり。致はいたらしむるなり。いたすと訓するも、いたらすの畧なり。是功夫を以ていふなり。至はいたるなり。所ㇾ得のしるしなり。孟子に無ㇾ致ㇾ之而至者命也といへる類ひ、到は自然にして致は力あり。若夫これをいたさずんば何を以てかいたらん。されば知の知る處空にあらず、必物あり。ものは事なり。其ものゝ其事不正あれば、良知必是をしる。その不正をしりながらゆるしてこれを入るれば其知いたる事あたはず。故其不正をたゞず。これ格物也。物を正せば知便いたる。是格物は致良知の實事なり。良知いたれば善を善とし惡を惡として、自欺く事なくして自こゝろよし。是誠意なり。意につきていへば誠にすといひ、知につきていへば致といひ、ものにつきていへば、格といふ。實は一なり。されど知はその本躰の則あるを以て二の物をかぬ。故に王子致知の二字をかゝげて宗旨となせり。これ大學の實工なり。偖事々如ㇾ斯にして凡天下の事皆如ㇾ斯ならざることなき、これを我明德を天下に明らかにすといふ。孟子に擴て充るといひ、達三之於二天下一にといへる、みなこれなり。達は致の廣きを極めたる也。致は達の實を盡せるなり。叓に二つなし。今世學者古意をうしなひ記誦文學を以てせざれば必事物に究格するを以て學とす。事物に究格するは近きが如しといへども良知自然の道を塞ぎて道理を外物に求るの病は却て記誦文學の害より甚しうして、似て非なるものなり。或人難じて曰。人良知をもて學をせば氣を以て性とし盜を以て子とするの害あるべし。我こそ良知自然の發見なりとおもはめ。元來氣拘物蔽に塞がれたる知なり。その發見何を以て本知とするに足らんや。只事物に學び古訓に考へて後其眞をし

は存亡の機なり。

八。致眞知。

致知の工夫大學にはじめて是をいへり。知を眞知とすることは孟子によれり。致の字、孟子の所レ謂達二之於天下一者也。眞は自然の善、本躰の發見也。安排をからず人爲に渡らず、聖愚同じくある所にして、人の人たる所以のもの也。眞能といひ眞心といふ、皆同じ。その眞知といふも此眞知の實事也。眞の實を眞能といひ眞能の明を眞知といふ。人の自然の天眞なり。致眞知をいへば能その中にあり。能をいへば知また其中にある也。學といふも此天眞を學びて事々此眞知の本躰に至らんとを欲するなり。然れども人氣に拘はられ物に覆れば、天眞の光明直に發出する事なし。されど人の人たる處未絶え亡びざれば時としてこの光明顯はれずといふことなし。孺子の井に入るを見て必怵惕惻隱の心發出す。これ豈按排思慮のなす處ならんや。是より學べば事々みな實事。たゞこれを致を學ぶといふ。善を善とし惡を惡とする。誰かその明なからん。是を眞知といふ。即明德なり、たれか是備らざらん。されど氣質人欲の覆ひを以て、その知れる處の善をこのむ事好色を好むが如くならず、惡をにくむ事惡臭をにくむが如くならず。甚ふしては善にそむき惡を成す。是其知もと眞なりといへどもこれを致すの工を不レ用を以てよく至る事なし。されど其本躰の明終にたゆるとなければ身善に背き惡を成すの間といへども善を善とし惡を惡とするの知はもとの如く眞也。故にこの眞知をのりとして是をいたし善を好むこと好色のごとく惡をにくむ事惡臭のごとくする、是を致

の聲なり。行は心の跡なり。爲ニ私欲一に隔斷せられて心跡二つとなる。言行よしといへども、爲にする事あれば本心の發見に非ず。その心得二つと成るものなり。夫言を聞くもの何ぞ其の心をしらん。夫子といへども宰我に失し給ひぬ。行ひを見るものは何ぞ其心をしらん。過にして仁なるは學問元來人の爲にあらざれば、心中自然の發見にあらざるものは、何ぞ己に益あらん。是を以て人の爲に言をつゝしむもこれ不言を以て餂るなり。其行に至りても、墓に廬し、股をさくとも、君子の取らざる處なり。孝の爲めに祿を求るは祿を干るもまた孝也。毛義檄を見て歡べる志稱すべし。爲レ祿に忠あるは忠も又無心也。是心にありて事にあらざるの明證なり。故に王莽が謙恭は賊なり。孔子の諂は禮を盡せる也。是何ぞ人の知る處ならん。自ら是をしる。人のしらざる處にして、己獨知る。この處に於て力を用るは誠意の愼獨なり。是則自反內に省みて、內自訟る者なり。人の學是よりすゝまずんば上に述たる數節の條目、凡ていつはりなり。其餘は何ぞ見るに見らん。天下の人こぞりて譽るも、歡ふべからず。天下の人こぞりてそしるも、愁ふべからず。只自反して心に快きはこれ則天心にあへるとしるべし。橫渠先生曰。爲レ學始以レ心爲ニ嚴師一動靜必知レ所レ恐と。よく工夫を用ふる者といふべし。孔子何ぞ酒の困あらん。何ぞ不善あらん。何ぞ德の不レ修學の不レ講あらん。而して其あたはざるを憂へ給ふは、自反內省、無ニ間斷一所なり。只初學のみ以レ心可レ爲ニ嚴師一にあらず。聖人にいたるといへども只この工夫のみ。子曰。仁遠からんや、吾欲レ仁斯至矣と。只これを不レ欲のみ。本心即天理。何ぞ他に求る事を煩はさんや。顧れば即こゝに存す。予故云。自反內省

し。夫氣象皆濁事に應ずる時心勞倦するが如き時は、つとめて氣を張ても心いさまず。若しゐて氣を張るは是れ助けを氣に求るなり。この時に於ていかんせば可ならん。云。これ前にいへるたぶり未だ倦ときしゐて事に應ずるが如し。故に眠のさめざる時を以てたとへん。この時にあたりて、氣の事を用ふる事多して、心のまを用るまでもなき故なり。たとへばよく寝入たるものを呼びさましぬるに、常はいさまぬものといへども、家に火つきて燒あらん時、おこされて目をさましなば少しもたゆみなく一滴に起き走りて逃べきなり。是心燒死する事をよくしれる故に氣則したがふものなり。是を以てこれを見れば、氣に違はるゝは心のたゆみなり。是を氣にて張るはあし。告子すら倘これをしらず。只心をせめ内に省みて驚きさば即時に心強く氣從ひ將卒各その處を得て事々必誠意の氣象あらん。此旨能く味ひて聖人の心學覺悟すべし。然るに佛者火宅のたとへの如く利を以て導くは心にはげまさずして欲を道ことなり。故にあしく、佛者の教は、たとへば金銀をあたへんとて呼びさますがごとし。羊鹿牛車の譬へこれなり。眠の病治して欲のやまひ長ず。眠の病は猶かろし。欲の病は大なり。小病を除きて大病を受く。甚悪しからずや。我心をはげますは、心の本然なり。眠りたるもの君父の大事を聞て目をさますが如し。此處能味ふべきなり。

七。內省。

內は身のうちなり。身のうちは心なり。心は性なり。性は命なり。命は天命なり。故に心を名附て天君といふ。孔子の內に自省とのたまふは、天君に顧る也。則此天の明命を顧るものなり。言は心

大にすとしかいふ。

六。氣象を考ふ。

これも別に一等の工夫にあらず。即立志養氣より廣量の內この趣有り。今これが條目をあらはすとは、人聖人にあらざるよりは必氣象昏明清濁によりてかはりあり。氣象清明なる時は本心おのづから發しやすく大にちからをはぶく處あり。昏明なる時に力を用ひて心をはげますといへども必失ふ事又多し。且應事接物の事つとめ苦しむの勞ありて自得味なく心の位下り安くたとへば眠りいまださめざるに人に呼びおこされしゐて事に應ずる時の如し。故に誠意なし。之を以て氣象を考ふることをしらざれば信僞の界を辨じ進退の位を別けがたし。集義養氣の時にあたりて表準を立て成否を試みんとすれば則助けますの病あり。これを捨ればまた必忘る故、かならず有レ事の如何に於て常に氣象を考れば自得誠意の處より發する者の各別なる味しり安かるべし。夫自得誠意の處より發するものは優々游々從容不レ迫事のためにいからず、ものゝ爲に擾らず志氣清明を終りて喜快こゝちし鳳千仭にかけるの氣象あり。たとひ死地に臨むといへども仁を求めて仁を得また何ぞ恨みん。不レ然ば善事を成すといへども心甚だ苦しみなしおはりやすからず。利害の來るに逢ふ時は、却てこれを悔ることあり。これみな一旦の意氣より出て本心自得の處より生ぜざればなり。故に一旦意氣より出るものは事必理にあたれるとも自ら許すべからず。これ氣の所爲にして、本心の發見にあらず。氣象をしらざるものは此處に於て迷ひやすし。しかるに氣象の清明もまた平旦の時に於て識取すべ

のはすくなく、偏固なるもの多くこの病を生ず。是れ一所に屈して活所なければなり。假令ひ狂に至らざれどもさまでもなきことを身ひとつにしふねく思ひ取りてうち果し或は自縊れなどする有り。又妻子などの別れをかなしみかしらおろしなどふつゝかに思ひとる類ひ皆狂にあらずといへどもその趣きも狂ひに同じかるべし。故に量ひろからざれば聖學かたりがたし。夫誠に能志をたて能氣をやしなはゞ此病元より有るべからずといへども、生質量狭き者こゝに於て工夫を用ひざれば、追切のやまひ終にまぬかれがたし。夫言必信行必果は善徳なり。猶これを硜々たる小人とのたまひて大人のせざる處とす。君子諒ならずば何をか執らんといへども、匹夫匹婦の諒をするは聖人これをいやしめり。子夏曰。大徳不踰閑、小徳出入可也と。これ自得のことなり。子夏は生質謹厚にして君子につける人とかや。されば篤實の人はまたこの病あるが故に夫子告二子夏一曰、汝君子の儒となれ小人の儒となるべからずと。小人の儒とは心量狭小にして萬變に通ずるとわたはず一所に屈してものゝために狽ふ。すこしく見るべしといへども大に受しむべからず。君子の儒とは、心ひろく胖ゆたかにして、常に万物の上にのぶるをいふなり。蓋子夏の病によりていましめ給ふとみえたり。子夏其趣よくこたへて自得なられし心中よりこの言を發すならんか。されど見るもの細行つゝしまざるのつゐへ有らんことを恐れて、記者これがいましめをたれり。その晩年子におくれて明をうしなふはその病二たびおこれるか。抑々離群索居の致す處なり。百尺の臺をきづかんとおもふものは、必その基を大にす。聖人に至らんとおもふものは、必其量を廣うす。故に今この條を設け其矩模を

ずる時といふとも何ぞ義をうしなふにいたらん。唯この工夫のみ。勿レ忘は必有レ事の間斷をいましむるなり。勿レ助長レは必有レ事の效を望むことをいましむるなり。初學たゞついへを恐れて盤桓すれば本幹の工夫早く絶はてる。只一向にとび入るべし。佛者の諺に曰く。「身を捨てゝこそ、うかぶ瀬もあれ」と。予故に曰く。戰場に臨むものは死地を避けずして將の行處にしたがふ。聖人の道に志すものは流蔽を恐れずして師の導く跡に决す。嗚呼世に文王なければ豪傑の士みづから興らんのみ。誤て蔽にながるゝとも、其人の罪にあらず。只これをはじめに恥んのみ。

五。量を廣ふす。

人の性は天の命なり。人の心は並びて三才と成るべくして氣もまた浩然たり。天もと無量。人の量何ぞかぎるに分界を以てせん。唯有レ我の私にかゝらはされ各受の形軀に局せらるれば自私して天受の量を狹隘にす。故に聖學にこゝろざすものこの關をうち通らざれば更に祐けとすべきなし。凡量せばき者善事をなすといへども迫切の病ありて從容の氣象なし。毀譽に動きやすく憂苦に堪がたし。故にその人志をうれば忤恨睚眦の恨も必報ひんとをおもひ、位をうしなへば、悲憂痛慽いふべからず。晏子の御者のつまにわらはるべし。然ども量狹きものは喜怒發しやすしといへども心のはやく足り安きを以て必大惡には至らざるものなり。如何となれば量狹ければ慮みぢかし。一途におもひ入ぬればその處に屈して融通するとあたはず。是を以て善にすゝみがたし。又惡にも大に流れず。諺にいへる、惡に强きものは善につよき物なり。世の狂病をうるものを見るに放蕩より入るも

に事々にして是を試み事物の來るに於て本心天理にかへり求めて、是に應じ處し得ば悠然として自得するものは義の得るなり。斯くの如く事々物々として工夫をなし應事接物一として快からざることなき氣象を覺えたるものは眞の快心なり。是則良知の自知る處なり。故にかの事物に對して義理を究め吾心自得の味にいたらざるものは義襲而之取者なり。告子義外の說にして其の格物の說これなり。さてかくの如く處し得て各本心天理にたがはざるは義あつまりて道うるなり。その氣餒がためにかゝみ何を恐れ何を憂はんや。仰て天に恥ず俯て人にはぢざるは天地の間にみてるなり。浩然の本體なり。もし本心に道の定りなく應接に義のかたをうしなへば心孤にして氣うゆ。故に剛武勇德の人といへども心に快からざるとあれば小兒家僕の類ひに向ても恥おそれずば有べからず。是れ倶が欲心ありて剛をえざる處なり。道德に配して歸向一なれば、匹夫といへどもその志を奪ふとあたはず。一事すら猶斯の如し。事々みな義ならば天地にも塞がるべきことと試むべし。夫義を集るは志をたもち氣を養ふの節度にして言行念慮の愼みはまた義をあつむるの條目なり。故に下文一言不可妄發一行不可妄爲一念不可妄想を以て工夫の條目とせり。必有事は寂然の體操而不失の端緒なり。義を集るは感通の用發而節に中るの妙應なり。內外更に二つなし。處によりて名をことにす。夫集義を以て養氣の實度とすといふとも、其の要は必ずあるの心に本づかざれば又只義襲て取るのやまひに流れんとす。されば夜氣の章孔子の言をのするもこの義に同じ。操て存すとの給ふは必有事なり。捨れば亡ぶ。故に勿忘の戒あり。初學只必有事に於て工夫を用ずば事に應

民莫レ不レ信。不レ怒而民威レ於レ鉞。言忠信なれば夷狄にも行はれ行ひ篤信なれば蠻貊にも及ぶ。天寒ければ己が身も寒く、天潤へば己が身もうるほふ。己寒ければ人も寒く、おのれ潤へば人もうるほふ。若ひとしからざるものは病る人のみ。さらに内外物我のへだてなし。これ浩然ならざらんや。人誰か是を具せざらんや。浩然は盛大流行一身より宇宙に彌滿し周流へだてなきのかたちなり。中庸に浩々たる其天といへり。只人欲の私に覆はるゝを以て天地はさて置ぬ父子兄弟骨肉の親といへども相通ぜず。閨中閑居の時といへども心志愧怍し己が氣己が躰に滿たず。何ぞ天地に周流せんや。然ればその昏塞の胸中に於てこの氣の浩大を識取すること、まことにかたかるべし。故に平旦夜氣の一章を以てその實おのれに滿てることをしらしめ給ふと。牿亡の甚ふして禽獸とひとしくなれる人は其味ひもさらに猶わきまへがたしとぞ。我猶幸にいまだ此牿亡し盡して濯々たるにいたらざるか。平旦の氣その好惡未だ大ひに人に異らざるが如し。若し此事にして養はずば、仁義の萠芽畜馬の秣につきて終にかの禽獸に至らんこと疑ひあるべからず。おそるべきの甚しきなり。是を養ふの法は義と道とにあり。氣について功を用るは告子の陋なり。夫道家は氣を以て氣を養ふ故に生養くはしといへども仁義にそむき其終り却て仁義をなみするにいたる。夫鼻端の白き、徒に虛靜を守り魂を以て魄にのす。その趣長生を求るに過ざれば、甚これを賤しむべし。我儒の工夫はしからず。孟子只義をあつむと說。また義と道とに配すと說給ふ。されば道は義の全躰、義は道の分流條理なり。事物に應じて各あやまらざるものなり。五常百行一事も心よからざることあれば心はぢ氣餒ゆ。故

是に動ば危し。この二事にて、餘は推してしるべし。然るに心は氣に固し、氣は心におさめらるゝを以て、是が工夫をなすことあたはず。故に之を養ふの功なくべからず。この意堯舜相傳の惟危惟微よりはじまり、孔聖の書この趣にあらずといふことなし。試みに論語の書を以て證するに、曰、爲而不厭、誨人不倦。爲と誨とは志なり。厭と倦とは氣なり。志帥となりて氣これに從へば厭倦のうれへなし。又曰、不善不能改、不爲酒困。と。不善は氣の昏なり。困は氣の淫なり。改之不爲之者は志のさだまれるなり。心志かたければ氣のために流れず。故に安して危からず。この二つのもの夫子常に以て憂としたまへば常にやしなひて淫佚せしめ給はざることとしるべし。その外夫子の自言より門人にしめしたまふとにいたるまで、是にもとる事なし。故に我儒のはじめ志を立るの内に於て略そのはしを露はせり。凡聖賢相傳の心法この旨にあらざるなしといへども、これが題目をたてゝ一箇の工夫となし給ふことは、孟子より始れり。孟子の曰、吾能養吾浩然氣。又曰。日夜所息、平旦氣云々。夜氣足以存云々。苟得其養無物不長。云々。此二語養氣の祖にして、その義は七篇のうちに散在し、其實は孟子の出處進退正を守り苟もせざるにあらはる。然るにこの氣を名附て浩然といふことは則孟子の發明なり。一身を以て是をいへば頭上より脚下にいたるまで周流充滿して元來欠闕なく、おし廣めて天地にみつれば宇宙に彌綸し人我に通貫して、少しく滯塞なし。元來欠闕なきを以て一言あやまり發すれば則面赤を發し、一行あやまりなせば、則せなか汗を流す。一髮をぬくも必いたきを覺へ、一塵是にふるれば必穢きを覺ふ。すこしも滯塞なきを以て不言して

躰する事あたはじ。故に立志をはじめとし孝悌を本とす。志は孝悌の工夫孝悌は志の主意さらに二つ有るべからず。本なくんば何をか生せん。はじめなくんばいづくによくならん。是志と孝悌と一致なるの實躰なり。孝悌は仁義なり。仁義心に備はりて志に發す。こゝろ存し志立て不忠不孝なるものあらんや。よく體認して是を味ふべし。

四。氣を養ふ。

氣は形體の生意温暖にして疾痛をおぼへ寒熱をしるもの也。心と二ならずといへども、道と器との辨なくんば有るべからず。能やしなふ者は心に於て工を用ゆ。故に志にしたがふものは氣これが助けをなして理氣一つなり。氣に流るゝものは道心微にして心身二なり。夫氣は盈虧あり。平不平あり。清濁あり。勇怯あり。盈ればたのしみ虧ればうれへ、平かなればよろこび、不平なれば怒る。清なれば快く濁ればわづらはしく、勇なればすみ、怯なれば退く。故に四端、七情、心性の發見也といへどもその四となり七となるものは氣のあづかる所多し。故に志と帥卒をなし心と表裏をなす。聖凡賢愚ともに受く。聖賢は只志を定めて形氣にまかせず。故に和して淫せず。安ふして不レ危。夫樂憂、喜怒、快煩、進退、逢ふ處によりて發見するものは天理の自然なりといへども、氣にしたがつてしるものは、常人なり。只心志應じて氣是にしたがひ主帥をうしなはざれば士卒やすふして不レ危也。從容として理にしたがふは志なり。慷慨して身をころすは氣なり。心喜て氣これにしたがふものは和す。氣歡んで心これになるゝ者は淫す。心怒て氣これにしたがふものは安し。氣怒て心

孝悌は天地生々の德也。人にうけて仁義となる。その發用は孝悌なり。故に凡生をうけて天地の間に生ずるもの人のみにあらず、禽獸草木といへども此二字にもとるとあたはず。唯ものはこの德を全ふして行ふ事なければ、更に論せず。夫孝悌は人心に根ざして人心に孝悌に發す。即ち大學の民を親むは明德の物に行はるゝ所にして、德を明かにするは民を親むの根となるに同じ。この仁義禮智元來外より我を鑠にあらざれば、學びて後これあるにもあらず。故に孟子曰、孩提の童もその親を愛するをしらずといふとなし。其長ずるに及てその兄を敬するをしらずといふとなし。親を親むは仁なり。長を敬するは義なり。無他是を天下に達する也と。是則書にも學びず人にも傳はらずして自然と生れつきたるものなり。人の以て人たる所なり。是を名付て良知と云。又堯舜の道は孝悌のみと云。親を親とし長を長として天下平とのたまひ有子の孝悌は仁をするの本といへるも皆この道にて、凡仁義禮智禮樂の類も孝悌にもとづかずといふとなし。孟子曰、仁之實事親是也。義之實從兄是也。智之實知斯二者而不去是也。禮之實節文斯二者是也。樂之實樂斯二者是也、云々。これ等の言克く味ひて我聖人の學といふものしるべきなり。故にその志高きとも事物の外に立りといへども其道孝悌にもとづかざるは儒者の學にあらずして堯舜孔孟の正道にあらずして異端正道の別るゝ所以この處にあり。況や余の聖人の道を學べる人朋友親戚の間に於て我慢理屈を主張し惡を發し人を責るを事として是を以て義理を正し勤を守るといへる類ひ名付るに異端を以てしがたし。只大愚とのみいふべきなり。諸人孝悌の心有りとも志足らずんばこの天眞を全して生々の德を

日月をいたゞき君たる人の先祖より傳へたる國を人にかすめられたらんはいか斗口おしくいひがひなからん。是を以て心に譬れば心の萬理備はれるは國家の萬物を集めたる如し。此心は父母の遺躰にあらずといふ事なければ此身この心みなこれ父母なり。今此心を人欲のために害ひたるは、父を討せ國をうしなへると何ぞ異ならん。かの父を殺し國をかすめる仇は外にありて得がたし。猶苦に寢ね劔を枕として終に讐をむくひざれば死に至るまでもやまず。かの人欲の我身に有るは立處に得つべくしてなをざりなるはいかばかりおくせる淺ましきことならん。こゝに於て恥る事を知らざらんは鳥獸にも劣れるなり。鳥けだものは猶よく己が受たる職をつとめてその生を終るぞかし。犬の門を守り鷄の時を告げ猫の鼠をとらへ牛馬の服乘せらるゝ類ひこれなり。何ぞ人をもて犬鷄牛馬にしかざるべけんや。つく〴〵と是を思はゞ、いかなる懶士懦夫なりとも少しははげみ慣る心生じざらん。此心をうしなはずしてはげみもて行かば、柔といへども必剛になりて、勇德もまた成り安からん。是恥をしり勇にちかきなり。是を助けとして志を立てはげまさば聖人にいたるといふとも外に待つことなかるべし。是恥の人に於ける大ひならずや。是よりこれを推せば顏子の三月の後に或はすこしき違も顏子の恥なり。只聖人人倫をつくすのいたりならずんば恥をまぬかるゝ事かたかるべし。仰て天に恥ず俯て人に愧ざるは聖人の眞樂也。夫よりおちつかたは自恥る事なしと思はゞ大ひなるひがことなり。譬ひ恥無くとも恥なきを恥れば恥なしとかや。

三。孝悌を本とす。

ひ千里のあやまりとなる。夫言行は志の衣なり。一たび失すれば則こゝゆ。義と道とは志の食なり。一度おこたれば則うゆ。もし是をして飢へ凍へしめば日々に衰うちてそのたらん事を責るとも、うべからず。淫聲美色は志を伐るの斧斤、宴安佞人は志を害するの鴆毒なり。たとひよく責むともこれを伐るに斧斤を以し是にはましむるに鴆毒を以てせばその生を持つことあたはじ。故に世々の聖人聲色を近付ず。佞人を遠ざけて常に逸遊をいましめたまへる誠に故有ることならずや。夫志は即本心の至德たると古人いへり。仲尼は一個の仁の字を説くと、また一個の志を説と。是をもてこれを見れば仁は志なることを知るべし。仁即志なれば義禮智みな志なり。如何となれば惻隱羞惡辭讓是非皆こゝろの行く處なり。五性みな心の德なり。それ心のゆく所是を志をいへば五性皆これ外に有らんや。本體未發の工夫といへども是の志の外にあらず。力を心術に用ひたるものゝ爲に語りがたし。

二。恥をしるをたすけとす。

西聖公のたまはずや。恥の人における大ひたりと。中庸にもいへり。恥をしるは勇に近しと。人の世にあるを見るに官位俸祿の人に及ばざるを恥るあり。辯佞知巧の人にしかざるを恥るあり。衣食玩好の人に劣れるを恥るあり。兄弟親戚のあらはなるもののなきを恥るあり。夫指に到りては形躰の末枝たとひ一指なくとも何のいたかる處有らん。無名の指屈んでのびざるが爲に齊楚を遠しとせざるものは、何の心ぞや。嗚呼心の人にしかざるを恥るもの我見る事なし。彼のあまたのとは天命の成せる處何ぞ恥るに足らん。只世の中の恥づべき事の中に親を人に討せし人のその仇を報ひずして

なきにあらざれば、一旦おもひたつ事有りといへども、跡より人欲雲の如く覆ひ、本心の月くらくなれば、必怠り安きなり。故にそのおこたれる時にあたりて、耻をもて是をいましめ、これをせむべし。明道先生曰。心習にうばゝれ、氣にかたるゝ事をしらば、志を責むべしと。それ習と氣とは人欲なり。志をせむれば、人欲のおほひ立處に消滅す。その法ひと〳〵人欲おこり出る時は内にかへりみ内に訟て、其の志をせめて曰、これ何の心ぞや、聖人の道にあらず、聖人の心に非ず、聖道に志すことと誠に猫の鼠を捕ふるが如く、念々こゝに有らば、何ぞかく欲心のおこり出るにいとまあらんや、かく淺ましき心にて、書を讀み經を講じ己をあざむき人を欺くや、これ天道の一罪人ならずやと、天君に訟て彼おほひをなす人欲を急度退治すべし。是志をせむるの道にして、孔子のうちにかへりみみづから訟てのたまへる深切の訓なり。孟子求二放心一の工夫、これに同じかるべし。さて志をたもつといふとあり。前の如く志を責むと雖も常にこれをたもつことあたはざれば、志すくやかならずして責をうくる地なし。故に志をたもたんと思はゞ、是を養ひてうやすべからず。こゞやすべからず。養の法は義と道となり。言と行となり。義と道とは天理なり。己に得たる本心の全德なり。事なき時といへども常に目こゝに有りて放つ可らず。わする可らず。言行道義の口體にあらはるものなり。これをつゝしまざれば私欲かたくして本心のひらけず。故に常に心を存してこれを愼み一言妄に發すべからず。白圭のかけたるは猶磨くべし。此言のかけたるはおさむ可らず。一行猥りになす可らず。細行つゝしまざれば大德をわづらはす。一念みだりに思ふ可らず。毫厘のたが

日用心法

心は天理の凝聚、性の生活、人に受て知覺運動するものなり。志は其發出しさゝ向ふ處につきて心を得るものなり。心もと不善なし、故にその發し向ふ處もまた不善なきなり。聖人に志すは志の本躰也。異學に志すは志の惑へるなり。色慾に志すは志の陷る也。曲藝に志すは、志の小枝なり。此四つのものゝ心のゆく所といへ共、志の本躰にあらざれば、君子は以て志とせず。異學と色欲とはいふに及ばず。たとひ官祿ありて貴く技藝に達して世用にたれる者なりとも、不忠不孝ならば、世に容れらるべからずして、貧く賤くかつ他の才能技藝なきものなりとも忠孝の善人なりと呼ばるれば、獻ばずんば有べからず。これを以て見れば忠孝善道は志の眞にして外の四つのものはその全躰にあらざることをしるべし。故凡聖賢の中に專ら志とすといへるはみな聖道にこゝろざす事をいふなり。むかし孔子十五の御とき學にこゝろざし給ふ。三十に立は志をたつなり。四十にして不惑は、志のまどはざるなり。五十六十より七十にして、心の欲する處に從ふて矩を踰へずとのたまふも、此志の矩を踰へざるなり。故に志の一字は初學より聖人に到るまで學問の全躰なり。夫本心は天理の凝聚にして志はその發出歸向の處なれば、志をたつるは本心天理を存するの工夫にして、內外を一にし、本末を合せたるもの也。故に志のたつといへるは、本躰道心の立定りて善を善とし惡を惡としかりにも他事のために移されざるをいふなり。西にかたふき東に倒るゝが如きは、立るといふべからず。その歸向の定れることとは、猫の鼠をとらふるがごとく念々是をはなれざるなり。されば人本心の光り

執齋日用心法序

人有二天然自有之中一焉。心之謂也。故執レ心。則中斯存。大本立矣。而達道亦行。子曰。仁遠乎哉。我欲レ仁斯仁至矣。信哉。故堯舜之傳。孔孟之敎。必執以爲二之要一也。予神山下書齋。扁爲レ執。窃取二諸斯一。以自警。且記二工夫之條目日用行儀於レ冊。就而爲二之説一。書以二國字一。名曰二執齋日用心法一。願不レ負二初心一爾。

元祿十五。歳次二壬午一。四月二十六日。

品目

一。立志をはじめとす。　二。辱をしるを助けとす。
三。孝悌を本とす。　四。氣を養ふ。
五。量を廣ふす。　六。氣象を考ふ。
七。內省。　八。致二良知一。
九。言行念慮忘にすべからず。　十。執レ中。

一。立志をはじめとす。

ましや。故に執るの一字は身と心の樞機にして、はじめて學ぶより聖となるにいたる迄是をもちひてあまりあり。執は操なり秉なり取なり守なり。堯舜禹湯は中を執てもて天津日つぎのおしえとなし、文王は心を小にして緝熙なるの光を四つの海に照らし、武王は敬怠りにかちてひかりをつげるのいさほしを後世にたれり。孔子は操れば存し捨ればほろぶとおしへ給ひ、顏子は取て胸につけ曾子はうしなはん事を恐れて淵にのぞみ氷をふむ思ひをなし、子思子はおこたらん事を悲しびて戒謹恐懼し給ひぬ。孟子の放心を求むとときける生をすてゝ義をとると說、義をあつむるとき、氣をやしなふと說けるより、周子程子の人極をたて、情をさだむる事を述べたまふにいたる迄、皆此一字を出づることなし。かの孤臣孽子の能く達するも心をとる事のかたければなり。凡君父は君父の道をとり、妻子臣妾に妻子臣妾の道を守り、操をうしなはざるにいたるまで、みなこの一字の用にあらずといふことなし。大人のとれる常は此身に備れる德にして、天つちにみちてへだてなきものなり。故に德をとるよ廣からざれば、よしあしをいふにたらず。たゞ善をえらびて是を取るとかの黃牛のつくりかはのごとく、かたからん事をこひねがふのみ。

とゞめえぬ、こゝろのこまの、行末を、いかにあやうき、ものとかはしる。

かのとの巳の春　　まれかたしるす

元祿十四年

あやうきを、いかにとかしる、とゞめえぬ、人の心の、こまのあしなみ

執齋記とは我神山の菴を名附るなり。しかは思どこれをもて世の人にいひかずまへられんとにもあらず。又尋とへる人のまどへらん事を思ふにもあらず。いにしへの聖の常の調度にさへ銘したまへて、見るもの聞くものにつきて、御心の怠りあらんとをいましめ給へるにならひて、我菴も又かく名け侍るならし。いはんや聖の道は其心深くその旨遠して、とみに及ぶべきにあらずといへども、五の道にもるゝ事なければ、其道はちかきに有りて事も亦安きにあり。かくてその矩を求るに此身のおさまれるに過るとなし。此身だに能おさまりぬれば、よろづのとにまどらひて迷ふとなく、富貴貧賤、夷狄患難の境、いづれに入としてか自得せざらん。かのいざ白雲の遠きを思ひ、えもいはがねのかたきに求るはことなる道の敎ならんかし。さればこの身のおさまる事は此心のたゞしきによれり。此心たゞしければ、月日も光をあはせ四つの時も序を同ふし、天地に交りいにしへ今に通ひ、へだてなくさはりなし。心もし正しからざれば、身まどひことたがひ、近くは父母につかへまつるとあたはず。遠くは民をおさむるにのりなくして、貴きはほろぼされ賤しきは罪なはれて、淺ましき名を後の世迄に傳ふ。かなしい哉。夫人の心もとたゞし。いかなればかくあしくなりもてゆく。是心のとがにもあらず。心離れ出て内に住ずなりぬるより、身はうつせみのからとなりて、もろ〳〵の邪の入あつまれる淵とのみなれるなり。かの辻堂の主なければ狐狼野干やうのものゝやどりとなれるが如し。此故に、其離れ出たる心をとゞめ收めて、もとの方寸の内に入來らしむるの外學問の道なしと、文にみへ侍る。夫心を求め收るの道はこれを取るにあらずばなにゝよりてこれをえ

日用心法

元祿四辛巳春。希賢于ㇾ時三十三歳。上賀茂太田明神前岡本采女家に借宅し居る。傳習文錄熟讀して、一旦王學に歸して、其所見を記して、後考へに備ふ。今これを讀て、其見所之未熟を知る。尙深く尋ぬべし。今を後より見ば、又如ㇾ此ならんか。

享保元壬申年十一月

江戸　小石川白山

松平紀伊守君屋敷

執齋記

余少溺志異端。既乃稍知從事正學。而苦於衆說之紛擾疲疹。茫無可入也。一日嘗讀傳習錄。初未曉文義讀之已久。而恍然似有所省者。然後知陽明子之學眞切簡易而粹然大中至正之歸矣。然世之學者徒守書冊泥言語。全無交涉。而不復知競相呶々以亂正學。其已入於異端。此朱門末國之弊。而未有能救之者也。亘可歎夫。然朱門之學。行乎本邦也。蓋二百餘年矣。其植根固。其流波漫。擇其可語者誨之。猶時與余悖。其聲譊々。而况其餘乎。滔々者天下皆是也。余豈敢議之哉。村上氏子明亮年十七。聰敏而好讀書。不拘於時。請學於余。余嘉其志。爲著王學名義二卷以貽之。意使曉其名義也。夫雕蟲篆刻。道之緒餘。而况俚諺之粃糠。豈足以陶鑄至道哉。雖然不曉名義而欲通其道。猶七年之病。求三年之艾。也不亦難乎。若夫直求本原於言詮之外。眞有以驗其必然而無疑者。則存乎其自力耳元祿壬午七月既望平安後學松菴三重新七郎平貞亮識。

儒者にして、書物講師者ばかりをいふにはあらず。所以に貴賤貧富を不レ言、致二良知一三字を標的として、分際相應の職分を盡べし。是乃學問の本旨なり。

王學名義卷之下 終

四句を敎たまふ。夫心の體は即天命の性を云ふ。一念もいまだをこらざるときは、善といふ名さへ尙無。況乎惡のあるべきやうなし。故に無レ善無レ惡心之體と説れたり。意之動とは、心の一念をこりいづるをいふ。於レ是始て善惡の名あり。されば有レ善有レ惡意之動と宣へり。其の一念善惡の上に、是は善彼は惡と明辨る智慧の機あるを良知と云ふ。是故に知レ善知レ惡是良知と見えたり。格物と云は、格は正也と釋、たゞすと譯。物は事の字の義にて、ことゝ譯。凡心に思躬に行ふ事爲をいふ。其事爲の不レ正を正て、心術躬行を正くするを格物といふ。正きは即善なり。不レ正は即惡なり。夫吾心の良知は、天理の明覺處、自然善惡を知といへども、人欲の私に所レ昏て、吾心の良知を自欺て惡を作は、格物の行をせぬ故なり。是故に吾心の良知を開發せん爲に師匠に從て學問をし、聖人の敎を明め、善惡の理を辨、善を行惡を去べし。是こそ爲レ善去レ惡是格物と謂なれ。大凡善と云は五倫五常の道の正を謂、惡と云は五倫五常の道の亂たるを謂と會得べし。畢竟學問の道は、此四句の敎法に約り、四句の敎法は、又致二良知一の三字に極る。此理を知行するを儒者といふなり。然るに世上の人、唯書物を講談し、歷代の事を能記、詩を賦文を屬者を儒者と思るは、大なる謬なり。夫儒は濡也と釋、うるほすと譯。五倫五常の道を以て其の身をうるほすといふ義なり。然れば上帝王將軍より下士氏百姓に至て、吾心の良知を致て、五倫五常の道正く、各々の職分を能勤を、壹是儒者といふべきなり。されば宋景濂の說に、二帝儒而帝、三王儒而王、皐陶伊尹周公儒而臣、孔子儒而師といへり。（二帝は帝堯帝舜を云ふ。三王は夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王をいふなり。）由レ是觀レ之、孰とても五倫五常の道を行ふものは皆

知行合一

知はしると訓、事物の道理を能合點するをいふ。行はをこなふと訓、身に道を修行するをいふ。合一はあはせひとつにすと譯く。儒學にても佛教にても、知行を分て二とす。故に先事物の道理を心に知得て、其後身に行と會得たり。然るに陽明子の說は、知是行之始、行是知之成と宣て、知行合一なりと立たまふ。以レ要言レ之、孝を行ひ弟を行はんと欲ふ心は、是知にして行の始なり。其孝弟の淺深は行得て知る。是行にして知の成就したるなり。譬ば飲食するが如し。飲食せんと欲心ありて、飲食を知る。其飲食せんと欲心は、行の始なり。飲食の味は口に入を待て後に知る。是知の成なり。且夫孝弟を知と云は、孝弟を行得たるを謂。孝弟の理ばかりを曉得たるをいふに非ず。是故に知即行、行即知にして、知行不二相離一して、兩個にあらざれば、知行合一といふ。是乃陽明學の宗旨にて、孔孟の本旨なり。具に傳習錄に見へたり。方に今略して其大槩をいふならし。

陽明子四句教法

無レ善無レ惡心之體。　有レ善有レ惡意之動。　知レ善知レ惡是良知。　爲レ善去レ惡是格物。

陽明子、諱は守仁、字は伯安、姓は王氏にておはします。明朝正德の時代の人にて、文武二道の名將、才德兼備の賢儒なり。南方宸濠とて、さしも强かりし朝敵を滅し、新建伯とひふ國大名となり、天子より文成公と謚を賜て、孔子の御廟に從祀たまふ。陽明は、其別號なり。子は男子有德の稱とて、先儒を崇尊ていふなり。然るに陽明子多の御弟子おはして、つねに學門を論じたまふに、件の

一心の念々不息の上に、吾心の眞知の具るを、易有二太極一といふなり。さて又理氣に就て、天道天命と云者あり。天道に三の義を存す。流行と對待と主宰となり。一に流行とは、天地一元の氣の、一度は陰となり、一度は陽となりて、春夏秋冬と流行天道をいふ。易の繋辭に、一陰一陽之謂レ道と説は是なり。二に對待とは、天地日月山川水火より晝夜の明闇寒暑の往來まで各陰陽對待たる天道をいふ。易の説卦に立二天之道一曰陰與レ陽と説は是なり。三に主宰とは人の善事を修ば福を與へ、淫惡を作ば殃を降ことを主宰たまふ。皇天上帝を天道といふ。尙書に天道福レ善殃レ淫と説は是なり。天命とは天は自然法爾の理をいふ。人力を不レ假してをのづからなるをいふ。命は命令と熟たる字にて、上より下へ物をいひつくるをいふなり。夫善惡を辨へ愛敬孝弟を知る吾心の眞知、天より自然賦予たまふ理なり。されば天よりいへば天命と謂、人の禀賦たるより性と謂。即性命の理是なり。然るに聖人の宣ふ天命は、多は貧富貴賤吉凶禍福生死存亡のあらはるゝ上にて説たまふ。人間の貧富生死の類、皆是天道の所爲にて、人間の作業に不レ及ことにして、不レ招ども自然至るを、天命といふなり。されば吾心の眞知を致て、其道を致て、吉凶禍福の自至は天命なり。毫髮ほども道に不レ合則、人の造作たる所業にて、天命には非ず、然るに世間の凡夫は、諸事の無養生にして疾病、家業を不レ勤して貧乏になり、公儀の法度を犯て刑る類を天命といひ、或は過去の業丁ど其時節到來等といひ、又は躬行を放逸にして、諸事皆天道次第、果報は寢て需といふ。大なる謬なり。それは吾と作爲たる虛事にて、天命には非ずと會得べし。

の動用上に自然善は當レ爲、惡はなすまじき理ぞと知覺る神明なるを、吾心の眞知といふ。此即理なり。されば理は氣中の條理に而、氣を離て外に理行ことなし。氣即理、理即氣なることを辨べし。さて孟子の說に浩然の氣を養と見へたるは、浩然は洪水の出て礙ところなく、悠々と流行の貌なり。人の元來天より稟得たる氣は、至大至剛とて、おほきにつよき勇氣にて、物に奪れ懼る事も屈撓こともなく、天下の一大事に當ても、露ほども動轉することなき故に、浩然の氣と名づくるなり。然るに凡庸の人は、此大剛の勇氣を養ことを不レ知して物に奪れ事に懼て、柔軟と懦弱なるなり。其氣を養工夫は、集義を以て事とするなり。集義とは、集はあつむると訓、義は心に其宜を得るをいふ。諸事萬端に就て、みな義に合するを集義といふ。即眞知を致ことなり。しかれば吾心の眞知を致て事を行ば、大凡天下の事に於て、皆心其宜を得て、自省に少も愧作ことなく。快然ときは、浩然大剛の勇氣生じ來て、萬事に流行て少も恐懼ことなく、若は大國、若は天下の政事に關といへども、少も心動轉することなし。大學に心廣體胖と說、論語に内省不レ疚、夫何憂何懼と說たまふも同意なり。さて理氣の說、天道に就て言ば、易の繫辭に生々之謂レ易といふは氣を說、易有二太極一といふは理を說なり。易は變易也と釋、かはると訓。天地一元の氣陰に變じ陽に易、春夏秋冬と流行て、萬物を生々して無レ息を易といふ。即氣なり。其氣の生々するに、柳綠花紅鳶飛魚躍べき各々の道理を顯す。其神靈を太極といふ。即理なり。さて理を太極と名づくる所以は、太は無上無外の義なり、極は至極の際をいふ。夫理は天地萬物當然の至極なれば、稱美尊崇て號なり。若人の上を以て言ば、

くをいふ。懼はおそるゝと譯、物をこはがるをいふ。愛はいとおしむと譯、物を可愛おもふをいふ。惡はにくむと譯、物の機にいらず嫌忌をいふ。欲はおもふと譯、心に物を貪をいふ。此七情は、人たる者は聖人も凡夫も同く不ㇾ能ㇾ無者にて、又惡者にはあらず。聖人は吾心の良知光明なる故に、七情即仁義禮智の德なり。凡夫は吾心の良知暗昧ゆへ、不ㇾ當ㇾ怒に怒、不ㇾ當ㇾ喜に喜で七情縱逸になり、邪欲日々に熾盛にして、不義無道をなすなり。さて情欲と云者あり。劉晝の說に性之所ㇾ感者情也、情之所ㇾ安者慾也と見へたり。されば情の太過たる者を欲といふなり。夫眼の色を悅、耳の聲を好、鼻の香を愛し、口の味を嗜の類、智者も愚人も同く性の感ところの情なり。然而愚人は情の發こと熾盛にして、一行三昧に安住て、道理の正きを失を欲といふ。是を人欲とも物欲ともいふなり。さて又意と云者あり。情と相似たり。情は內心より自然に發性の動をいふ。意は心より一念の思量分別を起心の動なり。然るに心性情意の四者を合て觀れば、凡事物の來て交感に、これが主宰となる者は心なり、或は喜或は怒者は情なり、其喜怒をなす根本は性なり、此は喜彼は怒べしと思量分別する者は意なりと會得べし。

理氣

理は條理と熟たる字にて、人の日用に當ㇾ行條理をいふ。即父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の叙、朋友の信、是吾心良知の條理なり。氣は孟子に氣體之充也と見へたり。されば目の視耳の聽鼻は齅口は言語味を甞、四肢を動作運用る者を氣といふなり。人の一身頭の頂上より脚の爪端まで至らぬ隈なく充滿てあるなり。善をするも惡をするも氣の動用なり。然して其氣

物を生ずる如く、良知の善念の發り見るゝを云ふなり。さて心と性と名は二なれども實は一なり。天より人にわたふるよりは性といひ、人の天より禀て一身の主宰とするより心と云ふ。只一箇の吾心良知の異名なり。性相近とは、吾心良知の本躰は、聖人も塗人も天より同く禀賦たる至善なるをいへり。習相遠とは、善に習て吾心の良知を致すれば聖賢君子となり、惡に習て吾心の良知を昧ませば小人惡人となるをいふなり。孟子の性善の說は性相近の旨を述たまふなり。さて又中庸に性道教の三を開示たまふ。其說に天命之謂㆑性、率㆑性之謂㆑道、修㆑道之謂㆑教と見へたり。命は命令と熟て、上より下にいひつけるをいふ。勅命宣命の類、皆禁裏より仰下さるゝをいふ是なり。夫性は人心の生理即吾心良知の本躰なり。天道無㆑言といへども、人自然に性具こと、天の命ずる如くなれば、天命之謂㆑性といへり。さて吾心良知の天性に循行ば、自然父子の親君臣の義夫婦の別長幼の叙朋友の信と品々に顯るを率㆑性之謂㆑道といへり。然るに賢人より以下の者は、天性の道に循ことと不㆑能故に、聖人それが爲に教を立て、人々をして吾心良知の本躰に復しむるを、修㆑道之謂㆑教といふなり。而其教の肝要は、愼㆑獨の二字に約れり。獨とは人は不㆑知ども己獨知の地、即吾心良知の本念を指て言なり。愼とは大事にかけて不㆑失やうにするなり。愼㆑獨も亦良知を致の異名と會得べし。情は性の動たる名なり。內心に在ていまだ發動かざるは性なり。事物に觸て感じ動は情なり。情に七の目あり。喜怒哀懼愛惡欲、是を七情といふ。喜はよろこぶと譯、うれしがるをいふ。怒はいかると譯、はらをたつるをいふ。哀はかなしむと譯、物のあはれをなげ

順ならば男女の情も飲食衣服官位財寶悉皆道の用にて人心即道心なり。惟精惟一とは其修行の工夫なり。精の字しらげと訓。米を眞舂にして透徹て青く見ゆるをいふ。されば精の字米片に青と書けり。夫米を精にするは舂簸篩揀を加るごとく、人心の邪念を去て、道心の眞知一になるをいふなり。允執二厥中一とは、人心の邪念なく道心の眞知一になれば、五倫の際より鳥獸竹木の類に接まで、悉皆天然の中に合を謂なり。さて孟子には、四端の心を說たまふ。即道心なり。其說に惻隱之心仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心禮之端也、是非之心智之端也と見へたり。惻隱はいたみいたむと譯。身に染心に切て憐愍なる心底より發をいふ。羞惡ははぢにくむと譯。已が惡を耻かしく思を羞といひ、人の惡を憎く思を惡といふなり。辭讓は物を辭退して人に遜讓をいふ。是非は善を是とし惡を非と辨るをいふなり。此四の心を四端と謂は、端は本始の義にて、物の根本の端始を云ふ。惻隱羞惡辭讓是非の心は、吾心眞知の發見て、仁義禮智の本始なれば、四端の心といふなり。孟子此四端の心を說て、擴充するを修行としたまふ。擴充とは、擴はをしひろむと譯、充は充實充滿と熟たる字にて、みつると譯。物ををしひろげて一ぱいにみつる義なり。孟子の意は人の四端の心あるは、其身に四躰ある如く、人々壹是性具外求を不レ待。されば此心を推廣て、其本躰に充滿せば、仁義禮智の德あらはれ、天地萬物一躰になるべきとなり。四端の心、其名は四に異れども、其實は一箇の吾心の眞知にして、擴充は即眞知を致をいへり。性とは生也とも、理也とも釋。立心片に生の字を書けり。こゝろねと譯。人の天より性具て、吾心眞知の本躰生々して不レ息道理を指て言なり。生々とは天地の萬

く痛と知ごとく、我戀ければ人も同く戀しかるべしと推量するとなり。此歌を以て恕の義を會得べし。而忠信忠恕如同なれども、少異あり。忠信は眞實を盡て行をいひ、忠恕は眞實を盡て人の心を推量して行をいふ。皆致良知の異名なり。さて又大學に所謂絜矩の道は、即恕の事なり。絜矩とは絜は度也と釋はかると訓。矩は曲尺をいふ。凡物の方なるを制には、矩を定規として度如くに、吾心の良知を定規として天下の人の心を推量して、老者を安じ、長者を敬ひ、幼者を恤と欲、人々の分願を遂やうに政事をするを、絜矩の道といふ。是乃天下國家を治る肝要にして、亦致良知の異名なり。

心性情

心はこゝろと譯。一身の主宰にて、人の神明を指て言なり。然れば目の色を視、耳の聲を聽より諸事萬端に應ずる主宰は此心法なり。書經大禹謨に大舜の禹王に告て、此心法の工夫を示したまふに、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中と宣へり。それ心は元來唯一箇にて、兩箇ある物にあらねども、吾心の良知昏昧なりて、見聞に就て、邪念煩惱を起方より、人の心と名づけたり。然れば眼に男女の美色を視て戀慕の闇に迷、耳に淫聲を聽て愛執の心深く、口に滋味を食し、醇酒を飲、身に錦繡の衣服を飾、宮殿樓閣に居て歡樂を窮んと欲心あるよりして、身を喪、家を破、國を滅、天下を亂なれば、人心の發は危殆道理なる故に、人心惟危と警たまへり。吾心良知の本體寂然不動無聲無臭なれば、道の心惟微なりと宣へり。然而人心の外に道心あるに非ず。人心の正き處を、即道心といひ、其正きを失ふ、即人心といふなり。而ば吾心良知の正道理の

決裂にて、聖人の道を失。是故に大賢陽明子致良知の三字を學問の肝要として、吾人の道に入る標準としたまふ。誠に孔孟の宗旨なり。

孝弟忠信

孝弟とは、爾雅の釋話に善事〻父母〻爲〻孝、善事〻兄長〻爲〻弟と見えたり。されば吾心良知の愛敬の發見、眞誠惻怛を致て、親に善事を孝と名づけ、兄に善事を弟と名づく。君臣夫婦朋友の交より鳥獸艸木の類を惠まで、其事千變万化て無量といへども、唯親に事兄に從吾心良知を致れば、遺缺滲漏ことなく、一以貫〻之なり。而親に事まつる孝は即仁なり。兄に從ふ弟は、即義なり。仁義は衆生に博施より名づけ、孝弟は親兄に善事より名づく。畢竟は吾心良知の異名なり。忠信とは二字倶にまことと訓。程伊川の說に、盡〻己之謂〻忠以〻實之謂〻信と見ゆ。此說最善。盡〻己とは吾心の良知の眞誠を内に盡て、毫髮ほども僞妄なきをいふ。以〻實とは、吾心の良知の眞誠を盡たる心の如に行をいふなり。さて又忠恕と云者あり。忠は中心と書。己が心中を盡て眞實なる名なり。恕は如心と書。心の如といふ義なり。己が心の如に人の心を推量する眞實なる名なり。されば己が眞實の心を以て人の心を推量して、其好ことは人も好、我惡ことは人も惡なりと無〻私思て、人も己が心の如くになさんと欲を恕といふなり。往昔大内介義隆卿の夫人、彼卿久在京の時、彼卿の愛妾の許へ讀て贈ける。

身をつみて、人の痛さぞ、しられける、戀しかりせば、戀しかりなん。

此歌恕の義に能合り。身をつむとはつめるをいふなり。されば吾身をつめりて疼ければ人の身も同

良知の表德號と會得べし。さて此仁義禮智信の五者、是を道德と訓。其所以は道はみちと訓、人の常住往還する街道をいふ。此五常は人の貴賤賢愚無隔、常住不斷に由行べきこと、帝王の貴より士民の賤まで、同く通行街道の如くなれば、是を道といふなり。さて德は得也と釋、うると訓。是に二義あり。一には五常の理を天より自然に賦與て、我有となりえたるをいふ。即大學に所謂明德の類是なり。二には五常の理は天性たれども私欲に蔽れたるを學問をして躬に行心に得て、我有となりたるをいふ。即大學に所謂盛德の屬、論語に見へたる德の字多は是なり。さて又大聖孔子、論語に於て唯仁の一字を說たまふ。仁人の心也と孟子に見へたる如く、良知愛敬の本心を指て仁と言なれば、唯仁を擧て仁義禮智信を包、萬善萬行の總名とす。其時の人利根にして其理を能曉得たり。亞聖孟子の時は、周の代の末に方て、戰國の世といひて、合戰のみを爲て、聖人の道を知る人鮮く、世隔時違て人鈍根になり、且楊朱墨翟等いふ邪說暴行世上に流行し故、仁義の二を並說たまふなり。而仁義を擧れば、禮智信は其中に在。其所以は禮は仁義を行ふ作法の節文なるをいふ。智は仁義を行ふ事爲道理を分明にわきまへて能守て不去をいふ。信は仁義を行て眞實にして移變ことなきをいふ。然れば仁義を言ば、五倫五常より萬善萬行の德に至て、兼備ざることなし。是故に易の說卦に立人之道曰仁與義と見へたり。さて漢朝に至て時世愈衰、聖人を去こと遠ゆへ、仁義禮智信と詳に並言なり。然るに世間の學者、仁義禮智信の五は、唯一箇の善心の良知の表德の號なるを不知して、徒に心の外に之を求て、其眞を失、其本を遺、事物の末の道理を窮格を詮とし、其學問支離

上帝王より下士民に至て、常住不斷に行べき道にて、古往今來に不ㇾ變の德なれば、五の常と謂なり。又五性は人間の悉皆天より禀賦たる本性なる故なれば、如ㇾ此いふなり。夫仁の字の意、一字を以て難ㇾ言。されども、論語に仁者愛ㇾ人と見へたれば、慈悲恩愛の德と會得べし。いつくしみと訓べき歟。されば吾心良知の慈悲の發見、先父母を孝養して、夫婦兄弟一家一類を和睦し、一切の人民を親愛て、禽獸蟲魚艸木の類に至て憐愍て、遠も近も內も外も至らぬ所なく、天地萬物一體となりたる德を仁と名づくるなり。義は宜也と釋よろしと訓。譬ば能物を斬利刀の如し。圓くすべき物は圓く、方にすべき物は方に截制、長短曲直それ〳〵に宜く適當やうに裁制なり。吾心良知の截制の發見當ㇾ爲を爲、不ㇾ當ㇾ爲を不ㇾ爲、當ㇾ生に生、當ㇾ死に死、受べき理なれば天下をも受、受まじき道ならば一芥をもうけず。諸事萬端に就て的當と相宜く行德を義と名づくるなり。禮は理也履也と釋。理はすぢめと訓。履はふむと訓。事物の條理をふみをこなふといふ義なり。吾心良知の恭敬の發見貴賤親疎の等級分際相應に時宜作法分明にして、少も紊亂ことなく、其節文條理相當て履行を禮といふなり。智知也と釋。さとるとも、しるとも訓。事物の道理を知覺の義なり。吾心良知の是非するの發見、天下の道理に於て、是非分明に善惡をわきまへ、少も疑惑ことなく道理を能守て不ㇾ失を智といふなり。信は實也と釋。まことと訓。眞實にして毫髮ほども虛僞なきをいふ。吾心良知の眞實の發見、仁義禮智となりて、少も虛僞なく、眞實なるを信といふなり。天下の善多といへども、天下の理多といへども、皆此五の德に含。されば聖人是を以て敎化の肝心としたまふ。畢竟は吾心の

木の類至、凡意の所在は、悉皆物とするなり。格は正也と釋、たゞすと訓。其不正を正して、正に歸するを謂。其不正を正は、惡事を去をいふ。正に歸するは、善事を爲を謂なり。凡吾心良知の所」知の善を誠に好と欲ども、其意の所在の物に就て、實にこれをすることなければ、物いまだ格さずして、善を好の意いまだ誠ならず。吾心良知の所」知の惡を誠に惡と欲ども、其意の所在の物に即て實にこれを去ざれば、物いまだ格さずして、惡を惡の意いまだ誠ならず。故に吾心良知の所」知の善に於ては、其意の所在の物に即て實にこれを爲、吾心良知の所」知の惡に於ては、其意の所在の物に即て實にこれを去。知」是則其物格て其知至り、少も自欺ことなくして、意の所」發、善を好、惡を惡こと、十分に眞實にして意誠なり。意既に誠なれば、是に由て心正く、至善の本體に復べし。心既に正ければ、是に由て視聽言動皆禮に合て、身修べし。然れば士庶人は吾明德を一家に明にして家齊り卿大夫諸侯は吾明德を一國に明にして國治り、天子は吾明德を天下に明にして天下平になり、天地萬物を以て一躰とするなり。而格物致知誠意正心修身は即明明德にて、吾心の良知を已に致なり。齊家治國平天下は即親民の至極に安住し、吾心良知の本體に復なり。されば其名は雖」異、其實は只一個の吾心の良知を致に究竟なり。是乃天地萬物を一躰とする大人の學にして、堯舜の正傳、孔氏の心印、之を號て大學と曰なり。諸賢大儒の中、惟陽明子の說獨其宗を得たり。故に其旨を述て大學說をなす。

仁義禮智信　仁義禮智信、此五者を五常とも號、又は五性とも謂なり。五常とは常はつねと訓。

正せんと欲ば、必先誠意に在なり。誠意とは、こゝろばせをまことにすと譯。誠にすとは、表裏如レ一に眞實にして、少も虚僞のなきをいふ。然れば其一念の意の發こと善なれば、之を好こと好色を好如くに、眞實に好、其一念の意の發こと惡なれば、之を惡と惡臭を惡如くに、眞實に惡を、意を誠にすといふなり。然而其善惡の分を明にせざれば、眞妄錯雜て、眞實に善を好、惡を惡こと不レ能。故に其意を誠にせんと欲ば、必先致知に在なり。致知とは、知は人の天より性具（うまれつき）て、自然靈昭不昧にして、善を見て善と知、惡を見て惡と知、萬の道理を知覺なる吾心の良知を指て言。致はいたすと譯。吾心の良知の光明なるを十分に明にし盡すをいふなり。凡そ一念の意の發善なれば、吾心の良知自之をしり、惡なれば亦知レ之。されば善惡を能辨て、其意を誠にせんとするには、惟吾心の良知を致べし。其所以は、意念の發、吾心の良知既に其善を知。然を誠に好むことなくして、背て之を去は、是善を以て惡として、其善を知る良知を欺昧ますなり。意念の發、吾心の良知既に其惡を知。然を誠に惡ことなく、復踏でこれをするは、是惡を以て善として、其惡を知る良知を欺昧ますなり。如レ是則これを知るといへども猶不レ知に同。いかにして意を誠にせんや。然ば今其良知の知る善に於ては誠に好、惡に於ては誠に惡ときは、其良知を自欺昧ますことなくして、意誠になるべきなり。而其良知を致さんと欲に、響や影の如くに事迹なきに非ず。必實に其事あり。故に知を致は、即格物に在なり。格物とは、物は事也と釋、ことゝ譯。凡意念の發て所在に必其物あり。たとへば意の發、親に事まつるに在ば、親に事まつる、便是一物なり。夫婦兄弟朋友の交より、鳥獸蟲魚草

身、齊家、治國、平天下と說たまへり。平天下とは、あめがした、たひらかにすと譯。吾心の良知を致て、一體の仁を以て天下の人を親て、政道正く、民を養法を立、稅斂を薄し、刑罰を省き、賢人を用、惡人を舍、學校を建て、孝弟の道を專し、[illegible]天下の人、皆和睦して、平等に憾なきやうにするをいふ。即吾明德を天下に明にするなり。然に天下の本は國に在なれば、天下を平にせんと欲ば必先治國に在なり。治國とは、くにをおさむと譯。吾心の良知を致て、一國の人を親て、家々戸々に父子相親、兄弟夫婦相和睦して少も亂たる處なきやうに、政道をするをいふ。即吾明德を一國に明にするなり。然るに國の本は家に在なれば、其國を治んと欲ば、必先齊家に在なり。齊家とは、いゑをとゝのふと譯。吾心の良知を致て、一家の人を親て、父子兄弟夫婦相和睦して、上下相親、一家の中、悉く理に從て、少も所レ不レ齊なきをいふ。即吾明德を一家に明にするなり。然に家の本は身に在なれば、其家を齊んと欲ば、必先修身に在なり。修身とは、みをおさむと譯。吾心の良知を致て、目に非禮の色を不レ視、耳に非禮の聲を不レ聽、口に非禮の言を不レ言、身は非禮の事に不レ動、皆常道理に從をいふ。然に目の視、耳の聽、口の言、身の動、其本は皆心より所レ遣なり。故に其身を修んと欲ば、必先正心に在なり。正心とは、こゝろをたゞしふすと譯。正とは、偽にまろくにすといふ義なり。然に心は寂然不レ動ときは、天命の性にして純粹至善良知の本體なり。（天命の性とは、天よりひとのうちにむまれつきたる良知の心をいふ。純粹至善とは、もつぱら善にかたよりにて、少も惡の雜なきをいふ。）されば心の本體は不レ正處なし。何に由て更に之を正とを用ん。雖レ然、一念發動て意と云。此時始て善惡の幾分て、不レ正處あるなり。故に其心を

己に對する者を言。又鳥獸艸木の類をも包て看べし。親は、したしむと譯。いとおしみねんごろにするを云。即天地万物一躰の仁の用なり。然ば吾父を親て人の父を親、及天下の人の父を親ば、吾仁實に吾父、人の父、及天下の人の父と一躰になりて、孝の明德明なり。吾兄を親て、人の兄を親、及天下の人の兄を親ば、吾仁實に吾兄、人の兄、及天下の人の兄と一躰になりて、弟の明德明なり。君臣夫婦朋友より鳥獸蟲魚草木の類至實に之を親て、吾一躰の仁の用を及して、吾明德始て明にして、實に天地萬物一躰となる。是を親民と謂なり。故に親民は、明明德の實事にて、明德を明にするは、民を親むうへに在なり。さて明明德は、天地萬物一躰の躰を立るなり。親民は、天地萬物一躰の用を達するなり。（躰用とは、躰はすがたと訓、用は其はたらきを云。譬ば手はその躰なり。字を書畫を寫は其用なり。達すとは。ゆきとゞかぬ所なくをよぼすをいふ。）止至善とは、至善は吾心良知の本躰、天然の中をいふ。（天然とは、人の力を不レ假、をのづからなるをいふ。中は、過不レ及をなく、適當したる道理を云ふ。）是明德を明にし民を親む根本の極則なり。（極則とはゝめあてを云。）止は、とゞまると譯。良知の本體を全して、私欲妄念の爲に遷ざるを云なり。夫良知至善の發見、萬事萬端に應じて、是非、善惡を明覺して、自天然の中あらざるとなし。其天然の中に安住するを止至善と謂なり。さて民を親て明德を明にするは、吾心の良知の發見を昧まさずして、天地萬物の一躰の仁、良知の本躰に復らん爲なれば、止至善を明明德親民の本とす。譬ば物の方圓を作に規矩を本とし、物の輕重を料るは權衡を本とし、物の長短を知るは尺度を本とするが如し。而ば明德を明にするは、民を親むに在、民を親むは、至善に止に在と知べし。然に辱も大聖孔子、此明明德、親民、至止善の道を、詳に演たまふに、格物、致知、誠意、正心、修

王學名義卷之下

松菴　三重貞亮著

大學說

大學は、古昔より天下國家を治る道にして、孔門相傳の書なり。大學は大人の學を謂。大人は天地萬物を一體とする者なり。其學問の道は、明明德、親民、止至善に在なり。夫明德は、吾心良知の發見、自然靈昭不昧にして、天地萬物一體の仁なる者なり。されば大人、天地萬物を一體とするも、別に思慮を起に非ず。吾心良知の仁、元來天地萬物と一體なり。唯大人のみに非ず。小人も亦同。所以に孟子の井に入を見て必怵惕惻隱の心あり。是其仁と孺子と一體なればなり。孺子は猶人と類同き者なり。鳥獸の哀鳴觳觫を見て必不忍の心あり。是其仁と鳥獸と一體なればなり。鳥獸は猶知覺ことある者なり。艸木の摧折を見て必憫恤の心あり。是其仁と艸木と一體なればなり。艸木は猶生意したる者なり。瓦石の毀壞を見て必顧惜の心あり。是其仁と瓦石と一體なればなり。此皆天地萬物同一氣にして、吾心良知の明德に相通する故なり。然而小人は、目に色を好、耳は聲に蕩し、鼻に香を愛し、口は味を嗜、身に安佚を欲するより、私欲妄念を起し、物を殺、類を把、（物は鳥獸艸木の類を云、類は人倫をいふなり。）甚き時は父子兄弟相殘に至て、一體の仁を亡なり。故に夫大人の學をする者は、其私欲妄念の蔽を去て、其明德を明にして、天地万物一體の仁に復而已耳なり。是を明明德と謂なり。親民とは、民は、たみとも、ひととも訓。家の父子兄弟より、天下の人に至て、

其先王の神靈を祭たまふは、天子の孝の大概なり。諸侯の孝行は、吾心の良知の愛敬を致し、心術躬行正く、公儀の制度を謹守、上卿より下士までそれ〳〵職分を授、かりそめにも無禮をなさず、政道正ふして百姓を憐愍、所ㇾ告なき寡婦孤子の類を育、士も庶民も悉皆歡心あらしめ、其國長く富榮て、先君の神靈を祭は、諸侯の孝の大概なり。卿大夫の孝行は、吾心の良知を致て、心術躬行を正く修て、倉卒の行跡も人の儀則となり、一の言語も無益ならぬやうに能愼、君の爲め、國の爲めとのみ志て、私の經營、利欲の心、露ほどもなく、治世には天下泰平國土安穩の政道に與り、亂世には計畧を運し、軍兵を指揮、國を破り其官職を能守、先祖の靈を祭は、卿大夫の孝行の大概なり。士の孝行は、吾心の良知を致て、君を愛敬し二心なく忠節を守、其職分を勤、我より高位長者を敬、傍輩の交際混和に輯睦、軍に臨ては、武勇を厲、勳功をし、其知行俸祿を能保て、先祖の靈を祭は、士の孝の大概なり。庶人の孝行は、農夫、百工商賈各吾心の良知を致て、其産業を能勤、米穀を積金銀を蓄、財寶を節用て妄と費となく、心術躬行を謹愼、公儀を畏、法度を守、吾身妻子の事を第二とし、父母の衣服食飾を第一とし、心力を竭て、父母の心安樂にして、万事皆歡たまふやうに、能孝養を庶人の孝とするなり。如ㇾ此天子諸侯卿大夫士庶人と其等級の高下に由て、五等の孝と分れども、畢竟各一箇の吾心の良知を致より外はなし。大凡聖人賢人の學問を論じたまふに、時に隨、事に就て其語には、或は不同なる如くなれども、唯致二良知一の三字に究竟と會得べし。

王學名義卷之上終

長久なり。而至德要道を約ていへば、愛敬の二に究れり。愛は、したしみむつまじきを謂、敬は、尊崇て輕慢ざるをいふ。五倫を以ていへば、親を愛敬するは、最初一念の良知の根本なれば、元來の名を不レ更、即孝といふ。それより交境によつて其名を建て、愛敬の心を以て君に事まつりて二心なきを忠といひ、臣下を使ニ禮義正きを仁といひ、子を善教るを慈といひ、兄に和順なるを悌といひ、弟に能善を責を惠といひ、夫に善事て貞節を守を順といひ、婦を能倡て義を立るを和といひ、朋友に眞實に交を信といふなり。總之天下の事、千條萬端にして無レ窮けれども、畢竟一箇の吾心の良知、愛敬の誠を致し擴充より外はなきなり。さて經も大聖孔子孝經を説給に、五等の孝をわかたれたり。五等とは、等は等級と熟たる字にてしなと謂。物の品の差別たるを云ふ。人間の上下の階級、一には天子、天下を所レ知食ニ御位なり。二には諸侯、國を治る大名の位なり。三には卿大夫、天子諸侯の命を受て、國天下の政事をする家老執權の位なり。四には士、さぶらひと謂。卿大夫に屬て諸役を勤る人をいふ。五には庶人、農夫百工、商賈の三を指ていふなり。吾心良知の愛敬の孝德は、貴賤各皆て同一體なれども、但此五段の階級あるゆへ、その大小高下に因て分際相應の孝行あるを、五等の孝といふなり。夫天子の孝行といふは、吾心の良知愛敬の誠を致して、天下の標準となり、賢人を舉て、天下の政をする職とし、善人を擇て、其器量に從て、官位職分を授、小國の臣下をも輕侮ず、天下の政事法度正く、萬民を子の如くに惠、萬國の人、其德義に變化して、毎レ家に孝子となり、毎レ國に忠臣となりて、天下統一に治り、諸侯より庶人まで、少も憾なく皆歎しめて、

と說、論語に內省不ㇾ疚、夫何憂何懼と說たまふも同意なり。さて理といへども、師匠我を敎る事なければ、吾心の良知は具ながら、それを致ことを知らず、迷の心日々に深く、不忠不孝無禮無義をなし、禽獸に近くなり、身を失、家を破、國天下をも亂なり。されば師匠の敎を受、吾心の良知を致て、三綱五常の道明なれば、身を立、家を治、國天下をも安穩にす。故に師の恩の深きこと、君父の恩に同きなり。君父師の三俱に同き恩なれば、是に事まつること、心力を竭て愛敬し、家にあるときは、父の爲、奉公すれば、君の爲、敎を受とき、師匠の許に在る、師匠の爲、一命をも惜まず事まつるなり。さて君父師の讐を報は勿論の事なり。然ば君父師の恩は、同理にて、高下なく、愛敬の誠を盡て事まつるを三事といふなり。

孝

孝は、帝王の貴より、士民の賤まで、一切て出生と同く父母を愛慕、最初の一念吾心の良知をさして號なり。古の聖人の身を修、家を齊、國を治、天下を平にしたまふ敎の法、其事多けれども、吾心の良知、最初一念の孝を致て、擴充より外はなし。故に大聖孔子、孝を以て至德要道と曰たまふなり。至德要道とは、仁義の德、五倫の道の肝要といふ義なり。此至德要道を以て君臣父子夫婦兄弟朋友に交ば、即親義別序信となりて、能和睦して、上下俱怨あることなし。是を以て神明を祭ば、神明納受し、天下に施ば、天下平になり、國を治れば國治り、家を齊れば家齊、身に行ひ心に守ば、身脩心正なる。されば庶民は財寶を蓄、其身安樂になり、士人は、官位を昇、美名を彰、卿大夫は家を興、諸侯は一國の榮華を受、天子は萬乘の位を保、四海の富を得たまひ、子孫

すべし。從兄弟、再從兄弟、及內兄弟、甥、新婦の類、皆兄弟の列なり。分際に愛敬すべし。

朋友有信

朋友二字、俱ともと訓、然れども朋は、同類をいひ、友は、志同して親をいふ。信はまことゝ訓、少しも虚僞なく眞實なるをいふ。朋友の交に、吾心の眞知を致て、眞實に顧て互に愛敬するを、朋友有信といふなり。夫朋友の交、志不同ども血脉あるか、又は同鄕隣家、或は同官同職等の類、親から必ず相交、さて行動々相交同志の心友、品々にて不同といへども、其等級に應じて、義理に從ひ道を立、當座にして其氣の動用上の自然善は當爲、惡はなすまじき理ぞや。是等る明明なるを、吾心の眞知といふ。此眞理なり。されば理は、氣中の條理にて、氣を離て外に理有ことなし。氣卽理、理卽氣なることを悟べし。さて孟子の書に浩然の氣を養と見えたるは、浩然は、洪水の出て溢るところなく、悠々と流行の貌なり。人の元來天より稟得たる氣は、至大至剛とて、大きさにつもりなき勇氣にて、何に當れ難き事も屈撓ことなく天下の一大事に當ても、露ほども動轉することなき故に、浩然の氣と名づくるなり。然るに凡庸の人は、此大剛の勇氣を養ことを不知して、物に奪れ事に怖て、柔懦と懦弱なるなり。其氣を養工夫は集義を以て事とするなり。集義とは集は、あつむると訓、義は心に其宜を得るをいふ。諸事萬端に就て、みな義に合するを集義といふ。即良知を致ことなり。しかれば吾心の眞知を致て事を行は、大凡天下の事に於て皆心其宜を得て、自省に少も慚怍ことなく快然ときは、浩然大剛の勇氣、生じ來て、萬事に流行て、少も恐懼ことなく、若は大難、若は天下の變事に遇といへども、少も心動轉することなし。大學に心廣體胖

ひ智慧才幹ありとも、それをおにあらはさず、柔順を本とし、夫死して後、再男に見ゑなきは、婦たる人の道なり。如ㇾ此夫婦倶に吾心の眞知を致て、和義を以て婦を倡、順正を以て夫に從、男女內外の差別正きを、夫婦有ㇾ別といふなり。

長幼有ㇾ序

長は、をとなしき人をいふ。吾より前に生たる人なり。幼はいとけなしと訓。吾より後に生たるをいふ。即兄弟の事なり。序は、つゐでと訓。前後の次第をいふなり。

兄は惠を以て弟を愛し、弟は悌を以て兄を敬、吾心の眞知を致て互に愛敬し和睦するを長幼有ㇾ序といふなり。夫弟の兄に從事る行の名を悌といふ。他人の年老官位尊貴には敬順べき理なり。况乎親の身を分て、吾より前に生たる兄なれば、敬順べき事勿論なり。されば父に次で愛敬すべきは兄なり。其心力を竭て事べし。さて兄の弟に交惠に、友愛の二義を兼たり。愛は親の子を愛する如く慇懃に親をいふ。友は朋友の切磋琢磨する如くに、善を勸惡を警を云なり。他人の年少官位賤に交にも、懇切にすべき理なり。况乎弟は親の血を分て我と一躰の道理なれば、友愛の惠を施べき事勿論なり。然に迷の凡夫、多は兄弟の交、他人より疎遠なり。微少なる欲の爭訟にて、讐敵の思を結もあり。兄弟は他人の始とやらんいふ、飯匙(しやくし)定規なる雜談を深信じ、吾身を吾身にて戕、血で血を洗ありさま、愚癡蒙昧の至極なり。同親の身より生たれども、前後の次第により、兄は貴、弟賤、自然の序なり。兄弟倶に吾心の眞知を致て、惠悌の道明なるを長幼有ㇾ序と謂なり。而兄をいへば女兄は其中にこもり、弟をいへば女弟は其中に兼たり。女の兄弟なりとて、輕慢べからず。慇懃に愛敬

なり。如‌此君臣ともに善心の真知を致て、仁愛を以て臣を使、忠節を盡て君に事を君臣有‌義と云なり。上帝王より下工人まで、貴賤の異あれども、主人奉公人の交際の道は同理と知べし。

夫婦有‌別

夫はをつとゝ讀、婦は女と讀て、夫婦と書てめをと讀なり。上帝王より下士民まで、めをと相連たるを夫婦といふ。別は、わかちと讀‌男女の差別の立たるをいふ。夫は和義を以て婦を倡、婦は貞正にして夫に從、善心の真知を致、男女別正く、互に愛敬し和合するを、夫婦有‌別といふなり。夫夫の婦を倡和義といふは、和は親愛に和睦をいひ、義とは、道理に從て裁判するをいふ。若夫婦の交は、愛欲の和に溺、義理の裁判なきに由て、或は父子兄弟一族の親をも肯隔られ、黨類を生、又は家を破、國を亡の類、古より其數多し。或又夫婦の際そむき〴〵にして、作法見苦きものあり。是皆愚の凡夫の業なり。夫婦は先祖の嗣、祭祀の助、子孫相續の所寓なれば、親睦すべきこと勿論なり。然れども義理の裁判なければ、愛欲の私に溺て、家の作法亂、夫婦の禮義を失ゆへ、和義の二を以て夫の婦を倡道とす。さて婦の夫に事る順正といへば、順は心志柔和に言語顔色、起居動靜まで、柔順に承を云。正は義理作法を正く守、少しも隨意もなく、淫風なることもなきをいふ。婦は夫を天と頼、夫の家を吾家とし、夫婦一体の理なれば、我を生父母を父母とせず、夫の父母を父母とす。されば舅姑に孝行の誠を盡を順正の第一とす。さて其心術躬行を謹、萬事一切夫の命にしたがひ、少も隨意をせず、衣服飲食の事を專一と務、家を齊、子孫を育、吾親類より先夫の親類を懇懃にし、一族を和睦し、家人を憐愍、心をつけて恩を施、たと

日本倫理彙編

り。其階級に由て、奉公の品は大小あれども、忠を行ふ心志は同理なり。君の恩は親の恩に齊き重恩なれば。親に事まつるごとく心を盡て事べし。親なければ此身を産育ず、君なければ此身の養なき故なり。夫臣下の階級に由て大忠小忠あり。家老出頭人の忠は、たとひ君の嗜好ことにても、悪事ならば必止、又嫌ことにても、善事ならば必勸、君の心術躬行の道に合、政道正く國家繁昌するやうにと、心を盡を大忠といふ。諸士の忠は専一に君を敬ひ、是非善惡を擇ず、惟命にしたがひ、身命を顧ず、其職分を勤を小忠といふなり。さて郡守縣令の職分は、民百姓の支配を掌なれば、年貢夫役などの事、君の爲にも民の爲にも善やうに料揀し、吾身の私欲を少も構べからず。毛見催促の類、百姓の煩にならぬやうにすべし。凡庸の縣令は、唯税斂を重聚て民の困窮に及を顧ず。君の府庫に滿を君の爲と思り。聚斂といひて、大惡事なり。若夫聚斂を行、則民百姓困窮して方々へ離散になり、耕作の人鮮、地より生物漸々に減、民の怨日々に深、蚤の息さへ天に昇といへは、ついには君の爲却て惡からん理なれば、忠とはいふべからず。さて公事沙汰あらば、理非をよく判斷して、少も贔負偏頗なく、内縁賄賂に惑べからず。而又軍忠を以て論ぜば、二心なく身を捨、禮義たゞしく情愛深、英雄の心を服、軍兵を懐、籌策を運し、敵を滅して勳功を立を軍大將の大忠とす。一命を顧ず先鋒をして、首を取り敵を擒を士卒の忠とす。若夫庶人ならば、其國に居て産業を勤、身命を養は主君の恩徳なれば扶持を蒙ざるも、草莽の臣とて臣下の中なり。國の政事法度を能守、其家業を勤、年貢公役を懈怠せず、國君を敬畏て、假にも悪樣に陰沙汰をもいはざるは、庶人の忠

も、皆善心良知の自然の愛敬を致を父子有親といふなり。若夫曾祖父母、祖父母、伯叔父母、伯叔姑及び外祖父母、伯叔舅、姨母の類、倶に父の列なり。皆愛敬の誠を致すべし。孫曾孫、姪姪女、外孫從姪の類、倶に子の列なり。皆慈愛の仁を致すべし。

君臣有義

君はきみと訓す主人の事なり。臣はつかへびとゝ訓。奉公人をいふ。上帝王將軍より、諸侯、大夫諸士、農夫、百工、商賈に至て、其位の尊卑品々なれども、一切て主人と頼方は君といひ、仕官するものは、皆臣といふなり。義は相互に義理合を立るをいふ。君は仁禮を以て臣に交、臣下は忠節を以て主君に事、善心の良知を致を君臣有義といふなり。夫君の臣に交仁禮といふは、仁は義理に從て愛するをいひ、禮は其階級の道理に從て慢ざるをいふなり。臣下の官位高下ありて、品々に使道理無窮といへども、畢竟は仁禮の二の外なし。所產の貴賤によりて、君となり、臣となれども、元來は皆天地の子なれば、我も人もみな兄弟と同理なり。されば吾扶持せぬものには、情深く大切に思、少も慢べからざる道理なり。大臣として、國の家老たるものは、國の鎮なれば、高位大祿をあたへ、大概の事は委任、禮義正く愛敬すべし。但罪人の刑戮、善人の褒美、及び國の威勢、民を慈む恩惠をば、假にもあづくべからず。大夫以下の諸士其器量を見分てさしつかひ、分際相應に愛敬し、忠節の大小に隨て恩賞を與べし。農工商賈は、國の寶なれば、憐愍を垂、其利を得て、其業を得やうに政をなす。是君の行ふ仁禮の大概なり。さて臣の君に事る忠は、少しも二心なく專一に君の爲のみ思て、吾私を顧ず、分際の職分を勤、一命をも棄て奉公するをいふな

品々ありて敎の法一概に論じ難けれども、先學問をして我心の良知を明かにするを本とす。縱ば、藝能の名譽富貴の榮華なりとも、吾心の良知晴昧して、心術躬行あしくば、天道に棄てられ人間に憎れ、一二代の中には滅べし。縱滅ずとも、ありがひなき人品にて、却て先祖の辱なるべし。迷の凡夫は唯眼前一旦の富貴名譽を至極と思て、吾心良知の無上靈寶を知らず。當坐の僥倖より外はいらぬものと思は、無下にあさまし。而子孫を敎は幼き時を本とす。古は胎敎とて懷孕中より敎あり。それは母親の行儀、起居動靜飮食まで正く、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽ず、朝夕唯聖人の道を見聞なり。如ㇾ此ときは生る子形容端正して、智慧才學人に過なり。然に今時の人は、口にて演說ばかりを敎と思敎の實を知らぬ故、幼時は敎なきものとおもへり。敎の實は、吾身に吾心の良知を致て、人の自然變化するを云なり。國々の水のかはりにより、人の氣質少づゝ異なれども、語つきに元來京田舍の差別なきゆへ、赤子より京に育れば關東の產も京語になり、又關東に育れば、京の產も關東語になるが如く、幼者の心術躬行も父母乳母に自見習聞移ものなれば、父母乳母の德行を子孫に敎る本とす。されば父母の心を正ふし身を修、乳母の人品を選べし。子八九歲にもならば、天性利根なるには大學中庸の首章、及び陽明子の大學問を讀せ、時々は其道理を說聞せて、道を悟る基とし、急用なる藝能を習べし。又稟賦愚鈍なるは、大學の道理をいつとなく話聞せて、吾心の良知を失はぬやうにすべし。十五六歲にならば、師匠と朋友を擇を敎の眼目とす。さて家業は、其器量隨て、士農工商、何にてもさだめえらぶべし。如ㇾ此するは親の子を慈愛する大方なり。さて親の慈も子の孝

いかにも愉色を致し、若疾病あれば良醫を求て療治をなさしめ、看病の力を竭し是孝養の大概なり。倘も父母不義あらば、何となく父母の合點したまふやうに諷諫し、若合點なくば、明に是非善惡を演說て諫爭すべし、父母悍ずして怒をなさば、別して愉色をなし、孝を起し敬ふべし。かく幾度も諫爭し、或は親の心を翻て曉諭せしむべし、親の心術躬行の道に合やうにするを孝行の第一とす。而父母の天命限ありて、永別離の憂に丁ときは、悲哀の誠を盡し、禮法を以て葬をなし、喪に居て哀戚の情を盡すべし。（喪は本朝にいふ服なり、闋はことをはることなり）喪さて喪闋は祠堂を建、父母の神主を置、（祠堂は俗にいふ魂屋の事、神主は俗に位牌の類なり）朔望俗節、（朔はついたち、望は十五日、俗節は節供なり）忌日の祭質に敬の誠を盡て、其存生の時のごとくすべし。如此吾心眞知の孝行を致は、子の親に事まつる道の大概なり。然るに不幸にして、母親父より先に死し、或は父の心に背て母を出し、繼母をむかへなば、繼母を實の吾身を産たる母と思て孝行すべきこと勿論なり。繼母も亦繼子を吾産たる子の如く慈愛あるべき道理なり。而ども迷の凡夫は、なさぬ中なりといひて、他人の思をなし、互に愛敬せず、只憎惡をいひたて交惡なり、遂には讐敵の如くになりゆく。誠にあさまし。さて親の子を慈愛するは、先學問の師を選て仁義の道を學習し、賢人智者となすを本とす。當座の苦勞をあはれみ、子の願の隨に育を姑息の愛といふ。其子隨意になりて人の道を辨ず、禽獸に近くならば、慈愛に似て惜といふものなり。且吾身は親にうけたれば、即親の身なり。子を惡く育は、親の身を惡するに同。故に子を敎ざるを不孝の第一とす。夫家を興も廢も皆子孫なり。子孫を敎ずして、其繁昌を求は、網なくして魚を捕、弓なくして鳥を射と欲が如し。人の氣質

日本倫理彙編

妾を娛べきものなく、子に分與べき身なし。富貴も妻妾も子も、倶に此身ありての歡樂なり。されぱこの身を父母の産育たればこそ、富貴妻妾の觀樂を受け、子を養育して老後の便ともすれば、皆根本は父母の恩德なり。誠に父母の恩は、廣大無類にて恩德の大根本なれば、先父母を愛敬するを本として、兄弟一族より一切の他人及び禽獸草木の類まで各に愛敬を行を孝となづけ順德といふ。根本の大恩を忘れて、父母を愛敬せず、枝葉の小恩を報ぜんとて、他人を愛敬するを不孝といひ悖德といふなり。而親の慈悲あさく無道の事あるによつて不孝なるを、迷の凡夫宜もと思ふは、迷の中の惑なり。其所以は禮義正く情深くば、半面不識途人なりとも、睦く思ふべし。然らば親の慈悲ふかく道あるに孝あるは、行易ことなればさして孝行と言難し。親の慈悲あさく無道なるに孝なるこそ、誠の孝行とはいふべけれ。大舜の親御は、瞽瞍といひて、事の外なる惡人にて、大舜を惡み殺さんとせられしかども、大舜孝行を盡したまひしかば、後には善人と成たまふ。されば大舜の孝行を法とすべし。限なき恩ふかき親と毛頭恩なき途人と同思をなすは、あさましき事なり。夫孝行の條目數多あれども、畢竟は二箇條に約る。第一は父母の心を安樂にするなり。第二は父母の身を敬養なり。父母の心を安樂にするは、先吾心術躬行を正して、品々の家業を勤、財寶を妄に費ず節用ときは、父母の心、子の貧なり患難禍災にあふべき恐なし、妻子臣妾をよく敎化て、皆聲を和にして氣を下して、父母を愛敬し、苟且の命にも違怠となく、兄弟一族和睦やうにすれば、自然安樂になるなり。また吾身の苦勞を顧ず、心を運、力を竭、食物の滋味を具、衣服の輕煖なるを擧げ、

臨產時節には、母は身を切割ほどの惱を受け、父は限なく憂を懐く。母子安穩なれば一命再續でよろこびをなす。其子の育るとき、母は濡たる所に臥て、子を乾る濕に置、子よく睡れば、母の身屈伸をせず、衣裳粧飾などを取亂し、子の安穩を念より外なし。乳哺三年の間、父母の辛苦、言につくすべからず。漸成人すれば、師匠を求め學問をなさしめ、智慧才學の人に秀逸ことを願ひ、妻を娶る年になれば、伉儷を求、家業を設、富榮ことをはかる。其子人に勝れ繁昌すれば限なく歡、若人に劣衰微すれば、起臥たゞ憂とす。父母かく慈悲をたれ、苦勞をつんで、養育する子の身なれば、一毛に至るまで皆父母の恩德なり。されば父母の恩は天よりも高く海よりも深し。あまり廣大なる恩なれば、迷凡夫は報ずることを忘るゝなり。いかに愚蒙なりとも、一飯の恩を報ぜんと思はぬ人はなし。是吾心の良知ある故なり。吾心の良知ありて、父母の恩を忘るゝは、欲心に蔽ればなり。若父母の恩と一飯の恩とをならぶるならば、言に及れぬ重恩なることを知り、父母の恩を報ぜんと思ふ、吾心の良知おこる。其發を認取て、孝行の始として推廣行ふべし。然るに世間の人、多は唯富貴を無上のものと思ひ、第一の願とする故、其使となる人を限なく愛敬し、悪言の辱をも堪忍し、父母は無にあしらひ、一言の悪口を受けても酷く瞋り、或は父母を疎略にして妻妾を寵愛し、または親を棄て子を養ふ。偏親の慈悲あさく無道の事あれば、怨をふくみ讐敵の思をなして不孝をなすなり。夫富貴を求む便となる人を愛敬するは、吾身を潤恩あればなり。妻妾を寵愛するは、吾身の欲を逞る樂あればなり。子を愛するは吾身を分たればなり。此身なければ、富貴を偏素質なく、妻

し、禽獸と相去こと遠からぬにいたる。誠に悲むべく愍むべし。されども吾心の良知息滅ことなければ、時々にをこりあらはる。其の證據は、孺子の何のわきまへもなく、井の中に陷を見ば、いかなる惡人も怵惕惻隱の心。をのづからおこるは、吾心良知のある故なり。其發るについて、をしひろめをこなふを致㆓良知㆒といふなり。致とは、推極也と釋。いたすとも、きはむるとも訓。たとへば十の物を一より二三四と逐て十に至るごとく、吾心一念の良知、君を見て忠節の心をこり、父兄を見て孝弟の心おこる。其一念を認取て、至極まできはめをこなふをいふなり。唯君父に忠孝すべしと知る心のおこるは、吾心の良知といふまでなり。致㆓良知㆒とはいふべからず。さて四書五經に說きたまふところは、皆吾心の良知をいたす註文なり。されば此致㆓良知㆒の三字を標的として、四書五經を讀ば、皆我身のをこないとなりて、今日の用となるべし。若さなくば、四書五經と我身と別になりて其益なし、さてこそ此三字は學問の肝要にて、聖人の人を敎たまふ第一義といふ。殊に陽明學の宗旨たり。

父子有ㇾ親　父子はおやこと訓。父はてゝおやの事なり。父をいへば、母は其の中に在り。親はしたしむと訓。ねんごろにむつまじきをいふ。父は慈に、子は孝に、たがひに吾心の良知を致てよく愛敬するを、父子有ㇾ親といふ。上帝王の貴より下士民の賤まで、同き理と知るべし。夫子の孝行は、人間第一の行、萬善の源、吾心良知最初一念の本然なり。然れば吾心良知孝行の德を致には、先父母の恩を知るべし。胎孕十月の間、母は懷妊の苦を受、父は母子の安穩を願ふ。

王學名義卷之上

松菴　三重貞亮著

致ニ良知一

此三字は學問の肝要にて、聖人の人を敎たまふ第一義なり。良は本然の善なりとて、根本より善なるをいふ。知は明覺の自然をいふ。花を見て花と知り、月を見て月と知り、善は善惡は惡と、それ〳〵に知りわきまふる心の神明にして、人たるもの同く天より稟賦て、根本より善なる智慧を、吾心の良知といふなり。されば天道の春夏秋冬と運行こと、古今のかはりなく、柳は綠花は紅、甘草はあまく黄連はにがく、牛は耕作をしり、犬は夜をまもる如く、吾心良知も万古一日のごとく、更にかはることなし。目の黒白をわかち、耳の聲音をきゝ、鼻の香臭をしり、口の甘苦をわきまへ、身の寒暖をおぼゆること、昔の人も今の人もかはることなく、善を善と知り、惡を惡と知り、孝弟仁義を知る吾心の良知も、堯舜の代の人も、末世末代の人もかはりなく、同一體の神明なり。然れば二三歳ばかりの童、たれがをしへもせず、何の思案もなけれども、をのづから父母を愛することを知り、漸生長すれば、兄を敬ことを知る。貴賤賢愚へだてなく、京と夷中のかはりなく、人々契約せざれども、をのづから同じき吾心の良知なり。此吾心良知を失ざる人を、聖人賢人といふ。然るに迷倒凡夫は目に美色を視て愛著し、耳に好聲を聽て心を動し、鼻に香を嗅、口に味を貪て、朝夕種々の欲心妄念をおこし、吾心の良知を自と昧まし、不孝不弟の業をな

王學名義目錄

上卷

下卷

刊王學名義序

經曰。自天子以至於庶人。壹是皆以修身爲本。故君子不可以不修身。思修身。不可以不問學。思問學。不可以不明其名義。思明其名義。不可以不就明師資眞友而求之也。夫仁義禮智。實六經之綱要。而孝弟忠信。是五典之功夫。最不可以不明焉者也。濂洛關閩之學。其說精密。其書繁多。雖然。其於理也。或合或離。茫々乎難見津涯。是以。學者不能無惑焉。三重松菴先生。嘗研究九經。折衷諸賢以謂。子王子致眞知及知行合一之旨。切近于世教。而實孔孟之正宗也。然本邦近世。間有稱陽明學者。而其說解。遵乎王子者不少矣。先生慨之。嘗著王學名義二卷。意欲以發藥初學也。予頃其爲書。演以方語。錄以國字。其於名義也。昭々乎如揭日月而照太虛。不亦懿乎。嗚呼。可謂眞明師矣。吾黨之士。安得不就學而受讀哉。書未遂印流。學者苦騰寫。仍請先生手書鋟梓以惠同志云。

寶永庚寅六月朔日。江州八幡後學。豐崗敬元才允謹序。

より外他の方便なしとなるべし。極重惡人とは、惡逆無道の者の事にはあらじ。至極愚痴なる者との事なるべし。西戎ゆへ言葉扁なるか。たゞしほんやくのとき文字をあやまるかなるべし。文字になづまず意をむかへて說べし。釋迦惡をやめ善をすゝむるの主意をむかふるときは、今の佛者の說のごとくにてはなきはづ也。禪宗はさとりだにすれば何をしてもくるしからずとゆるし、民の困窮するは、前世の因果なり、これをすくふは因果をはたさせず、なるほどせめせたげてはたするが慈悲なりといふ。何ぞ祖師の主意ならん。其身だんなと共に民をしへたげて、富貴ならむとするなるべし。天臺眞言はかへりて罪うすし。しかれども我慢邪知をたくはふる事をしらず。それいのりきたうとて、自他の功利の心をますのみ。功利を長ずるは惡のみなもとをますなり。それ極重惡人となるものは、愚痴無知の生付にあらず。才知平人にすぐれて非をかざり、過をとげ人をあなどるもの、大惡人とはなるものなり。さやうのもの、念佛ごときのまだるき愚なる事を信ずるものにてはなし。愚痴蒙昧のものは、大惡をする才力はなし。故に佛說の極重惡人は、愚蒙の人ぐづなる事をしるなり。聖賢の御代には、かくのごとくの極重惡人も、德化にてしらずく平人の善にいたるものなり。天性の耻心を興起して、みづからはぢて惡をばせざるものなり。

集義外書卷之十六終

なきやらん。葬の地にめいわくしたる一事をきかずあれども、其書を見ざるにや。　問。人多死せずば、中國も葬の地なかるべきか。　云。時に中する中興の明王出給はゞ、治世久しく戰死なくとも、地せばき事は有べからず。人道の正き國によりて、天地の氣も清明なれば、春の運氣にかへりて、次第に人もすくなく生れて、よき人出べし。　問。火葬骨の易簡を佛法の益と承候へども、それよりは地獄極樂の說にておどして、愚人の惡をするをふせぐ益すくなからず。これなくては今時の俗をすくふ事かたかるべきか。　云。せめてさあらば可ならん。今の佛者は惡人をますものなり。凡人は小惡となり、小惡は大惡人となるものあり。いかんとなれば、極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂の經文を引て云、主親を殺したる惡人にても、念佛の功力にて成佛うたがひなし。善行を修し戒を持は、却て雜行なり。地獄に落べしといひ、われ〳〵ごとき愚痴の凡夫、學文修行忍辱の善行はならぬものなれば、其爲に如來の方便にて、一念の念佛にて極樂へすくひとり給ふと云一向宗、是に同じ。日蓮宗も念佛か題目のかはりばかりにて、善をやめ惡を敎る事は同じ。是惡人のゆるしを出すなり。そのまゝにてをけば、人々天性の良心ありて、惡をはぢ不義をにくむの良知あれば、惡人といはれては、一命をもすつるものなり。しかるにわれ〳〵ごときは惡をするはづとゆるして、恥心を亡す事は、無二是非一事ならずや。其外諸宗共に、品こそかはれ同前なり。極重惡人とは、惡をするものにあらじ。くだものにても何にても、物のくづを惡きといふごとく、人くづにて愚痴無知なれば、道理をいひきかせては得心せず、せめて念佛

つる故に、前三日の潔齋なり。是も又後の法なり。上世孝子孝孫の祭を初めし時は此數なし。春の花を見、鳥の聲を聞、秋の風身にしみ、虫の音心に感じて、日月のうつり行事を思ひ、親先祖を思ふ事切なり。これによつて俄に潔齋してまつれり。此時は大かた一夜神事なるべし。期日の祭は年に一度の日月なれば、兼て思ひまうけての事也。　問。四時さへむかしは春秋ばかりとうけたまはるに、朔望の拜はいかゞ。　云。朔望は親先祖の所へ禮に行道理なれば、潔齋はなし。君朝へ出仕する道理と同じ。たとひ時物などを神前に奉ずるも、備て不レ祭の義なり。春秋の祭は、親先祖の神と交る故に潔齋する也。　問。期日の祭は上古はなき事也。中古よりの事也といへり。いかむ。　云。此理至極せり。父母死して三年の間の祭は凶禮なり。三年過ては吉禮に變ず。神道の理過たる凶禮をまた引出して、終身の喪有べからず。期日の祭は厚き事はあつけれども、理には不レ叶。しかれども、おこりし期日の祭を今やむべきにあらず。後世神道盛に行はれて、人皆祭祀に誠敬を盡す時あらば、をのづからやむべし。今やめては人情うすくなる事あらん。止るもおこすも時あるべし。　問。氣運衰て人の氣力よはく、財用貧く事しげく、情うすき事はさも有べし。もろこしにて地せばき憂をいひたる事をきかず。日本のやうにはなきかと覺べ侍り。田地を一年置二年置て作侍る事をきけば、地ひろき國と聞え侍り。　云。運氣にて人の生ずる事おほきとは四海同じといへ共、漢の代にあまりに國をひろくとりたるゆへに、戎狄の難多く、毎度戰陣にして人の死する事おびたゞし。この故に否塞の運に當るといへども、人多地せばき憂は

たり。夏冬を加へたるは中古よりの事也。今の時士民ともに事しげく、いとまなく、用たらず。氣力うすし。しばしばする時は、誠敬盡しがたし。春秋と期日とに祭て可なり。　問。或は公用などしげくて、三日の潔齋なりがたきものあり。又病氣老衰にてたへがたきものあり。不レ祭も心よからず。祭てうむも不敬なり。かくのごとき者はいかゞし侍らむや。　云。日本の神道には一夜神事と云とあり。公用などにいとまなき人か、病者老衰の人無氣力の人これを用て可なり。去ながら春秋の祭は、親先祖を五行の神明に配して祭となれば、たとひ沐浴し衣服を改めなどする事こそ、一夜神事を用ると也、五辛を食せざるのたぐひ、神をけがすべき事をば、三日前よりいみつゝしむべし。　問。寒氣の節酒を禁ずるによりて寒にあてられ、病氣をもよほし、めいわくするものあり。三日の潔齋に甚くるしめるものあり。酒をいましめらるゝ道理はいかゞ。　云。これも主意ありての事なり。ひたすらに佛者の飲酒戒の樣にいましむる事にはあらず。寒氣をふせぐばかりに用る事は、何かくるしかるべき。祭の前に厚味の物並に酒をいむ事は、相火をたすけ、心をふすべ、或は精氣をまして、情欲の發すべき事を用心する也。或は病氣老衰の人に肉を用ひ、或は寒氣をふせぐばかりに過ざるほど酒を飲事は、的當のくすりを用る也。一偏に戒べき道理なき義なり。　問。期日に肉食せざる事は何ぞや。　云。期日は終身の喪なり。何事も樂にあづからず。故に飲食に味を調へず。干物しほ物のかろきにくるしからず。精進物にても、あぶら物など厚味の物は好まず。期日はをやをしたしみ祭によりて、前一日の潔齋なり。春秋は親を饗びま

なし易く、喪には居がたき故なるべし。　云。是も又日本の水土なり。日本は則文字にも日の本とかきて陽國なり。小國なるは陽のわかきなり。故に此國の人は悦び多して哀び少し。祭は吉禮にして悦也。故に日本の人これを好めり。いにしへも祭禮のみ精しかりしゆへに、今にのこりてあるは祭祀なり。葬禮も有たれ共、大方の事なるゆへに、佛法にうつりて絶たり。神職に精きものゝたま〳〵しれるもあれど、古今時異なれば全からず。葬禮は凶禮なり。日本の人の氣質に不得手なる所なり。天竺は月氏國といひて、西のはてなり。月のはじめてあらはるゝ所也。陰國なる故に、哀び多して悦び少し。故に禮も死を送るの葬禮に精し。教を立るも、無常をいひて憂ひ多き所より、惡をやめ善をなさしめんとす。日本に葬禮のたしかならざるごとく、佛法に祭の吉禮は見えず。祭禮のごとくなるも、年期月期もて皆とぶらひの體なり。故に其聲に憂あり。西戎の精きを持來て、日本の粗なるに加へたれば、みな佛者の禮に成て、粗はなく成ぬ。もろこしは東西の中なるゆへに、悦樂哀戚ともにかねたり。是故に喪祭の禮ならび行はる。佛法のとぶらひは神國の祭法にあらず。日本の今の祭祀は、大社か生所神などばかりにて、人々の親先祖には用ひがたし。此故に祭禮に志ある人は、儒の神道を悦てこれをとれり。然れども、もろこしの法はとげて用ひがたかるべき所あり。日本の水土人情によりて、あまねく用ひて久しかるべき祭法あらん。後の君子を待而已。　問。後の君子を待てなすべきは又後の人なり。今日自分に用べき事は、いかゞし侍らんや。　云。物の初は、誠あまり有て禮たらざるをよしとす。大古は春秋に祭

て二十年三十年の間には、葬の土地なかるべし。たとひ土地は國により遠所をもとめ、上のちからを加へて、百年のはかりごとをなさしめ給ふとも、山林の精力つゞくべからざれば、材用たゆべし。成がたき大難三あり。日本は近世人多く土地せばきが故に、近比まで寺なりし所も、屋敷と成畑と成もの多し。いはんや百年の内には、人もうつりかはりて、墓所とも不ㇾ知なり。いにしへ念を入て葬たるものは、堀出されて後のうれひあり。もろこしのいにしへは、厚を以て情を安じ、日本の今は、薄きを以て情を安ずる道理なり。たとひ富有なる人なりとも、五七年血氣の腥臭ある間に土に近付ずば、腥臭たえて後ははやく土に合して、理の本然にかなふを以て、孝子の情をやぶるべからず。貧なるものはむしろを用ひて首足のかたちをおさめて葬らば可なり。問。富るものは板を用ひ、貧きものはむしろを用ひば、親に孝をするも、貧にしては成がたき恨あらむか。云。理をしらしむべし。生る時の飲食衣服家屋器物等に至まで、富貴貧賤異なり。恨べからず。いはんや死はむなしきからなり。土に合するは理なり。しばらくおほふは孝子の情なり。棺とむしろと何ぞわかたん。或は情を安じ、或は理に安ずべきのみ。其上所の奉行人の意得を以ても、二三年の形をおほふべき程の事は成べき事なり。問。近年儒法とて執行ふを見侍れば、大かた祭祀の事也。もつとも祭禮も家禮の法により侍れ共、死を送るの事ばかりなり。喪の作法は十が一二も見侍らず。祭の作法は略義ながらも大かたし侍り。儒法を用るほどならば、喪祭ともに午角に用ひ度事なり。一方用ひて一方かかむよりは、二ながらなきぞよく侍らん。祭は

らざるの制禁ありてだに、猶あまねく用ひがたし。夏の炎蒸の氣の生ずるものは用なけれども、人々是をかり殺し、ぬきすつるといへども不ㇾ盡。くだ物も多くなりたる年は味ひうすく。少くなりたる年は風味よし。古は人すくなくて人あり。今は人多して人なし。氣運否昏によりて人の多事さとるべし。今の時に當て、先王の德かくれ、道をとろへぬ。道德を興起せずして法のみ行はゞ、立がたかるべし。道おとろえ人多き時に佛法あり。易簡にして大成害なし。これも又命なり。道德なき儒法の行はれむにはまされり。　問。しからば儒道は行はるべからざるか。　云。儒道と云は德のおとろへたる名也。大道には名なし。天地の神道は時に中して行はれずと云所なし。たゞ天理の誠のみを立て、禮法を必とせず。自然の勢にまかせて可なり。　問。神書にも槇を以て棺槨に作るとあり。火葬の事は見え侍らず。佛者も土葬をしゐて戒むるにもあらざれば、不ㇾ忍心ある者の葬はいかゞし侍らむや。　云。神書に槇を棺槨に作るとあるも、上世人すくなく材木澤山に、土地あまりありて、なりやすかりし時の事なり。今の時庶人の末にまでも、棺を用ひ墓を築て葬をせん事は、成がたき事なり。山中の民薪鹽木をうりて農業にまじゆるものは、三日の食なし。日傭を事とするものは明日の食なし。かくのごときのもの幾万億といふ數あらじ。それよりまされるものは、庶人の中の身上なれども、一衣を買べきあたへなきもの多し。米を食するはまれなり。かくのごときものには、上より葬の財用をくだし給はらでは成べからず。限なき事なれば、今の勢にては叶がたかるべし。若道行はれ用節せられて、財用を給はる共、所により

にたえざるものあり。況や民の常の產乏きものは、死の哀はわきに成て、葬のとゝのほりがたき事を憂とす。とりわき日本は、近世人の多き事十倍せり。小國なれば猶以て土地せばく用たらず。庶人の末々は、生て衣なく死して棺なし。又葬べき地なき所多し。火葬も又時のついゑにあたれり。天地ひらけて以來の人多時節なり。これ氣運ふさがりくらくしてしかり。時に佛法あるもかなへり。火葬も又可なり。今の時處に當て、家禮の儒法をあまねくなさん事は、聖賢の君出給ふとも、かなふべからず。今の時に當て、明君賢臣相逢て仁政を行ひ給ふ共、全く佛法をば退け給ふべからず。今の儒學者、道行はれば、佛法を破却せんといへるは不知なり。京大坂畿內の地、其外諸國をみるに、火葬をやめて葬るべき地なし。日本の人佛法を信じ火葬を安ずる事久し。これをやめて家禮の儒法をなす共、日本國中なべて行はゞ土地村木共に盡べし。佛法にあづけたるよりは、かへりて不仁にして不レ忍事出來べし。神道佛道共に其まゝにて、ともに大道に歸する事あらん。今庶人は、生る時の衣服食物だに不レ足者多し。家屋も風雨をふさぐにたらず。農人は農業のため、工商は渡世の爲にすれども、それだに用にかなひがたし。何のいとまあり有餘ありて、葬祭の禮をおさめむや。　問。氣運塞昧くして人多道理いかん。　云。三皇五帝三王の代は春のごとし。春の氣は溫にして悠々たり。鳥獸草木も靈なる物のみ生ず。多がごとくなれどもみたず。秦の代より此かたは夏のごとし。夏の氣はむしたてゝあつし。過半は無用の物みちみちて生ず。鳥獸魚草木の靈なるは、みだりにと

をよまざるものも耳に聞ふれ、いつとなく後世などにまよふものはすくなく成行侍り。もろこしの文國にて、いかで佛法あまねくひろがり侍りけん。云。これも儒者のかたよりひろめさせたる也。周の代の富有なる時の氣を其まゝに、後世の貧乏困窮の民にくはへ、無事の時の法を以て事しげくつかれたる士になさしめ、上世の氣力盛なりし人のなしたる事を、後世の衰へたるものに行はしむ。貴賤共に周の禮法にくるしめり。貧なるものは、葬のために產業を失ふもの多し。董永か身をうりて葬をいとなみしにて知べし。富貴なるものは氣力乏し。このゆへに世の習にて儒法を行ふ者は內外なき事あたはず。名を思ひ恥を思ふ士も、心勞し氣つかれ、或は財たらずして、是非なく僞に似たる事あることをかなしめり。時に佛法わたりて、喪祭ともに易簡にて、財用を費さず。事すくなくて心氣勞せず。佛法にだに入ぬれば、あまたの憂なし。故に實に佛を信ぜざるものもこれを悅て、風に草のしたがふがごとし。高明博識の者も、多くは佛に入て助けしかば、佛學ます〳〵靈明になりて、儒道は唯外ざまの事と成ぬ。若此ときに、明君良相ありて時運の衰をしり、人情のうすく氣力の乏きを察し、財用の不足に應じて、易簡の禮式を作爲し、誠を立て太古質素の風をかへしなば、誰か戎國の佛に入むや。其後もろこしにても、此あやまりをあらたむる人なきゆへに、佛法今にすたれず。いはんや日本をや。古は人すくなく、土地ひろく、用たれり。又質素なり。故に棺を作事易して、其かたきをとれるのみ。後世人の多くなるにしたがひて、土地せばく用たらず。かざり多して實すくなし。常の產あるものだにも、棺槨をかざる

則をなげくは人の情なり。伏犠と神農とは理にしたがひ、黄帝堯舜は理と情とをかね、三王周公孔子は情にしたがつて理存す。皆時なり。周の代は天地ひらけてより以來、大平無事の時運にあたれり。天地の物を生ずる事かぎりなく、財用の多き事水火のごとし。人民大に富てなすべき事なし。故に驕奢にながれ、人欲おふるべき勢あり。聖人これを憂給ひて、禮文法式餘多作ていとまなからしめ、喪祭のために用を費して、欲をふせぎ給へり。其時にだに禮文あらはれて、いまだ取行ふには及ばざりし事ありき。後世に及て、政令道を失ひて人心正しからざるより、四時の氣不順にして、地の物を生ずることすくなし。貴賤分を越て士民まづし。世事多していとまなし。是故に人民多欲に成て情薄く成ぬれば、其國にをひてだに行がたし。いはんや他の國にをひてをや。近年は草木金石だに性よはくなれり。まして人は病氣無氣力のみ多し。其上に家貧しく世間事しげし。いかでいにしへの富有にしていとま多く、無病にして氣力あまり有し時の禮を行はむや。それ道は大路のごとしといへり。衆の共によるべき所なり。五倫の五典十義是なり。いまだ道學の名なかりし前より行はる。天にうくるが故なり。万古不易の道也。禮法は聖人時所位によりて制作し給ふものなれば、古今に通じがたし。よく時にかなへば道に配す。時にかなはざれば道に害あり。しかるに今の學者には、法をとめて道なりといへる者あり。故に時處に應ぜざるをも、是非かくのごとくせずしては不叶事と思へり。今日本の時處位は、理にかへりて情をやはらげ、道を專にして法を略すべき勢なり。問。日本にてだに、近年文學少しひろまり侍れば、書

難じ侍れ共、心學者どもに多くは格法にまとはれたる躰なり。世の儒學者より見ては、大簡にて、莊老の道にちかきと云程になくては、日本の水土今の時節にはかなひ侍らじ。天下文明の運と見て侍れば、文學は次第に博くなり、學者多くなりて、禪宗律僧などの世に有ごとく、一流と成てあらむのみ。　問。佛法は易簡なる所のみ日本の水土に相應すと被レ仰候へ共、親を葬るとて、目の前に親の身をやきすてゝ、火葬などにする事は、甚不仁なる事と覺え侍り。　云。しかり。されど我なすことはせじ。佛法の流世俗の習にてする事なれば、人をばそしるべからず。又今の時處にかなひたる勢も有。吾人共に世の勢さけがたくば、まかせても可なり。たとへば戰陣にて身方亡る時は、城に火かけ腹切、炎火の中へとび入て死するは義なり。敵の手にわたり、古鄕に送られて、棺槨に入にはまされり。何ぞ外物を必とせん。　問。師のごとくなれば、儒法はすきとやぶれ侍り。狂見とや申侍らん。　云。吾子いまだ理と情と道と法とを辨へず。人死して魂氣は天に行、魄躰は土に合す。是理也。上世は人死すれば、中野にをくり谷に葬れり。棺槨なし。是天地の理にしたがふなり。後世家屋衣服器物備りしより、空しきからといへども、俄に直に土に近付るに不レ忍情あり。故に木を伐ひきわり箱にさして、からをおさめたり。此情や時にとりて尤なる事なれば、後世の聖人棺槨の制をなし給へり。はやく土に合するは理なれども、死に事ること生に事るごとくするは、孝子の情なり。天我を勞するに生を以てし、吾を安ずるに死を以てす。死生は晝夜の道なり。命をおしむべからず、死を哀しむべからざるは理なり。然れども、

たると見え侍り。唯人の勢のつよきのみなり。人おほき時は天に勝の時節なり。五十年の間には、天定てまたよく人にかち、佛法亡び侍らむか。其故は、今の繁昌は佛法の實の繁昌にてはなし。唯驕奢無道の至極せるなり。無心のものだに、物の盛衰は理の常也。いはんや無道にして奢極り侍らば、長かるべき道理なき事也。近世僧たる者不慈悲不作法ゆへ、人も大方信なし。吉利支丹の請人にとらずば、今時分は檀那寺を持たる者は過半あるまじ。寺も僧も今の十分一も殘り侍らじ。近年は吉利支丹にかゝりて、無道の佛者ども富侍り。されども吉利支丹は、佛者其外平人の吟味にてはしられざるものと見え侍り。蛇の道は蛇が知といへることわざのごとく、同類ならではしらざる躰なり。吉利支丹は猶以て寺をかゝへ、よくつとめをすれば、しらるべき樣なし。用にたゝざるからは、後々は請人にも取侍らじ。近年の佛者の奢は、灯消なんとて光をますかと思はれ侍り。此後は儒道興起して天下治り侍らむか。　答云。道理は至極し侍り。予もむかしはさ思ひしが、近頃日本の水土により、山澤草木人物の情と勢とをみれば、易簡の善ならではあまねからず、長久ならざる道理あり。佛法は戎狄の異端ながらも、日本の水土時節に相應せる所有。是故に千餘年に及て、かく存はるゝなり。近年は佛法の世にかなへる易簡を失ひて、奢きはまり侍れば、久しかるまじ。しかれども、天より奢をそがれ、堂寺法師等すくなく、少し出家らしく成て、又々久しくつゞき侍らん。今の儒學の樣子にては、朱學も王學も治道の助とはなり侍らじ。國君世主少し用ひ給はゞ少し害有べし。大に用ひ給はゞ大に害有べし。王學の者朱學を格法とて

るべき儒道をばからずして、治道にかるまじき儒佛の法をかりしは不可なり。故に日本の人至治の澤を蒙らざる事久し。神道の正心修身齊家治國平天下の用をかねて、一人立する事不レ能は、全く儒をからざる故なり。佛者は大に儒をかりて盛に成たり。今はかりたる事をいふものまれなり。かるべくしてからざるは神道者の過也。問。三種の象もいまだ出來ざりし時の神代の敎學政道はいかが。云。天地は書なり。万物は文字なり。春夏秋冬行はれ、日月かはる〳〵明かなり。これ神道也。上世至德至治の時には何ぞ書を用ひん。元德感通して木氣事を用ひ、霞立梅さき鶯なく。万物生々して天氣温和なるは、吾に慈愛を敎るなり。父母たるもの慈愛の心ありて子を養育す。君たる人慈愛の德ありて天下平かなり。夫婦兄弟朋友みな慈愛の情によりて相睦じ。慈愛と云は、生理の發見なり。唯此生理天道にありては元と云、人性に有ては仁と云のみ。天道の春の敎によつて、仁慈の心のおこる事、同氣相求同聲相應じ、水は潤に流れ、火はかはけるにつくがごとし。何ぞ言を用ひん。世くだり人愚にして、天地を師とする事不レ能。こゝにをひて象出來ぬ。日本の象は三種の神器なり。唐土の象は八卦なり。世いよ〳〵末に成て、象さとしがたし。故に書出來ぬ。吾國王代の始は、いまだ象のみにして足ぬ。漸く書出來べき時に及て、もろこしの文書わたり、其後佛書わたりぬ。故に字書を講ずれば、をのづから儒佛を講ず。ことに佛法盛なりし時にあたれり。吾國の神書のおこらざる所なり。　問。佛法はじまりてより以來、天竺中國ともに、日本の今の様なる佛法の繁昌は有べからず。しかれ共、天命はすでに亡びにおもむき

不ﾚ傳。ひとり三種の象のみのこりとゞまり、至易至簡にして道德學術の淵源也。高明廣大深遠神妙幽玄悠久こと〴〵く備れり。心法政教他に求めずして足ぬ。名號文字は人の通じやすきものを用べし。かると云とも可也。三種の神器の註解は中庸の書にしくはなし。上古の神人出たまふとも、此書を置て別に註し給ふべからず。たゞかす事不ﾚ能、かる事不ﾚ能ものあり。日本の水土によるの神道は、もろこしへも戎國へもかす事あたはず、かる事不ﾚ能。唐土の水土によるの聖敎も、又日本にかる事不ﾚ能、かすことあたはず。戎國の人心によるの佛敎も又しかり。文字器物理學はかるべしかすべし。天地を父母として生れたる人なれば、中國日本戎蠻北狄の人も皆兄弟也。父たる天は一大にして二なし。地のかはりは腹々の子のごとし。兄弟の中何ぞ物我あらむ。人といへば耳目口鼻かはりなきがごとく、心の知仁勇は皆天理の一德にしてへだてなし。いづくにかかるべき。思はざるの甚しきなり。日本の土地には金銀多く生ずれば、中國戎蠻の者來て求む。其外日本より渡して用をなさしむる物多し。朝鮮國の人參は、中國へも日本へもわたして、人の元氣をすくへり。中國の文字はよく理を含て學に便あり。今佛敎の文字名號は皆中國の文章なり。佛國へは中國の文字は不ﾚ通。中國の人を信じてより、中國の文字をかりて佛道をひろめたり。有無をかへて用るは道理の必然なり。文字の通ずる國は中國朝鮮國琉球日本なり。佛者は通ぜざるだにかり用ひたり。いはんや日本にはよく通じて理學に便あり。其上神代の文字は亡びたり。學は儒をも學び佛をも學び、道ゆたかに心廣く成て、かりかされざるの吾神道を立べき也。學にか

には相應せず。神道を以て心をみがき、身を修、家國天下に及べき道學おはしますべきや。　云。三種の神器則神代の經典也。上古には書なく文字なし。器を作りて象とす。玉を以て仁の象とし、鏡を以て智の象とし、劒を以て勇の象としたまへり。知仁勇の三は天下の達德なり。親義別序信の五は天下の達道なり。父子の親は仁なり。君臣の義は勇なり。夫婦の別は智なり。これを三綱と云。長幼の序は禮なり。禮は義の宜に生ず。信は知仁勇の實理天道の至誠なり。天道造化の常よりいへば元亨利貞也。人性五倫の明德よりいへば仁義禮智信なり。理本一理也。氣本一氣なり。しばらく天下の主宰として達德となりたる所に、知仁勇の條理あるなり。人に五躰あるがごとく、耳目口鼻あるがごとし。耳の靈は仁のごとし。目の明は知のごとし。口鼻の通は勇義のごとし。合ていへば人なり。分ていへばつかさどる所の名あるのみ。皆一心の左右なり。　問。知仁勇の名は中國聖賢の言なり。これを用るは儒にかゝるにあらずや。　云。知仁勇の德ありて後名有るか。名ありて後德あるか。耳目有て後名あるか。名ありて後耳目あるか。夫人生て後人の名あり。耳目有て後耳目の名あり。中國にては耳目と云、日本にてはみゝめと云。言葉はかはりぬれども、さす物は一なり。夫三極そなはりて後、知仁勇の德あらはる。上古には名なくして德行はる。あつきの至なり。後世に及て敎なきこと不レ能。故に其時の聖人是に名付て敎とす。もろこしの聖人は是を知仁勇の三德と云。日本の神人はこれを三種の神器にかたどれり。神は心也。器は象なり。神璽寶劒内侍所の象を作て、心の三德をしらしむる經書とし給へり。其外神代の文字言葉は絶て

悲の情より慈心をみちびかんとす。天竺の水土に應ずる所なり。これ其國にをひては可なりといふ義なり。　問。佛法の日本の今に應ずる所あるものは何ぞや。　云。其始心は雲泥かはりぬれ共、末に成ては相叶所あり。火葬などの易簡なる事也。戎國にて釋迦の火葬を用ひられたる主意は、彼國の人は欲心あつく執着ふかく、其沈魂滯魄形躰をしたひて殘りやすし。故に火葬にして沈滯の魂魄を散せしめんと也。戎國にをひては可なり。日本の人は仁國なれば、欲うすく執着わさし。沈滯魂魄あるものは、數千歲万億兆の中に一人だにたまさかの事也。たとひ一人ありとても、影のごとくにして散ずる事すみやかなり。夫神代には槇の木を用て棺に作り、土葬を用たり。其遺風によりて、今に貴人たる人は多くは土葬なり。士庶人にも用る者あり。それ日本は上國にして小國なり。ことに近世は人の多き事百倍せり。火葬なくば葬るべき地なからん。儒法の葬禮のごとくにては、民間の斂しらざる人地なく村木なし。十が一も用べからず。或は用或は不レ用は孝子の恨有べし。あまねく用ひなば、土地村木ともに百年はつゞくべからず。天地の理は乘除なり。儒法の立がたきがために變有べし。土地人民うつりかはりなば、今の屋敷となるごとく、全き棺はほりかへされて、後人の心をいたましむべし。これ戎國の火葬を用ひたる主意にはあらざれども、時の勢にはかなへり。　問。火葬をも不レ用、棺ほり出す憂もなく、天下なべて用べき葬禮侍るべきか。　云。時ありて可レ行。後世水土によりて制する人有べし。天下なべて用て心よき法は、易簡の善より出べきのみ。　問。しからば戎國の佛法のみならず、儒法といへども日本

して民人至敦なり。上仁に下不欲なれば、不レ治に平か也。不レ教に誠あり。儒佛の法はかるべからず。佛法の此國に害あるのみならず、儒法も又害あり。　問。儒法の中國の情にかなふ所は何ぞや。　云。中國は大國なり。天地の中國なり。故に天氣明かに地氣厚し。五行の至寶あつまれり。故に人情厚し。平人はいふに及ばず。貴人といへ共、路に死せるものあれば、何として死せるぞと、手づからなでゝくはしく見といへり。日本へ渡りし唐人のしる人なりしもの死して後、又わたりてたづねけるに、なくなりたるとこたへければ、しばらく哀情顏目にみちたり。何のよしみもなき異國人にだに如レ此。いはんや其國にして親きものをや。此情を以て見れば、葬禮吊問の作法さも有べしと思ひ當れり。日本の情を以てみれば、作りことの樣なる事あり。日本人は親子兄弟だに死すれば、うとみさくる心出來ぬ。いはんや他人の死せるは、甚うとましく思はれてきたなし。此情にては、儒法の禮にあたりがたし。これ日本の人の罪にあらず。地氣のしからしむる也。中古唐より官位衣服等の制を傳し時、父母の服一年暇五十日、祖父母五ヶ月暇三十日、兄弟三月暇二十日と、哀情を節する數期、水土によりて定められし時、死穢は三十日と定られたり。中國は哀情を節するの數期のみにて、けがれの事をきかず。夫人情は禮法を受るの質なり。素に五色をほどこすがごとし。中國の質は白紙のごとし。五采皆ほどこすべし。日本の質は青紙のごとし。戎蠻の質は黑紙のごとし。五采全くほどこしがたし。戎蠻の人は多欲にして慈愛すくなし。生理の淸白を好む心すくなくして、死を哀の心多し。故に無常を觀ぜしめて欲をうすくし、

て化すべからず。故に戎狄に生れたる王侯賢者は、其國俗を知のみ。是故に其國俗に應じて敎をなせり。戎蠻の人は死を哀む事甚し。これを以て恐懼せしめて、善をなし惡をさらしめむとす。夫人貴賤となく畏るべきは死のみなり。又理を不レ知ゆへに、死後の事なればいか樣にいひても信ず。これを以てをびやかして道に入むとす。道ことなりといへども、其心をば知べし。莊子云。死生亦大矣。釋氏一大藏經、此五字の中より出といへり。戎蠻の敎にしては可なり。中國と日本の敎には不可なり。しかれ共中國も日本も千歳このかたは、氣運否塞にわたれり。此運氣の間には佛法も應ずる所あり。ことに日本の今には相叶所あれば、此後とてもこと〲くは亡ぶべからず。然れども今までのごとくにはあるべからず。　問。佛法の其國にはよけれども、中國日本には不レ叶とならば、儒法も日本天竺には叶べからざるか。　云。儒法と云は跡なり。跡は其國にをひても、時うつるときは不レ行こと多し。況や日本にをひてをや。儒道神道佛道、みな明知の人の其時所位に應じて行ひし跡なり。道の眞にはあらず。日本は陽國なり。陽の始にして雅し。故に其水土に生ずるの人、生を重じ死をかろむず。人心悅多して哀少し。又祭禮を重じて葬禮を輕ず。神道いさぎよくして誠を盡し敬をいたせり。これによつて心のけがれをあらひ、欲すくなく風清し。故に仁國にして壽ながし。夫至清の道は仁にしくはなし。仁は生々の理なり。故に仁者にはけがれなし。水鳥の水に入てぬれず、魚海にすみて潮しまず、田畠の作物種々あぐたをけどもそまざるは、生氣有ゆへなり。いはむや生理にをひてをや。故にいにしへ神人の御代、其治至清に

集義外書卷之十六

水土解

一。心友問。博文の儒者にも三敎一致と見侍る者あり。先生は各別なりとのたまへり。一致と云も道理なき事侍らじ。　答云。よきといひて二はなきとの事なり。吾道に慈愛といへば、釋氏は慈悲と云がごときの言語を取合する時は、一致ともいはるゝ事多し。白き物は皆白といはむがごとし。聖賢も平人にあらず。佛菩薩も凡夫にあらず。凡人にあらざる所は一ともいはるべし。しかれ共聖賢の善は玉の白がごとし。佛菩薩の善は石の白がごとし。天性各別なり。人の惡を變じて善をなさしむるといふ事は似たり。しかれ共敎を立の主意は各別なり。白玉は白の精なるものなり。白石は白の粗なるものなり。しかれども玉の中にも精粗の品多し。石の中にも又精粗あり。時處の習にて石を寶とすれば、粗なる玉よりも高直なる石あり。是を玉よりも精なる物とはいふべからず。玉の粗にして疵あると、石の靈質ありて奇なるとを見れば、玉の用にまされる石あり。ときのならはしと其人がらのよきとを以てする時は、佛者といへども儒者にまされる者あり。德ある人のいふ事は、人の心にこたへて感ずるものなれば、其言にしたがふものなり。釋迦より六祖までは其身に德あり。其外にも小德有し佛者多し。それ天竺は戎蠻の國なり。戎蠻の人は下愚多し。人心貪着昏沉にして仁義を不ㇾ知。聖賢の道學傳はらず。文字通ぜず。禮樂を以

も、造化に助べきか。　云。德を以て造化をたすくるは聖賢の事也。天地の氣聖主賢臣によりて大に和するを云なり。才智を以てたすくる時あり。聖賢なくても、少し道に志あれば、造化を助る事あり。天地は生長して制することなし。年に熟あり不熟あり。豐熟の年の五穀をのべて凶年に足は人才の任なり。是賢人君子の德なくても下問を不ㇾ恥、天下の知を用てなす時は大にたすくる事あり。我みても中の國の高三十万石ばかりにて積りて、藏人に千貫目、家中に三四千貫目、民間に六七千貫目、町に千貫目、合て壹万二三千貫目の銀のすたりしを度々見たり。天下を合ては、數もしられぬ大なるすたり也。是をすてずしてまさば、天下の士民かくのごとくの困窮はあらじと思ひしなり。上つかたの人しり給はぬはさも有べし。下に居者はまれに心付人も有べき事なるが、むかしより行はれし事をきかず。一年の豐熟十年にのびて、當年は貴賤上下ともに大に悦べし。是賢聖ならでも、そのときに當て造化をたすくる大功業なるべし。豐年にて九十月までの間に助ことあり。十一月に入てはまた各別たすけすくなし。　問。さほど諸國に金銀は有まじきか。　云。後世の借銀の高は十分一も、天下の金はあるまじ。しかれども損益の勢如ㇾ此。貴賤共に富足て後禮樂行はるべし。

集義外書卷之十五　終

なり。聖人の和化をたすくるは樂なり。人氣の天地神明を感ずることを愼むなり。むかし琴を彈ずる者あり。蟷蜋の蟬をとるを見、琴聲をきく者、殺聲ありとす。殺心にあれば其感琴にあらはる。人これを知ものあり。いはんや天地鬼神にをひてをや。故に逆政の感ずる所には水旱の應あり。古今ともにみる所なり。逆政とて惡政のみをいふにあらず。强善にて賞罰つよきも人心をいたましむれば、其感天地鬼神に應じて妖氣生ず。人不善の心あり。これを積こと多ければ天地の氣を動す。疾疫をいたすものも常にこゝにあり。其本は物の人を感ずること窮なくして、人物に化し天理を滅して、人欲をきはむればなり。これ禮樂の敎なきによれり。故に姦聲人を感じて、逆氣これに應ずといへり。姦聲の逆氣を感ずるものなり。寒暑時あらざれば疾し、風雨節あらざれば饑す。時あらず節あらざるは、姦聲の逆氣を感ずるものなり。樂記に云。治世の音は安してたのしめり。其政和すればなり。故に四時順にして、風雨節あり。五穀豐熟し、人生疾疫なし。亡國の音は哀く思ふ。其民くるしめばなり。故に五行の氣みだれて、風雨節あらず。五穀豐熟せず。人疾病多し。夫衆ありて禮なき時は、讓ることを不レ知。終に相爭うつたへて凶人多し。禮なければ節なし、節なければ或は同く或は餘あり。有餘の者は奢て淫し、不足のものは困窮しかなしむ。哀情淫氣天地に感じて、不正の氣生ず。たとひ禮ありて治といへども、樂なければ和せず。禮いたつかはしきときは、人心たのしまず。たのしまざるときは、かへりて淫を好む。貧賤のものに至まで、みな淫亂の行わる事は、樂の道行はれざればなり。　問。天生じ地育し人助と云ときは、かならずしも聖賢ならで

の數なり。この數の變ありて、人倫みだれむとす。故に天より堯湯を生じてこれを消さしめたり。堯湯のために水旱なし。水旱のために堯湯生ず。聖人の天地の變をつゝしむことは、禮樂より大なるはなしといへり。

一。箏の糸は河圖の數なりといひ、世間のうたひ物に宮の不ゝ立等の言は、近江國河合村の瞽者これをいへり。是に心付て考ることしかり。世に耳さとき瞽者多しといへども、學問なく、其上座頭の座に入て、其心世間にそみぬれば、かやうの所には心もつかず。いにしへのごとく瞽者を樂官にまじへましかば、樂音に益ある事すくなからじ。座頭の座といふもの、瞽者の心をいやしくなし、其耳をふさぐ所なり。

一。天地の化工無盡藏なりといへども、聖人これを助けざる時は、造化の功をなす事あたはず。聖人の天地をたすくる道は、禮樂を大なりとす。天尊く地卑して乾坤定るは禮也。聖人これに則とりて、禮を制し式を作る。天地の間に万物生々す。和氣の流行にあらずといふことなきは樂なり。聖人これを助て、樂は人心を和するより先なるはなし。人心和するときは雍和す。雍和するときは天地の和氣應ず。天氣時にくだり地氣時にのぼり、陰陽和合して、万物を煦嫗覆育す時は禮なり。和は樂なり。かゝまり生ずる物達して草木茂し。羽翼あるものふるひ、蟄せるものよみがへり、卵生のものやぶれずして、羽を以て伏しあたゝめ、胎生のものさけずして孕育をとぐ。天は氣を以てあたゝめ、地は形を以てあたゝめて、又殺みのる。万物の生々は、天地の和化をもつて

勝も、ともに順にはあらず。其間凶年多しといへ共、寒の勝は暖の勝よりは、人もつよく物も堅し。又人の生るゝことすくなし。亂極ては治となる。人も亂世に退屈して治世をねがへり。賢人君子にはあらざれ共、其世中にては寛仁なる生付の意氣ある人出來て天下を一統す。久しき戰國の名殘にて、萬事用たらざれば、いまだ質素なり。道德の紀綱にはあらざれ共、治世の初にてをのづからしまりあり。故に歲の惣躰寒氣多し。　問。暖勝ときは人多生じ、寒勝ときは人すくなく生じ、且すくなきときは善人あり、多きときにまれなるは何ぞや。　云。四時を以て見べし。春生ずるものはすくなし。夏生ずるものは多し。春生には靈物多し。夏生には不靈の物多し。菓實も多ときはちいさく、すくなき時は大也。故に人すくなく生るゝときは、才器あるものなり。多く生るゝときは、才知あるものまれなり。哲は明なり。豫は不明也。あきらかなれば時にあたゝかにして靈物生じ、不明なれば天氣否塞し、暖過て不肖多く生ずる也。　問。急なれば恒に寒したがふは何ぞや。　云。急は剛惡に近し。威勢にまかせて人をくるしめ、才智に自慢して賞罰つよく、殺伐の氣流行して寒氣すぐるなり。天道生々の理にそむくゆへに、不慮にやぶれ出來て亡る事あり。　問。蒙なれば恒に風したがふは何ぞや。　云。心思蒙昧にして、善人をいみ小人を近付、政令下にいたりて違逆す。故に不正の氣流行して、暴風しげく、物をそこなふことあり。　問。堯の時に九年の水あり、湯の代に七年の旱ある事は何ぞや。　云。天地の間必然の理あり。或はしかるの數ありといへり。洪範に論ずる所は必然の理なり。堯湯の水旱は、或は然る

貧く民困窮すれば、人皆利におもむきて義を忘れ、人心のあしく成事くづるゝがごとし。人心あしければ天氣時ならず。煖暖の氣勝て、夏の暑秋に行て、すゞしき事をそし。冬といへども寒氣うすく、たくはへすくなければ、來歳五穀實のりすくなく凶年多し。　問。昔日本の國南へよるといへることあり。其道理は有べからず。しかれどもいひ出せる所には故あらんか。　云。故あり。南へよるにはあらず。氣の北するなり。世中紀綱ゆるまり、人氣しまりなく、驕奢長ずるときは、氣北するなり。南の氣北にゆきて、暖氣をほく寒氣すくなし。此故に世間に人多生れて、善人すくなく氣躰よはし。たゞ人のみならず、草木金石までも性やはらかになるものなり。中夏にても、周の末には寒歳なしといへり。全く寒歳なきにはあらず。歳の惣躰暖氣多し。故に俗に南へよるといへり。氣北すれば南へよるがごとし。人心の靈なり。　問。其時にも十一月十二月に至て、時として甚寒ありし事は何ぞや。　云。士民困窮の氣の感ずる所なり。時として嚴寒あれども、實は寒すくなし。　問。さやうにては世も程なくつきぬべけれ共、又とかくつゞく事はいかゞ。　云。紀綱ゆるまり驕奢長じ、士民困窮する時は、兵亂出來るものなり。戰國となれば、殺伐の氣流行するのみならず。軍國には戰陣の事にのみ心を用て、驕奢のいとまなし。兵粮に迷惑して、万事不自由なれば、をのづから人氣にしまり出來るものなり。故に天氣又南する也。北の氣南へ行ゆへに寒氣勝なり。故に秦亡て煖年なしといへり。戰國なれば、紀綱ありて。しまるにはあらざれ共、境界のしからしむるにて、無㆓是非㆒奢やみて、質素なるがゆへなり。暖勝ぬ寒

し、心思の妄を眞知しるといへ共、箏の爪音に發し、琵琶のばちあたりにあらはれたる様に恥て、ふかくかへりみる事なし。心術常に和せずたのしまざれば、邪穢の氣したがつて入易し。　問。肅乂哲謀聖のうち、四は學て及べし。聖は及びがたからんか。　云。末書に云。肅而貌事脩。貌澤水。有ニ時雨之類應一。乂而言事脩。言揚レ火。有ニ時暘之類應一。哲而視事脩。視散木。有ニ時燠之類應一。謀而聽事脩。听收金。有ニ時寒之類應一。聖而思事脩。思通土。有ニ時風之類應一。この聖は聖人の聖にはあらず。よく万物一躰の思を致して、民を子とするの心いたらずといふとなきをいふなり。　問。狂なれば恒に雨したがふといへり。狂は肅の反也。肅雨何ぞ狂にしたがふや。　云。肅雨は時雨なり。狂雨は時雨にあらず。雨の過なり。故に恒にいへり。狂は放蕩にして不敬なり。人氣隨なり。風俗淫すれば雨しげき類なり。　問。僭は品をこえ禮にたがふ。乂の反也。何ぞ恒に暘したがふなり。　云。乂暘は時暘也。僭暘は過るなり。人倫序を失て品をこゆれば、人心たかぶりて火氣多し。故に日でりがち也。　問。豫なれば恒に燠したがふは何ぞや。　云。豫は猶豫不明なり。天運自然に治世になりて、數十年すれば、油斷して萬々歳と思へり。解緩して紀綱ゆるまり、万事結構に過てしまりなきもの也。道なき治世のやぶれは、剛惡と柔惡との二なり。剛惡は急に亂れ、柔惡はくらゐづめに亡るものなり。結構に過たるは、惡とはいひがたけれども、しまりなければ人心我まゝになりて、風俗をごり、貴賤ともに堪忍の情うすくなりて、万事過分なり。故に商人富に過て士貧くなり、國郡の主といへ共、次第に藏乏く成て、民に取事倍す。士

かたし。

問。哲なれば時に燠したがふは何ぞや。　云。哲は明なり。上の心明なれば、君子進み小人退き、文武禮樂の道盛なり。仁政行はれて春風和氣のごとし。あたゝかなるべき時にあたゝかにして、生々の功とぐるなり。　問。謀なればときに寒したがふは何ぞや。　云。謀は度なり。藏密の意思あり。知ふかくして家國天下紀綱のしまり堅固なり。故に寒すべき時に寒して、來歳春夏秋のたくはへ厚して五穀豐熟なり。　問。聖なれば時に風したがふは何ぞや。　云。聖は通なり。通ぜずといふことなし。風は入也。よく物に入て濕をはらひ、雷風相應じて物の留滯を通ず。故に先王樂を作て邪穢を消し、意氣を發はしむ。堯舜の御代五風十雨、風枝をならさず。雨土くれをながさず、万物生をとげて五穀豐熟なり。人は天地の德神明の舍なり。天氣常に人心にしたがふ事明なり。人心は無聲無臭なり。其心に思ふ所事にあらはれざればしられず。事にあらはれて知はおそし。見聞の及ばざる所、心思隱微の地にをひて、正邪を知ものは樂なり。鬼神は知レ人知レ己。知すでに糸竹の音に發するときは、つゝしまざる事あたはず。孔子云。由が瑟何ぞ丘が門にをひてせんと。子路むかし勇を好めり。智仁勇は本心の德なれ共、好むはすでに過たり。これによつて瑟の爪音に殺伐の聲ありし也。故にいにしへは君子、ゆへなければ琴瑟身をはなたずといへり。不レ知不レ識隱微に不正あらん事を恐てなり。たとひ聲音に通ずといへども、問學なければ及がたし。問學聲音かね習といへども、心術くはしからざればこゝに至りがたし。身の過を人格

に火をかけて羹とゝのふ。宮商角徴羽の五音備らざれば、かりそめの樂もならざると同じ。木火土金水は五行の形象なり。宮商角徴羽は五行の神聖なり。神ありて後形象あらはる。故に律呂定て萬事萬物の用備れり。

一。或問。雅樂は宮に初て宮に終といへり。しかるに正樂といへる中にしからざるものあるは何ぞや。　云。いにしへは格法なし。宮の位だにすはれば初りは定らず。故に五常樂の序は徴にはじまりて、急は宮に終れり。夫天地あれば萬物あり。萬物あれば事あり。事あれば君なくてはおさまらず。徴にはじまりて宮に終るの義なり。又宮にはじまりて宮に終るは、事君より出て君に歸する也。同じ道理なり。古詩は自然に出たり。其中に心なくして、宮の首尾あるをとりて定法とし、これにかなふやうに後世は作せり。故に首尾相叶ても、樂はさのみよからぬあり。作意せるゆへなり。

一。或問。聲音の道、天地神明に通じ、政と相應ずる事如レ此親切なり。其初め人心の物に感ずるよりなれり。しからば洪範の休咎をたがふべからず。肅なれば時に雨したがふものは何ぞや。云。肅は敬なり。篤恭にして天下平かなるの義なり。上下同心同德にして、禮儀の風俗となるときは、人心滋潤なり。故に天氣くだり地氣のぼり、陰陽和して時雨したがひ、生育の功はじまれり。　問。乂なれば時に暘したがふは何ぞや。　云。乂は治なり。姦惡かくれず。盜賊消す。門戶とざゝず。貴賤氣づかひなくして心易し。天氣のはれたるがごとし。故に時暘したがひて生物

冬七十二日、土用七十二日、合て三百六十日なり。これ木火金水土の五行の氣のめぐれる數なり。一晝夜に十二時あり。一年に十二月あり。十干十二支のまじはりめぐるを見て、三百六十日に六の甲子を立て運氣を定め、四時をあやまらず。十干は甲乙丙丁戊己庚辛壬癸これなり。五行各陰陽ある故に、十干と名付。十二支は子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥これなり。鳥獸の形と性との星に似たるを以て、人の知やすきがために名付たり。それ天に二十八宿の星有て、日月のやどりをしれり。しかれ共天はやむ事なくめぐれば、其所さだまらず。春秋の晝夜ひとしき時を以て星の所を定め、これを地に名付て二十四支と云。二十四支は十二支陰陽の名也。これをすべて十二支といへり。天は至動なれば、地の靜なるによりて東西南北の十二支を定め給ふ。二十八宿と二十四支とかはりなし。しからば二十八支あるべきに、二十四支といふは、天のまどかに地は方なり。方なるものは圓なるもの丶角々四方かくる故なり。十二律もすぶれば五音なり。十二支もすべて五行なり。行はめぐるなり。めぐれば生々す。木を生じて水老し、火を生じて木老し、土を生じて火老し。金を生じて土老し、水を生じて金老す。生るばかりにては用をなさず。相せめうつによりて用をなせり。水火相せめて物を養と丶のへ、火金相うちて鍋釜鋤鍬太刀刀を作り、金木相せめて薪をきり屋を作り器をなし、木土相かちて五穀を生じ、土水相かちて田をかへしかまどをたて壁をぬるも、五行かねよりて用をなせり。耕作も土をかへす鍬は木金なり。水を入て苗をうへ、日火をてらして長成す。食物をと丶のゆるも、土かまどをぬり、釜鍋となり、鍋に水を入、木

日本倫理彙編

と能はず。黄帝鳳凰の聲をきゝ給ひて、これを竹にうつしてきかしめば、平人も音律を知て、中和の德を養ふべしとおぼして、十二の律竹を定めたまへり。しかれども鳳凰は鳴てすぎたることなれば、うつしとるべき樣もなし。鳴音に十二律の分明なりしをきゝとゞめ給ひたるばかり也。なを後世のために、黄鐘の宮を天にうかゞふ法をなし給へり。黄鐘一だに定れば、のこる十一聲は八にして、子を生すればたがふことなし。　或問。黄帝以前は宮室もなく、人民穴居野處せり。黄帝初て室屋を作らしめ給ふとはいへり。萬事律呂にをこるとのたまへば、これも律呂にとれるか。　云。大かたのものはゆびをはこびひろとりて事たれり。宮室にいたりては分寸尺たしかならでは立がたし。律呂によりて分寸尺定りて後宮室も作られたれば、これ律呂におこるにあらずや。それまでは衣服もなく、木の葉をつなぎ、獸の皮を着せり。黄帝の後嫘祖かゐこをかひ糸をとり、冠をつくりきぬを織、衣裳をたちぬふことを初め、五色をそめわけて、貴賤をわかち給へり。これも分寸尺の度ありて、屋を作れるよりをりはたの器も作れり。いにしへはこよみもなし。天氣をうかゞひ、風の聲物のひゞきを聞、星を見て四時十二月の移りかわる事をしれり。次第に人の知覺天に遠くなりて、國所をへだてゝは耕作の時をあやまるべければ、容成大撓二人の賢臣に命じて曆を作らしめ給ふ。天の氣をうかゞふに、五日づつにて少うつり、十五日にて大にかはれり。故に五日を一候として七十二候あり。十五日を一氣として二十四氣あり。七十二候二十四氣をつくして、四時行はれ年なれり。これ曆數の本なり。春七十二日、夏七十二日、秋七十二日、

たる律は四五千年も以前の人に應ずべきか。かりたる律は四五千年も後の人に應ずべきか。黄帝軒轅氏のとき鳳凰來儀せり。雄を鳳といひ雌を凰と云。天地大和の氣に化して出生する大鳥なり。聖人天下の君と成て天地の化育を助れば、天地位し萬物育して三極立故に、三才相應じて天地人の氣大に和す。鳳凰其奇瑞なり。黄帝此鳥の聲を聞たまへば、鳳の聲に六音あり。凰の聲に六音あり。賢臣伶倫に命じて、崐崙山の嶰谷にて十二本の竹をきり、雄鳳の聲を調て陽律とす。黄鐘太簇姑洗蕤賓夷則無射是なり。雌凰の聲を調て陰呂とす。太呂應鐘南呂林鐘仲呂夾鐘これなり。陽は陰をかぬる故に十二律といへり。黄鐘は子の一陽に生ず。十一月の聲なり。これを十二の宮とす。黄鐘の竹九寸あり。空中に黍千二百粒を入。十粒の高さを一分とし、十分を寸とし、十寸を尺とし、十尺を丈とし、十丈を引とす。これ長短の初なり。黄鐘の竹に入たる黍千二百粒を一龠とし、十龠を合とし、十合を升とし、十升を斗とし、十斗を斛とす。これ多少の初なり。又千二百粒の重さを十二銖と定め、これを二にして一兩と云。十六兩を一斤とし、三十斤を鈞とし、四鈞を石とす。これ輕重の初也。その外萬事律呂にもれたるものなし。故に聖人五音十二律を調て氣を順にし心を正くす。是政教風化の本なり。　或問。伏犧氏のときすでに五十絃の瑟ありといへり。十二律五聲なくてはいかでしらべられしや。　云。音聲のみならず。黄帝以前は、物の長短も指をのべ手をひろとり足をはこびてこれを定め、多少は手にすくひ目にて分量をわかち、輕重は手にもちくらべて知たる也。瑟も實にしらべて五聲十二律をなし給へり。故に平人は及こ

り。黄帝の時天にうかゞひ給ひて、黄鍾の律定りたるは、其時の天地人の氣に應じたるなり。いま聖人出て天にうかゞひ給はゞ、今の三才に應ずる黄鍾あるべし。　問。しからば九寸も九寸ならざらんか。　云。又今の九寸あるべし。然れどもなるほど微なる事にて、目にみゆる程のちがひにては有べからず。今十二律に二通あり。一通は中律よりはめり、一通は中律よりはかりたり。平調の宮の糸にて心むれば、糸のしめかげんにはよれども、二三分の上下あり。一分を二三にじて、目に見がたきうごきにてだに、耳にたつめりかりあり。いはんや二三分のちがひは、大なる上下なり。しかれ共律の竹にては、リンフンにも及ばぬほど微なる事也。又竹の空中にリンマウのちがひあれば、別の竹にてはしられず、中律にめりたる竹にとくさをあてゝ中律にあはせ、又とくさをあてゝかりたるにあはせて知べし。　問。音には尺度權衡の樣に寸分リンマウの格法なし。何によりて律とし、上下とせんや。　云。今のめりたる律にて、糸をしらべて樂をすれば、靜にてよき樣なれども、樂の後心氣うつけたるがごとし。不足の氣味あり。故に中律よりもめりたると知なり。今のかりたる律にて、糸をしらべて樂をすれば、急度したる樣なり。樂の後勞せるがごとし。故に中律よりもかりたると知なり。其上めりたるは、三管のうつり和に過て聞えがたきがごとし。かりたるは三管のうつり和せずして又きこえがたきがごとし。中律と思ふは三管のうつり和してよくきこゆるがごとし。今の二通の律の中にとぢを立れば、大方中律にかなへり。中律にて糸をしらべて樂をすれば、能和して心氣流通し、樂の後たのしめるがごとし。今のめり

なり。淫聲は商羽めるゆへに、用心に一律かかせたるにても有べし。物は大になるほど聲ひくし。めるは大になる也。臣は大になるにしたがひて、君位をうばへり。物の大になるは驕なり。其律よりもめるは、法を不レ守して我まゝなるかごとし。淫聲しかり。

一、壹越斷吟平調勝絶下無雙調鳧鐘黄鐘鸞鏡盤涉神仙上無、此十二は調の名なり。いにしへに十二調有しなり。今十二の律竹に名付るはあやまりなり。黄鐘大呂太簇狹鐘姑洗仲呂蕤賓林鐘夷則南呂無射應鐘、是十二律の名なり。　問。黄鐘林鐘を生じ、林鐘太簇を生じ、太簇南呂を生じ、南呂姑洗を生じ、姑洗應鐘を生じ、應鐘蕤賓を生じ、蕤賓太呂を生じ、太呂夷則を生じ、夷則狹鐘を生じ、狹鐘無射を生じ、無射仲呂を生じて成就す。仲呂より本の黄鐘にもどる所、もどらず。皆八にして相叶ときは、もどらざる理なし。八目〳〵にめぐる時、氣味よくあいたると思ふは、少過る故に、つもりては本の律へもどらざるか。今は其心してもどるやうにきるものあり。いかん。　云。もどるつもりは理屈なり。もどらざるは天理なり。春夏秋冬めぐりて春をかへすといへども過し春をかへすにあらず。春は又あらたに生ずるなり。人の呼吸も入たる息のまた出るにあらず。出たる息の又入にあらず。出たる息は盡て新に入、いりたる息は盡て新に生ず。天地の理何にても後へもどるといふとなし。川の流も、山澤氣を通じて神化より生じ、ながれて海に入て潮とともにつくるなり。潮汐のみちひは、則水の生滅なり。あなたこなたするにあらず。所によりてかはりあるは、地の勢なり。夫仲呂より生ずる律は、本の黄鐘に少かりて、別に又黄鐘あ

て君威をやはらげ給へば、人情時變君の心に通じて、權威下にうつらず。仲哀應神の帝みづから大將として九州にをもむき給ひしは、變宮の道理なり。中夏にて楚王信反逆せしも、高祖天下を有てたのしめり、自身むかふとあらじ、大將をくださば我に敵する者なしと思ひしに、高祖みづからむかはれしかば、信亡びたり。平生君は下すちかからざれば、却て威を失ふものなり。君たる人君の位に執滯してはたらきなければ、次第にうづだかくそなはるやうなれども、下の事をしらざれば、下に知ものの出來て、君位おとろへ、亂世となるもの也。變宮の理をしらざればなり。變徵の道理も又政道に通ず。徵は事也。國家の事は定法あり。然れども時處位によりて、權を以て義にかなふことあり。禮法は根本義よりをこるものなれば、變通して本に合す。これ變徵の理なり。變通すべき所にて變通せざれば、事行はれず。却てやぶれの端となるものなり。黃帝堯舜其變に通じて、民をして倦ざらしむといへり。問。羽より宮にゆき、角より徵にゆく。いつも變宮變徵なるべきか。　云。かならずしもしからじ。これも時有べし。物やはらぎたるばかりにても、とゝのほらず。急度したる所もなくて不叶。時に直に羽より宮にゆくべし。事よく叶ばかりにても流れ易し。時にゆきがたきをもつとむるを以て立べし。　問。嬰羽嬰商はいかん。　云。嬰は物のわかきなり。物は備りやすく、臣は大になり易し。故に商羽皆わかきに退てみださゞらむとす。平調にて姑洗け仲呂にゆき、應鍾は黃鐘にゆく、これなり。律の調皆しかり。物のわかきは聲高し。黃鐘はひきゝの始、應鍾は高きの極なり。しかれども應鐘よりたかきは、又黃鐘の半聲

を以ていへば、十二律に律呂あり。六律六呂これなり。思ふに今の律呂の名は、日本人の言なるべし。壹越雙調の聲はやはらかなり、故に呂といひ、平調黄鐘盤渉の聲は急度したり、故に律といへるか。常のものいひも、唐人は聲にいふなれば、かたかるべき事なれども、やはらかなり。日本人は訓にいふなれば、やはらかなるべき事なれども、急度したり。中夏の音は角徴の間に二律をへだて、日本の音は商角の間に二律をへだてたるちがひなり。故に壹越雙調は中夏の調にして、平調黄鐘盤渉は日本の調なる事を知也。日本は日の本にして陽國也。故に日本の調を律といひ、それに對して、中夏の調を呂といひたるとも有べし。本中夏の黄鐘盤渉平調の調は、今の調にては有べからず。中夏の調には、變徴變宮ありて嬰商なし。日本の調には、嬰羽嬰商ありて變徴なし。故に變徴變宮は中夏の音にして、嬰羽嬰商は日本人の言なるべしと知ところなり。

問。日本の音律には、變徴變宮の聲なし。いろ〳〵にいひて此音をいふものあれども、道理にかなはず。

云。今日本の樂にはなしといへども、變宮變徴の律はあり。壹越調のときは、南呂より黄鐘へうつる所、二律へだてゝ聲和せざる故に、應鐘へつたひて聲和するを變宮と云。故に壹越調には應鐘を變宮とする也。姑洗より林鐘にうつる所、又二律へだてゝ聲和せざる故に、蕤賓へつたひて聲和するを變徴と云。故に蕤賓を變徴とするなり。雙調は應鐘を變徴とし、姑洗を變宮とす。いにしへ中夏の樂には、此うつり有べし。變宮の道理君道に通ず。をり〳〵は臣のわざにもくだりて人情に達し、事あればみづから大將となりて四方を征し、或は諸侯を客とし、親み

日本倫理彙編

ども、いまだ下にありて微なるがゆへに、杜立かくのごとし。上古は太子といへども、臣と相ゆづれり。父君在時の禮なり。さくや此花冬ごもり難波の御子のごとし。七よりは五聲順なり。即位以後の象なり。

一。黃鐘調七より向は君臣民よりも事物大なり。夏の聲なればなり。天下の事農より大なるはなし。夏三月は農業の最中にて、野も山も事なり。草木しげりみちて物大なるの象なり。

一。樂は樂なり。心のたのしびは一なり。其をもむき異なり。道をたのしむは雅樂なり。欲をたのしむは淫樂なり。

一。笙は大臣の象なり。ひとりならずして相竹六一度に鳴は、賢をすゝむるの義なり。笛篳篥は手こまやかなれども、笙は大やうなり。大臣察に過るはあしければなり。笛篳篥は諸官のごとし。こまやかならざれば事とゝのほらず。大臣は大やうなるがよけれ共、明かならざれば、下をこたりわざむきて、一人にてなすべき事を、二人三人にてする事あり。かくのごとくになりては、役人多く出來て、武臣すくなきものなり。武臣すくなく、役人多ければ、武威よはし。手のこまやかなるは、人少にてよく用を達するの象なり。しかれども笛篳篥も、宮に至ては絃と笙に同じ。小官も家に歸りては家の君なり。至治は易簡なれば、休息のいとまゆるやかなるの義なり。徵のすなほなるは、事せわしからず、大事は化して小事となり、小事は無事になるの理なり。

一。或問。平調黃鐘調盤涉調を律といひ、壹越調雙調を呂といふは何ぞや。云。いにしへの律呂

二律次第にみじかくて次第に聲高し。應鐘を宮とせずして黄鐘を宮とするは、中にて大きなるものは長子なり、故に長子を宗とするの義なり。

一。笛は大かた羽一律かるなり。物は大になり易し。物大なれば民困窮す。これまた用心なるべし。物の大なるは奢なればなり。

一。三管琵琶箏すりちがひてゆく所あり。しかれども合奏しては和す。皆同じやうにては國家の事行はれず。異にして和するを大同と云。同くして和するは小人の道なり。

一。箏の呂のしらべは上古の風なり。五より向は宮徴羽なり。伏犧神農の君たるがごとし。君みづから事をとり物を始むるの象なり。五より後は、宮商角徴羽の次第順なり。黄帝堯舜衣裳をたれて天下治るの象也。　問。宮よりも徴羽大なるは何ぞや。　云。天地ひらけて万物あり。万物ありて事あり。事あれば君なくては不レ治。故に君を立たり。事物先なる故に如レ此し。　問。呂の調は宮商角みな一律のへだてなり。律の調に異なるは何ぞや。　云。是は日本の人もろこしへ行て習ひとりたる調子なれば、もろこしの律のまゝにして、角徴の間に二律あるなり。

一。平調は我朝の神代人皇の時のごとし。始より君上臈にて五位順なり。又太簇は寅正月の律なり。三陽調て盛なり。五調子の長なり。故に五常樂も平調にあり。一は師保の宮なり。上にをるといへども勢なし。小にして聲高し。人臣なればなり。

一。盤渉調は冬の調子なり。一陽下に生ずといへども其微也。いまだ春をなすに不レ及。陽は君なれ

日本倫理彙編

いふべからず。一向宮なきふしならずや。　云。宮のたゝざるうたひ物多しといへども、又宮をたてざればうたはれず。この故にをもかげばかりも宮はあり。戰國にも禁中ありて官位をば申請られたり。政令出ざれども、君の位ばかりはありしなり。うたひ物のふりもかくのごとし。小歌もりうたつといふには少宮あり。其後の小歌はをもかげばかり也。まひも大かしらは少宮あり。幸若よりは以前のふしなるべし。　問。世間大かしらといへるは本大かしはなり。大かしはといふもの、幸若が弟子と成て初めたるものといへり。いかん。　云。かうわかは本武士なり。まひを好てよくまひて、後まひ人と成たり。大かしはがまひたるは、幸若より以前のふしなるべし。萬のうたひもの、初はふしすなほなり。後ほど潤色するものなり。大かしははすなほに、幸若は潤色多し。故に以前のふしをおこしたると知ところなり。祝言修羅の宮は急度して和なし。平家はゆりて宮をたもつ。みな立がたき兆なり。賴朝尊氏家の天下をたもつは、ちからを以て威を持たり。祝言修羅の宮のごとし。北條は一向商になりて、代をかさねたり。宮にては立がたき勢を知ばなり。しかれども實は宮なり。立がたき所を立て、代をかさねたるは、平家のゆりのごとし。

一。管は商一律かる所多し。これは臣はをごりやすきによりて、をさへたる用心なるべし。めるは大になる也。かるはちいさくなる也。商は臣なれば、一律からするはへりくだりたる象なり。万物少き物ほど音高し。人も幼少の子は聲高し。成人にしたがひて聲ひきくなるものなり。故に十

されば、各別の事也。日本のこうたにたゞひとつ呂のいきのふしありたるを聞たると云ものあり。律呂の學ありし人わざと作て、ふしをつけ置たるか、所により中夏の風のごとくなる所ありて、うたひ出せるか知べからず。催馬樂の呂律といへるは、黄鐘調を呂の樂といひし類ひにや。今黄鐘は律の調なれども、十二音を十二月に配すれば、林鐘は呂に當れり。林鐘を宮にして黄鐘の樂となれり。黄鐘に平調と同じ。律の樂なれども、林鐘によりて呂といひし類ひか。たゞし中夏にて、黄鐘の樂に呂ともいふべし。　問。祝言平家のふし、宮すはりても淫聲なる事は何ぞや。云、平家は宮に聲のゆり有。商へ行をやらじとてゆりたるものなり。實に宮のすはりたるにあらず。祝言のふしは聲こはくして和せず。ちからを以ておさへたるがごとし。實に立たる宮にあらず。平家祝言ともに、宮のうごきたる勢也。かつらのふしは、宮の位商にうつりたり。一向臣にまかせたれば和する勢あり。故にかつらのふしは和なり。しかれども宮終に位を失ひたれば、眞の和にあらず。今殘りたる俗のうたひ物は、武家の代となりて以來出來たるものなり。其中にては平家のふし久しきか。其次にうたひのふし出來たりと見えたり。先祝言の吟をこりて後、かつらとなりたる躰なり。まひは武家戰國の間に出來たるふしなるべし。宮いよ〳〵たゞずして羽はめらず。宮のたゞざるとは小歌よりも立ず。小歌は羽めれどもまひはめらず。　問。何を以てか戰國の聲といへるや。　云。戰國は國々我持なれば、君なきがごとし。羽のめらざるは、戰國は兵粮に迷惑して、をこる事あたはず、もの質素なればなり。　問。戰國は君なし。宮たゞずとも

聞て、應ずるやうになをして敎へたるなるべし。これ國俗に應じたるものならん。もろこしは士と民との間近し。日本は士と民との間遠し。民は日本の土民なり。士は王孫にて、姓を給はりたるものなり。天神の孫なれば、士と民と異なり。同く民間にすめども、士筋のものは民と座列各別なり。此他の國になき事なり。故に商角の間、二律へだたりたる聲あり。聲音の道政と通ずる所なり。四五百年此かたおこりたるうたひものは、其商角の間、二律へだゝる上に、又角のかるとは甚過たり。困窮に近し。兵と農とわかれて、民困窮する前知なるべし。或問。うたひもあけの所は宮にてすはれるはいかん。云。權柄臣にありといへども、大禮には君の位を易る事あたはざるがごとし。問。日本の聲は角一律高しといへる、士民の躰はさも有べし。聲音にをひて證據ありや。云。あり。もろこしの律書のごとくにては、今のうたひ物いづれもうたはれざるなり。箏をしらべて今のうたひをうたひてみるに、律書のしらべにては、角めりてふしゆかず。其外のうたひもの、いづれも律書の角にてはうたはれず。一律高からざればふしゆかず。たとひいにしへは今とかはり、うたひ物の宮商角徵羽は正しくとも、此所は日本の聲の生付なるべし。或問。催馬樂歌に呂律あり。うたはれざる事は有べからず。いかん。云。催馬樂の呂律といへるふしはかせ何とか有けん。ふりたえぬればしりがたしといへり。角徵の間に二律へだてたるいきに作て、ふしはかせを付なばうたはるべし。されど日本にて自然にをこりたるうたひ物には、此いきなし。中夏の律書のしらべにてうたひては、ふしゆかず。心ありて作てなすは國風にあら

臣事をとりて權威つよきの象なり。又羽めるなり。これ物の大になる也。物の大になるは驕奢なり。君に君德なければ、紀綱ゆるまりておごり長ずる故なり。故に小歌は淫にしづみたるものなれば、世間にも淫風と知所なり。　問。小歌の羽のめる事、風俗にかなふとは何ぞや。　云。羽のめるは風俗より出たる聲なり。羽は物なり。めるは大になるなり。萬事分に過たるは羽のめるなり。これによりて士貧く民困窮す。羽めるときは角かる道理なり。かるはちいさく成たる也。角は民なり。世間おごるときは民困窮せり。　問。つくし箏の小歌は、少しよきやうに聞ゆるはいかゞ。　云。平調のしらべを用ひ、角羽の糸めるなり。羽のめるは小歌の音めるゆへなり。角は小歌の音めらざれども、糸をめらするは、左手をはたらかしめ、おさへんが爲なり。角は民なり。民の勞しくるしむ象なり。樂には宮の糸に左手なし。つくし琴には、七爲に左手あり。これ君かろくしてをかしやすきの象なり。世俗の小歌にかはりなし。しかれども、上らふの器をかりたれば、そのひゞきによりて、同じ小歌なれども、其聲色いやしからぬやうに聞ゆるなり。上らふのをちぶれて、下らふのわざをするがごとし。つくしごとはじまりてより。流浪人多も、其應なるべし。

一。日本の律の調は、角一律高し。もろこしより渡たる律書に、今の律の調はなし。もろこしより渡りたる音律なるに、如レ此あることは不審なりといふ人あり。秦の代に初てもろこし人日本へ來れり。中國にて名人の聞えある人は、大方渡れり。始皇が惡政をさけたるなり。故に日本の聲を

て、源の頼朝より武家の世となりたり。武家の代のもやう、平家うたひのふしにあらはれたれば、始て天下をとる人は武威盛なり。又傍輩たると近き故に、諸侯の交り親し。人傳なる事すくなきによりて、君の威臣にくだらず。平家と祝言のふりのごとし。代をかさねて天下をたもてば、次第におも〳〵しくなり、諸侯の親みも遠く位尊きやうなれども、君威の實はやがておとろへて臣にうつるものなり。ゆるやかに物ごとに結構なるやうにみゆるは和なれども、かつらのふりのごとし。宮かとおもへば商なり。又角かるなり。角は民なり。かるはちいさくなる也。世上をごれば民にとる事つよし。故に角のかるは民の困窮の象なり。君子といへども其代に生れては、其代の聲あり。宮不レ立五聲順ならざるは、淫聲なれども、淫聲の中にても、彼は此よりよきあり。平家うたひこれなり。樂の唱歌は、琵琶箏なくてはうたひがたし。今は琵琶箏も人により所によりて自由ならず。春のうぐひす秋の蟬だにも、自然に吟聲發す。いはんや人は心知あつくして情思深し。うたひものなくて不レ叶。後世明君出たまひ道行はれて、自然に雅聲のおこらむまでは、せめては平家うたひ舞などは、なぐさみにうたひてもくるしからじ。情をのぶるの一なり。今婦人に病人多きも、小歌は風くだりてうたひがたし。箏琵琶をしらざれば、唱歌もしらず。うたひは婦人に似合ず。情をのぶべきたよりなき故なるべし。　問。今小歌は世間にも淫風なりと思へり。あしき者のとりあつかひ、下々のうたひ物とす。五聲のみだれうたひよりも甚しきか。　云。小歌は宮いよ〳〵たゝず。おもかげばかりなり。宮にすはるべき所、皆商にすはりて徴となる。

ども六糸鳴は宮に初て宮に歸す。政令君より出て君に歸するがごとし。宮の糸に左手の色なきものは、宮の位をうごかさず。君を尊ぶの義なり。　問。何をか宮たちても和なきと云や。　云。うたひにては祝言修羅鬼むきといふもの、宮は大方たて共、吟こはくして和なし。和なくして立たる君は、ちからつよきがゆへなり。人質をとりちからを以てかためたるがごとし。人心服なければ、ちからおとろへぬるときは亡るなり。故に宮の立と云。正樂の宮の立たるがごとくにはあらず。平家と云ものゝふしは、宮立といへども、宮の所には聲のゆりあり。君の位のあやうき兆なり。正しく立たるにあらず。事は清盛一家の事をいひ、ふしは頼朝北條の時代に出來たる成べし。うらみていかる聲に似たり。聲こはくして和なし。　問。何をか和すれども宮不ㇾ立といふ。　云。うたひのかつらといふふし、和なれども宮たゝず。聲和なるがゆへに、ことばのよきは、うたひて人の心もなぐさむ樣なり。初めは祝言等の吟ばかりにて、かつらの吟は後に出來たるなるべし。今のうたひ物の中にては、うたひの吟はまされり。平家まひすべて今のうたひ物は、大方武家の代と成て出來たり。小歌は時代〱に下よりをこるものなり。風俗婬すれば小歌のふしも淫風なり。民くるしめばかなし。平家うたひのごとく定ていひ傳るにあらず。　問。平家うたひも淫聲ならば、なぐさみにもてあつかふまじきとか。　云。平家の音は亂世の音に似たり。かつらの音は亡國の音に似たりといへども、これは作りたる時代の聲なり。又後世其音にかなふ時もあるべし。うたひのみならず。常の言語にも、其時代の音あり。平の清盛王威をけづり

れたりといふとも、何によりてか雅樂をおこす事を得んや。　問。平日の物語より、小歌さみ線のたぐひに至まで、五音にもれたるものはなし。何れにても五聲はしらるべきか。　云。尤いづれにも五聲あり。しかれども、正樂の五聲と淫樂の五聲と、ふりといふもの各別なり。此ふりたえては、又おこす事成がたし。いにしへの琴のふりたえぬれば、和漢ともにおこす事かなはざるを以て知べし。其上淫聲は宮不ㇾ立。俗のうたひ物に、宮の立たるもしはあれども、其聲和なし。和あるは宮不ㇾ立。共に正樂にあらず。和なくして立たる宮は、まことの宮にあらず。武人大君となりたるがごとし。この故に長久ならず。物の始なれば、清盛賴朝是に當れり。正樂は和して宮立ぬ。故に正樂たる事をしれり。後世のうたひ物は、宮かと思へば商にうつりぬ。君位を臣のおかせるなり。故に五音正しからずといへり。これ淫聲のしるしなり。箏は秦人ふたつにして、糸數減じたりといへ共、すがきの一聲河圖の數にかなへり。一六二七三八四九五十是也。此格は五十絃二十五絃十三絃かはりなかるべし。五聲一度に發して一聲のごとくなるは、五倫和睦の象なり。一糸をならせば聲すみ、六糸一聲なれば聲にごるがごとし。和する所には明察すくなし。樂は同をなすの本旨なり。春の日はうちかすみてうらゝかに、月はおぼろにしてのどやかなり。日月音樂ともににごるにあらず。和の至なり。光をやはらげ塵に同きの象なり。すがゝきの後小爪して一糸をならすは、秋陽のごとく秋月のごとし。和にながれずして中立し、明白にして心くもりなきの象なり。五聲めぐりて宮を相なすは、四時土用のたがひに應ずるがごとし。五音なれ

云。もろこしの人は音樂に達者なるゆへ、代々に作りかへて本を失ひ、我朝の樂人は作り改る事成がたき故に、むかしの傳のまゝをまもりて不ㇾ失ゆへに、古樂は日本にのみ殘れり。後世もろこしに明王出たまはゞ、日本に來て古樂を學ぶべき也。　問。琵琶は胡國の樂器なりといへり。いかゞ。　云。琵琶は女媧氏の作なり。むかし四時の氣不順なりしとき、女媧氏琵琶を作て、四絃を四時にかたどり、雅聲を發し給ひしかば、春夏秋冬其時を得たりといへり。數千歳をへて、中國にはとり失ひ、胡國に落とまりしかば、胡國の樂器といへり。樂は聖人神明の德なくては作る事なりがたし。聖作なる事うたがひなし。夫八音の中にては糸を君とす。糸の中にても琴を上とす。宮の聲は重を主とする事あれども、微なるを學ぶの儀なし。今の琴聲は微音なり。是君の德を失へり。いにしへの音にあらず。又今の琴は其のかたちうるしにてぬりたるものなり。堯の時まではうるしなし。舜初てうるしをとり、器をかたくするとをなし給へども、日用飲食の器かたくして、けがれのしまざらんがためにして、いまだ琴をかざるにいとまあらず。其上聲に害あれば、琴瑟にうるしを用べからず。今の中國朝鮮の樂器は俗に落て、日本の俗樂のごとくなりと見えたり。　問。正しき傳へもなく、詩の言葉もなきに、今の樂を正樂なりとの給ふ事は何ぞや。云。宮商角徵羽を以て正樂といふ事を知なり。今の俗の鳴物うたひ物は、いづれも五聲正しからず。雅樂は五聲正しくして、律呂備れり。後世道行はれ、生質音律に器用なる人道を學び樂を習ひなば、代々をへて詩樂をこる事有べし。此樂亡びては、後世明王おこりたまひ、器用なる人生

にはあらず。されども不ㇾ用して、當時の淫聲をのみもてあそべり。古樂の亡ざりし證據あり。周子云。樂聲淡。則聽心平。樂聲善。則歌者慕。故風移而俗易。妖聲艷辭之化也。然これ周子古樂を學び新樂を聞て知ところの語なり。隋唐に亡で跡なくば、周子いかむしてか古樂をきかむや。

問。上古の樂は調子ひくし。其證據は、琴の聲微音なり。樂書の中に琴の譜あり。合せてうたひてみるに、今の樂の調子とは各別なりといへり。　云。其ひききといへるは、下調子の事なり。同じ平調の糸にても、二の聲よりも七は高し、七よりも爲はまた高し。然れども調子は同じ平調なり。高下共に合せて少もたがひなし。五十絃二十五絃の時は、今の箏の糸よりも、又たかきもひきくも有べし。今の琴の聲はいにしへのしらべにあらず。上古の琴のしらべは、他の糸竹にひゞきわたりて、獨つかさどりたる聲なりといへり。今の琴の糸のしらべにては、順の調子にもあげがたからん。故に下調子におとして、との外に微音なり。これ琴のしらべの本意にあらず。たゞ大やういにしへの琴のかたちをうつして、琴にはあらぬ聲をなしたる物なるべし。むかし徐福と云人、日本に來儀せしとき、上古の琴の調子を傳て、專用ひぬれども、後世あまりに大事として、秘し失ひたり。おしくなげかしき事なり。其後もろこしには、箏琵琶笙笛の樂、代々に作り失ひて、いにしへの樂はなし。いはんや琴をや。たゞ古樂は、日本にのみ殘れり。琴も箏びわなどのごとく、今にのこりなば、右のうたがひは有べからず。今の琴譜は後世の作也。上古の聲にあらず。

問。もろこしより傳へし樂の、本國にはたえて日本にのこりたる、其ゆへありや。

共に自然と堯舜三代のときにあふがごとくなる心地あり。樂のはやたちて靜ならぬは、樂の氣象をしらざればなり。　或問。五常樂は新樂なり。太平樂は隋唐の遺音也といへり。　云。いにしへの傳へを失ひて、これを用ひ是を傳へたる時代をさして、其代の作といへるも多し。中夏の書といへど、秦火以後の說は證據となりがたし。此二の樂を大舜武王といへるはよる所あり。但五常樂は急ばかり大舜の樂にして、序破は失ひて後に作りてかへたるものか。五常樂の名も、後人の付たるなるべし。急ばかりはたしかに聖作と見えて、他の樂音とは各別なり。　問。今の樂は大方秦の代の樂なりといへり。　云。尤秦の代の樂もあり。世人秦の代の樂といへるものは、我朝へ初めて樂を傳へたるは秦人なればなり。又箏を秦箏と云說あり。尤二十五絃を二つにして十三絃となしたるは秦人なり。しかれども、秦人の私を以て一糸をも加損するにはあらず。伏犧氏初て五十絃の瑟を作り給ふ。後の人これを二十五絃とす。二つにしていと數の減じたるばかりにて、五十絃にかはりなし。秦人其格に習て、又二十五絃を二つにして十三絃とす。五十絃二十五絃十三絃ともに、宮商角徵羽の五聲の備りは同じ事なるべし。糸數多きときは、上調子下調子變徵變宮など有べし。十二聲もありて、まれに用る糸有べし。糸數減じては、此餘聲略すべし。後の人これを作するにあらず。廣大の樂器末の代には用がたきによりて、略したるなるべし。或儒者云。隋唐より此かたの樂は皆淫樂なり。古樂は皆亡たり。今の樂は用べきものにあらずといへり。いかむ。　云。尤隋唐の比より、古樂は大半亡て新樂をこりたりといへども、悉く亡たる

集義外書卷之十五

雅樂解

一。心友問。或云。今の樂は聖賢の樂にあらず。上古の樂は詩をうたひてそれに絃管を合たるものなり。今の樂の樣に樂器ばかりにてはなきとの事也。　云。五常樂は舜の樂なり。太平樂は武王の樂也といへり。其外にも聖賢の樂ありといへ共、其名を失へり。尤後世の樂も多し。或の云說のごとく古は詩をうたひ、それに八音を合せたる者なれど、其詩をば傳へを失て、聲ばかり殘りたり。もろこしにて孔子の時にさへ、三皇五帝三王の樂の聲ありて言葉なきも有たり。聖人は其聲を聞て其心を知給へり。後世の人其心を不レ知といへども、糸竹をしらべて精神を養ひ心思を和するの益あり。この故にいにしへより、言葉なきの聲を傳て、樂をもてあそべり。五音は五行の聲なり。五臟に通じて氣血を順流する事あり。雅樂の音は天地神明に通ず。故に和漢ともに、むかしは樂を用て、雨をいのり晴をいのりしなり。旱には雨ふり、長雨にははるゝ事あるは、五行の五聲天地神明をたすくればなり。旱水のきはまり過るは、五行の氣偏なる時なり。故に旱には盤渉の樂を用て、水氣の不足を助て雨をふらしめ、長雨には黃鐘の樂を用て、火氣を助てはれしむるものなり。天地鬼神をだに助く。いはんや人を養はざらんや。言葉なきの聲を用て、益大なる事うたがふべからず。雅樂を面白からんと思ひて聞べからず。たのしびなるものなり。樂する人聞人、

なく德に化してしたがふものなり。

一○朋友問。公家は肩衣袴の俗衣きるべき事にあらず、參內は衣冠なれば、下にてのありきも狩衣きてありき玉ふべき事也と申人侍り。尤成義に存候はいかゞ。云。げにもにて侍れ共、今の家領にては成がたき事也。位田職田と申物有て、何の官位からは、やどにての客地ありきも狩衣、何の官位までは、宿にての客には狩衣、ありきはかちなれば、何衣と定持せて、先にてきる樣に成共、定候はゞ可ㇾ成候。狩衣きては、乘物にてなければならず候。太刀持などもいり侍り。御築地の內二町三町は步行も可ㇾ成候。町をこえ遠路をへて狩衣にて步行あらば、正月の萬歲がありく樣に子共つき可ㇾ申候。一向に昔の樣に無官の士も、ゑぼし直垂をきる風俗ならば、目にも立まじけれ共、今の風俗の中にては、かへりていな物にて可ㇾ有候。今の時今の家に相應の義は、參內さへ輿は過玉へば、昔物語に菊亭殿善行をいひたる樣にこそ有度事にて御座候。問。然ば武士の昔の樣に、ゑぼし直垂少刀軍陣の大刀も、今の分にては成まじき事にて侍らんや。云。中々今の分にては成まじく候。先脊と申物やみ候はでは、今の風俗の上に被ㇾ仰付ㇾ候は、却て諸人迷惑可ㇾ仕候。ぢねんを以成べき樣も可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候。とかく少にても道行はれて誠立候はては、何事もならぬ事にて御座候。最前に申候人道の制法をこり可ㇾ申と申事は、其心付からは必道へゆかてはならぬ道理なる故に、そこはふくみて申侍り。

集義外書卷之十四 終

も勝れて、天神の孫の中にもまれなる靈質あれば、天のゆるせる精なるが故に、天子より姓を給はりて、初て天神の孫に准し玉ふ也。是は則其人に聖神の徳有が故に、其人始祖となれり。又天神のつり有ても、粗なる人にて、庶人の業ならではならず、庶人にくだりて五世過れば、習姓と成て、士民にとなる所なし。靈質の子孫出來るまではあげられず。是を地士と名付て、庶人の中の氏持たる者也。如レ此たゞす時は、不徳の賤しきもの官位をけがさず。士の風俗美成物也。近世此たゞし亂てより、不徳にても當座の才覺あれば、賤しき者も尊き人の上におれり。本より何もしらぬいやしき習より、時の幸得たる者なれば、けすしき事をも恥とせず。をして國家の風俗をみだせり。其本は氏筋のたゞしなくて、小者にても何にても、其主人の幸にひかれて、主人だに大名になれば、徳も筋もなき者が、家久敷と云ばかりに大身になる故也。不才不徳のものも部屋住といへば、親の代の歷々にもふみこへて、權を執を其筈とゆるし來れるあやまりより、世中日々に惡敷成ぬ。又不智不才の人にても、筋目次第に召つかはれては、事ゆかぬ義也。人次第才智次第になくては不レ叶。然共、或は其家老の家などにして、わづかに生出たる者が、直に召つかはるゝ幸あるだにかたじけなきに、少目の前の才覺有、けつから者にて人によくいはれなどすれ共、實は不徳にしていやしき所有を人の頭などさせて、其國の士大將もの頭の歷々の末子にても小姓などすれば、そのなりあがりの下知につき組子となれば、無念千萬に思ふも理也。人がらの勝れて、天ゆるし人ゆるす者は、誰も無念と思ふ者もなき事也。不知無心得にて思ふ者あるも、ほど

一類までもすくはれ候。下地よりの大身なれば、國家に子にゆづりて、其身は一代きりの職に付たる祿を受られたるも候き。國郡を賞祿も、子々孫々とおもへども、古今のためし左樣につたはるものにてはなく候。執權の人のためにも、城所家中なき大祿は、其身ゆたかに其心やすく、よの外よき事にて候。國郡は明地なく候へば、さやうにたまはる事ならず。これによりて、能人ありてもわけ玉ふ事ならず候へば、次第におとろゆるものにて候。

一。朋友問。日本には氏筋を中國にて御座候に、近世は武士の氏筋は大かた亂てしられず候。名乘度氏を名乘ても、誰とがむる人もなし。本より氏系圖ありて名乘人といへども、度〳〵の亂世に其系圖いづちへか行てしられぬゆへに、氏なき人が今名乘もたやすべき樣なし。近年氏系圖つり出し候は、學文者を賴み候へば、何方へつりつゝけ候はんもまゝにて候。大系圖とてあるも、其大系圖こそはあれ、その系圖へ飛入者は、誰ともしれざるは、日本の士民の姓と、天神の姓と、多はみだれ侍り。又上たる人の臣を召つかはるゝに、筋目〳〵に官職知行あたへ玉へば、人情はよけれども事不〻調候。人次第才智次第にあげ給へば、人情にさはる事おほし。是等の義は何と有べき道理にて候はんや。

云。日本の古は、源平藤橘など天神よりのつりの正しき人の中にて、能人がらをゑらびて官位をあたへ、才智あるをゑらむで職を授玉へり。士民の姓の中に才智の可〻用あるをば、其程〳〵に下の事を命じ玉へ共、官位をさづけず、知行をあたへず。其役をつとむる間、藏米にて祿をくだされ、功あるには金銀などの時の褒美多侍り。士民の姓なれ共、德も才

たげられ家中しまりなし、是皆亡國の相なりと。我等の申候は、佛者にてなきに亡る人おほし、佛法の罪といふべからず。老人申候は、尤にて候、凡人のほろびはいづれの道の罪にもあらず、しかれ共わげて申ほどの佛法信心の人、もし神道者か儒者におはしましなば、國かならずをこり子孫かならず榮べし、大に力を入て佛道を相立るほどの人なれば、平人にはあらず、しかるに佛者にて皆々亡るは、法の罪ならずや、又儒者にて亡びたる人もあるとは積悪の餘殃にて亡ぶべき家なれば、天のあはれみにて道をあたへ給、其身もよき所あれども、善柔にてわざはひを轉じて福となすほどの德行なければ、終に亡るあり、中納言殿の國中法華にし玉ふほどの力量なきゆへなり、人道にをゐてそれほどの力量あれば、禍もかならず福と轉ずる物にて候。

一。朋友問。日外執權は小身なるがよきと承候へども、時代にて今は事多く御座候へば、小身にては借金も出來てつゞきがたく御座候。つゞきがたくては貪りも生じ、又は內々に苦勞あれば、國家の事をのづから疎そかに成行候ゝ大身よく候はんや。　云。むかし執權職の人には、米金にて祿を給はりて、知行なきと侍りき。たゞ心を事に國天下の事に用んがため也。執權の人は城も所もなく候。あれば却てさまたげに成候。筋目身代をいはず、たれにても賢者善人をあげ給ひ候へば、其身一代きりの祿にて候。　問。しからば子孫のたのもしき事はなく候や。　云。賢者は其時を助くるに心ありて、子孫に祿を傳たき心はなく候。然ども一代きりの祿にて、ゆたかにたまはり、城所もなく家中もなく、其時に用の達するばかりなれば、祿あまり候故に、子孫は不ㇾ及ㇾ申

のつとめをなし得ずして、男のわざに手傳へり。女事をおさむべきいとまなし。女は女の事をつとむるほどに、世中ゆる〱と成侍らば、法を出して墻に桑を植させ、婦人に蠶させて、絹綿の多生ずるやうにせば、日本ほどの國にては、何かとかき侍るべきや。たゞ藥のみ、唐高麗倭相かよふて用をなし侍るべし。それも政を以て大かたは國土に生ずべきなり。

一、朋友問。われらの在所に智ある老人在。當代の大名の中に人のほむる人御座候をわけて申候へば、其人は大佛者にて候、とけてよくは有まじく候、天下の政道などにあづかりたまはゞ害有べし、いまの人のよく申樣にはあるまじきと申候。我等の申候は、能とて人のほむる人なれども、佛者成ほどに悪かるべきとはかたむきなる樣に存候と申候へば、佛者にはとかく心根にくらき所あり、明かにては佛者に成てはをらず、其人の能は氣質の美たるべし、鳳は心に禮を知たるにてはなけれども、陽鳥にて火氣を多くうけたれば、火氣の神は禮なり、此故に自然と行を亂さずして飛がごとく、心はいかにもくらき所あるべし、其理を爭はゞ、夜の明る事あらじ、今より後の人心をつぎてかゞみ玉はゞ、我いふ所たがふまじ、證據はおほくの人の上に居大名にて佛者なれば、子孫のつゞき國郡のよく成といふ事はなき事也、先日本第一の佛者は聖德太子なり、子の代に子孫みな亡びたまへり、それより以來幾千人と云數をしらず、證據は諸書におほし、近年目前にては備前中納言殿にて候、國中をしなへてを　て日蓮宗に被成候、これほどの佛信心にても、あとかたなく亡び候、今どき大名に禪學し玉ふ人々有は、その行跡氣隨にて亂行多し、國民しへ

おかしといひつゝ、無二是非一少づゝそむき侍り。そむく初はこはけれども、別義なければ、次第〳〵にそむきもて行、後には神罰はなきものなりとおぼえたり。如レ此なれば、誓紙誓言も町物と成て、酒を呑にも咄しするにも、愛宕〳〵八幡〳〵と、一言〳〵にいへば、きく人も信ぜず、いふ人もをそれず。是皆人に上たる人の神を重じ給はで、みだりに誓紙させ玉ふより起れり。誓詞さすまじき義にさする所には、神は非禮をうけ給はぬ道理にて、照覽はなき也。愚人は其神の照覽ある事なきとのわきまへなければ、ひたすらにおそるゝに、照覽なきとにて、罰なきに油斷しそめて、次第に神を慢り、をろそかに成りて行ば、我心よりおこる邪曲におゐて、神の照覽ある事にも、なれて誓言誓紙すれば、かならず罰に當る也。よのつねのいひわけ一通にて、神のかゞみ給はぬ誓詞とても、數〳〵つもりては、神罰なくてかなはぬに、ましてかくのごとく成行人を、惡におとしいるゝ事なれば、誓詞さする人する人ともに、終には冥加につくるもの也。誓詞させて後は、吟味すべき事もならず。それを吟味すれば、誓詞をうたがふに成ぬ。とにもかくにも、今のはやり物の誓詞ほどあしきとは侍らず。人力の不レ及所に可レ賴誓詞なれば、人力の及ぶ所にはさせぬ道理也。極意に賴置べき物なり。善惡に付て神にはさひ〳〵なるれば、けがす物にて候。神文をやぶるほど義なくては、武士の道はたゝぬなり。

一。朋友問。絹物は唐より渡らずとも、日本の物にてたるべきと申者有。　云。今の分にて唐物とまり侍らば、當分日本物高直にて、諸人迷惑に及ぶべし。其故は民間からく侍るゆへに、女も女

あらず候。今は軍中のかたちを常としたる物に候へば、治國の風俗にはあらず候。それにても、武道の嗜のたりにもなれば、一道とても可レ被レ申候や。武道の嗜のたりには少もならず候。けつく古のゑぼしひただれちさ刀ばかりの時の武士ほどは、何事もなく候。此肩衣袴大小の風俗あらたまり不レ申候にては、せめて靜成目出度御代とは申がたく候。それまでにいとまなくば、とくとおさまらぬにて御座候。暇ありても、人道を明にせずして、すさみをこたら給はゞ、いづれにてもよく治たる長久の御代とは申まじく候。此後世中かはり、時節を以治世と成とも、大道なくして天下を一まいにせば、日本はいよ／＼狭く遠くなるべし。然らば此國いよ／＼衰微すべし。

一。朋友間。今時いづかたにも誓詞はやり物にてをはしまし。神國の故にて侍るや。　云。神國なるほどに、誓紙誓言はおもくすべき事にてあり。重ずれば、大方の事にはさせぬ理にて侍り。多誓詞をさすれば、さする人にもつもりては罰あり。する者にも罰有。　問。さする人はわれらはそむかず。罰の有べき樣なし。する人も我心にちがひだになくば、何程したりとも、苦かるまじきと存候はいかゞ。　云。誓紙をさせてかなはぬ道理、つまりさするほどなれば、用に立樣にさするは尤なり。よく吟味すれば、誓詞さするとは、十に一百に二三ならではなきものにて候。今は其吟味もなく、誓詞まで申付るほどに吟味仕候へども、不屆の義出來候へば、無ニ是非一といひわけをせんために、誓詞の用べきとにてなき事は知ながらさすれば、我よりまづそむきたる心あり。其上人情時勢のとても其云付のやうにはならぬ事を知つゝ、誓言の箇條にのすれば、誓紙の

人の耳目には、一まい成と被レ存候。ゆたかなる世と申候は、日本の國廣く遠きやうにある物に候。雨ふらんとては山々近くみえ、天氣よからんとては山々遠くみゆる物に候。雨天は小人に比し、晴天は君子に比す。世中ゆたかに治て無事なれば、何もなすべき事なくて、人道の禮儀に及ぶもの也。王代の盛成しときは、もろこしへまで衣冠の制正樂の傳を習ひに被レ遣、人道の文武の法はいふに及ず、僧の得道の法まで正し給ひ候。世中無事にゆたかになくて可レ成候や。至治の世にて世中ひろく綏々としたる所を、一まいになきと心得られ候や。いそがはしくては長久ならず候。よくしまらでは、王代のごとく千歳二千歳つゞく物にて候や。秀吉公よく日本を一まいにして、高麗まで責られ候と申候へ共、只一代にて亡候。貴殿のみにかぎらず。大道をしらぬ者は、博く書を見たる者さへ、合點不レ參候へば、無二是非一候。今も目出度御代の無事成と極候はゞ、必ず人道の古法に及ぶべく候。　問。其制はいかゞ御座有べく候や。　云。いまの人道のすがたは、軍國の遺風にて、治世の躰にあらず候。必治世の躰に可レ成候。官位なくても士と名の付たるものは、先以生れつきたる天爵にて候へば、平士にても上下のかはりに、むかしのやうにゑぼし直垂になをり可レ申候。烏帽子直垂の下には、ちさ刀一にて候。わきざしは下々並農工商のさすものに候。士はちさ刀の上に、軍中にては太刀を帶副申候。かせ者下々には太刀はむつかしければ、わきざしの上に長き刀をさし候也。人道は禮義を以こそ尊く候へば、せめてこれほどの制は先あるべき御事に候。軍中の形を平生に用候へば、代長久ならず候。平生の形を軍中に用候へば、戰陣に威

するなり。天道も冬一時のたくはへなくては、來歲三時の生長收ならざるがごとし。

一。大國の郡奉行と成たる者問て云。今までの代官手代等、猥しきよし御座候間、初より急度可二申付一と存候。きびしくてだに後〳〵に亂たがり申ものに候。　答云。貴殿一人として被レ成候ば、それも能候はんか。相師あること也。今までの代官手代もかはらず候へば、事不案內にて、貴殿一人新敷なされ候はゞ、惡かるべく候。はや相奉行の心に隔心出來、代官手代氣すみ申べく候間。郡中の事大小となく、直に申聞數候事をしらでは、政道とられぬものに候。先何事も前〳〵のごとく御したがひ有べく候。智をくらまして人のみちびきを御請尤候。初より貴殿の心に誠ばかりはきつと御立有べく候。扨無欲にして儉約なるが本にて候。何方を承候にも、町郡方の奉行となる人、初は淸候へども、程なく亂れ申候。其故は、淸だては被レ致候へども、驕を智とは人に同じく候。奢れば必用不レ足候。用たらざればちねんに欲心出來候。無欲のよきといふ事は、知て無欲を立させぬものは、奢成とをしらざる故にて候。貴殿家內を儉約無欲の誠を以て治給はゞ、人の物をとらずして用達し可レ申候。時節を以代官手代の仕置も可レ有候。初より事を以淸だてする人は、とげぬものに候。一旦はしはきか淸からぬかとうたがはるゝ程にて、眞實を內より御立可レ有候。心中の誠は、一日のほまれとはならず候へども、年月をへて顯るゝ物に候。

一。朋友問。世はじまりて以來、鹿園院殿と秀吉公の時ほど、一まいによく治たる結構成事はなきと申候。其道にて候や。　云。鹿園院殿と秀吉公の驕の時は、日本の國狹く近く成候故に、道しらぬ

ればよきにて候。大方三分一か、五分一ならでは用達せず候。また曾ておしきも有。つかひ當たる事まれ成はいかゞ。　云。一には人がらよきとて、人のよくいふものを奉行役人とすれば、あたらよき人すたる事候。才の得ぬことはならぬものにて候。人がらは十分になくとも、才の得たる事をなさしめたるが能候。二には奉行役人は、其身利根にても、助と申ものなくてはあしく候。道に志ありてへりくだる人には、人が善を告る故に、其事の案内者助となりて、さて其事のよくなる事は、其人の德にある事にて候。今時大方よきと申奉行も、道に志なければ、へりくだりて助をもとめず、人に問ふを恥とすれば、下知する所おほくは事の情にたがひ候。それよりは奉行の心ももつれて、人がらまで悪くみゆるものに候。三には加増と役義と一度に命ずれば、食事も調はぬものに重荷をもたするやうにて、其人の半分も用達せぬものこれあり候。役領は各別の事に候。いにしへの位田職田は、今の役領にて候。本より助と申者、それ〳〵に備て御座候。其上に人は氣根よく事はすくなく候へば、勤よく候き。兼て事になれたる助もなく、俄にしらぬ者を多くかゝゑ、事はしげし、人は氣根うすし、少〳〵人がらよきとても、其才有とても、成がたく候。役人によらず。身上取立の人も、心持有。急にせずして有余を存し候へば、以來まで公私のためよく候。急に人をかゝえぬれば、あつまりものにて不吟味なれば、しまりもなし。さればとて、大勢の者を出入もさせがたし。後まで家風悪く候。俄に大身の躰をすれば、身上もつゞきがたし。下をめぐまざれば、國郡もあれ行候。はじめ二三年のしまりなきゆへに、永代をむなしく

はかなはぬ事ゆへ、知人なきと見え候。

一。　朋友問。世中風俗のあしきをば、何として直したるがよく候や。　云。先善事をする事を致て後、禁戒を備べし。天理を存してこそ、人欲も亡ぶべけれ。天理を存する事は不ㇾ致して、人欲をされとばかりいましめたるにては、誰を主として人欲を去侍らんや　政道も善事の所作あらば、戒なくともあしき事はうすく成侍らん。

一。朋友問。むかしは所司代ばかりにあらず。天下の權職も一人なり。近代は萬事兩奉行にて候。むかしは大役皆一人して勤られ候き。心持ある事にて御座候や。　云。道理ある事にて候。兩人は諍の端にて候。相師相役は威勢あらそひ有。またはたがひのかたきも思入もちがひ候へば、事の滯りともなり、大に能事は行はれぬものにて候。國天下の事多如ㇾ此に成行候へば、しまりなきものに候。たゞ古のごとく惣つかねは一人にて、助と申もの有度事に候。軍陣にても、大將軍に副將軍御座候。助はなくて不ㇾ叶とにて候。軍陣にては忽勝負を見せ候へば、兩大將にては破れに成候ゆへに、古よりなく候、本大將討死のときの爲、又は助のために、副將軍はなくて不ㇾ叶候。今の番頭與頭のごとくに候。無事のときは、事のあしさ目に見えがたく候。少世中惡くなる時節に成ては、兩奉行のあしく事のしまりなきことあらはれて、後悔多ものに候。乍ㇾ去あしき人一人して權をとれば、はやくやぶるゝ事有。二人よりは三人よき道理御座候。

一。或問。人のほむるものにて、我も能と思ふものをあげて役人とすれば、兼ておもひたる半分わ

一にて候。山城の谷洛中洛外ばかりにても、五六十年以來の大小遠近をならして、一年の寺の修理建立、内牢をとりて三千貫目づゝは入べきと申候。音に聞えたる寺は一寺もたたぬと申分にて、千貫目二千貫目ほどづゝいらぬ年はなきよしに候。間には本願寺の大佛の御堂のなど、申樣なるが出來仕候。さのみ大なるやうには聞えね共、當年東山に立候新寺にさへ、すきと仕舞候ば、千貫目は入べきと申候。今二三ヶ寺寺町田中に建候にも、合て千貫目は入と申候。此三四ヶ寺の入用ばかりにても、三十万石餘の城下の士屋敷は、不ㇾ殘修理して五十年も堅固なるやうに可ㇾ成候。しかれば、山城中の寺に五千貫目づゝは毎年入つもりに候。此つもりを以て、江戶大阪諸國の多少をならして、一年の堂寺の入用にては、二十ヶ國の士屋敷は堅固に可ㇾ成候。三年にては、國々にわたり可ㇾ申候。六年にては、天下の町人百姓の迷惑人の家のこらず修理可ㇾ成候。右はつもりよき者がつもりて申候。是ほどの夥敷費の者がわきにのきて、毎年〱五六十年が間天下をとりくづし候へば、日本のひろきといへども、五六十年の間にひた〱と衰微仕候事尤に候。其外の費は尤有道の世にはなき事ながら、くらべてはわづかなることに候。ともし火きゑんとて光ますごとく、佛者の算乘じ極て亡るとき至り侍れば、吉利支丹の御穿鑿出來て、佛者の奢いやましになり、唐僧來て大寺多建かさみぬ。君臣ともに仁君忠臣にて御座候へども、此一の乘除の理をあきらかに不ㇾ被ㇾ成しては、世中のつゞくべきやうはなく候。むかし大道心無我の僧ありて、佛法再興の法を立ん事をねがひ、上書したるといふこと、或書に見え侍り。五百年此かたの佛者の心に

やうには有まじく候。ぬり箱ひとつあれば、其家にて音信物の肴などすへ候事は済たると申候。今はあたらしき箱に居候はねばつかはさず候。又昔は何箱に成ともすへてつかはし、何箱に成共入てつかはし、其入物はかへりたると申候。今はかりそめの肴相成物にも、箱をさゝせて納て不ㇾ遣候へばならぬやうに候。此箱と臺とのついえばかりも夥敷事にて有べく候。云。それらも夥敷事にて候へども、禁中並公家衆は、たゞ京都御一所にて候。大雑作事もたまたまの義に候。尤公家も武家もよく御合點参候ば、屋作などはいかにもかろく質素に、禮義のかたはおごそかにきつと御うやまひなさるべく候。武家も今の城中の夥敷矢倉多門天守屋形作はすまぬ物に候。外は敵に取まかれ、内は大なる木にてひしと作りならべられ候へば、火矢を射かけて焼立るか、内より火出るか、しのびにて火を付候か仕候には、狭き城内にてのき所もなく、外は敵也、上下みな焼死申べく候。何事ぞの時は、くづして小屋がけにすべきならば、時によつて大儀なるべし。器の費も大なること也。士屋敷は作事の夥敷数多は江戸ばかり也。國々の諸士は、今は中々驕べき力もなく、それはさてをき、たをれかゝりたれ共、修理すべきやうもなし。居られぬほどの躰になれば、其とき漸作事仕候へ共、これによりて借銀出来、其身一代は申におよばず、子共の代まで迷惑に及候。百姓はなをなを困窮いたし候へば、屋作は秋の取入もならぬほどの事也。町人も富てかひこみ仕候ほどのものは、屋作者候へども、これも數少く、間に五間十間の事にて候へば、大方ほどあるなり。たゞ出家の堂寺は、公儀よりの御沙汰も夥敷ことなれ共、それは千分が

多武峯吉野法師高野山などの大名寺いくつも御座候き。其上に諸國の寺領はてしなく候き。今は五万石共一寺してとる寺はなきと聞え候に、天下の四分の一は佛者取と申說御座候はいかゞ。云。むかしは寺といふはみな山にかたより居候ゆへに、一所に數多候かはりには、今のごとく町屋在鄕にひしと入まじりたる寺はなく候き。ゐいざんなど大分知行取候へども、頭ばかりは坊主にて、其下に立候ものは皆俗にて候。近江寺領と申ても、坊主は叡山にあるばかりにて、領知の者はつわの者に候。叡山に居候ものと、つかはるゝものは、小姓若黨六尺等にて坊主は少候。今は町屋士屋敷と軒をならべ、在々の百姓と地を並べてひしと立並び、其上に山々の寺も、むかしより所卓散になり候へば、叡山に寺數減候ほど、わき〳〵の山林の寺數にて入あひ申べく候。町在家に建籠たる數百万の寺が、むかしより增たる分にて候。今は隱居の持庵のとて、在家にまで入こみ侍り。知行とて高は多とらねども、國々所々にて靈地の山林は、十が九は寺內と成候。其外上田畠をつぶし、寺地といへば大にとり候へば、其つゐえ古に十倍仕べく候。扨又むかしの佛者はおほくても、女人酒肴をいみ候へば、そうさは今の半分もいらず候。其上に今が多ければ、其ついへはとかくいふべからず候。　問。世間の驕て山林を盡す事、佛者のみにはあらず。禁中公家の御屋作も、あれほどになく共成申べく候。今は天下の政道も不ㇾ被ㇾ成候客人分にて御座なされ候へば、禮樂の法だに執行はるゝほどに御座候はゞ、質素にして風流に御座有度事に候。武家の屋作も古風にかへり侍らば、今の樣にはあるまじく候。其上木具へき臺など、むかしは今の

ならざる事、百年もせば、山々本のごとくしげり、川々本のごとくふかく成べし。

一〇朋友問。佛者の驕りゆへ世中亂世と成ことにて候はゞ、佛者の上にこそ不慮の災出來て亡べきに、天下の災害と成候事は何ぞや。　云。天道は無心なり。水はうるほへるに流るゝ理にて、神明の報應必然なれども、左樣に有心のものゝ裁判の樣にさしあたりたる事はなきもの也。其上佛者は無知にして赤子のごとし。世の政道のあやまりにてこそ、佛者も驕りを極ものなり。且世間の驕りの十にして七は、佛者が持といふにてこそあれ、三はまた他の風俗にも掛りぬれば、畢竟は政道の罪なる故に世中亂れて、其次手に堂塔も燒れ僧も奪ひ手なければ、少くなり候也。山川のあれにつく其本のつもりを知らず。扨如此あれては世の中たゝざる道理をしらず、天地のやぶるゝ時にてもなければ、乘除の算にて亂世と成べき天理をしらず。其亂世となりさまに、佛法のゆへとも名乘ものなければ、亂世と成ことの他にあるを見て、其故とのみみて、本の故よりそこのゆへを生ずる事を知らず。孟子の語にも、聖賢の德の餘慶にて、天下五百年六百年はつゞけども、畢竟天下は聖賢のたもつべきもの也、世を繼て代々傳る事は、天の廢する所なる故に、亡びんとて桀紂がごときもの出るとあるごとく、世中の奢に佛者の奢をうちそへて、山林川澤の神氣つくれば、ほろびんとては、しなこそかはれ、さま〲の凶事ども出來、或は相模入道のやうなる惡人も出來、或は足利家數代の內、應仁の亂のやうなるわざわひ出來なるり。

一〇朋友問。王代の佛者の盛成しことは今に超たり。叡山は近江の內多く領知仕候。東大寺興福寺

東山殿の時の物とて、結構なる物ずきの道具の今にのこりてあるをみて、其代の驕りしられ侍り。その後大亂出來て、天下我〳〵持にて、公方は名ばかりに成て、信長まで天下の亂世久し。此間に山々本のごとくしげり、川々本のごとくふかく成ぬ。尊氏の子孫十四代、二百四十年の內、信長の威勢をふるひ給ひしこと十二三年あり。秀吉公より以來、世の一統せる事すみやかに、世中靜に成ぬ。關が原大阪の軍は居ながらの事にて、たゞ一戰づゝにてすみぬれば、亂世にはあらず。實は秀吉公より今につゞきて、天下の奢は日々月々長じぬ。其上に吉利支丹の御穿鑿出來て、佛者の榮る事堂寺のおほき事、日本開闢より以來あるべからず。むかしのやうなる天下主執權ならば、とく亂世と成べし。しかれ共、御當家は天下を得たまひし始の次第もよく、君も正君仁君つゞき給ひ、執權もあしき人おはしまさねば、如ㇾ此つゞき侍り。然れども、山林の力つき〳〵て、今はなでぎりと申ものに成侍り。君も臣も慈悲正直におはしまして、私なく善行をつみ給ふ共、天下の根本すでにつき候へば、數十年の間心もとなし。只今政道を以此乘ずる算を除ひ給はでは、亂世と成てはらふべきより外の事なし。山林のあれたる事、開闢より以來なき大あれなれば、亂世も又久しからん。亂世と成侍らば、公義ずくめの且那は本より佛法信心にてはなく、坊主の無道はにくし、皆はづれ侍らん。堂寺は軍勢にやかれこぼたれせば、たれか二度たて候はんや。身すぎの無道の出家共、多は盜賊と成て、方々にてころされ侍らん。よはものは、まことの乞食非人となりてうせぬべし。世中我〳〵組合と成て、陣屋の扶持かたにめいわくし、堂寺作る事も

百年もいくば侍りぬべし。中國天竺は大國ゆへに、山ふかく野ひろし。日本は小國ゆへに、山野かぎりあり。其國に生ずる物は、其國の山野の力に叶て生るゝ理なり。天子大樹公家大名士農工商は、其役義有てそれ〴〵の屋作し、其用の叶べき程にして居給ひ候。然れば其屋にはそれほどの人有。今出家の堂寺は、木像を一つ置て、空々としたる人もおらぬ堂をたて、客殿方丈庫裏などとて、人も少きに夥敷物を建ならべ侍り。あるひは新敷作り、或は建直し、日本國中に毎年たえ間なくたつる事にて候へば、其山林をつくす事勝て計へがたく候。大火事などゝ申事は、五十年か百年に一度の事なれば、何ほど夥敷ても、山のつくるほどの事はなき物にて御座候。たゞ常〴〵たえず國用の外に大なる事の多は、盡る事程なき物に候。こゝを以て、後世得道の法次第にやぶれて、堂寺多出來候へば、山林の力つきて川〴〵わさくなりぬ。かくて世中わりがたければ、保元平治の世のみだれいで來て、清盛世の權を執がごとくなれども、天下一統せず。公家にもかたつかず、武家にもかたつかずして、二十餘年過て後又源平の亂世出來ぬ。頼朝家三代より北條家の初までは、いまだ亂世の名殘にて、天下の川地不自由なれば、をのづから儉約にて、堂寺もおもふやうにたゝず。此間に山〴〵もしげり、川〴〵も深くなりぬ。北條の泰時時頼儉を好て驕らざりししまりにて、九代はつゞきたれども、治世久しくて、堂寺年々に多なり、山川の神氣みうすくなりぬ。かくて世の中立がたければ、太平記の亂出來て、世中久しく一同せず。此間に川澤山林また深く成ぬ。足利家數代つゞきて、天下の奢長じ、堂寺立みちて、山川の力またつきたり。

り。末に成て其法を失ひ、僧になりたき者はなりて制止する事なし。こゝを以て多は身すぎの出家にて、道をばたしなまず。堂塔を建立して中興といはれ、新寺を立て開山となるの名をむさぼり、西堂長老と成て座上になをり、法印上人とて人にたかぶるを至極とせり。諸人親先祖の墓あれば、不沙汰もならず。或は實に後世に惑などして、堂寺年月に多なりぬ。それ日本は小國なれども地福よし。國のひろさよりは人多し。此ゆへに驕れば長久ならず。是を以て天照皇の御宮は、黑木作茅葺にして、儉節をしめし給ひ、天照皇の御孫以前の日本の主は三輪太明神なり。是はいよく儉にして、社をだになし給はず。山を社にて鳥井ばかりあり。その外上古は神木とて、杉や櫻の土地に應ずる木を以てやどりとし給ひ、社のついゐにうへ給へり。やむことを得ずしてあれども、日本の土地に叶て、宮社の作は木多いらず。日本を五十も百もあはせたるほどなる中國天竺の大國にて作出したる堂寺を、そのまゝにて日本の小國に多建るとは、何のわきまへもなき僧法師の所爲なり。　問。むかしのかしこき法師等、それほど愚にはあるまじき事なるが、佛法は一やうならず色々にいへども、畢竟物を絶國を亡すを以て極意とすといふにかなへるか。　云。それにしても天理を知ざるの愚なり。人力にて天地の數をのべちゞめはならぬものなり。世中の文學に得たる者は多。本才にはうときものなり。本才と云は、天下國家政道の方に得たる才なり。本才に明なる者が佛者に成てはをらぬ道理なれば、うは智惠ありて根はくらきに極りぬべし。せめて得道の法をよく立て、出家を少くし、堂寺をすくなくせば、五十年にて亂世となるものは、

佛者をもよくし、惡僧すくなく成て、無我の佛者おほくはあつかひにして、日本の國のあしくなりぬるとをやめ中度義なり。

一。朋友問。治たる世の、さのみ惡逆の事もなくて亂世におよび、或はほろび或は衰ふる事は何ぞや。　云。其謂多といへども、日本の國の六七百年以來、治ては亂れ兵亂やむでまたみだるゝに大綱三あり。其一には誠の不立也。其二には奢て仁政を失ふなり。其三には佛者の得道の法を失て、堂塔寺多建るなり。其一にまことの立ざると云は、大君並に執權の人々、道德の學を好給はざれば、たま〳〵よき政道をなされても、小人是をいひけし、小知を以あしき樣に申なさば、さもある事かとたゞよひ玉ひ、こりて善政を行ひ給はず。扨人々の情にかなふ樣にしたまふ事は、小人の利を得る事ともなり、畢竟天下の衰微になる事にても、利害にたよりある事なれば、よき御政道とてほめたつる也。天下は義を以て利とすとこそいへ。善根はみないひくじかれて、利を以利とする時は、君臣父子の間も、多は利のみ主と成て、其養其親は亡ぬ。たとへ兵亂いまだいたらざれ共、先以人道の亂なり。其二に奢て仁政を失ふとは、君も執權も大名小名も、不仁の人にはおはしまさねども、驕て用たらざれば、下を責とるの外なし。貨悖て入ものは又悖て出の道理必然なれば、たとへ兵亂またしくても、天災地夭生じて天下の衰微と成ぬ。人道みだれて天下衰微するは、亡びの本これより大なるはなし。其三に佛者の法を失て堂寺多建るにありとは、前車の覆るは後車の戒たる眼前の事を語ときかせ申べく候。上代は佛法さかんなれ共、得道の法あ

集義外書卷之十四

窮理下

一。朋友問。佛法は生國の天竺にはかたばかりのこり、もろこしにて文才ある者どもが佛者に成て、空にかけはしゝつけましたる事を傳て、たゞ日本にのみさかむに候へども、やがて亡べき前表あらはれ、無道にて富貴極り侍りぬ。然るに得道の法を起して、再興被レ成度と被レ仰候は、釋迦達磨の再誕にて御座候や。聖人の徒ならば無用の事と存候。今のやうにたゞ、五十年の内外には、大變出來て、佛者大半は亡失すべし。百年の内外には大かた亡べし。數十年の間天下の害に成候とも、其内の亂世はこらへて見て居たき事に候。いまのとをりに候はゞ、やがて跡なく絶申べく候。貴老の仰られ候やうに、得道の法を起し給はゞ、よき出家出來のみならず、奢無道やみて佛法長久なるべし。意地あしきやうなれども、奢無道を見て居たく候。もし得道の法起り侍らば、佛法中興せん事口惜く候。 云。有べきほどのかずはあしくても有べし。よく成ても有べく候。人も病者にても、命のかぎりは生候へば、とても生んとならば、無病にて生たるがよく候。佛者もとてもあらんならば、能なりてありたるがよく候。其上佛者此まゝにてあらば、亂世となるべし。亂世よりすぐに吉利支丹にうつる事あるべく候。是ぞ大なる憂にて候。今時は後生のだましは一入悪敷時也。後生のまよひがおこりに成て、吉利支丹もひろまり申事なれば、かた〳〵以て

ろ費はすくなし。新川の為に壹萬石の上田畠を失ひ、流浪し飢に及ものは多かるべし。仁者は人の存亡をはかりて、利の大小を事とせず。其上新川の堤普請堅固ならずば、後日の損もまた大なるべし。

一。或問。數百歳後の事には、遠きはかりよにて、吾人共に知べからず。さしあたりて、山家水邊ともに安堵すべき權道あらんや。　云。一の治水の道あり。古歌に古川のへとよみたるにて心付、西國にて人に教てなさしめたり。いひしとを半用ひて半は用ひず。されども大を助て小のこれり。まつたく用ひなば、水損も有べからず。今山城津國河內の水損を留むべきとは易かるべし。濱の大橋のむかふ山崎邊よりあらてこしといふとをなし、すて堤をつき、あらて川はゝ二三町にして、洪水のとき兩川となすべし。かつら川は濱までつけず。半よりあまる水をあらて川へこさする筋も有べし。しからば、鳥羽伏見邊津國河內の水損やむべし。あらてこしの田地のつぶれ、高二千石ばかりならんか。助かる地は高拾五萬石も有べし。十五万石より二千石をおぎなはゝ、兎にして一二分なるべし。堤の間の田地は、そのまゝ田作すべし。五七年に一度當毛の損は有べけれ共、明年はこやしなく共大に豐熟すべし。五七年に一度の損毛は、水損やみたる地よりつかはすとも、少しのとなるべし。其外諸國の水損、其地形を見ば、よき道有べし。是大道行はれ、天下長久の基本立、業を始統をたれ、川々むかしのごとくふかくなるまでの補ひとはなるべきか。

集義外書卷之十三卷　終

水上の山人にとらせて、水上と左右の山との木をきらず、雑木をはやしなば、ほどなく砂とまり河水ふかく成べし。山〳〵きりあらすべからざる御制禁も出候へ共、明日の飯米さへたくはへなきもの多ければ、薪を買てたくことは思ひもよらず。明日くびをはねらるゝ共、それまでと申候へば、庄屋肝煎も可ㇾ仕樣なきと申候。又此川ちがへによつて、大阪邊に新田多いでくると申說は、是は猶以あしかるべき事に候。日本はじまりてより以來、日本國中にて大和河內の上田といふ古地を川につぶして、其下に新田をせんとは、大成ひがことなり。古地に少もかまはでさへ、川下に新田をすれば、川上の古地あしく成とて、むかしより心有ものはせぬとにて侍り。まして古地をつぶして新田をするとは、大小の損益はいふべき事にあらず候。悔て本のごとくせんといふとも、やがて山〳〵よりながれこみたる砂は、世主の御力にものけ樣あるまじく候へば、もはや大和河內の上田は永代すたりに可ㇾ成候。大なるそしりを後世にながし給ふべし。其うへ下の新田は、やがてやくにたゝぬ事に成り侍るべし。

一。或問。河內國方〳〵の山川のたまり廣澤と成て、多の田地捨れり。是を國分川へ一所におとし、それより新川を付て難波の浦へながし侍れば、三萬石ほどの古地おこり候。新川につぶし候田地は壹萬石ばかり也。此儀いかん。　云。最前木津の川ちがへよりはよく侍り。しかれども、壹萬石捨て三萬石を得ば利也。人の難儀を考れば、廣澤と成てすたれたる古地は、幾年以前よりの事ゆゑ、知人なし。むかしは是によりて亡失の人有べけれども、今はなし。此廣澤の田地とならざ

なりぬ。小水は州中をくゞりて、昔にきこへし立田川も、今は名ばかり也。悔て本のごとくせんとせしかども、天然の岩を切たれば、もはやなをされず。

問云。江州湖水の邊、近年水こみて田作ならず。高廿四五万石程水底に成ぬ。勢田の下しゝが瀬の岩を少打かけば、水落て作つくと申侍り。是もとりかへされぬ悪敷事や侍らん。

云。大に悪敷事出來なん。湖水のこみといふは、一朝一夕のゆへにあらず。しゝが瀬は天地自然のてうしの口なり。しかるにしゝが瀬の岩を切なば湖水急にをちて、淀川の水たぎり、湖水ほどなく落なば、淀川あさく成て、今の舟の通ひやむべし。彼是にわしき事多出來ぬべし。悔といふ共甲斐有まじ。又湖水のほとりのこみは、近年の地震に地をゆりしづめたりともいへり。さも有ぬべし。高島の水邊は、常に水地にて、地やはらかなれば、大地震ごとにゆりしづむ事あらん。古の白鬚の鳥井は、今は水中に入て見えずといへり。天氣つゞきて能時分、水ひ落て作毛付、淀川の水も能程をつもり、それより高き水はおつるやうに、北國の方へ池水のあらてのやうに、水はきを付る事は、くるしかるまじきか。古人は問學ありて、山川の地理に器用なる人をえらび、且山川の事になれしめて、其後山川地堤等の奉行をなさしめ給ひき。いまの人いかほどかしこければとて、問學もなく、生付の器用も撰ばず、其事にもなれず、古人のしをかれたるかんがへもなく、商人などの利にかしこきものゝいふにしたがはんは、あやうき事也。其上山〳〵あれて、砂石河水に入事、一雨〳〵にかさなりぬれば、川ちがひなどの來の事にて能成といふ事はなき道理なり。上田の毎年すたる物成と、川堤の造作を

砂石をばせ入て、國つひゆべし。此川は常は水すくなくて、大雨のときはことのほかつよく出なり。今の川はゞ二町ある所も三町ある所もあり。それに一ばい出て、なを堤のあやうき事度〳〵なり。今の堤はむかし堤ゆへ、山も同前にかたきさへ、折々きるゝ事有。近年は日傭のうけとりにて、堤のつきやうあしければ、二十里ばかりの新堤兩方にて四十余里なり。洪水にかゝゆるやうにはいかゞあらん。かたきつきやうはあれども、その外むつかしき事にて候。さて二十里餘の所、川のはゞ二町ならしにして、大和河内の上田畠をつぶすとも、山々あれて大雨ごとに砂をおとし入れば、ほどなく砂川となり、河とこ高く成べし。しからば後には大和河内はあるる事有べし。本の川跡田畠になるといへども、底まで砂なれば、何にもなりがたかるべし。新川はゞせばくつもるものも有よしなれ共、大水の時の水勢を不レ知ゆへに候。せばくては中〳〵かゝゑらるゝことにてなし。さて川の長さはいまの一倍に成候。此川常はほそき水なり。それをのべて、方〳〵にて水もれ、いよ〳〵水ほそくなるべく候。其上淀より下大阪までの舟路少てり候へば、舟すはり候間、木津川とまりなば、いよ〳〵難義なるべし。扨大和河内の上田のすたり大なる事ならん。吉野川もはしとの上よりは、舟となり筏となり、通路不自由に候。むかしかく不自由にしてをきたる事は、川の勢つよくて、急に地さがりゆへに、すぐに舟を通ぜんとすれば、吉野川の水ひをちて、河水つくるゆへなり。大和は河内和泉紀州よりは地形高がゆへ也。むかしは大和川にもてうしの口有しときく。舟をかよはせんとてこれを切たれば、舟かよはざるのみならず、川あさく

かゝらぬ患なり。夏商周の三代の末のほろびんとては、川々あさくなりたるとある事も、天下ひさしく無事にして驕り極り、山澤の地理をみだりて古法を不レ用故なり。今の分にて山川のまつりごとおはしまさずば、數十年の內には、大阪並に諸國の川口の通路成がたかるべし。 問。今から水上の山々谷々を法度して、草木をはやし候とも、もはやうづもれ入たる砂はとれ申まじきや。云。山々谷々しげりて、ながれ入べき土砂とまり候へば、大雨の度ごとに、今ある土砂は自然に大海に入て、川水ふかくなり候勢にて候。あとからながれ入事大なる故に、はじめの砂も海には落がたく候。

一。或問。今の木津川を三ヶの原の上より川ちがへして、南良の佐保の川筋へまはし、河內路を經てつの國の川口へをとせば、能と申說有。さやうにてはよき事多候。相調候へがしと願もの御座候。もし又あしきとや出來侍らん。 答云。さやうにしてよきつもりこそおはしますらん、しらず候。愚が小知にておもへば、大にあしからん。川ちがへせんと物語の所より、淀の大橋まで五六里有らん。川の勢ぬるゝ下に常にながるゝ大河を受たれば、旱りにも拾石舟は大方通ひ侍り。しかるを大和路へまはして、河內攝津國へ落せば、大和は地形高し、河內への落口にてうしの口をさでは、河水たもちがたし。てうしの口すれば、いまの十石舟もすぐにはゆかず。かちを持こさねばならず。若又此高下積なくて、てうしの口をせてすぐにおとさんとせば、水上は水すくなし、水急にくだつて河水つきぬべければ、常の舟のかよひはやむべし。大雨の時は河內の上田へ

ならず、吉野川の末、紀伊の若山の川口、其外諸國の川〳〵うもれ、海もあさくなり、舟の通ひは難儀なりと申候。何とぞ砂のとりやう、川のつけやうもあるべき事にて御座候也。今の躰にては何となり行可ㇾ申候や。諸國の通路いなものになるべくと存候。　答云。川ほり砂とめなどの末なることにて自由をなさんといふは、無功なる事にて候。まことの食のうへの蠅をおふごとくたるべく候。水上の水、ながれの谷々、山々の草木を切盡し、土砂のからみたもちなきゆへに、一雨一雨に河中に土砂ながれ入て、川とこ高く川口むもれ候也。其本をよくせずして、末にての才覺は、何としてなるべく候や。今は草木を切つくすのみならず、かくゐまで堀申候。きりくゐほりたる山は、猶以土砂多く川中にながれ入候。後にとめ山にしても、木の根ほりたる山は、五十年三十年にては、草木も有つかぬものに候。水上の山々あるれば、山澤の神氣うすく成て、水を生ずる事すくなければ、常には流ほそし。しかのみならず、大雨の度毎にもち出たる砂は、そことなりてあれば、砂の中をくゞる水も多し。本は川といふものは平地よりはひきかりしに、今は平地とひとしくなり、或は平地よりも高くながるゝもあり。堤ばかりにてもちて有なり。これ皆山のあれてなせる所なり。むかしは川ふかければ、大方の大雨大水にては、田地家屋敷をそこなふことなかりき。今は川はあさし。山々に雨水をたくはゆる草木はなし。少の水も中水となり、中水は大水となり、大水なれば堤をこへやぶり、田地家屋敷をそこなふこと多し。其上左の堤つよければ、右の堤をやぶり、左右ともに強ければ、川下をやぶるといへり。是皆川のむもれてふ

狐の虎の威をかるごとく、君によつて我威の有事をしらで、一旦の權威におそれて人のかしこまるをみて、己につかんとや思える。もし終に返逆の心なくして、如此威をもたば、猶以恐なり。天下を奪はんとおもひて威を好まば、愚ながらも是非なき也。其心もなくて人ににくまれうたがはれんは、其身の亡びか子孫のをとろへとなるべき事をたのしむ者なり。何ぞ權威を君に歸し奉りて、身をへりくだり、天下の人に好せられて、身安く子孫さかへざるや。反心はありてもなくても、臣として威を持事、甚しきは其國にも害に其の家にも凶なり。身安く子孫さかへ、名を後世にあぐる道をばとらで、心身勞し子孫亡び、惡名をながす事をとれるや。又其頃彗星出たり。時の人賢者に問。隱者曰。天道ふるきを除て新をしかんとするか。漢の世のつゞける事二百餘歲なり。天下大に奢て風俗いやし。乘除は天地の勢なり。此まゝにして天下たちがたし。天よりかならず除べし。政を改て乘除をなす事は、今の分にてはなりがたからん。しからば一度は天下亂て、ふるきを除て新をしかんとするならん。其勢十年を過すべからずといへり。はたして王莽亂をおこし天下を奪へり。光武帝漢の嫡孫として民間におこり、莽を亡し惡人をはらい退け、前漢のおごれる風俗をあらため、善政をしきほどこし給へば、漢家又起れり。是を後漢の初とす。又二百餘歲治たり。

一。或問。われらの見及候ても、淀川次第にあさくなり、舟のかよひ不自由に候。かやうに候はゞ、やがて往來とまり可申候や。西國舟も、後は大阪へつかぬやうになるべく候や。大阪の川口のみ

て、日月やゝもすれば明をおほはるゝ事あり。是によつて四時の氣不正にして、天災地夭多し。客星出て帝座をおかす事有。星のひかり常にばいするものあり。時の賢者これをなげきて云。日月の光の雲霓のためにをかされ、客星のためにしのがるゝものは、君の位かろからんとす。星は臣の位なり。光の常にばいする者は、君の威をうばふ者あらんか。とかくして王莽が代を亂すの勢あらはれぬ。時の賢者に向て云。王莽すでに天下をうばはんとす。漢家のれき〳〵高家の大名あり。何ぞ義兵を發して莽を誅せざるや。賢者の云。しからず。暗弱なれども上いませり。莽が惡逆をにくみて兵ををこす共、莽は上の左右にあり。上にむかつて弓をひくなり。漢の子孫高家の大名たりとも、天下くみするものあらじ。いかんとなれば、天下の漢をいたゞける事久し。ひさしければ變じがたし。莽が如レ此逆威をふるふとも、上いますからは、高家の義兵は却て返逆と成て、天下の兵をいたすべし。たとへ少々くみするものあり共、大石を以てかいこをおすがごとくなるべし。高家の人知あらば、兵をおこすべからず。したがつて莽に事べし。　問。しからば莽終に天下をとり侍らんか。　云。上のいますによつてこそ、莽をおそれて上のごとくするなり。莽が天下を奪ひすまし、天子の璽符をにぎりたらましかば、誰か莽を主とする者あらんや。漢家の子孫とあらば、民間におはすとも、天下こぞりて取たて奉らん。莽にさきだつてはたをあげ給はゞ、莽に天下をとりてつかはすになるべし。其まゝ置て莽に奪はするは、莽が漢家に天下をかへてまいらする也。凡人はかしこきやうにても、おろかなるものなり。鼠の社によつてたつとく、

やうだによく候へば、ことの外普請はかどりて、しかも堤かたき者にて御座候。堤にてつぼを割候事は、堤の堅固ならざる第一にて候。つぼをわらで不ㇾ叶は、土取ところにてなはばりしたるがよく候。池の根きりにはそこを入と云事有。わらてには生わらてと云事有。池の水をもたすあらてのきれ堤のやぶるるは、皆奉行の無功ゆへに候。惣じて天下の萬事をうけとりにさせて、武士は心安きやうに侍れども、天下の山川の地理も、金銀米穀の運行も、財寶の万用も、皆町人の心にのみこみて、仕度まゝに仕候。武士は町人にはかられて、何と有やらん不ㇾ知候。さて金銀は皆町人の手にあつまり、才知町人長じ候へば、時有て亂逆のおこりとも成べく候や。みづからおこさず共、賊のためによきたくはへたるべく候。是は皆うけとりより初申候。其外色〳〵の事に入札有事は、世中のけいはく、僞のはしにて御座候。木の生ずる事は久しく、切とる事は手間不ㇾ入候へば、社寺の作事ははかのゆかぬも却てよく候。金銀の多入事は、まはりては天下の內に有ㇾ之候。其上請取にて麁相に出來と、武士の奉行にて工商を下知し、武士の心より何事もはからひして、堅固に出來るとは、當分多入やうにても、畢竟はうけとりの半分もいらぬに成行事にて候。商の心は、やすき時に買、高時に賣、有所の物をなき處へ通ずるばかり也。工はたゞ其身の職分に心を入て、才力を盡すのみなり。大綱の事は武士のみ知て、彼等は手足の心にしたがふがごとくなる道理にて候。いまは手足の爲に心のつかはるゝに成申候。

一。朋友問。天文によつて時變を知と申事は、正しき事にて御座候や。　云。むかし前漢の末に當

君も、下々の情を能しろしめすゆへにこそ、仁政もおこなはれ、後世に名をもあげたまひ候。

一。朋友問。うけとり普請と申事は、小利大損と申候へ共、日傭の者の助などには成申事に候。その上武士の心安き事にて御座候へば、今時はやり候も尤にて御座候や。　答云。日傭の者は使て、うけとりはさせぬがよく候。たとへば池川の堤を金千兩にてうけとり候へば、五百兩は日傭頭のうけとりのもの取候て、日傭には五百兩ならでは不レ遣候故、日傭もかじけて麁相に仕候。其上人數一万入べき處へも、五千ならでは不レ入候ゆへ、ほどなく破損に及候。得つく者は日傭頭一人にて候。公義には千兩に又千金かさねて、倍々の御損のみならず、度々に田畠損毛仕候へば、其つひゑ申盡しがたく候。武士の能奉行を被二仰付一、其處々にて百姓の内こがしこき者、庄屋の弟や子などやうの者をつゑつきにして、日傭二十三十づゝあづけ、歩役一万可レ入堤には一万五千も入、千金可レ入には千五百金も入候へば、永代破損なく候。一旦大分物入のやうに候へども、右にくらべ候へば、其得分大なる事にて候。其得分よりも、武士たる者が、山川の地理にも、人のつかひやうにも、功者になり候事は、大に能事にて御座候。屋作其外仕事も、これをおして御がつてん可レ被レ成候。其堤近所の者、つゑつき仕候へば、我身にかゝりたる事ゆへ、堤の堅固なるやうに精を出し申者にて候。日傭の歩もあるべきほど、賃をとりて身をすぎ申候。今時鐵砲役家中の出役など申者は、普請になれて功者過候ゆへに、かへりて堤堅固ならず候。日傭は日々我と我身をならはし、ほねをおりつけ候故に、常の人足とは一ばいも達者に有レ之候。奉行よく、つかひ

其町人がとらんとの事なるべし。我一國のものを迷惑させて、其町人に大分の得をとらすべき事は何事ぞ。畢竟我に五百枚くれて、十ばいか二十ばいの利を附てとりかへさんといふ事なり。我國の百姓の物を、あき人とあいたいして、あひ盜にぬすめとり。其百姓の痛みは誰が損とするぞ。其様なるいたづら者は二度ようするなとて、大にいかりたまへるとなり。又一人の町人望候やらん。他の國主の事にて候きや。失念申候。一國の茶を一人にかはせ給はらば、運上をあぐべきと申候へば、茶によらず、紙薪によらず、田作少き者が、さやうの物を作出して、年貢にもたて、米にもかへて食とするものなるに、たゞ一人のあき人より外にかいてなくば、いかほど下直にいふとも、すてうりにもうらずはなるまじ。たとへば茶をもつて、米千石の年貢に立るを、其町人が二千石にもして我にくれば、一旦利の有やうにても、民のなんぎかぎり有まじ。下々のつかれめいわくは不ㇾ及ㇾ申、我等の物をかたりてとる也。それほどの分別なくて取次をするが、汝等にも何ぞくれんといふかとて、しかり玉へると承候。一國のつかれは一國の主の損なり。天下のつかれは天下の主の損なり。いにしへの王者は一人を以天下を治む。天下を以一人に奉ずるにあらず。何ぞ一國を以其侯の欲を養ひ給はんや。町人もなみ〳〵の大勢は迷惑して、富人五十人か百人かゑようにおごり、天下の風俗を亂し申までに候。其身も斷わたりて終に亡候。御代長久にて、大名も家老も、生ながらの上らふにて御座候。今身の武士さへけつかうに候へば、何も不ㇾ知候。さりながら聖人は夢にも見給はざる凡人の上の事さへ、くはしく御存知にて候。生ながらの聖主賢

義を仕りて軍役をうけはり候へば、我物ながら主君の物にて、國役をわけ預りたるにて候へば、無二是非一候。たゞわれらごときもののみにあらず。主君といへども、一國の物を上より預りなされ候。たゞ國郡の主のみならず。大樹といへ共、天の物を預り給ひて、天下の爲に所持なされ候。隱居又は世事の國用軍役にあづからず、人にやしなはるゝ者が、人を多つかひたがり道具を好事は、冥加につくべき事の、しかも不心得と申者にて候。公家などへおはしまし候女事は、大名の息女たりとも、其先の身上に合せて、萬かろくして、しづかにゆう〳〵としたるをたのしみとなされ候やうにありたき事に候。我といらぬ苦をもち、天下の用ならで國物を多つひやし給へば、御仕合あしく、子孫のおとろへになり候へども、風俗のいやしきに習て、そのまよひを知人なく候。

一。朋友問。うけあきなひ座あきなひと申事、はやり物に御座候。國主とあき人とたゞ二人の得分にして、天下の諸色高直になり。諸人迷惑仕候と申候。むかしもありたる事にて候や。　答云。さやうの事無案内に候へ共、わかき時分老人の物がたりをきゝたる事御座候。藤堂和泉殿へ出入の町人、伊賀一國の鹽を御うらせ可レ被レ下候、左候はゞ五百枚の運上を指上可レ申と望申候。和泉殿聞たまひ、其町人はわれらの物をこそもらいてすぐべきに、我に過分の銀を毎年くれんことは、何のよしみぞ。伊賀一國へ他の鹽うりをよせずして、一人にてあきなはゞ、鹽の高直なる事常より三ばいすとも、百姓ども他より取事なるまじ。我に五百枚くれんといはゞ、五千枚も一万枚も、

てぶちにて、改べき心うすきものに候。かくすによつて入徹にはおぢおそれて改むるの期あるものに候。君子の人をすてざる仁愛の厚き處にて御座候

一。朋友問。貴老以前は人馬武道具身代に過候き。與方は身代よりもとのほか人少に、諸色かろく御座候き。今は内外ともにあまりにかろく、諸道具もかつて不足に思ひ申候。さやうなるがいにしへの道にて御座候や。答云。いにしへの道は、時處位の至善をはかりて行はれたる事にて御座候へば、其心は可ㇾ學、其事は不ㇾ可ㇾ學。われらの義は、時處にも定てかなひ申間敷候。たゞ自身の分をはかりたるまでに候。主君より知行をたまはりをかれ候へば、人馬諸道具みな主君のものにて御座候。われら親先祖より傳候ものは、牢人の内になく致候き。假に國法の軍役をあはせむといたし候へば、内所をつめ候はんよりは、つめ可ㇾ申處御座なく候。左もなく候へば、内所も身代相應にして、よのつねなるがよく候。男女ともに、天地の内にある者數御座候に、身代能人が多養ひ候はでは、何方にすみ可ㇾ申候や。又隱居して假に人少に、諸道具なき事は、無欲きれいなるにはあらず候。むかしの人馬武具身代にあはせて持候も、よせいの滿足にあらず候。家人の多はおほくの人を使やうなれども、多の人につかはるゝ處御座候。諸道具多持て富なるやうなれども、諸道具の奉行を仕處御座候。人少にてことしげからずしづかなるほどの樂は無二御座一候。人は氣力つよきゆへに、人につかはれ、諸道具につかはれても、いき〱として餘勢あるがよろこばしきと見え申候。われらは病者にて、氣力ちご御座候へば、人馬も諸道具もむつかしく候。公

集義外書卷之十三

窮理中

一○朋友問○貴老書簡に、其人の姓名をしるし給はざる事は何としたる御心持にて御座候や。云○令名も惡名も死後に可ㇾ定候。生涯に吾名の書にのせられたるは、目ばゆくいやなるものにて御座候。人心惟危候へば、又過失も不ㇾ知候。生涯に人の惡名をいふは、しのびざる處御座候○改て善にうつる人も可ㇾ有候○其上死せる者にはあらそひなし。生たる人にはあらそひ有。此人情をしらで、生る人のことをほめあげたるは、他人のそしるにはおとる事御座候。其上道德のあつきか、善行の大なるとなき人は、今にして何ほどほめあげても、後世まではつたへぬ者にて御座候。書簡に姓名をのせ候とも、其人實德なくば、後世には誰申出る人も有まじく候。却て當世のそしりをまねくべく候。たゞ今姓名をしるさず共、其人に實儀あらば、其誠をば誰かをゝゐ侍らんや。大舜の君の惡をかくして善をあげ給ひしは、有德の人の善をあげほめ給ひしゆへに、世人もしたがひ申候。不德のわれらごとき、大舜のまねをいたして、人の善をほめ申候へば、そしるにはおとりて、其人のあだと成事御座候。一向に世間の人のほむるは、よく御座候。志の相かなひ、我を信ずる人どちは、同志の善をそゝいひ、他人の善をもあげたるがよく御座候○人の惡をかくして其人の一生いはざる事は、改て善にうつらん事をねがふなり○惡をいひたてられては、もはやす

なり。刀にはにてきる〻と精神にてきる〻とあり。精神にてきる〻は、はまぐりばに成てもきる〻者也。はにてきる〻は、はし〻あればなまきれなり。此ゆへにはし〻をぬく事出來たり。とぎの罪にあらず。なさしむるものあればなり。　問。受領とていにしへのくにの守の號を申請る事は何ぞや。　云。受領は鍛冶よりおこりたる事也。　むかし國の守鍛冶の道に器用にて。なぐさみに刀をうちたるが、國の守なれば萬事不足なく、鐵炭吟味して名物をうち出せり。上にもきこしめされて、命ぜられたる有。是を例として、後世刀鍛冶の上手に受領の虚名たまはりてより、又例として他の職人商人も受領の虚名をゆるされたり　　問。貝政が刀に三德をいへるは道理あたり侍るか。　云。刀のうへに付ていへり。何事も至極にいたりぬれば、みちにかなふ所あり。心の德天下の用を以ていはゞ、刀の德は勇也。威を以て國家を守るは、勇中の仁なり。神武にしてころさず、ほこをやむるの道理にて、無事なるは勇中の智也。智仁勇は心の一德也。有時は共にあり。故に仁あれば勇智其中にあり。智あれば仁勇其中にあり。勇あれば仁智其中にあり。刀劒は三種の神器の其一なり。不淨にしてうつべからず。このゆへに、上手の鍛冶は心清淨なる處あり。鍛冶の清淨にしてうち出したる刀を、不淨の者ぬぐひてだに、さび出來るといへり。いはんやあしくときなすはおしきとなり。其外は用る武士の清淨の心に有べし。

集義外書卷之十二　終

今もなら物は出來あしけれども、かねかたし。きずと當分きれとの吟味なきゆへなり。むかしの南頁物は、奈頁とぎとても、火は入ざりしに、今は大に火を入、なまかねにして研といへり。此故に、後世までもなく、今より用にたゝず。むかしは奈頁物も、ほどにつけて今の樣に下直にはなかりしといへり。金かたくとぎに手くろなく、きれざるはすくなかりし故也。　或問。むかしとても、小身の武士高直の刀は求がたからん。いかゞしてさし侍りきや。　云。むかしは親の代のゆづりあればさし、或は我一代の精力を出して、金よき刀を買とり、或は鍛冶にたのみてうたせたり。鍛冶も一刀うてばしばらく餘產あるほど直をつかはしたり。故に鍛冶も數をうたずして、精神をこらして能刀をうち出せり。武士もきれの外は堪忍してさしたり。五郎時宗箱根の別當よりうすみどりをこひうけて、親の敵をうちたりしも、十郎祐成の太刀は三尺八寸にて、幅ひろくかさね厚し、うすみどりは二尺七寸にて、幅せばくかさねうすし、力は兄にまさりたれば、大太刀を好べけれども、調がたきによりて、金の能を幸にし、ほそくみじかきは堪忍して用ひたり。むかしは太刀一ふりにうち刀一こしにてたれり。今は小身の者も、刀二三腰、脇指二三腰、いろ〳〵に好て所持す。數多ければ、高直にてはならず。是鍛冶もとぎも古法を失て、手くろ出來、利用あしき所なり。又近年のとぎは、多ははしをとぎおとせり。古身は一度はしゝをぬきては、はをひくべき餘分なければ、百年の疵となれり。はしゝなければ、大かけしつゞけてきれぬものなり。きりあひの時すへ物のやうにはむき直にはなきゆへに、はしゝなければ損する事すみやか

に至ては、たゞひすくなき上作なるべし。剛はかりにて柔をかねざるは、石のかたきがごとくにて、却てきれず。柔過剛すくなきは、ほねをきらず。剛柔かねて精神あるを上作とすべし。是をきたひ能といひ、にべにはひにあらはるゝ成べし。貞政云、きたひは知なり。にべにはひは仁なり。きれは勇也。上作は知仁勇の三德備といへり。貞政は本武士なり。故に古主より知行をたまはり、鍛冶は物ずきにてうつとなれば、古作の法を守るものなり。昔は社家出家にも、鍛冶のさいくに得たるものありき。後世一ぺんの鍛冶は、今の無疵と、一は切の吟味にて、しかも直すくなければ、古法を不守はよはり也。この故に、刀は無疵に當分きるゝ樣にうつ事はやすく、精神を本として疵に心なく、當分のきれにかまはずうつ事はかたし。武士たる者此理を不知故に、鍛冶多は下手になる事也。むかしの下作といふは、東の物とて打出せり。是いにしへの南貝物也といへり。昔のならものは、近世のあつらへよりは金かたし。いかんとなれば、當分のきれと疵にかまはず、金をねりくださゝれば、後世に至てよくきれて用をなせり。下作なる處は、はかゆきにうち出して、にべにはひすくなく、つちとやきと不足なれば、やきはづれてはきれざる有。又の有かぎりはきるゝ也。やきはづれてきるゝは上作なり。　問、とぎやの刀の利を亡する事はいかゞ。云、是も武士のなさしむる事也。此刀は是ほどの直にてなければとぎかたきといふ事をしらで、下直にあつらゆるゆへに、金かたき物を古法のごとく硏ては、渡世なりかたければ、火にてあぶり湯に入などして、やはらげて硏なり。刀はきたひ能うち出しても、とぎやにて其精を亡すものあり。

は下直なり、古作の法のごとくうちては、後世なりがたきによりて、無疵に當分きるゝ事を仕いだせり。金やはらかなれば、この好に應ずれども、かたなの精神はなき故に、當分はきれても、次第におとりゆく也。一とぎ二とぎの間も、炎暑に終日照付られなどせば、心もとなし。きれやみて、是はいつの時代の打物とて、すたる事あらんか。夫上作の法は、あらがねの性を損せず。此故に五百歳の後は、新身のごとく成金色有。上作には疵多出來る子細あり。金をねり過さず。是疵の出來易き其一なり。つちうつ事つよし。是疵の出來る其二なり。刄をやくとひかへずして、精中に通ず。是きずの出來る其三なり。此三の大難あれば、無疵と出來の能とは、變化の中に求て、鍛冶も不レ知處なり。此故に出來よからず疵ありても、金能と切る事はかはりなし。むかしの武士は、よはみの外は疵にかまはず、切りてかゝれば硏なをし、次第にきれますをよしとす。小刀さへ能うちたるは、當分はなまきれにても、とぎ入るほど能きるゝもの也。いはむや刀は千歳をかけたる物なれば、うちおろしは十に五かゝるも有べし。古法のごとく金よくきたひてきれぬといふ事はなき道理なれば、むかしの武士は刀はとかくきるゝにきはめて、打おろしをとぎてきれざれば、はをひき、とぎ直してきり、或は土たんにて數千の砂きりし。其後硏てきればかならずきれたりといへり。此故に鍛冶も當座まかなひの手くろはしらざりしなり。　或問。むかし賴光の髥きり膝丸は、うちおろしより能きれたり。今井上眞政が打物も、上作の法なれども、初よりきるゝは何ぞや。　云。金かたくて初めよりきるゝは、剛氣をかねて刀に精神ある故なり。後世

其上獸は尾にちから有てこそ、溝堀はとびこし候。尾筋のべたる馬は飛候事ならぬ者に候。とものべたる馬は不レ及レ申かんしやうならず候。のぼり阪の急なる所にて、物のぐして乘候へば、不レ叶候。其まゝおやまち可レ仕候。馬にもとはず左様の心がけもなくて、たゞ當世のはやり物に心をうつし候ゆへに、ともの筋もかくしてはのべ候由に候と申候き。右は今のついえによつて申候。いにしへの馬の道には、十が一二にもをよばず。しかるにこれらほどの目のまへなる道理をも知人なく、武士の足とする大事の馬を、何のわきまへもなき馬喰次第にして、天下の馬をかたはにし、武士の心がけはゆめにもしらぬ商人同前の馬乘が口相をなをすといへば、いひしだひにしてよき馬どもを用にたゝぬやうにいたし候。武士の道はこれほどにもおとろゆる者にて候や。此外の武藝の品々も、大將と武士と根本をしらで、藝者にまかせ候へば、其ついへ馬に同じく候。それ武藝は弓馬を以て要とし、兵器は劒を以第一とす。漢の高祖は三尺の劒をさげて天下をとり、源の頼光は髭切を掛て天下を守り、義經はうすみどりを持して武將の名を得たり。甲冑は刀をふせがむため、鎗長刀は刀をとめんがため也。然共甲冑は用ひざる時有。鎗長刀はもたれざる處有。刀は武士の身をはなたざる寶也。しかるに近世鍛冶は刀の精神をうしなひ、研は刀の利を亡す事出來ぬ。是鍛冶と研との罪のみにあらず。武士の道を失てなさしむるものなり。武士たる人刀の道を不レ知ゆへに、無疵にして初より能きるゝを好めり。かなとこおろしにはゞかり付て、切てかゝれば、則打なをさせ、古身にしては疵にもならぬ事を、新身ゆへ疵なりといひてかへせば、代

は上手にてなければあしく候。下手を自由にのせんとて、馬をよはめてのする事出來ぬ。何の藝も道だに傳はり候へば、はやくなるものに候。道は失て不ㇾ知か、知ても後世ゆへ敎ざるか。馬乘は馬一色に一代かゝり居候へば、功にても乘事に候。弟子には道は不ㇾ傳して馬にならへとて、いつまでもかゝらせ置候。武士たる者は可ㇾ習藝多ければ、一色にかゝりては居られず候。大身には猶以馬をよはめて、下手を我上手の樣に仕候。我等或人に手にあまりたる馬の乘樣を習候。いつもは馬場にて地道も乘かね候馬を習ひ候と、そのまゝはやみちまで心やすく乘候き。其後病者に成てけいこもならず候。わかき時分に諸藝ともに如ㇾ此よき傳を聞候はゞ、むかしの人のごとく二十歲より內には、弓馬ともに達者に可ㇾ成者に候。問能馬につよき馬をばそのまゝ置て、ねちあひ道とけいこの勞とを以乘おほせてこそ、用には可ㇾ立事に候。われらわかき時、當世馬の前筋尾筋のべ候事はあしさうなると存て、馬すき共に不審いたし候へば、何も申候は、前筋のつるは其馬の病なり、切てはなし候へば、自由に成てはたらき能候、尾のかゞみてさゝぬは、其馬のかたは也、切てはなしぬれば、本の馬に成候、けつくつよみにてよはみならず候。とも筋をのべ候はあしく候、それは吟味したるもよきと申候間、其邊を武士の用馬の功者に語り候へば、其人の云、道理の至極したる事にても、水かけあひに申候へば、情のこはき者申かち候間、馬に御たづね有べく候。我等は馬にたづねてしり申候。前筋のべたる馬は、下阪急なるにてあやまち仕候、田畠などにてもたふれ候。尾筋のべたる馬は、川渡しにてつよく水にうきしづみ候時、鞦はづれ候。

のやはらかにならぬやうに持候。平生少づゝの地あるときには、かりあひ者と申候。自由なる馬が能候へども、すき田うち畠ともいはず、平ならしに仕候時は聞よはき馬にては、必落馬多ものに候。常に手にあはず候とも、其時に聞つよき馬ならでは用に不ㇾ立候。瀬はやき大河、又はさかりに出たる川などは、聞つよき馬にあらでは、先陣瀬ぶみはならず候。常に馬のかよひなき山阪も、聞よき馬にて乗こす者に候。聞つよき馬は澤山にありがたく候へは、せめてつよ口ある馬を持、其つよ口をば平常ははづして乗、大川を越時など、内々のつよ口にかけさせ、一あて當てこす事御座候。かやうの用どもは、名將と武士と、人々の心持ありて持ことにて御座候へば、馬乗の知とにてなく候。それゆへいにしへの馬乗をば、御馬せめと申候き。弓を射むちうちして、馬の口相あらくなり、山阪田畠をのり、川をけいこさせて、馬の口相あしくなりたる時、御馬せめをめして、此馬の口相をばかやうに乗候へ、路道多乗て口をやはらけよ、早道はいかほどのれなどゝ下知し、馬場乗させたる事に候。口を引折などゝいふとは、大にいみたる儀に候。上手は其口をはづしてのり、常はわすれさせて、用の時ばかり取出し候。大將は如ㇾ此だん〴〵に馬を持候者也。のりおらすに下地よりのり相能生付たる馬をもたしなみ、時によりて用ひられ候。扨士にも時により人によりて、それ〳〵の馬をたまはり候。小身の武士は、用かたをも乗責馬をも乗とかく上手に成て聞つよき馬をたしなみ候。なければつよくちの馬にても持、朝夕に切々乗て馬になれ、馬ものり手の心を知などして、平生も用かたも大は小をかなゆる様に持候なり。大身小身共に馬

たき事に候。　云。いにしへの人傳度事は山々に候はんつれ共、其人にあはざるにてあるべく候。其人にてなきに傳置ては。後のやくに不レ立候。せめてはかなりの人ありて傳ても、又それほどもなき人に傳られ候はゞ、けつく害に可レ成候。其上中〱合點も參まじく候。國法軍法ともに。不仁の人に傳へ候へば、とりなし樣にて、桀紂を富するごとく、虎に羽を付たるがごとくに成候へば、不レ傳こそまさり候。　問。其秘傳までは及なく候。弓馬のすたれてあしくなり候、其あとばかり承度候。近年は弓馬共に末に成候樣に申候。むかしの樣成馬はありがたく候。世の末と申事にて候や。　云。世間の武士鐵砲張弓打刀かぢ等をば知て、馬乘弓鎗の藝者軍法者をば知給はず候。其ゆへは、鐵砲張に鐵砲をば好てはらせられ、弓打刀かぢにも我刀のほどをはかり、又は得たるやうに好て打せられ候。然に馬のりに馬の乘樣を下知してのせられ候事はなく候。手つまきゝのりつけて馬をば能乘候へども、武士の用かたの用ひやうは不レ存候。其何もしらぬ馬乘次第に馬をのせ、かへりては馬乘のさし圖をうけて、あたら馬共をやくにたゝぬやうに被レ仕候。むかしの名將武士の馬を持たることをかたりてきかせ可レ申候。春は遠のりを第一とし、山をあげ山をおろし、すき田うねみぞをのりて、馬のともまへの强弱尾の勢力をしり、岨細道のつたひの心持のどん利根をこゝろみ候。夏は水邊を第一として、川をおよがせのりて、こし手かけてこしなど、馬にけいこさせ、且は强弱を知、秋は責馬を第一として、むちうち、馬上の弓等の達者をなし、冬は馬をよくかふべし。これは其大略なり。時としては夏の日中にても乘、冬の甚寒にも乘て、馬

士をおしくおさめなし候へば、如レ此成て後には、主君のちからにもならず候。やぶれと成べきまでに候。これを紀綱ゆるゝると申候。紀綱ゆるまりては、やがて亂世となるものにて候。　問。農兵は國の武道もつよく成、天下も久さしく治り、能事にて候へども、もはや今はなり申まじく候や。　云。今の分にて農兵を被レ成候にば、武士も同心有まじく候。民は大に迷惑可レ仕候。士民ともによろしき様にするよには、本才の人に任ぜられ候はゞ、時の宜あるべく候。　問。農兵になり候はゞ、井法貢法の様なる事にて候はんや。　それにては上へあがる年貢少くて、今のけつかうに成たる世には、公方諸大名共に用たり申まじきと存候。　云。日本もむかしは貢法にて候き。けつく今の藏入よりも、藏入は多なり候。扨諸士はあんどいたし、子々孫々牢人流浪と申事もなく、其身子孫ともに堅固になりて、藝能に達し、民は今の民より大にくつろぎあんど可レ仕候。諸大名も其家長久に、公方はなを以百千歳もゆたかに御つづき可レ被レ成候。上中下をしなべて能事に候へども、世の勢ひと申者にて、ならぬ事にて候。不レ成事を申ても、せんなく候。其上其位なくして其政をはかるの罪も御座候。　問。公方の御藏入もかはらずして成申候や。　云。公方の御藏入もいまの一ばいにも成可レ申候。扨天下の御用は今の半分いらず候ゆへ、金銀米粟あまり候。是を以日本の國を上國となし、水損日損の憂もすくなく、万々歳のほまれ不レ少様に、いか様の事を可レ被レ成候も、まゝにて御座候。武家の業ながら、弓馬のみちさへおとろへ候へば、まして大道の業を知人なきは、よぎなく候。　問。其弓馬の道すたれ候はん事、にが〱しく候。つたへをき

にてなくても、大躰のしめやうある事にて候や。日本にても、王代は千五百餘年ゆるぎ不レ申候き。清盛賴朝よりこそ武家に渡り候。其後國主も天下取も間もなくかはり申候。時の運にて候や。むかしは農と兵と分れず候き。農兵にて候へば、賢君名將おはしまさでも、大惡の君だになく候へば、おさまりかゝりたる天下は、二三百年四五百年もつゞく勢と見え候。武家の代となりて此かた、兵が農を出て、陣屋の小屋の風を其まゝに城をけつかうにし、屋舗をひろくし、小屋がけ大になりて、天下國家の用に立べき務めもなく、童あそびのやうなる事にて、天下の財用をつひやす事出來ぬ。つとめあるといふも、此無用の風俗あるによつてのつとめなれば、勞して功なし。實は遊民に近し。世主にても國君にても、君の威のつつがなき内こそあれ。其間には必くらき君もあり、或は幼少にて跡をつぎ給へば、上の威うすく、諸士我まゝになりぬ。大勢の事にて、ぢねんにあしく成事なれば、後にこそおどろき候へ。そのはじめはしらず候。又しりても、勢にて誰をさゆべき樣もなし。下々は其勢を知て、いよ〳〵氣隨まさり候。主君の目の前や、家老の前にてこそ、ばかいんぎんにてまぎらかし候。かげにての無作法我まゝは、日々月々にまされり。法度ありても不レ用は、主君はありてなきが如し。後〳〵は我臣下諸士といへ共、何ともすべき樣なし。とわざに子をあまやかしあしくそだて、かゞむべきときかゞめざれば、のちはこはくなりてかゞめられずといへり。我子ながらも、親のまゝにならず候故に、をごれる子の用べからざると申なり。武

むゐて忠をし孝をし候は、たとへば盗賊をして親をやしなふがごとくなり。養ふところは孝に似たれ共、終には親子ともに其罪のがれがたし。　問。執政の人は大身なるがよく候や。小身なるがよく候や。　答。いにしへは大身にて御座候き。後世は小身なるがよきと見え候。其ゆへは、むかしは無事にていとま多かりしゆへ、大身にても事とゝのひ候き。後世ははぶくと申分が多事に候へば、我國家の政道いとまなく候。我家の事はすきときかぬほどになくてはならざるゆへに、大身にてはなりがたく候。しかるゆへに、大身に德ある人御座候へば、子にわたし、隱居の樣にて執政を命ぜられたるも御座候。　問。執政は事多候に、老人多候は、何としたる儀にて候や。云。よき不審にて候。執政の人は大方長命なるものにて候。思慮分別し苦身する事にも、私欲まじはり候へば、心を勞してわしく候。執政の苦身はみなおほやけごとにて、私欲のまじはりなく候ゆへに、いかほど事しげくても不苦候。其いとまなきにまぎれて、形氣のたのしびもうすく候へば、をのづから養生も候。我家の事は、權勢の餘力にて、をしてゆく事多候。人情をのづからしかる者にて候。又居は氣をうつし養は體をうつすの理にて、小事にはたらぬ氣力も、大事にはたゆるものにて候。又小國中國の仕置をさせては、きつく事ゆかで、大國を治れば能、天下に用れば猶よき人候。如此人を見しらで、すたれたるためし御座候。　問。中國夏商周の初にて、賢聖の君もおこり給ひ候。　漢の代より此かた、賢聖とおぼしきすぐれたる主もおはしまさず候。其初大かたの仁君名主と申ばかりにて、跡はかもなく候。しかるに三百年四百年つゞき候事は、德治

候へば、こまかなる金銀の裏判までいたさせ候事は有まじき儀なり。我とは身をたかぶるやうに人のいふべきかとの遠慮も可ㇾ有候。さやうの爲に、古へは家に備たる大臣の筋は政にあづからずして、官位高く祿ゆたかにして、脇にのきて天下のうしろみし、執政の大に我ままなるをばおさへ、又下り過ていやしきをばひきたて、事しげきをばはぶき、おこたりをばいさめなど御座候き。執政は筋目身代を撰まず、天下の智者賢者をゑらむであぐるものにて候。　問。天下の事はおほやけ成事ゆへ、穩密はなき事と申人も候。いかゞ。云。三皇五帝の成徳の世には、さやうにて候。三王の時よりは、最早世の勢ひ替りて、穩密の義なくて不ㇾ叶候。君たる人能をんみつになければ臣を失ひ、臣たる者能穩密になければ身を失ひ候。總じて天下の萬事よく密になければ、事やぶれ候。政道評定の事は、其人々の外へは、親子兄弟を初てもらさぬ義にて候。君にはおかす事はあれども、かくす事はなく候。不合點なる親子兄弟夫婦知音などは、我れにかくすとうらむる事もあるべきが、心ある人ならば、親にても子にても、是は公義の事なるに、いふまじき所にていふは、やくにたつまじき者と見かぎるべし。いふまじき事をもいふを以てしたしみとする事は、無下の小人のまじはりなり。いふまじき事をいはぬとて、親みのかけみちには少もならず候。君子の心は、常に天地神明にまじはりて、あざむく事なく候。ちかいの言など申は、末なる義に候。其誓言ばかり誠にして、其外は僞にて候や。ちかひまでもなく、一念の不信一言の僞は、みな神明の照覽明に御座候。皆天罰のいたる所にて候。道理にしたがふを以て忠共いひ孝共いふ。道理にそ

ゝ之は、益はなくて害有べく候や。　云。しからず。益ある事にて候。あしき者をばかねていさめみち引て、悪にいたらざる様に仕候。つねの人の異見とちがひて、能きく者にて候。其上公儀の御用にふれてこそ可ゝ被ゝ申候へ。事なきに十人なみの事をもち出ては可ゝ被ゝ申にもあらず候。

問。國天下の政道は大事にて御座候に、君臣の禮義ふかく慇懃なる躰にては、分別も心一ぱいは不ゝ出筈にて候。むかしはいかゞ御座候しや。　云。むかしの禮と申候は、心の正くなる様に身持仕候。君臣の禮義正く、きつと仕候ほど、心おさまりて、分別思慮も常より能理にて候。後世其法はたへたるゆへに、北條家の世には、天下政道の相談、並大事の口事などひけんの時には、晝なれば君臣の間にひとへの木丁かのうれんなどやうの物をたれ、或は障子をへだてゝ、いかにも座をやすくおかれ候。夜なれば同座にて、ともし火をけし、安座して相談御座候き。武家の天下と成てより此方の様子には、是も相應かと存候。上古の代は、徳さかんに知大に、無事行はれ候へば、天下の廣きといへども、事しげからず。分別思慮すべき事も、さのみなく候へば、相談のむつかしき事もなく候き。　問。金銀の拂の裏判等まで、執政の人のいたされし事ありしはいかゞ。　云。大くくりはきかれずして不ゝ叶候。常々の吟味裏判等は、執政の下に付て助に成人のいたさるゝ者にて候。小事にはそれ〳〵の助をつけて、大なる事ばかり聞せ申、常にいとまあるやうになくては、分別思慮も心一ぱい出べき様なく候。大國の執權職たゞ一人にてしめられ候だに、いかにもいとま多候き。武家の世となりて此かた、執政の人官位の名ひきく候へども、實は三公の職にて御座

集義外書卷十二

窮理上

一。朋友問。大學治國平天下の理を論じ候事は、理をきはむるの一事にて候へば、位あらずして其政をはかるのたぐひにはあらじと存候。しからば尋申度事ども多候。答云。しかり。我等まれに申候も、大學治國平天下の議論か、或は五百歳このかた見て來候世中のあらましを申にて候。時勢の政道は殘候て不レ論候。大躰の議論にて候はゞ可レ承候。問。執政の人としては、親類知音中に能者ありても、遠慮して人品のえらびにも不レ申が能候や。云。それは私と申者にて候。尤親類知音の贔負をするよりはまさり候へ共、執政の職はおほやけの儀に候へば、公儀にしては親疎のへだてあるまじく候。退て我家内におゐては、尤親疎の品なくて不レ叶候。たゞ君のため國の爲には、へだてなきが義にて候。是大公無私の天理なり。兄弟一門の人にても、能人ならば遠慮なく申上もしすゝめもし、兄弟一門にても、國の害になるべきものをあやまりてわきより申上もしすゝめもいたされば、其實を明にしておさへらるべき義に候。一門のよき人を遠慮して能と不レ被レ申私御座候へば、其人の一門にあしき人ありても、わきよりあしきといふ事を遠慮いたされ候。しかれば天職とは申がたきにより、私と申候也。

一。問。余所目よりも、したしき内にては、善惡よくしらるゝものにて候へば、執政に一門知音有

集義外書卷十一終

つめざる故に、定れる貢を奉るなり。貢には返禮なし。かろき貢にても、天下を合せては、大なるとなり。上にとなる驕だになければ、諸國にめぐみ給はる用はたれり。むかし奥州の秀平、平家にしたがはずして在國せしかども、天子に奉る貢は、毎年黄金を傳へて、京都にさゝげたり。頼朝にもしたがはざりしかば、右のごとし。これいにしへの風なり。武家の代と成ては、在鎌倉久しくて、國用多ついやす故に、諸侯の貢やみたり。貢をさゝげて在國する事は、諸侯も天下主も大によきとなり。士民もこれによりて困窮せざれば、武士百姓ともにゆたかなり。頼朝北條尊氏諸侯を在鎌倉せしむる事は、用心と見えたり。しかれ共、むかし王代の二十分一も、世を持とあたはず。頼朝のときはいまだ古風のこりて、物ごとにかろく、其上三代といへども、年數すくなかりしかば、在鎌倉ゆへ、諸國困窮の沙汰なし。北條は猶以て倹約を宗としたるゆへに、九代までつゞきたり。高時に至りて、威つよく驕奢きはまりしかば、一國の一年の物なりにて、一度の在鎌倉の用とゝのほらざりしとなり。これによりて諸國虚し、士民困窮せしかば、大亂出來ぬ。足利家の天下十四代といへ共、中頃よりは公方と云名ばかりにて、今の公家の如し。是皆士民困窮して國虚せしゆへなり。天子諸侯のたから三つあり。土地人民政事なり。しかるに土地虚し、人民困窮し、政事九經にそむくときは、亡びざるとあたはず。懐ニ諸侯一は此方に心ありてなつくるにあらず。諸侯より徳をしたひてなつくなり。懐にするとよみて、同心同徳の意なり。なつくと其中にあり。

國君もすべき樣なし。平生あしきのみならず。軍國にはなを以て大にあしく。數代集居たる武士の妻子、足輕中間の妻子までも、城内に取入て養はんとは成がたかるべし。其身に成ては、生なきにしかざる難儀有べし。農兵なれば、在所〳〵にていかやうにもさくまひする事なれば、男子ばかり城にも入、出陣もすれば、何の憂費もなし。もし人じちとる事ありても、頭々庄屋などの母か妻子か城中に入たるばかりにてよし。か樣の事こゝにいらざる論のやうなれ共、聖人九經の政にそむけば惡事多出來る證據をいへり。期聘以ㇾ時。期は諸侯帝土に來て、天子にまみゆるを云。五年に一度なり。聘は年に一度大夫を使とし、三年に一度卿を使として、天子に土產をさゝぐるなり。定數の外には、へつらひて使者土產等を奉るとあたはず。往來の路次も、一日にいく里と大數定りて、いそぐ事あたはず。風雨等のさはり有て、をそきは何ほどにても不ㇾ苦。一日も定數よりはやきをいましむるなり。故に道中いそがはしからず。往來すくなく、諸國しづかなり。時を以てする故なり。日本王代のときには、三年に一度の上洛といへり。小國にて近き故なり。京に三十日より多は居ざりしなり。尤人じちなし。德治の遺風なり。厚ㇾ往薄ㇾ來。諸侯よりの土產はかろく、歸國のときに天子よりのたまものは多し。近代諸大名の土產よりも、御暇のときに大樹よりたまもの多も、此遺風なるべし。

或問。天子畿内の地は、帝土の臣にたまはる所多し。かくのごとく、天下の諸侯に厚く給はり、うすく受給はゞ、何を以てか萬事とゝのひ侍るべきや。

云。これは往來の禮用なる故に、臣の奉るやうは、君のたまもの重し。諸侯皆在國して、帝土に

國郡の主の跡たえたるとき、取立の人を大身になしてつかはさるゝに、其家中の士うごかず。國付にしてたまはり、一人も他國せざるやうにせしもあり。これは又一道なり。いにしへの農兵に同じ。取立のもの多して、我身子孫までの用心と思へども、おちめに成ては、少も用にたゝざるものなり。古今明白なり。武士の農をはなれて、城下にあつまり、足輕中間までも城下に住居するは、治亂ともにあしき事なり。むかしは士たるものも農を本とし、在所を持て住居せり。才あり德有ものゝみえらばれて、京師にも國都にもよび出され、其官職に付たる祿を受て仕るなり。子孫はそのまゝ在所にをれば、官職を辭すれば、本の農に引込なり。故に牢人といふもの有べき樣なし。後世戰國久しかりしより、士たるもの農をはなれ、在所を出て、わたり奉公人などいふもの出來て、陣所の小屋かけに習て、城下に屋敷を多とり、役人にてもなきもの、馬まはりなどして、大勢たゞ居し、子共多出來れば、宗子一人は、親の跡とりとて部屋住に妻子を持、次男三男よりは、主君よび出さゞれば、牢人と名のりて、他國をかせぎなどす。國々にさやうのもの多ければ、すぐれたる藝能あるか、よき肝煎なくては有付がたし。治世久しければ、牢人ます〳〵多成て、遊民のごとし。主君より祿を受て生じたる子ども、親がかりなれば、牢人と云べき理はなけれども、風俗あしく成くだりて如此。これ又亂世の端なり。足輕中間などは、なを以て農の餘民をつかへば、よき事多きに、城下に妻子を持て、家屋敷をならべをれば、其子共後にはなすべきこともなく、有付べきやうなし。習いやしければ、盜をもし、いろ〳〵あしき事有ものなり。後には

るなり。扨小身のもの、思ひよらず郡國の主となれば、本めしつかひたる小者中間は士になり、かちの若黨は高知をとり、いやしきゆかりかろき朋友までも、分に過たる身上と成ぬ。これ世中の風俗のいやしく成はじめなり。主從共に才德なくてあがりたるものなれば、三代五代七代の間には又亡る事あり。子孫客に習て、本の賤きわざも得せず。在所もとり失ひて、歸るべき所なければ、淺ましき躰に成もの多し。いやしくそだち、下の事知べきものは、あがりて驕をきはめ、代々よくそだちたるものは、牢人して下にくだれり。下のわざも得せざれば、うゑこごえに及て妻子共に悲哀す。末々のかろき牢人は、勇氣にたよりて、盜賊を事とするもの出來ぬ。勇氣もなきものは、遊民となりぬ。治平の政は、遊民盜賊のたねをまかざる樣にすること肝要なり。故に士の罪あるは、左遷の法ありて、他國に流浪せしめず。左遷とは流罪にあらず。今世は左遷流罪同じ事に覺たり。流罪は島へ遣し、山澤に置なり。これは死罪に近き罪なり。左遷は位をさげてひきき役をさするなり。下々の罪あり、死罪をなだむるは、入墨をして、米つき水汲者とるやうなる事に使なり、骨をりわざもならぬものは、遠くゆかれぬ樣に、足の筋をたちて、門番などをさするもあり。後世は死罪につくものは、多はをいはらふなり。是盜賊遊民の種をまくなり。いはんや大身の亡て牢人多をや。賢君は此勢を知給へば、天下の古き家のたたざる樣にし、流浪人の出來ざる樣にし玉ふなり。此時下より進て立身するものは、皆善人なり。主の仕合によりて立身するものは、下人が九百七八十人まで、善人はなし。たゞ家久しきもの、ゆかりのものと云ばかりなり。むかし

つ〳〵も、中にかなひたるよき事をいへるが、あつまりていつとなくよみならへり。故に京學は書にはさのみひろからでも、偏屈になく、ひろき所有。又一人にも善と不能とあるなり。少すぐれたる事有者は、一生に一度帝土へと志して來るなり。帝土にも天下の善をあつめて、風俗うるはし。むかしは日本よりも、中夏の都にゆきて、物を習しなり。遠人をめぐみやはらぐる政ありし故なり。繼二絶世一擧二廢國一は、子孫なく成て、祭絶、又あれどもをちふれて、其人ともなきを、絶世と云。國郡の主の子孫なくて絶たり共、同姓をたづね、ゆかりを求めて、祭をあげしむるを、繼と云なり。子孫有ながら、國郡を失ひ、流浪してあらんをばよび出し、先祖の國郡をあたへて、代々の家來を扶持せしめ、祭をなさしむるを、廢國を擧と云也。治レ亂持レ危は、家中に口說など出來て、國みだれんとし、子孫不覺悟にて、家を失はんとするごときこと出來れば、天子よりよき人をつかはし給ひて、口說をしづめ無事になし、惡人あらば、其者ばかりを刑罰して、跡をよくし、子孫不覺ならば、敎化して覺悟をなをさしめ、不レ改をば隱居させ、先祖の子孫の中にてよからんをえらびて家を立、上下ともに師とすべきよき人をつかはして、道學を敎へ、風俗をよくし給ふなり。後世はしからざる事あり。君の氣に入たるものに國郡をあたへ、取立むために、闕所の地あらんことを願へり。故に子孫なきをば家を絶し、あれども嫡子ならざるをばとりあげず。ましてすたれたるをば取立ず。家中に口說など出來れば、しづめはせで、それにかこつけて、身代をはたし、子孫の不覺なるを敎はせで、惡事出來、次第に所をめしはなてり。この故に流浪人多出來

にも、常の扶持をば給はるなり。或は五日十日に一度、或は一二月に一度、其つとめをこたりを考へ、屋を作り器物を作るも、堅固不堅固を吟味する也。故に百工も、心まめやかにて家業をよくする也。送レ往迎レ來は、人を出してをくりむかへせしむるにあらず。天下の旅人商人、往來自由にして氣づかひなき事、をくりむかへの有がごとし。又實はをくりむかふる道理なり。川にのぞみてわたらんとするものに、舟を出してむかへをくらば、淺からぬ事に思ひてよろこぶべし。橋をかけをけば、うれしきとも思はざるがごとし。聖賢の代には、旅行するもの、路銀をもたて往來せしなり。所の主より旅人のまかなひを出レ置て、役人をつけ、馬等までかしたり。其代には禮式ありて人の往來いそがはしからず。いたづらに横行するものなかりし故なり。むかし僧の行跡よくて數すくなかりし時は、一錢をもたで諸國修行し、所々にて宿をかし、朝夕を養ひて通せしがよし。近世は出家餘多になりて、作法あしく、しかのみならず、人を殺害などする者も、僧の中に多ければ、眞の僧にも宿かしがたく、かせども宿ちんとるがごとし。今の風俗にてみれば、此敎はなるまじき事の樣なり。嘉レ善矜二不能一は、四方より帝士へあつまるものの、よきをば賞美して、いよ〳〵其善を大にし、よからぬをばひきなをし、敎たつるなり。文學なども、夷中にて書まかせにひろくみて、達者なるもあれども、夷中學問にて一偏なる所あり。帝士は四方の名人あつまるによりて、四方の中をとりてよきものなり。ことばづかひさへ、都の士はいづく共さだまらず、一偏ならでよきものなり。諸藝も又かくのごとし。取分文學は數百歳數人の手をへて、ひと

故に、世の絶を繼ず、國を廢するをあげす、みだるゝを治めず、危をたもたず、國郡のあくを悅ぶ樣なる非道も出來る事あり。これ亡國の端なり。一のあやまりより、万のひがこと生ずるものなり。忠信重祿は、誠ありて禮儀正しく、大やうなる士を賞して、祿を重くし、人の頭とすれば、風俗あつく成て、輕薄ならず。世間いそがはしからず。いとま多て、文武の道藝をつとむるものなり。利發才覺なる者をば、忠信の人の下に付て、小事に用いて可なり。人を用る事あたれば、天下の士善にすゝむものなり。時使薄レ斂は、農のときをさまたげず、年貢をかろく取なり。宋衡陽王義季。嘗春月出畋。有ニ老父一。被レ苦而耕。左右斥レ之。老父曰。盤ニ于遊畋一。古人所レ戒。今陽和布レ氣。一日不レ耕。民失ニ其時一。奈何以ニ從レ禽之樂一。而驅ニ斥老農一也。義季止レ馬曰。賢者也。命賜ニ之食一。辭曰。大王不レ奪ニ農時一。則境內之民。皆飽ニ大王之食一。老夫何敢獨受ニ大王之賜一乎。義季問ニ其名一。不レ告而退。むかしは農兵にて、武士民間にあり。田畠にても手傳し、山野にかりし、川澤にすなどりし、風雨にあたりて身堅固なり。軍陣に出るもの、皆一在所の者なれば、にげて以來面目なく、主從數代の恩義あれば、五人七人つれたるものも、主人を見はなさず。其身つよく、下人思ひ付たれば、殊の外つよきものなり。この故に、聖人農兵を用ひ給へり。今の馬まはりなどいふもの〻ごとし。軍役農より出しゆへに、年貢かろし。むかしは日本も農兵なりしゆへに、大方十分一の年貢なりき。農に利あれば、百姓農業にすゝむなり。日省月試。既稟稱レ事。既稟は今の扶持方なり。百工の家業をよくつとめて。功あるには、其事ほどに扶持をまし、すぐれざる

るゝもはかなし。無二是非一うやまひをまとゝおもひて、天下をのぞみ、即時に亡びたるもあり。何の咎なくて害のみ多よをしらば、才知相應の人をすゝめあげて、執政とし、うしろみしてゆたかにありたき事なり。其一生のたのしみを得のみにあらず、君臣ともに子孫長久なるべし。中夏にて下よりあげられて天下の執政と成たるを、宰相職といへり。祿大分なれども、國郡は給はらず。今の合力扶持方のごとくありしなり。公用には公儀の諸役人を使なり。直臣なれば、直に殿中に往來して、用もよく達す。給はる所の祿は、其身今日の自由と子孫一類のにぎはひなり。子孫に傳へざる祿なれば、人をばかゝへず。我家內事すくなく、苦勞なく、公用一遍に心をつくすなり。才德少ありとても、假大身なれば、其郡の政、家中の仕置、公用にさしつどひ、一方はそろそかになるものなり。代々の大身にあらざれば、諸士もより合者にて、風俗あしく、其人の心を害する事多ければ、右のごとし。宰相年老、或は病氣などにて職を辭すれば、民間より出たるは、本の民間に歸し、小臣倍臣よりあげられたるは、小村を給はりて山水に隱居し、しづかにたのしめるもあり。家中なく民なくて給はりたる大祿なれば、五七年の宰相にても、子々孫々の富有となれり。公儀のためには、藏入の地減せずしてよし。小身を大身にして、地を給はり、其人死すれば、子孫にすぐに給はらでもかなはず。又あげて郡地をたまはれば、一二百年の間には、給はるべき地なし。故に下よりあぐる事あたはず。下地よりして大身なる人の筋目あるが中にてえらべば、其器にもあらざるに政をとらしめて、君臣共に家を失ふ事、右のごとし。倉入の地すくなき

なり。まかすればば權威下にうつり、まかせざればうらむる事あり。故に後世は、家に備りたる大臣は、うしろみの様にてあり。執政は、時に當りて、小臣倍臣民間をいはず、才德有人をあげて宰相の職にをき、職に付たる祿を給はりて、一代きりに用られたり。是によりて君威も下にうつらず、大臣も不﹅亡。さのみ賢君ならねども、三百年四百年つゞきたり。家に備りたる大臣の權を取て子孫に及すは、君の子孫亡、其身の子孫もほろぶる事有。君威かろくなれば、格の備たる人をのみ用ひて、下よりあぐる事あたはず。日本王代も、延喜の時代までは、王威つよかりし故に、北野天神は儒者にて文章生なりしを、大臣になして、天下の政をなさしめ給へり。其後攝家などいひて、數定りたる家の外は、權をとらざる樣になりたり。是によりて王威日々に衰たり。君威をさへうばふ事なれば、まして大臣の威をうばふ事はやすければ、武家の天下となれり。學問はなく共少し物のわきまへあらば、政にはあづかり度事にあらず。人間五十年夢幻のごとしといへり。其中にも病苦憂哀いろ〳〵さはり有て、心安たのしむ日はすくなし。執權は天下國家の苦をになひ、多の人につかはるゝなり。人にをぢうやまはるゝを悅ぶばかりなり。これによりて一生いそがはしく、夢のごとくにてをはらんは、はかなき事也。勢にをされて、外はうやまへども、心にはあなどりにくむもの多し。俗語にも三の末とて、家の衰微するは、家老の末、町奉行の末、代官の末といへり。大臣は代々知行に不足なし。執政を以て渡世とするにも非ず。諸方よりあつまり來る諸物の多きも、心氣のついへとなれり。かぎりなき欲のために、かぎりある生をうばは

死後のをくり號は不ㇾ知。生前に王號有べからず。舜のごとく父母にのみ位をわすれ、匹夫のむかしの心にて愛敬して、天子の父母たる榮花有べきのみ。高祖は賢人の德なしといへども、天命を得て天子たり。父母は道德なく天命なし。死後とても王號は有べからず。父士たり子大夫たる道理にて、天子の禮樂を用べきのみ。親類は人により、或は位をわけ、或は祿をあたへ給ふなり。こゝの位祿は公侯子男の事にあらず。祿とあるにて、國郡にあらざる事を知べし。公侯子男卿大夫は、定りたる地あり。其外は一日にいかほどとて、今の扶持方のごとく、給はりしを、祿といへり。公界へ出して、いやしからぬには位をあたへ、無骨にて公儀成がたきには祿のみあたへ、心に善を好み器量もある人には地をあたへらるべし。同二好惡一は、兄弟伯父甥諸親類を君子の心にしての好惡なり。君本より聖賢なれば、君と好惡を同するにて知べし。勸ㇾ親ㇾ々は、親族皆道理に服し、善にすゝむなり。君にちかきを以て、敢て人にをごらず。無禮をもつて恥とするなり。官盛任使は、万事の用人備て、大臣は總つかねを聞、諸臣の上に座してゆたかなり。大臣の才を用ひてさへ〱しきは、下いそがはしく成ものなり。大臣は才知ありても人に先だゝず。諸人の才知を用ひて、善なるをば好していよ〱大にし、及ばざるをば助て善にいたらしめ、我分別より出たる善をも君といひ、君過あれば、我不足といひ、近ては忠を盡し、退ては過を補ひ、まとを以て大臣の職分とするなり。此大臣は、君の權威をうばふ心なければ、いよ〱万事うちまかせて、小臣の讒を入ざる時は、大臣もいよ〱忠に、進て心を盡すものなり。後世如ㇾ此大臣はまれ

孫なり。舜も黄帝の孫なり。民間に入て久しからず。四代までの間には善人も有べし。象が凡情を國に及さじ官をつかはして有庳を治めしめ給へば、象は一國の祿を受くるのみなり。舜より代となり。我朝王代に、一任四個年の受領をつかはして、諸國を治めしめ、百官は國々の貢物をたまはるばかりなりしは、此遺風なるべし。山川あるゝ事なくして、國ゆたかに天下長久なりき。中夏は大國なるゆへ、なべてさやうにはならざれども、名山大川のよく雲を出し風雨をおこして民用を助くるをば、諸侯に封じ給はず。とりわきて天子より下知し給へり。大舜の象を有庳に封じて貢物のみ給はりしは、時の權道なり。常にはあらず。日本もこれに習ひて、久しく治りしか共。國々に侯有は、天理自然の勢なれば、後はをのづから諸侯のごとくにて、在國の大名出來たり。後醍醐の帝の時、天下本に歸したりしを、時勢人情を知給はで、諸侯をむかしの受領のごとくし給し故に、天下又武家に歸したり。此とき足利新田を大納言になし、楠を中納言とし、赤松ならびに長俊などを宰相とし、其次は中將少將侍從になして、諸大名皆昇殿をゆるされ、公家武家ひとつにし給はゞ、他の事は大方あしく共、天下はゆるぐべからず。其間に天皇崩じ給はゞ、惡政やみて、いよ〳〵かたかるべし。足利家の中比より、權威を失て、公家のごとくなりしも、禮を失て、天下の士いきどをりしゆへなり。三種の神器は王者の心法なり。知仁勇の德を表せり。人情時變を知給はざるは、第一の知不ㇾ足なり。眞の學行はれざればなり。　問。漢の高祖其父匹夫なるを、太上天皇の號を奉りたるはいかゞ。　云。道を不ㇾ知人なればなり。天に二の日なし。

民也。當下擇二賢才一而用上レ之。豈以二新舊一爲二先後一哉。今不レ論二其賢不肖一。而直言二嫌怨一。豈爲レ政之體乎といへり。この故に有道の代には、君といへども私し給ふべきにあらず。故に御子なれども、其德なきには、位を傳へ給はず。武王周公の先祖にをくり號ありしも、文王王季大王までは、王號ををくり給ひ、それより前は、其まゝ諸侯の位にて、祭禮ばかり天子の禮樂を用ひ給ひしにて知べし。大舜さては漢の高祖のごときは、親先祖よりのゆづりにあらず。其身よりの位なれば、父といへども凡人なり。故に無位にして、たゞ舜のみ父母を愛敬し給ひ、天子の父母たる榮花あるのみ。大舜は五十に成ても、父母をしたひ給ふ事赤子のときのごとし。天子と成給ひても、父母には位を用ひ給はず。匹夫の時のごとくなり。父母も天子をば子とすれども、諸侯公卿にはたかぶり有べからず。大方は參會も有べからず。もし參會ありとても、天子の父なれば、上座に置べきばかりにて、言葉はたがひに慇懃なるべし。天子の師のごとし。尊して位なく、高して民なきものなり。我ゆづりたる天下にあらず。我もと匹夫なり。天子こそ子なれば、心安かるべけれ。諸侯百官にたかぶるべき道理なし。諸侯大夫も、父匹夫にて子諸侯大夫となりたらんは、其父母たるもの心得有べし。天理人情を知べし。　或問。舜の弟は惡人なり。しかるを有庫の國主とし給ふは、其人ならねども其位を尊するにあらずや。孟子の言と相違のごとし。　云。舜は堯のゆづりをうけて、堯の先を先として、祭をつかさどり給へば、舜の父死して祭主たるべきは象なり。舜も象を助て祭給ふべし。故に舜の本生の父母先祖のために、有庫に封じ給ふべし。堯も黃帝の

心に文を好む者も、このそしりにおそれてせず。むかしは同じ一心のよき中にては、武藝あるをまされりとす。今は同じ位の武士なれば、武藝あるを以て疵とす。相弟子の中によからぬ者などあれば、それをいひ立て。武藝の稽古をさまたぐるもあり。藝能もなく、無作法なる友とより合、亂行なるもの多けれども、それをば却てそしらず。これ皆讒を遠ざけずして、小人多ほしいまゝなる故なり。貴レ德は有德の人を尊ぶなり。天下國家のためには、有德の人ほどなるたからはなし。賢者上にあれば、國ゆたかに、天下長久なればなり。勸レ賢は、賢をして知力を盡さしむるなり。又聖人の大寶を位といひて、富貴の權をとりて、天下を平治し、天地の造化を助くるものなれば、國天下の政は財用の心得大事なり。貨財は君子のいやしむものなれ共、財用の權をば下にわたさぬものなり。庶人はいやしきものなれども、是を制する權は上にあり。君子有德を尊て、貨財をいやしとすれ共、天下の貨を制する權は上にあり。四海の困窮は、財用の權の商にくだるよりをこる事あり。上の天祿ながくたへて、大亂となる時は、富有の大商どもは盜賊のために害せられて、年來天下の者をくるしめし天罰のがれざるものなり。尊二其位一は、一向の凡人に高位をあたふるにあらず。其分に應じて尊する也。帝堯は民間の舜をあげて賓客とし、九人の御子達をも馳走人に付給ひ、後に攝政を命じ、天位をゆづり給ひしにて知べし。位祿共に天位天祿なれば、人爵天爵相應の道理なり。房玄齡言二大宗一云。秦府舊人未レ遷レ官者。皆嗟怨曰。吾屬奉二事左右一幾何年矣。今除レ官反出二前宮齋府令後一。上曰。王者至公無私。故能服二天下之心一。設レ官分レ職。以爲

しめ、或は扶持をはなし、百姓をしへたげ、所をあらしても、なをたらず。故に諸大名、一國の一年の物成にて、一度の在鎌倉の用たらざりしとなり。大身小身共に、參會の物語は、金銀米麥の事、道具衣服料理の事、甚しきは好色の事なり。武士の家業なれども、武藝をもたしなまず。いはんや文學をや。のがれ言葉には、學文は坊主のわざなり、武藝は藝者の事也、武士はたゞ一心なりといへり。これいにしへ名將勇士の言にあらず。義經は文學あり。七書にもよく通じ給ひき。辨慶も文才の達者にて、能筆なりき。弓馬兵法の達者は、人のしれる所也。楠正成子に遺言せし書に、勤學をこたる事なかれと書て、武藝の事はいふに及ばざればかゝず。足利家にも、今川の貞俊は、文武二道の名將なりといひて、西國の探題にをかれたり。其比貞俊におとらぬ武將は有しかども、六十餘州の中にて、一人えらび出されしは、文道ある故なりといへり。この故に人もそねまず。大田の道灌は、文を好て名將の聞えあり。今も文武共にきらへる人の口實あり。豐臣秀吉文盲至極にて、天下をとりしより、武士の風俗いやしく成て、文道をこのまず。儒者の學は市井に落て、渡世の事と成たり。故に文盲にても、生付よき人にはをとれり。武藝も藝者に落て、武道のはげみなければ、無手の者にをとれるあり。是等をひきて、文武の二道をきらへるは、其本をわきまへざるか。又しれども、己がきらひののがれ言葉なるべし。むかしは生付行跡牛角の士にても、文學あればこれをまされりとし、崇敬せり。今は武士の學文して、なみよりはよく、前よりはまされたる者あれども、己にましたる所有をはかくして、其非のみいひてそしれり。

はして其道具をばうちすて置れしとなり。この故に、天下の人器物をもてあそばず。又大友の淸正、三條の宗近が打たる太刀を、百貫にてかはれしを聞たまひて、宗近が太刀の德、何事にか侍る、物の骨のよくきるゝといふにて侍らん、物きれの太刀は、はじめより御家にも傳て持給ふらん、古きめづらしき太刀、持たるといはれんためばかりに、百貫を出し給ふとは、物の輕重を知給はざるなり、百貫にて在鎌倉中、貧き郞徒にめぐみたまはゞ、自然のときの御用にも一入立侍らん、此太刀一色はくるしからず、一を以て万を知なれば、よろづ入ざる道具を愛して、百姓に過役をかけ、諸士迷惑せば、國虛して亂の本とも成ぬべし、天下に不忠の人といはれしとなり。このゆへに、春比のうりかいに、三十貫より上の太刀かたなはなかりしと也。又其時代は新身とても金よく精神ありしかば、よくきれて、古身にもをとらず、代物も古身におとらざりしとなり。其比の三十貫は、今の米三十石なり。武士の第一とするものだにかくの如し。いはんや其外の器物は、一向もてはやさず。故に諸士文道を學て、道なる事を好み、變を好まず。色を好まず。武道にをこたらざるを、よき士といひて賞翫し、積學の人あれば、これを崇敬せり。諸大名在鎌倉の事は、二年又は三年に一度百日或は二百日なり。それさへ鎌倉にて、米金を多ついやさゞる樣にとて、さまざま心をつけられしとなり。是によりて諸國ついへすくなく、九代まではつゞきしも。是前の相州貞時、貨を賤して士民を愛するとを知給へばなり。相摸入道の時の風俗はしからず。器物を愛し金銀をたくはへ、色を好み飮食をえらび、奢によりて用たらざれば、家來をくる

に成て、不仁の者なく、おかしぬすむものなし。亂をねがふとも得べからず。人の道を敬べきのみ。
又金銀下に多くなれば、天下衰微する事あり。いかんとなれば、金銀多ければ奢長ず。奢長ずれば民にとる事多し。後には米は大かた上へとられて、民の食牛馬に同じ。故に常に人の往來する大路の外は民間に宿すれば、一夜の食米もなく、行かゝりたる旅人めいわくする事也。まして人數など遠く出だす時、むかし米遣の時の様に心得て、金銀持行ても、諸勢うゆるものなり。夷狄のためにとらるゝ事もあり。常は奢によりて、諸侯大夫士までも、金銀不足なれば、民より米を多とりて金銀にかゆる分別のみなり。故に米のはらひ方なければ、天下に酒屋多なり、水となしてなく成、或は藏の下の虫となり、海中に入など、米のすたる事さま〴〵多し。此すたり所なければ、諸侯大夫士の米のはらひ所なし。米のあつまる津には澤山なれども、國々所々には盡くとりあげられて米なし。國に兵亂の事あれば、軍兵の扶持米なく、津々より米をとりかへさんとすれば米俄に高直に成て、盜賊所々にをこり、小亂も大亂となりしためしあり。さなくても少不作つゞけば米高直に成て、貧賤の者餓死し、少豊年つゞけば、米下直に成て、金銀不足し、諸侯大夫士大につまりて、末々の者。扶持はなされ、流浪人多し。これ盜賊のたねにして、亂國のきざしなり。是上たる人、財用の道を知給はざればなり。北條前の相州は、諸大名よりめづらしき道具新渡の唐物等を奉れば、その外に氣色あしく、この器の德別に有まじ、めづらしきといふばかりなり、これに米金をつひやさるゝこと、士民のつかれなれば、不忠の至なりとて、其代物をつか

手くろ成よければ、奢長じ易し。五穀は多もたれぬものなれば、五穀つかひにすれば、商の利をあみすると成がたし。故に物下直に成て奢長ぜず。士民ともにゆたかにして、工商常の產あり。たからを賤するとて、なげすつる樣にするにはあらず。五穀を第一とし、金銀これを助け、五穀下にみち／＼て、上の用達するを、貨を賤すといふなり。民の字を御たからとよませたり。民のみならず。多もの天下のたからと成也。魚にてはいはし也。　或問。高直なるだに常の工商利すくなく、渡世難義なり。下直ならばいかんして立べきや。　云。高直は大商大利を取て高直なり。常の工商の手前は、むかしより下直なり。されば万事麁相にてやぶれ易し。其上高直の物を相易るによりて、をのづから下直にてはならぬ勢も有なり。もみつかひとなれば下直にて、高直なるよりは渡世なりやすき勢あり。　或問。もみつかひに何の利有や。　云。粟と云はもみの事なり。十年過ても正實損せず。虫に成てすたる費なし。米納ともみ納との得失は、天下の多を以てはからば、作毛下なりとも、粟納め粟遣とせば、中には當るべし。中ならば上にあたるべし。民の藏納めに費なく苦勞なき事は、大なるたすかりなり。小扶持方取などは、加增をとりたるに當るべし。いよ／＼五穀澤山に成て、邪心やむべし。粟を時々にすりて食とすれば、人の元氣を養ふと各別つよし。病人もすくなかるべし。大身小身ともに、米をうりて、金銀としつかふときは、米下直に、物高直なれば、大に迷惑す。故に米を費しすつる所多からでは、はらひ所なし。粟遣となれば、このうれいなき故に、米のすたり所なき政出來る者なり。しかれば五穀水火のごとく澤山

又好色の心にたよりて、小人とり入ものなれば、好色の君の下には、賢者不レ立なり。このゆへに、明君は色を遠ざけて好み給はず。賢は人をさぐるにあらず。好色の心なきなり。天子は十二人諸侯は九人と、宮女の數定れり。皆禮儀の應接にて、貞女のもてなしなれば、內緣と云とも有べきやうなし。宮女をみづからいやしき凡情絕て、春風和氣の中に遊べるがごとし。好色の費少もなきなり。　或問。好色の心なくば、十二人九人はいかゞ。云。身上の大なるにしたがつて、衣服飲食器物屋作、万事數多は自然の理なり。いにしへの人は好色の心なき故に、氣もつかず。貴賤大小万事同前にするは、分の義なし。理にあらず。賤レ貨而貴レ德は、人君の金銀珠玉珍器等をたからとしもてあそばるゝは妖なりといへり。寶は民のためのたからなり。民のためのたからは五穀なり。金銀錢などは、五穀を助たるものなり。五穀に次たり。しかるに、金銀を重くして五穀をかろくする時は、あしき事多し。道なきときの風俗は、金銀を第一の重寶としておさめたくはへ、五穀をはかろく思ひて、たくはへなきものなり。軍陣に多用る物は米なり。飢饉の年金銀は食とならず。金銀をいだきてうへて死したる者多し。故に明王は、五穀を民のために多くたくはへさせて、万のうりかい物も五穀にてすれば、民間に五穀みち／＼てあり。されば軍國にも、少の金銀もちゆけば、先／＼に食あり。金銀をたからとしてたくはへ、うりかい物金銀にてする時は、諸國在々所々に米なく、軍國には金銀持ても、先々にて扶持方なく、飢饉には民人多餓死するなり。其上商のみ次第に富て、士貧く民窮するものなり。金銀は多持よければ、手迴をして、

らきに向て休息したまふは時なり。君夜の四つ時に御寢なれは、臣は宿へ歸ていぬると九時にもなり、又其下人は子半刻にもいぬべし。明日はまた下ほどはやくをくるものなれば、其心おはしまして御用なきにははやく入給ふなり。晝といへども、公事終ては、時物に感じ、后女御更衣などゝ音樂の遊びし給はゞ、白衣にても座し給ふべし。此時は和を專として精神を養ひ給ひ、天地の和をも助給時なれば、南面の盛服は、かへつて時にあらず。ときにあらざるは禮にあらず。又衣冠にて禮樂かね給ふ時も有べし。皆中庸の理にかなふを禮と云なり。身を脩の則なり。或問。天子御一人の御遊の和、いかで天地の和を助くべきや。云。禮は天地の節なり。樂は天地の和なり。天子安所にして、正しき事に遊び給ふと、則天下の風俗となりて、人民安ずる所正し。故に天地の和を助くるなり。去レ讒遠レ色は、賢を用る第一の戒なり。君子は小人のあだにならぬものなれども、小人をのれとあだとす。故に賢者のあげ用ひらるゝをば、その外にいみにくみ、虛說造言をなして、讒言ちまたにみつるものなり。あげらるべきかと思ふ事有ても、はやいろ〳〵の事をいふものなり。君子其機を見て、出むとを欲せず。たとひ不レ得レ已して出ても、知力を盡さず。知力を盡さば、いよ〳〵小人にさはりて害あるものなり。君子知力を盡さゞれば、ありてもなきがごとし。故に明君は、先讒人を退け給へり。上明かにして威あれば、虛說讒言ならず。必しも讒人を放流せざれども、去たると同事なり。しゐて善をさまたぐるものをば、放流し給へり。國の存亡天下の安危こゝにかゝればなり。上たる人色を好むときは、內緣より讒言も入、

集義外書卷之十一

中庸九經考

一。齊明盛服。非ㇾ禮不ㇾ動。所㆓以脩㆒ㇾ身也。去ㇾ讒遠ㇾ色。賤ㇾ貨而貴ㇾ德。所㆓以勸㆒ㇾ賢也。尊㆓其位㆒。重㆓其祿㆒。同㆓其好惡㆒。所㆔以勸㆓親々㆒也。官盛任使。所㆔以勸㆓大臣㆒也。忠信重ㇾ祿。所㆔以勸㆓士㆒也。時使薄ㇾ斂。所㆔以勸㆓百姓㆒也。日省月試。既稟稱ㇾ事。所㆔以勸㆓百工㆒也。送ㇾ往迎ㇾ來。嘉ㇾ善而矜㆓不能㆒。所㆔以柔㆓遠人㆒也。繼㆓絕世㆒。擧㆓廢國㆒。治ㇾ亂持ㇾ危。朝聘以ㇾ時。厚ㇾ往而薄ㇾ來。所㆔以懷㆓諸侯㆒也。

齊明は、思邪なく胸中清明なるをいふ。心は身の主なれば、心正しきときは、身をのづから正しきなり。脩身の本也。盛服は禮服なり。外を正しくして、邪をふせぎ内を助くるなり。天子十二章を着御ありて、日月のかうぶりを首に戴給ふとは、天地と德を合て、造化を助けたまふ表なり。君子錦をきてうはをそひす。其身を神明にする道理なり。非禮は、天子は不正の色不正の形を見たまはず、不正の聲不正の香をきゝ給はず、不正の言不正の事にうごき給はず、山野にかりし給へども、地の難易民の苦勞をしり、戰陣の法をならはし給ふ類也。あしくみれば窮屈なる樣なれども、凡夫の放埓に遊びたのしむよりは、心の樂はるかにゆたかなり。一度ははり一度ははづすは文武の道なり。弓もはりつめにしては、うはつるたるみて用に不ㇾ立。衣冠正しく終日夜もすがらつとめ給はゞ、たとひ御一人の氣力はすぐれたりとも、禮にあらず。夜はよるの御衣あり。く

なるゝの損をますのみ。女色の過るもゆるされず。男色もゆるされず。二ながらゆるされざる時は、默して風俗にまかせば可也。　問。しからば學者の若年も、男色をふせぐべからざるか。

答云。世間の若年のさかんなる者の、いましめがたきと云は、道藝にこゝろを用ざれば也。道藝に心氣を用て、いとまなき時は、年わかき者は、猶以自いましめやすし。いかんとなれば、水氣多くて火しめりぬ。其上かんにんの精つよし。其精を道藝に用て、いとまなければ、忘れてすごすものなり。つゝしみやすき事の第一なり。

集義外書卷之十　終

はべには忍といへども、人もさのみかくしはゝからず。しかるに今わづかの學士の口舌を以て、これをたゝんと思ふは愚也。一國一郡の主君たる人、しゐて是を制禁し給はゝ、外は其威に恐れて伏するとも、下にはやむ事あらじ。たゞその主君の學術をいとひて、やまん時をねがはんのみ。外國には男色を好のれき〳〵道根をさしはさみて、道學に敵しそしらん。程朱だにも勢の制すべからざる事を知て、默し給ひし事を、今の時に制して、内はなれ外敵せば可ならんか。今男色を制してなさしめず、女色にをひて不義の亂あらん事を恐るれば、十五六の子にも妾をおけり。このゆへに精力そがれて、武夫の業をなしがたく、才知おとりて、國家の助となる者少し。終には病氣と成て、一生むなし。いやしき妾の子を以家をつがしめ、父たる年ならで數なければ、子孫の器量をのづから次第におとり行ぬ。しかのみならず、父子共に、妻妾餘多に成て家貧し。これによりてすりきりと成て、公用軍役共につとめがたき者多し。是男色を戒め制する事、世間にこゆるの害なり。男色を戒禁せず、大かたの法ばかりにて、流俗にまかせ置時は、わかき者三十歳前後までも、妻妾なき者多し。人の父となり家を持べき年に及て本妻あり。子ありて母よく數よし。家乏しからず。家道見ぐるしからず。男色はゆるされてなす事ならず。忍ての事なれば、精力そがれ病者となるほどにはいたらず。たゞ陰陽和合の道にあらずといふばかり也。尤かぞへていはゝ、害も多かるべし。女色の過たるは、そこなひあまたなれども、陰陽の理なりといはんのみ。過てみだりならば、理ともいひがたからんか。損益いづれ共分がたし。俗にもとり入とは

しおくれてなるべき小戒を先だてゝ、大道のさまたげをなすにあらずや。ひつけう愚なるに近し。又一人予に親き人あり。道を信ずると厚しといへども、時處位を不ㇾ知。人情時變に達せず。中江氏の翁問答によりて、男色を甚不義なりと云て、人をはづかしめいましむ。予これによつて云。大國天竺我國共に、世の習となり、風俗のごとくなる事久し。ふせぐともやむべからず。たとへ道理にそむける事にても、世中おしなべなし來たりて、とし久しき事をば、不義といはず。道理にあらぬとは、理をきはむる論に當てはいふべし。道理にあらぬとしらば、我のみせざるにてたれり。人をそしるべからず。明道伊川は賢人なり。東坡は博學のみにして凡心あり。又男色を好めり。しかれども風俗なれば、不義といはず。あまつさへ程子派東坡流とて、天下の學術二にわかれてあらそへども、程子終に男色を不義としそしり給はず。朱子も東坡が語を取て、四書五經の註をなせり。程朱男色をよしとする人にあらずといへども、流俗の勢はいかんともする事なし。習俗なれば不義とまではいひがたし。是を以朋友の交をなし、語をとれり。もし君父をころし人の妻子をおかすにつぐの不義ならば、何ぞ其者の語を用て聖書をけがさんや。今世間小姓ずきの家といへども、男色によりてけんくわ出來ぬる時は、ゆるす事なし。これによつて父兄たる者は、其子弟をいましめずといふ事なし。しかれども命にかへ身代にかへてやぶれるは、壯年の精氣つよく、情欲盛なれば也。この故に法度の外の男色は、君父もゆるかせにして、不ㇾ知躰なり。大方世間の法度も、しゆ道の知音仕間敷事とばかりみえたり。けんくわの用心ばかりの事也。故にう

て英才をとぢて發せしめず、道學の流行をふさぎて通ぜしめず。大禁にはあらで、大害となれり。大道の行はるべき千歳の後に、おくれて發すべき小戒を、いまだめぐまざるの前におけば也。近比男色の事をさがし出して人を失へる者あり。予これによりて云。男色をふせぎ佛者を退るの事は、道學のおこりなんとするめぐみをおさゆる也。たとへば草木の土中より生出る二葉の上に、大石を置がごとし。たま〳〵此理をさとるといへども、今にしていひわけも成がたし。幸にか樣の時節ほり出しせんさくせずして、無事になさば可也。問。しからば男色はくるしからざる事とすべきか。予が云。左思はゝ幸也。世間の常に歸して害なからんにはしかじ。問。男色ふせぐ事の道學に害ある事、しかと心得がたし。答云。ふせがずゆるさず、默せんにはしかじ。むかしより靈明の生付ありて道を學びざる者、多は色を好めり。義經義貞などの類也。いかんとなれば、其靈明を道學に用ひざる故に、人の大欲なれば、色にうつれり。此ゆへに才知ある者は大かた此病あり。其好む事をゆるさずおさへず、かまはずして、靈明なる所をそだてゝ、道をきかしむる時は、大河のふさがりをきりおとして、ふせぐべからざるがごとし。其後はみづからおのが非を知て、格去べし。一言の禁戒を用べからず。夫大道の行はるゝは、よき人餘多道に入より先なるはなし。しかるに此英才の人々の、俗に落て道をきかざるうへ、習常と成て、不義ともしらず、このむ事を外より退けはおしむ。其人は世に類多く、味方多し。わづかの學者のいふ事は、一流の事としておそれず。しかのみならず、いきどほりをふくみて、敵となれり。これ先にいひ

日本倫理彙編

一○心友問○貴老男色くるしからずとゆるし給ひ、其上中江氏は、其理得心なくて、男色を戒られたりと、仰らるゝと中者あり○不審なる事にて侍り○　答云○取成といふものは、いか樣にも成ものにて侍り○君子の譏を恐るゝは、かくのごときの小人の言をしれば也○夫男色をつよく戒たる事は、佛書に見えたり○佛在世の時よりもありて、しやかの直に戒られたれ共、やむる事あたはず○もろこしにては、孔子の時代にも、男色ありしとみえ侍り○はじまりは久敷事と見えたり○しかれどもそのかみの聖人、有無の論をなし給はず○周子程子朱子などの時代には、いよ〱さかんなりしかども、いましめふせがれしことをきかず○人情の勢のとゞむべからざる事を知給へば也○少き名儒の語には、そしれるもあり○孔孟の有無の言を出したまはざる主意をしらざれば也○近比中江氏、佛者の言によりて男色の事をいへり○壯年の論なれば甚し○いまだ人情時變にくはしからざりし時のことなり○後年ならばかくはあらじといひし○これ中江氏を助ていへり○予何ぞ中江氏は其理得心なくて男色を戒られたりとそしらんや○中江氏をなんずるのみならず、自我身をそしる事をしらざらんや○中江氏去て後、藤樹に遊べる人々、甚男色をにくみて、不義なりといへり○其比予そのこゝろならましかば、ふせぎそしることをばとゞめやうも有べきに、いまだ年若く、來曆すくなかりしかば、まかせ置たり○四十歳の比思ひしは、ゆるされはせず、退るは無用の事也とおもひし也○されば事のついでに、同志中にて云たる事もありき○其實を不ㇾ知人は、予を以てこれをそしる本人とせり○終に世間に達して、此學流の大禁となれり○これにより

べき方あり。處にさはりなし。兄弟朋友うちよりて助なせり。財あり人有。又さはりなし。儒法本よりあしきに非ず。何ぞ用ひざらんや。或は時勢のなしがたきにしゐてなし、或は助る人もなく財もなきにしゐてなさしめ、或は家をたて他をそしるを、あしきと云のみ也。たとへば生る親に魚肉多を食せしめずして、粗食を作るも不可也。疏食の中に居てあたはぬ珍物を求るも不可也。　問。世間のならはしをそしり、己が好む處にひとしくせんとするの非なる事はさとりぬ。日本の神道にも、杉檜を用て宮社に作り、槇を用て棺槨に作ると見え侍れば、火葬の事はなし。佛者も土葬をしゐていましむるにも非ざれば、しのびざる心ある者の葬はいかゞし侍らんや。答云。神書に槇を棺槨に作るとあるも、上世材木澤山にて、なりやすかりし時の事也。今も士以上、又は產ある庶人は、貧くとも二分三分の板を用て棺作るとはなるべし。其日をくりの者は、いかで及べきや。火葬に忍びざる者は、むしろを用て成とも、首足の形をおさめてはうむらば可也。　問。富る者は棺を用ひ、貧き者はむしろを用ひば、親に孝をするも、貧にしてはならぬ事の恨み有べきか。　答云。理をしらしめばうらみもなかるべし。死を送るのみならず、生る時の飲食衣服家居敷物器に至まで、富貴貧賤命異なり。うらむべからず。況や形は土に合する事、理の常也。しばらくおほふは、孝子の情なり。棺とむしろと何ぞ異ならん。其上日本は土地せばきが故に、近比まで寺なりし跡も、屋敷となり畠となるもの多し。百年の内外には、人もうつりかはりぬ。はやく朽て土となり、後の憂なきぞまさるべき。

可也。その時に當て、家禮の儒法を庶人までに行ん事は、聖賢の君出給ふとも叶ふべからず。庶人は生る時の衣食だに不ㇾ足。家屋も風雨をふせぐにたらず。農人は農業をなすがためのみ。町人は工商のためのみ。それだに用にかなひがたし。何のいとまあり有餘ありて、葬祭の禮をおさめんや。　問。氣運ふさがりくらふして、人多とは何ぞや。　云。春の氣は温にして悠々たり。鳥獸草木も靈なる物のみ生ず。多がごとくなれどもみたず。三皇五帝三王の時のごとし。夏の氣はむしたてゝくらし。多は無用の物みち〳〵て生ず。今の時のごとし。鳥獸魚草木の靈なるは、用にのみ取て、みだりにとらざるの制禁ありてだに、なをあまねく用ひがたし。夏のゑんせうの氣の生ずる物は、用なけれども、人々これをかりころすといへどもつきず。いにしへは人すくなくて人あり。今は人多く人なし。氣運否昏によりて、人の多ことさとるべし。今の時に當て、先生の道亡びぬ。法のみ行はれば、世中三年とも立がたかるべし。道おとろえ愚人多時に、幸に佛法あり。易簡にして事ゆきぬ。これも又天命なり。後世に及て、人すくなく成て人あり。土地ひろく用たり、誠立て、質素なる時には、法もまたむかしにちかき事有べし。　云。しからば、今の時には儒道は行はるべからざるか。　答云。儒道といふは、道のすたれたる名也。大道には名なく定法なし。天地の神道は、時に中して行はれずといふ處なし。たゞ天理の職のみを立て、事と法とを必とせず。自然の勢にまかせて可也。　問。貴殿親の葬禮に、儒法の棺をなして、あつくはうむり給ふはいかに。　答云。予が家生て親を住しむる家屋有。飮食衣服あり。死して棺作る

戰陣にをひて身方亡る時は、城に火かけ炎火の中へ腹かき切飛入て死するは義なり。敵の手にわたり、古郷にをくられ、棺槨に入にはまされり。何ぞ外物を必とせん。上世は土地廣く人すくなかりしか共、いまだ器物なく家屋なかりしかば、生ては野にすみ、死ては谷に葬れり。他日これを過て見るに忍びず。土を以これをおほへり。人の死するは、形は數ありて、魂氣とはなれ、地に落ぬ。氣は本より天にゆき、形は土に合す。理の常也。何ぞいとはん。後世器物家屋いできしより、死を送るにも棺あり槨あり。はやく土に合するは理なれども、死に事ると生るに事るごとくするは、孝子の情なり。勞するに生を以し、安ずるに死を以す。死生一なり。憂ふべからざるは理の常也。しかれども別をなげくは人の情也。いにしへは土地ひろく、人すくなく、用たれり。又質素也。故に棺を作るとやすくして、そのかたきをとれるのみ。土地餘ありて、送る事處多かりき。後世は人の多なるにしたがひて、土地せばく用たらず。かざり多して實すくなし。常の產ある者だにも、棺槨を作るにたえざる者あり。況や民の常の產乏き者は、死のかなしびはわきになりて、棺作る事を憂とす。かゝる事を察せずして、これを以て先王の道を行と思へるは、不知也。其本を不知がゆへに、時處位によりてかはるべき道理を辨へず。とりわき日本は、近世人の多と百ばいせり。このゆへに土地せばく用たらず。庶人のすゑ〴〵は生て衣なく、死して棺なし。又葬べき土地なき處あり。火葬も又時のついゑに當れり。天地ひらけてこのかた、近世ほど人多土地せばき事はあらじ。氣運ふさがりくらふしてしかり。時に佛法あるも又かなへり。火葬も又

日本倫理彙編

みそをさいにして、汁肴酒茶なく、清水紙子もめんぬのこにて寒をふせぎ、衣食共にむかしをわすれて、書をたのしみて居たりき。その比ならば、三年の喪は心やすくつとめ侍らん。今時勤めたりといふ人にもこえて、世に名をとる事もあらんか。しからば誰もなるべきやうにおもひて、人の生れ付の精力に強弱ある事をもはからず、無病病者をもわきまへず、年の盛衰をもいはず、時勢のしからしむることはりにて、人の情のうすく習來てしゆべからず。おして行はしむる時は、僞の端となり、罪なき人にきづをつくべき事をもかんがふべし。病氣老衰の後に憂にあひ、其上多年人情時勢を知ことくはしく、人をしゐざるは幸也。およそ世間の人を見るに、才智聰明なる人は、つとめ行こと不足也。不才にて分別なき者に、篤實の生付ありて、つとめ行ことよき者あり。凡己が長じたるを以て、人のみぢかきをせめ、己が得たる處には、人をそしれり。凡情の憂こゝにあり。日本王代の盛なりし時、三年の服を期にし、其よりうときは、だん／＼にそがれたる法あり。衣色の制あり。是水土によりての義也。上世とても、日本は小國也。小國に生れたる者は、精力うすし。同じとき同じこゝろざし同じ學力にても、大國の人には及びがたし。

一。心友問。佛法は易簡なる處のみ、日本の水土に相應すと被仰由、承侍れども、火葬などは甚不仁なり。親の身を葬るとて、目の前に鰯をあぶるやうにはまかせがたき事也。

答云。しかり。されども我なす事はせじ。佛法の流、世俗の習にてなすなれば、そしるべからず。又今の時處に叶たるいきほひもあり。吾人共に世の勢さけがたくば、まかせても可也。たとへば、

經傳に見る處、みな内につきん事を願へば也。予は天下に名を得たる者なれば、世間名聞の爲に喪におらむと思ふ人もありといへり。予は一人の武士なり。學は己が爲にすれば、學業を以世をおくる者にあらず。もし予法に落て喪をつとめば、少の事にも内外はせじ。全くつとめばやがて死すべし。死を以て生を亡すは、大不孝也。その上八十に餘れる老父有。たとへつとめんと思ふとも、なすべき時ならず。聞も及給はん。予より年もわかく、予ほど病氣もなくて、喪をつとめて死たる者あり。たとへはじめはあやまりて勸めかゝりぬとも、我身のほどをはかりて、すみやかにやむべき器量もなく、よき心友もなかりしかば、元氣を失ひて後、養生せしか共、不レ叶し也。内外なく眞實なる者なりしに、あたら事也。且予先へ道を聞て、各にかたりしといふばかり也。氣質變化の君子にあらねば、實は各も予もかはる事なし。同志の中に、生れ付は予よりも拔群よき人あり。其よき質とても、喪をつとむべきほどの篤實深情氣力はみえず。予が喪によるの志も、老父の天年今明年をもしらず。又讒言によりて、いまだ身のおり處心のまゝならねば、のがるべきやうもなし。一人にも此義はいまだかたらず。口のたがひたるやうに思へるか。予が實をしらば、たとへ主意をきかずとも、ゆへあらんと思ふべし。予壯年の時は、つとめんと思ふ心ざしありき。二十歳より内にては、三年精進したる事あり。二十歳以後、文學をつとめ居たるときは、わらはべのごとく人道をわすれ、腎水かたくとぢて、顔色うるはしく、膚にほひありとて、人に稱美せられき。半人の間五六年は、江州下民の食、ゆりこそうすいといふものを食し、ぬか

をたづねみれば、奇特とは申がたし。　答云。喪をつとめたるといふ人を、二三人もよそながら見聞及侍り。十の物二三。大かたにつとめたるは上々なり。それだになべての人のなるべき事にはあらず。氣質にかれはつとめんと思ふ者あり。今時在々所々にも、無學文盲にて、何のわきまへもなく、他の事はみな凡夫なれども、親孝行ばかりは、いにしへの孝子に及ぬべく、奇特なる者有。これは天質の美なれば、眞實志の學者といへども、つとめて及がたき處なり。予が喪をつとめん者なりと目きゝいたし侍るも、かくのごときたぐひなり。又氣質はつとむべき者ならねども、壯年の氣力つよき時、志の大にすゝんで、何事をもなすべき器量の者あり。此者年さかりならば、つとむべきか。

一。心友問。貴老かねて親の喪をつとめんと被仰。今母の憂に逢ては、其言たがひ、喪はなるものにてはなしとの給ふと云者あり。　答云。さいふ人もありなん。予は各の見給ふごとく、喪をつとむべき生付にあらず。されども、壯年の時ならば、少はくはだて及事もあらんか。十四五年此かた、病氣の身となり、年すでに五十に過たり。かた／＼以てつとむべき者にあらず。しかれども、喪によることとあらんと思ふ子細あり。その主意をばいはで、その事のみたゞ一人に用ありていひし也。その主意は、予は世に無益の身なれば、父母なき後は、喪によりて跡をけし、庶人となりて、しばらくなりとも、德を養はんと思へり。其ゆへは、初學の時より、人の師となり、見聞處の道理を口に發し、内につまざりし故に、德をなさゞるの損あり。俗にかくれて知人なくば、

くましくありながら、外に道だてをし、君子ぶり仕は、にくく思はれ侍り。人に道者といはれ、分にこえてうやまはれぬるを悦こ、精を出し外に格法を行者もあり。氣根つよくて、人のせぬ事をするを自滿して、己が得たる處を行者も有。富有にしていとま多く、氣力つよければ、名を求て行者もあり。我は行たる事もなくて、人のなるならざるをもわきまへず。人にのみせめて、道者顏する者もあり。小學の灑掃應對進退より初て、小子にせむる者もあり。いにしへは人の氣根つよく、大國にては、天下のならはしとなり、つとむるとも思はでなしたる事也。それだに後世は、十が一も行はれざりしを、今日本にて、聞もならはぬ事をなさしめんとすれば、よはき者はたゝずして病者となり、或は成人にしたがひて、こりて道學きらひとなりぬ。三年の喪を行ふなどいひては、こと〳〵しく服を用意し、富士山まうでの百日行のごとく、喪のていをみせぬれども、實は喪をつとむる者のやうすにもあらず。大か小か、心のとはゞこたへがたき内外ありとみえたり。かくて喪をつとめたるといふ虛名をとるもあり。或は幼少の時か、又は學びざる外に親に別れて、今ならば喪におちん顏にて、人にせむる者もあり。りちぎにてはたらきなき人は、しゐられて是非なく喪に居かゝり、たへずして死するもあり。大かたは僞多けれども、國所をへだてなんどして、過て後みづから云もあれば、其實は知者なし。又世俗にいへるかきの斷食とやらんにて、左なくともたしなまで不ㇾ叶けうかいに居かゝり、或は己が質の近き處より、少はつとめたる事もあり。學寮坊主や、まきの尾の律僧などの、つとめのごとくなるもあり。一々其實情

窮の民にくはへ、無事の時の法を以て、事しげくつかれたる者になさしめ、上世の氣力盛なりし人のなしたる事を、後世のおとろへたる者に行はしむ。貴賤ともに、周の禮法にくるしめる處に、佛法渡りて喪祭共に易簡にて、財用をついやさず。事少くて勞せず。故に實に信ぜざる者も、佛法にだに入ば、心身やすくして家財ついえず。凡民は是を悅て、風に草のしたがふがごとし。公侯大夫士たる人も、世にひかれて、是非なく儒道を行者は、大に內外あり。名聞にて行者も、少づゝは內外なきことあたはず。恥ある士も心勞し、氣つかれ、財たらずして、是非なく僞をなす事をかなしめり。佛法にだに入ぬれば、此あまたの憂なし。この故に高き人も、みな佛道に入て、儒道はたゞ外むきの事となりぬ。もし此時に明君良相ありて、時運のおとろへを察し、人氣のとぼしきを見、情のうすきを知、財用の不足に叶て、易簡の禮法を作爲し、誠を立て、太古の質素の風をかへさましかば、高きもいやしきも、誰か佛道にまよひ侍らん。かくて時運も盛になり、人氣もつよく情もあつく、財用たりぬる時に及て、後の君子を待て禮をおこさしむべし。すべて其人にあらざれば、人情時變をしらず。有德にあらずして法のみをおこすときは、よきといふも、大盜の爲に仁義共に合せぬすまれぬ。よからざる時はぬすまるゝにも及ばず。異端の小道に歸したると、いづれかおとりまさる事を不ㇾ知。何ぞしゐて佛者をしりぞけそしらん。

一。儒者云。我は俗儒にて、道を行者に非ざれば、身すぎの爲と人にあなどられ侍り。今時道を行と中學者をみれば、內心は我〳〵などのおし出て身すぎとする者にはおとりて、凡情名利の欲た

也。五倫の五典十義これなり。一文不通の人といへども、その實は學者にまさりたるあり。天にうくる處なればなり。禮はこれをかざりこれを助たるもの也。時處位をはかりて衆と共に行べし。心は天地の爲に立、道は生民の爲に立ともいへり。今時周の禮を用て道を行はんと思ふ者は、自己の氣質の禮に得たる處ありて、其上に富といとまと氣根とを得たる者もあり。名根ふかくして譽れを求め、なす者もあり。此人々といへ共、情のうすき事は、天下數百歳の習なれば、人とかはる事なし。其實を見れば、つとむべき人にあらざる者あり。況や此餘多のより處なき人にをひてをや。しかれども、此格法の流もまた世にたゆる事あらじ。いかむとなれば、世中にこれに得たる人あり。各氣質の近き處よりおもむくもの也。ことわざに、情のこはき者は日蓮宗となり、高滿異風なる者は禪宗となるといへるがごとし。今の朱學格法は、あまねく行はるべき流ならねば、日蓮宗の世にあるごとく、一流と成てあらんのみ。此流佛者をにくむこと甚しといへども、却て佛者を立べき所あり。佛者は戎狄の異端ながらも、日本の水土時節に相應の處あり。朱學は理をいふ事はよくても、水土に應ぜぬ事多し。其上その朱學者、聖賢の法を用ゆといへども、心の凡情は小人と同じき者多し。佛のために衆をかる[illegible]近し。今の佛者は、又きりしたんのみちびき也。かなしむべし。　問。日本にてだに、近年少文學はやりぬれば、かな書にても讀侍る者は、眞實に佛道にまよふ者はまれなり。もろこしの文國にて、いかであまねくはひろがり侍りけん。云。これも儒者の方よりひろめさせたる也。周の代の富有なる時の禮をもち來て、後世の貧乏困

これによつていへり。神代の遺德をあらはし、王代の法令をかんがへ、その人情時變をつまびらかにして、化育を助るの大道有。信厚からで法を先ずれば、民の僞をみちびき、無事を行はずして禮いたづかはしければ、人欲生ず。それ禮法は人欲の堤也。大河のほとりに住居する者は、境堅固なれば生全し。しかるに源遠らぬ小河の水の憂もなき地に、堤餘多所に大にせば、民の身命を養ふ田畠も、多は堤の爲にとられて、うゑに及べし。もろこしは大國にして、地の生厚し。就中周の代は、天地ひらけてこのかた、大平無事の時運に當れり。天地の物を生るとかぎりなく、財用の多こと水火のごとし。人民大に富て、なすべき事なし。故に驕奢にながれ情欲あふるべき勢あり。聖人是を憂給ひて、禮文法令餘多作ていとまなからしめ、喪祭の爲に用をついやして、欲をふせぎ給へり。其時だに禮文あらはれて、いまだ取行には及ばざりし事ありき。後世に及て、政令道を失ひて、人心正しからざるより、四時の氣不順にして、地の物を生ずる事すくなし。貴賤分をこえて、士民まづし。事しげくしていとまなし。此故に多欲になりて、情うすくなりぬれば、其國にてだに行がたし。況や他の國にをひてをや。近年は草木金石だに姓よはくなれり。まして人は病氣無氣力のみ也。其上に家貧しく、世間事しげし。いかむして大國上世の法を行はんや。今の學者、我身は富ていとまのみあり。武士の貧にして朝夕のいとまなきものにも、其禮をうつして行はしめんとす。我身事をとらざれば、氣力あまりありてなす事を、奉公につかれたる士にせむれば、おこたらざる者すくなし。道は大路のごとしといへり。衆の共によるべきところ

一人にして助なし。彼は助多ければ、終に惡名をかうぶりて、獨身となりぬ。日本の水土には、周の禮のやうなる文備たる事は、あまねく久しくは行はれざる道理必然也。周の禮法にくらべては、老莊の道ともいふべきまで大簡になくては、天下に用て後世に行はるゝ事はならざる也。實は老莊にも何にもあらず。上天の時にのつとり下水土によるの大道也。跡を見て眞を不レ知人とは、ともに道をいひがたし。云まじき者にいひ、そしりを得は、予が不明也。然ども、そしりをおそれていはずば、後世知人あらじ。格法を用て亂に及たる時、予が言のこらずば、道はやむに近かるべし。願は上古の神道をかへし、誠を立て、もろこしの法にもかたよらず、佛家の流にもならはず、易簡の善を用て、知やすくしたがひやすき大道を行はん事なるを。今の學者は、儒道を興起するとて、みづからおさへ、佛を退るとて、助立るの勢をしらず。それ佛者の不仁と儒者の理滯と、共に神道をなみする事は一也。その中に、佛法は水土にかなふ處あり。儒法は水土に應ぜず。是を以しれり、佛法もたゆべからず。儒道もおこるべからず。儒道おこらで佛法たえずば、終に吉利支丹の爲にうばはれぬべきか。然ば神道も儒道もことごとくうちやぶられて畜生國となり、禁中もなくなるべし。天地やぶれたるにはおとりなん。後世と輪廻を立ていふときは、吉利支丹は後生の手だても、佛者よりは上手也。理を云事も、佛道よりはまされり。佛道の力を以てふせぐべき事かたし。

今の儒法は、天下國家の政道となるべからざれば、終に一流と成て、吉利支丹の爲に失はるべし。

んにかゝりて、出家の身すぎ澤山なれども、佛法にて吉利支丹のふせぎもならず。せんさくのたよりにもならざる事、おのづからしられ侍れば、のち／＼せんなき事に思ひて、請人にも取侍らじ。さあらば、本より人の信はなし。諸人貧にはくるしめり。寺をたのむ者まれに成行、たゆるに近かるべし。其内亂世にもなりなば、三十年の間には、十分一ものこり侍らじ。かさねて治世の時節には、文學ひろく成て、人々の眼あき侍らば、誰か佛者の言を信ぜん。ともし火消なんとして光をますごとく、近年の繁昌は亡んとての奢と存候。百年の後は儒道興起して、天下太平なるべし。さもなくば、吉利支丹の國となるべきか。いかさまにも、佛徒はたえなんと思ひ侍り。

答云。道理は至極し侍りぬ。予もむかしはさ思ひしが、近頃日本の水土により、山澤草木人物の情と勢とを見侍れば、易簡の善ならではあまねからず長久ならざる道理あり。佛法には不仁なるところありといへども、易簡なる處ありて、日本の水土に相應せり。この故に、千餘年に至て、かく行はるゝ也。近年は佛者の奢に、佛法のいのちなる易簡を失ひ侍れば、久しかるまじ。天より奢をそがれ、すいびのごとくならば、又々久しかるべし。　問。佛者は不仁なるだに、易簡一つにて立侍らば、我が道の仁政易簡ならば、いかばかりまさり侍らん。しからば終に聖神の道行はれて、西戎の異法は亡び侍らざらんや。　答云。易簡の善を行て、水土に叶ふ學者、ありがたかるべし。朱學王學などゝて、世にあらそひ侍れども、皆易簡の善には遠し。予たま／＼大道をいはんとし行はんとすれば、莊老の道也異端也などいひ、あらぬそしりまでもつけまし侍り。予は

ん。れき〱道學を任ぜらるゝ人々あるときけば、予がごとき者なくとも、何か事かけ侍らん。予が見る所非ならば、予一人むなしからんのみ。みづからをしからぬ身也。人何ぞをしまん。予が見る所は、今の王學朱學格法などいふものは、たゞ一流の學となるべし。後世は今よりも多なるとも、其流に器用なる人のみ集り、禪宗律僧などの世にあるごとくにて、治國平天下の教とはならじ。もし國主世主など、すこし用給はゞ、少害あるべし。多用給はゞ、大に害あるべし。予が學は格法より見る時は、大簡にして莊老の流に似たり。政教にほどこし天下に用る時は、水土によるの道ならんか。もし王者あらば、必ず法をとらんか。是ならば大に是ならん。非ならば大に非ならん。其人を待のみ。

一。學友問、をびたゝ敷佛法の繁昌也。かくてもたゆる時節あるべきか。 答云。我實の佛者にかはりて見侍るに、繁昌にてはなし。佛者の驕奢無道と申ものにて侍らん。しかれば今の繁昌は、佛法すいびの凶相なり。百年の間には、今の半分か三分の一になる事有べし。よき事だに、盛衰は道理の必然なり。まして無道にして奢をきはめば、いかでか長久なるべき。さりながら、奢を天よりそがれたる計にて、すいびと見るも、今の繁昌よりは、佛法の實のためにはよからん。たゆる事はあるまじきと思ふ處あり。

一、學友云、僧たる者、千人が九百九十九人までは、身すぎにこそ出家し侍れ。其實道心の坊主はまれなり。俗もしだひにかしこく成て、心からまどはさるゝ者は、すくなく成行、近年はきりした

集義外書卷之十

脫論七

一。心友問。帝堯許由に天下をゆづらんとし給へり。許由は狂者なれば、其治道大簡ならん。親の喪をもせじ。祭をもそなへじ。棺槨はなはだ省略なるべし。聖人の禮儀政刑は、絕るに近からんか。又狂も思へば聖となると候へば、ゆづりを受て天下を治めんと思ふ心だにおこらば、禮樂政敎も聖人のごとくなるべきか。　答云。禮儀法度は聖人の糟粕なり。そうはくを尊て、神聖の眞を不ㇾ知こと久し。誠有ときは、禮文法令は次第におこり易し。たゞ立がたきものは誠なり。狂者は情のまゝにて禮法にかゝはらざれども、質素にしてかざりなく、無欲にして求なし。財散じ民集り、金銀珠玉器物をたからとせざれば、あらそひうばふものなく、おかしぬすむ事なし。美を見ざれば、夷狄もきたらず。物欲の害する物なければ、天眞こゝに存せり。これ上世の至治也。帝堯は太古の至治を欲し給ふ故に、許由を思へり。

一。心友問、世の學者のいへるは、貴老の道學は老莊の道に近し。法は道にあらずと云てより給はず。いにしへの法の今に用べきものあり。其格法の中に、道をのづから偶せり。貴老は聰明の質なるに、異端に落給ふは、あたら事也。我學に入ば、世の助となるべき人なりとの事也。　答云。まことに過分なるひはん也。今の朱學とやらんにて、後世に道おこり、天下平治せば、何かあら

に入事なかるべし。戒めて德を内につましめ、學を後にふかくせしめんとの慈命なるべし。其命に應ぜざらん事をはづるのみ。

一。いにしへの人、凶年には衣服飮食家屋器物よりはじめて、万事をはぶきて、民をめぐめり。後世凶年なれ共、はぶく事なし。用たらざれば民をむさぼり、家人の扶持をはなし、或は其物成切米を減ず。かくて其身の衣服常を變ぜず。しかのみならず、一門他門振舞の往來あり。國郡の主の公義に、家中をうごかさず。民を窮せしめず。禮用軍用備有を第一とす。しかるに是をば内所の私事としてかへりみず。同じ無道人とのみ寄合て、飮食衣服家屋器物、無用のついへをなすを以て公義とす。この故に民に取事凶年に應ぜず。民間日々に困窮し、流浪人年々に多し。人を扶持はなし、祿米を減じ、民に飢たるいろあり。かくのごとくにして、一種のさかなをもとめ食するもはづかしき事ならずや。恥べきをはぢざれば、義心ほろぶ。

一。禮は治國平天下の大用なり。禮おとろふるときは、亂日々にすゝむ。後世の人無禮を美目として、貴賤の分なきがごとし。無禮のものをいましめず。かへつて立身するものあれば、禮讓日々におとろへて、相たかぶるのみなり。妖恠これより大なるはなし。天に出るの妖をおどろきて、人に出るの妖をしらざるなり。一分己を利すれば、一分人を損す。人の怨つもれども、勢ある人はしらず。

集義外書卷之九　終

事なくてのがれば、人のためよからぬ事もあり。のがれがたき勢もあり。三年は久しき事なれば、喪といひて退居せば、其中には人も忘るべし。其まゝに出ざらんは、目にも立まじきと思ふなるべし。それいにしへの君子の禮を行事は、人の相繼てなすべき事をするなり。日本は小國にて、地氣うすし。人の根氣つよからず。其上に數百年のならはし厚らず。たとひ志ありといふとも、數世習ひたる氣はたがふべからず。万人に一人すぐれて氣力あり、喪をつとむるといふとも、繼者有がたくて、かへりて他の善行をふせぐに至るべし。たとひ無病有力の君子出る共、今の時三年の喪はなすべからず。後世道行はれ、人の氣力すくやかになりたらんときは、しるべからず。

一。學友歎きて云。藤樹の學は陽明流の學といへり。朱學にたよりなきが爲にふせぐ人多し。しかりといへ共、天下の公地において、藤樹の學と稱して、數百人をあつむる者あり。又諸大名の國に行て、藤樹の學流と號し、爭逆の事出來たるも、二三所あり。しかれ共、公義の寬洪、何のとがめもなし。たゞ貴老の學のみ、敎學共に困窮す。その故をたづぬるに知人なし。これ何の罪かあるや。不孝子も孝子となり、不忠臣も忠臣となりたる事は、聞しなり。しかれ共、世の虛說によりて、親は子をいましめ、君は臣をふせぎて、此道學をきく事あたはず。親しき同志のみ、諸方をかぞへて、二十人にも過べからず。公の學を聞て、世のさはりをなしたる者なし。しかるに罪あるものはふせがれずして、罪なき人ふせがるゝは何ぞや。　云。予德をつむ事なくして學淺し。此不德淺學にして、當時に人に用られ、さはりなくして敎學相長ぜば、學は淺きに終て、德

の得にて、やしなはれ居とは、包荒の仁なればよし。其催促人のごとく、家人百姓等をくるしむる事は、敎なければなり、國家の害になるものは退くべし。善人あらば擧用ゆべし。

一。舊友云。彼小人近年勢ひを得て、貴老の敵となり、あだをなしたる事、あげてかぞへがたし。天罰にて、此間は散々首尾あしくなりて、氣味よき事也。　云。是小人女子の心なり。彼が勢を得て虚說を作り、あだをなしたるは、彼が惡なり。其時に其惡はにくむべし。いま彼が惡積ておほふべからず。人罰せざれば天罰するの時いたれり。おひめになりて、心氣かじけ廢亡するは、小人の常なり。かへりてあはれむべし。其衰にのりてにくまんは、彼に同じき心なるべし。戰場において、敵打物を持て我にむかひ來らば討べし。すでに敗軍して、にぐる者の背をきり、落人を求めてころさんは、君子の軍にあらず。人を多く殺したりとて、軍に利あるにあらず。勇武知略の勢を以て、敵をとりひしぎ勝べし。其勢によりて、彼みづから死せん事は、不ㇾ及ㇾ是非ㇾ也。いはむや人敵といふとも、力おとろへて、手むかひする事あたはざる者は、助てさらしむべし。いはむや人のよはめをみてあだをむくひんは、あさましき事なり。かの東西をもわきまへざる百性などの、地獄をおそれ佛を拜し、念佛題目よりほかの事をしらざる者は、年來つらかりし地頭の亡ぶる、そのおちめをみて、其妻子をはぎとり、或はとり者にし、殺しなどもすなれ。

一。學友曰。我舊友三年の喪をつとめむとて、山家へ引こもる有。平日の心にあらず。又病者なり。心得がたく侍り。　云。是かならずゆへあらん。喪の名によせて世をのがれんとするなるべし。

富有の民、五十家百家の中に、一二家有を以て、百姓ゆるやかにて、奢といへる成べし。豐年には薪藁をうり、木の實などをうりて、何ぞの祝義事には、酒肴を求る事あり。大勢の事なれば、一村より一二人づゝとても、城下の町にてみる時は、多きやうなり。これらをみても、百姓はたくわへ有やうにいへり。彼も人なり。かやうの事までも、ならざるやうにと思へるは、あまり不仁なり。春より冬にいたり、わくるよりくるゝまで勞苦して、武士をやしなふ者なれば、少し酒肴にても求るをみては、悦べき事なるを、武士の心くだりて、いやしく成たるゆへなり。わかき人らは、幼少より見習ひきゝおきて、たゞ如㆑此ものと思へり。心をつけてかへりみば、はづかしき事ならん。風俗いやしきゆへなり。なげかしき事ならずや。

一。學友云。世の勢といふものは無㆓是非㆒事也。一國の中、何の用にもたゝざる者、親の跡とて知行を取、家人をいかり、百姓をしへたげ、俗に催促人といへる者のごとくなる者多し。用にもたゝざるはせめてもなり。君のため國家のため、害になるものも、知行をとりて、驕泰なる者あり。隨分よき士ありといへども、民間におちぶれ居て、よび出さるゝ事もなし。牢人なれば、ましてかゝへらるゝ事もなし。主人かゝへたくおもひても、いひ出す事成がたし。臣すゝめたくねがへども、あたはざるものあり。同じ樣に用にたゝざる者には、肝煎も有て、かゝへらるゝ事也。一國二國のみならず。大方如㆑此し。　云。君子は天命をだに我より改べし。いはむや此勢ひは、君たる人の不法よりなれるものなり。君に勇知あれば、此勢ひ生ぜず。用にたゝざるものも、親先祖

百姓共たくはへあれども、なき言にならずといふといひなせり、民はいかなるわだかたきの末にてか、かくにくまるゝならん、きのふけふまで、同じ様に百姓をにくみし者も、郡奉行代官と成て、目にちかく民の困窮を見ては、あはれむ心出來て、むかしの心を變ず。しかれ共、多くの侍與組頭用人の歴々ににくまれては、あしき故に、不便といひながらも、無二是非一人情にしたがふと見へたり。云。近年も民の困窮きはまりし天罰にてや、凶事出來、主君國を失ひ、家中の者牢人し、難義に及たるあり。若戰國とならば、國亡びて妻子とらはれて後、日來百姓になさけなかりし、其うらみの報をしるべきのみ。主君をたをし、身を亡し、妻子に難義をせさする事を願ふは、愚の至なり。武士は常の祿あれば、たとひ凶年なりとても、難義なるといふばかりにて、饑寒には至らず。百姓は年中辛苦して、作出したるものを、のこらず年貢にとられ、其上にさへたゝずして、未進となれば、催促をつけられ、妻子をうらせ、田畠山林牛馬までをも、うらせてとらるれば、其の百姓家をやぶりて流浪し、行方なきものは乞食となり、たま〳〵村里にはさまり居といへども、凶年には饑死をまぬかれず。甚しきものは、有無の差別をもしらず。水ぜめ簀巻木馬などのせめをなす。これによりて、病つきて死し、或は病者になりて用にたゝざるもあれども、いむ事なれば、うつたへもならず。凶年にて、百姓の迷惑する時には、よき田地山林屋敷等を、下直に買得などして、富人はいよ〳〵身代よろしくなるものあり。村里かじけて、とるべきやうなくして、免をさぐれば、富人も諸百姓につれてともに免さがりて、ます〳〵富有なり。此

の、主人地頭をあなどり、うらみを報るにたよりなし。若北條の末の亂れ、尊氏家の中比よりの兵亂のごとき事あらば、貴方三十人の者、戰場へは一人もしたがふべからず。筋目あり、代をかさねてつかふるもの、幸に心剛ならば、一人も供すべきか。少しよはめあらば、小屋までも行者あらじ。水くみ飯かしぐものなく、小屋をはり馬をかふものなくば、勇氣へり身躰つかれて、すゝむ事あたはじ。馬つかれ足損するとも、くつを作てはかする者あらじ。たとひ死をいたすとも、歩侍一人武者の勇なり。これ死すといへども、知行盜にあらずや。歩侍は、常に諸事をかろくして、身無病に手足つよし。貴方達餓にかちだち、一人武者となり給はゞ、彼歩侍のはたらきも叶べからず。難苦をしのぐ事もおとるべし。心斗はたけく共、歩侍の行所までゆく事なるべからず。これ名をぬすむにあらずや。高知行をとる人は、人多きを以て貴しとす。人多く扶持せんための知行ならずや。あれ共なきがごとく、君の大事の用にたゝざる人の持樣は、不忠の至なり。

一。學友云。今の世の武士の情は、民に不仁なるを以て其道を得たりとし、仁なるをば其道を不ㇾ得とす。たま〳〵民に憫みある人あれば、大にそしりいかりて、慈悲に過て百姓のみをめぐみ、家中にはおろそかなり、事あらば百姓のみ用に立べしとあざけり、百姓は富て奢といひ、饑饉凶年にて、民にうへたる色あり、奉公をのぞむ者、男女となく道路にみち、給分とらず共つかへんといへども、かゝへをく者もなし。乞食すて子をほきを見ても、不便とはいはず。國主郡主仁君にて、うへを助け給ひ、もしはわらびの根をほり草を食すといへども、乞食に出るもの見えざれば、

をなすべし。日本のいにしへは貢法なりき。故に其名殘にて、今も年貢といへり。もろこしも、むかしは農兵にて、士民わかれず。軍役民間より出たりき。故に貢物十一也しかども、公用不足なし。井地は八家を一組とし、死生相伴ひ、疾病相助け、患難相すくひ、軍陣あひはげまして、一人すゝまず、一人しりぞかず。八家一人の手足のあひたすくるがごとし。貢法は五人を一組とす。國用軍用備りて、文武車の兩輪のごとし。農のいとまに應じて、學校の政、孝弟忠信の敎ありて、五倫和睦し、禮樂弓馬のあそび有て、風俗美なり。風雨にあたり、寒暑をしのぎて、身躰すこやかなり。山野にかりし、川澤にすなどりするは、農の害を除て、武事に鍛錬せしめんとなり。故に軍士は、農兵よりつよきはなし。農兵となれば、をのづから十一の貢法行はるゝ勢あり。治世には士ゆるやかに、民困窮せず。軍國には士民相和して、勇強なり。戒めずして質素なり。しかりといへ共、今のならはしにては、賢君賢相ありとも、俄にはかへしがたし。仁君相繼おこり給ひ、業をはじめ統をたれて、士民相好むやうになりなば、治世永久なるべし。

一。舊友に告て云。貴方戰國ともなりなば、何の用にも立給はじ。武士の名をぬすみ、知行をぬすむは、貴方達なるべし。舊友色を變じて云。何といふ言ぞや。　云。貴方家內の者にあはれみなく、民に不道なり。是を以て、軍用達すまじき事を知なり。貴方常に云。事あらば、侍下人かけて二十人あり。百性をかり出して以上三十人の覺悟ありと。大阪陣島原陣のやうなる事ならば、小屋場までも供すべきか。此二陣は、天下一同の時にて、敵はたゞ一城のみなれば、家賴百姓等

德に近付しめんとなり。其言抑揚甚し。今の佛氏の說は、人の眞知眞能を亡し、天眞の神明をくらまして頑愚とす。故にいにしへの愚は直なり。今の愚は僞のみ。

一。心友問。聖人おこり給はゞ、井田復すべきや。　云。聖人おこり給はゞ、大道復すべきのみ。井田などの事は、聖人其一時の利によつて制し給へり。これその跡なり。いにしへと今と時勢大に異なり。古法の今に行べからざること多し。井田其一也。ことに日本の地形に相應せず。よく學ぶ者は、聖人の意を取てあとによらず。聖人の意は仁政なり。仁政はいづれの國にも行べからざる時なし。今の時所位によりて仁政を行はゞ、大道の復せるなるべし。　問。日本の地形井田にたよりならずとのたまへども、算用づめにする時は、ならざる地なしといへり。もろこしにても、地の高下廣狹不同なる所にては、算用づめの井田ありといへり。いかゞ。　云。民の田地を奪ひて井地とせんは、井田の實を失へるなり。又民に井田の十一をとらば、武士飢て亂逆出來べし。いまだ民の手にわたらざる新地にして井田をせんは、聖代の法をうつしてみる也。しからばなを算用づめは詮なし。正しき井田をなすべき事なり。もろこしにても先正しき井地をなし、地形の井田にならざる所は貢法あり。貢法は井田の形をすてゝ實をとりたるものなり。井田の實は十一なり。故に井田のなしがたき地形にては、たゞ十一をとるのみ。先井田あり。其かたはら井地になりがたき所、貢法と二にするもたよりならざる事ありて、算用づめにしたるもありと見えたり。いまだ井田の正しき地形ひと所もなきに、算用づめの井田をせんよりは、實をとりて貢法

ぐれば、上より誓ひを信ぜざるなり。故に下も誓を事とせず。うたがふべくば、誓紙はいらざるもの也。うたがふまじくば、誓紙の上には、何事も入まじき事なり。予心に信義を立んと欲す。故に人にちかひを求めず。みづからちかはず。人の信ぜざるは、人のうたがひなれば、われあづからず。我信にをひて損なし。ちかひを以て信とせば、ちかはざる事は皆僞ならんか。君子は事として信ならずといふ事なし。ちかはざれども、一言の約をたがふは自欺なり。則天理にそむくなり。天理にそむく處には、則神罰あり。いかんとなれば、鬼神は福善禍淫なり。善は仁義禮智信より大なるはなし。惡は五常をなみするより先なるはなし。

一。心友問。程子云。老子曰。非二以明一民。將二以愚一之。其亦自賊二其性一矣と。佛氏も亦云。智慧を殺せ〳〵。利那も殺生せざれば、地獄に入ると矢のごとしと。淨土日蓮一向の宗門、其言かはれるがごとくなれ共、愚痴に佛を念ぜしめて明處なきは、老佛よく相かなへるか。云。程子は老子の主意を察するにいとまあらず。其時の老者の覺えによりていへるなるべし。老子民を愚痴にして頑妄ならしめんと思へるに非ず。世間機巧の知利害の謀は万惡の源なれば、此源をふさがんとす。機巧謀計利害の知を尊ぶ者の目には、無欲正直の人をば愚なりと云へり。誠の道に明かなるものは、をのづから謀計邪僞につたなし。世の道を說者、人をして德に入しむる事不レ能して、才を長ぜむとす。誠を思はしめずして、機知をひらかんとす。これ世の明かにするといふ者は、僞に近し。故に老子歎てしかいへり。德は拙に似て、愚なるがごとし。愚にせんとすとは、

給へり。しかのみならず、いにしへは大學あり。　勸學院淳和院奬學院學館院の學校あり。守護國司受領の人がらをゑらびて、諸國に敎しめ給へり。國郡いづれも學校あり。此風をとろふるにしたがひて、王者の威くだりて、武人大君となれり。武家の代となりて後は、人民に敎るの道なく、たゞ爭鬪をおさむるを以て事とす。心をおさむるの敎は、佛者にのみまかせたり。佛敎の初は、人の惡をやめて善をなさしめんとす。其說王道の正にあらずといへ共、小補有に似たり。近來は人の善を亡して、惡をなす事をつとめとす。出家の心行甚無道にして、欲心深厚なり。愚がわかき時分までは、武士たる者、金銀米穀の事、利得のものがたり、料理ばなし、念欲の言を恥とす。文武の二道ならざれば、いやしと思へり。詩歌管絃のあそび、弓馬のわざ、代々の名將勇士の物がたりなどなりき。今の武士の物がたりは、あき人の會のごとし。文學は儒者坊主のわざとし、詩歌管絃は公家の事といひ、武勇は武藝によらずといひて、衣服飲食家居諸道具等に美を盡し、酒色にふけり、用たらざれば、下をくるしめ民をむさぼるのはかりごとを心とするのみなり。生れ出るより、是を習の外、道ある事をしらず。人才のくだり行事、むべならずや。

一。學友問。貴老誓言誓紙したまはざるは何の義ぞ。　云。信義亡てちかひしげし。朋友の道は信なり。日々に誓言を以て信となすは、信なき也。事ごとにちかへば、心にもいらず。忘るゝ事もあり。今は誓言を信ぜざること半なり。君臣義を失ふによつて、誓紙を以て事をなさしむるなり。誓紙の上は、横目も吟味掛定も有まじき事なれ共、又其上に奉行あり、横目あり。掛定吟味をと

はれり。釋迦は大慈大悲の心を以て、衆生の惡をやめ善をなさしめんとす。幼少の子どもをおどすが如くなる方便あり。これ天竺人の愚鈍によれり。後世の佛氏奇特をいふは、釋迦の心とは各別なり。人に尊信せられむとおもふ心よりをこれり。古人これを利心なりといへり。釋迦に此利心はなし。釋迦を中國の聖代我朝の上世に渡しなば、佛法をとかんと思ふ心は出來べからず。達磨も中國にて聖學のすたれし時節にわたりしゆへに、直指人心見性成佛の旨を敎られたるなるべし。聖敎神道にてよく治りたる者を、我佛法に引入むの我心は有べからず。同じ佛法にても、日蓮は他宗をそしりて、我宗に入むとす。淨土一向たがひに彼を非とし已を是とす。彌陀といひ妙法といふ。言のかはりはあれども、其我執亂行は勝劣なし。利心のをもむき一なればなり。　問。後世をいひておどさずは、愚人はおさまらざらんか。　云。天竺はさもあらん。善人は成佛し、惡人は地獄に落といはゞ、せめて可ならん。今淨土一向日蓮宗の敎は、いかなる惡人も、釋迦阿彌陀をたのめば、成佛うたがひなしといふ。これ善を退け惡をすゝむるなり。しかれども、人々をして惡をなさしむる事あたはざれは、仁義禮智は天道なり。人皆固有して生ず、故に惡人といはるゝ事をはづかしくいへり、今佛法の敎を以て、此天性の靈明を涅にすれ共緇まず、磨ども磷がず。いはむや佛法の敎なくは、今よりはよからん。

一。心友問。世間次第によき人の生れざるは何ぞや。　云。風俗のおとり行がゆへなり。王代には天子みづから三種の神器を師とし給ひて、御身をはなたれず。智仁勇の德ありて、天下にのぞみ

すときは、理非はさる者にて、事のさはぎともなるべし。善惡共に吟味なく、きかざるはまされり。人にかすものは、利をとるべきためにかす事なれども、其財不仁不義にしてあつまれば、散ずべき時節到來して、利心によりて失ふものあり。又さのみ不義のあつめならね共、天物を久しくわたくしにせしをとたりによりて、おとろふべきときに及て、損すべきとてかす者あり。これ財用の流行する勢なり。勢のうつり行にまかすれば、無事なり。この情勢をしらず、家中へは主人よりかし、百姓には代官などかす時は、とらざればならず、出さではかなはざる事になりて、せんかたなき時は、家中百姓ともに困窮して、後にはやぶれにちかくなるものなり。四海困窮せば天祿ながく終んと、聖人ののたまひしごとく、國郡も變出來るものなり。故に貧富の命分は、主君奉行下知をくはへずして、勢にまかすべし。主君は武士の不ㇾ得ㇾ已の難をみて、微なるときに心をつけ、奉行は民の困窮を初にすくふべし。大になりてはちから及べからず。　問。しからば君子もかりてかへさゞる事あらむか。　云。君子はこれを初にふせぐものなり。身の分限をはかりて出入し、よく貧を安じて困窮にうつされず。其上名聞利害によらざれば、借錢せず。若不ㇾ得ㇾ已世の勢によりてかれ共、必ずかへすべき道理なり。國政は君子の爲ならず。小人を治るものなれば、小人の情と世の勢を知べき事肝要なり。

一。學友問。達磨より初て禪家妙奇特をきらへるは尤なり。しかれ共、元祖の釋迦神通妙用をいへるは何ぞや。　云。是も其國人によりてかはれる道理殊勝なり。もろこし人と天竺人とは性質か

どひを解、第二には世間の唱へあやまりをもひらき度事なり。あまりに人情をはゞかるも、害をおそるゝに似たり。　云。しかり。愚かなる書も、無學不文字の者の吉利支丹にまどはされぬほどの益には成べし。天然文明の運と見へ侍れば、百歳の後は文學盛なるべし。かな書などは、みる人も侍らじ。たゞ二三十年の間の助とするのみ。今も經傳をみる人のためには用なし。やはらげて無學の者のためばかりなり。

一。學友問。むかしより借錢公事きかずといへる法あり。人の物をかりてかへさゞる道理なし。横道にて初よりかへすまじきの心にてかるものあり。左樣の善惡是非は奉行所に沙汰すべき事ならずや。　云。理屈をいへば左樣なれども、世の勢をいふものはしからず。むかしより借錢公事きゝ給はざるは、情勢にあたりたる所あり。天下は天下の天下なりといへり。金銀米穀は天より天下の人の爲に生ずるものなれば、一人の私すべきにあらず。生れ出たる時は、貴賤共に一衣を着ず、一物をもたず。金銀は貧賤富貴の命によりて、しばらく來往す。代々子孫に傳る事あたはず。今日己が有かといへば、明日は人の物となる。天下國郡も又しかり。貧なるものは富る者にかる。初はかへすべきと思ひてかれ共、本より不足なるによりてかりたる故に、其元利を出さば、いよ〱不足して、かへすよなりがたきものあり。又奢て用たらざればかり、いよ〱奢て借錢おほくなりて、かへさゞる者あり。又あふれ氣にて、初より何のをぼえもなく、かへすまじき心根にてかるものあり。かやうの品々まじはりてしりがたし。末はあしき品のものは過半也。其罪をたゞ

一。心友問。中夏にては儒書醫書共に、人の爲めによき事をば天下にひろめて、秘する事なし。日本にては秘するもの多く侍るは何ぞや。　云。秘するにも秘せざるにも、主意餘多有べければ、いづれをよしともあしく共いひがたし。一旦世にもてはやしても、跡なく成行書多し。發明らしく利口なる事をばいへども、根なき書成故に、後まで傳はらざるあり。小知にして名聞の心よりひろむるも多し。又ひろめて人の害になる書もあり。みづから愚にして、人に愚を敎るものは。これらはひろめてあしきなり。功利の心より、人に奥ふかくおもはせむ爲に、秘するもあり。あらはしてはあさまになる故に秘するもあり。世のそしり人の嘲りをかへりみて秘するもあり。初學のために書をあらはせども、十分心におちざれば、後學をあやまらん事をおそれて、出さゞるもあり。　問。翁問答にて志のをこり、それより問學してひろく成たる者餘多侍り。志だに出來侍れば、四書五經を傳習して、いか樣にもすすみぬれども、志をおこす人なき故に、能生付の者餘多むなしく終侍り。天の此民を生ずる事、先覺をして後覺をさとらしむる理なれば、人のまどひを解き邪を正すべき言の出るは、天のあたふる所なり。しかるに其言を秘し、其書をかくして、數千の英才をひらかざるは、天の罪人なり。たとへば一國の人民を養ふべき天祿を取て、ひとりたのしみをきはめ、數萬の飢寒をかへりみざるがごとし。貴老の書も出次第にして、さのみふせぎ給まじき事と思はれ侍り。江西の學流とて、無學無知の者共、みだりに說ひろめて、異端の樣に成たるもあり。世間に貴老の學術をしらざれば、罪一人に歸し侍り。第一には江西の學術のま

はまれなるべし。ある民間の士のいへるは、おびたゞしき惡人にて、天道も罰にあぐみ玉ふべしと。まことに人多して天に勝の勢なり。下の勢を見得るに、多くは善人不善人におさるゝ躰也。ただうつたへ出ざるのみ。出る者は忿爭きはまれり。非道の者有共、あはれみてにくむべからず。教訓し、ことはりをいひきかせて、なだめ決すべし。其上に非道の者みづからやぶるゝ事あらば、不レ得レ已して罪をかろくすべし。惡のきざし出來て、惡人すくなき時は、罪を重くしてこらしたつ事も有べし。今の世のごとくに惡人多きときは、惡人の罰を重くすれば、惡人ます〳〵多なるものなり。其故は、左樣に大勢かさね〳〵死刑流罪にも行がたければ、後々聞のがし見ゆるす。其勢を小人見知て、おそれざる者也。古人の過錢の法を立しは、罪過をかろくして、惡の類を斷むとなり。過錢をとられて身上のやぶれにはならざれ共、惡をする度にとりて、惡に益なきやうにすれば、後にはせざるものなり。奉行は惡人多く出來ても、人をそこなはず家をやぶらぬ事なれば、あぐまずして見のがし聞ゆるすといふ事なし。世間盜賊亂行の本となる博奕をとゞむるに、特更此法よし。過錢は主人の有とせずしてほどこしに用べし。それ姦惡のかくれたるを察し得る共、我知の明を悦べからず。故に自慢する者は姦惡をにくむこと甚し。其人の罪にあらず。上道を失ひていだす事を知べし。道理を持ながらをしこめられたる者有。よく心を付て、其いきどをりを散ずべし。をしこめたりしをも罪すべからず。只教訓すべし。理非の賞罰に心をとゞむべからず。はなれて慈惠は、上よりくだるの活法を行べし。

日本倫理彙編

の入道したるなどを、そばちかくをき玉ひて、四方の物語せさせて、聞給ひたる有。しかれ共、政道よからざるは何ぞや。云。むかしより學者餘多ありといへども、道學と仕置とは各別に成てあり。一致になすべき者をいまだきかず。器量有人は、知惠有故に、唐の法の行ひがたき勢ひを知て、用ひ給はず。されどもすてがたく貴き道なれば、聞玉ふばかりなり。知惠なき人は、古の跡と法との今に行はれざる事をわきまへず。よきことゝはしりて、行度をもへり。然ども器量なきが故に、行ゝ不ㇾ能。下に居ものは、勢ひなければ行事あたはず。是又幸也。又下に居者は、下の情を知べきことなれ共。肝要の事は不ㇾ知者なり。學力ありて道德に志ある人の、下に居者ならでは、政の本とする人情は不ㇾ知ものなり。たとへば民間にそだちたる地士をあげて、郡代郡奉行。代官などにせば、よかるべき事なれ共、道に志なきものは、民間にそだちながら、民を治る事はしらざる者なり。世間の取沙汰聞事も、少しの益はあれども、大なる益にはならざる事なり。いやしき者の入道などは、ことに人情にうときものなり。市井の者は、我得かたの事ならではいはず。上たる人心ありて聞玉ふとしれば、後には害になる事多し。聞ざるにはをとれり。赤子をたもつがごとくに深愛なく、眞の道をしらでは、何事もあさはかに成行て、是に似たる非となり、善なれどもあしくなる事多し。

一。心友問。小郡なれ共、公事訴訟をあづかりきゝ侍り。肝要の心持承度候。云。國郡道を失ふ事久し。故に士そむき民はなる。古の罪人は今の常人なり。惡人を穿鑿しもとめば、無事なる者

へるなり。

一。心友問。治國平天下の條目ありや。　云。孟子云。諸侯之寶三。土地人民政事。寶二珠玉一者。殃必及レ身。傳云　寶得二其寶一者安。寶失二其寶一者危といへり。後世君臣共にあしからざる時代有といへども、道を不レ學故に、大法を不レ知。たまたま文學を好める人も、經書の上にのみ過去て、今日の人事に用る事を不レ知。道の行はれ、人民の安居する事かたし。其器量ありても、大法を不レ知者は、行事あたはず。細工に器用成者ありとても、規矩繩墨を得ざる時は、居を作り方圓を製する事。あたはざるがごとし。學て大法を知といへども、其器量なければ、行事不レ能。拙工に繩墨をあたへたるがごとし。其器あり其法を知とも、人情時變に達せざれば、ひろくほどこす事不レ能。つかへとゞこほりて不レ通ものなり。其器あり大法をしり人情事變に達しても、時を得ざれば、行事あたはず。鎡基ありといへども、時を待にはしかず。智惠有といへども、勢に乘にはしかずといへり。後世の人政事の寶たる事を不レ知にや、法度を出す事かろがろしく、あさはかなり。三の寶一もかけては、國其國にあらず。土地ありても、人民なければ、居ること不レ能。人民有ても、土地なければ、養ふこと不レ能。土地人民ありても、政事よからざれば、長久ならず。政事はよければ寶となり、よからざれば害となれり。君と大臣との心にあり。愼むべき事の第一なり。　問。後世器量も常人にすぐれたる主將の、文學ある者をめして、道をきゝ給ひ、又天下の事をしろしめさんがために、方々へ横目を回し、世間の取沙汰までをもきかせ、又いやしき者

をいへり。今の人の位にはかなはず。なま兵法大疵の本となるべし。君子の學には軍法をば事とせず。しかれ共、聖賢君子の道德には、文武を兼備たるものなり。天に陰陽有。人に文武有。心に智仁勇あり。君子の位に至ぬれば、大將の器量はをのづから備る也、智明かにして時のよろしきをはかり、心うごかず。敵をおそれず。勇にして死をにくまず。仁にして士民の父母たり。衆の下知につく事、子の父にしたがふごとし。しかれども、戰をばこのまず。不レ得レ已して戰時は、必勝ぬ。正成ごときの天質能人は、皆したがつて子弟と成べし。何の敵する事かあらん。若虎狼の姦勇にて、君子をも見しらぬ程の者ならば、つよしといふとも、うち亡すにをひては、何事の有べきや。此後亂世となりなば、唐の諸侯を連ね合せ、戰しむるやうなるもの出來て、庭鳥をあはするやうに、方々にて大名をいさめいざなひ、人を殺すを以て事とするもの有べし。久しく亂て治るべからず。今の軍法者は、其先兆成べきか。歎かしき事也。　問。能戰て人を殺すを以て業とするが罪重き事は、今のすへもの切に十百倍することをさとりぬ。新田畠をおこす者それに次て罪重き事は何ぞや。　云。是又不仁の君を富しめて、勢をつよくする事なれば、惡逆の根をます也。其上新田畠は、多は古地の害になるものなり。隣鄕の害になるも有。國に不毛の野山多きは、牛馬を養ふにたよりよく、薪をとるによきもの也。新田またこれらの害に成ものあり。大方後の惡をのこすものなれば、軍者に次ての惡逆なり。堯舜の代ならば、重き罪人なりといへり。堯舜の代には、かやうのものはをのづからなければ、罪すべきやうもなし。まうけてい

し。若わらば害いよ〳〵大なるべし。　問。山本勘助は、軍者なれども、信玄家にをひて功を立たり。　云。勘助は勝負の利に器用なりしもの也。其上信玄と云大將の器量有主君につかへたる故に、其得たる所あらはれたり。他の主人につかへなば、知らるまじきなり。然共、軍者にて道をきかざる者なれば、軍は上手にても、不仁なる主をとりたる故に、君臣ともに終には絶亡たり。　問。聖人の道を學びて、國をよく治め士民を安んじたり共、軍法をしらで、戰國の時信玄ごときの功者にあひては、まけをとるべきか。　云。軍法は本聖人の始め給ふもの也。六藝の中の禮にこもれり。吉凶軍賓嘉とて、禮に五の品あり。軍法は其一なり。戰陣にては、一入作法正しくとゝのほらでは、ならざる事也。古の軍禮者は、事をよく知て、勝をとる事は將の任なり。今も古の事をよく覺たる軍者は、重寶にても有べし。信玄景虎ほどの事しりの功者、よき大將にても、君子の陣に敵する事は成まじきなり。景虎も信玄も、やう〳〵小ぜり合の功者也。合戰をだにも得もたざる大將なれば、おそるゝにたらず。況や今は此人々を祖としたる軍法者なれば、何ほどの事の有べきや。信玄景虎は坂東の名將也。毛利元就は兩將よりも大にすぐれたり。大勇にして寛仁なり。軍法は義經正成の遺風あり。其跡大にして近代の及所にあらず。故に人しらず。信長秀吉の運つよき故に、元就はやく死去なり。　問。或は唐の諸葛孔明流。源義經。楠正成流などゝいひ傳るはいかゞ。　云。孔明流とて立たる軍法はなし。名をかりたるばかり也。其流ありとても跡のみ也。今の時處位には不合。義經流正成流といふは、猶以名將の上手をせし其流

ても、武道はきらひなり。農工商に生れたる者も、人の下にをる事をいとひ、すこしきく所を以て異見を專にし、己が文才なきを以て文才ある者の產業をそしり、言親切なれ共心實ならず、語たかけれ共心いやし。口に正道を論じて行そむけり。世に愚痴の人多ければ、實をば虛とし虛をば實とす。三綱五常の道、天道の善に福し惡に禍し給ふ目の前の正しき事をば信ぜずして、地獄極樂と云なき事をば信じしたがふ者多し。異端の徒の人をまどはす所也。大道に志あるものは、言を以てだに世の非をためんとす。いはんや行を以てたむる事なからんか。たとへ心に私なく共、異端にまぎるゝの行はなすべからず。

一。問。善戰者は重き罪人なりといへり。然ば今の軍法者は非なるか。　云。是又いふにたらず。古の軍者は、法にくはしきのみならず、大將の器量ありて、勝負の利をしり、たゝかへばかならず勝て、人を殺すの害多かりし故に、上刑に服べき者也といへり。戰に勝、國を合するといへども、天罰にて、終には其主人も亡び、其身も絕たり。終に天下を取事は、合戰の勝負にはよらず。よからざれども、其世にて大やうなる寬仁にちかき人にかたつくもの也。唐日本ともに、古今のためしあきらかなり。今の軍者には、將の器なく、勝負の利を知べき樣躰ならざる者多し。時代無事なる故にしられず。戰國になりなば、大方名もなき軍法者あるべし。大將の器量有主君をとりあはせたらば、其勝負の理にひかれて、少は用に立事も有べし。ひとり功を立べきほどの者はまれならん。唐の軍者は、大方將の器有て、將軍の任を得たり。日本にては、其器なきもよ

に佛道にそむけり。よく心法をおさめ佛道を行すれば、法力にて其口はわたすもの也と。汝はじめより法力の食を求て、佛道を修行するか。

一。心友問。何をか君子の儒といひ、何をか小人の儒といふ。　答て云。儒といふは學者の稱也。道家佛家など云者のごとく、五等の人倫の外に儒といふべき者有べきにあらず。小躰にしたがふものを小人とするなれば、學問を名利のためにする者を小人の儒と云。大躰にしたがふものを君子と云なれば、學問して性命に至り、産業は別に在て學にかゝはらぬ者を、君子の儒と云也。問。しからば今時儒者と云て、文學に長じて祿を受る者は、非なるか。　曰。心ある者は非也。心なき者は非ならず。天性文才に長じ、文藝によつて祿を受る者は、天職を食なり。古はこれを史ともいひ、儒とも云。其實は一なり。この故に文才のみ有て、德すくなき儒者は、くだつて文筆の用をつとめ、道德ある儒者は、のぼつて高位大祿をも受たり。かたちは小人の儒に似たれ共、無心にして天命にしたがふが故に、小人の儒にあらず。心有と云は、實は利のために學びながら、色をはげしくし言をたくみにして、己が非をかざらむがために、正道をあかさず、君子の儒をまぎらはすもの也。　問。理學實學などゝて、人に敎へ、それを渡世とするは、出家の法力によつて一生を過すがごとし。これを非といはんとすれば、人を治る者は人に養はるゝの語有。これを是といはんとすれば、異端に相爭て五等の外の人のごとし。　云。文才なければ史の職も不ㇾ叶。定見なければ理學にもあらず。德を好まざれば實學ともいひがたし。武士の家に生れ

時分には、大風吹かなとねがふ。夏はひでりを待てよろこべり。天下の萬民をいためくるしめ、餓死させて、己一人の利を得んと思へり。如ㇾ此のもの共、一向日蓮等の弟子にて、寺參すれば、其惡心をば露もさとさずして、念佛の功德を以て、欲惡ながら成佛すといふ。日蓮寺へ參れば、法華をそしりたる者だに、かへしては成佛すと。其故は、そしるもきゝたる故なり。況や一聲にても、南無妙法蓮華經と唱るときは、主親をころしたる惡人にても、成佛疑ひなしと云。これにましたる世界の惡魔はあるべからず。糟糠といふは最負也。禪は是より甚しき事あり。むかしの禪は、悟道の機有者ならねば、あへしらひもせざりしときく。今の禪は、大名富人にてだにあれば、いかやうの惡人にも悟道をゆるし諂へり。昔の禪は、後生のまどひをはらしき。今の禪は、まどはぬ者をもまどはす也。さとりだにすれば、何をしてもくるしからずといひて、歷々大身の心を亂ぬれば、淫亂にながれ奢を樂て、百姓を虐し諸士をくるしめ、文武の家業を忘れ、人君の心行なし。是亡國の相なり。如ㇾ此のあしき敎なくては、禪者のかくのごとく多して時を得と云事はなきと也。いひわけせよといへば、禪者面を赤くして不ㇾ言。

一。佛者問て云。耕也餒在二其中一。學也祿在二其中一。何とてかくいやしきや。　答云。義の取やうとなり。たゞ義を行て食を求ることなかれと也。天命と云ものあり。耕は食を求むがためなれ共、かへりてうへて死する者あり。學は道德を求んがためなれ共、自然に天祿ありてうへをまぬかる。利は求て得べきものにあらずとなり。むかしよき佛者の言に云。寺領を求め物を蓄るは、大

れはかりにても得心すべき事なれども、かたぶきたる我慢にて、其非をしらず。汝寂滅といへ共、帷子のまゝにて冬までは得居ず。寒き風あれば綿入を重ぬ。飢て飯を食す。かほど感ずる道理をしりながら、無理に滅せんとす。心の活物たる事を不ㇾ知なり。

一。朋友云。眞言坊主のいひしは、佛法はよければこそ、如ㇾ此繁昌して、次第に多く成、儒道はよからねばこそ、尊信する者まれ也。今佛者にくらべては、儒者の少き事は、大海の一粒のごとし。何と申さるゝ共、佛者には成まじきとの事也。是にはまけ侍り。　答て云。それ則儒道のすぐれたる故也。日本の眞言の祖師空海書にも、賢知は優曇花のごとく、愚痴は鄧幹のごとし、善をあふぐ類は麒麟の角よりもまれに、惡に耽る類は龍の鱗より多しとかけり。儒道はよき故に尊信する人まれに、佛法はあしき故にしたがふ者多し。

一。むかし我が友禪者に問て云。今の淨土日蓮本願寺宗はいかゞ。禪答て云。釋家の糟糠、佛を願ふの瓦礫なり。眞言はいかゞ。仙をまじへ神をまじへて、佛者の形あるのみ也。陰陽師の愚痴なるもの也。天台はいかゞ。經說になづみて、雪中の兎の足跡を跡へとむるがごとし。又眞言にも似たり。其餘はいふにたらず。禪はいかゞ。我が宗は佛心宗とて、悟りを以て至極とす。我が友の云。人の上にをひては明か也。身の上には何としてくらきや。天台眞言禪共に、むかしはよくもこそ有つらめ。今は人民の賊也。禹湯の子孫なれ共、桀紂が惡はうたではかなはず。糟糠瓦礫は事の害ならず。今の佛者は天下の害になる事甚し。米間屋の心行は、稻のはらみて、花のある

集義外書卷之九

脱論　六

一。心友問て云。佛者には輪廻をいひ、儒道にはいはず。目の前に毛虫の蝶と成て飛行をみれば、生れかはると云事も有なんか。　答て云。むかし我友禪者に説て云。坐禪する事は何のためぞ。即心即佛何の益か有。禪者の云。衆生皆輪廻をまぬがれず。悟て成佛する時は、二度生をうけず。我友云。たね只ひとつにてめぐると見たるは、花は根にかへると思へるか。造化の眞理をしらずして、まどへるもの也。たね一粒うへて、千にも万にもなれり。只造化の無盡藏よりわかし出す也。ひとつたねといふ事なし。又物の化生する事は、造化の氣のむし立るによつて變化する也。ぬかわらも朽ぬれば虫と成て出生す。ぬかわらに何の輪廻の心あらん。自然の變化の理をしらず。夫生物に四あり。氣化形化卵化變化なり。氣化といふは、父母なくして氣中より生ずるもの也。新池に魚は入ざれ共、魚の出來るは氣化なり。其外父母なくて生ずるに虫多し。人も初は天地を父母として、氣化にて生じたり。すでに形有て後は、形相交りて生ず。是形化なり。四足の物は形化す。鳥魚の類は卵化也。雀海水に入てはまぐりとなり、きりうしの蟬となるたぐひは變化也。此變化の後を見て、生れかはるの見出來たるか。變化するもの、其精神のこりて生ずるにあらず。藥種の中より虫の生ずるがごとし。汝寂滅を眞空とす。聖人は寂感と仰られたり。こ

の用に立とはなし。事あるときの心がけといふばかりなり。兵器は凶器なり。しかれば武士も遊民ならずや。　云。日本は小國にて金銀多し。異國よりのぞむといへども、武國ゆへにとり得ず。武士の武藝をたしなむは、國の警固なれば、遊民とはいひがたし。武士ながら武道、武藝のたしなみなきは、遊民なるべし。　問。吉利支丹あらためも、異國の敵をふせぎ給ふ事と承れり。弓刀もいらず、人心をなびけてとるべき謀と申侍れば、むつかしからんか。　云。しかり。北狄は外邪なれば治し易し。吉利支丹は内病なれば治しがたし。此内病の生ずる根本は、人心のまどひと庶人の困窮によれり。迷とけ困窮やまば、根を絶べし。佛法の後生のすゝめにたよりて、それよりまさる法を作てみちびくなれば、後世のすゝめは吉利支丹のより所也。中夏は制禁なけれども、すゝむるもあたはず。聖賢の國にてまよひなく、又農兵にて民の困窮もつよからざれば也。　問。しからば日本にも儒道ひろくならば、吉利支丹ほろびんか。　云。尤其理にて侍れども、今の儒道には儒家なし。各異見を立ていひがちの様なり。いづれの儒學も、此國の水土にあひがたく、今の時に叶がたし。

集義外書卷之八　終

問。一年に一度はおろそかなりといへるものあり。いかん。　云。忌日は修身の喪とて、親死したる其時月の其日は、終にあへるがごとく思ふなり。四時の祭は吉禮なり。孝子の心に親を死せりとせず。いける時もてなすがごとし。しかれ共神としてまつれば、潔齋して我身をも神明にする道理なり。神はしば〲すればけがるゝ事あれば、むかしは潔齋して祭る事は、春秋と忌日と三度也。後世四時に成て五度となれり。其外五節句朔望の拜は、備て不ㇾ祭とて潔齋はせず。たゞ生る時、親の所へ禮に行に同じ。或は君のたまもの、或は遠來の珍物、或は初もの等を備へ、他行のいとまごひ、歸て又告るごとき事は、子の心入次第にて數なかるべし。年に一度の忌日の外は皆吉禮なり。これ神道の義なり。毎月忌日なれば時ならず。吉凶あひまじはりて神道をけがすに近し。禮にあらず。故に君子は不ㇾ用。生るにはつかふるに禮を以てし、死せるにもつかふるに禮を以する義なり。上古は年に一度の忌日の祭もなかりしと見えたり。三年の喪の中ばかり凶禮にて、喪を除てはすべて吉禮の神道なれば、忌日の祭はなき道理なり。後世孝子の厚情より、一年に一度の月日は、親の死に逢たる事を思ひ出して、終身の喪の心なれば、むかしはなく共、義を以て起してくるしからじとて、初たるとなるべし。今時終をしらぬ忌日をも祭るは、道理なき事也。　問。貴老毎月出家にとき米つかはし給ふ事は何ぞや。　云。坊主は在家を賴て居者也。家々より養はずしては何とすべきや。

一。心友問。今の武士のよきと申は、弓馬兵法をたしなみ、晝夜これにかゝり居れり。武藝も世中

下にひろまり侍らんに、なげかしき事なり。　云。しからず。すみやかに成ものは堅固ならず。俄にひろまるものは長久ならず。民九十月に麥をまきて、わづかに生ずれは、甚寒にをさへられ、雪霜にうづまれ、これによつて根をふかくすれば、春雨に長じ、卯月の日に實をむすびて、豊熟するものなり。予が道もをさへあるは、麥の寒氣雪霜なれば、後世をとる事あらんか。たゞ其德なきことを恥るなり。達磨の佛心宗世にひろまることをにくみて、毒害せられしも、其身死して、道は後世ひとり盛なり。異學といへども其德あればなり。

一。心友問。儒道おこらば佛法はほろび侍らんか。　云。道を興す人は君子たらん。君子は力を以て物の興廢をなすべからず。我道おこらば、佛法もむかしにかへりてよく成べし。なげかしき事は、佛者無道にして盛なれば、天道乘除の理にて、時ありて大半亡ぶべきか。すくなく成て又ひさしかるべし。亂世の亡びはいたましき事多かるべし。しかれ共、法はいまよりはよかるべし。

問。儒法には年に一度忌日の精進あり。每月精進といふ事は佛法より出たるにや。　云。佛法にも本はなきことなりといへり。むかしは出家の作法よかりし故に、坊主になるものすくなくて、年に一度の精進に云、僧のとき米たれり。後世は佛法渡世になりて、法すたれ戒やぶれ、難行なき故に、坊主澤山に成て、とき米たらず。親の事なれば、每月おもひ出してよかるべしなどといひて、かくなりたるといへり。其死せる時の月日こそ、修身の慎有べけれど、其時にてもなきに、每月精進すべき理なし。故に君子は不用。しかれども祭をせざる人は、俗にしたがふも可なり。

日本倫理彙編

此傳なり。其惑に狐狸の乘ずるもあり。むかし釋迦輪廻をみたるは心眼病なり。後世の佛者此心病を傳て輪廻ありとおもへり。又白石夜衣の狐狸ありて、其信をます事あり。故に出家してまぬがれん事をねがへり。眞實道心の出家もし輪廻なき理をしらば、一日も出家に住すべからず。たま〳〵儒學して輪廻にまどはざる坊主ありといへども、或は渡世のため、或は其家の名聞などにひかれて、學力すくなければ、心ならず終もありと見えたり。

一。學者問。心學をこりてより儒學實におもむき、諸儒の思ひ入かはりたり。たゞ儒のみならず。近年禪學のはやり侍るとも、心學に目をさまし、敎やうよく成たる故なり。さて儒學は日々におとろへ、禪學はいよ〳〵ひろこり侍り。しかれば心學は禪のさきがけとなれり。遠き慮なしとそしり侍るものあり。いかん。　云。しかるにあらず。世は次第に文明になれり。唐にても、初は佛流わかれてひろまりしか共、他は次第におとろへて、禪學のみのこれり。日本も後はさやうに成行なん。それ人は易簡なる事により易し。一向宗ほど易簡なる立法なければ、これに歸するもの多し。淨土日蓮も、後は一向の易簡に習てひろく成ぬ。近年文明にしたがつて、地獄極樂等の説を信ずる事うすし。是より後はいよ〳〵さあるべし。禪宗はむつかしき事なく易簡に敎て、しかも悟りとて、さのみ後生の地獄にかゝはらず。これ文明の時にあへり。今の禪は、愚夫愚婦のよらん事を欲して妙をいふ。是利心なり。祖師の傳來にそむけり。この事なくばいよ〳〵盛になりて、他宗は皆をされつべし。　問。貴老の學、はゞかりなくして人の志に應じ給はゞ、今は天

一。學友問。儒佛の辨に至て、佛學にくはしからざる故に、彼れ佛を不レ知といへり。吾道を明さんがためなれば、佛をも學ぶべしや。　云。彼と爭はんが爲に學ばば非なり。其上儒佛の辨を好むは、道をみると大ならざる故なり。江漢以濯レ之、秋陽以暴レ之、皜々乎不レ可レ尙といへり玉の寶たるとをしらば、石を以て是を亂るべからずともいへり。たとひ佛學する事、佛者にまさるとも、彼を非とせば、彼佛を不レ知といはん。彼佛を知といはゞ、則吾子佛者ならん。佛者に儒學ひろくしたる者あれども、其道にあらざれば、心を用ることとくはしからずして、理を見る事あらじ。今儒者佛學を盡すとも、又同じかるべし。自己だにまどはずば可なり。人にとくべからず。我佛學せざれども、形容行跡をみて其心をしれり。しばらく吾子がためにこれをいはん。佛學流多しといへども、天台と禪とすぐれたり。天台は高妙なり。佛學のくはしきと禪にまされり。しかれども心に惑あり。禪は學あらけれども、ちかく心法に本付て、要を得たり。或なきが如くなれ共、實はまどへり。　問。まどふ所はいかん。　云。佛氏の學は死を畏るゝによれり。故に是を云てやまず。禪さとれりといへども、死を畏るゝより悟を求む。聖學の徒死生を晝夜とす。常なれば畏るべき所なし。故に死をいはず。　問。形跡いかゞみべきや。　云。心迹は形と影との如く、わかつべからず。佛氏剃レ髮人倫を棄るは、輪廻をおそるればなり。天道輪廻なし。しかるを輪廻といへるはまどへり。むかし鬼物を見たるといふものあり。これ眼病なり。其後見たるものなけれども、傳て恐るゝは眼病を傳る也。白石夜衣を見てばけものとし、氣たえたる者あるは

といへ共、まどふべきとなし。異學の一代心を盡す悟といふものは、聖學にをゐては、ちからをもいれず心をも勞せずして、遊びながら得となり。

一。心友問。貴老の御事を知てほむる人はすくなく、不ㇾ知してそしる人は多し。聖人の道を學ぶは、名を求るにはあらざれども、令名の質ならずや。しかるにかへりてそしらるゝことは何ぞや。　答云。人のほむるは我を勞するなり。そしるは我を安ずるなり。我病者にして躰氣乏し。勞せんとかなひがたし。安ずるとあたれり。故にそしりは我をたすくるなり。知てほむると云も、愚に徳ありてしたしまるゝにあらず。氣象のあひかなひたる人ならん。万人に一人の知人だに、我を勞すると甚し。そしる人は、我にかはりて我病氣をとはるなり。其そしるあまたの人にほめられなば、今までながらへてもあらじ。且徳をもそこなはれんか。そしりは愚が過を格し浮氣をしづめ、身の養生をなさしむるなり。きくとをいとはず。ほむるは愚が過をまし浮氣を生じ、氣力をへらさしむ。きかんとをねがはず。　問。それはさもあれ。貴老の名をかりて不善をなし、且貴老におほせ申事多し。おもひよらざる惡名をとり給ふとは、有徳の疵ともなるべきか。　云。尤しらぬ惡をおほせられて名をけがさるゝは、無實の難題なり。たとへをとるはをそれあれども、聖人をだに陽虎にまがひたり。大徳の人は難も大にして、又はるゝともすみやかなり。愚が如き不徳のものは、わづかに惡名など樣の難あり。本より凡人の品をまぬがれざる故に、はるゝ事もをそし。しかれども我心になきとならば、いふともあづからず。

感じて通ずる聖人の心地には、すこしおよばざる事有。しかれども、たゞ一片の浮雲の大虛を過るがごとく、それだに平人にありては學べき程の善なれども、顏子にをゐては自然の躰にあらざる故に、其善念を須臾もとゞめず、遠からずして復する也。　問。心上だに如ㇾ此ならば、視聽言動の末の事を告給ふとはいかゞ。　答。顏子高明廣遠の事にをゐては。聖人に同じ。今さら告給ふべきにあらず。平人より聖人に至るものは、本を整るに急なり。末のとには心もつかず、のこりあるとあり。仁は天地万物を以て一躰とす。發すべきものなし。これによつて末のとを告給へり。顏子治國の論にをいて、略見等を以てこたへ給ふ所にて知べし。　問。先生の論は陽明子の傳に似たり。朱子王子格致におゐては、黑白のたがひ有こととはいかゞ。　答。愚は朱子にもとらず。陽明にもとらず。たゞ古の聖人にとりて用ひ侍る也。道統の傳のより來ると、朱王ともに同じ。其言は時によつて發するなるべし。其眞にをいては符節を合せたるが如し。又朱王とても各別にあらず。朱子は時の弊をとむべきがために、理を究め惑を辨るの上に重し。自反愼獨の功なきにあらず。王子も時の弊によつて、自反愼獨の功に重し。究理の學なきにあらず。愚拙自反愼獨の功の內に向て受用となる事は、陽明の眞知の發起に取、惑を辨るの事は、朱子究理の學により侍り。朱王の世、學者のまどひ異なり。地をかへば同じかるべし。究理とて事々物々の理と空にいひては、人のうたがひあり。たゞ學者の心のまどひある所の事物によつて其理を究るなり。されば是は初學の時の事也。大意心に知得すれば、いまだ不辨不知の物。千万の事前に來る

きかず。世間の學者目をさましたりといへども、いまだ德を好む人まれなり。粗學の自滿つひえは一二にあらず。

一。學友問。格物致知の心法は、古昔の經にもなく、孔聖の語にも見へ侍らず。子思初て發明し給ひたるか。　答云。易の六十四卦、其位に應じて格知の心法あらずといふことなし。易簡明白に、いづれへも通へる樣に、初てかゝげ出し給ひしことは、堯の舜に傳たまふ執中の心法なり。孔子の顏子に傳たまふ、非禮視聽言動することなかれと。これ皆格物致知の義なり。曾子の一貫を忠恕とやはらげ給ふごとく、子思又孔曾の傳の心を述て經一章とし給ふ時、格物致知といへり。　問。視聽言動を云て、肝要の思を殘し給ふことはいかゞ。　答云。四時といひて土用をいはず。元亨利貞と云て誠をいはず。仁義禮智と云て。信をいはず。四に應じてはなれざるものは、いはずして其內にあり。視聽言動の四のもの、思を主とせずといふことなし。其上顏子には、思の格は不ㇾ用とあり。中人以下の學は　善を思ひ善を行て惡を思ひ惡をなすにかふるなり。心思躬行共に善のみにして惡なきを善人といふ。凡俗を出るの初也。是より信美大聖神にすゝむべし。顏子はすでに大人也。惡念の靈臺に往來せざるのみならず、善念も又往來せず。何の思の格あらんや。しかれども、三月仁にたがはざるの語あり。春夏秋冬みな三月にして相易るものなれば、三月といへば一年中の事也。年月日時をへて、終に仁にたがふことなし。然れども三月違はずといふものは、たまさかに暫の間善念のきざしあることあり。おもふこともなくする事もなく、寂然不動にして

俗と成て、人情の安ずる所なり。君子たるものは人の非をそしらず。天を以てひとり立べし。天下の風俗と習とは、下にあるものゝ任にあらず。たとひ明君上に出給ふとも、俄に徳を立給ふべからず。徳化のひろまるにしたがつて、漸を以てうつりかはるべし。　問。子路孔子の命によつて、射をみるものを退けられし時も、人の後たる者を恥しめられしとは如何。　云。これ聖賢のしはざにあらじ。孟子云。仲尼は甚しき事をしたまはざる人なりと。道理は道理にても、大場にて人に恥辱をあたふる樣なる不仁なるとは、今日本にてだに少し。心あるものはせず。いはんや孔門にをゐてをや。家語には後人の附會のとあり。こと〴〵く信ずべからず。常世道だてする學者は、凡情の勝心をもまぬかれず。利慾の根をだにたゝず。不仁を以て力量にまがひ、古人の跡を見て變通をしらず。得かたには禮法を守り、又得かたには國風をそむく。常人の君子の大義をとらざる事をそしり、凡女にも貞女の節を守らしめんとす。羊に虎の皮をきするを以て、道をおこさんとす。是に遠き時はおそれ、是にちかき時はあなどる。大道の罪人なり。たとひ虎の質ありとも、羊の皮を着て群をみだるべからず。たとひ光あり共、やはらげて塵に同じかるべし。是に遠ければ鄙とあり。これに近ければ恥るとあり。君子の學は忠信を主とす。文は時に中すべし。

一。朋友問云。江西の學によつて天下皆道の行はるといふ事をしれり。儒佛ともに目を付かへたるは、大なる功也。　答云。尤益はあれども、弊も又あり。しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで、管見を是とし、異見を立て聖學といひ、愚人をみちびく者出來ぬ。江西以前には此弊を

日本倫理彙編

え、家内のものどもを流涙させんも、不便なる事也。是につきても、世中の人學問をきらへるものの多し。聖人の法といへども、心においてしのびざるが如し。　答云。大君の國郡を封じ給ふも同じ理也。一人を以て國郡を治めしむ。國郡を以て一人にあたへ、其身をたのしましむるにあらず。先君の其國に養ひ置たるものは、一人として退去ことあたはず。用に立も不レ立も、をしなべて治養ふは、國郡の主の任なり。國郡主なければ、相亂て生をたもたざるが故なり。今家も又しかり。子孫なくして絶たるは、誰にても兄弟多きものゝいまだ家なく、其役義をつとむべきものを撰て位祿をあたへ、其家内の男女をやしなはしむべし。諸侯と成て其國の位祿をうくれば、其國の老役を養ふがごとし。其者同姓ならば、すぐに祭祀をつぐべし。他姓ならば、往々同姓を求て、我後の役者とせん。同姓其器なくば、我ちからを以て祭事をたゝざるはかりことをなすべし。源平藤橘等の姓はひろし。委しくたづねば、同姓のなきことあらじ。同姓を養子とするは古の法なり。周人の百世といへども婚姻不通の法も、同姓の親みをひろめて人の後をたゝじと也。もし同姓なくば、他姓といふとも可也。人は皆天地の孫なり。同姓にあらざるはなし。しばらく末をわかつものは、人倫を明かにし、禮を尊て、禽獸をさること遠からしめんとなり。其上大節を守るは君子の義なり。小節をとるは小人の事也。小人は小節を取て禽獸に遠かり、君子は大節を守て小人にことなり、政は小人の人情風俗を本とす。俄にして人情を憂しむるときは、大道とげず。故に聖人も、三年にして成ことあらん、世にして仁あらんとのたまへり。養子入聟等は、今日本の風

みわりて、聖學起らず。朱王の本心は、聖人の道をあらはさむとせり。しかるにかへりて聖人の道を塞ぐ也。朱王の本心をたがへて、朱王をかなしましむるは、贔屓だをしにあらずや。若兩子の本心にかなひて兩子をひかば、古今聖經を註して、人をして文義に取入しむるは、朱子にしくはなし。それより後は後學の力にも及びなん。聖語を得ばやむべし。聖語といへども我心の註なり。心を得ばやむべし。文武の二道を兼て其功をあらはし、且學者の心を内にむけたるは、王子にしくはなし。其内に向たる心にて、聖經を見るときは、其理も其語も昔の物なれ共我ものとなる事各別也。王子の聖學に益有所也。近年學は長袖のものとして、武士の業なることをしらざるもの多し。陽明によつて、學は文武の德業をなすことを知べし。此二の益を得ば止べし。二子の學共に、聖學に助有事少からず。しかれども、ひとへに取用るときは又害有。大賢以下の學は熟せざる所有。其所には弊生ずるもの也。然れ共、二子の本心を學ぶものは、益のみ取て弊をなさず。問。聖人に至らざる前は、鏡とする聖經なくてはかなふべからず。心を得てやむとは、すこし心におちゐるがごとし。云。しかり。しばらく本に力をつけんがためにいへり。朱註によつて聖語のあらましを得て後、多く聖語にわたりぬれば、經をもつて經を解て、聖人の語意に通ずべし。聖人の語には、合點の味ひ窮なし。直に聖人に對したてまつるがごとき事有。心を得て後、いよ／＼懇切なることをおぼえぬべし。

一心友問。當世學者の論に、義子といふことはなき義也といへり。しかればとて、たちまち家た

書にしくはなし。若其人愚が和解の書を信じてこゝに止り、最負して、他の學者をそしりなどしたまはば、愚が本心にあらず。愚をたをしぬる人なり。其人自己の惑を解て一人悦ぶにあらず、自己の放心をおさめて、獨知を愼むにあらずして、たゞ我心にかなひたるものの最負をするなり。其人がら本の凡心ならば、愚が學術世におゐて何の益かあらん。道は聖人の大道なるを、かへりて一の流を結び、一の爭の端を立て、愚をして天下の罪人となせり。最負だをしこれより大なるはあらじ。若愚が本心を最負せば、愚が書を持して、愚がいふところの惑有人あらば解べし。惑なくばやむべし。愚が說を以て、其放心をおさむべき人ならば敎べし。其人にあらずばやむべし。其人外にむきたる心を内にせば、はやく愚が說を棄て、聖經にもとづかしむべし。世中に愚が名の亡て跡なからん事は、愚が本心也。悅びこれに過べからず。愚が本心を悅ばしめてこそ、最負するの實ならめ。愚が本心を憂しめて最負とおもはんは、毒魚の肉を以て親を養ふものゝごとし。それ天下に名のあらはれて益有べきものは、孝子忠臣貞女友弟眞實の人也。德大なるべきものは聖人の業也。聖人の常道ならずして別に道をたて敎をなして、人をそこなはざるものはあらじ。愚が淺學のみにあらず。古の大儒といへどもしかり。朱學の最負をするものは晦菴をたをし、王學のひいきをするものは陽明をたをす。朱子王子共に名をこのむの中人にあらず。德をおもふの君子也。たゞ時の弊を除きて聖人の道を明かにせんと思へり。しかるに朱學といひて一流とし、王學といひて一流とす。その學者をみれば、德を好まず業をなさず。たゞ同異の爭の

遣はして、教化せしめたり。

一。問。諸國にて改易をやめ左遷遠流せば、つかはすべき島なからむか。　云。左遷は島人つかはすにあらず。位をおとし祿を減じて下し使ふなり。都の老中は遠國の代官となり、其次の歷々は代官の下代と成て、くだるとを左遷といへり。遠流の罪はまれなり。大惡人にて、此國に置ては國人の害に成ものなれば、八條島鬼界島又は朝鮮琉球などへつかはすを、放とも流ともいへり。問。歷々の武士がさやうに下りたる役人となりては、居られまじきか。　云。天下なべて其格式なれば、不ㇾ苦もの也。　問。國郡の主、子孫にも同姓にも、跡の立べきもののなき時はいかゞ。云。むかしは其家中の諸士を動かさず、小身の者に才知あり、其國郡を治べき人をつかはして、君とす。君と成人一人行て、其家頼を家頼としたり。故に流浪人といふものなし。國々にて一家の主絕て、家人のゆき方なきも又しかり。

一。舊友問。世に贔負だをしといふ事有。大切なる人の事をばひいきせずしても不ㇾ叶儀也。されどやゝもすれば、其人の害になる事有。しからば贔負にも道侍るや。　云。世間に贔負だをしといへるは、甚しき事のみをいへり。惣じて贔負して人をたをさぬ者は見侍らず。若贔負せんとならば、其人の本心にかなふやうにすべき事也。爰に愚に道を聞人あらん。愚がいふ所は、其人の惑をとき、過不及を格し、心術を自反せしめて、聖人の道の高きに登るべき楷梯の一級とせんとす。その惑とけ、其過不及ひとしく、其放心をおさめばやむべし。始終の鏡とすべきは、孝經四

其君一人は亡べき罪あれ共、其家中流浪人と成て、諸國に離散す。家内妻子共に數千數万人に及べり。飢饉の年に逢てはうへ死す。其歎き天地神明を感激す。其二にて風俗あしくなれり。畢竟罪一人にかゝりて長久ならず。國郡の君罪なしといへども、子孫なければ、同姓に及ばずして亡ぶ。是又家中の離散は同じ。　或問。國郡の主亡れば、又取立の國郡の主ありて、牢人を扶持するにあらずや。　云。尤抱るといへども、十が一にも不レ足。千人の牢人百人ある時は、皆も有付たるやうにいへり。立身の大身、其家の普代の者、段々に立身す。百石は一二千石にもなり、千石は七八千石にも成、切米取は五百石三百石に成、歩士は中小性或は小知行に成、中間小者も歩士と成ぬ。知行取もむかしをたづぬれば、足輕等の上り多し。如レ此賤しきもの、思はず立身すれば、士の風俗あしく、いやしきしはざ流行す。是天下の風俗のみだるゝ第一なり。本よりの歴々は、落ぶれて賤男賤女と成ぬ。ならはぬ所作なれば、賤事にたふる事あたはず。後々は牢人の果とも見えず。丸腰破れ衣着て乞食に同じ。飢饉の度々に數万の餓死あるは、過半此牢人の果なり。　問。立身の大名ならでも、國々に牢人を抱らるゝにあらずや。　云。もつとも他家のはてたる牢人かゝえらるゝといへ共、其家中より年々に牢人する者、抱ふるよりも多し。　問。あしきものは改易し、扶持はなさでも不レ叶事也。いにしへとても牢人は有べきか。　又大名もはてずして不レ叶あり。家中不便と思ひながらも、牢人せで不レ叶事歟。　言。いにしへとても左遷の法有て、改易なし、大身は無道なれば、其身一人罪して、子孫を立置、うしろみのやうなる人を

におもむく。故に士いよ〳〵貧乏し、民谷遊民となれり。驕奢の風俗によつて、大身小身共に用たらず。何を以てか下をめぐまんや。たとひ今の民に年貢をかろくしてほどこすとも、民のにぎはひとも成べからず。その故は、教なきによりて、士は富てはいよ〳〵をごりて、無禮不仁なり。民は博奕などのあしき遊びを好て、一年の妻子の養をも、一夜にむなしくす。これ士民共に教なければ也。問。天下長久の第一たる儉の法も、時にあはず。何を以てか今の世の政とせんや。云。士君子たる人道を學時は、仁を好て人民を愛す。仁あれば無欲なり。無欲なれば自然に儉なり。仁愛無欲より出たる儉ならでは、上下の爲にならず。法に出る時は必害あり。不ㇾ出にはをとれり。問。上たる人仁愛無欲の質あり、儉約の法を示し給へども、人民の爲よからざる者は何ぞや。云。道學の教あまねからざれば、人したがはず。人の心服せざるは、善なれども徒善也。故に政をするに不ㇾ足。生付吝嗇なるものは、儉約を得かたに取なして、いよ〳〵いやしくをごれるものは是を見て、儉約は吝なりとあなどり、うへにはしたがふやうにして、實はしたがはざるをよしとす。終に行はれざるところなり。

一。心友問ㇾ興ㇾ滅國ㇾ繼ㇾ絕世ㇾ之事ㇾ。答曰。民に功德ある人の、子孫おとろへて國を失ひたるを封じて祭ををこさしめ、子孫なきは其同姓をたづねて、祭を奉ぜしむ。德ありてかくれたる者を擧用る時はゆたか也。是皆天下の人心の歸する所なり。いにしへ農と兵とはなれざる時だに如ㇾ此。いはむや後世兵農をはなれてよりは、國を亡し世を絕に、天下の大凶事二あり。其一は、

るべきのみ。士本をつとめば、商の姦利やむべし。本立て姦利やみ、德政にはあらで、天下の借銀なくなる事有べし。如ㇾ此して後、武士手つかへなく、民ゆたかに、工商利を得る政道あるべし。　問。其政はいかやう成事にておはしますや。　云。予はたゞ古今の理をいふのみ。時に當るの政は知べからず。たとひ知侍るとも、其任なきものはいふべきにあらず。

一。學士あり。云。下の物を多取て、上に達するを損とするは、尤の儀なり。如ㇾ此にして國亡び天下亂ざる事なければなり。上の物を散じて下をにぎはすを益とするは、國家天下長久なる故なり。今侯卿大夫士驕奢にして諸民困窮するは損の極なり。物きはまりては必變ぜんとす。道を行て變ぜざれば、天道より逆を以て變ずる事、古今の常なり。こゝろみに上の米穀を散じて民をにぎはさんとすれば、民多して穀不ㇾ足。金銀をほどこさんとすれば、金銀限り有て民かぎりなし。すくふべき分別なし。　云。下を損する者は奢なり。をごらざれば用すくなし。用すくなければ、をのづから民に取事うすし。故に云二簋可ㇾ用享と。それ祭祀は禮の大なる者なり。然るに二簋を用て享祀するものは、文の簡禮の儉なり。たゞ誠敬のみ至れり。他の事の儉知ぬべし。これほどこさずして下をにぎはし、散ぜずして天下にみつるの道なり。　問。近年は人の上たる人は儉約をなし給へども、士の貧乏いよ〳〵きはまり、民なを〳〵困窮する事は何ぞや。　云。人心の奢やまざれば也。心の奢をやめずして事を儉にせんとする時は、東に減して西に生ぜんとす。滅する處には、人所有を空くし庶人職を失ふ。生ずる所には人なき物を求め、民本を捨て末

べし。今の勢にて時を以て山林に入の法をこはば、天下ます〳〵難儀に及べし。今日の食だにやう〳〵とかせぎ出し明日のたくはへなきもの多し。食なくいとまなくば、何としてか秋冬の内に明年春夏の薪を伐をくべきや。薪材木をきりて米にかへ、其日〳〵に妻子を養ふもののみなり。今も自然に立山ありて、草木を伐事を制禁するも、うり木こそは得させざれども、面々に朝夕の薪はぬすみきらずといふことなし。今明日の食だにもとぼしきものども、何としてか薪をかひてたくべきや。明日首をきらるゝまでも、今日はぬすまでかなはず。かゝる時節に山林の制禁おほくば、罪人限なく出來ぬべし。武士町人等も、薪いよ〳〵不自由に成て、朝夕のけぶりをあぐる事もならじ。何程よき事にても、聖人の法にても、時所位にあはざる事はあしく。山川までもなく、人倫たちまち迷惑に及べし。

問。近年米の高直にて、迷惑するもの多し。下直に成べき仕置もおはしまさんか。

云。米俄に下直にならば、天下貴賤ともに大に難義に及べし。いかんとなれば、今大名小名共に、武士たるもの借銀多からざる者はまれなり。米の高直なる時かりたる銀を、其下直に成てかへさば、一倍の利にもあたるべし。年貢の米を殘らずうり、衣食たらずして年をふる共、ふゆる事なきもの有べし。公役といふ事あれば、左樣にもならず。とにもかくにも、せんかたなきものは武士ならん。然らば民に取より外の事あらじ。不便と思ふとも、手前の不足なるには、宥めもすくひも成べからず。士民は天下の本なり。其本困窮きはまらば亂に及ぶべし。商人出家など安樂をねがふとも得べからず。又其高直にても世中立へからず。其本にかへ

力餘あれば五穀を生ずる事限りなし。女工ゆるやかにして精ければ、天下の婦人よく女事を勤めて、布綿餘あり。木こり杣人の山林に入事時をたがへざる時は、草木蕃し。只無用の屋作をせず、無用の器作らざる時は、山しげり川深く成て、民用とぼしからず。夫金銀珠玉錢物を用る事多して、五穀すくなき時は、人民多欲なり。善人をたからとせずして、器物をたからとする時は、驕奢なり。この故に善政は粟を以て万の物にかゆる也。今の俗粟の字をあやまれり。俗に畠に作るあはの字は粱也。粟の字はもみの事也。米となしてはそこね易し。虫になりてすたり多故に、いにしへはもみにて納め、万の賣買ももみにてせしなり。もみはかさ多て、澤山につみかくされぬ物なる故に、をのづから人心の欲すくなし。萬の物をなして、もみにかへて食する者も、功すくなくして食たりぬ。故に儉約のしめしなけれども、をのづから驕奢にいたらず。世間に粟みち／＼て澤山なれば、大方の不作にも困窮に及ばず。五穀水火のごとく多時は、民に不仁の者すくなし。盜をなす事なし。金銀は五穀を助くるのみ。もみつかひやみて、金銀錢を以て萬のうりかひをなす時は、おさめたくはへてひろく用をなし、よき物なれば制すれ共をごり生ず。諸職みな美をつくさん事を欲す。故に商人富に過て士まづし。士貧乏なれば民に取事ます／＼多し。民と士と困窮する時は、商ひすくなく成行て、多の商人職人うへに及ぬ。あつまる處は天下に數すくなき富人の手のみなり。

問。時を以て山林に入の政は、今も行はれずして不レ叶事也。山林つき川澤あさく成ては、あしき事多と見へ侍り。

云。其本あり。其勢出來て後はをこなはる

勇氣有者也。かくのごとき人といへども、父母先祖より此かた、數百千歲うすく習來たる情なり。其上時の運によつて氣躰よはし。上世の格法には叶がたし。格法に當らざる一品を以大德を撰べきや。或は行爲の嗚に得たるがごとき者を見て賢とし、或は名聞深して格法を行ふ者を信じて大事をまかせば、亂の本成べし。古の人は、情あつく氣躰つよし。故に欲うすく誠あつき人は、實を行ふ事易し。誠うすく欲あつきものは、行ふ事不ㇾ能。此故に此言あり。古今人情時變の同じからざる也。

一。學友鳶飛魚躍の意を問　云。道は見るべからず。見るべきものは情のみ。風雷雨露相助け、飛潛動植相應ずるがごとき是なり。學術極處に至る時は、生々してやまず。便是變化の門なりといへり。其上下の上は道をさしていへり。下は器なり。形を以て見る時は、鳶は淵に入事不ㇾ能。魚は天にのぼる事不ㇾ叶。是天地の大なるも、うらむる所あるなり。道を以て見る時は、魚も天に至り、鳶も淵に躍べし。夫婦の愚も共に知べき所也。至理言外に明也。活發々地なり。大鏡をかけてこれをうつせり。

一。心友問。國を治の法、粟ある時はこれを富しめ、富ときは是を敎ときゝ侍り。今時すでに粟あれども、民は衣食たらず士は貧困也。此故に士はむさぼり、民は盜す。敎べき事あたはず。今の時、士を富しめ民を足しめん事、いかなる政かおはしまさんや。　云。財用の源を開き、其人事を計出る事を節するに有。何をか財の源を開くと云。農に利ある時は本をつとむる者粟多也。民

集義外書卷之八

脱論五

一。心友問。養レ生は大事に當るに不レ足。死をおくりて大事に當るといへり。葬をあつくし喪に居は、君子の大義なり。しかれば狂見の大節なるは、たのむべからず。うすきのみにて侍るを、何ぞ帝堯は許由をめし、光武は子陵をむかへて、大事を共にせむとし給ふや。　云。養生は親目前に在す。人たる者尊敬せずといふ事なし。死をおくるより以後は、親不レ在。道の誠を盡すのみ。誠にあらざれば、大事をたのむにたらず。今の人情うすく成て。誠すくなきがごとし。形躰よはく、氣力乏し。且世事しげし。これにかさぬるに時處位に不レ叶の格法を以てせば、誠いよ〳〵うすく成べし。かくのごときの誠を行ひ、時を不レ知者、大事に當るべきや。今の終を愼といふ者は、多は名聲を本とす。心には利益のみあれども、察せず。名聞は誠なく、利害は義なし。誠なく義なきの實を不レ知して、喪の格法を行ふを見て、死ををくりて大事に當ると思はゞ、大なるあやまり也。名利なくして情あつく、天性の誠より終を愼む人あらば、何かあるべき。今の世の君子なるべし。もし有とも、質の美ならん。質の美は其一事のみなるものなり。孟宗の至孝なるも、孝子と云ふべきのみ。賢人君子といふべからず。國家天下の用には當るべからず。今の大事に當るべき人はしからず。義理あつく利害うすく、眞實を好て名聞すくなく、仁愛にして

なる故は仁なり。仁者は天地我心中にあり。万物己に備れり。故に幽明死生へだてなし。富貴貧賤好悪なし。安楽患難したがひて行ひ、至公にして私心なく、至明にして私照なし。浩浩の氣天地の間にふさがり、靜なる時は虚にして明かなり。動ときは直にして理に當る。知至りて無事なる處を行。其氣象を見るに、篤恭にして天下平か也。

集義外書卷之七 終

を愼むものを君子といふ。愼獨は敬の至れる者か。愼獨といふも、人の見聞せざる處とのみ見る時は、心かたよる所あり。たゞ己ひとり知所を愼ときは、心よる所なくしてもるゝ事なし。問。獨知を愼事をわすれじとするも、又偏倚する事をまぬがれざらんか。　云。必獨知を愼の志、天を以て立の主意定る時は、常は心なしといへども、事に當ては必愼み生ず。　問。獨知にしたがふとも、是とする所を行ひ、非とする事を去らでは、心よからじ。則欺也。事々したがふやうには、初學の者いかゞ及侍るべきや。たとへば弓をけいこするがごとし。初よりなをし所を一度にいひては、なをしにしばられて、いる事あたけず。故によく敎るものは、大法のかねばかりなをして、少づゝの事はじねんに、ひとつ〳〵なをせば、勞せずして射手となりぬ。心術もかくのごときことありや。　云。しかり。去ながら、貴殿の獨知の是とし非とするといへる處は、眞知の識にあらざる事多からん。格法俗習をまじゆるなるべし。程子は敬より入、伯夷は淸より入、柳下惠は和より入る。和は不恭にして敬あらざるがごとし。然れ共賢たる事は一なり。賢の賢たる處は、凡情きよく盡て、同じき所あればなり。柳下惠は外不恭にして、敬なきがごとくなれ共、心にをひて思ひのよこしまなき處は、後の格法敬學の人の及べきにあらず。仁義の眞を得たるとは同じ。

一。心友問。いかなれば篤恭にして天下平かなるや。　云。是盛德の印をいへり。黃帝堯舜衣裳をたれて天下治る。衣裳をたれていかゞ治るべきや。衣裳をたれて治る故あり。篤恭にして天下平

り。

一。心友問。國家に益あるよき事としれ共、貴老の言に出たるといへば不レ用候。不レ被レ仰しては知べきやうもなし。仰らるれば不レ用。此間御了簡あるべき事と存侍り。時に相應の善言は、もらされぬがよく侍るべきなり。　云。當世は才知のあらそひそねみなどにて、善なれども、人の言を用まじき凡情あり。後世はそねまるゝ人事人共になく成て、公論に成侍りぬ。其時は古人もかくいひし、何某もかく論ぜしなどゝて、證據にも成ものなり。今の人後の人、かはらぬ事にても、生るにはにくみあり。死し去人にはにくみなきゆへなり。なくてぞ人はといひし、人情の常なり。當世とても、志同じく信ずる人はしたがひ、志たがひ信ぜざる人は不レ用。世の治亂存亡は命なり。才覺の及所にあらず。人生此德あれば此病あり。衆の病をすて、德をあつむる者は久し。衆の德をすて、病をあつむるものは短し。いにしへの君子といへども、病をあげそしりをあつむる時は、流人となすの罪有。予多病なり。又天のあたふる靈あり。故に其靈をのぶるのみ。用捨はあづからず。

一。心友問。敬は百邪に勝と云共、常に敬を心とする時は、心氣かたよりて、空々如たるの本體にあらざるがごとし。愼獨も似たり。　云。凡夫より聖人に至るの眞志實學は、たゞ愼獨の工夫にあり。夫敬は心の德なり。万物皆敬有て、身を全する事を得たり。敬なき時は身をやぶる。故に見聞の及所にては、君子小人共に敬あり。見聞の不レ及所にをひて、自欺ものを小人といひ、獨

と承はれば、氣味あしく侍るほどに、通路をやめ侍るべきか。　云。是又義のとりやうあしきなり。貴殿學問し給はざりし以前より、天性固有し給へる義心を、學問によりて亡し給はんは、甚不可也。君に事てかくす事なきとは、かげひなたをせざる儀なり。禮儀人情にて君前を忍ぶ事は、なくて不ㇾ叶事なり。其牢人君前をはゞかりかくれて居られれば、貴殿も忍びてをとづれ給ふこと、則主君への禮儀にして、牢人の爲也。かくすにはあらず。夫恩を見て恩をしらざるは木石に同じといへり。木石は無心なれば罪なし。人として恩を不ㇾ知は不義なり。不義の人は、君に事ても不忠なるべし。主人明かならば、貴殿の忍びてし給ふ音信を聞給はゞ、親の恩を子にむくゆるは、遠きを忘ず、義理の心ふかきものなり、必主君に忠有べし、おちめをすてず、たのもしき士也と思召て、大に感悅し給ふべし。恩をわすれ、時の勢につき、おちめを捨てかへりみ給はずば、主人聞給ひて、ふたのもしなる者也、主君の恩をもしらじ、主人の仕合よき時は、進て忠功あり共、まけ軍か、おちめに成なば、敵にも付て、利を求むべきものなりと見かぎり給ふべし。仁義は人の本なり。學の淵源也。然るに今の學者道を行といひ、聖賢を期するといふ者も、義なき所あり。世俗文盲の中にも義ある人多し。故に學者の流にてこそあるらんと、世にうたがひ思へり。僧の忍辱に似たるは、なりがたき事といへ共、たのもしき事はなし。實はあなどる心あり。彼は世をすて、かみをそり、男をやめて、辱を受るを以て修行とすれば、各別の事也。それだに天性の義心亡びざれば、恥を知て男氣ある僧多し。とりかへたらばよからましと思ふ者あ

ふべからず。

一。心友問。家中作法見だりがはしく侍る程に、法度を出さではなるまじきと申人侍り。法度は大躰いかやうなるがよく侍るや。　云。法度は小人の心を戒め、正人の心悅をよしとす。たとへば夏の雷雨のごとし。正人は涼風を得て喜悅し、惡人は雷聲を聞て恐るゝがごとし。今時の法度は、多は正人困窮して、小人こりず。小人の情は、法度ありとても、事に好む事は堪忍せざるものなり。かくし忍びても、とくおかし侍り。人を盡して刑罰もしがたく、小事に人を失ふ事もあしければ、しらぬふりにてをくべきより外の事なし。やぶれ常と成て、三日法度などいひて、後にはわり共思はず。正人は、これは古今人情の常なれば、くるしからぬ事也と思ひ、書に記し、後世に傳へても、恥かしからぬ事としれども、法度なればそむく事あたはず。度々理りもいはれず。無二是非一ひそまり居れば、心氣屈して病者となりぬ。自然の時も、躰氣よはくば、思ふ樣なる心がけもかなはじ。風雨寒暑に當られて、敵にあはずして死べし。然ば今の法度は、詮なき事のみならず、正人を亡すなかだちとなり侍ぬ。大方事はよしといふも、人情にかなはざれば、益なくして損あり。不レ出にはをとれり。

一。心友問。下拙が傍輩、主君の氣にちがひ、牢人いたし、かくれ居侍り。親類知音も、主人の前を恐れて、おとづれ侍らず。下拙のみしのびて通路いたし候。此者の親、下拙が幼少の時より心入にて、引まはしに預り候し、其報恩の爲と存ての儀なり。然れども、君に事てはかくす事なし

がら尊き人は知がたし。下になれたれ共平人は知ず。ひとり其眞を知ものは、下に居の賢なり。然れ共、此賢者は小人のあだとする物なれば、隔てられて達せず。上の令命の下にたがふのそしりは、時の權威に恐ていふものなしといへども、其實は後世にかくれなし。他國本朝ともに前鑑明か也。これを全からん事を求るのそしりともいふべし。聖賢の君は、其人を師として下問に恥給はず。己は愚に人は知ありとす。國の知を用ひ、天下の才をあつめて、治平の功をなせり。其功德はたゞ賢君聖主の一人の身に歸す。國家天下是をわけんといふ者なし。是君の德なり、是臣の功なりといへり。堯舜禹の君臣たりしことしかり。當時悅び後世望めり。賢君眞相は、知をかくし功をゆづり名勢をさくるといへども、令名万歲にながれ、德化四海に及べり。本より君子は名を求めざれども、かくのごときの大名あり。これも又はからざるのほまれならんか。臨六五云。知臨大君之宜吉。　程子云。夫以二一人之身一。臨レ乎二天下之廣一。若區々自任。豈能周レ於二万事一。故自任二其知一者。適足レ爲二不知一。唯能取二天下之善一。任二天下之聰明一。則无レ所レ不レ周。是不三自任二其知一。則其知大矣。予たゞふるき奉行の功者なる者にきき、百姓の老人にならへるのみ。其始は見たる事もなければ、知べき樣なし。　問。しからば舊き奉行、貴老より先になさずして、貴老を待て初て出來たる事は何ぞや。　云。是をゆるせる人なかりし故なり。堯舜の知も物にあまねからず。先つとむべき事を知て、急にし給ひぬ。堯舜の時にのみ、善人多生れたるにあらず。善をゆるし給ひし故に、善人多かりしなり。今も善をゆるす人あらば、天下の善人才能あげてかぞ

すべし。君子は業を始め統をたれて、つがしむべき事をす。人の父母たる仁君おはしまさば、大なる催しありて後行はるべし。むかし一日史書を見て此理をいへり。數歳を經て當れる事あり。此後も又しかなんか。

一。心友問。貴老の被仰付たる池堤は、他の害なくして、後にまで堅固なりと申侍。或は川堤をなして他を損し、或は池の堤破損數ヶ度に及ぶ者は何ぞや。　云。易云。賢人在下位无輔。是以動而有悔也。といへり。此賢人は才德兼備の君子のみにあらず。人皆天性あり。人心の靈をの〳〵さとき所あり。おつめとらば賢人の知あらんか。夫山谷の深長なるは、大雨の時に水の出來る勢は、所に住者よくしれり。川流大水の時の勢も、水邊の老民ならでは委はしらず。或は池の堤或は川堤をせんと思ふ時、其所に住なれたる老人又は才覺ある者を呼て、其情を盡させて聞、又傍示を立て相談し、物のあるべく事のなるべきやうにする時は、他の害なくして堅固なり。是以動而無悔也。如此の事だに、事に得たるの才物に馴たるの情を盡させきかざる時は、なしたる事あしく成てくゆる事あり。況や國家の政道にをいてをや。故に昔大舜は問ことを好給て、才知人情の下にうづもれとゞこほる事なかりき。後世の人は下問を恥とす。故に賢才は野にかくれて、邪佞朝に横行せり。天下の大事多事なるも、知謀の出る處は三公九卿の外に出ず。一國のひろきも、卿太夫奉行人の外に出ず。此故に政令いでゝ人情にもとり、時變にたがひ、事よろしきにかなはず。たま〳〵問尋らるゝも其人にあらず。人情時變は賢知ありといへども、生な

は神氣不ㇾ及。播州は淡路島より起る夕立を以養ひ、備州は小豆島より雨ふれり。然に近年數十年は、淡路小豆島より夕立をこる事まれなれば、毎度日でりにあひて、田作いたみ畠物かれ失ぬ。此ついへ民間のいたみ、數十年の積り、幾千万といふ事なし。二島きりあらして、神氣うすければ、雷風雲雨を起すべきちからなし。むかしより此理を知て、二島あらさゞりせば、備前播州の數十年の五穀の生、幾万億といふ事あらじ。其上民養生にくるしまず。甚暑に凉風を得て、心氣涼しく病氣いゆべし。これほどこさずしてすくふにあらずや。二島のあれたるついえ、五穀の減少夥し。まして日本國中に如ㇾ此所多ければ、その減少あげてかぞえがたし。いにしへより美質の君世々に出給ふといへども、此理を告申者なければ、知給ふべき樣なし。　問。山のあれたる事は、何國も同じ事なれば、京都近江などは、六七月の日でりにも、夕立いたし侍るは何ぞや。　云。湖の神氣つよきが故に、江州は夕立をこれり。京も湖水に近し。其上北につゞきて、深山多。其外きりあらすといへども、高山名嶺かさなりたれば、靈氣あり。淡路島のごときは、草木しげゝれば。神氣もこもり、草木なければ神氣もうすし。又今時諸國共に、松山を好めり。そだちやすきが故也。松山は多しげりても、神氣のたすけにはなりがたし。却て神氣を損するとあり。松山には下草生ぜず。水かれて出ず。松にかゝりたる雨露田畠に入て害となれり。松は浦濱などに相應の木也。山は雜木にしくはなし。　問。山を立るは仁政の本なれば、今以て急におりたき政なり。　云。よきとて是のみ行はれば、ゆく〳〵よき所までゆかず。只今人民大に迷惑

至て、亂世となる物なり。今の武士民につよく取事を好て、やはらか成をそしり、民の剝せらるゝ次には己が身に及ぶ事を不レ知。民の剝は世間の咎によつて取からされ、公侯大夫士の剝は、國主郡主より初て武士たる者すりきりて行つまる也。かゝれば運氣變じ天命あらたまるものなり。これ君の剝なり。君の無道にして世を失ふは各別也。惡逆なくて失ふ者あり。其知表は山にあらはる。山は國に有て第一高きもの也。君の象なり。山の木草つきて、土砂の川谷に落るは、上たる人の富貴を失ひて下にくだるがごとし。中夏にても、渭洛つきて夏亡といへり。玉をかしぎ桂をたくと、詩にも作れり。玉をかしぐとは、米の高直なるをいふ。桂をたくとは、薪の高直なる事なり。山のつきたるゆへ也。渭洛のつきたることは、水上の山の草木つきて神氣うすく、流水次第にほそくなり、大雨ごとに土砂を落し入て、川をうづみ、終には山もくづれて、川源をとゞめたる也。近年諸國にをいて山のくづるゝも又如レ此。故にいにしへは諸侯に地をたまふと云共、名山大澤は封ぜず。有道の賢臣ありて、諸國の山川をつかさどれり。天下存亡の源を明かにし、世の長久を持し、民生を養ひ、賢才を起し、ほどこさずしてすくふの仁政をなせり。春雨ふりて水四澤にあつまり、初夏は純陽の月なれば、日てらして麥作みのり、五月は苗代水の雨をくだせり。是天氣のぼり地氣くだりて、氣化の雨なり。六七月は、天地の氣不レ交氣化の雨ふらざるを常とす。此二月は夕立を以田畠を養ひ、草木をめぐむ。夕立のいたる時、神氣限あり。山澤氣を通じ雷風相助くる事、神靈の行程あり。播州備州の海邊に付たる數郡のごとき、北の夕立

日本倫理彙編

多し。故に京都並に國城下の町屋、次第にひろごりて、商賈牛馬道路にたへず。如ㇾ斯ならば、商賈月々に富で、武士日々に貧乏ならん。武士貧乏ならば、百姓いよ〳〵困窮せん。百姓くるしまば、遊民ます〳〵多かるべし。人は次第に多なりて、奉公人はすくなき事もあらん。古人の言。貧生ㇾ富、弱生ㇾ彊、亂生ㇾ化、危生ㇾ安と。言心は、人々奉祿は次第にまして、富ども奢て節なければ、國貧し。勢强にして人に驕ものは必弱なり。國政を取て德なきものは必亂る。安平を持て幾微を不ㇾ愼者は必危しと也。君の過は未發の時にいさむべし。すでに發し、事行はれ、盛なる欲に敵するがごとくなる時は、功ならず。世間の惡も、其本を知て、幾微の間に止べし。すでに國に惡人多く、欲さかんにして、加るに困窮を以する時は、刑罰を嚴にすといふ共、甲斐なかるべし。却て彼が勢をますべきのみ。其やぶれ甚しくば、功なかるべし。易に云。童牛之梏元吉なり。いふ心は、人の欲は初に止むる時は易しと也。今世中の人の、欲すでに盛なるに近し。少時過て成がたしといへ共、いまだ止べきの道あり。是を過ば、悔といふ共甲斐有べからず。剝の初は下よりす。終に盡るに至ことほどなし。國の剝は民より初る。民の困窮するは、これ國の剝する始也。易云。山附ㇾ於ㇾ地剝。上以厚。下安定。是剝を止るの爲なり。君の民に附は山の地に附がごとし。地厚ければ山靜にして安し。地うすくしてうごけば、山もしたがつてくづる。夫剝は君子退き小人進の義なり。小人すゝむ時は、日々驕奢也。此故に世中奢時は民下に剝せらる。其次には士剝せられ、其次には公侯剝せらる。如ㇾ此なる時は天下に災害多して、終に君も剝するに

共、勢つよし。退べからず。後世勢よはくならば憤むべし。又退べからず。仁愛ありて衰みちびかんのみ。君子の世に居るも、時をしり勢を識を要とす。時に盛衰有。勢に强弱あり。大畜の時、初二は乾躰に居て、剛健なれ共、進にたらず。四五は陰柔なれども、よく剛强の陽をとゞむ。時の勢なり。君子は勢を得て强なる時も、仁愛を不レ失。勢を失て弱なる時も、心の剛を不レ失。たゞ時と共にひそまるのみ。小人は勢を得て强なる時は不仁なり。勢を失て弱なるときはつとめへつらへり。年寒して松柏のしぼめるにをくるゝがごとくなるみさほあるものは、たゞ仁義を知るものこれをよくす。

一。同志と會して、治國平天下の德理に及ぶ。夫國の國たる處は、民あるを以て也。民の民たる所は、五穀あるを以て也。五穀のゆたかに多き事は、民力餘りありて功の成によつてなり。故に有德の君有道の臣ある代の日は、舒にして長し。其民しづかにいとま多く、力餘あればなり。道なき世の日は、いそがはしく短し。其民くるしみ、務て力不レ足故なり。古今日の長短かはり有にあらず。君明かに民しづかなれば、長が如し。上闇く下亂るれば、短が如し、此故に禮義は富足より生じ、盜賊は貧窮より起る者なり。富足は寛暇より生じ、貧窮は日なきより起れり。故に聖人は、力は民の本にして國の基なるとを知給へり。浮侈篇に云。王者以二四海一爲レ家、兆人爲レ子、一夫不レ耕、天下受二其飢一、一婦不レ織、天下受二其寒一といへり。後世の業は、困苦多して利すくなきが故に、本をすてゝ末に趣き、剩遊手の者みちみてり。本を務るものすくなく、浮食するもの

あらず。とても世に有べき限はあらん者也。そしり退て、我心をおこさしめんよりは、許容して彼も其道を嗜まむにはしかじ。　問。程朱の退られしは非なるか。　云。これ其國の時所位あらん。今の日本の時處と吾人の位にては退べからず。問。今佛道の法くだり、僧不作法にて學あさきだに、天下是に歸す。よく成侍らば、彌佛法繁昌すべし。程子も婬聲美色の如くこれをさけずば、しらず〳〵其中に入べしとのたまへり。　云。其時のもようと今とは各別なり。秦漢より後、聖人の教の人倫日用の間をはなれずと云を、あしくとりなして、五常を世間凡俗の上の掟とし、淺近の道理とす。廣大高明深遠の道理をば、異學にあづけしよりこのかた、氣質高きものは、多は異端に入ぬ。周子程子より、道躰の神妙を、吾學にとりかへしぬと云共、人倫日用をはなれざれば、實にして見がたし。佛氏は世間をはなれて、深遠玄妙を說ゆへに、趣き易し。其時の佛者は見所高かりし故也。その上もろこしは文國にて、人民多は文盲ならず。佛氏の說も、愚痴の教はすたれて、高き說のみ殘り、今吾國にては、高き說はとなへ失ひて、愚痴にあさまなる教のみなり。禪天台等の大乘教も、渡世を主とすれば、先僧の心より卑淺に成て、教も凡俗と共にくだりぬ。高明の人のよりしたふべき事一もなし。周程より此方、吾道に神理を發明する事久して、其學高く成ぬ。高明の人は多は此道に趣けり。今の佛者多しといへども、恐るゝに不ㇾ足。人をまどはす事淺し。吾道に有德の君子出來て時いたらば、佛者も自戒律を持して害あらじ。是古と時異なり。大國と日本は地異なり。佛氏と世俗と入かはりぬ。今は佛者の道甚ひくしと云

すべきや。又何の志を得と云事かあらん。若賢君良將ありて尋給はゞ、古今の來歷、人情時變の愚見をいひ、且仁政の本を告んのみ。仁政行はるゝ時に、士は士の時を得、庶人は庶人の時を得、出家は出家の時を得て、各其本に歸すべし。何の退ると云ものあらんや。其盛衰のごときは天也。人のよくなすべき所にあらず。　問。これほどみち〳〵て繁昌したる佛者、いよ〳〵時を得ば、國天下をもとり侍るべし。仰らるゝ所難二心得一侍り。　云。佛法の作法にかなふを以て佛者の時を得たるとは申べし。今の佛法を繁昌と悅び侍る者は、愚婦と同じき凡僧たるべし。少佛法の心をしれる者は、佛法破滅の時とならでは申さず。釋迦達摩を出して今の佛者を見せ侍らば、是は何者ぞと申さるべし。夫我道は王道也。王道は大道なり。大道は大路の如し。佛法ごときの小道は、山中の小路のごとし。異端の品々は、川流の如し。我道は大海のごとし。皆受入て辭せず。何のふさぎ退ると云事かあらん。防ぎ退るは同じ小道のわざなり。　問。是又中江氏鏡草のむねに近し。世の學者鏡草を見て、陽儒陰佛とそしり申候。明德佛性とならべられたるはあやまり也。人の中も理りにて侍り。　云。中江氏儒佛一致と見たるにあらず。鏡草は婦人の爲也。女はとりわき文學せず。たゞ佛法のみある事をしれり。他の言語にては通じがたし。此故にしばらく信ずる所によりて、本心の慈善をひらかんとす。その志は好すべし。其言はとるべからず。世人のそしる處尤也。君子の道は日月の蝕の如くなれば、非は非といひて改めたるがよし。則中江氏の志なり。予これをかざる事を得ず。予が佛法を退べからずと云は、彼をかね用るには

日本倫理彙編

も皆水土によるべき也。問。何をか人の儀と云。曰。衣服文章これなり。烏帽子ひたゝれ、ちいさ刀は、日本の水土によるの人儀也。始て人の體立ぬ。人道の禽獸に異なる處の文章なり。何をか式と云。曰。時處位に應ずる禮儀なり。物は次第に備りやすくして、過るに至り、事は次第に多なりやすくして、亂るゝに至りぬ。故に式を定て、恭敬の人も過ることあたはず。不恭人も及ばざる事あたはず。事易なる時は知やすし。物簡なる時はなりやすし。夫式は易簡の善を不ㇾ失となり。むつかしき事を作爲して、人にしゆるにあらず。人儀は恭儉の則を立んとなり。美を盡にあらず。故に人儀式は治道の要なり。問。禮樂はもろこしの法を用べきか。云。人儀式も則禮なり。何事も唐より傳へざる物はなし。樂に春夏秋冬土用の調あり。十二の律呂あり。十二月に配す。皆天地の正音なり。今の三糸三竹三のうち物の中、いづれにても、心のより次第に學ぶべし。正樂の意味は、水のごとく米の食のごとし。常に用てあく事なし。甚面白き事もなし。其道に深からざればしられず。禮樂なくては人道にあらず。治國にあらず。長久なる事なし。予此理を知と久し。何ぞ禮義をみだりて、人道を牛馬に同じくする事を欲せんや。たゞ日本の水土により、今の時に應じ、我身の位をはかりて、實儀を立んと思ふのみなり。政のごときは、予が不明病者何ぞあづからん。其儀は論ずるに及ばず。

一。心友問。貴老志を得て、政をし給はゞ、佛法をばいかゞ退給はむや。云。德いまだ不ㇾ成して事をとらんは、大匠に代て、木をけづるが如し。手をやぶらざる者少し。予が不德何ぞ政をな

り、今の人は、人面獸心なりと申候は、太古には人の頭に角など生じて、牛頭に似たれ共、心は仁義禮智信の徳全く明なり、今の人は、形は全く人の體備りたれ共、心は不仁不義不禮不智不信なる處ありといふよしなり。今承り候。禮義の備りたるを人面とし、不ㇾ備を獸面といふ事は、めづらしく侍り。

云。禮義を備にするを以て、牛馬に同じといへる處に付て云ばかりなり。古は天地造化の工いまだ始なりし故に、形にはそなはらざる所ありて、人に獸の形有たるも有き。然れ共心には智仁勇の徳あきらかなり。後世は鬼神の工化くはしくなりて、形は人體全し。然共世の風俗くだりて、心の知仁勇、人欲のためにくらまされぬれば、禽獸に近き所有。故に予云。太古の人は獸面人心なり。中古の人は人面人心なり。後世の人は人面獸心なり。太古中古をとりまさりの有にはあらず。時なり。今は時にあらず。敎のなき也。世間多事多物にして、氣力たらず。財用たらず。外聞のみ事として、僞多し。これを人面獸心と云。此上にますに禮義を以てせば、よはざにいへる重荷に小付成べし。いよ／＼實儀うすくなりて、僞大ならん。今の時に當て仁政を行はんと欲する人は、先ずるに學校の敎を以てし、人々に仁義を知しめんのみ。世間の多事多物を減して、易簡ならしめ、事すくなく物備す。質素を守て、實儀を專とすべし。如ㇾ此して後、人欲の僞除くべし。こゝにをひて始て、人心明かに、天性全かるべし。年をかさねて後、人の氣力まし、財用たりなん。氣力生じ財用みちて、禮義の則なき時は、又人欲あふるゝものなり。此時に及て、敎るに禮樂を以し、立るに人の儀を以し、定るに式を以すべし。しかれど

思ふ人は、其質を基し、其時勢を來すべし。　問。いかんして實儀の風俗をなすべきや。　云。易簡は實儀の質也。泰伯の呉國にいたり給ひて、禮儀を以て呉國の夷を變ずる事を先じ給はず。却て衣冠をぬぎすてかみをきり、夷の風俗に成給ふ者は、誠を尊び給へばなり。是をも人道を牛馬に同じくするといふべきか。もし此時泰伯衣冠をたゞしくし、禮儀を嚴にして、夷を化せんとし給はゞ、人の眼目を刺て、彼は中國の人といはむのみ。俗と共にして後、致に仁義を以し、及すに德を以し給ひし故に、後代に至りては、中國の禮樂を學て、夷のいやしき風俗化しぬ。今の禮儀を先ずる者は、心に仁義の守りなし。是を人面獸心といへり。人の人たる所は、仁義あるを以て也。禮義は仁義の質をかざる文なり。質を先ずべきか。文を先ずべきか。繪のことは素にをくれたり、禮は後かとのたまへり。夏は忠を尊び、商は質を尊び、周は文を尊ぶ。忠ありて後に質あり。質ありて後に文あり。尊ぶといふは、其時に應ずるを用るなり。太古は忠信あまり有て、文不レ足。文の不レ足は、人道の禮義不レ備なり。忠信あるは人心なり。禮義の不足は、獸面共いはんか。故に後世の文備の時に至て、太古の風を行へる者をば、人道を牛馬に同じくするのそしり有。中古は心に忠信あり、身に禮義有。人心人面といふべし。周の盛世を至極とす。三皇五帝三王ともに、同じき所は忠信なり。文質は時の宜なり。今の時は、又忠信を本とし質を尊びて、文を易簡にすべき時なり。今の時に周の禮義を尊ぶものは、仁義忠信日に損して、人面獸心となれり。今は又太古に歸して、獸面人心たるべきのとき也。　問。世間に古の人は、獸面人心な

集義外書卷之七

脱論四

一。心友問。貴老もし政をし給はゞ、大節にして人道の禮儀すたれ、牛馬に同じからんと申者侍り。　云。禮儀立。人道美にして、易簡なるものあり。是を易簡の善といふ。今の禮儀を云ものは多事多物なり。多事多物は、誠すくなく成て、僞をまねけり。然れども終に、人道の大禮はたゝざるなり。　問。易簡にして、大禮立べき事いかん。　云。無位無官の士もむかしのごとく、烏帽子ひたゝれ、ちいさ刀の風俗とならば、はじめて人道の美、禮儀の躰を見るべし。如ゝ此ならば、儉約の法は默して行はるべし。うへにひとつ着する禮衣ばかりにて、下着は幾度もあらひて、同じ物を用べし。今は禮衣なきゆへに、小袖あまたとりかへ、着するのみならず、思ひ〳〵の物ずき有。こはり裏付、色々の上下多あり。ちいさ刀ひとつにてたれるに、刀脇指大中小色々あり。禮儀立時は、此弊をのづからなし。奢を好むものも、過る事あたはず。又定れるが故なり。軍陣にのみちいさ刀を打刀と名付、其上に太刀をはくなり。人により時によりて、鐔とをしをさすべし。國容軍容はじめてわかれて、治世久しからん。　問。今の時にもよろしからんか。　云。いまだ下地なし。質なきに文をほどこす時は弊あり。　問。其質は何ぞや。　云。實儀なり。天下の風俗實儀になりて後、禮儀ほどこすべし。又時勢のかんがへあり。故に大禮を立んと

わかき時の樣にすくやかなるか、またはよき助を得たらましかば、文武ともに家風にかね侍りなまし。

集義外書卷之六 終

藝なる事をしらず。たゞ武士のみしかるにあらず。農工商共に各其職あり。學を好み道を行の志は、かくし藝のごとし。才は天のあたふる所なれば、學て至べきにあらず。故に德を知ものは、己が才のあたるまじき役儀には居ず。是を自知者は明なりと云。たとへ無學にても、其役儀をつとむべき器量ある者には、上より命じ給ふなり。　問。學ありても、器量もなきものに、役儀を任じては、其事行はれず。俗語にもはだかにして見れば、しらるゝと云事あり。たとへ道學を嫌ひて習あしくとも、其習のあしき衣裳を心にて取除て、其人の實身の生付たる才氣を見ば、必ず得たる事の用べき所あらむ。たとへ學者にて口に至言をはき出すとも、其文學の衣裳を心にてぬかせて、よのつねの者にして、人がらの實を見ば、士君子の官職には、何にも成まじき者あらん。たゞ吾人共に天の命ずる位に居て、間學をかくし藝とせば、初て道德の學人倫に行はれて、床道具の學なけん。むかしの學者は、文武二道なりき。今の學者は、學寮坊主に、髮のある者多し。國來たる學者も、古の學者にて、文武を兼たらましかば、愚がたすけとも成べし。たゞ文學議論のみ好みて學問と覺え、出家の學寮の樣にありたく願へば、武家の風にはあひがたし。さし當て役儀かけ侍れば、世間なみの武士を養ひ扶持せんより外の事なし。よしこれも愚がはじめの過ちなり。武帝の天子の身ながら談議說法せられしごとく、武士ながらものよみの樣に講談などしたる故なり。其あやまちは學者の氣に入、過を改めたるは大に氣にあはず。彼ゞ仰學者は、坊主に髮の有心得にて、士君子の道はしり侍らず。しかれども全く學者の非にもあらず。愚が氣力

業とし、身上をあわりつく者なり。一万石以上の歴々は、是非と思召ば、扶持人とし給はんも心のまゝなり。文學の精粗厚薄によりて、祿の高下あれども、文學によりて祿をはむ事は一なり。しかれば我臣とすべき道理のものなり。世間をわたりありく醫者などに似たり。町醫者の名醫よりは、すこしよろしきあへしらひなるべきか。予がごとき者は、かれを臣とすべきやうなし。この故に物をたづね問うへは敬する也。問。然らば貴老もまた諸侯の臣なりき。貴老の身上ほどの人を臣とすべきほどの大名ならば、陪臣の禮もくるしかるまじきか。曰。予わたり奉公して、他の主をとるべきものにあらざれども、奉公するものにして、他の諸侯に見ゆる事あらば、さもあるべし。予は人の臣となるべきものにあらず。況や道學の事を以ては、公方にもつかふまつるべからず。むかしよりのよしみなければ、すこしの志をだにうけず。もし公方に御志おはしましてめさるゝとも、道學の事を以てめさば、予は山中の野人なるべし。臣たるべからず。公方だに臣とし給ふまじきもの也。況や諸侯をや。

一。心友問て曰。志ありて貴老に御奉公申たる者、今は他にあり。此者どもの申侍るは、貴老は學者のきこえあれ共、家内の躰は學者にてはなし。たゞ世中の文盲なる武士の家風なり。さある故に、我〳〵も出たるとなり。一度御扶持もうけたる者の、にくき申分と思ひ侍り。答て曰。其者の申分まとにて侍り。愚拙が學者にてなき所眞實なり。また家風の世なみの武士なる事も必定なり。其者共の心得には、愚が學問故に、人親と成ことを得たりと思へり。問學は武士のかくし

にも、殿を付給へり。此人さのみ道德をしり給はざりしかども、士の本をわきまへ、且時の義をしり給へばなり。愚は諸侯の陪臣也。公用を以て來る時は、玄關より奏者を以ていひ次て、可ㇾ歸者なり。同座に食飮すべき樣なし。世の常の事にあらで、各別の義ありて、來れるものなれば、其本を尊く、まことの賓客とし、又食飮の客にあらざれば、たゞ禮義のみうや〳〵しくて、もてなしの馳走なし。此時にあたりて、予をおごれるといふ人なかりき。三公だにかくのごとし。況や他の關內侯をや。しかれども德を尊び貴を尊ぶは、其義一なり。貴を尊ぶものは、天を恐なり。德を尊ぶは天を樂也。予不德なれども、德ありとして貴人の尊び給ふは、貴人の德なり。予これにおごりて、尸のごとくして、ほこりをらんは、愚の至なり。貴を尊てへりくだれども、貴人又予を敬し給へば、相ゆづりて同輩のごとし。これ其勢なり。又其比貴人あり。德をしたひ道を尊て、予を懇情にし給ふことはすぐれたりき。然どもみづからの貴をさしはさみ、予を陪臣のあひしらひにし給へり。愚が大躰の使者などにて來らば尤なり。たゞ顏さし出て可ㇾ歸のみなり。貴賤の席をなすまじき所にてなし給ふは、時の宜をしり給はず。婦人の懇情に似て、丈夫の懇切にあらず。大なる事あるべき人ならずと思ひしより、重てゆかず。

一。心友問。俗儒といへども、聖賢の道をいへり。是道をまなぶなれば、敬すべきか。　曰。予がごとき者は、俗儒といふ其物を尋問うへは、其品よりは慇懃にすべし。先日申たるがごとし。問。公侯伯子男の位の人は。俗儒をばいかゞあへしらひ給ふべきや。　曰。かれは文學を以て産

をのづから貴賤の分あり。相敬するにもいたらず。たゞ道德の親を以て、心を友とするときは、其本にかへるのみ。それ天下に生れながら尊き人なし。故に昔は天子の元子といへども、士なりといへり。故に士は君子の質なり。天下の大樹諸侯の本地なり。是故に古は、天子の直臣と、諸侯の陪臣のたがひは、よはひせざるばかりなり。儕輩の中の交にては、年を以て先後をなす。これをよはひすると云。直臣と陪臣とは、直臣は年若けれども陪臣の先にすゝむ。これのみなりき。然ども今は今の風俗なれば、公用の交には敢てたがふことなし。心友の交は各別の事なり。我有德にあらざれ共、しれる事ありとして、愚に道を求る人は、其道を敬するなり。我も又道德の交にして、公用のかゝらぬ所なれば、へだつべきにあらず。孟獻子友五人有き。己が富貴をさしはさまず。同輩のごとくして友とせり。五人の者も獻子が富貴を見ず。己が無位を忘れて友とせり。これ古の道なり。今の世の風俗、かくのごとくの義をしらざれば、遠慮して、いまだ內侯を敬する事、外無きの風のこれるがごとし。しかるにいまだをごれるといふものは、士の天爵をしらず、本をわすれたるが故也。むかし予がわかゝりし時、三公の職におはします人、愚が虛名を聞召てめされき。饗膳ありしも、すこしもとりつくろふ事もなく、かろき朝夕の常と見えたり。其後こひ茶出ぬ。予辭して次の間に立、しばらくして入たれば、其まゝ置て飮人なし。關內侯のれき〳〵ありしかども、皆々予にゆづり給ひき。其間に關內侯の來てかへり給へ共、次の間までもをくり給はず。予が歸る時は、玄關までをくり給ひ、下に居て禮し給へり。名をよび給ふ

のうや〲しからぬをみて、かれよりも初の文躰をかへて、同輩のごとくする事は、かの人の義をしらず、德を好まざるなり。義は宜なり。時所位のよろしきことをしる也。大躰の朋友にもあらず。たゞ一の故ある道理をなみするは、義をしらざるなり。愚が書によりて。益を得たりといふ恩を忘れ、此方の文のすぎてうや〲しからぬをとがめて、文躰おごれるは、德をこのまざるなり。これより後、世人に對してこたへ無事を思はず。數年學に志て、無₂問斷₁奇特なる事は多人なれども、たゞ其奇特のみにして終るべし。大なる事あるべからず。

一。心友問。そこの人は市井の中より出たり。平士の武士にもならぶべからず。然るに貴老慇懃に禮を盡し給ふことは何ぞや。彼に問尋給事も、たゞ一藝なり。何ぞ一藝のゆへに、かくのごとくならんや。　曰。かれ市井より出たりといへ共、武家の祿を受て、庶人の官にある人なり。其上大躰の知人にもあらず。大躰のまじはりにもあらず。かの人に求學べき事ありて、愚が方よりたづぬるなり。人に一字をも問學するうへには、我を有しさしはさむこと有べからず。位を忘れ情を盡して、したがひ問べし。たとひかれより此方へ無禮なりとも、時の義ことなれば、とがむべからず。況や彼も又本の士庶の分を思へばにや相敬せり。

一。心友問。關内侯の貴老への文躰、はなはだ敬せるあり。貴老は一藝の師をだに敬し給へは、大道を學び給ふ人は、尤の事也。貴老の文躰尤うや〲し。又一座の禮、同輩のごとしとてそしる者有。いかゞ。　曰。愚は國士なり。彼人は内侯なり。國士と内侯と、其官位を以て交る時は、

や〳〵しきは尤なり。貴老よりも同じ樣にうや〳〵しきは、過たるとや申侍らん。　曰。此人におきて、別に故ある交もなし。大躰の朋友也。又他國の人なり。武士には本より定たる高下なし。同じ君に事へては、次第の品々あれば、其分にしたがふべきが、それだに我組子と他の組子とは、もはや異なる禮義あり。他國の人に對しては、其身上の多少を存べからず。　問。貴老他國の家老へは、狀の文うや〳〵しくおはします。他國の人にをきて品あるまじくば、小身の方よりも、かまひあるまじきか。　曰。祿多者には人多し。天の命也。天の命數多人ならば、うやまはざらむや。是我分を盡す也。他國の人、我組子にも有べきほどの小身の人の、我をうやまはるゝも、此心なるべし。しかればとて、此方より其うやまひを受べきにあらず。これ又士の義也。彼は理にしたがひ、我は義を存す。義理互に賓主をなせり。

一。心友問。そこの人は小身なれども、他國の人也。はじめかれより來る文躰、うや〳〵しかりし。貴老よりの返狀、同國の他の組子などの文に、少よき樣なりしかば、彼よりも今は文躰おごれり。いかなる故にて侍るや。　曰。かの人は他のよしみなし。大躰の朋友にてもなし。愚に心術をきかむことを求められき。しかれども愚病者にして、對談して人に敎る事かなはず。往來の書簡をあたへたり。これを見て益を得たりといへり。しかれば愚に心術を求るばかりの知人也。かれ大身なりとも、文躰おごるべからず。況やかの人にをひてをや。愚又かの人にをひて、同じ樣にうや〳〵しくすべき事は、道理のよる所なし。たゞかの人の求めにことふるのみなり。愚が文

者、しばらく沈魂滯魄の靈となる者あり。定たる理にはあらず。人の心は人の形ある間の事也。質の害は形色聲臭なし。何ぞ生死にまどはんや。幽明人鬼一貫なり。問。天狗になる者は何ぞや。云。學文ありて高慢無欲なる者の沈魂滯魄天狗となる者あり。故に昔の坊主の中になりたる者多し。近年の出家は欲あり。又高慢すべきほどの學力もなし。故に天狗にもなるとわたはず。

一。朋友問曰。何のつけまひ事もなけれども、紙を書物紙にうては、各別おもくなるとはいかゝ。答曰。人のねいれば、重くなることはりなり。うきたるものは氣にのり、しづみたるものは氣をさくるが故也。目をふさぎてあゆめば足かろし。精神内にあつまりて、形をのするが故なり。盲者の道の不達者なる事は、心もとなき所に精神ちるが故なり。よく見ひらきおきて、心もとなからぬ地にて、目をふさぎあゆみて見れば、しらるゝ事也。僧ありて曰。是非共に着する所には惡生ず。出家たる者、出家をよしと思ふは、はや着なり。それよりして、爭も物我も生ずるなり。答曰。しかり。我は聖學をすれども、儒に着せず。俗學のいやしきをも見たり。朱學王學等の費へもしれり。すべて取べきと思ふ學なし。天地の神道を大道と云。我國には日本の水火によるの神道あり。大道は名なけれ共、我國の道なれば、やむことを得ずしてとらば、神道をとるべし

一。心友問。そこの人は、貴老の組子の中にもあるべきほどの身上の人なり。彼より來る文の、う

日本倫理彙編

る故に、無明をいひ輪廻をいへり。夫十二万歲の後は、天地萬物皆無に歸す。何ぞ小數の內に苦勞するや。堯舜の御代には、邪魔かくるべき所なし。天下の無明輪廻一時に滅す。何ぞ門々をかぞへて、終に功なきことをせんや。あまつさへ佛氏の徒、天下の輪廻人となり、無明者となり、惡業內外にふかくつめり。妄執のふかき者、出家にしくはなからん。　問。佛者云。事理不二なり。心すでに輪廻あり。何ぞ地獄輪廻なからむやと。　曰。「はるゝ夜の、星か河邊の、螢かも、我すむかたの、あけのたく火か」。汝が輪廻と云所を、我は愚と思へり。心に愚あれば身に不肖あり。　問。自然に輪廻の躰あるものはいかむ。　曰。むかし死てよみがへる者、何事をもいはず。佛法以來いふ事あり。心まよふによつて生ず。目病て空中に花を見るがごとし。空中本花なし。眼の病によりて生ず。昔田夫あり。夜中に大なるかはづをふみつぶしたり。氣味あしくおもひていねたれば、夜もすがらかはづ來てせめたり。夜明て後行て見れば、大なるなすびなりき。これを見て後かはづ來らず。思ふことをねごとにいへるなり。本後生輪廻なし。佛法によりて後生輪廻をなすもの自然にあり。むかし或僧幽靈を見て曰。後生も又もつけなるものなりと。正しく後生の說によつて、幽靈と成たる所を見付たり。奇特なり。　問。怨靈幽靈などのたま／＼あるはいかゞ。　曰。万々人に一人億々人に一人あるかなきか也。氣魄のよく／＼つよきもの、後生にまよへば、暫沉魂滯魄と成ことあれ共、數あつて滅す。むかしの名僧の天狗と成たるも、數あつて皆滅したり。天性をしらぬものは、鳥獸と同じく生滅す。其內執着ふかき者、其死を得ざる

しりぞけ、未書をすてゝ、聖經のみ見れば、朱子王子共に、聖經にをきて全からず。いづれをも助とはなすべし。堯舜を師としてあやまてるものはあるべからず。如此見とりて後は、關東へもゆかず、病者と成て人にもあはず。たゞ人の知所は、むかしのあやまりなり。學者問。儒佛の別はいづれの所ぞ。答曰。輪廻をいふといはざるとなり。問。事々に異多し。答。其事々の異、皆此根本より出。もし造化輪廻ならば、佛氏の事皆是なり。こゝろみに汝儒者となれ、我佛となりていはん。問。佛氏寂滅爲樂、萬物滅し盡したる所を成佛とす。我儒生その理に異也。曰。執着を解かために、著形共に滅す。萬欲除去たる所の心を寂滅爲樂とす。問。是又後人の理を付たるならん。妻子を絕は、まさしく子孫を絕を以て極意とす。天道を見れば、善をなす者は子孫榮へ、惡をなす者は子孫亡。しからば惡をなして子孫を亡すを佛道の喜とせずして、何ぞ慈悲善行をつとむるや。善行慈悲は方便か。曰。佛氏は大虛を出。天道何ぞいふにたらむ。問。しからば何ぞ惡をなさざるや。しばらくの方便か。曰。惡をなして子孫亡るは、寂滅に似たれども、其惡心輪廻して、他生を受、今は子孫を殺がごとくなれども、又々他生にをきて子孫あり。慈悲善行にして子孫を絕者は出家也。すでに子孫を絕、又我こゝろ淸淨にして、輪廻を離れぬ。問。しからば天地萬物なきにはしかざらむか。曰。やぶりすてよ。本より一物なし。問。先生はいかゞ見給ふ。曰。造化輪廻ならば、我又佛と成べし。しかれ共輪廻の理なし。元本に無明なし。是以佛氏のよ非なり。佛氏本來の面目をいへども、後來より見を立

月に高島に行て、來年の四月まで居て、孝經大學中庸を學びき。それより後は文たる者仕へを求めんがために江戸に行ければ、東江州の人遠き城屋敷に母幷に妹どものみありければ、京都にも西江州にも行ことかなはず。家きはめて貧にて、獨學する事五年なりき。しれる人、母弟妹のあるをしり、饑饉の餓死に入なんことをあはれみて、つかへを求めしむ。其比中江氏王子の書を見て眞知の旨をよろこび、予にも亦さとされき。これによりて大に心法の力を得たり。朝夕一所にをる傍輩にも學問したることをしられず。書を見ずして心法をねること三年なり。本より親しき者一兩人粗知て尋しに、聖學あることを語ければ、又傳て志す者五六人に及べり。大に悦て披露せしかば、そしり出來、風波おこり、予ををひ失はむとする者あり。これによりて、主人其是非を格しきかれき。これ世に名をしらるゝの初、主人志の出來たるはしなりき。其時は眞知の旨に專なりき。江西にて學びたる者はなを以て眞知の旨を披露せり。傳て志眞ならぬものは、珍敷こと得たりと思ひて、十百倍して王子の學をふれながせり。世の人のきく所たがはず。かく世にとなへざる以前に、幾程もなくて、中江氏死去なりき。中江氏は生付て氣質に君子の風あり。德業を備へたる所ある人なりき。學は未熟にて、異學のついゑもありき。五年命のびたらましかば、學も至所に至べき所ありしなり。中江氏存生の時は、予を始として皆粗學の者どもなれば、ゆるさるべき者一人もなかりしに、中江民の名によつて、江西の學者の、名の實に過たること十百倍なれば、ついえもまた大なり。予が見にも、人の上にも、學流の異端にちかき所あるを見、註を

におきて、後生の學者をして心を内に向はしむ。吾人德をかゝぶる事淺からず。内にむかひたる心にて經傳を見れば、語も理も本のものなれ共、各別なる所あり。　問。二子の弊は何の所ぞ。　曰。朱子は文にひろ過たるついえあり。學者理學に近して心法に遠し。書はたとへば雪中の兎の足跡也。兎は心なり。聖經賢傳は皆我心の註なり。兎を得て後足あとは用なし。心を得て後書は用なし。一貫一路に大やうにとる所もあり。大意を見て心を得べし。日用の功夫にをきては、委しく見る事もあり。然共それは我受用の委きがためなり。たゞに書のみ委しく見るにはあらず。朱學はあまりに章句を分過て、文句の理に落て、心を失ふと多し。今の朱學をするものは、日蓮宗などのかたむきに日蓮を信ずるやうに、是も非も朱子の語とさへいへばよしと思へり。是故に聖經は註のためにおほはれ、心法は經義の爲に隔てらる。朱學者のかへりて朱子を聖門の罪人とするなり。王子は仁にあやまち、約に過て、異學悟道の流に似たる事あり。學者いよ〱其ついえを大にするものあり。又王子の罪人なり。　問。二子ともに賢なる所は何ぞや。　曰。二子ともに天理を心として人欲を去、一人の罪なき者を殺して天下を得こともせざるの義は一なり。これ二子の賢人と云べき所なり。　問。貴老をも王子の學者と申者あり。　曰。しからむ。我年たけて問學せんとす。文才なく文字なし。氣力盛なりし時は、不幸にして學あるとを不レ知。無用の事に精神を勞し、病氣に成て後、二十二歳の時、初て四書の文字讀を習ぬ。集註に仍て四書を學びき。廿四の七月高島に行て、中江氏に逢て、うたがはしき事をとふ。歸て又九

とめをよくし、農工商は農工商のつとめをよくすべし。其所作をよくつとめて、緒なき者は、盜の品をまぬかるゝ也。天下國家の政敎に至ては、予が知所にあらず。幸に傳受の心法を得ば、過て君子となり、不ㇾ及とも、武士の名を失ふべからずと。是故に氣力ある程は、其業に身を入たり。然に大病度々やみ出し、其上に山より落て右の手足をうちぬれば、弓ひかれず。大河をもわたすべき樣なる强き馬もかかゑられず。武士のつとめ、心のまゝならで後、身をかへり見れば、居ながら人を下知すべき本よりの士大將にもあらず。きのふけふ品をこえてあがりたる者なれば、みづから川の瀨ぶみもし、山谷にもすゝまでは、事ある時も、役儀達すべからず。人に信ぜらるべき德はなし。國家の用をなすべき才はなし。たゞ無用の者とおぼゆ。農工商の業は、なほ以てなるべからず。病氣にして人と久敷かたりがたし。おもはずに無禮もあれば、たゞ山中の一木石と成べき人がらなり。身の不肖をよく知たる所のみ。世に益なくとも害あらじ。これ又人不ㇾ知の義也。許由も賢なれ共、國政にあづかるべき本才なきか。一人知所の故あつて、二度勅使を出せしがために一の狂をまうけたるか。

一。心友問。朱子は賢人か。　曰。大儒といふものならん。又賢也。經傳の註にをきては、古今一人の名人也。古人の心に叶たると叶はぬとはあれども、先は初學の手をくだしよき樣に、手ぢかく義理の聞ゆる註なり。此一色は後生の者大に恩を得たり。　問。王子は賢人か。　曰。文武ある士と云者ならむ。名大將也。又賢なり。孟子の眞知眞能の奥旨をひらき敎へ、自反愼獨の功

ほどわしく侍り。毛見といふと大にわしきことなり。出兇に窮めらるべし。左樣にして、百姓ゆたかにをごらば、飢饉米と云ものを出させをき、軍國水旱の憂に備給ふべし。惣じて物は、おれば有次第につかふものにて侍は、兇を高く取て、上へ進じ給ふとも、何の目にも見えず、つかはれ侍べし。とりひろげたるは、しめがたきものなり。咎は天のにくむ所なれば、打續不作などせば、其兇の高く成たる故に、上にも一入迷惑なさるべし。米の高直に成て、一兩年ともあり。武士の勝手くつろぎたる後に、又本の如く下直になりぬれば、武士たる者皆々すり切て、難儀に及もの也。人道はいつも常なることぞよく侍れ。

一。心友曰。司馬遷が、伯夷叔齊と巢父許由とを同じ樣に書たるは、道を不レ知なり。伯夷兄弟の海にのがれたるは、兄弟國をゆづり、且紂が惡政をさけたる下心なり。首陽にうへたる事は、君臣の義を行てなり。たゞに山居隱逸を好たるにあらず。皆時の義ありたる事なり。許由は時の義の見べきなし。たゞに世中をいとひ、山水を好み、淸に過たるものなり。義なきの淸は君子の淸にあらず。伯夷と日を同じく語べからず。　答曰。是至論也。然共許由が心を知べからず。或は予が職祿をゆづりて、山水を好み、隱居せし事をそしり、君子の道にあらずといへり。予が曰。予をよく思ひ過ての語なり。予は天下の不肖人なり。しかれ共代々弓馬の家に生れて、武士のつとめは粗きけり。氣力ある間は心のかぎりつとめき。少問學しておもへり。古は五等の人倫の外に道者といふものなかりき。然れば今の世に生れて己がために學ぶ者は、武士ならば武士のつ

日本倫理彙編

一成あらば、五分は百姓にとらせて、五分は上へ免にして被ニ召上一、其内を以て、下代庄屋等に給米多く遣し、私曲なき様にするとも、いまだ給米有べし。其餘米をもつては、國中いかやうのよき事も成侍らむ。いかゞ。　答云。內々其通に聞及侍り。しかれども理屈と勢と情とのわかちを得心し給はでは、縱初にも國郡のまつりごとはならざるものにて侍り。貴殿の身上唯今祿と人數と相叶はん。其上に一兩人かゝり人有べし。其入用を別に合力して給はれ。外にをらむといふとも、別にわくる有餘はあるまじ。ひとつにをらばとかく養はれ侍らむ。理屈にていはゞ、とても入べきものなれば、外へ出したるも、內にてついやしたるも、同じ事の様に聞え侍れども、事の情と勢とは、左様にはならぬもの也。目に見えずして自然と出す事はなるべく侍れども、其半分にても、きわを立て急度免に取給はゞ、民は痛と申べし。其上貴殿の慈悲正直の心入を以て、一代はよくもあるべきが、代官替りなば、其免の上りたる所ばかり立て、其外の事は、世のなみにかへるべし。しからば貴殿の代官所は、亡所に成侍らむ。君子は人の悪を殘さぬものにて侍れば、後の煩なき様に、萬事分別あるべき事なり。　問。しからばいかゞし侍らむや。　曰。傳聞貴殿の代官所も、他所も、一万石の領に、下代二人といへり。よく致者は、一万石一人にてたやすくなるよしなり。あしくする者は、二人にても事ゆかず。よき者を選て、一人にして其給分をかさみ遣し、百姓前より私曲なき様にせらるべし。よき庄屋ある所は、庄屋代官にもせらるべし。居ながらなれば、庄屋は今の下代の給ほどにてもよかるべし。兎角在々へは、人の入こむ

云、我身の不德をしらず。小人にして君子の器にのらんといへり。荷物をひたる人足の鞍置馬に乘がごとし。孟子はひきゝ役を望給へども、叶はず。今の道者と云ものは、工商にをるべき人がらおぼえなるも、われとたかぶりぬるのみなり。みづから聖學の罪人と成て居ながら、佛をそしるはおやまれり。道學の床道具になりたるより、世人も亦これを察せず、鰯うりの子にても、醫者と成て小袖羽織着て出れば、法橋法眼となりて、乘物にのり、笠はりせきだ屋の子にても、出家と成て、經をよみ談義をとけば、長老と成て、高座にのぼるたぐひに、覺えをる也。聖賢の道を任ずると云者を、其學文を除て、常の者にして、其人がらを見給へ。奉公人ならば、代官の手代などやうの事ならでは、成まじき人がら多し。さては工商にしてにあひたるものなり。世俗にはだかにして見れば、ばけのあらはるゝといふ、これなり。世にたぐひなくすぐれたらん者は、筋にも身本にもよるまじきが、大方なみ〳〵のよきといふばかりにては、身本の俗性ほどなるもの也。醫者は人がらのよきほどの事はなけれども、醫術の上手次第なるものなれば、藝にめでゝも可なり。坊主は酒肉を不食、不婬戒をたもち、よく迷ふて、其行をつとめぬれば、本より人外のものなれば、身本人がらのえらびなきなるべし。聖學をするは、人倫を本とす、人道は人がらこそ肝要也。

一○。志ある人の代官役と成たるが問て云。今時は民間に難有にもならずして、すたる費へ多し。代官たる者、慈悲正直にして、此費をやめば、所により免にして、一成も其上下も出來有べし。

たるものなり。此故に軍禮といふ。軍の次第作法を知て、其上に昔の名將の合戰の跡をきけば、軍の器ある大將は、其心に軍法の勝負の利しらるゝもの也。扨敵に向て變化する事あり。義經正成是也。

一。心友問。孟子は遊說にあらずや。　曰。世は次第に結構に成やすし。親の功の半分なくても、子の代には位も身上も親よりよくなる者多し。前代の德の後にあらはるゝ故にてもあり、聖德あつて無道の時に出、しかも下に生れて孔子のごとくなるは、天地ありてこのかた始なり。是故に世人無位の聖賢を尊ぶ事をしらず。且孔子の德あつて、謙さかむなれば、人の氣遣もなかりしなり。子思の時ははや孔子よりも敬ひあり。孟子はなを／＼人の尊びふかし。これ孔子の德功の子思孟子に至てあらはれたるなり。孟子はまづしきがためのつかへに、門のゐひかきをもち、ひやうし木うつやうなる事にてもつとめて、道の行はるゝ不ㇾ行のかまひなき奉公をしたく思ひ給ひけれども、名たかければ人をかず。しかればとて人のもてかしづく高位大祿をうけては、道の行はれざるは恥也。やむことを得ずして、諸侯の賓客と成て周流し給へり。後世の遊說の者と日を同してかたるべからず。しかれ共孟子は、孔子よりもなを以後の口實とすべき德あり、孔子は小官をも辭せずして事へ給へど、五等を出給はず。孟子はまさしく官職なし。道學を說道德を任じて、これを以人の馳走にあひたる所あり。後世の弊これよりおこれり。しかれ共孔孟は天吏也。無道の時の下に出たる聖賢にて、天下の大變を行し人なり。今の人大道の常にそむきて、道を任ずと

れり。根本公家武家と云名は、あるべからざる事なれ共、兵亂久しくおこらざりし御代のほどに、道なくて奢りければ、上つかたの人々、武事におこたり、詩歌管絃の風流のみ事とし給ひしかば、事ある時は、みづから征することかなはずして、地下の受領などの、國々にかよひて、田獵になれ、野人に親しき者におほせて、對せらる。これより如此者を武士と名付たり。武功によつて大身になれば、武士は武事のみ好めり。官位たかき人々は、武士に守護せられて女のごとし。それより文武二つにわかれたり。武なき文は、まことの文ならねば、女の文たる道理の學はなくて、たゞに歌をよみ詩を作るを以文道と覺えたる者多し。文なき武は、まことの武ならねば、ほこをやむるの義をしらで、いかつにひおをはり、よはき者をせこむるを以武と覺たる者もあり。　問。文官武官といふものは、むかしよりあらずや。　曰。今の武家にも又あり。御右筆御勘定がたなどの類は、文官のごとし。御馬かた御鎗奉行御旗奉行軍法者などいへるは、武官のごとし。役者と云ものはあれども、皆武士なり。古の文官武官もかくのごとし。二にするにはあらず。たゞ何とめ名のつかぬ武士がまとの武士なり。いかむとなれば、役者と云ものは、其役だに達すれば、外の事にとゝのほらずしても苦しからず。是故に藝者に人がらよき者はまれ也。武家も武道は床道具に成て、また二に成行とあり。源氏の末の公家のごとくに成て、威のうつりたる所なり。

一。朋友問。小笠原のしつけかたに軍法のあるはいかゞ。

云。これ古風の跡なり。軍法は五禮の一なれば、禮官の家にあるなり。たゞ軍の次第作法を記し

だに記し給へり。古なき風なれども、時の變によつてをこなひ給へば、兎角いふべき樣なし。其本をしらで末を見て、後生の者のあやまる事をなげく也。正心を離れて道學あるべきや。心學と云は、かへりて眞ならじ。格法と云は、脇より付たる名なるか。時所位の至善をしらで、たゞに聖賢の德によるは、聖賢の能狂言をするがごとし。また後儒を師とするは全きことにあらず。いづれをも助とはすべき也。　問。禮記に儒行あり。されば聖人の道を儒道といはむも、害あるまじきや。　答云。禮記には後人の附會あり。全く取べからず。儒行の初に、聖人の言と見えたるは、たゞ最初の三十六字也。それより下つかたの儒行は、多は後の人のつけましたる也。魯の哀公孔子に向て、夫子のめしたる服は儒服かと問給へば、孔子對て仰られけるは、丘が若き時魯にをれり。逢掖の衣を着たり。長じて宋にをれり。章甫の冠をかうぶりけり。丘これをきけり。君子の學は博し。其服は鄕にしたがふ。丘は儒服をしらずとの給へり。是を以見れば、孔子の儒者にあらざる事明かなり。儒行の語もあしきにはあらず。たゞ聖人の語勢にあらざるなり。今禮儀の風、のこりたるものは武士なり。武士に學問する人多からばよき人あまた出來べし。武士たる者文武二道をおさめてみづからとりおこなはでは、道は床道具になる事なり。文武を身に有したる人を士君子とはいふ也。大樹諸侯大夫士みな君子なるべき道理也。文武の二にわかるゝといふ事は世に道のなき故なり。文道は天下國家を平治し、武道は亂を鎭め賊を討、蛇蝎猛獸をしりぞけ、天下國家を警固するものなり。しかるに中古より、公家は文道の役者、武家は武道の役者とわか

れば、五等の人倫の外に居て、儒者と名乘て、道學を以產業とせり。これ異端遊民の始なり。これを見て、道家の徒出來、佛氏の流渡り、相爭て道學を說て、世をわたる遊民多くなりぬ。異端は仙佛の徒のみにあらず。儒者其本也。博文の儒者は、一向に一役にへり下り、國用を達するものなれば、遊民にあらず。異端にあらず。小人の儒なれども、古の師儒のごとし。心學者格法者朱學王學陸學など名乘ものは、遊民也異端なり。いかむとなれば、或は文學につたなくて、史儒の用をも達せず。文學あれども高慢にて、人にたかぶるを事とする者も有。或は云。儒者は道學を任として、何の役儀もなきものなりと。これ佛者の、五倫を離れ五等を出、何の所作もなけれども、佛道をだに修行すれば、法力にて其日を送るといへるがごとし。堯舜を學ずして、湯武孔孟の天地の大變にあひ給ひたる、其跡を常と心得そこなひたるか。湯武の後、湯武の行をならふ者は、皆謀叛人なり。孔孟の後孔孟の行をあやまらん者は、皆異端に入べし。顏子閔子のつかへざりしは、貧なれども、日本の地士のごとくにて家業あり。孔聖は大德にして、湼にすれども緇まざるの神人なり。小官をも辭せずして、人の家臣となり、文武をおさめて、國用にあづかり給ひき。道學を說を以產業とし給へることなし。然ども四方より來て、禮樂を學び、門人といふ者多かりし。此風堯舜の御代にはなき事なり。司徒敎官ありしかども、門人ありし事をきかず。此上より命じ給へばなり。我と道を說て、世をわたるの理なし。此實孔子にはなき事なれども、外の似たるが故に、後世のあやまりの端と成ぬ。夫孔子は天吏なり。春秋を作爲して、天子の事を

集義外書卷之六

脫論　三

一○心友問曰○世間の儒者の君子の儒にあらざる事は命を聞ぬ○今時、心學者格法者朱學王學陸學など〻て、色々わかれていへり○何れか是にて侍るべきや○　答曰○三皇五帝三王の御代には、儒者といふ者なし○儒の名は初て周官に出たりといへども、後世の儒者と云者のごとき事にはあらず○周官にある所の儒といへども、士君子の重職にはあらず○郷里にをひて道藝を教る者とあれば、小學にして六藝を敎るの師儒なり○士君子といふは、今日本にていはゞ、武士の武道に達せる人の、生付仁愛無欲なるあらん、此人に禮樂文章あらば、古の士君子たるべし○秦の代より、天下亂世なる事久し○士君子皆武事にのみかゝりゐていとまなし、子孫はいよ〳〵無學に成行て、道をしらざれば、師儒の民間にをちとまりて、其子孫にもおしへ、まれにしたがひ問者に敎へしなり○されば古の事をかつ〴〵傳へたるものは○此小官の儒のみなり○鳥なき里の蝙蝠とやらんにて王侯卿大夫といへども、此儒に聖賢の事を尋學てより此かた、聖人の道を儒道といへるなり○日本の武國も、世治てしづかなれば、武士も武道に疎くなりて、藝者に武道を指南せらる〻がごとし○戰國の時、古郷を離れ、跡を失ひて、日本のわたり奉公人の樣なる者多くなりぬ○兵亂やむで後、此わたり奉公人、日本の軍人のごとく成て、文學して遊說する者あり○官職祿位なけ

るなり。十一の事はさてをき、十が二三とりても不レ足。農に兵なきゆへに、民奴僕と成てとる事つよく、いやしく成たり。故に農兵の風たえて後は、一旦おさまるといへども、君も士も民もはなれ／＼に成て、はて／＼は惣つまりになりて、亂世となる事はやし。 問。農兵はつよきものなりと承及侍り。常ゆたかに、戰陣つよくは、是ほどよき事は侍らじ。昔のごとく農兵にかへし度事なり。しかれ共今の武士たる者、同心仕間敷か。 云。急には成まじき事也。道行はれ學明かになりなば、自然には成事あるべし 人君たる人のためにもよく、諸士のためにもよき事あり。當分は民少し同心すまじきなり。しかれども民のためにもよき事なれば、一二郡も其法行はれ、民ゆたかになりたるを見ては、いづれも同心すべし。君子は業をはじめ統をたれて、繼べき事をすといへり。世をへて後むかしにかへり、貴賤上下共にゆたかに、治世久しき事はなすべし。

問。代々賢君出たまはゞこそ、左様にも成べく候へ。一代の間に、成功なき事は覺束なし。

云。誠の心ありて、道時にかなへは、相繼て功をとぐる人出來もの也。學校の政だによければ、繼君は次第によき人あり。大夫士ともに、子孫はます／＼よく成ものなり。 問。其法はいかゞ。 云。日本の今の時所位あり、より所ありといへども、跡によるにあらず。時に當てはなすべし。かねていひがたし。

集義外書卷之五 終

一には過ず。日本にては貢助徹の中、いづれか用らるべきや。　云。王代はいふに及ばず。武家の代と成ても、貢法を用られたり。古の制の殘りたる所まれにあるを聞に、皆十一の貢には過ず。日本の土地には、井田の法は用がたし。中國にても、日本の土地の樣成所にては、皆貢法を用たり。　問。今の制は四分六分なり。四分百姓とり、六分地頭とるといへり。今日本にて、十一の法を用ひば、大身小身ともに武士は一年も立がたく、却て亂の端と成べし。古とても、日本には行はるべしともおもはれ侍らず。　云。四分六分にして、六分年貢となり、四分百姓とると云は、上田の水を入れば田となり、水を落せば畠と成、麥作米よりも多出來て、田麥には年貢なき所の事也。中田は六分百姓取、四分年貢となる。下田は十にして二斗年貢となり、八斗百姓とらでは立がたきものなり。むかしは中田は、一年地をやすめて作せしかば、上田の取實に及べり。下田は二年やすめて作すれば、上田の取實に及たり。故に中田は地を受ること多し。かくて十にして一を年貢にさゝげたり。不易の上田は、京の東寺邊の地のごとし。今の世の勢にて、十一の法はおもひもよらぬ事也。日本も今とむかしとは大にかはりあり。むかしは農と兵と一にしてわかれず。軍役みな民間より出たり。武士みないまの地士といふものゝごとくなり。いまのごとく城下へ出て、屋形をならべ居ことはなかりしなり。士と民とわかれずして、十が一を出したり。別に士を扶持する知行とてはいらざるなり。恭儉質素にして、驕奢なければ、ついえなし。十一にしてみちたれり。今は士と民とわかれて、士を上より扶持するゆへに、知行といひ扶持切米といひ、多い

伎こそなけれども、國主城主家中に武藝をならはしめむ事を願ひて、弓馬鎗太刀等の上手を扶持せらるれども、其益なきもの多きは何ぞや。　云。其師の所へあつまりて、稽古する者の中に、人のあしきものあり。わかきものをひきそこなふ事あり。萬能一心といへるとはざにて、稽古せざるものにはなんなし。稽古するものは人口にかゝる事あり。父兄たるもの、是をいとひてつかはさず。是武藝の師ありて益すくなき一なり。學校にては、奉行目付有。其上に外にて私の參會を禁ずれば、人がらよからざるものありても、人をそこなふ事あたはず。勝れて其實をとぐべきものをば、又學校にて別に會日をなすべし。學校の品は、備陽の學校の立やう、武家の情にかなへり。後世法をとる人あるべきか。

一。心友問。夏后氏は五十にして貢すといへり。一夫五十畝を受て、五畝をかぞへて年貢にさゝげたる也。殷人は七十にして助すといへり。始て井田の制あり。六百三十畝の地を畫して九區とする時は、一區七十畝なり。中を公田とす。其外八家各一區、七十畝を受たり。其力を備て、公田を助耕して、其私田に稅せず。故にこれを助法といふ。周人はこれをかね用ゆ。百畝にして徹す。鄕遂は貢法を用ひ、都鄙は助法を用ゆ。耕すときは八家力を同して作り、おさむるときは畝をはかりてわかつ。故にこれを徹と云。其實は皆什一なり。貢法は十分一を以常の數とす。助法徹法とは九一なりといへ共、廬舍を公田の中より取。商人は十四畝をとり、周人は二十畝をとる故に、商民は七畝を公納とし、周民は十畝を公納とす。或は井をなし、或は井をなさずといへども。什

の國俗にかなふべき事はいかゞ。　云。和漢古今共に實はかはりなし。國俗と時勢によりて、右を先へするか左を先へするかのかはり有べし。今日本の國俗は、武を專にして文を用ひ侍らず。しかれ共文なくては一日も立がたき道理あれば、常に文を用て不ㇾ知のみ。今の人情を本として學校を取立ば、右を先とし、武藝の上手を置て、十五以上の子は弓馬兵法を專にし、日々に武藝に進み、しるしあらば、諸士學校の益を知べし。　問。何をか常に文にをると云や。　云。正月元日よりはじめて、太刀折紙鳥目等を以て、君臣の禮を行ふは文なり。上下羽織はかまを着し、主客の禮義をなし、音信往來するも文なり。祭禮五節句朔望婚禮元服、病をとひ死をとぶらふまでの事、文にあらずといふ事なし。幼少は八九歲より十三四まで、寺へあげて手習うたひ文字よみせさする、尤文なり。寺へつかはすは氣づかひなる事多しといへども、無筆無學にては事とゝのほらざるゆへなり。いにしへ武道の盛なりし時は、文なきを耻と思へり。此故にむかしの武士には能書文學の人多かりき。楠正成其子に遺書せしも、勤學の事を第一にいへり。後世武道おとろへてより、却て文道をいひさみして、文盲を耻とせざる風俗となれり。類多く成て其非を常とせる也。學校によき師を置、目付役人有て、口論不作法なきやうに法を立、十五以下の子に、手習うたひしつけかたなどを敎へ、十五以上は、弓馬兵法を第一として、手習文字よみをも其身の望次第にまじへならはしめ、其中道に志有人をば、別にひきわけて、四書五經を講習し、禮樂弓馬もとりわけ委しく稽古し、文武二道の士出來れば、今の俗國をも變ずる事あるべし。　問。學

かしこまるには、乘物の内より手を出して過給か、近臣をつかはして色代せしめても可なり。今の風俗にては無禮とせず。しかるに毎度乘物よりをりて、誰殿めし候へとのたまへり。一度此禮に逢たるものは、對馬守殿とみれば、よき路して苦勞かけじと思へり。親父土佐守殿より古禮を失ひ給はぬ家傳なり。其外山内一家は禮義正しといへり。備後三澤の城主淺野因幡守殿のたまへるは、一旦の幸にて諸侯となり城主となるといへ共、五三代前は肩をならべたる武士なるに、馬よりおりてかしこまるはわきまりなる事なりと。今はそれ程まで心の付人もまれ也。しかれどもよの常と成たれば、國主城主の無禮はさのみとがむる人もなし。たま／＼むかしわすれぬ人あれば、めづらしきやうなり。陪臣を又ものとて甚いやしむるは、東夷の微賤よりおこる事ともいへり。尊氏の末の代にも此事あり。其時分の物語に、諸士の尊氏家をうとむはじめにて、ほどなく亂世と成たるとなり。齊の桓公の臣管仲が天子に朝せし時、三公の次上卿の位を以て禮を受たまへば、管仲辭して下卿の位につきたりといへり。上代聖主賢君の御代にも、陪臣にはよはひせずとて、路次座列年かさにても、陪臣はかたしたがひ、次座につくを以て直臣陪臣の至極の禮とせり。今の禮は失禮なり。王者の天下の權を失ひ給ひしも、武家の代の長久ならざるも、諸士の心のはなるゝによれり。

一心友問、學校の政は、人の才德を生じ、民のまどひとけ、人君位を不レ失、士民風俗あつく、天下長久の備と承侍れども、我朝王代の學校の躰はしり侍らず。唐の法はあいがたかるべし。日本

大半の身すぎの出家と後世の儒者とをくらべば、いづれ勝劣はあるべからず。就中佛者の大欲心、亂行の者をとり出せば、世間の凡人にもまれなる悪人多し。儒者ならば刑罰にもあたるべし。出家ゆへにのがるゝものあり。しかれば悪はまさるとやいはん。聖學の徒は、儒者と名のらざるたゞ人の中にあり。人道の常なれば、別に作りて世人の耳目をおどろかすべき事なし。歳寒して松柏を知、世亂て忠臣を知なれば、大變にあひなば其德あらはるべし。聖人の學は平地のごとし。異端の學は山のごとし。山高しといへども平地には及べからず。山にして嶮岨を行とは目をおどろかし、平地にして大道を行とは人おどろく事なし。出家にして器量あり、をしきといへるものを、げんぞくせさせては、かはらぬ平人なり。つき山にしては高きと思へるも、ならして平地とすれば、小村にもみたざるがごとし。こゝを以て君子の德の大なる事を知べし。

一。朋友問。歩行の人に逢て、馬乘物より度々おるれば、乘べき隙なし。をりざれば無禮なりといへり。しかれ共、近頃はをりざるもの多し。人なみにしたがひて、くるしかるまじきか。云。心のたてやうにて苦勞ともなり、いさみとも成事多し。むつかしきと思ふゆへに、苦勞なり。故に無禮もあり。人の善をするは、仁義禮智信より高きはなし。禮を行ふは、善の大なるものなり。貴殿善を行ことをたのしびたまはゞ、其度をるゝ共苦勞なく、却ていさむ心あるべし。幸に武士なり。年盛なり。馬の乘をり、乘物の出入にも、身をかろくするは心がけの一なり。人に禮を行ふのみならず。武士のたしなみ其中に有。四國の山内對馬守殿は、諸侯なり。陪臣の馬よりをりて

といへり。みづからおもひ立ものも、成佛得脱の志にて出家するものは、萬億の中に一人もまれなり。武士にはなりがたく、農工商とも成がたければ、せんかたなくして、後世の爲に出家せり、まれによき坊主のあるは、子の生付あしからねども、かたづくべきやうなきゆへに、坊主の弟子にする有。これも我とおもひよらざる事なれば、つとめはよからずといへり。近代の儒者も又かくのごとし。おほくは市井の中より、渡世のために儒學したるもの也。武士の中より出たる者ありといへども、器量なき子をば醫者になりともせんとて、儒書をよませなどし、或は醫者の子の文才あるもの也。醫者出家ともに、出生は大かた筋いやしきものなり。いやしからぬは人あしく。よき人はまれなり。故に佛者儒者、なりたちはかはらざれども、出家は多き中なるによりて、まれに能ものあり。儒者はすくなければ、まれにも能ものありがたし。人みな何事も、あてゝする事あれば、つとめ易しといへり。佛者に修行殊勝なる者ある事は、往生極樂の願あり、出離生死の志あるゆへなり。山人は大方やはらか過て、戰場をはをそるれども、唐天竺へわたり、其外海陸の難をしのぎ、あやうき所を往來するとは、武士の及ばざる勇あり。かしこに行て利あるとをしれはなり。一時西方極樂、南方無垢淨土等の虛をわきまへ、天地の理に輪廻なき事をさとらば、何によりてか殊勝の修行あるべきや。又一種の佛者有。實は名を求め利を好むといへ共、無欲清淨を作りて、人に信ぜらるゝあり。無欲の眞似に利ある事をしれば也。億萬の中に、能僧十人あらば、五人は作り者なるべし。其眞實道心の者は、釋迦達磨より初て、根本にまよひある故なり。

るとゝいへり。鬼は形なければ、事にのすべからず。しかるをのすると云がごとし。虚説讒言のまことしきをも、むかしの事、よその事などには、まどはざる人も、身の上になりては辨へがたきものなり。孔門の曾子は賢なり。國中に同名の者有て人をころせり。名の同じきがゆへに、あやまりて曾參人を殺せりと告るものあり。賢子曾參の母、杼を織けるが、少も不ㇾ驚して、はたををる事常のごとし。又來て告る人あれども信ぜず。又來て告る者あり。其時母杼をなげ捨て走れり。夫曾子の賢と、其母の信とを以てだに、三たびに及ぶときはかくのごとし。聖賢の知にあらざれば讒を信ぜずと云となし。しかる故に聖賢は、讒の入べき事を恐れて、讒者を近付給はず。凡人は吾知に自慢して、讒などは聞いれじ、何事をも廣く聞たるがよきなどゝいひて、讒者を近付ぬれば、終に善惡をあやまりて、後世のそしりをいだせり。いはんやそむくところに、そむくとのあつまるをや。

一。朋友問。佛者には修行の功つみて、理に達し行跡よく、殊勝成者あり。儒者に好人なきとは何ぞや。　云。しかり。其本をたづぬるに、この勢ひあり。しかれ共、今貴殿のいへるは、億兆の佛者の中より五人七人えり出たるものと、百人にもたらざる儒者の中にてあしきとをくらべたる也。佛者千人の中、九百九十人餘はあしく、五六人は無事なる凡僧あれば、これを出家らしきといへり。凡僧ならぬといへるは、千人の中に一人、一万人の中に二三人なるべし。故に佛者もいへり。坊主のかくあしきこそとはりなれ。子多持たる者、何にもならざる子をば、坊主にせん

れ人しらずして世に功あるは陰德なり。此陽報は後世かならず道行るべきか。　云。德と害とは。いづれか多少ならん。此後の事知べからず。　問。終に見もせぬ人の賢知の人をにくみそむくは何ぞや。　云。是人情のかく成行勢あり。賢知の聞えある人をにくむものは、愚にあらず。必才知あり。勇强にして爭心あるゆへに、己にしたがふものを好し、まされるをにくむ心あり。睽の上九に云。睽孤。見レ豕負レ塗。載ニ鬼一車一。先張ニ之弧一。後說ニ之弧一。非レ冠婚媾。往遇レ雨則吉。上九に睽のときに當て上に立り。强剛にしてみづからよしとす。賢知の助なきは、そむひてひとりなり。我知に自滿して。賢に降らざるのみならず、才德の聞えあるものあれば、己をそしるとし、したがふとのみ思ひて、忌惡むと豕のけがらはしきが、しかも泥を身に塗りたるをみるごとく、阻て嫌へるなり。上に立人賢知をにくむとしるときは、小人是に力を得て、種々の虛說を云、讒をいるゝものなり。鬼を一車に載るとは、無きとを有とするなり。惡む心よりは、人の無とを云をも、あるごとく思へり。然共本善人にして正しき人なれば、實の敵にもあらず。にくむべき事もなし。先には弓を張て、射むとするまで怒しかども、後には弓を弛してやはらぐ也。陰陽交て和するときは雨となる。婚媾の理なり。物極れは必ず變ずるは常の理なり。そむくと極れは、反て和する時有。君子たる人、一旦の災難によらずして、正理を守て時を待べしとなり。又惡まるゝ人必しも君子にあらず。にくむ人かならずしも小人にあらざれども、情のそむく所よりはなれゆきて、そむくものゝ所には、そむくものゝ言聚るものなり。虛說造言ともに、なきとを以てあ

なり。萬物皆かはらず。人の形尤も同じ。何ぞ心ひとつかはるべきや。おもはざるの甚しきなり。

一。心友道の行はれんことを願ふものあり。告て云。吾子馬を失はむか。睽の初九、喪レ馬勿レ逐自復、見二惡人一无レ咎と。それそむひて道行はれざる時、下位に居る者、身に道學有ても、世に學を起し、道を行はんと欲する時は、遠く往むとする者の、馬を失ふがごとし。願て獨其身をよくするときは、害ある所なし。遠く往むと欲するの思をやむるときは、馬を逐求ざれども、馬自かへりたるがごとし。此時に當ては、惡人といふとも避べからず。形同して心異なるべきのみ。小人を見しらずして心を合するときは、終に必そむくものなり。初より異ならば、何ぞ睽べきや。道を學ぶものは、心寬弘なるべし。我より人をさけば、人何ぞ睽かざるべき。人は人と交るべし。小人といふともさくべからず。䷥は火はのぼり水はくだる。其志不レ同。しかれども躰を合て一卦となる。二女同居して其志不レ同といへり。是君子と小人と、其志異にして、同く世に住の象なり。又今のとき。道行はれず。學者と世間とそむけることは、世間の罪にあらず。世に道學の名あらはれ、道を學ぶと云人あれども、世にをひて益ある事をきかず。かへりて害ある事多し。道學いよいよ世にうとまるべし。道の行るべからざる勢なるべし。害をなすものは、心のまゝに動く、害をとゞむべきものは、其害をなすもの、罪をかうぶりて、動ことあたはず。世人其本を不レ知。これも又命也。世人の罪にあらず。道學の名あらはれて、世に大に助あること一あり。むかしのまゝならば、あやうかるべし。然共此義吾人の口より出すべからず。是又人情を知所なり。　問。こ

周のをそれる魚、航に飛入たるを、悦びよみして燎給ひしは、いやしといへるとはりなり。いかゞ。　云。稍て符瑞を告れども、みづからの徳の薄きを省て應ぜざるは、まことに奇特なり。それ周の魚は自然の天應なり。王も無心にして其天の賜をうけ給ふなり。後世の福を求るに汲々なるものゝ、さしもなき事をみても悦とは、天地隔別の心なり。虚名を好み福を祈るの心なければ、人のいはん所をはかりさくるの意もなし。人をみるには、徳と功とを準的とす。ほめそしりによるべからず。この故に、古人は人倫明かならず、政刑道なき世に、豐年のあるをは、却てあやしき事として書置り。しかれば政みちなき世には、天災地妖たえず。五穀かはる〴〵熟せず。まことの豐年といふ事はなかるべし。近世の佛氏は、是より甚しきものあり。世の中のよからず、災害のあるをば、末代濁世の常とゆるし、國君世主の恥とも戒ともせず。かくのごときものと思はせ奉りぬ。儒者のたま〴〵直言するものあれは、そしると名付ていひをとし、小人に惡人のゆるしを出すのみならず、君子にも無道のゆるしを出すものなり。古の賢君に、時の運によつて、水旱のうれひあるをも、自己不德の罪なりとして、なげき給へり。大君に、天地の萬物を生育し給ふこゝろを用ひて、王となり上といはれ給へり。國主は主上の德により、山川のよく雲雨を起す功用にたがはずして、諸侯となり給へり。故に豐年しきりにいたりて災害生ぜず。禍亂をこらず。是を天地人三才一貫といふ。聖人の禘の祭の義を知ものゝ、天下を治ると、其掌を指がごとしとのたまひしも、こゝにあり。天地日月星も、堯舜のときの天地三光なり。春秋も堯舜の代の春秋

家をも養ふべきものなるに、少のみつぎもせず、みる〳〵難義をさせ、本の不義にをとし入たり。此富人つねの商人なれば、不レ及二是非一事なれ共、學者だてをして、天下の道學を任とすといへり。然るに餘いふかひなく、本意なきと也とかたりき。　云。則たゞ今申たる富人の學者なり。少にても金銀を出して人をたすくるなどゝある事は、する事とも思ひ侍らず。　云。それが市井の常ならば、風躰も常にてよかるべし。　云。いかにしても、申所は道理よく侍り。また行儀も見事なる者なり。　云。仁なく義なくして行義よきは木佛なり。いふ所の道理にかなふ事は、聖賢の書をよめば、書の道理なり。

一。學者問。鳳鳥は神聖の御代にあらはるといへり。然るに後世には、賢にだにも及ざる時代にも、度々出たりといへり。世の學者清義を失ひて、禮をまたずして動故に、鳳も又德輝を見ずして下れるか。　云。これ眞の鳳にあらず。上たる人道をしらずしてたゞに虚名を求め、或は愚なるに、かくしづかなる事は、いにしへもあらじなどへつらひいへば、まことに天地に符瑞もあるかと望まるゝゆへに、又虚瑞をいへり。たとひ眞に鳳凰の形ある鳥出るとも、上の德神聖ならず、人倫明かならずば、鳳の妖怪成べし。鄕愿の君子にばけたるがごとし。これ妖物なれば、かへりて愼みあるべし。しかるに鳳を見たると云所の民には、役をゆるし祿をたまへば、みだると云とのある理也。

一。問。符瑞いたれども、德うすしといひて、あへてうけ給はざりしは、まことに賢なり。しからば

ずして己が爲にす。故に仁に近し。
一。朋友問。我しれる町人に、學を好者有。見たる處より、町人の樣にもあらず。武士の躰のごとし。學力のなす所か。　云。町人のやうになきとは、市井の利心なきといふ事か。武士の躰のごとしとは、貧困を助けすくひなどし、義理のたのもしき處有といふ事か。　云。さにはあらず。こ刀をさし行儀よく、常に學者交りのみ好て、利害にかゝはらぬやうに見え侍り。　云。是實の學にあらず。町人にして問學せば、町人の風躰にて、よき町人と見えて、心ばかり衆に異なるべきこそよからめ。町人にて、風躰を武士に似せぬる事は、町人は人のいやしむる者なれば、人の下なる事をいとひて、分を過し品をこえて、人の上たらん事を願ふものなり。風は商に異なれども、心の勝心は市人よりも厚し。これをきどくとし學者とせば、人をひきいて相爭相勝の凶德を致るなるべし。風躰は商に居て、商を行ひぬれ共、心は市井のそまりなく、義理のたのもしき所ありて、人を助すくふの仁心ありといはゞ、まとに奇特なるべし。昔人の物語せしは、長袖の家人に生村、欲すくなく實によきものあり。　問。學して文才もあり。其身親の代より富有なり。しかれ共。不義の富なる事を知て、わかはだかになり、ならはぬ鍬をとりて、野にたがへせり。かくてつゝくべきやうなければ、妻子のなげき耳にみち、心しほれたる折節、古主よりしゐてむかへたれば、歸參しぬ。今は心ともに落入て、是非なき事と思へり。今時市井の中には、これほどなる人品もなし。おしき事なり。其舊友に、富るもの二三人あり。かほどの家人十人二十人は、幾

此とき初て、君子の心地を覺給ふべし。

一。故者の無實の流言によりて、喪する者あり。親類知音これをいきどをり、共に喪して、此讒人をうつたゑんといへり。これを聞て告て云。一人喪するだに禍なるに、親類知音又喪せんといふは禍をかさぬるなり。今讒人は、貴方だちのあだとし思はん事を恐れん。貴方達、讒人をうつたへて利を得ば、喪せんか。然らば讒人却て貴方達をあだとせん。これ又禍の種をまくなり。罪なくして喪せば默するにはしかず。大辨は辨ぜずといへり。誠は不レ言してしらるべし。且喪者は年わかし。年來仕にいとまなくして、無藝なる事憂とす。今幸に、天より文武のいとまをあたへたり。此時文學武藝に達べし。親類知音の子弟までも、喪者によりて學びば、幸甚ならずや。讒人はあだにはあらで、福神也。恩を以て報謝すとも可なり。何ぞあだとしうつたへんや。

君子陰中に陽をみる事常にかくのごとく、禍を變じて福とするものなり。其上貧賤憂戚は天道攸好德の慈命なり。寸陰ををしみ日を愛すべきの時なり。喪者つかへをなすべき時節に當りては、前の位祿にこゆべし。爭訟の事をなさば、十分に利を得とも、今の人情にあしかるべし。くじをせし者なりといはゞ、扶持し給ふ諸侯有べからず。一類中は、年來の主君をすてゝ、徒黨を立し罪あらんか。一朝のいかりに其身を忘れ、憂を親に及すのまどひをなし給ふべからず。

一。心友問。剛毅木訥の質、いかゞして仁にちかきや。　云。剛毅の人、道を學ぶときは、其勇力を用て、物欲にひかれず、利害に屈せず。木訥の人、素朴遲鈍の生付にもとづく時は、外にはせ

はむきばかりにて、とかく親みうすく侍り。何事ぞのときも、獨身のやうなる者なれば、其職分を失ふべきやと、なげかしく侍り。何として人の親み出來侍ぬべきや。答て云、御同役の人、天質寛裕温柔にして、父人親と成べき器量あり。御家中を引廻し給ふは幸なり。國用軍用共に、うちまかせてはからはせ給ふべし。大勢のなつかぬを、親まむと勞し給はんよりは、御同役一人を親みたまふべし。自然の時も、貴殿は一人の武勇をたしなみ、家人をよくとゝのへて、御同役を助たまふべし。無事のときは、一人我身をよくし、外に用る財用を内に用ひ給はゞ、家人多してゆたかなるべし。心やすき事に侍らずや。御同役の人は、貴殿の名代をし給へば、その厚恩忘れ給ふべからず。一日のすけ番をたのみてだに、報禮ある事なり。いはむや終身のたすけなるをや。貴殿主君の忠をゑぼうしに着て、御同役に人の思ひ付をそねみ、我にしたがはん事を欲しぜ、つとめ給なるべし。其爭のをとなしからぬ凡心には、諸士の親み有べからず。貴殿書をよみ給ふは何のためぞや。許由は天下をだに辭して、帝堯を代官とし、天下を平治せしめて、山の田舍の閒にたのしめり。いはむや一國一郡の勢を人にゆづりて、みづからたのしむ道をしらでは、いつの時にか凡情をまぬがれ給はん。夫禮儀のせむる所か、人の志にこたへ、親みにまじはるごときの不ㇾ得ㇾ已の振舞、音信等はし給ふべき事なり。さもなきに心を起してなす事は、無用のついへ多かるべし。主君への奉公に成べからず。家人百姓等に、めぐみ給はゞ忠ならん。閑來無事のとき、よく氣をしづめ心をすまして、凡情のまじはりを察し給はゞ、例のゑぼうしぬぎて、獨笑あらん。

集義外書卷之五

脱論　二

一○朋友問て云○黄金白銀は乾坤の至精なりと申侍れば、多ほり出して異國へ渡し侍る事は、いかゞと申人あり○又有を以て無にかゆるは、常の理なり○人道は文章ある事なれば、唐のおり物を來して、衣服の美をなすとも禮なりと申人あり○いづれか是にて侍らん○　答て云○日本の四海にすぐれたるといふ事は、國土靈にして人心通明なるゆへなり○近世は國土の靈もうすく、人もおとりゆく事は、山澤の至精をたくはへ、かくさずして、金銀銅鐵多ほり出し、異國へまで渡し、山あれ川淺く成たるゆへにてもあらんか○又有無をかふるといへる事は、かへずして不レ叶物なり○藥種などのたぐひなるべし○糸類の物は、唐物を來たさずとも、政道のありやうにて日本の中にて事たるべし○昔から物すくなく、日本のきぬのみ用たる時は、かへりて人道も風流に侍りき○近代から物多きて、けつかうなれども、人道いやしくなり侍り○人も才知のあらはれ過たるよりは内にたくはへて、徳を養ひ、時に用るこそよく侍れば、金銀も世中に多すぎたるよりは、國土の精と成て、山中にふくみたるやよく侍らん○

一○朋友問て云○拙者と今一人、兩人むかしより、家の老にて侍り○同役には、家中の者よくなつき侍り○家中のおもひつくは、主人への奉公と思ひて、切々ふるまい音信、心入も致侍れど、う

佛も神に成かへりたるなり。神と成ても、仁慈の德なきものは靈なし。靈なければ佛なり。吾もと虛靈不昧なり。あたら身を何の用にか佛にせんや。萬物は本無より生ず。形あるものもまた無に歸す。いはねども空は常住なり、有ばかりなり。いらぬ所へ空に名をとり出すによりて、空の形になづめり。されば叉眞空の靈名をいひ、中道の名をかる、凡夫は名利色にまよひ。學者は色空中にまよふ。無病の人にくすりをあたへて、煩をなす事なかれ。

集義外書卷之四 終

の衆生ともいふべきか。朱學の者は、朱學に入者ならでは、道德を學ぶ者にあらずと思へり。王學の者は、王學に志す者ならでは、好人にあらずとおもへり。大道には何の生付かあらん。何の風のちかき者と、えんある者とあらんや。三皇五帝三王の御代には、此かたよれる緣のものなし。世の大道なきによつて、ある質なり。人いへることあり。我慢がたきの者は禪に入、情こはき者は日蓮宗に入、愚痴なる者は一向宗となり、禍福の心あり、みこ〱しき者は天台眞言となると。何にても時の人の生付、かたぎに近きおしへだにあれば、そのたぐひのものむらがりこぞれり。我と愚との二にて、尊信する所の道には、邪正の辨へなし。僧云。佛法をしらで、たゞに儒道の理を以いひては、佛緣をむすばでは、とく佛になる事はあるべからず。云。其身は佛を至極と思ふゆへに、佛に成たく思へり。我は佛に成たくもなし。緣をむすびたくもなきなり。歌に云、「あたら身を、佛になして、何かせん、たゞそのまゝの、一二三四五」。僧云。それは地水火風の假合のかりをとめ得て、常とおもふなり。甚まよひならずや。歌に云。「引よせてむすべば、柴の庵にて、とくれば本の、野原なりけり」。云。大本を不ㇾ知して、末にまよふ故に、かりの名あり。我其歌の返しせん。「引よせて、むすぶ庵の、柴なれば、とらねど本は、野原なりけり」。一二三四五則空則中なり。佛は無の稱なり。ある和尚のおいの死たる時よめる歌に、「なげくまじ、なきこそ本のすがたなれ、とは思へども、ぬるゝ袖かな」。不仁の者、佛緣をむすんでよく佛となる時は靈なし。仁愛ある者一旦佛學にまよひて、成佛すれども、天性の德ほろびずして靈有。靈あらば

かならず仁愛なり。

一。朋友曰。今時すぐれて後生を願ふ者の中には、心腹あしく惡人なるもの多は、いかなるいはれにて侍るや。　答云。此論有。坊主のすゝめのあしきゆへなりと云者あり。ある婦人これを聞て云。愚痴なる故なりと。此義あたれり。後生をすぐれて願ふは、心の愚痴なる故なり。くらき所より心腹もあしく、惡人ともなるなり。

一。僧に問て云。世中の出家の言に、慈悲善行ありても、佛緣をむすばざれば成佛することなしといへり。僧は何と心得られたるや。　僧云。勸學院のすゝめに蒙求をさへづるといへり。是緣なり。勸學院にすまではさへづるべきやうもなし。佛をねがはでは成佛すべきやうなし。　云。佛に成ものはこゝろならずや。自力なき者に緣を外よりあたふるとも、何者か成佛すべきや。惡心惡行ながら後生を願ふとは、何事ぞや。　僧云。他力なくしてかなひがたし。佛を願はんと思ふ心のおこるは亦自力なり。　云。釋迦のあらゝ仙人につかへられしは、道を求るの自力によりて、他力をたのみたる也。文珠等の諸弟子は、釋迦の敎の他力によつて自力の發心あり。今佛者も慈悲無欲を敎て、其本心をひらき、佛道をねがはしめば、他力ともいふべきか。今の佛緣の他力は、本心を亡して、惡心のたねをうへ、かたむきに我執あらせて、佛緣をむすびたるとはいへり。苗をぬきすてゝ莠をうふるがごとし。佛者のいへるはよぎもなし。我道にも似たる事あり。朱學に入者、王學に志す者、俗學となる者、各生付の風あり。これをもいはゞ、緣をむすぶとも、えん

欲無我にして万物を以一躰とす。其物をあはれみ施しすくふとは、無心自然の用なり。こしらへてするとなし。天竺の者は、禽獸に近し。是故に義理の性明かならず。性理の仁をしらず。婦人姑息の愛あるのみなり。中國の人大道をとり失ひたる最中なれば、自然と仁德は固有しながら、我も不ㇾ知。長生不死の仙家の說にまよひしより、すぐに佛說にまよひて、仁と慈悲とをだに同じやうに覺えたるなり。日本にては、其あやまりをうけたるなり。しかれども日本は大陽の出給ふ國にて、神人靈なれば、仁德の心に明かなる事中國に同じ。いま敎さとする人なかりしかば、みがゝざる玉の石にまがへるがごとし。　問。しからば聖人の無欲と佛氏の無欲と又ちがひありや。

答云。大にたがへり。佛氏は其日暮しに物を蓄ずおしまざるを無欲として、無欲を事にこしらへたるものなり。又これ理をしらで、氣のみをとれり。馬の大豆かゆをくらひて、腹にみつれば、口にくはへて、こぼすがごとくなる事を以て、人の無欲とせんや。人道の無欲は大に異なり。たゞ義ある事を知て利をしらず。其義にしたがつて私心なきを無欲とす。とるべき義あればとり、あたふべき義あればあたふ。蓄べき義あればたくはへ、施すべき義あればほどこす。只心の義にしたがふを無欲とし、利によるを欲とす。とるととらざるとの上に、無欲と欲とをたてず。事の上に立るときは、無欲を作て身に利あるときは、無欲者と成事は、無欲に似たれども、心は利によるなり。それよりよきは、名によつて無欲を嗜み、或はかくのごとく修行して、後生に成佛すと思ふもあり。或は無欲を作て、一生のすぎはひとする者もあり。眞の無欲はかならず謙遜なり。

たゞ凡俗の利欲と、方便のまよひとを、ぬけ出たるのみなり。問。利欲なくまよひなくば悟にあらずや。云。其さとりと思ふもの、則まよひなる事を不レ知。釋迦よりしてまよへり。まよはでは、一日も出家しては居ざるとなり。造化の神理をしらで、輪廻と見たり。是故に元本に無明法性を立、生れかはるの見より出て、須彌山をたて、三千大千世界を作れり。佛者の佛知とし悟道とする所は、まよひの根より出たり。根本の神理を見そこなひ異を立るほどなるまよひやあるべき。まよひの心ほどひきゝ心や有べき。一旦まげて造化を輪廻とせば、聖人の言みな非なり。造化に輪廻なきが故に、佛氏の言みな非なり。

一。問。佛者に儒學ひろくして、易學をきはめ、暦律等までしるもの多し。云。根本のくみたてを佛家にてすれば、心のそこにこりかたまりてある故に、儒學するといへ共、餘事として心にいらず。心を置所と、學所と、二つに成てあり。一日も眞實に佛道を行して、出家するものは、後生輪廻のなき事を有と思ひ、又生をうけじの願ひなり。形あるものは一度はなし。草木國土、悉皆成佛道なり。是故曰。佛は無の稱なり。

一。心友問。仁と慈悲とちがひたる事とに思ひ侍りながら、仁といひては人合點しがたき故に、慈悲と申侍り。云。仁を慈悲といひて合點させんよりは、一向に合點させぬぞよき。佛氏の慈悲といふは、乞食に物をとらせなどする事、人をあはれむ事をこしらへて、慈悲とす。これを以善薩の修行となす。それ仁は、天地の物を生育し給ふ根本の生理なり。人に有ては心の徳たり。無

如し。魚の出來たるために水まさず。魚の死するが故に水減ぜず。死生共に、水は常の水なり。其如く、此身の生死ともに、心は常の心なり。春夏秋冬則我心なり。心の中に此身の生出たるは、大虛の青天にうき雲の一むら出たるが如し。死するは其雲のきゆるが如し。身死すれば、此形に付たる情欲の心はなくなるなり。氣は今も天地とひとつなり。天にかへるまでもなく、今よりひとつなり。形は今も地上にあり。死すれば土中にうずみて、土とひとつになる道理なり。氣はたとへば水の如く、身はたとへば舟の如し。氣の有故に、身もうきてありくなり。死は氣と形とはなるゝなり。はなれては地にたをるゝことはりなり。水つきては舟すはるがごとし。氣のあつまりて、人の形をなしたる所には、敎あるなり。敎のつくる所死と成なり。晝一日うごきはたらけば、動の數きはまりて、寢たくなると同じ。數より前にも、鼻口をふさぎて息をつむれば、死するは氣とはなるゝ故なり。何の別事もなきに、釋迦といふいたづら者が、いろ〳〵の僞をいひて、多くの人をまどはせたるものなり。此まよひあるによりて、生て明かになきものは、死する時にもまどひて、心安くは得死せざるほどに、生て明かなるものは、死して安しといひたるなり。生死を晝夜と同じく見て、何心なく死するとなり。

一。心友問。寂滅の敎の高き事、大學に過て、實なきもの、其高きといふ所は何ぞや。　答て云。たゞ言語の妙にして、見解の高上なるがごとし。然ども心の位は、かへりてひくし。言語の高して心のひきゝは、過て實なきなり。心のひきゝと云は、まよひあるなり。悟道のよき佛者と云も、

本にても、万々人に一人は、天竺人に似たる者もあり。然れ共、わさの中のよもぎなれば、其儘をきては、輪廻畔までには至らず。佛說のまよひをそふる故に、初て沈魂滯魄の變も有。　問。東夷は大陽の出給ふ國なる故に、人の氣質靈なりと、仰うけ給はれども、日本さては三韓琉球などこそよけれ。ゑぞ人などは、天竺人にもおとりたると見え侍り。　云。東にも西にも精粗あり、日本三韓は東夷の精國なり。ゑぞは北狄につゞきたる國なれば、東に至りて日本に近しといへども北狄なり。西戎のわしき中にも又精有べし。日本三韓には及ばずとも、戎の精はゑぞ人にはまさるべし。近年まで往來せし商人の物語は下國なり。

一。朋友問。大和西銘に、生て明かなるものは死して安の言葉、佛法の現世後生に似たると云もの侍り。　云。佛法のまどひのこりあるによつて、うたがひあり。佛法わたらざる以前の古人の語に、天道我を勞するに生を以し、我を安ずるに死を以すといへり。死生は晝夜の道なり。晝は種々の所作をつとめてはねをおり、夜は寢て休む道理なる故に、いひたるなり。堯舜の民は、死生をみると晝夜の如し。何のうたがひもなかりしなり。人倫に明かにして、異論のまよひなき故なり。堯舜の民は皆善人にして、惡人なかりしなり。善人にしてまよひなきものには、後生のいつはりをいひてたぶらかさんやうもなし。鬼神の爵利生を以おどすべき樣もなし。堯舜の御代に釋迦を出したらば、一人の氣ちがひものとなるべし。をしへて其狂病をいやすべきのみなり。道を見るものは、生死を以て心を二にせず。人の身の心の中に生れ出たるは、魚の水中に生じたるが

はなし。文筆もつたなし。

一。朋友問て云。釋迦の國は戎狄とて、けだもの半分の人ときく。虫鳥けだものは、生ながら變化して、生れかはるが如くなるものあり。天竺の人は、人の形あれども、人の心全からず。故に生かはる如くなる事もあるらむ。しかれば釋迦の國にては、輪廻の見もあるべきか。人心正しき中國日本に來て、畜類の境界をうつしいふこそ、くらき事なれ。佛者は氣をとめて理をしらずといふも、人倫にあらざる故なり。元本に無明法性ありといふも、陰氣のもとを無明といひ、陽靈の元を法性とみたるなり。　答て云。しからむ。天地の造化に輪廻と云事なければ、畜類とても輪廻せず。しかれども邊土のものは、氣質偏僻にして、神理の照全からず。この故に愚痴に欲ふかし。すぐれたるものは、全く理を失て、畜類にひとし。禽獸はひとむきにてあさきものなるに、人の知識にして禽域に至れば、欲心の思ひ入もふかし。其沈魂滯魄化して、欲ふかきものは畜類と成、我慢なるものは天狗と成。櫻のたねはさくらとなる物なるに、やどり木とて、異形の物生ずるが如し。根本の理にはあらね共、今日の變なり。南蠻西戎北狄は、人の形あるのみにして、けだものなる所多し。けだものゝ境界は、人道にまじゆべからず。　問。日本も邊土ならずや。云。日本は邊土なれども、大陽の出給ふ國にして、人の氣質尤靈なり。天竺のやうに輪廻の變をなすものはなし。靈なる故に欲もうすく、仁にも有が故なり。　問。むかし物語にも、日本にて輪廻妄執躰の者ありし事はいかゞ。　云。天竺の下國にも、釋迦文珠達磨如きの靈なる人有。日

云。これ氣なり。我むかしわかゝりし時、はや道の馬につきても、息あへがざりしに、今は少道をいそぎても、息くるし。老年の故なり。貴僧も年より給はゞ、今のやうにはあるまじ。少はしり給はゞ、息くるしからむ。眞理の功は、年よるほどねれてよきものなり。年よるほどおとろふるは氣なり。いかなる聖賢にても、佛菩薩なりとも、大傷寒煩ひては、うはといはぬといふとはあらじ。瘧をわづらはゞ、ふるひの出ぬといふとはなし。たゞうはとにをひて俗とかはりあるべきのみなり。釋迦に傷寒大熱氣煩せたらば、衆生濟渡の方便のたはことといはるべし。孔子ならば道德のうはとあるべきか。氣を主とするものは、此ときにあたつてみな亂べし。理を主とする者は、其理を知てまどはず。

一。朋友問て云。三敎に空海が書たる地獄の說は、我もまことと思ひて書たるか。人に敎むがために書たるか。　答て云。むかし我友に今の如く尋し者あり。答には、まことと思ひて書たるなり。かれほど博學にて僞と思へば、坊主しては居ざるなり。とく還俗する道理なり。三敎に儒を第一淺しとて端に書、道をそれよりましたりとて中に書、佛をすぐれたりとて奧に書たり。佛者の筆なれば、佛をばよきやうに書、二敎は大方に書たれ共、其書たるまゝの文にても、道よりも儒は高く、佛よりも道は高し。まよひたるものゝ耳目には、佛をよしと思ふべきか。まよはぬものゝ心には、第一によしと思へる佛敎は第一にあしく。淺ましく愚痴なる敎なり。おろかなる道故、愚なる者はよしと思へり。佛者には心根の愚なる者ならではならぬと思ひたまへ。　問。釋迦より其如くなるか。空海が淺學故か。　答。釋迦よりなり。諸經をみるに釋迦はかへりて空海が半分も學問

たるものなるゆゑに、文の力にて經義にも通ぜしなり。しかれども實は我慢にして、人欲のさかむなる者なりき。この故に其身の心法にをひては、心と口とたがへり。又佛に入し事は、かならずしも心からまどひたるとにはあらじ。心根邪佞なるものにて、男色等の邪欲さかむなりしかば、聖賢の門に居ながら、無作法はなりがたきとなり。佛者にして邪知邪欲なるは、世の常なり。其上歌も舞ものりの聲にて、悟りだにすれば、何事をしてもくるしからずと云事なれば、無作法をするには、一段とたよりよし。こゝを以てたよりたる成べし。佛法は本愚なる法にて、愚人のみを敎しに、東坡ごとき者どもが、世々におち入て、聖賢の性理文章を以てかざりたる故に、高上なる道の樣に成たり。　問。佛は其如く惡を以て本としたるものなるか。　云。根本は善をすゝめ惡をこらさむの敎なるべけれども、よき渡世となりたれば、惡人多く其門に入て、惡黨となりぬ。この故に佛者にしてあしきは、とがむるものもさのみなきなり。聖門にしてあしきは人のとがめつよく、其身もはづかしければ、佛に入なり。今時日本にても此たぐひ多し。

一。心友問て云。佛者は氣をとめて眞とす。眞理の主たる事を不レ知と承れり。佛者こそかへりて、天地陰陽の間にをひて、道を行ひ德をなせり。うたがひなき事あたはず。　答て云。理に內外なく大小なし。天地陰陽即理なり。其ゆくとしてはなるべからざる理をしらで、氣のみとめ得たる故に、陰陽超出の見もあり。むかし我友禪者に問て云。座禪して得所ありや。禪者云。終日座してもうむとなし。また火事何ぞといひてはしり出ても、息あへがず。靜坐のときの如しと。我友

なる事なり。欲といへば一向にむさぼるなり。ともに義を不レ知。義なければ恥の心うすし。故に義なきの無欲をば、畜生無欲といひ、義なきの律儀をば、畜生りちぎと云。これは佛者にしては上根の人なり。下根の人と云は、凡夫は欲惡のはずなり。戒をたもち善行をなすは佛菩薩の上なり。たゞ欲惡ながらたすけ給へ妙法蓮華經、むかへ給へ阿彌陀佛と云時は、欲惡を安むじて恥の心なし。善心を亡すにあらずや。是故によく後生を願ふ者ほど惡心無道なり。涅にすれども緇まざるの神明も、佛說によつて地獄に落ると、歎かはしきといふもあまりあり。是をなん彼ちごくにおつるともいはゞいふべき。七竅鑿て渾沌死する成べし。昔文盲なる男の、六十計にて煩けるが、すでに死なんとせしとき、其子告て云。何れの上人和尚成とも、御のぞみ次第に請じ申べし。臨終のすゝめをうけ給へと。かたはらに儒學少したる人あり。病人これを招きて云。釋迦よりこのかたは幾年ぞ。儒者云。三千年にたらず。病人云。それより以前の聖代神代はいかほどぞや。儒者云。それは一万年二万年と云數もしらず、久しきとなり。病人云。しからば其久しき神代の人のなみ〳〵にといひて終き。

一。心友問て曰。東坡は禪傳によく達して、義を取とよかりし故に、程子朱子も其語をとり給へり。しかるに佛に落入、男色にまよひなどせし事はいかゞ。　答て云。仁者は必勇あり。勇者はかならずしも仁あらずといへり。されば文才と心法とも又、兼るとかねざるとあり。心法明なるものは、文理をのづから通せり。文才あるものはかならずしも心法よきにあらず。東坡は文才に秀

しかのみならず。善人の子孫は、かならず福よく、さかえたのしび、惡人の子孫は、かならず仕合あしく、おとろへくるしび、終には亡るものなり。子孫は誰も不便に思ふものなるに、其さかえて長くつゞく事はきらひにて、おとろへ亡る事がすきならば、人の心はなきものなり。人の心なきものには、何をか語侍らん。やどへ歸てよく〳〵分別せられよといひければ、其もの赤面して默して退ぬ。數日あつて來り、大に恥て其罪を謝しき。

一。朋友問て云。さやうに辨へよき人はありがたかるべし。地獄なしといひきかせて惡をなさばいかゞ。　云。我等のぢごくはなし。惡がしたくばせよといふは、人の善心をそだつる也。今時の佛者の後生をねがへと云は、善心を亡すなり。人々の心に天神一躰の神明あり。涅にすれ共緇まず、磨とも磷かず。天地にさきだち、天地にをくる。不義をにくみ惡を恥るは、人心の靈なり。釋迦以前地獄の說なきときは、人に善人多く、國家天下よくおさまりたるは、其證據なり。地獄のなき事をしらせ、惡をなしてこゝろよくばせよといひたるとて、惡のなるものにてはなし。心の神明にはづる所あつて安からざる故なり。犬畜生といはれては、一命をもはたす。いはんや惡人といはれて、惡をなすべきや。おもはざるの甚しきなり。なまじゐに敎んよりは、敎ざるはまされり。手をつけずしてをけば、人々天性の神明あらはれて、恥の心あり。これ愚がいふ所の善心をそだつるなり。又今時後生の事を云て、人の善心を亡すとは、佛者の善惡は、欲無欲を以ていひて、義ある事を不ㇾ知。西戎の敎なればなり。無欲といへば、阿龐居士が財寶を海にすつるやう

によき所へ、生るゝ功德になると云やうなる、理もなき愚なる事やあるべき。人のものゝもらひてをわきにこしらへ置て、出家は法力にて世をわたるといふ。かしこき取やうなり。それを無欲とみる目は、まよひの甚しきなり。富るものは人を愛敬して、志のしるし禮の法を用て財寶をおくるは仁なり。貧なるものは人にをくるに物を以てせず。年若く達者なれば、手足の勞を用るなり。年老たるものは、人を畤するにちからを以てせず。德あれば人にをくるに言をもつてす。かくの如く道明かに理正しくてこそ、聖賢の道ともいふべけれ。貧なる者の志には、ちからの勞をはからで、ひとへ着たる物を剝取て、後世のためとて難儀さするやうなる不仁無道なる事やあるべき。

一。朋友問て云。或云。地獄極樂は有がまとか。なきがまとか。なきがまとならば、いらざる苦勞なれば、後生をねがふまじ。事むつかしきに、善事をもなすまじ。たゞ心のまゝに惡をなして、ゆめの世ををくり侍らんと。我等この返答いたしかね侍り。なきといはゞ惡をすべし。又有といはゞ僞なり。虛言なりとも、有といひて惡をさせぬやまさり侍らん。　云。昔我等にかくの如く尋し人あり。返答には、地獄はなきがまことなり。心やすく思はれよ。惡をなして其方の心にこゝろよくばせられよ。小惡と思へども、積れば大をなすものなり。後々は惡がくせに成て、何ともおもはず。これを惡人と云。惡と人と化すればなり。水はうるほふ所にながれ、火はかはく所につく如く、善人の門には吉事あつまり、惡人の家には凶事あつまるものなり。後生までもなく、現在にして吉事喜悅安樂の心はきらひにて、凶事憂悲恣逆のこゝろがすきならば、是非に及ず。

れば、佛學に心服するものは心根に愚なる所あり。後世をねがふものは、一目もしらぬ道行人も、人相にてしらるゝものなり。心の愚痴相にあらはれて、無知〳〵とみゆ。少も明なる心あるものは、聖人の學を知らでも、又天下の法によつて宗旨はもてども、心服せず。古は宋朝の理學の如きもなかりし故に、歷々聰明の人々も、道を知べき樣なし。楠正成武藏守泰時など、今の世に生れ給はゞ、必ず聖學を受用して賢人たるべし。問。無欲なるものは佛者の中にあり。儒者によき人なきは、儒者の聰明ともいひがたからむか。　云。尤佛者に無欲なる者もあれども、心にまよひありて愚なる所より出たる無欲なり。それも千人に一人なり。惣じて數多者の中には、すぐれてよきもあり。又すぐれてあしきもあり。佛者の中に少よきやうなるものあるかはりには、あしきといひては佛者ほどあしきものは又なき事なり。俗人ならば一日も生てはをきがたき者多し。其上佛者の無欲といふに、こしらへやうと習とあり。金銀を坊主にとらすれども、佛にとてさし出せば、辭儀もせず。とれども取ともみえず。無欲がほしてすてをけ共、後生のため佛にまいらするといへば、誰も手ざゝず。取べきものなければ、取あつめて坊主にやるなり。貧なるものゝひとへ着たるも、志とてぬぎてやれば、奇特とほめてとりぬ。かほどいた〳〵しき事はなけれ共、やるものとるもの、わきにてみる者、共に辨へなし。欲はあり共、儒者にかく手のよきおいはぎするものはあらじ。身に着たるものを佛に供養して、後世のためになるとは何事ぞや。西方十萬億土の阿彌陀、南方普陀洛山の觀世音、東方淨瑠璃世界の藥師佛などへとゞきて、後世

集義外書卷之四

脫論一

一。舊友問。王代にも賴朝北條尊氏の天下にも、歴々智あり名ある執權の人々も、病人あれば醫者のさたはなくて祈禱の事のみ記してあり。あまりに愚なるやうに聞え侍る事はいかゞ。　云。少し學問ありて筆をもとり書記するほどの人は、多は佛學より出たり。是故に他の事はさしをきて、佛法のいけん佛事の盛なる事のみ書たり。これを天下第一の事と覺えたるが故なり。其上守屋の賢臣亡て後は、日本國中に少目のあきたると覺えたるものは皆佛者なり。公家も武家も佛者の弟子なり。神道の敎も、むかしは明なる道理ありつらめども、守屋亡てよりたえてきかず。儒書は文字の學ばかりにて、心法の事はさてをき、外むきの理學といふものだになかりしなり。されば儒佛高下のわかちを知ものなし。たゞ何によらず物を知をもつて手がらとせり。むかしの名僧の武士に敎訓したる語を見れば、皆儒の道理にして、出家の旨とは見えず。佛語は少もなきなり。儒佛の爭なきゆへに、良知の靈によつて自然と出たると見えたり。しかれば佛者則儒者にてもありき。近き頃まで、理を云ふものは只佛者にのみあり。故に聰明なるものは、多は佛者となりたり。修行殊勝なるものも佛者の中にあり。然ば歴々知あり名ある人は佛によるとはりなり。近年は程子朱子の理學ひろまりぬれば、聰明なるものは儒に心よせあり。佛學は次第におろかに成た

不レ存候。又志なくて行儀よき人も、隱微の所しるべからず。去ながら父母兄弟妻子を古郷に置たる人は、一旦他國にあそび候へども、終には古郷に歸るがごとく、隱微の地とかく惡道にゆくまじき人の、善に實なる所あるは、道に志ありて一旦形氣の欲にひかるゝ共、終にはもとに歸るべく候。形氣衰るにしたがひて、道より外にゆき所あるまじく候。志の不實と中にてはなし。實はあれども、明のしばし蔽るゝ所ありてなり。只今飮食男女欲もうすく、行跡よくても、心志の定所なき人は、父母兄弟妻子のあつまりたる古郷なくて、たゞひとり身のうきたるごとくなり。しからば往々何國にとゞまるべきやらん、はかりがたし。今日のよきは、精力つよくして愼みの苦にならざるか、名根のふかくてなすわざか、もしは生れ付て形氣の欲うすきものもあれば、そのたぐひなるべく候。形氣おとろへ行にしたがひて、本の志たる道德はなし。心は昧し、あぢきなくして、後世などに迷ふもあり。愼みおとろへて亂るゝもあり。行過て異風になるもあり。一旦のよきはたのみにならず。月夜のしばしくもりたると、闇夜の晴との如し。雲ありとてもたのむべし。雲なしともたのむべからず。

集義外書卷之三終

人倫と學問と、二になりて一ならざる事をなげきてなり。實に用て見る人は、かならず疑わらん。うたがひわらば、予が主意しらるべし。然らば今に益わる事わらん。古に及ぶべきにあらず。後世に傳ふべからず。予も又一人の天民なり。天の靈あり。いはざるは罪あることに候。

一。來書略。天下の佛者、貴老を佛敵なりと申候。佛者には我慢邪心の者多く、貴老を害ありとして、失はむことをねがふ者候間、御心得わるべき事に候。

返書略。世間の佛者多きこと、千萬を以てかぞふべからず。根を堅くせしこと千歳にあまれり。世中佛者の有ならざるはなし。予が如き不德の獨夫、五尺にたらざる一身を以て、世間の佛者の敵となり、佛法を滅すべきか。つら〳〵おもふに、今の佛者、人間世にをひては、まだ盛勢を失はずといへ共、天命はすでに滅亡におもむけり。その故は、物皆盛衰あり。たとひ佛者あしからずとも、盛なることときはまらば、などか變る時なからんや。しかるに今の佛者、不仁無道なること凡俗に越たり。奢も又極りぬ。これ天命の絕たる所なり。故に予が如き不德の獨夫をも、彼みづから敵とするなるべし。みづから敵を生ぜば、予を失ふとも絕ることわらじ。予が命天にあり。用心すとも失はるべし。用心せず共失はるべからず。

一。來書略。道に志わるもの丶、時として飮食男女の欲にうつるとあるは、志の實ならざる故ならんか。又道に志なくても、行儀よき者あり。先生いづれをかとり給はん。

返書略。心は無聲無臭のものに候へば、みがたき事に候。志ありといふ人も、隱微の地の實不實

師と仰がれ給ひ候。愚これに比するにてはなく候へども、當世の毀をさけず、譽を求めず、たゞ後世にはぢざる實を存候。後世に恥ることなきは、わが心の神明に正してせざる所あればなり。

一。來書略。ある人貴老の和書を見申て、名高き人なるが、文學拙きと見えて、甚あさまなる文躰なり、かほどおろかならむとはおもはざりしと嘲り候。我等などは、益を得候へども、加樣にそしる人候へば、御書物の世間へちらざるやうに仕度候。

返書畧。人の申さるゝ處、少もたがふことなし。夫道理の深遠にして、幾度見てもあかざるものは聖經なり。高明にして親切なるものは賢傳にあり。後世の人、文筆達者にて、精を出し候とも古の聖經賢傳にはよもをよび候はじ。愚が和書の主意は、直にして近きにあり。無學の心にも通じ易く、文章の美なきものは淺きがごとし。然れ共ちかきと淺きとは、似て大に異なり。世の學者の書に向ていふ所は、道理分明なるやうなれども、書をはなれ、平生の交になりては、無學の凡俗にもおとれる事あり。又實に道を尊て少しは行ふといへども、聖賢の跡のみ見て、其故をしらず。時處位の至善を辨へず。人情時變に通ぜず。一流となりて、大同の基本ならず。これをなん淺きとはいふべき。予聖語を工夫受用して、得ことあるをば、人の問に答へ、或は遠方の同志の求めに應ず。聖經賢傳を心に得て、日用に行はんとす。道德の政令に通じ、學術の人倫に行はるべき一助ともなるべきか。予が和書は、人情時變をしるに便あらん事を思ふなり。道德の學の人事に合一する益共ならば、淺にはあらで近きなるべし。世間の文學の政令に用られざる事久し。

しゝと思ふ事は我のみせずして可なり。人を毀るべからず。

一。來書畧。近年假名書のめづらしき書出候へば、大方貴老の筆作の樣に申候。拙夫など見候ても一向僞と存ずる書多く候。又とりまがふほどよく似たるも御座候。貴老御書物の内をとりて書たるも見え候。然れども語勢險しく、火氣まじはり、實に各別ちがひ候へ共、しらざる人は、皆貴老の作と存ずるよしに候。實の御書物の谷まで、淺くなり候ことときのぞくに存候。

返書畧。まことに五倫書などは、まさしく作者ありて、我等の生れざる前に出たる書に候。七十餘の人は、五十年前に見たると申者御座候。しかるに我等の書に極りて、此間批判の書まで出申候。其外名もしらぬ書に、愚作と申が多きよし承候。又愚作と申も、無㆓餘儀㆒ほど似たるも出候。我等の書物を朝夕見て、取用たるにてあるべく候。予不德にて道に入事深からず。道理あさく候ゆへに、世間の人によくあひたる所ありて、取用られ候かと存候。されども予が志す所はしからず。全く當世の名利を求めず候。百歳の後は正邪明白にしられ可ㇾ申候。一旦譏にあひ難にあひ、惡名を蒙り候とても、浮べる雲のごとくにて候へば、何とも不ㇾ存候。當世は大勢の人の好む所にしたがひ、惡む所にひかれ候へば、毀譽共に眞僞正邪さだかならず候。百歳の後は、今の譽る人毀る人、共にとゞまらず。好惡移り易く候へば、万歳不朽の公論に成候。其時ならでは、君子の名も定り不ㇾ申候。程子と東坡とは君子と小人にて、黑白違たる人品にて候つれども、其時には程子派東坡派とて、天下の學術二に分れて相爭ひ候。後世には東坡は一人の詩人と成、程子は万歳道德の

もおこすべき事なり。或は子とし、或はゆづり、この二の間は時の勢にしたがふべし。今の學者家語の故事を以て申候へども、家語にはまじはりあり。聖人の語には有まじきと覺ゆる事共御座候。子となれば、其家の氏を名乘ゆづりをうくれば、氏は其身の氏なり。然共ともに其家の祭祀にあづかりぬれば、子たるの道は同じ理にて候。

一。來書略。學者ありていへるは、養子として我氏を名のらせながら、我娘とあはするは、兄弟夫婦と成なり。甚非也と申候。然れども、天下をしなへてかくのごとくなれば、其言は立がたく候。諸人の道學をうとむ一端にて候。道理の至極したる事にて候や。

返書略。聖人の法にも、人の妻となる者は、夫の父母を父母とすとあり。本生の父母の喪は輕くなり、夫の父母の喪は三年に成と御座候。夫の家に往ては、我兄弟父母の服皆そがれ候。これをも兄弟夫婦となると可レ申候や。理屈にてはいかやうにも被レ申候へども、又つかへ塞る事出來候。たとひ少しは道に不レ叶事ありとも、世俗をしなへてあるとならば、毀るべからず。其國に入ては太夫をもそしらずといへり。況世中のならはしなるをや。あらたまるべき事ならば、世運文明の時至りて改まるべく候。たとひ事は改て善なりとも、心の德聖賢に不レ叶候はゞ、何の益か有べき。つとめて改むべきは我心の凡習なり。今の學者、己が心の凡習をば不レ洗して、世俗をそしり、法を立むとす。其心は俗にもおとる者あり。人これを知てあなどり笑へり。道とする所の法は、時勢にもとり、實義は世俗にも慢らるれば、いつの時にか道學をおこすべき。吾人眞志あらば、あ

情ありとて行はざるものあり。此は人の利欲をそだてゝ義をそこなふ者にて候。善事と義理と又分別あり。事は善なりとも、人情に戻りなば遠慮あるべし。義の大なる事には、人情を憚るべきにあらず候。

一。來書略。他姓の子を養子とするは僻事なり、養子となるも不義なりと、今の學者被ㇾ申由にて、儒道の一流の様に承候。か様の事にて、少し道を面白く思ふ者も退き候。いかやうの道理にて候や。

返書略。生民の始は、天地を父母とし、氣化に依て生れ候へば、人皆天地の子孫にて、いづれを養ひても同じ事に候。古の人の同姓を擇て養子とせし事は、故ある事に候。世に功ありて、天子より姓を給はり、德ありて家を起したるの子孫、代々祭を奉じ候へば、其有德有功の子孫あるを不ㇾ立して、無功德の子孫をたつる事をいみてなり。絶てなき時は、いづれをなり共養はで不ㇾ叶事に候。又有功の人の同姓ありても、不德不才ならば、天下國家の任重き家か、人を多く扶持する家などには立がたく、たとひ立ても、無ㇾ程家を失ふべきやうならば、他姓なりとも才德ある人に讓るべし。陶唐氏の有虞氏を立て、祭を奉ぜしめ給ふがごとし。主君よりも祭をも奉ぜしめ、家をも嗣しめらるべきやうあるべき事なり。又同姓の子孫あらば、いづれの國いづれの所にても、小身なりとも、祭は奉ずべし。祿は官職に依て給る天祿なれば、天下國家大小のかはりありとも有德有才に讓るべきの義なり。同姓の子孫も、今は小身なりとも、この陰德に依て、後世又家を

以て道者なりとおもへり。世中の人、此德あれば此病あり。寛仁なる生付の者は、行事に非なることあり。大意をみるものは、細行を不レ顧。篤實なる者は、才知不足なり。作法よくつとめて、爭心我滿なる者也。人にたかぶるを悦て學を好む者あり。初の三は德に付ての病なり。後の二は凡心を根として外をよくする者也。然れども其生付文理にさときか、事を勤るに得たるかの處あればなり。雁の行に長幼の序の正きし事は、格法者といふも及べからず。鴛鴦の夫婦よく和ぎて別たゞしく、雄鳥死しても雌鳥ひとりたてることは、人といへどもよく及ぶものすくなし。これ鴈は陽鳥にて火氣を多く得たり。火氣の神は禮なり。この故に不レ知不レ識かくのごとし。鴛鴦は水鳥にて、水氣を得たり。水氣の神は知なり。故に夫婦有レ別の道不レ知してあり。只これのみにて他の事は皆鳥なり。今の學者、孟子に繼て道を任ずといふものあれども、只其みづからたかぶる所の者は、文義を講談し格法をいふのみなり。或は師とし學びたる者を毀ては己を是とし、或は他の學者の非を揚るを以てみづから賢なりとす。心に利欲逞く、當世の名を求て毀譽に動くことは、市井の凡俗に違ふことなし。況其他は只朱王の最負をするばかりなり。佛氏の日蓮一向に似たり。たとへば能をするがごとし。公家或は武將の裝束して、是は房崎の大臣義經などゝ名乘とも、其實は猿樂なるがごとし。凡心を不レ免して朱陸王學などゝいふとも、其實は凡夫なり。たとひ格法の學者、心志殊勝なる者ありて、行はんとする事善なり共、人情に委しからでは、遂られまじく候。又今の人情にしたがふといふものはしからず。義のまさになすべき道理をも、人

度存候儀度々候へども、世間の勢にて、身を心にまかせず候へば、不レ及ニ是非一候。わき〱にておしき事のある罪は、しらざる此方の身にかうぶり候。一生無實の遺言虛說を負て、終べき者と存候。天地神明の照覽たがふまじく候へば、なき跡には、をのづからしれ可レ申候。本より名利心なく候へば、無實の罪はうかべる雲のごとくに候。

一。來書略。政令法度は、人情をよく知て、時處位に應ずるものなりと承候。尤の儀に候。昔たま〱道を以て政をせんとおぼしめしたる君もおはしましゝかど、時の學者唐流を以て日本に行はんとせしかば、つかへとゞこほる所おほく、やめ給ひぬとうけ給はり候。おしき事にて候。

返書略。道と法とは別なるものにて候を、心得ちがひて、法を道と覺えたるあやまり多く候。法は中國の聖人といへども、代々に替り候。況日本へ移しては、行がたき事多く候。道は三綱五常これなり。天地人に配し五行に配す。いまだ德の名なく、聖人の敎なかりし時も、此道は既行はれたり。いまだ人生ぜざりし時も、天地に行はれ、いまだ天地わかれざりし時も、太虛に行はる。人倫天地無に歸すといへ共、亡ることなし。況後世をや。法は聖人時處位に應じて、事の宜きを制作し給へり。故に其代にありては道に配す。時去り人位かはりぬれば、聖法といへども用ひがたきものあり。不レ合を行ふときは、却て道に害あり。今の學者の道とし行ふは、多は法なり。時處位の至善に叶はざれば、道にはあらず。しかのみならず、今の法に泥みたる學者は、仁義をしらず。事心利害の凡情遠く、只己が氣質の近きが爲に、事を勤め法を用ひ、經學の文理をいふを

流川を出し、天下の用を達する神靈あれば、一人の私すべき所にあらず。故に杣を入材木を出し家屋をつくると、國天下の山澤をはかりて、つくすべからざる制法をなせり。くはしき事は一旦の書簡の盡すべきにあらず候。

日本倫理彙編

一。來書略。國々に道に志す者出來て、貴老を尋來候へども、御對面なきゆへに、江西の手筋とたづねより候へば、むかしは聞も及ばざりしもの其學流なりといひて、敎へ候志は實に候へども、文盲なるゆへに、陽儒陰佛など云やうなる不正の學を信じて、江西の學術と思へり。あたら志ある人をすて申候。又國所へもよびなど仕候。本より右の師をいたし候ものは、外には中江氏の學に候。右のもの共猶以貴老をむつかしき人におもひて、そしり申候へども、世人は其實を存ぜずして、學友と心得候へば、あしき事の罪は中江氏、さては貴老へかゝり申候。今よりは志ありて尋參候人に、御あひ被ㇾ成候へがしと存候。

の名高きをかり、內には渡世のために仕候へば、文學さへしかとなく、何のとりしめなく候ゆへに、むさとしたる風俗に成ゆき、或は徒黨がましき口舌なども出來候。貴老かつて御存知なき事

返書略。內々承及たる事に候。拙夫事病者にて、人と對して久敷かたりがたく候。二三度もうちつゞきて人と出合候へば、其跡大に草臥候。學者をあつめ敎へ候事などは、おもひもよらず候。去ながら氣色もよき時分遠方より尋られ候人には、敎る事こそならず候とも、せめて一兩度づゝは對談いたし、文武の德業心法の大意、其人の受用せらるべき入德の端を少ばかり語りて、返し

より降にあらず。只神氣原上にみち、水氣風によこぎれり。白日の時といへども、其雫たゆるとなし。これぞ葎の雫、萩の下露といふものなり。山澤氣を通ずるの至なり。其外高山深澤、名嶺には私雨と云ものあり。同じ理なり。谷洞より湧出る水も同じ。神理なるをしらずして、迹によりてみるが故に、疑ひ多し。水は高きより出て下につく。人の口上に有てつの生ずるがごとし。谷々の小水雨露のしたゝりおちそふとも、勿論の儀なり。しかれども三十日ほども旱する時は其小水はかはきぬ。たゞかの水上のみたえず。其小水といへども、神氣のうすければ、其流もすこしきなり。當時深山多くもち給ふ國主は、山の運上多くして、一旦はよきやうなれ共、山をもち給ふとは、大事のものなり。山川は天下の源なり。山又川の本なり。古人の心ありてたて置し山澤をきりあらし、一旦の利を貪るものは、子孫亡るといへり。諸國共にかくのごとくなれば、天下の本源すでにたつに近し。かくて世中立がたし。天地いまだやぶるべき時にもあらざれば、乘除の理にて、必亂世となるとなり。亂世と成ぬれば、軍國の用兵粮に難儀するとなれば、家屋の美堂寺の奢をなすべきちからなし。其間に山々本のごとくしげり、川々むかしのごとく深く成事なり。國郡を持給ふ人々、事あるの時忠節をと思給ふは、をそくして用に立がたし。事あるに至ては、取かへすべからず。今治國にをひて、如レ此大忠ある事と承及候。

一。再書略。古の人山川を治る政ある事に候や。

返書略。上古には、地を諸侯に封といへ共、名山大澤をば封ぜず。其故は雲雨を起し材木を生じ

れも武家の入道のごとくにて、ありしよりこのかたはじまりたる事といへり。かみを剃も上よりの命にあらず。己となしたるもの也。あやまりを知人もはし〳〵ありと見て侍れば、また己とむかしの樣にかみを不レ剃樣にも成行なん。今はかたなさすまじき商人だに刀さして、武士のごとくにしてありき侍れば、ことに儒醫の上下着て刀さゝむは、常にかへりたるにてあるべく候。

一。來書略。先度承候山に草木しげりぬれば、にはか水のうれひもなく、且草木に水をふくみて、十日も廿日もしたゝりあり、河水もとぼしからずと仰られ候事を、老農にかたり候へば、似合しきたとへを申候。禿のかしらに水をかけたると、坊主のかしらに水をかけたるがごとくにて候との事に候。至極の儀と感じ申候。大河といふも方々の谷々のしたゝり落合、積て末に大をなせり。「吉野川、その水上を尋れば、むぐらの雫、萩の下露」と承候。しかれば山澤氣を通じて、神化のなす所とも、さだかに存知られず候。如何。

返書略。我山賤にきけり。大和國芳野河、紀伊國熊野川、伊勢國宮川、此三河の水上を大臺が原と云。三國晴天白日の時は、此原も晴天なり。三國のうち少うす曇、花ぐもりなど云ほどにても此原の雲雨甚し。他より望み見れば、雲の山上をまくがごとく、霧の深谷に簇るが如し。其上に登る時は、のぼりつくさゞるに、身のぬるゝこと大雨にもまされり。國は天氣晴ても、此原には雲雨の氣猶はれず。其廣さ方一里ばかりなり。雨ふらざれども、西風には宮川の水をまし、北風には熊野川の水をまし、東風には吉野川の水をます。笠さしたるばかりにてはふせがれず。空

か。君子小人の儒を明言せざるによりて、儒者の行はかくいやしきかといはるゝなれば、道德の罪人なり。道藝とは何をかいふや。禮樂弓馬書數の六藝なり。古は此六藝に長ぜるものを撰て、儒官にをゐて、人に教しめ、士君子を助しめたり。曾子曰。籩豆のとは有司存せりと。日本の儒者と云ものは、六藝をもしらず。たゞ文學に長じて、故事をおぼゆるのみなり。しかれども此一事は重し。士君子の人情時變をかんがへて、國家の政道をとるべきところにあり。みづからをるべき位にをり、受べき祿をうけ、己がために道をいひみだらずして、士君子の才をなし、道を遂せば古の師儒ならん。尾州の亞相、ある博學の儒者に向て、なんぢは儒者かと問たまへば、ものよみ坊主にて候とこたへき。儒者と答へなば、いひつめんとおもひ給へる氣色を見て、かしこくありのまゝにこたへしといへり。まよに妙壽院（妙壽院は藤原惺窩の未だ儒に歸せざりし以前の號なり）以後の儒者ははなはだくだれり。實は商人のいやしき心根ありて、外には聖經の威をかりたかぶれば、人のにくめるもとはり也。人のあしくいひなすにあらず。みづから己をいやしくせり。心だに賤しからずば、身はへりくだりて、ものよみ坊主にかくるゝともまた可なり。日本にても近頃まで、儒者は公家にありて、官につきたると聞えたり。才德あれば高位にものぼりたり。多はもろこしの史儒のごとく、史のごとし。文之妙壽院、出家よりすぐに儒者と成たれば、公家にも成がたく、武家にもなさゞれば、かしらは其まゝにて、武家の入道のごとくにて居られたり。儒者の髮をそるとは、是よりはじまりたるといへり。醫者のかみをそる事も、古道三など二三人出家よりすぐに醫師に成たるか。こ

ひたるも尤に候。又一人は心に異學を信ずるにてはあるまじく候。聖學にをひて終に眞をしらずたゞに儒學すきにて候き。次第に氣根おとろへ、儒道に退屈しての事たるべく候。儒學をつとめながら作法みだりがはしく候へば、人も何かとそしり候。佛に入て作法あしき分はよのつねにて候へば、誰もとがめ申さず候。其上悟道にかこつけて、平人よりも我まゝなる事、はやりものにて候。彼是心やすきに、佛にとよせて、我まゝをせんとの事たるべく候。又儒學する人をば、人にくみ候へば、後世のさまたげにも成べきかとて、佛にかへ候もありと、人のかたり候。いづれにしても、おしからぬ人にて候。しらぬ人のうたがひ申とのみ、當分道學のさまたげにて候。

一。來書略。古の儒者と、今の儒者と、異る事御座候や。

返書略。それ儒は古の官の名なり。初めて周官に出たり。鄕里にして人に敎るは。道藝を以てするものを儒といへり。其後儒官史官相通たるか。史儒ともいひしと見えたり。博識を以て業を立たり。道德なけれども、博學なれば用を達す。論語に小人の儒、君子の儒とある所をみれば、儒は文學する者の稱のごとし。大躰にしたがふものを大人とすれば、文學して道德をたすくるものは、君子の儒なり。小躰にしたがふものを小人とすれば、文學して産業とするものは、小人の儒なり。今時儒者といふ者は、おほくは小人の儒なり。博學にして祿をうけ、國郡の主の用を達すれば、又史のごとし。是故に天性文學に器用なるもの、史儒と成て祿をうくるとは、くるしからざるなり。己を知ものは明なり。いまの儒者は己を不レ知か。しれども勝心のためにおほはるゝ

人と二十六度にして、終に人の目に見えず。故に中國五嶽の中、嵩高山を天の中にあたれりといへり。本より天の中にはあらで、地の中なれども、中和の氣あつまれば、天の中と云理なり。

一。來書略。世中亂れむとては、人に狐のごときもの出て、奇特をなし候と承及候。いかなる故にて候はんや。

返書略。上治の世には、天下に邪神なき故に、狐狸といへども、無事なる獸にて候。中治の世には、邪神獸にやどり候。狐狸の人をまどはす事は、まれにしてあさく候。人の人をまどはす事は多してふかく候。或は愚によりてまどはす者もあり。或は高きによりてまどはすものもあり。すべて邪知ありて、人をまどはすものは、皆人に出るの狐狸なり。奇特をなしてまどはすは、愚によるの邪術なり。是もまどはす事の淺きにて候。高明によりて深くまどはす者、其害甚し。又名利によりてまどはす者もあり。人の心大にみだれ候へば、樣々くらき分別裁判出來るものにて候。故に世亂候はんとては、先人心をまどはし候もの、餘多出來るにて候。是を以て聖人の政は、人心を正しくするのをしへを先としたまふなり。

一。來書略。儒書多くよみ、人に講談まで仕候もの、兩人まで異端におち候。喬木を下て幽谷に入の甚しき者にて候。いか成事にて候はんや。

返書略。一人は本より心の微くらき所候き。書をよみ候事は、文才の器用なるばかりに候。まよ

しりたる人こそ、是非をもしることにて候へ。數と圖とは別にしたるものに候。別と申は、數は聖賢の傳ならではわはざるゆへ、用ひて、圖をば佛說を用ひ、或は我利口をくはへなど仕候。圖はいか樣にしても、しらざる者の目には、證據なき事なれば、いひかちに候。聖人の天地の圖をなし給ひしことは、四時の氣を伺ひ、民に時を授け給ふたよりばかりなり。其實事の用にもたゝず人に見せて奇特とおもふばかりのことは、なされざる道理にて候。古の委しき圖書は、秦火にほろびたりといへども、大かたは書經に殘り候。佛者の說に、大明は天地の中にあらず、其證據は夏至に景あり、天竺は天地の中なり、故に夏至に景なしといへり。これほど目の前なる道理にくらきことはなし。人の兩眼も、前にあるごとく、日月も南によりてめぐれば、大明は中國なるゆへに夏至に景あり、天竺は西なれども、南によりたる國なれば、夏至に景なし、むかし周公、地の中央をもとめて王城を營み給はんとて土圭を作り、八尺の標を立て、日の長短をはかりて、四時の序を辨へ給ふに、冬至の日景は一丈三尺、夏至の日景は一尺五寸なりき。惣じて日月のめぐり、地より外、星辰とともに升降するとは三万里なり。標の景一寸にて千里づゝ差ふものなれば、夏至の日景一尺五寸にては一万五千里なり。しかるゆへに地の中とす。冬至より日漸々に北の方をめぐり、夏至より漸々に南の方をめぐる。冬至には日の短きといひたり夏至には日の長きといひたれり。故に夏至の日は北の方にめぐりて、標の景一尺五寸なり。其上天の東南はひきく、西北は高し。北極南極を天の中なりといへども、北極は地を出ること三十六度にしてあらはれ、南極は地を

ひとちがひ、まどの時は心氣變じ眼くらみ候ゆへに、勇なる方勝事に候。常の心にて太刀の流よく候はゞ、大に手がらせらるべく候。常の心ならば、兵法はしらでも利あるべく候。義經鏡の宿にて、初て强盜五六人にとりこめられ給ふとき、我心のごとく人をも思ひて、いかゞと心もとなくおもはれ候所に、人は心氣變じ眼くらみ、おもひの外すきま多く成候。義經はすぐれて勇なるゆへ、常の心にてむかはれ候ほどに、心やすくしたがへ給へり。それより武勇の味をおぼへ給ふと見え候。天狗に兵法ならはれしとあるは僞に候。太刀をぬきて、平家の誰が首〳〵といひて、かやの穗をきり給ひしを、わきよりみて、天狗のつきたるなど申たるよしに候。劍術はけいこせざれども、生れ付て病氣かたみすくみなく、太刀自由にのびて、空よりくだるがごとく、地より湧がごとく、太刀はやなる人ある事に候。其上に勇氣すぐれ候へば、きり合のときは、無類のはたらきあるものに候。則義經其人ときこへ申候。義經は大將の器量あり。さしあたり勝負の利に器用なり。其上文學して、七書を得られしゆへに、名將と成給へり。一分の勇氣のはたらきまでかねたる人なり。

一。來書略。今時古の聖賢の說にもよらず、佛說をまじへなどして、私なる天地の圖をなし候へども、曆數はまた委しきも候へば、いよ〳〵人を迷し申候。

返書略。其曆數は、聖賢の傳を習て仕候へば、算數に得たるものは委しき事にて候。其圖と申ものは道理にかなはずしても、人の見てさもあるべくおもふ様にだにいたし候へば、信じ候也。本を

なること、これにまさるもの　あらじ。似我蜂は子を生ぜず。他蟲の子を取て己が子とす。出家の弟子を子とするがごとし。俗人にも何の心もなく、たゞ妻子きらひなる者あり。大名などの美女に自由なるが、男色にすきて子孫なき者あり。常の人さへなるに、まして出家は、それに得たるものゝなることなれば、珍しからず。奇特といふも、蟬のごとく似我のごとし。幼少のときより出家か、或は渡世のために成たるは、隱して魚肉女色あり。法を立るといふものも男色あり。本より男色をもゆるしたるにはあらず。出家は不淫の法なれば、生れ付欲うすきものは、男色もたち、酒五辛も絕ものあり。出家の至極なり。しかれども氣化に生じ氣を服する小蟲には及べからず。少しき生れつきに自滿して、大道をしらず。せばきの至なり。飮食男女の欲なきものは、蜉蝣にしくはなし。しかれども羽蟲の長とならず。雌雄正しき鳳凰を長とす。

一。來書略。今の世ほど軍法者の多き事は、いにしへとてもあるまじく候。何事ぞあらば、花やかにおもしろき合戰多く有べきと存候。

返書畧。世中無事なるゆへに軍法者多く候。軍國になりなば、今の軍法者、百人が九十人餘は、名もしれ申まじく候。太刀鎗はしあひをしてもしられ候。軍法は無事なればしあひもならず。たゞいひかちに候。勝負の利と大將の器量とは、軍法の外なるものに候。大將の器ある人か、又は勝負の利よき人にあひて、軍法計を出されなば、大負せらるべく候。百に一二は、流のよきもある躰に候間、下地のよき人存られ候はゞ、たよりに成事もあるべく候。太刀といへ共、常のしあ

等は皆二間計の寸餘を用たり。人により所によりて利あれば、何をよしともあしゝ共定むべからず。多勢の內には皆わりたるぞよく候。惣じて世中の萬事、時を第一として用る事もあり。所を第一としてなす事もあり。時のはやり物に心を奪れて、我本のよきを失ふ者もあり。今時江戶男は胸高に帶をし、京女は帶を尻にかけてするなり。其本は男たるものは、恰好に合て、胴短かめに足の長めなるが、本の男の生れ付となり。女は恰好には、胴のながめに足の短かめなるが、本の女の生れ付となり。このゆへに胴あいの長き男が、生れ付よき胴間のみじかき男を似せて、帶を高くすれば、とかくのわきまへもなく、當世と心得て、生れ付よき胴あいみじかき男も高くすれば、帶むねにあるなり。生れ付よき男の常の腰に帶をしてこそ、刀のぬけもよからめ。又生れ付胴あい長めにて、恰好よき女を似せて、胴あいみじかき女が、帶をさげてすれば、本のわきまへもなく、しりさげたるがよきと心得て、生れ付よき女もさげてすれば、帶しりにかゝり、さがり過て胴あいなが過てあしゝ。かやうの事にさへ、我身をしりたる者はまれなり。武道具の用ひ樣にも、其心得可ㇾ被ㇾ成候。

一。來書略。出家を異端とは申候へども、人のかたしとする、飮食男女の欲をたちぬる事は、又奇特なり。其潔き心からは、俗をいやしく見くだしぬるも、ことはりと思はれ候。

返書略。出家ならでも常の者に生れ付て、飮食に心なきものあり。男女情欲うすきこと、赤子のごとく成もの也。たゞ人のみならず、蟲にもあり。蟬は常に樹頭に露を飮てたれり。飮食の清潔

師と成。みづからひいてたかぶるにあらず。人よりをして尊くす。今の學者は農に居て農を安ぜず。商にして商の身をしらず。僭して武士のまねをし、遊民の徒たらむ事を欲す。たゞ外のよきことを貪りて、身を終の義をしらず。竊に隱微の地にして、心ををく所の凡位をしらず。舊習の汚を覺ず。一旦みる所の書にたかぶり、滿心高尙にして言語分に過るのみなり。いよ〳〵學でいよ〳〵道に遠く候。

一。來書略。武道具の內に小太刀中太刀長太刀あり。寸鎗十文字かき鎗長刀あり。其利の爭ひまち〳〵に中候。いづれかよく候や。

返書略。いづれもよく候。たゞ其身の得もの次第にて候。我得たるとて、世間皆我に同じくしたく思ふは、獨夫のせばき心得にて候。大將たる人は、よしあしをかたつけず人々の心次第に被ㇾ成たるがよく候。上手をなし自由をなして、利のすみやかなるものは小太刀なり。位をよく取て、手ちかく賊を切るは中太刀なり。大わざに働くは長太刀なり。且夜の太刀によし。大事の仕者などを、たしかにするは小脇指なり。大脇指はかろきに利あり。中脇指は少しおもきに利あり。しかれ共人々のおもひ入と、劒のかねによることなり。是は大抵に候。一樣に定むべからず。多勢立ならびて戰には、寸鎗の長きがよし。且大わざの勝あり。船軍城のりにて、かけひきの利をも得。太刀長刀にあひて往來のわざをなし、自由なるものは十文字なり。入身よきものは長刀かぎ鎗なり。近世上手の名を得たる人々には、木下淡州、加藤羽州、備前の家中坂口八郎右衛門、是

は賢大夫士もおそるべき人ならば、居士とも隱者共いふべし。昔より賢者のかくれ所は農商なり。何ぞ其職を恥べきや。門のゑひかきを抱き、拆をうちてただにかくれ仕べし。現物よみ醫師の業をや。今の人々の學によるものはしからず。儒者と云ものは、實は產業にして、外は道者の様にいへひなせり。高く清かるべき內はいやしく、謙りかくるべき身は奢ぬれば、前に云所とは各別なり。言行のたがふこと尤なり。又產業にてはなく、學を好侍るものは生れつき文才に器用にて、文學すきといふもの成べし。連歌すき鞠すきといふがごとし。又は町人の賤き職をいとひ、學問してよき者に交り、身をたかぶるべきためにこのむもあり。其市井の利心はかたくかたまりてうごかず。農によりて學ぶものもこれに同じ。賢者はわざともくだりてかくるべき庶人に、をり合たるこそ幸なれば、いよ〳〵卑下して己が爲にすべき學を、學によりて其位にもあらぬ身をたかぶり、庶人にして武士のすがたを似せ候ものは、何として眞の道德に入侍らんや。道は僻める道にしても、眞實に道に志ある者は、これに異なり。釋迦は王の子に生れてただに、學問修行のためには、人間第一のいやしき者の、人にあなどらるゝ乞食となり、天下の孫となりて、上たらんと欲するの勝心滿心の火を滅し、身は人の下に居て、心は万物の上にのびむとす。まことに殊勝の事ならずや。日本の出家は、人の上に座するを以て第一の滿足とす。それ學は人にくだる事をこそ學ぶものなれ。人の父たることを學びずして、子たる事をまなび、師たる事を學びずして、弟子たる事を學ぶ。よく人の子たるものは、よく人の父となる。よく人の弟子たるものは、よく人の

し器用にて、博學者と成侍らんに、商ひせんも本なく、百姓とならんも田地なく、武士とならんも本より其家に生れず候はゞ、幸に文學の業を天よりあたへ給ひたると存、物讀と成て奉公可仕候。外は物よみに身をくだり、人の用を達し、内には竊に理を窮め性を盡し、家内を和睦し、朋友に交て信あり禮讓あらん事をねがふべし。其言にいはん、道は天子諸侯大夫士の任じ給ふべきもの也。庶人は其業を務て、能事もなく惡事もなかるべし。我も又是に同じ。惡なくば可也と。其詞は讓れり共、人のみる所かならず實あらば、人々皆感ずべし。道を任ぜずしてしかも道に益あらん。又町人の家に生れて、家業ありながら學を好み候はゞ、身は町人の風俗にて、能町人といふものに成て、學は竊に己が爲にし、人の目をくらまさず、大利をとらず、有べきほどの利をとりて、家職に精を出し、いたづら居せず、無用のあそびをごりをせず、諸人に理直者と信ぜられ、職を上手になり、人のゆるせる利ありて、財の有餘をなさば可なり。百性の家に生れて、田地あるか、又は故ありて農に引籠るとも、農人の業に身を入て、こゝろは堯舜の民たるおもひをなし、逍遙して田に水入、畠に耘り、手足を土にし、耜の柄にすがりて立とも、其心のいさぎよくして、萬物の上にのびやかなるたのしびは、天地神明にも恥べからず。況人にをひてをや。むかし見たりし者、肥たる馬にのり、人多くつれて、美々しき躰にて過るは、兒女のあはれみを得とも、其心根は妻妾にはづることなからんか。いやしむべくともうらやむべからず。市井の俗と云て、賤きものにするとは、其心の利害にのみありて、仁義なければなり。身は市井にして、心

儒も佛も、德なくて人力を以てなす事はあしく候。或僧の云。今の佛者は盜賊なり。佛法はとく亡て、盜賊が佛法の名をかりて、大に奢りさかむなる也。此とき釋迦達磨を出し、眞の佛法を起したなば、寺も千が一になり、僧も萬が一に成べし。出家は樹下石上とて、山居して世俗の事を不レ知ものなりといへり。まことにかくのごとくならば、何ぞ人道にあらそはむや。佛法も古に歸たるにてあるべし。たゞ佛法をも起し、儒道も行はれば、道ならび行れて、相害する事有まじく候。佛も實すたれ儒も眞かくれ候故に、あらそひもある事なり。かく申せば三教一致の樣に候へども、儒佛は大に別なるものにて候。別にては候へども、佛法を退むよりはよくしたく候。たとひ佛者無道にして、退けつべきものなり共、人多き時は天に勝の勢ひあるべし。其上明君の仁政ならば、彼も同じ人なり。道なかりしによりて、渡世のためにかく成行たるものなれば、あはれび給てにくみ給ふべからず。赤子の井に入事は、赤子の罪にあらず。まして下に居者、何ぞあづかるべきや。程子朱子は天吏なり。吾人はたゞ默して己を成べきのみなり。

一。來書畧。我等ども出合候内には、儒者と云ものあり。町人にして學問する者あり。農を務て學ぶものあり。何れを見ても言と行と不二相叶一候。かやうに申我等を初て、受用手に入ず候。何とぞ受用の道あるべき事にて候や。

返書畧。各の學びらるゝ所の書も、愚が見る書も、同じ書にて、道理も同じ道理にて候。學術の外物と成と我ものと成のちがひより、千里のあやまり出來候。縱ばわれら幼少より京都に育て、文學

集義外書卷之三

削簡三

一〇來書畧〇貴老は天下の眞儒と申候に、佛法を退け給ふ言をきかず〇いかなる故にて候や〇むかしの佛者だにあり〇まして今の佛者は悪人のごとし〇書をあらはしてなりとも、無道の罪をあかしたく存候〇

返書畧〇今時儒學する者は、佛をそしるを以て役とす〇しかれども佛者は一點もいたまず、一歩も退かず候〇貴殿書作て明辯せしめ給ふとも、儒道も起るべからず、佛者も退くまじく候へば、筆紙の勞無用の事にて候か〇拙者も同志のたづねによつて、其人のまどひを解べき事には、佛法の非をも申候〇かつて不ㇾ申にはあらず候へども、其人にあらざれば申さず候〇佛者によき人多く儒者の心行あしからば、何程そしりしりぞくるとも、少しもしるしあるまじく候〇却て佛者の威をまし候べし〇儒者に好人あまた出來て、佛者の作法あしくば、あらそはず共、大陽出て殘星光なきがごとく成べし〇今儒者はかくのごとく微少に候へば、佛者の威勢にてはうち亡すとも、手間は入まじく候〇しかれどももろこしまではふせがれ申まじく候へば、後世時有て渡らんをば、いかむともする事なかるべし〇秦の始皇儒をにくみ、我悪政を後世にいひつたへん事を恥て、天下の儒者學者を悉く召あつめてうちころし、書をさがし求てやきしかども、其悪名かくれなし〇

天竺の大國より出たる形にて候。中夏天竺は、日本程なる國、五十も百も合せたる程の大國にて、空地多く山林はてしなし。かゝる大國にて作出したる伽藍を、此小國の空地すくなく、山林あさき所へ、其まゝ移し作り候事は、國をわらし、萬民を迷惑せさする第一なり。知惠ある人いかで如ㇾ是なる事をすべく候や。

一。再書略。中夏の聖人を日本へ渡し候はゞ、如學の教いかゞ可ㇾ被ㇾ成候や。

返書略。儒道と申名も、聖學と云語も、被ㇾ仰間敷候。其まゝに、日本の神道を崇め王法を尊て、廢れたるを明かにし、絶たるを興させ給て、二度神代の風かへり可ㇾ申候。からめいたる事は、何もあるまじく候。國土によつて風俗ありといへども、天の神道は二なく候へば、儒といひ佛といひ道と云名を、其國ならぬ國へ持來る事は、道をしらぬ者のしわざにて候。

集義外書卷之二 終

あはれみて、心をよくせんためなれば、其心根は殊勝に候得ども、いかに人をよくしたきとても、僞をいひて敎る事は正理にたがひたる事なる故に、末々には其慈悲の千倍も萬倍も、人のあだと成侍りぬ。我心行と人に云所と二ありては、知惠のとりまはしにして、德の敎にあらず。能仁は能仁なれども、その弊の愚なるもの也。今時出家どもかしこくて、貴人の御前か又は少心ある者の尋には、いひまはしてよき程にいへる故に、これほど天下の人の心をそこなふとは、しろしめされず候。人の身中に心のあると、天地の中に人のあると、同じことはりにて御座候。心あしければ身の作法あしく、人道まどひぬれば世に災難たへず。終には天下の亂と成申候。こゝを以て天下國家を治には、人の心を正しくするより先なるは御座なく候。

一。來書畧。さなき事はかくれもなきことを、其國に生れながら、黃帝をさへ道家の大祖の樣に申なし、老子をも仙家の祖師にしたて候へば、天竺の釋迦もまさしくこしらへものと見え候。したてものにてなく、人の中ごとき知惠ある人に候はゞ、中國日本へ釋迦を渡し侍らば、佛法のひろめやういかゞあるべく候や。

返書畧。釋迦もし聰明の人にて、中國日本へ渡られ候はゞ、茫然として新に生れたるがごとく、後生輪廻の見も何もわすれらるべく候。もろこしならば聖人を師とし、日本ならば神道にしたがはるべく候。たとへ神道衰て學べき心法なくとも、堂塔伽藍のかたちは傳へずして、わびたる草庵を以て寺とし、山林を住家とせらるべし。今の堂寺のかたちは日本の國には相應せず。中夏

とぐるにて候。毒をうりて身をすぐるがごとし。昔の佛者は、人に善をすゝめんため說法し候故に、うそをつき、惡をすれば地獄に落と申候き。正しき事にてはなけれども、今にくらぶればせめての事に候。今の坊主は、身すぎのため也。人の心をよく持て、極樂に生ずる事なれば、寺まいりをし坊主をたのむに及ばず。其上坊主の心持行儀大にあしければ、人に慈悲善行をすゝめては、はずあはざるゆへに、惡心惡行ながら、彌陀をだにたのめば成佛する、題目さへとなふれば佛に成といへり。是は惡人のゆるしを出すにて候。敎へずしておけば、人々天性の眞知ある故に惡心惡行をば違と思ふものを、凡夫は其はずなり。よつて釋迦阿彌陀のあはれみ給ひて、吾をたのむ衆生をばすくひとらむの御誓願と、說聞せ候故に、其はずとゆるされて、少ある天性も亡びて、不仁有欲をも恥とせず、殷の紂王の時には、天下の國々にて惡事をし、にくみをかうぶり、身の置所なき者は、皆紂王の都に行あつまりぬ。本より其身惡人にて、善人をきらひ給へば、惡人の分は氣に入しなり。天下取が天下の惡人の主なれば、惡人の分は時を得ておこりぬ。阿彌陀釋迦は佛ときくを、今は天下の惡人の棟梁也。大舜の君は善を人と共にし給ひ、人の善をゆるし給ひしときく。今釋迦彌陀は惡を人と共にし、人の惡をする事をゆるせるなり。本釋迦は能仁とて、慈悲ふかき心の位の異名也。阿彌陀は無量壽佛とて、形色聲臭を離れて、不死の心の本體也。しかるを惡人の大將とする故に、其釋迦は天下第一の罪人なりと云て、天下の坊主のいふ所、諸人の信ずる所の、心の釋迦を退けたるにてあるべく候。釋迦は無欲無我慈悲悟道の心より、凡夫を

いまだ佛の名もきかず。はるかに後に渡りたり。天下に愚痴なる者多ければ、おろかなる事程よくひろまれり。法然、親鸞、日蓮等は本かしこくて、おろかなる僧にはあらざれども、かしこき故に、よく人の氣を見て、世にあひぬべきおろか成敎をひろめたり。禪宗は名譽らしき事を嫌ひたる流なれども、今は人のつきしたがふをうらやみて、名譽をいひ出るとなり。人多き時は天に勝とて、聖人の道は天道なれば、愚痴の人の多に負て、正理を知人少候へば、申ても詮なき事也。天定る時は又よく人に勝理はり必然なれば、一旦運命の否塞によるとも、根なきものなれば、終にはたえ候べし。然ば天道至善の常に立かへるべく候。世中の多き無理に一二人の少き道理勝がたし。ことわざにも無理が通るに、道理ひきこめと申候。

一。來書略。一休云。うそをつき、地獄にをつるものならば、なき事つくる、釋迦いかゞせんと。釋迦をそしりたる樣にも聞へ候。何としたる主意にて御座候や。

返書略。世間の人の心に尊く思ふ釋迦は、わけもなき者にて侍る故に、其釋迦をしりぞけ、眞の釋迦をあらはさむとの事なり。地獄極樂をまことらしく信じぬれば、釋迦をうそつきにするにて候。地獄の說と神通奇特とは、佛法の內にても末の事に候。慈悲善行をすゝめても、悪心をこらしめても、とかくうごかぬものをうごかさむためなり。うごきだにすれば、それよりは、自然に佛道に取入候事やすきが故也。後まで地獄の說や奇特などを信じさせおくは、人をまどはすにて候。佛法をあきなひに仕るには、奇特と地獄ほどなるよき事はなく候故に、始終ともに、其末の事を

し。聖人の心は、大虚の空中のごとし。其空中にかはりなけれども、此一間にともし火をまちて用を達す。天地の空中には、日月星辰かゝり、風雷雲雨をおこし、寒暑晝夜をなし、神物のおこる事、言語にのべがたし。一間の空中山の井の水の知べき所にあらず。然れども聖人は、其知にたかぶり給はずして、たゞ一躰の理を示し、同根の性をみちびきて、聖人の聖人たる所は、三綱五常の道にあり。其分量の廣大にして、人の不ㇾ知所の妙は、餘事として至極とし給はず。堯舜の民は、死生を見ること晝夜のごとし。何の疑ふ所かあらん。如ㇾ此廣大無量の大知にして、大虚天地一目に見給ふ人の、何を見殘してか、地獄の說を佛にゆづり給ふべき。少も見殘す所ありては、暦のしるしあはざる事也。鍼灸しるしなき理なり。且天道は至善也。何の惡ありて、地獄國をなさむや。造化は無盡藏なり。人の顔の同しきだに、天下を歷てもひとしき人なし。かくひろき神理にして、何に事かきて、生れかはるの事あらんや。これ程證據正しき聖人の教をば、わきになして、理もなく證據もなき佛說を用ひ、須彌山の圖をあやまり、西方南方等の佛國をかまへ、地獄餓鬼等の六道をいひ、事理二あらず、理あれば必ず事あり、心に地獄極樂の理あれば、亦其國所もなくて不ㇾ叶などいへり。其理則まよひの理なり。本より天理にあらず。何の其事其所あらむや。佛說もしまとあらば、こよみのしるしあはざるべし。暦の證據正しき上は、佛說の本なき事を知べし。其上三皇五帝の御代は、はるかに久しき事也。三王を近しといへども、釋迦よりは千年餘以前なり。孔子は衰世の聖人也。釋迦より少後に生れ給ふといへども、孔子の時には

知文盲の者女などこそまどはされ候へ、武士たる者などは、書をよまざる人もまことゝはせざれども、しかと道理を辨へざる故、幼なき時分より聞習ひたる事なれば、底には氣味あしく候やらむ、死期に臨てわきより、念佛をすゝむれば、となふる者も有レ之候。妻子愚人のため明白の理承度存候。

返書畧。愚痴の人に道理を說聞せ候は、聾をあつめて文章の見物を並べ、聾をよせて管絃の聲をなすが如しといへり。いひても聞知べからず。先目の前の事を以て申べし。伏羲の皇天地人三極の道を敎はじめ給ふに、九々の一を太極にかへして、八々を以て六十四をなし、萬事萬物の理を盡し給へり。軒轅の皇こよみの法を明にし給ひてより、其後の智者算數を傳へて、春夏秋冬の氣、日月の蝕にいたるまで、少もたがふことなし。天地の大なる一分を知しめしたがへては、あはざる理なり。一毛をかんがへあやまりては、しるしなき事なり。神農の君草木をなめて、醫藥の本を初給ひてより、其後智者、人の一身を天地の大にあはせて知、灸針藥方の委き事を傳たり。人の身を切割ほどきぬれば、血にまみれて、却てわけなきものなり。居ながら道理を以て知ること、一毛をたがへず。一分をあやまらず。臟腑經絡に通ずること如レ此。聖人と平人と、性命の理にをひてことなることなしといへども、其分量の大小各別なる所あり。たとへば山の井の水と河海の水との分量のごとし。水かはりなしといへども、其量ひろきが故に、大魚小魚をたくはへ、船をやり風波をおこし、天下の不通をわたす。其妙あげてかぞへがたし。常人の心は此一間の空中のごと

四十ばかりに成て、漸く子孫のためとて、妻をむかへ候。廿三十にて無二是非一妻を持たる者も、顔をおかくして、ねずみまひ致候き。今は二十歳の内外より、吾と妻子を求候。しかのみならず本妻をきらひ、妾を澤山にをきかへなど致候ゆへに、諸士の娘は多すたり居申候。賤しき腹の子にて、しかも習わしく、文武の諸藝をも心がけず、のがれとばにはたゞ一心〳〵といひて、少もよき者をばわろ口をいひ妬候。是を以て或病者になり、或精氣發散して、生付の才力半分もとげず候。聖代の法の如く、八歳より三十までは、諸藝にいとまなき樣に、よく國に大堤をなしてだに、才ある者は多くなきものなるに、まして右のごとくに候へば、稀に才あるも消失せて、跡なく成候。むかしの樣に若き諸士、恥ある世中にて、まち〳〵て妻をめとり候へば、大方の形のあしきは堪忍して、夫婦の和睦をとげ、子あれば手そだてにして、おちをもとらず。ならひよく候へば、をのづから才氣ある人出來候。才なきも、無病にて、かけはしりの用を達し候也。右の弊一朝一夕の故にあらず。世中の習漸を以てくだることゝはいへども、秀吉公天下の奢の本をはじめ給ひてよりこのかた、六七十年の間に、天下の風くづるゝがごとく、大にあしく成て候。これ天下によき人のなき、其一なり。扨は人の生るゝ事、父母の氣血をうけつぐ事とはいひながら、天地の氣質をうくる事、第一なり。天氣は地の靈不靈にしたがひ候。近年山澤次第にあれて、神靈の氣うすき故に、秀才の人生れがたく候。此理は以前にも申たる儀に候。

一。來書畧。地獄の說、中世は歷々も信ぜられ侍りしが、近世は聞なれて、僞りらしきこと故、無

候へば、珍重なる事に候。上に是ほどの事とは、よもしろしめすまじく候。

一。來書略。國々の人の物語を承り候に、いづれの御家にも、よき人にとかき給ふよしに御座候。むかしもか樣に候つるや。末世とやらん申物にて御座候や。

返書畧。今程よき人のなきに、二のゆへ御座候。其本を知人なくて、たゞに不審をなし、末世とのみ意得られ候へども、世はいまだ末世にあらず。今を上代となして、萬歲を末世になさんも、此方次第にて候。今をよく改むれば、中興の上代に成申事也。世の中の人がらの次第にをとり行こと、其第一には、諸藝の勵みすたれて、諸士榮耀に奢り、たゞ居のあまりに、男女の道時をあやまる故にて御座候。只今六七十になる人の中には、才力ありて、天下國家の諸役にも、あづかるべき人あり。それにつぎて、五十前後の人にも、いまだ才氣大方なるが見え候へ共、事の外少く候。四十前後より內の人の中には、自然に候へども、先は稀に候。五六十年の間に、誠に世が末世に成侍らんや。左樣にてはなく候。三四十年以前までの武士は、晝は文筆弓馬の諸藝に暇なく夜はねぶたきより外のねがひなし。何にても人のすることを不ㇾ知を恥とせり。三十歲餘までは大方妻をもたず。親伯父など知音を賴み、妻をむかへよと申せば、喧嘩眼に成ていやがり、今のわかき內に、妻子をもち、家持と成ては、何の稽古も成まじきとて、眞實に辭退仕候き。心やすき友と出あひては、何事もあらば、かちだちの先陣をもせんと思ふ若盛に、妻子を持ては、氣力もうすく成などゝ、色々の理屈をいひて同心不ㇾ仕候。まして妾など持たる、わかき者はまれに候き。

返書略。鷹の鳥を祭る事は、經にも見え候。人の手にて取することは上代の作にあらず。獵犬の事は詩經にも見えたり。これは獸に獸を取する也。野鷹の鳥取事は、其天然にて候。人の手にて取せ候事も、本より其理ある故にて候。其上士君子の武をならはす事は、田獵にしくはなし。山澤のかりは、人數多入となれば、常に成がたし。獵人の樣にして、ならひは各別に候。鷹かりは大身といへども、小勢にて成よき事候。弓鐵砲は物をそこなふ故に、また多もなりがたし。鷹にかゝづらひ、山野に身をならはし、所々の地形をもしり、民の苦勞をも知べきためなり。又儉約朴素の體も、獵の中にある事なれば、古の法と、主意とだに立候へば、獵の道をあしきと可ㇾ申樣はなく候。されば鷹を業とするを、そしり可ㇾ申樣もなし。今は本を失て末になり、鷹によりて無道を盡し候ゆへに、あしきにて候。貴殿のがれ給ひ候とも、又々相つぐ人有べし。上への忠も、貴殿家の積善も、立退て身をいさぎよくせんよりは、其まゝありて少づゝも古の獵の道をおこし、みづから正しく行て、組子の鷹師をさしをよく御下知候はゞ、功德まさり申べく候。今時の鷹師の樣子、民間の者共の物語を承るに、あふれ者と申にて候。田畠をふみあらし、多くの損亡ありといへども、一言のなげきを申事もならず、少も用捨の心なきのみならず、わやくにかゝりて、一しほふみちらしなど仕も有ㇾ之由に候。御鷹と申を權にかりて、心のまゝに狼藉をふるまひ、人をなやまし、鷹師衆の泊といへば、よめ娘など他所へうつし、宿におかざる樣に仕とも申候。亂行といひ無道といひ、とかく言語に及ばず候。貴殿道に志ありて、右のごとき事少にてもよく成

ちびきしなり。昔の様なるあやつりなれば、くるしからず候へども、今時のじやうるりの本を見侍るに、むかしのまひ本はたえてなく候。名はむかしの名にて、事は別のものに候。よき事の分はとりすてゝ、作り事を入、みじかくして、先は人に僞をおしへ、其間には譯もなきあだことの人の心を狂はするとのみ仕候。又狂言と申も、むかしのは人のをしへに仕候。貴人の下の情を知しめされざるをたはぶれに取なして知せ奉れり。臣はおそれて御異見も申がたきを、むかしの事に取なして風諫したるものに候。知ありても生ながら人に敬はれて、床道具殿様そだちにしなしたる所、老人といへども其習貴人にはあるもの也。故にむかしに取成て心を付奉り、此心持を以て下々にもをしへたると也。然に今時は、左様の古き狂言の風は絶て、心もなき者にまである心を付、今までしらぬ不行儀もおしへなど仕候。か様にうつりかはりたる事を、上には御存知なくして、むかしよりのあり來とおぼしめさるゝにて御座候。人の心をうからし風俗を亂候へば、能々御分別候て御裁判尤に候。

一。來書略。拙者父祖より鷹を家業と仕り、多くの鷹師御預り罷有候。鳥の鳥を取候事も、心得ぬものにて御座候。其上鷹師ゑさしなども、習あしくおさめがたく候。世の中の業作多中に、異様なる事にかゝり申候事、こゝろよからず候間、やめて引籠、いか様の所作成共可ㇾ仕と存候。何とも公私の勢も致がたく候へ共、非道なる事にて候はゞ、無理にもひきゝり可ㇾ申と奉ㇾ存候。いかゞ。

らし、よく〳〵心を入てかんがへざれば、はづかひ申さず候。餘銀有ㇾ之者は、百人に一人なれば今時出家衆の樂は及びもなき事に候。佛法信心にて出家をとげ度と被ㇾ存は、千人に一人あるかなきかにて有べく候。たゞ樂なるゆへに還俗は迷惑と可ㇾ被ㇾ申候とかたりき。出家だにも心あるはかくのごとし。百千歳の後、世中はとかく道理にかたつくべき所、御分別可ㇾ被ㇾ成候。

一。來書略。拙者在所に神事の時諸方より人多入こみあそび申候事、むかしより仕つけ候。それにつき、あやつり狂言盡しなど仕たがり候。所の繁昌のため、させ可ㇾ申と申者も御座候。又喧嘩などもあることとなれば、無用と申者も候。又左樣に何事にも用心ばかりいたしては、人の氣の伸可ㇾ申樣もなく候。わりてぐるしからねばこそ、京大坂江戸にも御制止も無ㇾ御座ㇾ候。御代靜に治たる時はにぎやかなるがよきと申者も候。させ候はんもやめ可ㇾ申も、拙者次第に候。いかゞ。いづれか是にて御座あるべく候や。

返書略。我等存候は、雙方共に眞是にあらず候。喧嘩の用心ばかりにて、窮屈ならむも、太平の時の風にあらず。又所の繁昌とある事も、すゑの事也。目出度御代の繁昌と申は、左樣なる事にてはなく候。たゞ人の心根風俗のためいかんとばかり見申度候。京江戸などにて、むかしよりあり來りし事は、故ある事也。愚痴の者の、欝氣をはらしたるがよく御座候。其はらしがてら、善をすゝめたる事也。あやつりのじやうるり三味線は淫聲なれ共、其しやうかはむかしの代の盛衰の事、忠臣孝子、義士貞女等の義理のたゞしき事を申候へば、本心の感を催し、善心をひらきみ

勢なくてうち過候。

一。來書略。佛道を信じて堂寺をこんりうつかまつるにてはなく候へども、むかしよりくにぐ〳〵あり來り候ものを、我等の領分ばかりにてたゞいますてをき候もいかゞと存候。

返書略。當世の譽れは後世のそしりとなり、いまのそしりは後世のほまれとなる事、むかしよりためしおほし。今の人はそしり候とも、道理あるにはしたがひたるがよく候。いまの人はほめ候とも道理にたがへることはせざるがよく候。かならず後世のそしりとなる事なり。當世には時々のはやり物あり。風俗のあやまりによりて名さだめがたし。時うつりぬれば、はやり物もかはり、風俗もちがひ行候ゆへに、其時にほめられしは、或そしりとなり或はきへうせて、跡もなく成侍り。たゞ道德ばかり替なきものなる故に、忠臣孝子義士等の名は、いつも朽せず候。我等の知人に佛學廣くして、戒定慧の三をかね、釋迦のごとく行へる出家有レ之候。我等山林のあれて、五行つゐでざることを語りしかば、今時澤山なる堂寺をこぼちて農工商の家の破損に遣し度候。出家共は皆盜賊なれば、還俗させ候はゞ、盜人の名をのがれ、大なる出世にて可レ有レ之候。さあらば山々は大にそだち、出家共きよく成候べし。山林にある寺ばかりたて置度事に候。我等出家にて候へども、共にこぼちたき度堂寺伽藍多候といひければ、かたはらに町人居申候へしが、それは坊主衆の迷惑にて可レ有候。還俗して今の無作法わがまゝは、何として成申候はんや。俗にては一月もたてりがたく、一日も置がたき者多候へ共、坊主ゆへに見ゆるして置候。農工商は一年中のく

時は山林の木石にひとしく、亂世の時は罪なくて殺さるゝものに衣きせて謊言するほどの助あるべし。益の書は叢にかくれ、夜は水邊にひかるがごとくならん。こゝを以て申候。害あるべき時には、出ざれば害なく、益あるべき時には、をのづから益あるべく候か。

一。來書略。大舜は諸馮に生れ給ふ。東夷の人なり。文王は岐周に生れ給ふ。西夷の人なり。かく勝れたる聖人、皆邊土に生れ給ひ候。然に中國にならでは聖人は生れ給はぬ天理なりと被ㇾ仰候はいかゞ。

返書略。諸馮岐周は中國の内にての東夷西夷にて候。中國にても王都に成候所は、地平に山おだやかにうちひらきたる所を取立らるゝものに候。一ぺんには申がたく候へども、さやうの地にはすぐれたるよき人は生れがたきものに候。靈山と申ものは、をなじ國のうちにても、すこしかたよりて御座候。靈山の麓にして聖賢生れたまふものにて候。孔子を尼丘山の申子などゝ申說御座候へども、さにはあらず。右の理を父母しろしめされしゆへ、聖賢の子あらん事をおもひて、尼丘山の神靈あるにやどりたまひたるにて候。大舜文王、東西の靈地にむまれ給ふ事、尤に候。日本にても神武帝、日本武の命をはじめたてまつり、吉備公など、才德秀たる人〴〵は、みな邊地の靈山よりいでたまひ候。楠正成など高間葛城吉野の靈山につゞきたる麓より生ぜられ候。辨慶も熊野より出申候。愚もひそかに是にこゝろざしあり。先祖の孝、子孫の慈、且は天下のために賢子を得たく候へば、靈山の麓にうつり居たくねがひ候へども、こゝろざしの眞ならざるゆへか、

中にて有べく候。如ㇾ此の逆德を得て、繁昌する佛法ならば、善惡の批判に及べからず。本より世の有德無道は、兵亂のあるとなきとにはよらず。君の賢愚は世の靜なると靜ならざるとにはよらず候。兵亂の運にあたりて、聖賢の君出たまひ、軍陣の法を以賊を平給ふは、道をたつるの初なり。水旱飢饉の運にあたりて、聖賢の君出給ひ、人民のなやみをすくひ給ふとは、其時には、聖賢の君おはしまさでは、世中つくるが故なり。はじめ聖賢の君亂をしづめ給ひ、後太平の時に生れ給ふ君は、賢才おはしまさでも、無事を樂給へり。先君の明智にまさり給ふといはんや、水旱飢饉の時過て、豐年の運に逢給ふ君は、仁德おはしまさでも、人民飢寒なし。先君の恩澤にまさるといはむや。君子は、兵事あるを以て亂世とはいはず。君を弑し賢をねたむを以て亂世の極とす。聖德太子みづから手がけざれども、實は君を弑したるなり。守屋の賢臣を亡したるは、賢をねたむなり。扨程なく吾子共皆逆臣のために殺れたり。佛法のうへにてもむくひすみやかなり。これほどの亂逆の人を、聖德といひ、治世と云は、愚の至りなり。佛道も我思ふ如く、若釋迦達磨の心根ありて、釋迦達磨に法をおこさせ侍らば、益ある時には益ありて、害ある時には害あるまじく候。たとへば佛法は一人の人なり。八宗九宗は、手とり足とり、目とり耳とり鼻とりて、一人のひとなりといはんがごとし。宗といふものはひがことなり。全躰佛在世の時のごとく、出家は出家の作法にて、山號院號の旨をうしなはず、戒定慧の三學全備せば、僧の多かるべきやうも奢べきやうもなく候。寂滅にいたり陰道を守て、治道にかまはず、世に時めかず候はゞ、無事の

ば、儒者又わらひ侍りぬ。又儒者の佛書を廣く見、佛者の儒經をひろく見ると申候も、其家にあらで見候へば、精神いらざるゆへに、委からず。然ば是非いづれとも申されまじきにや。

返書略に儒者のあしきをそしらば、儒者と申さで何とか申侍らむや。佛者のあしきを批判せば佛者といはで何とか申さんや。其祖師はよくもこそあらめど、其流のあしきは、其道のあしきなり。あしゝといふ所あしくば、あしきに極り侍べし。祖師のよきと云空理にて、今の實事の惡はかゝされ申まじく候。明慧比丘云。今の知識達の申さるゝ佛法が、まことの佛法にて侍らば、世の中に佛法ほどあしきものは侍らじと。明慧の時だにかくのごとし。まして今はとかくの批判に及ばず候。他よりいへば爭心おこりて、腹立候。其家々に明智の人ありて、あしきをあしきと申たく候。聖人の道にも、末に成ての弊は多侍れども、益は多て害は少し。治は多て亂は少し。人道の常なれば、一日としてなくて叶はず。佛法の侍りて後は、唐も大和も、益はなくて害のみ多し。治はすくなくて、亂は多し。達磨は佛にて、佛道の害を除くべき人なれば、武帝にかなはず。終に毒害せられたり。是を以見れば、釋迦達磨をからやまとへ渡して、佛法をおこさせ侍らば、今のやうにはあるまじく候。佛法は寂滅の法にして、陰道なれば、世に出て政道にたづさはり、時めくべきものにあらず候。時めくゆへに、害のみありて益なきなり。聖德太子十七箇條の憲法にて、天下治たると、佛者の申事なれども、守屋をころしたる大逆臣と知音し、次に我子も皆ころされ侍り。かほどの亂世はあるまじく候。然を治たるとは何を以申候や。佛法の繁昌したる所を

十前後大病切々病出し、其上に山より落、右の臂をいたみ候へば、口强き馬にのられず、弓ひかれず、鎗も不自由に候へば、武士のつとめもこれまでなりと思ひて、隱居いたし候。人の國にては、右の勉もならず。其上病氣にて、躰もかなひがたく、如レ此ふつゝかに成行候。今は琴書をたのしむの外、無レ他候。我等ほど病者にてうす着いたしたる者はなく候き。せめて我等のむかしほどなりとも勉て、其上にふとりあらば、規しも仕まじく候へども、緩々として何の心がけもなく夏は日にもあたらず。冬は火燵をはなれず。晝夜あたゝかにあつ着し、厚味を好み、酒をのみ候へば、たとへ一心はたけくとも、軍陣にて寒暑にあたり候はゞ、其まゝ病出して、何の用にもたち申されまじく候。天照神武の御掟にあらず。日本の武士にあらず。勇不勇は生付にて候へども强弱は習にて候。日本を武國と申候は、神武帝よりの御ならはしにて御座候。生れ付て日本の者の强なるにはあらず候。公家武家源は同じ流れにて御座候へども、ならはしにて强弱はるかにちがひ候。武士の子にても、二代と町にならび候へば、町人の心氣に移りかはり申候。奢にならひて世樂を事とし候へば、文道もうるさく武道も嫌にて、我せざるのみならず、人のするまでそしり申候。國家の用にこそ立ずとも、國家の賊とならざるほどにはあるべき事に候。

一。來書略。我輩は儒にても、佛にても侍らず。世中に儒者の佛者をそしるは、佛法のあしくなりきたる弊か。扨は小乘の淺き所を取て申侍り。然ば佛者これを聞て申候は、佛道をしらで申事なりと。又佛者の儒道をそしり申も、儒の末流の弊か、扨はかたはしを見て、我得かたに申侍れ

も逸樂を事とすべからず。獵の道も、鳥獸をとらんとにはあらず。小身は山野にかけり、寒暑風雨に身をならはし、大身は軍法を鍊むとなり。聖人の道をはじめ給ふ事は、武道に惰らしめじとなり。愚拙十六七ばかりの時、すでにふとりなんとせしに、他人のふとりて、進退不自由なるを見て存候は、かく身重くては武士の達者は成がたからん、いかにもしてふとらぬやうにとおもひ立、それより帶をときて寢ず、美味を食はず、酒をのまず、男女の人道を絕こと十年なりき。江戸づめにて山野のつとめならぬ所にては、鎗をつかひ、太刀をならひ、とのゐの所にも、ねつゝらの中に木刀と草履を入、人しづまりたる後に、廣庭の人氣なき所に出て、闇にひとり兵法をつかひ、火事の時にも、見ぐるしからじと、人遠き屋の上をかけり候へば、まれに見付たる者は天狗やいざなはんと、申たるげに候。是は二十より內の事にて、あまりに過たるにて候。其以後も鷹をもたねば、夏の暑氣にも、日中に鐵炮をもち、野に出て、雲雀をうち、霜月極月の雪霜を分て、山中に入候へども、夜衣、蒲團持せたることなし。うす綿のはだ衣の上に木綿袷かさねたるばかりにて、挾箱一つ持せたるも、半は硯紙書物にて、小袖二つばかり入たるまでにて、民の家のあばらなるに、行かゝりに泊候き。其外のつとめは、くはしく申に及ばず候。三十七八歲まで、かくのごとく勉め候故に、終にふとり申さず候。拙者事無分別不才覺にて、國家の用に立べきものにあらざる事を、我ながらよく存候故に、せめて日本の武士の勉なりとも可レ仕と存候て、家職ばかりは心のおよぶかぎり仕候き。身を輕くあつかひ候段は、今に存たる者多く可レ有レ之候。四

ものが、みづからの咽のかはきを、水のゐんをむすんでやめずして、賤の女にこひ候はんや。守敏と行力のあらそひをして、てうぶくしあひて、しるしなかりしかば、空海は死たりとてたばかり、守敏をいのりころしたるといへり。佛菩薩といふものが、大あく人にてもなきものを、しかもわれとひとしき行者を、いのりころすといふとやあるべき。さやうなるがまんじやちの坊主の方人する神ほとけやあらん。もし實ならば、空海は人に出たるきつねにて、邪人なるゆへに、邪神のやどりてたすけたるなるべし。

一。來書略。眞言を授唱て、虎狼どくじやのくちをもまぬかれ、魔所をものがれたりといふためし多申傳候。いかゞ。

返書略。それは眞言の力にはあらず。不動心の力なり。生付臆病なる者は、空海が大事の傳授の眞言を教候とも、甲斐あるまじく候。生付氣なげにて愚痴文盲なる者に、大事の眞言と名付て、草木の聞しらぬ名どもを聲につゞけをしへ候はゞ、いか樣におそろしき所をも、遁れ申べく候。人は萬物の靈なる故に、心だにうごかず候へば、何ものも害する事はならぬものにて候。

一。來書略。先日伺公の人身ふとり過候とて、無₂心懸₁の至と御規し候由承及候。心得がたく御座候。貞任は大なるふとりにても、武勇すぐれたると申候。

返書略。日本は小國にして、貨多候へば、狄の望む所にて候。是を以て古は、國法儉約朴素にて仁義を好み、文に遊び武を勉め候き。武士たる者は、國の警固にて御座候得ば、町人の樣に、暫

むことにて候。しかればこそ、人も住申候。鹽は濱にて燒て、遠き山中へも、商人持來り候。其鹽の井は有馬の山中に、鹽湯の出る如く、道理ありて出るにて候。それを見立て後、在所ありたる事もあるべく候。むかしの事はたしかに傳なく候。今の井堀と申ものは、地形を見立、又地に耳をあてゝ、水筋を聞などして、名水いか程もほり出し候。空海が功にはまさり侍らん。空海以後奇特をする人數多出候へども、其奇特者故の害と益とをくらべて御覽候。成べく候。よき事は千が一にて、あしき事は千が千にて候。惣じて邪法のすがたかくのごとくに候。其人成ほど殊勝なる行者にて、其奇特いつはりなきにして、妙奇特と感じほめてとをしたる其跡を見候へば、世の中に益はなくて、大に害あるものにて候。まよひの目には、益と見候も、とわざに、角を直して牛を殺すごとくにて候。空海は唐より幻術を習來て、佛法をひろむる方便となせり。日本にての奇特の初なり。是を以て何にても奇特なる事をば、皆空海がわざといひて、空海がしらぬ事を、空海におふせ侍るなり。空海はかしこき坊主にて、儒學もよく學びたる者なれば、中々奇特などにまよふ人にてなく候。其ゆへは、則空海が語にも、正法に奇特なしといへり。たまさかに我なしたる奇特も、かりの事にて、實の佛法にはあらずとなり。世の中の空海をほむる者は、大に空海をそしるなり。此里に水なきことは、空海が水をこひたるに、なきとてあたへざりし故に、此里はかり河水地中をくゞりて、ながれなきなどゝ申候。佛菩薩と云もの、左樣にいおあしきものにて候はんや。其上人にさへ火のろんをむすびて、栗などやきて進らする

する道服も、仙家の羽衣と云ものなり。道家の服なるゆへに、道服と云。いまだかくの如き事あまたあり。

一。來書略。人の申候は、貴老は江西に學給へども、江西の學にあらずと。いかゞ。其故御座候哉。

返書略。申所故御座候。諸子は極りある所を學び、愚は極りなき所を學び候。其時には大小たがひなく候ても、今は大にたがひ申べく候。極りたる所は、其時の義論講明なり。極りなき所は、先生の志こゝにとゞまらず、德業のぼりすゝむなり。日新の學者は、今日は昨日の非を知といへり。愚は先生の志と、德業とを見て、其時の學を常とせず。其時の學問を常とする者は、先生の非を認て是とするなり。先生の志は本しからず。先生いへることあり。朱子俟二後之君子一の語を卑下の辭と講ずる者あり、卑下にはあらず、眞實也と。

一。來書略。空海坊は水なき在所にも水を出しをき、鹽なき山中にも鹽の出る井を堀をかれて、萬民の助と成たりと申候。道理あることにて御座候や。ある眞言坊主の中には、萬法一心にて候故に、心だによくおさまりぬれば、何事も心に叶はずといふことなきとの儀に候。よの常の奇特とちがひ、本ある事にて候よし申候。さもあるべきことにて御座候や。

返書略。萬法一心にして、天地萬物皆心の外ならぬとは、誰も知たる事にて候。然共事にはをのづから事の理あり。空海も釋迦も病ある時は、醫者をたのまずしては不レ叶候。それ人の在所とする所は、水木をたよりに見立候。其所にあるか、又なくても、他所より來るの分別ありて後にす

やぶるは不義にて候。中華には神明を祭祀するに牛を用ひ候。日本にては大にいみ申候。是水土によるの義にて候。中華は大國にして、物生ずることひろきによりて、至味の物なれば用申候。然れども、位祿によりて品の定あり。日本は小國なり。牛すくなくば、耕作の功をなしがたし。且重をひき遠を達するとを不ㇾ叶。是以神道に、牛を食するとをいましめ、又其次に鹿をいむとは、鹿をゆるさば、鹿つきて、牛に至らむとをおそれてなり。牛鹿神をけがすにはあらざれども、法立て後をかすは、不義なり。其不義のけがれをいむべきなり。婚姻の理もこれをおして辨へ給ふべきなり。牛鹿人の食すべきものなれば、なべて食せざれと云にはあらず。神明にまじはり、つかふまつるにいめば、をのづから食するものすくなきゆへなり。

一。來書略。日本に、道家の學はなく候に、三敎と申候も心得ず候。

返書略。中夏にも道家とて本よりの出所はなく候。仙家の徒黃帝老子をおし尊て、道者の祖と申侍り。日本に仙家とて一流立たるはなく候へども、仙家の流より出たる事の、世におこなはるゝ事多く御座候。高野の空海、もろこしより仙術を習ひ來り、其傳來をば密して佛法をひろむる方便となせり。これひそかに、仙佛を合したり。もろこしよりわたりたる書にも、空海と云坊主仙術を傳りてかへりたりと記せり。扨神道と聖人の道とは、名こそかはりたれども、同しく人道にして、三綱五常の道にもれず。しかるに本地垂迹と云て、佛に合したるは、非なり。空海が修行の跡には、仙術のをもかげ多し。其外七夕の說、月のかつらなど、仙家の說なり。今時世人の着

一。來書略。同姓をめとる事を諱候ヿは、上古よりの禮にて御座候が、今時日本にては其諱成がたく候。難波の帝は仁君にておはしましゝかど、妹御を后とし給ひしと。此例などをひきて、伯父姪もくるしからずと申候は、意得がたき事にて候。

返書略。同姓をめとらざるは、周の代よりの禮にて御座候。上古にはたゞ服のかゝる者をいみ候き。君子の澤も小人の澤も五世にてつき候へば、五世の別ばかりにて候。母方はいとこより服なく候へば、婚姻を通じ候。父かたは俗にいやいとこと申までは、服かゝり候ゆへ、婚姻を通せず。いやいとこの外は、夏商の世までは婚姻を通じ候き。日本には、法はまだをかれず候へば、父方母方共に、いとこよりは、婚姻を通じ候。いかに法なきと申ても、伯父姪はあまり近きヿにて、天理人情の、ゆるさぬ所御座候。天下無法の法にて候へば、あるまじき事にて候。難波の帝の御事は大義御座候。三年の喪は、天子に達し、期の喪は大夫に達すと申て、父母は天子といへども臣としがたく候ゆへに、喪御座候。兄弟伯母姪は皆臣にて候へば、臣には服なく候。古は淳厚朴素にして、君位の尊ヿを知のみにて、皆臣なれば、其兄弟の親といへども、いむべき心もつかず。古は服を以ていみ候へば、服なきにはいみを加べき様もなし。然れども、兄弟伯母姪は、君臣といへども、あまり近し。後世文明の時に至りては、目ばゆき勢あるによりて服をいはずして、百世といへども婚姻不通の法、周よりいでき侍りぬ。今は天子といへども兄弟姪叔母等はさけらるべき時に候。又法なくして人情のゆるす所に候へば、いとこよりはくるしからず候。法立て後に

返書略。守屋の大臣は、社稷の臣と申者にて御座候。且智者なり。天照皇大神の御心に應じ奉り大和姫の神記に叶て、萬歲のためをかんがへ知たる人にて候。神代の德風すでに吹たえ、聖學の心法いまだおこらざりし時なれば、他の事においては、いかゞとおもふ事もあれども、それはよぎなき事なり。其上厩戸の皇子にへつらひ、佛氏をひいて書たれば、守屋のよきことを書けじ。厩戸方をば、惡をもかくしたる筆法あり。しかれどもそのまゝの筆の跡にても、智者はさとるべき所あり。厩戸の皇子は外聽明にて内のくらき人にておはしまし候。故に日本の神德おとろへ、王道すたれ、國のすいびすべき事をかへりて取たて給ふとなれば、守屋大になげき、一命をすてて諫められ候へば、厩戸の心に大きにもとり、忠言耳にさかひ、おして逆臣と名付てうちほろぼし玉ひぬ。守屋の家に神道の傳記、中華聖人の書をやはらげたるなど、多かりしをも、あはせて亡し、ひとり佛法を興起し、和漢の書の通明も、太子より初りしごとくにせんとの我心と申説も侍り。さほどの惡心はあるまじく候へども、只佛法を至極とし、王道にならべて、信じ給ふゆへに佛を退る人をばおさへて朝敵と申されたるにて候。中華は師國なれば、そしるの罪もあるべきか。天竺には何の恩德もなし。かへりて吾國をくらましとらるゝ所あれば、是こそ朝敵とて可ㇾ被ㇾ申候。守屋は是をわきまへ給ひ、太子はわきまへたまはず。其くらき所よりは、微々の内に我心あるべきも、しゐてあらそひがたく候。太子の未來記は達とありといへども、たしかならず。先以守屋の臣の未來見は、少しもたかはず候。くはしき事は古書の中にあり。

きやうに人申候。

返書略。惡物ながら、用樣にて功ある事多候。まむしの毒あるも、黑燒にして藥に用とあり。惡血あれば目に蛭をかひ候。そのごとく狐狸の付たるにても、又は邪神のやどりたるにても、一旦用て益あらば、御用あるべく候。信仰はあしく候。まむしを用て病をたをしたるとて、まむしを信仰してかひ候者はなく候。物を以物を用て、我あづからざればよく候。されども君子ならば、我身の事には、邪術のものは、たのみ申まじく候。人の上には、しゐてふせがれず候。漢の高祖は文盲なる人にて候しだに、匹夫より天下を取ほどの豪傑ゆへ、遠來の醫師にあはずして、死を安じ給へり。內にむかひてよく〳〵御分別あるべく候。

一。來書略。先度承候儒佛のおこり候事は、其人次第と御座候。少不審なきとあたはず候。いかゞ。

返書略。よき疑ひにて候。道ある世のとにては御座なく候。世間のとわざにも、愚人はらつこの皮のごとく、少智惠のある者は、何方へなでつけんもまゝと申候。道の善惡をばしらで、其人に才知あるか、めいよをするか、難行をするか、いか樣ことなるもの見へ候へば、其まゝ信じしたがひ候なり。人がらよくして異學にまよひ候はゞ、其知のしかざるとをおしみ侍りぬべし。人がらあしくして、聖學をせば、道德の罪人たるとをにくみ侍るべし。先度の論は世間平人の事にて候。

一。來書略。守屋をば逆臣ともいひ忠臣とも申候。まがひあるまじき事を、兩樣に申侍るはいかゞ。

の世記に、天照皇の佛法をつよくいみ給ひし事をのせられし神託は、日本の神道をそこなひ王道をほろぼす者は佛法にて侍れば、神明の前知明白なる御事にて御座候。日本に生れたる人は、たとひあやまりて一度佛者と成ぬるとも、此ことはりを聞ては、悔さとらで不レ叶義に候。去ながら今の佛者、過半はすぎわひにせんかたなき者どもにて候へば、大道行はれて、それ〳〵のかたつきなくば、心にこのまざるものも、せんかたあるまじく候か。

一。來書畧。まじなひと云事は、理の分明ならぬ儀ながら、しるし有ことも候へば、信ぜざるとあたはず候。

返書畧。まじなひの理は、いかにもあることにて候。神農の醫藥の法も、まじなひにて候。藥種に神靈ありて、たしかにして見よきと云ばかりに候。しかれども、朝夕食事として、多用て何のしるしなきものを、さちのさきに少かけ候へば、たちまち大病をいやし生死を定候。食に我彼に勝候。藥は我まけてうけ候。たゞ微妙の神理にしてまじなひなり。梅を口に不レ入ともつたまり、物のきびあしく相するは、歯にあてざれども歯のうき候は、神の通ずる所なり。まじなひこれに本づき候なり。日本のむかしもろこしの醫藥の方わたらざりし以前は、大方まじなひの醫術にて病を療治いたし候。三輪の明神五條の天神兩尊してまじなひの醫術をはじめ給ひしなり。今に少づゝ傳て御座候中に、神代の遺風あるも御座候。

一。來書畧。邪術のわざといひながら、たちまち病をいやし候は、信ぜずして叶はず候。情のこは

返書畧。中夏は天地の中國にして、天氣明に、地精こまやかなり。故に萬事萬物の名人出て、東西南北に敎る道理なり。東西の人は、是を習ふを義とす。耳の用を目のせぬとていむとは侍らじ。天道のなし給ふ所にしたがふとを恥べきか。もろこしの人も、聖賢を師とし、日本の人も聖賢を師とす。日本の人に、もろこしの人よりもまされるあり。敎へるを以てすぐれたりとせず。習を以ておとれりとせず。唯智仁勇の德あるを以て、すぐれたりとするなり。本より四海の師國たる天理の自然をば恥て、西戎の佛法を用ひ、吾國の神を拜せずして、異國のほとけを拜す。我が主人を捨て、人の主人を君とする事をば恥とせず。其あやまちを知べし。

一。來書略。伊勢太神宮に、佛法をいみ給ひ、出家を近付侍らず。天照皇は、佛法以前の神にておはしませば、佛の名もなき時なり。いみ給ふ法もあらじ。又第六天の魔王との手形など色々申候は、理もなき事ながら不審に御座候。

返書略。禁中の名は、不正の者を禁じて。近付侍らざる理にておはしまし候。太神宮にも、猶以不正を禁ずべきにて候へば、佛者にかぎらず惣じて不正の者は、伊勢にも禁中にも近付られず。然る所に中頃帝王佛法を好み給ひてより、御免をかうぶり、參內仕候。伊勢は神にておはしませば、御免を可ㇾ申上ㇾ樣もなく、又神靈の古法まで、改らるゝ事は、ならざる事にて、おはしませば、太神宮には古法の殘りたるにて御座候。神と帝王とは、不ㇾ及ㇾ申、大樹諸侯、卿太夫までも、不常のものには、近付給はざるものなり。天下の人民を、まどはさじの遠慮にて御座候。又大和姬

功なくして驕を極め、無道にして、國法をやぶれり。時運の否塞によるといへども、天定る時はまたよく人に勝の理なからんや。佛者の亡失たち所にいたるべし。先に申ごとく、神代と人王と上古の至治は德化なれば、敎學の殘れる事なし。道を修むるのをしへは、中華聖學にしくはなし。天地一元の運も、午の會の初なれば、天地いまだやぶるべからず。必道おこるべし。されども一旦は、天地くらやみとなるより侍りなんか。いかむとなれば、吉利支丹日本を望む久し。亂世を待て取よわるべし。又日本の内にて吉利支丹のごとくなる佛者あり。大方勢力天下をのむにいたれり。法王などいひて、佛者の天下を取とも侍るべし。然ば一旦は、國俗禽獸のごとく成べく候へども、亂世のみにして、安と侍らじ。しからば、己が非を悔て、道をおもふべし。陰極て陽を生ずるの時至るべく候。佛者後世といふ僞を信じ、其まよひの心を本として、吉利支丹もおこり候へば、吉利支丹のひき入は、佛法にて侍り。今釋迦達磨出られ候はゞ、必佛法を退け、うちやぶられ候べし。いかんとなれば、佛法を置ながら、吉利支丹は退けられず。佛法をやぶりて、人のまよひをだにとき候はゞ、吉利支丹は、制せざれどもなく成侍べし。むかし莊周孔子をそしれり。是大道をおもふゆへなり。天下の孔子を信ずる者孔子の道にあらず。孔子を立て其非をいへばあらそひわくとなし。孔子とともに退て、大道を明らかにせんと思へり。孔子は我なし。我名亡びて、大道あらはれんとは、其ねがひなり。釋迦達磨も無我の佛ならば、何ぞ其名をおしまんや。

一。來書畧。中夏より物を習はし事をいむ人侍り。いかなる意得にて御座候や。

集義外書卷之二

削簡 二

一。來書略。日本國後世に至て何の道かおこり申べく候や。

返書略。聖人の道おこるべきか。いかんとなれば、王代のゆたかなりし事、千二百餘歳に及しは神代の遺風にておはしまし候。其後欽明天皇十三年壬申に、百濟國より釋迦佛像幷に經卷を日本へ渡す。上宮太子、聖武帝の頃より王道おとろへ侍りぬ。其後佛法の盛なること年々にいやまして佛教の世を靡かしぬる事、千有餘年也。ことに五六百年このかたは、佛者無道にして驕れり。近年吉利支丹渡りしよりは、出家の心行ひたすら盜賊に同じ。驕すでに極り、亡びをまつばかりなり。中華は四海の師國なり。ことに日本に功あること大也。禮樂、書數、宮室、衣服、舟車、農具、武具、醫藥、針灸、官職、位階、軍法、弓馬の道、其外百工技藝に至るまで、一として、中華より至らざるものなく、ならはざることなし。道德の眞實大學の道ばかり、いまだ行はれず。然れども天神地神人王の始は、神聖の德おはしましゝかば、不言にして大道行はる。中華も日本も、道德の時を得て上におはしまし、みづから天下を風化し給ふは、敎の書なくたゞ人道の美風を見るばかりなり。日本も上代の人は、不ㇾ知不ㇾ識三綱五常の道によらざるはなかりき。是王道なればなり。かくのごとく、中華は日本に大功ありながら、その道その敎いまだおこらず。仙佛は日本に

の人情にては、民を愛し用捨すぐる故に、公用もたゝず。其上百姓著て奉公人すくなしなどゝそしるべし。民は天下の人を養ふものなれども、にくまれ者となれり。故に民を愛する者をば人にくめり。民を愛するは諸人を愛する理をしらず。又民も小民は少悦ぶとも、後は常と成て忘るべし。庄屋肝煎富民はうへには悦ぶ樣なりとも、內心にはきらふものあるべく候。國中一人としてよきといふものあらじ。君も聞まどひ給ふ事あらん。君と貴殿と此人情を前に知て變ずまじくばあづかり給へ。他人國政をとらば、世間の人情口說にしたがひ、民にとるとつよかるべし。しからば民つかれて奉公人多出べく候へば、かた〳〵以て人の心にかなふべく候。人のほむるを悅び筋なき訴訟をとりつぎ、借金など所望次第にかりかしなどは、家中ほどなく大借金數多になるべし。百姓困窮して五穀すくなく、家中すりきりて、奉公人給米の民間に入ことすくなくば、村里亡所のごとく成て、後には是非なく免もさがるべし。二三年多くとりて、自由なりし所帶しまりがたく、君の藏入も年々に不足し、事とあらば、大借金出來なん。後には家中の物なり、永代に多く出すべく候。君臣民ともに總つまりに成て、公役軍役難儀ならん。其時初て貴殿國政をとらば如此はなるまじきものをと知人あるべく候。やぶれてこそはしらるべけれ。無事ならば知人あらじ。始終の存亡吉凶を知ものは神ならんか。

集義外書卷之一　終

返書略。古人の悲哀は死をかなしむにあらず。別をかなしむ也。こゝに行べき義理ありて奥州へ行人あらば、父兄ともにすゝめて行しむべし。しかれども旅立の朝は必ず泪をもよほすべし。これその奥州に行を歎くにあらず。しばしの別を惜むなり。死生は天地の理なり。何ぞ死をおしまんや。只一生の別をかなしむなり。古の人は利うすくして情厚し。父子別れ夫婦はなれて、五年も十年も歎くものあり。或は一生に及ぶものあり。死を以て生を亡すものあり。こゝを以て聖人其過る情をおさへて、三年の喪を定め給へり。しゐてなさしめ給ふにあらず。今の時道をおこさむと思ふものは、實義を以て本として、禮法を以て先とすべからず。かく孝弟忠信の風俗おとろへて、情うすくならひたる人に、俄に三年の喪をせめば、必僞のはしとなりぬべし。其人の罪にあらず。代をかさねて百千歳このかた、習ひ來りし世の勢のかく成ぬるものなり。もし我等喪をつとめ候とも、たゞ一人心につとめて人にてらひ候はじ。我にをゐて其可あるべく候。

一。來書略拙者に國政をとれといふ者あり。又あづかるとなかれといふ者あり。いづれにかしたがひ申べく候や。

返書畧。中頃の難義をおもひまうけて、大勇力ありてとぐべしとおもはゞ、あづかり給へ。貴殿國政をとり給はゞ、國中のならしめ五成あらば、後まで五にて通るべし。家中四成ならば、四にて通るべし。君の藏入もさのみ不足あらじ。不時の公用などにて借金出來るとも、家中の物成三五分五七年かり給はゞ、つくのふべし。君臣民ともに、そのごとくにてあるべし。しかれども今

あそび、文武二道の士と成て、名を後世に揚べし。天地神明の理、人道より尊きはなし。廣大に至て精微を盡し、高明を極めて中庸により、幽明死生うたがひなし。何ぞ仙佛をたのまんや。一向に武士をやめ、僧とならば是非に及ばず。さもなからんには、三綱五常をすてゝ、大樹國主立給ふべきか。天下國家の政をこなはるべきか。士の道立べきか。たとひ仙佛大權道をきはめ、妙法をなすとも、人道を背て彼にしたがふ時、世中いかんとみるべし。

一。來書略。王法佛法車の兩輪と申候。佛法のわたらざる以前には、王法の片輪車にてめぐり候しや。

返書略。神代には神道といひ、王代には王道といふ。其實は一なり。大道の世を行めぐる兩輪は文武にて候。佛法の輪なき以前、天神地神の御代、人王の初めには、大道行はれて人民至治の化をかうぶれり。佛法ひろまりてより後、王者は武の輪をかきて佛の輪を入、知仁勇の德を失て王道おとろへたり。武なき文は眞の文にあらざれば、終に天下を失ひ給へり。武家は文の輪を缺て佛の輪を入、文なき武は野人に近して君子の風ならず。治道全からず。佛法は出世の道にて大に高しといふなれば、神道は神道にてをき、人道は人道にてをき、佛ひとり高上にかまへつべきをまた兩輪と云て交り入て、神人の道を亂れり。これ又佛法にもあらず。不レ可レ不レ察。

一。來書略。生死は人の常の理なり。しかるに三年の悲哀は、甚すぎたるがごとし。貴老は三年の喪をなし給はんか。

き事にて候。幻術と申ものは、ひろくなるか久しくすれば、ばけのあらはるゝ故に、知あり學ある國にて候へば、もろこしへはわたさず。たゞ佛菩薩の通力とのみ申傳へたり。もろこしにも仙家には少ばかり候き。まことに天地神明の理をしれば、不測の神よりいでたるか、幻術か、魔法かは、きくとしられ侍りぬ。佛敎の奇特、因緣物語の中に、たゞ一神理にあたりたることをきゝ侍り。佛在世の時に、釋迦を信ずる女人あり。身に瘡出て、法座にのぞむことならず。しかも遠路なれば、心もとなく念じ居たるに、あるとき、釋迦佛乞食して、忽然と至りたまひぬ。女人禮拜して、しかじかのことをかたり申。釋迦其ときに藥をわたへて、これを熱して身にかくるべしとて去給へり。女人をしへのごとくせしかば、たちまち瘡愈て、本の身のごとし。いよいよありがたく信心をこりて、やがて遠路を經て、靈山にいたり、不慮の來迎藥のしるしを申せば、釋迦我は不㆑知其頃他行もせずとのたまへり。諸弟子も女人も其理を不㆑知。其時釋迦云。我世をすくはむと思ふ慈悲、至らざる所なし。女人の信心にたへかねて、そこにぞ現しつらん。我不㆑知と。此物がたりこそ眞の神理なり。たとへ其事はなく共、あるべき理也。其外の御たづねども、一々御返事申入度候へ共、貴老など經傳をよむ人の爲には、しらでも事もかけず候。又常人は申たりとも、得心も仕間敷候。まして佛家の人は、同じ佛者にても見解まちまちなり。其家にてもなき者が、何をしらんと申さるべし。せんなき事に氣力を勞せじと指置候也。

僧の殊勝なるを、尊信する武士に告て云。それ士の義は、三綱五常の德を行ひ、弓馬禮樂の藝に

ると云事なり。又云。是寓言なり。生れ出たる時の心は、誰も獨尊なり。釋迦死期のとき、蚓かはづまでもなきたると云は、佛弟子の悲しかりし心よりきけば、虫の聲までもなくやうにありしといふことなり。事は僞なれども、主意ありていへば、まことなりと云ものもあり。いや何も非なり。しからず。釋迦の仙人につかへて、學問せられしと云は幻術也。天竺南蠻には、幻術の上手がある也。佛法をひろめんための方便に、幻術をならはれたる也。塔の地からわき出ると云事など、何の理にも有べきやうなし。水にて物をやくといふがごとし。幻術なること明かなり。今の吉利支丹の人をたぶらかす事も、幻術のたぐひなりといへり。或は觀音を信ずれば、災難に及てたちまち切刀もをれ、くだくると云。觀音と云ものありて、如此まもるとも云。信心の力にて、さやうの奇特ありともいひ、又情欲の佛心をそこなふ事は、刀の身をきるがごとし、戒定慧の功徳によつて、惡のつるぎ段々にをれて、佛身を生ずといふことも也ともいへり。佛法の說は、西といへば東といひ、こゝといへばかしこといひ、人によつて色々申傳り。此內いづれか是にて候はんや。

返書畧。仙術の師も、孝行なるものか、慈愛あるものにてなければ、なりがたきと申侍り。釋迦は慈悲の深き人にて、佛法のおこりも、衆生を不便に思ふ心より出たれば、さだめて幻術も、すぐれたる上手なるべし。惡のついえはあれども、名利有我の心なく、慈悲よりいたさるゝ事故、方便とも被申候。後世の佛者名利有我の心ありながら、たとひ修行は清僧たりとも方便はあやう

せず。今の士の弓にてはあたる事まれなり。あたらざれども、ねらいを力として歩行するものなり。音なければ鳥もおどろかず。主將一人鐵砲の殺生し給には、家中の弓のねらいさまたげとならず。たとひ少しさはり有とも、士の武事にはかゆべからず。士はいふに及ばず。主將より初て、狩のために田畠をそこなはず。鳥獸の田畠を害するを除き、武事をならはして、民の煩なきばかりの正也。百年以前までの弓は、今の鐵砲よりもまされり。今も鐵砲の殺生をとゞめて、弓をゆるし給はゞ、數年して上手出來べし。たゞ鐵砲は奥山家にて、猪鹿の田畠を害するをうちおどろかし、且軍用に用べきのみ。これもむかしは、弓の狩人にて事たれり。むかしにかへることも有べし。後世の主持は、文を不ㇾ知のみならず、武をも好む人まれなり。文武共に敎なければ、士民善をなすべき事をなさゞるものなり。是によりて制禁多く罰つよし。人民を悪にみちびきて、悪をするものを罪せば、いかんぞ民の父母たるものならんや。是を本をしらずと申すなり。

一。來書略。佛法の神通妙用と申に、僞らしき事多く御座候。或は佛は人間にあらず、神妙通力自在なり、理あればかならず事あり、ふしぎなくて不ㇾ叶と云。或は其事も其理もなけれども、權說とて方便にいひたると云。或は皆僞にして皆まことなり、大地はれて塔のわき出たると云は僞なり、然れども法華說法の時の、ありがたくたつとかりしとは、何ともいふべきやうなし、たちまち大地もわかれて、塔も出て、多寶佛も出らるゝ樣なりといふ事なり。又釋迦生出て、天上天下唯我獨尊といへること、是尤僞なり。しやかのかしこかりしこと、生たちより如ㇾ此の事も、ありさうな

やぶれざる者すくなし。今貴公など二三郡の主の正あり。七八郡の小國の主の正あり。大國の主の正あり。政は大身ほど大躰にて事備り、小身ほど小躰にて事すくなし。禮儀は大身ほど嚴かにて、小身ほど心やすし。今貴公の御身上にて、政法多く禮儀嚴ならば、家中の士困窮すべし。大國また政をこときりめに、せは〲しくしたまはば、人民手足を置に所なかるべし。共にやぶれずして、何をかまたん。大身は人多が故に、かはり多し。かくれて息を伸る隙多し。故に禮嚴なれ共行ひ易し。それだに近習は外樣の樣になく、君臣心安き處あり。小身は近習は云に及ばず、外さまでも、君臣心安し。かはりすくなきがゆへなり。今町人百姓の主從同座にねころび居れり。言葉にて主從と知ばかりなり。かはりなく、かくれ所なき故也。貴公御身上にては、二三十万石の家中よりは、ゆるやかなるやうに、常に心を付給べし。夫善を爲とをたのしみて、惡を忘るゝとは、道徳を鋒て、六藝におそぶなり。弓馬鎗太刀鐵砲、山野の達者、水の稽古は、武家のわざなれば、武士たるものなさずといふとなし。然れどもをこたりがちなるは、主持のあやまりなり。家業とおもひながら、師上手ならざれば、たいくつしてをこたるものなり。上手の師家頼と成て不ㇾ來は、客としてまねき給ふべし。山野の鳥獸ををしまず、池川の魚を制せず、狩すなどりせしめて、士の精氣をすくやかにす。然ども法ありてみだりならず。戰陣にしてよき武士を、是非なく失ふ事あるは、馬川なりといへり。鐵炮は敵にあれば、味方にも備るものなり。狩に用ては損あり。鳥をうちおぼえかしなくすれば、士の武事を習はすたよりすくなし。故に弓の殺生は制禁

を明らかにせんとなり。よく學ぶ人は、平かなる好人となりて、何のかたぎも有まじき道理にて候。

一。來書畧。其身正しければ、令せざれ共行はるゝこと御座候へども、國郡の主、其身正しくて下不レ從者候。又下したがひ候へども、長久ならざる者候。不二長久一候へば、正しき益はなく候。不レ從とも、とかくかゝはり候は、まさり候かと存候。いかゞ。

返書略。後世其身正しくて、下不レ從は、柔正にて御座候。下從は强正なる者御座候。ともに其中を不レ得候。柔正は亡びをそく、强正ははやく候。柔强にして不レ正は、一向いふに不レ足候。夫いにしへの大正は、君臣上下、正を不レ覺して大に正し。小正は君正を心にかけ、臣は正耳目にありて久しからず。故に大君國侯の正と申候は、道德の樂みありて、心ひろく躰ゆるやかに、禮時にかなひ樂正を得て、臆兆の君師たり。人情時變に通じて式あり。故に紀綱のしまりありて、禮儀いたつかはしからず。天下其樂をたのしみ、其利を利とす。天の四時のごとし。節のうつり日月の代明、やくそく正しといへども、急ならず、せは〳〵しからず。たのしめる君子は民の父母なりといへり。其ゆたかなる德を知給ふべし。人民の正と申候は、善をする事を樂て、惡を忘るゝものなり。人は士以上位あるものを申候。民は士以下位なき庶人なり。後世の正と云は、善の敎なく、善の爲べきなく、たゞに上行儀つよくて、下究屈なり。故に君柔なれば、下不レ從。君强なれば、おそれて從といへども心服せず。此日いつか亡んの意思あり。正しき事は正しけれども、

は、利に近く候。百歳の後は、ほむるものそしるもの、ともにのこらず候へば、公論に成て、虛說造言は、論なく消うせ、仁義忠信の誠ならでは、とゞまり申さず候。武士の心の位三段御座候。德を好を上とし、名を好を中とし、利を好を下と仕候。利を好者は、義理をも恥をもかへりみず。逆心をしても國郡を得、立身する事には、おもむき候。臣下にしても朋友にしても、たのまれず候。名を好むものは、不義無道の惡事をば仕らず候。去ながら、あやまりて當世の名を好候へば、本の邪正をかんがへず、人のほむる事にしたがひ候。當世の人のほむる事を書に記して見候へば、後世のそしりと成事あるものに候。當世には、其時のならはしにて、道にたがひたる事をもほめ、にくみてはよきをも、あしきと申なし候。此餘多のあやまりにしたがひ候へば、名を好みて、不義に入こともあるものに候。畢竟生前の名は、利に便ある事に候。死後の名は、利心なく候。孝子忠臣、貞女友愛約信仁勇無欲などの事ならでは、後世の名とはならず候。

一。來書略。此間江州へ罷越、龜泉庵老僧と參會申候へば、御うはさ申出され候。內々承及候は、佛法そしりの高慢人にて、近付こともなるまじき樣に思ひしが、扨て無我なる人にて、學者ぶり少もなし。かたのごとく、よき人なるに、何とて世間にはあしくいふやらん。去ながら、儒學せられずば、いよ／＼よかるべきと申され候。一笑いたし罷歸候。

返書略。此物語被ニ仰聞一候にて益を得候。世間を見申候に、公家には公家意知あり。武士には武士智あり。儒者には儒者かたぎあり。予も儒者意知、ならひたる事をさとり候。聖人の學は人倫

日本倫理彙編

ぶきをのぶるものなり。朝に道を聞ては、夕に死すとも、おもひのこす事はなく候へども、書の一章をもます／＼見熟し候は、又幸なり。たとひ命あり共、世にもてはやされなば、生付篤實ならず。聰明を好の病根いよ／＼長じて、徳を知事遠かるべし。困厄して内にかへりみ、徳を知るに近きは、幸甚なり。

一。來書略。此頃東より來り候學者の申候は、世間に儒學をする人は、佛者をそしらずといふことなし。市井の中にても、聲をあげて甚退くれども、佛者もこれを敵とせず。佛を退るの名もなし。先生はむかし、東にをゐて、度々講明議論し給ふを聞しにも、佛をそしり給ふことなし。人のそしるをもとゞめられしなり。しかるに天下の佛者を、退るの罪をば、先生一人に歸する事は何ぞやと。拙夫申候は、儒者佛者共に、天下の學者の、眼を付かへたる事は、先生によれり。儒者も佛者も、心有者はかくいへり。かくれなき事なり。是をもつて天下の儒宗のごとし。此ほまれあれば、此そしりあり。たとへば海は水の宗なり。天下の下流の歸する所也。天下の儒學する者の、佛を退ることの、先生一人に歸するは、儒宗の地にたてる故なるべしと申候へば、學者云本へ罪を歸せば、孔子の罪なるべしといひて、一笑仕候。

返書略。不徳にして、虚名をかうぶりたる故に候。佛者の事のみならず、すこしも不レ知事どもをも、とりあつめて拙夫に歸し申候。人のあしく仕なしたる事をも、おふせ候。當世に申はけはならず候。後世には、虚實をのづからしられ申べく候。後世の名も望なく候へども、當世の名を好

にそしりなみし、聖學の身方うちするは、是非は外にして、あさましき凡情たるべく候。又予を方々よりそしりこめて、遠方より、尋る人にも、近里の同志にも、道德の物がたりすることも、ならざる樣にし、他出も不自由なる躰に成候は、外より見ては困厄のやうにあるべく候へども、予が心には、天のあたふる幸とおぼえ候。配所の月、罪なくてみんこと、あらまほしといへり。世をのがれたるごとくなる靜なる月は、世にある人の見がたき事也。配所なればこそ、うき世の外の月も見るにて候へ。たとひ富貴にして、世間ひろく共、我心に實に罪過のおぼえあらば、心は困厄の地なるべし。たとひ外には罪のとなへ有とも、我心に耻る事なくば、心は廣大高明の本然を失ふべからず。和漢ともに、昔の賢人君子、名ある人々の、流罪にしづみ給へるも、罪の至極したるやうにいひなし、とりなしての事に候へば、其時にはいひはけもなく、世人實に罪ありともおもふべく候。しからば賢人好人とも申間敷候。たゞ自己の心にくもりなき故に、日月の蝕のはるゝごとく、後世に至て、ひとりあらはれ候へば、其流罪等の事、ほまれと成て、疵とはならず候。北野の天神も、讒によりてながされ給はずば、かくのごときのほまれはあるまじく候。古の人の數にあらざれども、予も內にかへり見ておぼえなきのみならず、世間よりも、何を罪とことはりてうつされたるにもあらず。たゞ造言の多きがために、うたがはるゝのみなり。これほどのふざかりにて、かゝる靜なる月を見候事は、なにの幸かこれにしかんや。其うへ予病氣に成て後甚だ氣力乏しく候。ふせぎなくして人にまじはらば、とく死すべし。造言の惡名は、予がこと

民喪祭の禮の、重きに難儀したる折ふし、戎國の佛法來り、喪祭の法、はなはだ易簡なりしかば、これによりてしたがふものおほかりしなり。愚が祭禮を重ずると申は、國の財を盡すにはいたらず、天下に及ぼして、うらみなかるべきことをはかり、心の齊明は敬を盡し、身の盛服は分を盡し、年々に生ずるものをとりて、禮を行ふなり。世の學者の、喪祭共に禮を備るもよし。道學の微なる時には、備へずば道あらはれじ。我中華の禮を易簡にし、備へざるもよし。後世天下に、道の行はるべき事をかんがへて、後の君子を待ものなり。

一。來書略。貴老には敵多く候。佛者の佛敵と申候は、實を不﹅知候へば尤に候。朱學の者の中にも、大にそねみ憤り、貴老をなき者にもしたく存候者、あるよしに候。王學の流と申者の中にも、御座候躰に候。其外人の知たる惡人共、虛說造言をとりあつめて、讒言仕候間、御心得有べき事に候。

返書略。人はいか樣にも候へ、此方には學者をそしり給ふまじく候。非ありともかくして、其非をあげられまじく候。予同志の議論に當て、不﹅得﹅已して、他の學流のついえを申事候へども、名をさへかくして不﹅申候。たゞ其議論の道理だにすみ候へばよく候。もし物がたりの留書などありとも、學者の非をいひたる所は、除き給ふべし。たとひ予が學見に非あり、他の學者の過ありとも、世をまどはし、民をしゆるの、左道にはまさりぬべし。たまく雨夜の、星の光ほど、かがやき出て、佛者と多少をくらぶれば、萬分が二三にも及ばず。すくなき學者の中にて、たがひ

て妖といへるか。米高直にて悦べる後、武士大につまるも、同事に候。

一。來書畧。貴老祭禮を重じ給ひて、喪禮を輕くし給ふ事、心得ずと申もの候由、うけたまはり候。

返書畧。我等祭禮を重じて、喪禮を輕くするにはあらず。喪は哀戚を本とし、祭は誠敬を本とす。天子の富貴より、庶人の賤しきに至まで、誠敬哀戚の實は、損益なし。禮は上下の品となり、且家の有無にしたがふもの也。又國の有無をはかることなからんや。日本は小國にして、山澤ふかゝらず。地福よくして人多し。中華のごとく、死をおくるの禮を備へがたし。尤いま、日本國中をかぞへて、はづか數十人に過ざる、儒者の道を行ふ人の棺槨は、何程美を盡したりとも、害あるべからず。聖人の禮を知べきたよりにもよかるべし。しかれども天下に、道の行はるべき、通法にはなりがたし。人死して、魂氣はもとより虛中にあり。行ずといふとなし。魄體は土に歸す。理の常なり。すみやかに、くちぬるはまされり。しかれども、孝子の心に、親の躰を、直に土中におさめ、螻蟻にあたふるにしのびず。しばらくへだておはふに情なり。我身の後にをひては、あげて谷にすつるとも可なり。けぶりとなすとも可也。生て明德ある時の身だに、義に害なきことには、風俗にしたがふことをほし。ましてもぬけのからに、心をとゞむべきにあらず。人のことにをひては、しばらくおほふの義を取はかるなり。我國神代よりの遺風、けだし國の有無をはかるもの成べし。日本國中に、道行はれて、儒法のごとくせば、富貴の人はよかるべし。貧賤のものは、恨をいだき、貧をかなしむべし。もろこしにても、此あやまりあり。質亡び文過て、萬

しらで、儒佛の悟道者の樣にいひありく人多出來たり。これ又世の害なれば、善惡相半と存候。關東の人々の事は、學によつてよきにてはなく候。下地いづれも仁厚の人勇强の生付にて、平人にあらず候。文學によりて、其平人ならぬ所、あらはれ候なり。うはべにかろくそみたる、習のけがれなどは、學によつて、覺給ひしもあるべし。其まゝをけば、世にほめらるゝ人の、學によつて、そしらるゝも候へば、是も相半にて候。去ながら、自己に得處あるべく候はゞ幸甚なり。

一。來書略。世人のまどひと、民の困窮は、いづれの根より生じ申候や。

返書略。世人のまどひは、異端の渡世よりをこり、民の困窮は、世の奢より生ずるとにて候。しかれども、數十年、奢によつて渡世するもの餘多あれば、急に奢をやめむとすれば、うゑに及もの多き者にて候。異端の渡世は、なを以て數十萬人あるべければ、是も急には制しがたかるべし。人の迷惑せぬを、仁政と申候。大道行はれ候はゞ、一人も迷惑するものなく、人のまどひも、困窮もやみ可ㇾ申候。

一。來書畧。傳に云。國無ㇾ道時は、五穀かはる〳〵みのらず、もし豐年あれば、却て妖なりといへり。それ豐年は、常にあらずや。

返書略。豐年は有道の常なり。國道なければ、天氣不順にして、五穀全くみのる事なし。民其すくなきに習ひて常とす。其間もし一年など、豐年あれば、數歲の凶年に氣をつめて、たま〳〵の豐年をいはひ、いつもかくあらんことの樣に、心をゆるむる故に、後のつまりとなれり。是を以

觀音にも、不知覺なきものに侍れば、愛宕山の神靈あるを見ては地藏と名付、山神の靈を、地藏の靈にとりなしたる也。清水山のけしき、瀧のながれ、神宥を見ては觀音堂をたて、やがて觀音の靈にとりなし候。初瀨其外皆同じく候。地藏も觀音もむかしのやうに靈なきとは、愛宕山もきりあらして、草木なければ、山神の氣うすく、初瀨清水も、山木あれて、瀧のながれもむかしの十分が一もなく候へば、神靈かすかなり。これによつて、地藏觀音の罰利生もなく候。狐の虎の威をかるたぐひと可レ被ニ思召一候。

一。來書略。人をたすくる方といひながら、けだものゝいきゞもとる事は、不レ忍ところ候はいかゞ。

返書略。生の字を、よみあやまりたるにて候。なまきもをいきゞもとよみたるより、いきながらとる說出來たりとみえたり。不仁なる事なり。しは物はし物にたいしたる生にて候。生膽とて、水にいきたるは、持ありくにあらず。鐵砲にて成とも、うちころし、あたゝみの有間にきもをとりて、藥を合するに、少も能かはりなし。仁心精明ならば、合せくらべても、知らるべき儀に候。

一。來書畧。近來儒佛共に、家業として、眞を不レ知。よきといふも、外の事なりき。江西の學術にありて、諸家皆目をさまし、道を行の志氣あり。其上關東には、實學の人も餘多おはしますと、承及べり。大なる功と奉レ存候。

返書畧。いにしへとても、なべておしかるべきにも侍らず。今とても、實に功あるほどの事も見えず。少心の付たるかたもあるべけれども、其かはりに、少學問しては、異見を立て、儒も佛も

返書畧。あしからんかとて、物いまひするは、はや凶徳にて候。物をやぶるといふも、少は氣にかゝるゆへなり。何となき心にては、やぶりもいまひもせざるなり。主君の知行を下されんとてめさるゝに、今日はわがためにあしき日とて、不レ出ものはなし。二百石とるものに、四百石くださるゝに、數あしきとてうけぬものもなし。こゝにてはやぶる心も、いまふ心もなく候。しかればお物をやぶりも、いまひもせぬ心が吉事なり。扨又物いまひの者の、仕合あしきは、大かた左道にたより候。佛道もよきは、正法に奇特なしといへり。神道もまことの神道は、無事を奇特とす。不測の神變は候へども、それは正きことゆへ、平人のしらぬ事にて候。しかれば今時の祈念者は、神明不測の理にたがふて、奇特を必とし、人心の正邪をえらばずして、祈禱をなし、めいよを云て人をたぶらかすは、皆邪法にて候。其身不吉の心行ありて、又邪法のものにより候へば、仕合あしきことはりにて候。

一。來書略。佛といひても、躰あるは釋迦と達磨ばかりなり。其外は皆心の位に、理名をたてたるものにて、正躰なく候。しかるに愛宕の地藏、清水の觀音にも、間に神靈の有やうなるとはいかゝ。

返書略。佛法の實は心法にて、奇特はこのまざれども、心法ばかりを傳へむとては、好人まれなり。こゝをもつて、先奇特をなして、人の信をとり、淺法をひろめたるにて候。世に愚痴なるものは多き故に、淺き教ほどよくひろまれり。その祖師〳〵に名利なかりしや不レ知候。地藏にも、

ときには、奉公して餘米をたくはへ、凶年には飢饉をまぬかれ侍りぬ。民のおろかなるにまかすれば、豐年の人のほしがる時には引籠てたゞ居し、凶年の人澤山にて、をく人のなき時には。乞食し侍り。武士のためにも、富人小百性のためにも、此法が第一にて御座候。此法だによく立候へば、上下共に饑饉をまぬがれ候なり。扨又今時武士たる者、あまり無道にして、下人をあしくつかふゆへに、奉公をせむことをば、世にくるしきことにおもひて、草の葉を食して成とも引籠居たがり候。然ばとて下々をあしくつかふなどいへば、下々おごり、君臣の義たがへり。まかせをけば人道かけ候。たゞとにもかくにも道をしらせ度儀に候。淵明云。これもまた人の子なりと。

一。來書畧。諸大名の大樹君へ忠節を可ㇾ爲第一は、何にて候べきや。主人幼少に候へば、家老共の心得に仕度候。

返書畧。大樹君の、天命の御冥加のへり不ㇾ申樣に國を治られ候事、第一の忠にて候。無道の人をおごらしめ、人道をみだり、おごりによつて、仁愛を亡し、本民をしへたげて、生なきにはしかじと思はせ、山林をあらし、古人の功をむなしくするは、皆上の御冥加を減ずるとなり。上にしろしめさゞれども、罪は上一人にかゝり奉り侍り。人は天地の子なるがゆへに、人の多所に天命あり。多の人をあづけ給ふとて、不仁の者を、人の君とし給ふが、あやまりなるゆへにて御座候。

一。來書畧。世間に物いまひする者と、又物をやぶる者と候。拙者の親類中にも多候。物いまひするものゝ、大かた仕合悪敷ものかと存候。

返書畧。世間にたはけといふ言葉は、百姓の上より出て、田分にて候。たとへば高二百石の家督を兄弟二人に分て、百石づゝ持たるまでは、小躰になりたるまでなり。その者又子どもを持て、五十石づゝわけつれば、もはや地士のかどはたてがたき故に、平百姓に近くなれり。夫婦手づから農事をつとむれば、五十石にてもいまだとかくつゞき侍り。又其百姓子共を持て、二十石三十石づゝわけて、次第にわけゆきぬれば、五石三石づゝの高に成行候。それにてもあきなひ半分にて、米を食せずしてとかくわたれば、豊年にはかつえず候。奉公をいやがりて、豊年にはなるべき程は不レ出。此故に奉公人すくなく侍り。凶年には其少高の百姓ども、一度にたほるゝゆへに、奉公人多のみならず、かつえ人出來候。村里に富人あれば、此たほれ者の田地を次第にかいとり候。しかれば子孫のおとろへて、本を失ふとは、田分より初るゆへ、農人にてはなけれども、遠き慮なき、はなのさきなる者をばたはけと申候なり。民は如レ此知慮なくして、をろかなるものなるゆへに、いにしへは上より、民の所帶の法を立られしなり。あまり大作にて、作にあぐみ、村里に百性數のすくなきをば見屆て、子共にもわけさせ、人多なる村が。分けておとろふべきをば、わけさせず、宗領分は其まゝをし立て、弟の分は幾人ありても、奉公人か職人商人にしたて、又兄の家人同前に、田地をわけずして養蠶、耕作の助ともなせり。妻子共は宗領屋敷の内に、少づゝのねどころばかりのへやをかまへ、奉公人なれば、奉公に出て、其給分をもつて妻子を養ひ、たらざる所は、宗領よりみつぎ、餘あれば老後のたくわへ、子共の爲にもさせ候。かくの如くなれば、豊年の奉公人少き、給分高き

出る故にかた〴〵もつて洪水の憂なし。山に草木なければ、土砂川中に入て、川とこ高くなり候。大雨をたくはふべき草木なきゆへに、一度に河に落入、しかも川とこ高ければ、洪水の憂あり。山川の神氣うすく、山澤氣を通じて、水を生ずることも少ければ、平生は田地の用水すくなく、舟をかよはするも自由ならず。これ皆山水の地理に通じ、神明の理を知人なき故なり。國に忠あらん人は、鹽濱と燒物とを減ずるとも、増べからず。其上古人も、山をつくすものは子孫おとろふと申傳候。

一。來書畧。新田をおこすは、人を養ふの第一にて、可㆑然事と存候。いかゞ。

返書畧。國に田畠ばかりにて、山林不毛の地なきは、士民共にたよりあしき物なり。野は野にてをきたるぞよく候。其上新田をひらきて、古地の田あしく成所あり。よく〳〵かんがへ有べき事に候。たとへさはりなく、よき新田なりとも、君子ならば、たゞにはおこすまじ。をこさばかならず其義あるべし。義といふは大道をこなはれて、ありかゝりの遊民のかたつけなくば、新田ををこして有付候べし。鹽濱國土の山林に過て、材木薪不自由なる時、その濱を減ずべきに、鹽燒どものかたつけのために、新田をおこすべし。鹽濱五百石の人は、田地千五百石に入候とも、あまり有べく候。鹽濱には人多入こむものにて侍り。如㆑此のやむことなき入かへあらでは、おこすまじきは新田なり。人入こみて後、其人を迷惑せさするとは、ならぬ事にて侍れば、こゝろあらん人は、もし後世に、仁政のをこなはれんために、殘し置度儀に候。

一。來書畧。近來豐年には奉公人少く、凶年には、奉公人多して、かつえに及び候事はいかゞ。

日本倫理彙編

足の所ありとも、それは十人なみなれば、とがむる人もあらじ。人をこゝろむる事は、かろき役より命じ、功あれば段々にあげ用ひ候へば、あやまちなく候。いにしへの人の、微賤よりあがりしは、みな天命あり。人力の及ぶべきにあらず。

一。來書略。領分に塩濱を可₂申付₁所あり。又山林によつて、燒物をやき申度と望者候。主人勝手不自由に付、何もよほし可₁申覺悟に候。いかゞ。

返書略。五十年此かた、塩濱の出來たる事、むかしに三倍せりと、老人の物語候き。又老農の申しは、塩の高直なる年は世の中よく、塩の澤山なる年は、世の中あしく候。いかんとなれば、旱には塩多くやき、雨つきよければ、塩多くやけず。しかれば塩濱、今の三箇一を減じても、人の迷惑に及べからず。多によつて、いらざる魚鳥をも澤山に鹽して、鳥魚まですくなくなり候。又老人のかたりしは、茶碗皿、よろづの燒物の多事、五十年以前には、二十倍なり。むかし一通りもちたる者は、今は十通も持候。澤山なる故に大事とせず、わりくだき候。是は猶以今の十分一にしても、人の迷惑に及べからず。鹽濱と燒物との。山林を盡すとは、大なる事也。それ山林は國の本なり。春雨五月雨は、天地氣化の雨に候。六七月の間には、氣化の雨はまれにして、夕立を以て田畠を養へり。夕立は山川の神氣のよく雲を出し、雨ををこすによれり。山は木ある時は、神氣さかんなり。木なきときは、神氣おとろへて、雲雨ををこすべきちからすくなし。しかのみならず、木草しげき山は、土砂を川中にをとさず。大雨ふれども木草に水をふくみて、十日も二十日も自然に川に

はからふべし。鎗太刀も流のよき、勝身つよからんを、二流も三流もなさしむべし。しあひを禁ずべし。稽古のしあひ、まるはし等は各別也。鎗太刀は、其身勝みよく上手にても、弟子をとり立ると、はかどらざるあり。弓馬もしかり。弟子をよく取立るものを師とすべし。勝負は運と一心とにあるものなれば、同じ位にては、わざに得分あり。先は身をつかひ、道具をかろく、取あつかふべきがためなり。十六七にもなりたまふときは、あそびわざ、次第におとなしくをはしますべし。庭にをりくだり、城取などを學て、土をなやみたまふは、養生のたよりにもよし。總して人は聲のかはる時分より、廿ばかり三十までも、諸慾にいとまなくして、夜はねぶたきばかりなるやうにすれば、氣血とゝのほり、筋骨すくやかに成て、病をなさず。神知内にたくはへて、利根聰明也。父の神力精明なれば、生るゝ子も賢知あり。五臓の精きと、大學の理をきはめ、徳に入のとに至ては、今のいふべき處にあらず。しばらくさしをき侍りぬ。

一。來書略。新參の士に、志のおもしろき者侍り。主人にすゝめて、あげ用度候。いかゞあるべく候はん。

返書略。たとへ志、平人にあらずとも、すぐれたる賢者にもおはしまさずば、遠慮あるべきか。人の目にたゝぬ程に少づゝあげられ、後は諸人のゆるす所侍らば不レ存候。同じくば、御家にそなはりたる家老、さては筋目ある人の邪佞ならざるを、なるべくは教化してあげ用ひ給ふべし。本より筋目あるには、人情のゆるす所ありて位の備たる所候。少よければ、其よきがよきに立、不

君のまのあたりにて常にすれば、をのづからきゝとめ、見とりしたまひて、苦勞なくしてならはるゝもの也。日本もむかしの武士は、武藝のみならず、文筆にも達者なり。しかれども戰國より此かた、合戰の事にのみ專にして、文道にうとくなれり。かくならひ來りし人を、今以俄には成べからず。成人の人は、其好にしたがつてしゆべからず。八歲より十五六歲、廿歲ばかりまでは、只今よりのしなしからなれば、少づゝもをしへなすべし。

一。算數は、才知をも長じ、六藝の一にて、人事の用所なれば、なさでかなはぬものなれども、いやしき事のやうにとりなして、せざる人多し。いにしへの武士は、かくのごときのつとめをばよくして、平生商人の樣に、利害の物語をばせざりき。今は算數をばいやしみて、利害を事とせり。軍法にも算數を用る事あり。數の本は利をとりあつかふにあらず。律算などは尤風流なるものなり。右の品々幼少成人うちまじはり、二番か三番にして、一番は幼君にしたがひ奉り。二番は藝をなすべし。十七八以後は、したまはぬ事の、わらはべわざのくるひなどはくるしからず。あやまちなからんために、おとなもまじはりあそぶべし。其內成人の後まで、心根のあしくとゞまるべきあそびをば、遠慮あるべし。大くるひは利根の毒なれば、よきほどに進退あるべし。手習の後、よみ物の間、氣屈する時は、あるひはまきわらにかゝりて弓を習ひ、或は庭にをりて的におそび、或は木馬に乘て、手繩のさばき、鞍のかため、鎗をもち、弓をおさめ、くつわをしかけ、くらをおく等の事まで、しらでは自然の越度可ㇾ有也。乘馬は、其子の樣子次第、馬をも時々に見

せさ給へり。今の琴、琵琶、和琴笛、篳篥、笙、太鼓等の樂器なり。常に一二人樂して樂むには、筝琵琶ばかりにてもよし。管も達すれば、一人樂しても、たのしむものなり。筝琵琶は達せざれども、二人同絃なればたのしびになるもの也。樂のけいこの初は、音律よきものを師とし、笙笛のせうかを習たるよし。幼少におとなまじり、幾人も一度にうたひぬれば、はやく通ずるものなり。其中に音に器用なるものあれば、わき／＼をもひきたつるものなり。樂音によく通ずれば、淫聲に好まざるもの也。昔は源平の武士、皆管絃に通じたり。奥州の忠信、陣のいそがはしきにも、水戸まで琵琶をもたせたるにて知べし。

一。幼少の弓馬の稽古、弓はおぼへなきほどよはき者のはりよりはじめ、馬は木馬よりはじめ、其後的をゐてあそび、輪のりをして鞍をかため、馬よりおとさゞるやうに敎へ立べし。武藝は藝者にてなき、よき武士の知て武士につたへたるぞよき。器用の人あらば、一月の間にも庭をふるひをしへたてゝ、師にまさる人有やうにすべし。いにしへは十六七にては、弓馬に達者なる人多かりしなり。今は一色に一生もかくるやうなるは、武藝の師を藝者におとしたると、其道を失ひたる故なり。甲陽軍鑑に、此道理をあしくいひ置て、武道の煩となるとあり。武道を藝者にあづくる時は、武道のすたるゝ事をわきまふべし。

一。よみ物手習、おさなき人に成人の人もまじりて、退屈なきやうに、半時ばかりほどにかはりて學ぶべし。武藝は氣もつきがたく、半時にては間もなき者なれば、一時がはり程にてもよし。幼

集義外書卷一

削簡　一

一○幼君をもり奉らんとを尋し人に答へし。いまた道理をわきまふべき。知覺もひらけ給ふまじきときに、しゐて善をせむれば、かへりて善根をくじくためしあり。學問などをしふれば、後に學問きらひになる人あり。たゞ善事を以て大かきをして、不善のたぐひを見せ奉らず、いましめざれども不善なく、つとめざれども善にならひ給ふ樣にすべし。天地の間に、春いたりぬれば、春にあそばざる人なく、善事家にみちぬれば、善をたのしまざる人なき道理なり。善事とて別に事有にあらず。五倫のまじはりに、五典十義有とを、自然に敎へならはすなり。さては六藝にあそぶも、其作法よければ、皆善事なり。

一○幼君に禮を敎奉るには、殿樣ごとのあそびにとりなして、君臣の禮儀をしらしむべし。扨は世間にある事の、しらで不ㇾ叶禮式をしらせ奉るべし。七五三五々三などを作物にして、おとなわらはうちまじはり、たがひに客となり主となり、かよひの役者と成て、其作法實事かけず、をしへならはすべし。常の使者奏者の口上ぢき、あそびがてらに習すべし。太刀折紙等一切の用に立べき事ども、ならはすべし。

一○人心は生ものなれば、うごかぬといふ事なし。善にうごかざれば。惡にうごくもの也。是以聖神の御代には、天地の律呂をうつして糸竹の樂をつくり、人心を正道にあそばしめて邪欲をふ

集義外書

序

集義和書及外書は息游軒熊澤先生のあらはせるところ也。その和書はすでに世に行はれて、外書はいまだ印行せず。思ふに和書はおほく學者日用の工夫を論ずれば、もとよりはやく世にめぐめり。外書にいたりては經世治敎の事にわたりて、頗る世の忌諱をおかせることあればにや、その徒秘してこれをつたへず。故にみるものすくなし。予この頃この書を得てこれをよみ、ます〳〵先生の道融し才ひろきことを信じ、且そのうづもれんことをおそれて、かく梓にちりばめ侍る。予嘗その徒の語りしをきけり。此書綴るところ、或は人のかたりつたへしまゝに、その有無をたゞすに及ばずして、夫によりてのべたることも有、又或はふかくそのよるところを考るにいとまなくして、しばらく世のことわざをもつて論じたることなどすくなからざれば、たゞそのむねをみて道理をわきまへむとのみ、先生のこゝろなりとなん。されば今この書を見む人、事の有無にかゝはらずして理の當否をあきらめ、なをその徒の先覺をたづねて、先生述作の奥旨をきはめむとぞ、道をもとむるのこゝろざしならん。

寶永庚寅初夏下旬　　書肆　小山知常謹誌

に居り、大人歌を作り、又人説を作り、以て天地萬物一體の義を明かにす。蓋し其晩年開悟する所を發揮するものなり。東里其死期の迫れるを自覺し、寶暦十二年の冬自ら東岸の地を擇んで墓石を建て、天命を待てり。明和二年（西暦千七百六十五年）二月七日疾を以て浦賀に卒す。享年七十有二。海關の顯正寺内に葬る。東里妻子なし。終に臨んで門人藤梓を以て嗣となす。門人須藤温其詩文を輯めて東里遺稿一巻となし、後又下野の服部政世其書牘及び雜文を纂めて東里外集一巻となせり。共に本巻に收む。

東里は元と文學趣味に富める人にして、詩歌文章に巧なり。然れども彼れ晩年に至りて專ら道學に志し、復た餘念なし。嘗て門人須藤温に謂ひて曰く、「賤軀疾老交集、凡百好事皆以廢、唯好學之志、日益壯矣、死而後已、夫往時所レ作之文章、皆浮華之言、恐誤レ己誤レ人、今悉棄レ之、机上獨餘二大人歌一耳」と。此れに由りて之れを觀れば、彼れが作に係れる文章にして烏有に歸せしもの、少からざるべし。眞に惜むべしとなす。今新死一篇を翫讀するに、實に千歳得やすからざる名文なり。柴野栗山、古賀精里、太田錦城の徒皆口を極めて之れを激賞せり。其他菅神廟碑の如き、亦絶妙好辭たるを失はず。田沼謙之れを註釋し、菅神廟碑銘解と名づけ、單行本として之れを世に公にせり。

竈中に投じて之れを燒く。此れより還俗して中根貞右衛門と稱せり。室鳩巢引いて其家に致さんと欲す。東里素より其學を慕ふ。乃ち質を委して之れに師事す。時に年二十三。享保元年の正月なり。東里鳩巢に從ひて加賀にあること一年。享保二年加賀より還り、東都の八丁堀に居ること一年。又去りて鎌倉に之き、鶴岡廟前に居ること二年。其間其弟叔德と共に木履を鬻ぎて以て衣食す。適々同居のもの病めるあり。貧にして藥餌を供するなし。東里盡く經籍衣服を典賣して之れに資す。幾もなく又東都に遊び、卅間堀の畔に僑居して、諸生を教授し、常に退落を甘んじて、當時の名家と相頡頏することを欲せず。其資用乏しければ、絲針等を市に鬻ぎ、又竹皮履を造りて之れを售り、僅に數日の費錢を得れば、即ち戶を閉ぢて書を讀み、沈默して自重し、從遊の士の外は、人に接見せず。時人呼んで皮履先生といふ。一日或る人王陽明全書を進む。東里本と之れを慢り、偃臥して之れを讀む。其致知格物知行合一の說に至りて、蘧然として容を改めて曰く、「所謂孔門傳受の心法、盡く此書にあり、何ぞ之れを讀むことの晩きや」と。是れより王學に歸し、學問一變せり。享保年間下野の植野に遊び、傳習錄を金信甫が家に講ず。延享年間又上野の下仁田に遊び、高克明の家に客たり。嘗て其曠野の淸閑を愛し、益々都會の煩喧を厭へり。遂に居を下野安蘇郡の天明鄉に移し、一簡の茅屋を經營して之を知松菴と名づけ之れに居り、專ら王學を唱へて、子弟を誘ふ。闔境之れが爲めに化し、東里を追慕し、婦人小兒の輩と雖、皆能く東里の名を知るに至れり。東里晩年に至りて多病なるを以て、親戚によりて老を養はんと欲す。寶曆十二年を以て、浦賀に之いて此

を徂徠に示す。徂徠見て之れを善しとし、其後に題して曰く、「非二復昔日阿蒙一也」と。後又一傳を作りて之れを示す。徂徠大に嗟賞し、坐客を顧みて曰く、「是の如くにして後、左氏を學ぶと稱すべきなり」と。是れに由りて東里の名聲漸く都下に聞ゆるに至れり。一日東里疾に嬰り、佛殿の後房に偃臥して將に養はんとし、偶々几上の書を取り、手に任かせて之を翻閱するに、是れ即ち孟子浩然の氣の章なり。乃ち反覆之を讀み、慨然として歎じて曰く、「道の廣大簡易なる是の如し、而して何ぞ茫々乎として浮圖氏の虛誕に從ひ、以て此生を誤まらんや」と。是に於て始めて還俗の志あり。遂に鄕里に歸り、母氏に還俗の事を請ふ。母氏許さず。伯父某頗る學識あり。母氏に請ふて曰く、「子を以て舍てゝ僧となす、是れ之れを棄つるなり、彼れ今還俗せんと欲す、是れ更に一子を擧ぐるなり、宜しく速に之れを聽すべし」と。母氏乃ち以て然りとし、遂に之れを許す。東里大に喜び、又東都に至り、之れを寺主雄譽上人に謀る。上人頗る鑒識あり。其意に任せて髮を寺中の別舍に蓄へしむ。東里益々書を讀み、刻苦すること惟れ日も足らざらんとす。此時徂徠と釁隙を生じ、遂に相容れざるに至れり。東里頗る徂徠の眷顧誘掖の恩を受く。故に其還俗するに當りて、義當に之れを徂徠に謀りて後、之れを爲すべし。然るに東里之れを爲さずして髮を蓄ふること已に百有餘日。徂徠之れを聞いて悅びず。東里又其說を疑ひ、論を著はして之れを駁し、自ら其見る所を述ぶ。山縣周南、大宰春臺等其稿を見て大に之れを慍み、觝排沮礙東里をして再び其門に入ること能はざらしむ。東里も亦稍々徂徠の學を疑ひ、所謂修辭の業を厭ひ、其作る所の文章を取りて、悉く之れを

章を編輯せるものにして、手簡あり記事あり論說あり、頗る其思想を窺ひ知るに足る。此書未だ上梓せられしことあらず。今井上哲次郎藏書本によりて印行す。

中根東里、姓は中根氏、名は若思、字は敬父、東里と號す。通稱は貞右衛門。伊豆下田の人。元祿七年を以て生まる。東里の父、名は重勝、字は子義、武濱と號す。三河の人なり。延寶年間伊豆に遊び、遂に此に移住し、淺野氏を娶り、五男一女を生む。然れども唯東里と其弟孔昭と二人のみ生存し、其他は皆夭折せり。重勝家を下田に構へ、農桑を業とし、又兼ねて醫術を善くす。是を以て治療を請ふもの日に多く、其名遂に鄕里に聞ゆるに至れり。東里年僅に十三にして父を喪ひ、母に事へて孝謹なり。其母父の冥福を修めしめんが爲め、命じて僧とならしむ。初め鄕里の一禪寺に入り、薙髮して證圓といふ。後宇治の黃檗山に登り、悅山禪師に師事し、晝夜精研、佛祖の眞面目を得るにあり。然れども禪宗の課業、本と博く群書を讀むを許さゞるを以て、東里漸く其檢束を厭ひ、竊に寺を出でゝ東都に來たり、下谷の蓮光寺に寓し、淨土宗の學を研究し、偏く經典を讀む。其寺主雄譽上人物徂徠と交はり、屢々東里が人となり明敏にして衆に異なることを稱す。徂徠之れを聞いて大に之れを賞し、嘗て試に東里をして李攀龍が白雪樓集一本を句讀せしむ。東里乃ち傍訓國讀を其書に附して之れを返す。時に年十九。東里又嘗て文を作りて之れを徂徠に示す。徂徠其半を讀んで之れを省き、心未だ之れを善しとせず。且つ之れに謂ふて曰く、苟も之を學ばんと欲せば、左氏及び史漢を讀むに若くはなし、と。東里乃ち左氏を取りて伏して之れを讀み、一序を作りて之れ

日には親族、舊識より從僕に至るまで悉く永訣し畢り、廿四日の晝未の刻に筆紙を請ふて「寛保四年子正月廿五日三輪希賢死」と自書し、翌廿五日の朝寅の刻に逝去せり。享年七十有六。建仁寺中兩足院に葬る。執齋男六人あり。然れども一人の箕裘を繼ぐに足るものなし。門人に川田雄琴あり。王學を傳へて之れを主張せり。

執齋が我學術界に最も貢獻する所多かりしは、其傳習錄の飜刻にあり。執齋の時に當り、藤樹既に歿し、蕃山亦繼いで歿し、源を江西に發したる王學俄然一頓挫を爲せり。東に中根東里あり、西に三宅石菴ありと雖、大に其學を發揚すること能はず。此時に當りて執齋頗る務むる所あるも、未だ堀川若くは蘐園の勢力に匹敵すべくもあらず。然れども其傳習錄を飜刻したるは、頗る王學を振興するに功ありき。執齋が之れに標註を加へたるも、功多しとなす。傳習錄に註あるは此書を以て始めとす。其後唯佐藤一齋の欄外書あるのみ。

執齋の著書は、日用心法一卷、四言敎講義一卷、大學俗解二卷、孝經小解四卷、周易進講手記六卷、祭薦卷一卷、訓蒙大意和解一卷、堯典和釋二卷、神道臆説一卷、標註傳習錄四卷、古本大學校正本一卷、雜著四卷等あり。いま日用心法、四言敎講義、及び雜著の三部を收む。

日用心法は「立志をはじめとす」、「辱をしるを助けとす」、「孝悌を本とす」等の十ヶ條に別ちて陽明學の大意を平易に敍述せるものにして卷首に執齋記一篇を附載せり。四言敎講義は陽明の四言敎を字義、主意工夫、四言敎講義或問の三項に別ちて通俗的に説明せるものなり。雜著は種々なる文

直方は山崎闇齋の高弟にして、固より程朱の學を主張し、痛く王學を排斥せり。執齋其門に入り親しく朱說を聞きながら、反りて私に王學に歸し、其多く己れに益あるを喜び、其道を講究す。是に於て直方の爲めに絶交せられ、暴言を受くるに至る。彼れ自ら往いて之れを慰へんと欲すれば、亦其門人の怒に逢ふ。是を以て之れが爲めに困むこと數年の久しきに及ぶ。然うして後直方漸く其學を變ずるの意、名利の爲めにあらざるを知り、遂に相見ること故の如し。直方病革まるの日子弟に命じ、先づ之れを執齋に告げしむ。執齋乃ち往いて之れを訪ふ。命既に絶えて及ばず。因りて終夜柩前に侍し、和歌を賦して之れを哭せり。

執齋嘗て直方の推薦によりて酒井侯に仕へしも、後仕を致して去り、京師に歸り、尋いで大阪に之き、又江戶に來たり、數年の間居止定まらず。或は日本橋に、或は飯田町に住し、遂に下谷泉橋の北に講舍を創設して之れを明倫堂と名づけ、世の子弟を敎授し、東都の木鐸を以て自ら任ず。門人の多き指を屈するに遑あらざるに至る。時に物徂徠卒して後、服部南郭、平野金華等ありと雖、要するに皆文人のみ。執齋此間に立ちて道を講ずること甚だ力む。其功决して沒すべからざるものあり。

執齋齡既に耳順を過ぎて痰咳の患に嬰り、病勢日に熾なり。因りて疾を輿して京師に歸り、寬保四年(即ち延享元年にして西曆千七百四十四年)正月廿四日を以て卒す。執齋痰咳の患漸く重大となりて蓐牀に就くに至りしは、寬保三年の冬十二月中頃のことにして、此れより翌年正月に至り、愈々危篤となりしに、正月廿三日に至り、髭を剃りて祠堂を拜して永訣を告げ、廿三日及び廿四日の兩

將に之を第三卷に收めんとす。

三重松菴、名は貞亮、新七郎と稱す。京師の人にして、三輪執齋と同時に陽明學を唱道す。元祿十五年を以て門人の爲めに王學名義二卷を著はす。松菴は自ら傳習錄を讀んで陽明學に歸せしものにして、別に師傳あるにあらず。故に跋文の中に云く「一日嘗讀ニ傳習錄一、初未レ曉ニ文義一、讀レ之已久、而恍然似レ有レ所レ省者、然後知ニ陽明子之學、眞切簡易、而粹然大中至正之歸一矣」と。一時門戶を張りて敎授せしものと見え、豐滿敎元、村上明亮等の門人あり。其著王學名義は上卷に致ニ良知一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信、孝の七箇條を說き、下卷に大學說、仁義禮智信、孝悌忠信、心性情、理氣、知行合一、四句敎法の七箇條を說き、最も通俗的に王學の要領を敍述せるものなり。

三輪執齋、名は希賢、字は善藏、執齋は其號なり。又躬耕廬と號す。京師の人なり。熊澤蕃山、三重松菴、三宅石菴、皆京師の人にして執齋亦京師に出づ。思ふに、藤樹曾て暫く京師にありて敎授せしことあり。又江西書院に學びたる藤樹の門人にして王學を京師に唱へしものあり。或は其等の結果にや、王學を唱ふるもの相繼いで京師に起れり。執齋の如き、亦其尤なるものなり。執齋の先祖は大和國三輪神社の司祝なり。父を澤村自三と云ひ、醫を以て業とし、京師に住す。母は箸尾氏。執齋六歲の時母を失ひ、十四歲の時父を失ひ、市人大村氏に養はれ、後出でゝ眞野氏を嗣ぐ。後又本姓を三輪氏に復し、祖先の祭を爲せり。執齋十八歲にして志を立てゝ江戶に赴き、佐藤直方に學ぶ。

日本倫理彙編 卷之二

文學博士 井上哲次郎
文學士 蟹江義丸 共編

陽明學派の部 中

序説

熊澤蕃山の集義外書十六卷は寛永七年京師の書肆小山知常が刊行する所にして削簡三卷、脫論七卷、中庸九經考一卷、窮理三卷、雅樂解一卷、水土解一卷より成る。外書は和書よりも反りて奇抜の論多し。其序に云く、「外書にいたりては、經世治敎の事にわたりて、頗る世の忌諱をおかせることあればにや、その徒秘してこれを傳へず、故に見るもの少し」云々と。以て外書の和書に異なる所以を知るべきなり。横井小楠は越藩の岡田に與ふる書に外書は僞書なりと主張すれども吾人未だ其僞書なる所以を發見すること能はざるなり。

蕃山以後の陽明學派には北島雪山、三重松菴、三宅石菴、三輪執齋、川田雄琴、中根東里、佐藤一齋、大鹽中齋等あり。而して本卷は松菴、執齋及び東里の著書を收め、一齋及び中齋の著書は

陽明學派中

目次畢

日本倫理彙編卷之二目錄

陽明學派の部　中

熊澤蕃山

三重松菴

三輪執齋

中根東里

文學博士　井上哲次郎
文學士　蟹江義丸　共編

日本倫理彙編

陽明學派の部（中）

東京　育成會發兌